生田春月全集

第六巻

小説集

新潮社

昭和四年五月（辨天町時代）

目次

小說集

處女の誇

第一部　春を待つ人

一

外濠に添うて、幾度びか緩いカァヴをゑがきながら走つて來た電車が、四谷見附に停車した時、四五人降りて行つた乘替の客と代り合つて、六七人の乘客が、いづれも腰をかける空席が何處かにないかと云つたやうなキョロキョロした目付をして、混み込んで來た。一番おしまひに、何處か良家の令孃と女中らしい二人連れの娘が、車掌臺に輕く上つて、何か二人で笑つてゐると、年若い車掌が、何だかそれを見るのが一寸愉快だと云つたやうないい機嫌で、ずつと中へ入らないと危險だと言つて、その眞紅な帶をしめた、前に立つてゐる娘の背を一寸押した。

「まあ、いやなこと……」

その後は華やかな笑ひ聲と、誇らはしげな黑い眼付とにまぎらして、彼女は車内に少し身體をすくませた。後から付いて行く若い女中は、ずつと粗末ではあるが、相當派手な身なりをして、その手には藤色のパラソルを持つてゐた。

發車する途端、電車がのめるやうに一搖れして、まだ吊革にぶら下つてゐない乘客を、橫倒しによろけさした。娘達もひどくよろけた。令孃はよろめいた途端に、直ぐ前に腰かけてゐる洋服の若い男の膝に、思はずその手を突いた。

「アラ、御免遊ばせ」

彼女はあからさまにその若い男の顏を、黑い自分の眼の中に囚へるやうな表情をしながら、あつさりとした調子で言つた。若い男はドギマギしたやうな樣子をして、少し赧くなつて、會釋をして、そして考へ付いたやうに立上つて

その席をゆづつた。

「君江、お掛けよ」とその令孃は後に立つてゐる女中に言つた。

「いいえ、お孃さまお掛けなさいまし」

「わたしはいいんだよ、立つてゐる方がいいんだよ」

「でも……」

若い女中は當惑したやうに言つた。

その時、傍らに五十年配の老婆が風呂敷包をもつて、さもさも腰かけたさうにしてゐるのを見付けた令孃は、

「あなたお掛けなさいまし、わたし達すぐ降りるんですから」と聲をかけた。

「どうも有難うございます、お蔭樣で」と言つて、婆さんはホクホクして、そこに腰掛けたので、彼女は滿足したやうな樣子で、その白い手の指に紫の鹿の子絞りのバツクを引つかけたまま、吊革に身を托して、いかにも伸び伸びと樂しさうに、その彈力のある身體を搖らせてゐる。

着心地のよささうな、出藍色(サフアイヤ)の新しい縞セルの粗い模樣に、燃えるやうな紅のダリヤの寫生模樣を浮かせた羽二重の帶を、いかにも處女らしく高く結んだこの令孃の華美な樣子は、細面の物寂しげな、顏色の少し蒼いその若い女中とは、はつきりした對照を見せてゐた。

電車は辨慶橋の架つた濠を廻つて赤坂見付に降りて行つた。

「ここで降りようかしら……」と入れ代る客の後から降りさうにして、令孃が言ふと、低い靜かな聲で、この次の山王下の方にと、その女中がとめた。

「でも、ここがいいわ」と言つて、グングンと降り立つので、女中も素直にその後に從つた。

「それぢや……君江ね……おまへは今電車から見えたあの活動寫眞へ行つて、四時過ぎまで遊んでゐておくれ、四時半位に迎へに來てくれると、わたしの方が丁度いいんだから……」

「でもお孃さま、わたくしずつと向うまでお供いたします」

「いいわ、いいわ、わたし一人の方が氣樂でいいわ……それぢやこれで活動を見ておくれ」

「いいえ、戴かないでもわたくし持つてをりますから」

「取つてお置きよ、いいから取つてお置きよ……それぢやきつと四時半頃には來ておくれよ」

彼女は紙幣を眞紅な紙入から無邪氣に引出して、女中に握らせて、絹レエスのかかつた淡紅色のパラソルをパツとひらいて、さつさと歩きはじめた。

山王上の星ヶ岡茶寮で、短歌雜誌『紅百合』の歌會が、午後一時から開かれるので、母親への手前は、女中の君江を連れて、順天堂病院へ行くからと言ひ繕つて出かけて來た彼女は、見付の坂をK宮邸の方へ上つて行きながら、此前はじめて出てみた歌會の氣分を思ひ浮べてみた。いろいろの若い男たちが、とりどりに自分に注ぎかけた媚びるやうな眼付、いかにも諂ふやうな讃辭、一座の女達の間に釀した嫉ましさうなどよめき、それらを思ひ出すと、以前とはずつと多方面の人を網羅する筈の今日の歌會が、どんなに華やかな空氣を自分のまはりに波立たせるかが豫想されて、何とはなしに、その輕やかな足取りに合して、彼女はその氣に入りの可憐な抒情曲を小聲で口ずさみながら、閑靜な山王の森の木下道に入つて行つた。すると、そこの樹の幹に立てかけてある細長いビラには、『紅百合短歌會々場』と書いて、その上に指標が記されてゐた。

「もう鏡子さんは來てゐるだらうかしら、きつと幹事だから來てゐるだらう……」と考へながら、彼女が一寸佇んで、廂高に結びあげた束髮の鬢の恰好を押へて見たり、半襟をかき合せたりしてゐると、後の方から靴音が近づいて來た。

振返つて見ると、小綺麗な風釆をした洋服姿の會社員じみた若い男が、一人近づいて來た。
「やア、大澤さん……あなたお一人ですか？」
「あなたもお一人でいらつしやいますか、石川さんは御一緒ぢやなかつたんですか？」
「石川君ですか？」
二人は木下道を爪先上りに上つて行きながら、話し續けた。
「石川君はもう行つてる筈ですよ、あの男は此頃ずつと影山女史の傍を離れないんですから、今日……なぞ隨分あてられるかも知れませんよ」
「さうかも知れませんわね、影山さんは石川さんの事を此頃特別ひゐきにしてゐらつしやるやうですからね。あの人の歌と來たら、隨分影山さんは賞めてゐらつしやるわ……わたしはあまり感心してゐやしません」
「僕もさうです、然しあの男は、何しろ柔道二段といふ猛烈な男で、自分の歌を賞めない奴はなぐり飛ばすと言つてるもんですから、皆が賞めてやるんですよ」と言つて、その若い男は輕い皮肉な笑ひ方をした。
二人が茶寮の玄關に行き着いた時分に、女中と一緒に奧から出て來た若い女と顏を見合せた彼女は、
「もう皆さんお集まり、鏡子さん……」と聲をかけた。
鏡子と呼ばれた二十四五の何處か品のない鳥屋の女中のやうな感じのする丸顏の女は、ニヤツと笑つて頷きながら、
「あア、眞紗美さん、遲かつたのね」
「もう直き始まるんですか？」
「ええ、もう直き……」
かう言つて、鏡子は眞紗美の後に立つてゐる男に聲をかけた。

「興津さん、お上りなさいな」
「三浦君が今日は來る筈ですが、もう來てゐますか？」
「ええ、早くから來てますよ」
「三浦さんツて誰れ？」と眞紗美がたづねた、
「あの此間詩集を出した三浦さんですか？」
「ええ、さうです」と興津が答へた。
「ねえ鏡子さん、その人どんな男？」
「見るまでが樂しみぢやないこと……」
かう言つて、鏡子はさつさと奥へ入つて行つた。
會場に當てた部屋は、溜池の方に向いた大廣間で、つやつやと拭き込まれた長い緣側に、森の樫や欅や椿などの老樹の新綠が、悩ましい蒼影を反映させてゐた。
「御免遊ばせ……」
眞紗美はかう言ひながら、五六人の若い男の談笑してゐる後を、紫のバックを手に持ちながら、女達の席の方へ割り込んで行つた。
女達はそれぞれ彼女に眼を注いで、微笑するものもあり、冷笑するものもあり、黙視するものもあつたが、眞正面に居並ぶ澤山の若い男は、一樣にその異性に對する好奇心を掻き立てられてゐる樣子で、彼等の貪るやうな眼は、眞紗美の白い肉のたわたわした頰や、心あり氣に露はに見せた白い咽喉もとや、紅い唇などに纏はり付いてくるやうであつた。年が若いと云ふことと、色の白いといふ事と、この二つでも十分男の心をとらへるだけのものはあるが、眞

紗美はなほその上に、男好きのする目鼻立のはつきりとした美貌を有つてもゐるし、甘やかな嬌聲を撒き散らすので、他の女はいづれも彼女の出現を烟つたさうである。

眞紗美のすわつた傍らには、もう三十二三かと思はれる年増ながら非常に派手なセルに朱珍の帶を低く結んだ女がいかにも一座の元締めと云つたやうな顔付きで、ずつと氣を配りながらすわつてゐたが、席に着いた眞紗美を見るとにこにこして、

「此間はどうも御馳走さま……今日はよくいらつしやつたわね、どうかと思つてゐました、あなたがいらつしやらないと、隨分寂しいんですもの……ねえ！」と言つて、彼女は向ひ側にゐる筋肉のよく發達した、歌なんか作りさうにも見えぬ猛々しい若い男に目を投げながら「さうぢやありませんか……殿方はいかがです？」

「勿論さうですとも……大澤さんがいらつしやらなくちやつまらないです、今日は一つ傑作を見せて下さい」

「どういたしまして……わたくしなんかに傑作なんか出來るもんですか、あなたこそ御秀作が澤山お出來遊ばすでせう」

無雜作なうちに、あやを含んだやうな會話を、この會に始めて來たらしい連中は、いかにも擽つたさうである。

會がはじまつてから暫くして、眞紗美がふと思ひ付いたやうに顔を上げて、傍らにゐる影山女史に聲高に訊いた。

「三浦さんて方が來てゐらつしやるさうですが、どの方なんですの？」

この聲が不用意に高かつたので、向う側の席にゐる若い男は、みんな此方を見た。その中に、黒い艶々した髮を無雜作にかき分けた、眉目のはつきりした小柄な男が、尻こそばゆいやうな樣子で、

「僕がその三浦です」と言つた。

「あなたが三浦さんですか、此間詩集をお出しになりましたわね、わたくし拜見させて戴きましたわ、大變評判がお

よろしいさうぢやありませんか」

三浦は少し顔を赧らめて、

「いや、やはり認められないで困りますよ、僕なんぞ詩壇の繼ッ子ですからね」

「御冗談でせう」

傍若無人な二人の會話に、むかッ腹を立てたと見え、先刻影山女史と話した石川といふ男は、三浦の方をぢろりと見て、握拳を膝に立ててゐる。

即吟がすんだあとで茶菓が出た。その時、眞紗美は緣側に出て、そこから三浦に聲をかけた、

「三浦さん、すみませんが一寸來て下さいませんか」

三浦は吃驚したやうな、嬉しいやうな、どぎまぎしたやうな樣子で、――然し、彼も才子であつた、狼狽してはゐなかつた――彼女のところへ立つて行つた。

「あのね、あなたはあのあなたの詩集に序文をお書きになつた稻田先生のところに此頃もずつといらつしやいますか？」

「ええ、月に一回位は行きます、やつぱり僕の先輩ですから、時々たづねてはゐます」

「さう……あなたすみませんが、稻田先生にわたしを紹介してくれませんか、わたし是非あの方にお目にかかつて見たいんですから」

「御紹介しませう、僕が御紹介すれば、面會日でなくても會つてくれますよ」

かう言つて三浦は懷中から名刺入を出してその名刺に、「友人大澤眞紗美氏を御紹介します、何卒よろしく願ひます」とサラサラと萬年筆を走らせてから、その名刺を眞紗美の手に渡した。

「どうも有難う……わたしの家はここですから……」と彼女は無雜作に懷紙を出して、それに赤鉛筆でクシャクシャと自分の住所を書いて、彼に渡した。

「ここはわたしが女中とたつた二人でゐるきりで、小さい家ですけども、氣樂ですから、いつでも遊びにいらして下さい。母は夜分にしか來ませんから、極く靜かなんです……」

かういつて、眞紗美は三浦から貰つた名刺を、紅い紙入の中にしまつて、それを白いむくむくした皮膚のちらつく藤色の半襟の間に差し挾んだ。

彼女はやがて元の座にかへつて、今度は影山女史の傍に來てゐる石川と、今一人、椀かぶりのやうに髮の毛を額にかき下げてゐる遠藤といふ男とを相手に、はしやいで話をはじめてゐる。

それ迄自分の座にゐた興津が、三浦の膝を立てて、それに兩手をかけて指を組んでゐる傍らへ出て來て、聲をかけた、

「三浦君、いかがです……」

この言葉には、眞紗美に對する批評がこもつてゐた。

「變つた女ですね、あんなのが近代的といふのかも知れんが、無作法ですね」

「全く、あの女は變つてゐますよ、歌も非常に肉の香の強いものを作るが、生活はもつと放縱にやつてゐるらしいんです。これは直接見たわけぢやないですが、あの女がたつた一人で住んでゐる家には、四方硝子の部屋があつて、彼女はそこで一片の衣れも纏はないで、眞赤な西洋花を蒔き散らしたベッドの上で、晝寢をするんださうです。本當にさうやつてるんだとすると驚嘆に値するぢやありませんか」と言つて、興津は三浦の顏をまじまじと見た。三浦は閉口したやうに、額の髮をもみあげながら。

「デカダンもそこまで行けば申分ないですね、僕等の趣味とは非常に遠いですがね」と言つた。

即吟の作の採點がはじまつて間もない時分、女中が入つて來て、

「大澤さんとおつしやるのは此方さまでいらつしやいますか」と言つて、眞紗美の顔を見て、「お迎への方がお待ちになつてゐらつしやいますが……」

「さう……もう四時すぎましたかね、今すぐ歸るからと仰しやつて頂戴」

女中が立去つた後で眞紗美は影山女史に言つた、

「ではわたくし、すみませんが失禮させて頂きますわ。母には順天堂に行くと言つて來たんですから、あんまり長居も出來ませんわ……先刻申したことをお忘れなくね……是非石川さんと御一緒にいらして下さい、お待ち申してゐますから」

彼女は立上つて　ずつと離れたところにゐる鏡子のそばにすり寄つて、白紙に包んだものを渡した。それは此日の會費若干である。

「皆さん御免遊ばせ、中座いたしてすみません」と一座に別辭を告げてから、彼女が玄關に出て行くと、後から女中が二人見送つて來た。

植込の傍らに、藤色のパラソルを持つた女中の君江が、すんなりと立つて待つてゐた。

「ぢや歸らうね、隨分待つたの？」

そそくさと聲をかけながら、女中の聲に送られて、二人は黄昏近い山王臺の木下闇を來た時とは反對に山王下の停留場へ歩いて行つた。

二

昨日の日和に引きかへて、朝から降り出した雨が、次第に强くなつてくるやうで、庭の片側に群つてゐるいろんな蕾をもつた草々や躑躅の伸び切つた葉の上にかかつてゐる蜘蛛の巢などが、露で一杯に飾られてゐる。陰氣なところはないが、何にも手を入れてないので、此の庭に降つてゐる雨は、佗しげに見える。

「君江、君江……一寸來ておくれ！」

閉め切つた部屋の中から、高ッ調子な眞紗美の聲がしたけれども暫くたつてもそれに續く返事がしないので、その次ぎの呟き聲が續いた。

「早く來ておくれよ、君江、どうしてるの？」

この呟きの中には我儘らしい焦々しさが籠つてゐる。間を置いて今度は、我慢が出來ないと言つた風に、手荒く障子を開いて緣側に出て來た。

眞紗美の顏は白粉氣がないためか、少し蒼味がかつて、唇の色も沈んでゐる。眦の切れた一皮目ぶちの眼は、白味がかつて、いかにも焦々しさうに曇つてゐる。無雜作に一束ねにして巻き付けた澤山の髮は綺麗に盛りあげた廂髮よりも、ずつと彼女を引立たせてゐる。赤の入つた辨慶縞のネルの寢卷の上に緋縮緬の扱帶をだらしなく巻きつけた胸や腹のあたりが、だぶだぶとして見える。

「アア、いやな雨……今日お天氣だと稲田先生の家へ行くつもりだつたのに……」

彼女はかういつて呟いてから、靑年のやうに無雜作に踞つて、焦れ切つたやうに降つてゐる雨や、雫のたれてゐる向うの垣根なんかに、ぼんやりとした眼を注いでゐる。その顏は妙にひきつッて、病的な疳積を今にも破裂させさう

である。

「いやな君江だ、また本邸に亮さんの顔でも見に行つたんだらう、あんなに賴んであつたのに忘れてしまつたのかしら……」

彼女は頰杖を突いた。それから急に思ひ付いたやうに、部屋の中に入つて、座敷の眞中にある紫檀の大机に横ずわりにもたれかかつて、ありあふ原稿紙を斜に押し付けながら、萬年筆でくしやくしやと何やら書きはじめた。けれども二三行書いてパリパリとその原稿紙を引裂いてしまつた。それからまた新しく書き出して、五六行書いたが、それも意に滿たないと見えて、無茶苦茶に消して消しまくつて、餘白のないほど色を塗つた上から、萬年筆の栓を引いて、ボタリボタリと落ちる藍色の點滴をかきまはしたあげく、その萬年筆を机の上から緣側の方へ、白い指でツイとはぢき飛ばした。はぢき飛ばされた萬年筆は、インキの水を跡に印したまま、緣から下にころげ落ちた。それを見ると、一層ムシヤクシヤを煽られたやうに、彼女は卓上に口をあいた儘置かれてある赤インキの瓶を取つて、いきなり雨の庭にはふり出した。はふり出されたインキ壺は、庭の眞中でドクドクと赤い汁を吐き出したので、雨水の中ににじみひろがつて、そのあたりさしわたし一尺あまりもあるかと思はれる毒々しい赤い花を現じ出した。

かうして當り散した心持は、殘虐なほど痛快であつた。こんな時若し手近に小鳥の籠でもあつたなら、彼女は籠の中に手を突込んで胸毛の柔かなその小鳥を、ぎゆッぎゆッぎゆッ……と握りしめて、小鳥が死んでしまふまで締めつけるやうな事をしたかも知れないのだ。どういふ譯でこんな狂暴な氣持になるか、彼女自身は知らなかつたが、わけも知れない不安と焦燥とに襲はれてくると、彼女はこれ迄いろんな亂暴な事をして、氣の弱い女中の君江をハラハラさせてゐるのである。いつかなぞも見も知らない若い男から來た手紙を、緣側の上にはふり出して、その上に酒精をぶッかけて、マッチの火をつけた時には、

「アレ、大變ですわ、大變ですわ」と泣聲をあげて君江が馳け付けて來て、兩袖で叩いて、緣下に落したので酒精の火は、そこで紫色の焰をその紙の上に盛つたやうに低く這はせたことがある。
眞紗美は順天堂病院で、肺尖加答兒の診斷を受けてから、自分は肺病なのだと思ひ込んで、一種のロマンテイックな氣持から、丁度哀れな一篇の小說の女主人公のやうに自分を考へなしては、悲痛と自棄との感情を弄ぶやうになつてゐる。それにこの診斷を受けない以前からも、彼女は身體があまり丈夫ではないので、その身體の弱いといふ事によつて、兩親からは大抵の我儘は許されてゐるのである。殊に、彼女はこれ迄自分の生みの母親だと思つてゐた母が、實は自分の生みの親ではなくて、自分といふものは、實業界に相當重要な地位を占めてゐる自分の祖父が、その五十過ぎてから九州の出張先きで愛した美妓の腹に生れた娘であつて、戶籍上のみの兩親の子であると云ふ破天荒な祕密を叔母の口から告げ知らされてから、殆んどどう考へていいか分らぬ昏迷と昻奮とに囚へられて、その遣り場のない感情を、彼女の好む詩歌によつてわづかに慰められてゐるのを、兩親からは不思議に許されてゐるのである。詩歌のことを、茶の湯生花と殆んど同じ事に考へてゐる彼女の兩親は、いいお師匠樣をとりさへすれば許してやると言つてゐるのである。
いいお師匠樣は誰れにしようかと考へた彼女は、これ迄に知つてゐるいろんな歌人の團體の中には適當な人がなかつたので、もつとかけ離れたところにゐて、もつと世間的に名のある人の方がいいと思つた。かういふ意味で、彼女がこの人こそと思つたのは、彼女が日頃その歌集を愛讀して、かねがね一度會つて見たいと思つてゐた人で、歌人としてよりも少壯の國文學者としての稻出綠樹であつた。綠樹が學者であるところから、彼女は彼を無口なひかへ目なおとなしい人と想像してゐたので、この場合、あまり立入らない、しかも親切な、そして氣持のわるくない、いいお師匠樣を持つことは、彼女の信用を增す上にも、自由を享樂する上にも、なかなか重要な事なのである。それで昨日、

星ヶ岡茶寮に行つて、折りよく稻田の家に出入する三浦といふ青年に出逢つて、その紹介狀を貰つて歸つた時、彼女は母親にこの名刺を見せて、

「お母さん、わたし、この方を先生に定めたのよ、この方はM大學の文科の先生ですし、おとなしい靜かなお方ですから」と言つて、勿論何の異存もない母親に承知をさせた。はじめてお訪ねするには、何を持つて行つたらいいかと、母親に相談をして、菓子箱か何かと詮索をした後で、花を買つて持つて行くのがよからうといふ事になつた。

「月謝はどの位差上げるといいのかね？」

「月謝なんかお取りにならないわ、それよりか時々のお遣ひ物をしたり、家へお招きしたりする方がいいでせう。月謝なんかいきなり持つて行くと、おおこりになるに違ひないわ」

「けれど、はじめは君江を連れてお行き」

「ええ、連れて行きますわ」と彼女は母親を安心させたが、その實彼女と君江との間には、一種の妥協が成立してゐるのである。君江は眞紗美の父の北海道・事業先の部下の娘で、嫁入もこちらでさせてやると云ふ約束で、十二三の時分から引取られて來てゐるのである。眞紗美とはこの四五年一緒に起き臥しして、その相談相手にもなり、いろいろ身のまはりの用事を足して、愼ましやかに仕へてゐる。眞紗美の派手な性分と、君江の靜かな性分とは、まづ合性のいい方であつた。眞紗美がどんなにむかッ腹を立てて當り散らしても、君江は柔かに受け流したし、君江が陰氣になつて涙ぐんでゐる時は、眞紗美がすぐにその氣持のまぎれるように陽氣にしてやつた。一種義俠心のある眞紗美は、君江の弱々しいのを愛でて、彼女の一寸した過失なんかも、親達の方に取り繕つてやると共に、自分の必要な場合には、遠慮なく彼女を味方に命じた。殊に、最近眞紗美が發見した、君江と眞紗美の從兄の亮一との間柄は、一層彼女の武器になつてゐるのである。

竹垣のむかうの門路に高下駄の足音がして、家の中に入つて來た。玄關から緣側づたひに眞紗美の方に近づいて來た君江は、そこにひざまづいて、
「お孃さまお手紙がまゐつてをりました」と言つた。
「さう……アラ、昨日會に來てゐた遠藤さんからよこしてるわ、何言つて來たのかしら、男ッてものは直ぐつけつけ手紙をよこすものね……」と言ひながら、眞紗美はその封筒の下の方を亂暴に引裂いて卷紙に長々と丹念に書かれた手紙を開いて讀んでみた。それには、まづ眞紗美の歌の自由で奔放で情熱的な事を賞めて、他の紅百合社の連中の作を貶し、殊に石川の歌と來てはてんで歌になつてゐないが、その上彼の人間はお話にならないもので、一種の不良少年である事を述べて、あなたは石川と親しくお附合ひになつてゐるらしいが、あの男には大に警戒するようにと七くどい程警告してあつた。
「石川さんてそんな人かしら？　信じられないわ、だつてあんなに影山さんが世話してゐるんだもの……」と彼女は呟いたが、まだそこにゐて、ぢつと自分の顏を見てゐる君江に氣が付くと、急にニヤッとして、
「君江……亮さんはもう歸つてゐたかえ？」と訊いた。
「亮さんですか？」
かう言つて君江はどう言つていいかと云つたやうに言葉を切つて、少し微笑んで、眞紗美の瞳をじつと見た。
「あたしね、此間の晩、本宅の庭で素敵な亮さんのスタイルを見た事よ。あんなスタイルはまたとあるものぢやない、しかもさうしたスタイルを亮さんがしたのは、あの場合止むを得ない事だと思ふわ。それがおまへに大關係があるのよ……」
「わたくしに……」と君江はからかはれる事の豫想に、もぢもぢしながら、赧い顏をした、「何でございませうか、わ

たくしにはわかりませんわ……」

「勿論おまへには分りッこはないわ、この時おまへは影ん法師を見せてゐただけの事だもの、そのおまへの影ん法師つたら、實にビユウなのよ……美しかつたのよ、あたしだつて見とれちやつたわ……ホラ、おまへあのお湯殿で、裸體ですつくり立つてたらう、ふくらんだ胸のところや、尖つた乳が隨分いい輪廓に見えたのよ。あそこの電燈はどうかすると、立つてゐる場所で、あんな風に硝子戸に映るから、亮さんはすつかりそれを呑み込んで、これ迄幾度見に行つたか知れたもんぢやない、おまへこそ知らないだらうけれど……」

「ほんとに、わたくし、ちつとも氣が付きませんでしたわ」と君江は羞らつて、伏目になつた。

「あたしが見たのは昨夜なんだけれど……でもいいわ、亮さんに見られたんなら、おまへ腹は立たないだらう、亮さんはおまへの美を十分に認めてゐるんだもの」

「まあ……わたし困りましたわ」

この上どんな事を言ひ出されるか知れないので、君江は急いで話を變へようとして、口をピクピクさせた。

「まあお嬢さま、お庭にあんなインキがこぼれてをりますわ」

「あア……あれはあたしが先刻投げつけたのよ。おまへがゐるんだと思つて、用を頼まうと思つて、いくら呼んだつて返事がしないもんだから、腹が立つちやつたから、萬年筆をほつたり、インキをほつたり、わたしひとり荒れてゐたのよ。この下に萬年筆が轉つてゐるから拾つて頂戴」

「このあたりでございますか？」かう言つて君江が椽側の端しに片手を突いて、ずつと身をさし伸ばして椽の下を覗き込んだのでメリンスの帶をしめてゐる彼女の腰のからげが開いて、眞紅な腰紐が浮き上つた。眞紗美は一種の好色の眼つきで、その姿態を見て、意地のわるいやうな微笑を、蒼白いその顏にたたへた。

「すてきだわ、すてきだわ！……」
眞紗美がひやかすので、土にまみれた萬年筆をやつと引き寄せて、身體を元通りにした君江は、當惑して、かよわい處女の紋切形の澄まし方をした。
「澄まさないだつていいぢやないの！」から言つて、眞紗美は澄まし切つてゐる君江の淺黑い引きしまつた頬を、いたづららしくつッ突いた。
眞紗美のその樣子には、遣り所のない春の惱みがなまなましく見えるのである。愛欲の最初の渴望と希求とが、その全身にも心にも一杯に渦卷いてゐるやうに見える。君江の鬢の後れ毛をいとしげにいぢつてゐるうちに、彼女の口からは「戀になやめる乙女子は……」と詩とも歌ともつかないものの一節が口ずさまれた。
「君江、明日はね、わたしは小日向臺町まで行くのだよ、おまへあの小日向臺町を知つてゐること？電車は何處で降りるといいんだらう？」
「さうでございますね」と君江はおとなしく「あそこは確か石切橋で降りるといいんでございませう、詳しい事は知りませんけれど」
「花を持つてく事にしたんだよ、いい花を貰ひに神田まで行つて、それからずつと廻つて行くんだけれど、おまへまた途中で何處かへ遊びに行つて、わたしの歸る迄待つてゝくれるやうにして頂戴ね。稻田さんつて云ふ詩人のお家へわたし行くのよ、もしかおまへが稻田さんを見て懸想してしまつたら、またおまへが泣かなくつちやならないし、亮さんにも相濟まぬわけだからねえ……さうだらう」
「御冗談ばつかり……」から言つて君江は部屋の中に入つて行つて、そこらあたりに引き散らかしてある着物や、いろんなものを片付けたり、まだ上げてない蒲團をたたんで、それを押入の中へしまつたりした。

床の間には、鬱金の袋をかけた二挺の三味線と、一面の琴とが立てかけられて、花瓶にはもう萎れてしまつた牡丹の花が殘りの紫紅色を保つてゐる。

「お花が大變古くなりましたやうですから捨ててようございませうね」

「ああ、いいよ、今度は眞紅な薔薇の花を見付けて來て澤山投げ挿しにするとすてきぢやないの。おまへ買つて來ておくれよ、薔薇ならあそこの花屋にあるだらう」

「ええ、ございましたやうですわ」

かう言つて、牡丹の花瓶を兩手で持つて椽側の方に君江が出るのと入れ代りに、眞紗美はほどけかかつた扱帶を曳きながら部屋に入つた。

三

眞紗美が住んでゐる家から、表通りに出て、右の方へ一丁程行つたところの左側に、石柱の門が立つてゐる。その門には大きな陶器の表札がかかつてゐて、大澤專八といふ楷書の字が麗々しく見える。門内の庭には、植込があつて、その正面には、ザラ目のついた厚硝子をはめた大きいドアが、重々しく見える。右側に一間の內玄關があつて、そこの日あたりに、ブルドツク種の混つた洋犬がどつかりと前足を折つて踞つてゐる。高い値段で買ひ込まれた犬であることは、一目でわかるやうないい犬である。いかにもゆつたりとした樣子でゐると、格子戶が中から開かれて、美しく着飾つた眞紗美が出て來たので、犬はノツソリと立上つて、無愛想な樣子をして、植込の方へ步いて行つて、そこから此方を見てゐる。

友禪縮緬の派手な單衣の上に、褪紅色の博多の帶をしめて、パツとした濃い紫地に紅い露玉の飛び模樣のある縮緬

の夏羽織を着た眞紗美の扮裝は、人を惱惑させるやうな濃厚な趣味を見せてゐる。
「コラ、太郎……」と眞紗美は犬に呼びかけて、犬の傍に寄つて行つて、その頭を一つポンと叩いて、鼻を上げた犬の顏をくすくす笑つて見ながら門の方へと歩いて行くと、犬も氣が向いたやうに、その後からノソノソと歩いた。
今日は祖父の病氣はいくらかいい方だと云ふので、君江が呼びに來て、彼女は祖父に逢ひに來たのである。彼女の母親は、小學校へ行つてゐる二人の娘が歸つてくるまで、毎日本邸に詰め切つてゐるが、彼女は母か君江かに呼ばれなければ、祖父の病室へは行かなかつた。
胃癌と老衰とで、ずつと長い間床に就いてゐる彼女の祖父が、到底快復の望みがなく、今では近いうちに血縁の者が寄り集まつた上で、祖父の遺言を聞くといふやうな用意さへもあつて、年中旅先きにゐる彼女の父が近々に歸つてくると云ふ事なので、眞紗美はこれまで心から自分を生んでくれた人だと思つてゐた自分の父親に對して、どういふ風に考へていいかと、豫測の出來ないやうな不安につつまれてゐるのである。
病室に入つて白い羽二重の褥の上に横臥してゐる祖父の蒼い衰へた顏を、これが自分の生みの父親であるかと思つて見る心持は例へば高い處から足を踏みすべらして、空なところに漂つてゐるやうな心持である。苦痛も混り、不快も混り、厭惡も混る一種名狀しがたい暗いショッキングなものである。
彼女はそんな事を知つてから、祖父に會ふのが好ましくなかつた。出來るだけ彼女は會はないですましたい、いつそ永久に會はないですましたいと思ふ心持と、今にも馳け寄つて行つて、その老いた頸にかじりついて、心からお父さまと呼んで見たい涙ぐましい熱望とに搔き立てられるのである。それ迄の事を考へて見ても、祖父の自分に對する愛情には、確かに普通の祖父の孫に對する愛撫とはずつと違つた異樣に濃厚なものがあつた事を氣が付くのであつた。
今日は稻田緣樹を訪問するつもりになつて、綺麗に着替へをして、その外出の最初に本邸に寄つたのであるが、深

い枕から頭を擧げて、自分を下から見上げた祖父の眼には、見果てぬ夢を追ふやうな儚ない影があつた。
「何處へ行くだ？」と祖父は機嫌よく訊いてから、「此頃おまへが大分我儘だと云ふ話があるが、それは本當か……我儘も少し位のところならいいがそれが放縱に流れてはいかんぞ。おまへが人の噂に上るやうな女になると、第一家名にも關はるし、おまへを世話してくれてゐるお父さんやお母さんにもすまないのだから、女は何處迄も女らしく從順にやつて行かんといかんぞ……」
かう言つて、祖父は草臥れたやうに枕に頭を埋めて、寢返りをした。
眞紗美は祖父の言葉を一言々々思ひ出すやうにしながら、自分の住んでゐる家へ歸る途々自分に言つた、
「わたしのやうな女がおとなしくしたつて、どうするもんですか……わたしは自由に生きるのだわ、思ひがけもしないのに、生んで貰つた女なんだもの……華かに送らなければ、みじめで、自分があまりに可哀相だわ……」
自分の住家の玄關に立つて、玄關越しに彼女は君江を呼んだ。
「ぢや君江、行からうよ、家の留守は本邸から直ぐ婆やに來るやうに言ひ付けて來たからね」
「さやうでございますか、では直ぐまゐります」
暫くの間立つて、此間星ヶ岡茶寮へ行つた時と同じ扮裝の君江が出てくると、もう眞紗美は歩いて行つてしまつてゐるので、彼女はあわてて通りの方へ出た。
神田の紐橋花園でフリジヤの香氣の強い一束と、アマリリスの眞紅な一輪の花とを求めた眞紗美は、そこで君江と都合よく妥協して、彼女をいつも行きたがつてゐる上野の動物園へと遣つて、夕方四時頃或る停留所で落ち合ふことに約束をして、ヒラリと電車に乘つた。
稻田綠樹の家は、小石川の高臺のずつと端しにあつた。そこは音羽の通りの上の方であつた。人造石の高い石垣の

ある家の横を入つて行くと、そこに通ずる一條の道にむかつて立つてゐる格子門の家の隣の少し引込んだ同じやうな門の家がそれであつた。庭なども相當に廣くて、生垣の傍近く紫陽花らしい深い茂みが見える。子供などもない家と見えてそこの玄關には柾の男下駄が一足見えるばかりである。

「御免遊ばせ」彼女はすずやかな聲で、から案内を乞うて、奥の方から出てくる人を待つた。靜かな家のずつと奥の方から此方に歩いてくる氣配がして、やがて障子が開かれて、「どなたでいらつしやいますか？」と前髮を七分三分にした丸顔の色の白い二十七八の質素な身なりをした女が訊いた。

眞紗美は直ぐそれが細君であることを知つたので、

「先生はおゐで遊ばしますか、わたくしは大澤と申すものでございますが……三浦さんから御紹介して頂いたのでございますが」と言つて、紅い紙入の中から例の名刺を取出して細君に渡した。

「一寸お待ちなすつて下さい」と細君はことわつてから、その名刺を手に持つて、奥の方へ入つて行つた。

眞紗美が通されたのは、この家のずつと奥の方に離れ座敷のやうになつてゐる狹い書齋であつた。この書齋の様子は、眞紗美にとつてかなり珍らしい、氣持の落着く感じを與へるものであつた。そこには驚くばかりの書籍があつて、書架と書棚に溢れたものは、幾列にも無雜作に積み重ねて、背中の金文字が綠の帷（カーテン）ごしに入つてくる外光に反映して靜かに浮き上つてゐる。

「さあどうぞ……」と机の前にすわつてゐる稲田は、まだ座蒲團を敷かない眞紗美に丁寧に言つた。

「わたくし、御座蒲團はいつも敷かないんでございますわ、素足で冷たい疊の上にすわるのが好きなんですの……」と眞紗美はぢつと綠樹の方を貪るやうに見ながら、初對面らしい窮屈さなど少しも飾らぬ明けツぱなしな表情で言つた。

「お靜かでようございますわね、この御書齋はわたくしが想像した通りですわ。先生もわたくしが御想像申上げた通りのお方でいらつしやいますわ」と眞紗美はツケツケと言つた、「色の白い、痩せた、スラリとした、いかにも學者らしいお方におもつてゐましたの。そしてお頭も、氣障な厭味ツたらしい長髪になんかなすつてはいらつしやらない方だと思ひましたの。わたくし、先生のお著はしになつた御本はみんな愛讀してをりますのよ」

美しい少女のかうした流暢な甘辭に、稲田は何だが擽つたいやうな、眩しいやうな、いくらか照れた眼付をして、苦笑した。そこへ細君の磯子が、匂ひのいいレモン茶を出した、珈琲茶碗を二つ盆の上に載せて持つて來て、縮緬の單衣羽織をなびかせて、綠樹の眼の方になつかしげな注視の眼を注いでゐる眞紗美のなれなれしい様子を、見て見ない様子をして、

「どうぞめしあがつて下さい」と言つて、二人の前にそれを分けてから、離れたところで、二人の會話を聽かうとするやうに盆を前においたままですわつた。

「奥さま、そこに置いてあるお花をどうぞ、先生のお目の慰めに差上げて下さいまし。毎朝、花瓶の水をお取り換へになりますと、いつまでも、いい匂ひを放つてをりますから……」

障子ぎはに、白いつやのある大きい紙に、筒のやうに卷かれて置かれてある土産の花を磯子は取つて來て、それを解きながら、

「有難うございます」と禮を言つてから、「ああ、いい匂ひですこと、澤山のフリジアの花と、紅い百合のやうな花でございますわ、これは何と申しますか？」と、あんまり外に出つけない女のやうな風に訊ねた。

「アマリリスでございますの……先生、お花はお好きでいらつしやいますでせうね」

「ええ……好きです」

から言つて二人が話してゐる間に、磯子は花の挿された綠の玻璃の花瓶を、綠樹の机の上に持つて來た。
「はじめて逢つたお方の事をこんなに申してはすまないのですけれど、あの三浦さんはかなり氣障の方のやうにお見掛けいたしましたわ。あの方は、どこのお方でございますか？」と眞紗美は、かうした事からもつと重要な事の方へと探り寄つて行かうとするやうな問ひ方をした。綠樹は自分の方にまつはつてくるこの華やかな處女の、あらはな視線に、心持ち顏を赧らめながら、かなり用意した愼重な口調で、三浦が信州の生れであることを答へた。
「あの方はどんな閱歷でゐらつしやいますのでせうか？　あの方の『夢の傷手』といふ歌集を拜見いたしますと、何でも初戀に破れたやうでございますね」
「そのやうです」と綠樹は興味がないのか、又はさういふ問題を避けたいのか、あまり立入らない返事をしたので、眞紗美は暫く默つたが、直ぐまたその黑い瞳を急にキラキラと光らせながら言つた、
「先生、わたくしはこれから歌を先生に見ていただきたいんですの、そしていろいろ御導き下さるやうにお願ひ申したいのですの……ね、お宜しうございませう……」
そして彼女は媚びるやうに、綠樹の金緣の眼鏡の奧のやや沈鬱さうな眼を見ながら、首をかしげた。その甘やかな表情にはさうした場合に普通であるひかへ目な恭謙な遠慮の代りに、愛撫をもとめる小猫のやうな絕對の信賴が見せられてゐる。
「拜見いたしませう」と綠樹は言つた、「僕は導くとか敎へるとかいふ事は出來にくいのですが、單に見せて頂いて、それについて何か感想を申上げる事位は出來ませう」
「ほんとにお願ひ申します」と言つて、眞紗美は默つて愛想よくすわつてゐる細君の方に微笑を見せてから、それまで羽織の裾の下にひそませてゐた紫の鹿の子絞りのバツクを引張り出して、中から一綴りの草稿を取り出して、それ

を緑樹の方に渡した。彼が机の上でその草稿を開いて見ると、まるで彼女の白い肉體そのものを聯想させるやうな柔軟な萬年筆の筆のあとには、奔放な彼女の氣分が十分に漲つてゐるやうに思はれた。

緑樹が讀んでゆくにつれて、及びかかつて、前にのばした眞紗美の小さな胸の間に、襦袢の襟の眞紅な色が、いかにもなまめかしくうねつて見えるのである。

「この歌はいい歌ですね」と緑樹はその手に萬年筆を取り上げて、一首の上に、○を附した。

「ホホ、、、銀のコップでございますか」と眞紗美は、樂しさうに笑つて言つた、「わたくしもその銀のコップの歌は、ほんとに好きなのでございます。それに、それにはいい思ひ出がございますから……非常に美しい青年と二人で、銀のコップに紅い酒をなみなみとついで、夜ふくるまで華やかな物語りをしたんですもの。その二番目の作の『白金のコップ美し浮彫りの薔薇の花よし初夏の戀』はかなり苦吟いたしましたわ、その三つのうちどれが一番いいんでございませう？　やつぱり、はじめのでございますか？」

眞紗美は、ずつと机にもたれて行つて、その香水をふりかけた自分の花のやうな芳香を、感情の上にも、感覺の上にも、柔かな、受け容れやすい歌人の心に、しみこませたと思つたのである。

眞紗美は、一目見た時から、俗にいふ蟲のすくといふやうな心持を、思つたよりも年の若い緑樹の細面のやや窶れの見える歌人といふより學者風な顔や靜かなものごしから十分に受け取つたのである。これまで會つたどんな先輩よりも、彼女は、今目のまへにゐる人の何處か憂鬱な柔かさと、靜かさとに滿足したのである。華やかな夢をゑがき、詩歌の世界をまるでまつかな花でさんらんと飾りつけた中の、大理石の宮殿でもあるかのやうに考へる彼女の心持には、自分の感情を絶えずかき立てる荒々しい戀愛の對象とはまつたく別箇な異性の愛を、初對面の稻田緑樹から十分に味はひ得る事が出來た。

「到來物でまづいのですけれど……」といつて、細君の磯子が梅羊羹を盛つた菓子器をそこに置いて、今度はうす寄い日本の茶をすすめた時分には、草稿の方はすんで、眞紗美はこの夏京都の方へ旅をするかもしれないといふ事を、綠樹に話してゐた。

「わたくし昨年の夏の旅では、大失敗をいたしましたので、今年は、父の別莊のある房州の海岸へは、行きたくつてもまゐられませんわ……」

「どんな失敗でございましたの？」と細君が興味ありげに訊くと、眞紗美は笑ふと小さく開く上唇の下に、可愛らしく虫歯を金で塡じた白い齒をほのめかしながら、

「丁度その時分は海邊の村は盆踊で景氣づいてゐたんですの、わたしはさきと云ふ婆やと一緒に、そこへ養生かたがた避暑に行つてゐたんですが、毎日々々海の音や、風の音ばつかり聞いてゐると、すつかり退屈してしまつて、宿の女中がすすめますので、少し離れたところの濱邊で今晩あると云ふ盆踊りを見に行つたんですの。そりやすてきにいい月夜でしてね、一體に空も海も水色がかつて見える濱邊に、若い男や女が白い浴衣がけで、そりやア、無茶苦茶に踊るんですもの、ほんとに見ものでしたわ。わたしはあんな自由な、露骨な原始的なシインを見たことがなかつたもんですから、すつかり恍惚としてしまつて見とれてゐると、不意にその盆踊を圍んでゐる輪の中の、わたくしのすぐ隣にゐた男が、キユツとわたしの手を握りしめたんです……隨分失敬な人だと思つて、上に向いてその脊の高い男の人を見上げると、鼻の高い色の白い……そんな海邊で見かけようとは思はなかつた美靑年ですもの……ホホホ」と彼女は口元をハンケチで押へながら、ジロリと綠樹の方にながしめをくれながら、自分の話の效果を確信するやうに、その本題に入つて行つた。「大失敗ツテ云ふのは、その同じ海邊での出來事なんですの」

そして彼女はその旅館にゐた中年增の女中の斡旋で、その海邊の町の藝者を總あげにして遊んだといふ事を話した。

「今考へると、わたしはどうしてあんなに馬鹿だつたんだらうと思つてますけど、その時分はちつとも氣が付かなかつたんですもの。その女中が大變追分節の上手な藝者さんがありますから、ひゐきに一つ呼んでやつて下さいと、わたしに頼りにたのむものですから、わたしはいい氣になつて、一人ぢやつまらないから、ウンと澤山呼ぶことにしようと言つてそこの町中の藝者を呼んで、大騷ぎに唄つたりいろいろ遊んだんです、お酒だつてわたしかない飲んで醉つぱらつたりしました。後になつてお勘定を見ると、百何十圓からッて云ふつけなんでせう、お小遣ひに四五十圓は持つてましたけれど、百圓以上の金はとても持つてやしませんでしたから、さきに電報を打たせて、急病だから百圓送れと云つてやつて、そのお金を待ちかねて、はうはうの態で東京へ歸つて來ましたの……奧さまびつくりなさるでせう、わたしそんなお轉婆をしたんですの、ホホホ……」

かう言つて、眞紗美はいかにも氣負つたやうに笑つた。

「わたしの母は、今以てそんな事は知らないのです、急病したもんだとばつかり思ひ込んでゐるんです。その時の歎が五十首ぐらゐありますわ、今度持つて來てお目にかけませう」

かうした眞紗美の話し方が、いかにも氣易さうなので、最前は粗野にさへ感じてゐたその遠慮のない態度が、綠樹にも、その細君にもいつの間にか親密な心持を起させた。話がもつと佳境に入らうとした時分、玄關の方で來客の聲がした、

「ア、野上さんだわ」と細君はその聲を聞くと直ぐにその人が分ると云つたやうに、少し笑つて綠樹の顏を見た、「すぐお通ししていいんでせう?」

「わたくし、もう失禮いたしますわ」と眞紗美は立ちかかつたが、彼女の右側にはもう脊の高い若い男が入つて來て、いかにも主人と親しい友達であると言つたやうな打ちとけた樣子ですわつて、

邪魔ぢやなかつたかね？」と意味ありげな笑ひ方をして言つた。
「いや別に……」と絲樹は言つて、「御紹介しませう、これは野上草人君です、大澤眞紗美さんです……」
「ア、大澤さんと云ふのはあなたでしたか、僕、野上です……」
「野上さんと仰しやいますと、淺草の木村宮子さんとお親しくしてゐらつしやるお方でございますわね、いつもお噂は宮子さんから伺つてをります」
「これは恐縮ですナ、あまりいい噂は傳はつてゐないでせう……」と野上は言つて、照れるやうに笑つた、「今度宮子さんと一緒に僕の家へもお遊びに來て下さい」とさりげなく言つて、野上は別の話を絲樹に話しかけた。
眞紗美は口を噤んで、野上の話を聞きながら、時々眼を走らせて、彼の頬骨の高い、骨相の扁平な蒼白い顔を興味深げに見るのであつた。自分は別に言葉を挾まないで、一つの話の段落まで聞いてから、
「わたくし、またまゐりますわ……今日はこれで失禮いたします」と言つて、野上にも挨拶して、玄關に出て行くと、その後から絲樹もついて送つて行くと、
「アレ、いいんでございますわ、お送り下さらなくつても……では、また後の作を持つてまゐりますから、どうぞよろしくお願ひいたします」
かういつて、絹レエスのかかつた淡紅色のパラソルを持つて、彼女は出て行つた。
絲樹が部屋に歸つて來ると、
「あの女はいつから君のところへ來てゐるのかね」と野上は輕い調子で訊いた「君の家へはよく若い女が來るね」
「いや、そんなにも來やしない……、今日初めて來てこれから歌を見てくれといふのだ」
「そりや大いに見てやるがいい、ああいふ女は僕の好きなタイプぢやないが、顔はいいね……さう、あの女が大澤眞

紗美か……」と言つて、野上は頻りにうなづいた。

四

「お嬢さま、宮子さんがお出でになりました」君江が靜かな聲で、歌稿の清書をしてゐる眞紗美の部屋の外で、かう言つて知らせた。

「宮子さん、さう……」と叫ぶやうに言つて、眞紗美は直ぐに部屋から出て來た。まだ寢卷のままで、その上に紫矢絣の銘仙の袷羽織を引ッ掛けた身なりで、彼女は君江とは反對に荒い足音で玄關の方へ走つた。

「さア、お上りなさい、先刻どうもお電話を有難う。だからわたし、かうして出ないで待つてたのよ」

眞紗美は嬉しさうにかう言つて、自分よりかいくらか脊の高い、瓜實顔をした、撫肩のしなやかに見える宮子の肩に、後から親しげに腕をかけながら、引つ張つて行くやうに自分の部屋に連れ込んでから、大きな聲で、君江に、

「君江、大急ぎで珈琲を入れておくれ」と言ひ付けた。そして、磊落な様子で、

「御免なさいな、わたし、まだおねまきの儘なのよ……」

「いいわ、わたしだつて家にゐればさうですもの、此間の紅百合の會はどうでしたの？　盛會でしたの？」

「かなり盛會だつたわ、けれど、あんまりいい歌はなかつたやうよ。みんな歌を作るのが目的ぢやないんだもの、影山さんからしてさうなんだもの」

「影山さんと云へば、あの人隨分惡い噂があるんぢやないの？」と宮子は弱い聲で訊いた。宮子の調子は一體に弱々しいが、その底に勝氣なところが見える。

「噂なんてどうせいい加減なもんだわ、あれでゐて影山さんはいい人なのよ、人の世話をあんまりしすぎるもんだか

ら、誤解ばかり受けてゐるんだと、わたし思ふわ。此頃だつて、石川といふ人に随分親切をしてゐるやうだわ、みんなペットにしてゐるんだつて言ふけれど、實際はさうでなくつて、あの石川ッて云ふのが、中國切つての海産問屋の息子で、金廻りのいい人だと云ふから、事によつたら經營の困難な『紅百合』の資本金を頼んでるのかも知れないよ。随分經營は困難らしいの。わたしにも、五十圓位出してくれと言ふんだけれど、わたし、そんなに今お小遣ひは貰へないんですもの、だから月々五圓だけ送る事にして、勘辨して貰つたのよ」

「五圓だつて、毎月なら、随分あなた大變ぢやないの?」と宮子が氣遣はしさうに言つた。

二人がこんな話をしてゐるところへ君江が珈琲を持つて入つて來た。折々遊びに來る宮子を、彼女もよく知つてゐるので、そこにすわつて、友達のない自分を寂しむやうにして、宮子の帶なぞをじつと見てゐる。

「宮子さん、君江はねえ、すてきなロマンスがあるのよ、生命懸けで戀されてゐるのよ、戀してゐるのは大變な美靑年なのよ。だからわたしも同情して、成立させて遣りたいんだけれども、何しろその美靑年が多情多恨な人だから、直ぐに外に揷花が出來ると、見棄てられて泣くかも知れないし、今わたしもどうしようかと思つて氣を揉んでゐるところなのよ」

眞紗美が突然こんな事を言ひ出したので、君江はさつと眞紅になつて、

「お孃さんはあんな事を仰しやつておからかひになるんでございますから……」から言つて、此上あの風呂場の事なんか持出されては堪らないと思つたらしく、そこそこに出て行つた。

「あの君江を愛してゐるのは、從兄の亮さんなのよ。亮さんはわたしを嫁に貰ひたいと言つて大騷ぎして、氣違ひのやうに荒れて、どうでもわたしにキッスすると言つて、わたしを随分困らしたのよ。どうしてもわたしが承諾してやらぬものだから面當てに君江を寵愛して見せつけるのよ。そして今ぢやもう君江までが大分まゐつてるのよ。ほんと

にまゐつてしまふと、どうせさきざき身分違ひで結婚出來ると云ふ當てはないんですもの、可哀相になるばつかりですわ。だからわたし君江の熱を醒まさしてやらうと思つて、彼の不品行をみんな話してやつてるのよ」
「よくある事ね、さういふ事は……」と宮子は言つて、言葉を變へて、
「ねえ、眞紗美さん、わたし今日來たのは、或る人にあなたを連れて來てくれないかつて頼まれたのよ」
「誰れに？」
「そら、あの野上さんよ」
「野上さんなの！」と言つて、眞紗美は急にゲラゲラ笑ひ出した。彼女は數日前稲田錄樹の家で會つたかの顴骨の高い扁平な骨相をした蒼白い顏の男を思ひ出した。目の前にゐる宮子とかの男とを或る祕密なシインに追ひ込んで描いて見る事は何とも言へぬ痛快味があつた。
「わたしになんか何の用があるんだらう、あなたにだけ用があるかと思つたら」と眞紗美は言つて、とつさな思ひ付で野上に會ふまで宮子には彼に會つた事を祕密にしておく方がより興味ある事を感じた。
眞紗美はこの女學校からの友達である宮子の心持を、君江の氣持を知つてゐるのと殆んど同じ位に知つてゐて、二人の情事をも同じ位に嫉妬してゐるのである。宮子が年をとつた女優と共同生活をしてゐる野上草人と時々連立つて、物を食べに行つたりする樣子を、じれつたく思つてゐるのである。宮子ははじめはその女優の許を訪ねて、野上に知合ひになつたのであるが、今では女優には祕密に野上との親しい交りを續けて、それを樂しみにしてゐるので眞紗美の家を訪ねる時は、いつでも野上との出會ひの後か前かである。
これ迄の宮子の話で野上といふ男がどんな人間であるかしらんといくらか好奇心をもつてゐる眞紗美は野上に會つて見てもいいといふ氣持になつた。野上が此の間自分を見た初對面の一瞥が既に彼が自分の魅惑の輪の中に囚へられ

てゐゝ樣子なのを彼女は意識してゐたので、何にも知らない宮子が――勿論野上が宮子にあの日の同座を語つてゐるとは思はれなかつた――うまうまと野上の口車に乘せられて、自分を誘ひ出す傀儡に使はれてゐるといふ事を考へると、宮子の云ふなりについて行つても、決して氣の利かない立場に自分が置かれないばかりでなく、反つて二人の心持を或る程度まで飜弄する事が出來るといふ事を直覺した。

「行つてもいいわ……」と眞紗美は笑ひながら言つた。

「さう、行つて下さるの、有難うよ。野上さんは今日の午後二時過ぎ、神田のカフエ・エルの二階に行つて待つてゐるからつて電話なんです」

かう言つて宮子は懷から女持の金時計を出して、「もう二十分位して出かけないといけませんわ」

「大變急ね、でも大急ぎで支度するわ」と言つて、眞紗美は次の間に行つて、

「君江、わたし外に出るから、着物は此間稲田さんに行つたのでいいけれど帶はあの友禪縮緬の牡丹の模樣のを出しておくれ」と言つた。

彼女は宮子とは反對に、出來るだけ濃艷にして出かけようと考へたのである。

宮子と同道だからと云つて、君江には家にをらせて、外へ出た二人はいかにも樂しさうに、足も輕く步いて行くのだつた。

カフエ・エルの二階には、野上草人が、來てゐるものと思つたのに、上つて行つて見ると、まだその影は見えなかつた。二人は暫く曹達水を飮んだり、ドウナツを食べたりして、野上のくるのを待つた。

暫くして、野上草人が上つて來た。新しい夏帽と紅いクロオスの小說本らしい原書を一册片手に持ちながら、ニコニコと近づいて來た。

「遲くなつてすみません、かなり待ちましたか……」と言つて、ぢつと眞紗美の顏を見ながら、
「よく來て下さいました、お出で下さらんかと思つてゐました」
「だつて宮子さんのおすすめがお上手でいらつしやるんですもの、斷り切れないんです。それにはじめての方だとお斷りするんですけれどこの間あそこで……」と言つて、眞紗美は言外にあの日稻田の家で逢つたから來る氣になつたのだといふ事をほのめかした。
「僕もあの日お目にかかつたもんだから、宮子さんに賴んでさそつて見たのです」と野上も得意さうに言つた。
「まあ、いやだおふたりは今迄お會ひになつた事がないんだと思つてゐると、何處かでお會ひになつた事があるんですか。わたしうまくかつがれたわけね」
かう言つて、宮子がいやな顏をした。
「御免なさい」と野上が如才なく宮子をなだめた、「會つたと云ふ程でもないのだ、直ぐ眞紗美さんは歸つてしまはれたし、僕は傍觀者に過ぎなかつたのだから」
「何の傍觀者でございます？」と眞紗美がさうした言ひ方を非難するやうに言つた。
「いや、まあ、それはいいんです……今日は一つ三人で愉快に食べませう」
野上草人は二人の女をとりなしながら、ウエエトレスの搬んでくる皿を一々二人の前に並べてやつたり、麥酒を持つて來させて、それを注いでやつたりした。
宮子は野上が眞紗美といふ人を一度見たいから是非連れて來てくれ、あなたの友達には僕も知合ひになつて見たいからとさり氣なく言つたので、それもさうだと無邪氣な氣持から誘つて來た自分の馬鹿正直を思ふと二重に不愉快になつてくるので、次第に笑はなくなつて、話は專ら眞紗美と野上との間に交されるやうな工合になつた。二人とも宮子

の不機嫌な理由を十分に知つてゐても、それを氣にしないで、笑つたり話したりしてゐるのだ。
宮子は眞紗美が既に野上と知合ひであつたといふ事が分つてから、自分の誇りをいたく傷つけられたやうな氣がして、眞紗美に對する反感と、野上に對する怨嗟とがその小さな胸に往つたり來たりして、をればをる程面白くはないのであるが、さうかと言つて、二人をここに殘して自分が歸つて行つてしまふといふ事も不安で、とても我慢が出來ないのである。彼女は精一杯痩我慢を通して、これ迄の野上と自分との親密な關係からくる自分の優越な立場をどうかして保ちたいと思つたのである。
食後のサラダを食べ終つた時、
「一つこれから品川の方へ行かう」と野上は言つて、宮子の同意を求めるやうに促した。
「いいわ、行きませう」と宮子は眞紗美の方を見ないで言つた。
「眞紗美さんも行かうぢやありませんか、遲くなるといけないのですか?」
「いいえ、ようございますわ、家へ歸つて稻田さんの家へ行つてて遲くなつたと言へば、それでいいんですもの」
彼女はここで不意に、稻田の名を言つた。
「そりやいい考へですね、稻田を利用するといふのは名案だ……ぢや一つ行きませう、あちらへ行つたら、もつと愉快ですよ」
かう言つて立上つた野上の樣子は、あだかも稻田を、眞紗美のためにさう云ふ風に利用される、氣の利かぬ立場に置き得た自分の企ての成功を、衷心から愉快に思はずにはゐられないやうであつた。
三人が品川の料理屋で夕食を取つて、埋立地の方へ薄暗の中を歩いて行く時、野上眞人は美しい二人の少女の間に挾まれていかにも得意さうであつた。

海の上には夏の月が小さく光つて、臺場の黑い影の方を見ると、小さな舟の帆が見えるばかりであつた。
かうして野上と一緒に歩いてゐる宮子の氣持は、惱ましい哀愁に閉ざされたものであつたが、眞紗美は反對に、二人の間をそんな風にした事によつて、或る痛快な心持に滿たされてゐるのである。

五

宮子から眞紗美に宛て絕交の手紙が來た。それは二人が野上と一緒に品川へ行つて遊んだ日の翌日の晚であつた。その短い手紙の文句から、宮子の心持を十分に推測した眞紗美は、直ぐに彼女に當てて手紙を書いた。
「わたしの方からこそあなたに絕交します、さやうなら」
から書いて、そこらあたりのものを引つくり返しながら、黑つぽい封筒を見付け出して、宮子の宛名を書いてから、君江を呼んで、
「たつた今すぐ入れて來ておくれ、急ぎの手紙なんだから」と言ひ付けた。
手紙を出してしまつてから、眞紗美は非常な寂寞に襲はれて來た。一昨夜の事は彼女自身考へて見ても、自分のいたづらッ氣があんまり過ぎてゐたと思ふので、心ひそかに悔のやうな氣持に浸されてゐたところへ、宮子からの絕交の手紙はピシッと胸にこたへたのである。けれども彼女の性分として、あやまるなぞと云ふ事は厭やなのである。反つて彼女は反對の態度を取つて、「わたしの方からこそ絕交します」と高飛車に出たのであるが、手紙を愈々出してしまふと、取りかへしの付かない馬鹿な事をしたやうな氣がしてならなくなつた。宮子とのこれ迄の長い間の交はりを、たつた一通の手紙で、そんなに打切つてしまつた事をくやしい事に思ふのである。彼女は後から大きな聲で君江を呼び返してしまはうかと思つたが、また思ひ返して影山女史に手紙を書きはじめた。

「影山さん、お變りはありませんか、歌會以來失禮いたしてすみません、わたしはあれからずつと病氣で寢てゐたのでございます」

眞紗美はいつもこの病氣といふ事を、かういふ場合何よりの口實にするのである。

「けれどもう大分よくなりましたから、明日あたりお遊びにお出で下さい、御一緒に御夕飯をいただきませう。ねえ、どうぞ御出で下さい、さうでないと御怨み申し上げますよ、わたし今大變に寂しいんですから……それからいつかお話しになつた石川さんの下宿へ遊びにまゐる事は、お目にかかつて御相談の上にいたします」

かういふ手紙を書いて、今度は孔雀の羽の模樣のついた封筒の中にそれを入れて、宛名を書いた。暫くの間頰杖を突いてゐた彼女はまぎれない心をまぎらさうとするやうに、床の間の横の黑戸棚を開けて、そこから絹のハンケチに包んだ一束の手紙を取り下して來た。これらの手紙は、これまで彼女が受取つた若い男の人からの手紙である。

彼女に取つて一番になつかしいのは、彼女の初戀の人からの手紙である。今は遠くに離れて、殆んど何の交渉もない其の青年は、或る代議士の長男であつた。二年程の間、夢のやうな事を互ひに書き交して、週に一度宛の訪問を樂しみにしてゐたが、不幸にもその青年は、肺病といふ事になつて、相州鵠沼に保養に行く事になつて、折角うまく纏まりかけてゐた二人の結婚の話は、その青年の父親の考へによつて、取り止めとなつてしまつたのである。その青年からの手紙は、その一束の殆んど半ば以上を占めてゐるのだ。相州鵠沼南湖院よりといふ筆のあとの悲しい封筒が、重りかかつてゐる。

當時眞紗美はこの青年の事を思つて、人知れず泣いたのであつたが、次ぎに現れた帝大の學生である遠緣の親戚の次男である林といふ男からの文通で、違つた情熱の方へ導かれて行つた。その男からの手紙もかなり澤山あるのである。

かうした艶書を見てゐるうちに、眞紗美の眼には、遣瀬ない涙が一杯に湧いて來た。彼女はこれらの手紙をすつかり火にもやしてしまはうかと思つたが、また思ひ返して、もとのところへしまつた。

「入れてまゐりました」と君江が歸つて來て告げた時は、眞紗美は一つ驚かせてやらうと思つて、

「君江、わたしは宮子さんと絶交したのよ」と言つて、脣を嚙みしめて笑つた。

「まあ、さやうでございますか、あの御手紙がその絶交狀でございましたか」

「さうよ」

かう言つて眞紗美は、床の間にかかつてゐる三味線を出して來て、「わたしムシヤクシヤして仕方がないよ、何か彈くから聞いておくれ」

撥を取出して、三味線を膝の上に抱へ上げながら、眞紗美は片手で絲をパチパチと鳴らした。それから暫くの間、いろんな音を出しては、ギイギイとねじめをしめながら、調子をととのへて、

「さあ、何を彈かう、忘れてるかも知れないけれど、越後獅子をさらつて見ようか」

こんな風に彈きはじめたのであるが、少し彈いて見て、たるんだ音が出た時に、

「まあ、いやな音！」と叫びざま、握りしめた撥先きで、パチリとその絲をぶち切つてしまつた。そして、三味線を君江の方に投げ出した。

「亂暴なすつてはいやでございますわ、お孃さま」

君江は呆れたやうに笑つて、その三味線を床の間に置いた。

「お氣分がわるいんでせうから、お蒲團を敷きませう」

「あア、敷いておくれ」

蒲團がそこに敷かれると、眞蒼な顔をした眞紗美は、その上に寢て、上から君江がふうわりとかけてくれる掛蒲團の天鵞絨の襟を、白い頸のところに引き上げた。
「君江はほんとにやさしい人ね、わたしつくづく感心してゐるのよ……」と眞紗美は君江を寢ながら上に見て呟いた、「おまへにくらべると、わたしは何といふお轉婆だらう、おまへ呆れてるだらう、輕蔑してるだらう」
「いいえ」と君江は枕もとにすわつて言つた。
「そんな事はございません、お孃さまは心に御病氣がおありですから、そんなにいらいらなさるんです。この夏御旅行なさいますといいやうに思ひますわ」
「さうだね……」と眞紗美は言つて、旅の事を考へると、心は明るくなるやうに感ぜられた。彼女はこれ迄何度となく旅をした。旅をしたたびに、いろいろのロオマンスを彼女は思ひ出として持ち歸つたものである。かの海邊の町の盆踊りの晩に、自分の手を心ありげに握つて見た美靑年の事や、その前の春、大和の片田舍の富豪の家に泊つた時、その家の一人息子に戀されたことなどが、次々に思ひ出されてくる。
澤山の美しい靑年から、そんなにも愛されてゐる自分であると考へると、彼女は宮子なぞは虐めなくてもいい筈であるが、まのあたり宮子の戀を見てゐると、つい焦々として來て、立入つて見たくなるのである。わるい癖だと思ひながら、彼女にはかうしたいたづらけがついて廻るのである。
野上に對して、何の牽引をも感じない事を宮子にはつきりと言つてやつて、彼女を安心させてやりたいと思ふのであるが、今となつては、そんな事をするのも自尊心を傷つけられるやうな心持がするのである。面白づくな心持と、止むを得ない衝動との混り合つた感情が、宮子の絕交狀を見て以來、彼女の胸に踊り廻るのである。
こんな惱みのうちに、うつうつとまどろんだ彼女は、いつの間にか電燈のともつた黃昏の部屋に、ポツカリと眼を

開いた。

次ぎの間には、書間は學校に行つてゐる二人の妹が、何か話してはガタガタさせてゐるし、ずつと離れたところの茶の間や臺所では、母や君江の夕飯の支度に取りかかつてゐるらしい氣配がする。

「病氣で寢てゐるの？」と突然部屋の外から男の聲がした。眞紗美はそれが從兄の亮一であるとわかると、妙になつかしくなつて、

「もう起きるわ、入つてもいいわ……」と返事をして、手早くはね起きて、蒲團をくるくると卷き上げて、部屋の隅に押しやつた。

「疲れるのも無理はないや、毎日大變に活動してゐるさうだからね」

から言つて部屋に入つた亮一は、頭を五分刈にして久留米絣の着物を着てゐる。色の小白い、多血質らしい容貌で、唇の紅いのが目に付く。

「ひやかさなくたつていいでせう。活動の點から云へば、わたしよりもあなたの方がすさまじいわ。あんまり活動をしすぎると、祖父さんの御病氣に障りはしないかと思つて心配してゐるわ」

「馬鹿だナ、そんな事があつて堪るものか、僕この頃大變におとなしいんだ、非難されるやうな事は、こつから先きだつてありやしない」と彼は指を出して見せながら、急に語調を變へて言つた、

「此頃どんな人を物色してゐるの？」

「さうね、歌の先生を一人見付けただけでしたわ……わたしこれから大變おとなしい娘になるつもりなのよ。今日はしみじみ君江のやさしいのに感心してしまつたから……あれだと誰れの氣にも入るわ、亮さんのやうに戀しなくつたつていい氣持がするもの」と眞紗美は冗談ともつかずしんみりと言つた。

君江の名を突然に言はれたので、亮一は急に照れたやうに目をそむけた。
「君江に感心してしまふのはいいけれど、お風呂場の外からなんか、彼女の裸體を見たりなんかしては、風俗壞亂の虞れがあるわ」
「どうしてそんな事知つてゐるの？」と吃驚したやうに亮一が訊いた。
「千里眼なんだもの、わたしは、何でも知つてゐるわ……君江が大變恥かしがつてゐたことよ」
「もう君江に言つたの、困つたね、そんな事を言つては……僕は見に行つたんぢやない、散歩の折りヒョッと出會つただけの事だ」
「だつて隨分立止まつて見とれてゐたぢやないの」
かういつた眞紗美の語調には、嫉ましいやうなところが見えた。當惑しきつた亮一は、やうやういい智慧を發見したと言つたやうに、
「一つ復讐をしてやりたいもんだ……今度あなたが晝寢してゐるところへ行つて顏中眞黑に墨を塗つてやらう」
「そんな事させるものですか」と眞紗美は無茶苦茶になつて言つた。
二人のいがみ合ひを、次ぎの部屋から母親の淸子は、仲裁するやうに言つた。
「二人ともまた喧嘩してゐるのですか、亮さんはまた何の事です、病氣で寢てゐるものをつかまへて、そんな下らぬ事を言ふなぞは、よくないですよ」と物柔かにたしなめた。
「全くさうですねえ、僕は眞紗美さんがあまり元氣だもんだからつい引込まれて喋つてゐたんだが、考へて見ると病氣ですなあ。もつとも何の病氣だか知れたもんぢやないけれど……」
かう言つて亮一は椽側の方に出て、プイと歸つて行かうとすると、

「ア、一寸待つておくれ」と言つて、清子は亮一をとめてから、先刻から伏目をして何か撥んだりしてゐる君江を呼んで、何かの風呂敷包みを簞笥の上からおろさせて、
「それを亮さんに本邸に持つて行かせておくれ」と言ひ付けた。
眞紗美はこちらからこれを聞いて、ほの暗い玄關のところで物を受け渡しする君江と亮一とが、その風呂敷包の序に、そつと觸れ合うであらう手の事を考へて見た。
「ああ、クサクサしてしやうがない……今夜わたしはまた眠られないかも知れないから、眠り藥を少し飲んで見たいわ」と彼女は呟いた。
「どんな模樣なの、餘程苦しいのか？」かう言つて、眞紗美とは殆んど體質の違ふ、脊の高い細面の母親が、部屋に入つて來て、先刻眞紗美が卷き上げて押しやつた蒲團を開いて、元通りにしながら、
「この頃病院の方を怠けてゐるやうぢやありませんか、明日あたり君江を連れて行つて來て御覧なさい」
母親の言葉のうちには、禮儀正しいやうなやさしさがあつた。
「おまへの身體は大切なんだから、養生にはどんな事をしてもいいとお祖父さまも仰しやつてゐらつしやるのだから、海岸地がよければそちらへ行つてもいいし、山の方がよければ山の方へ行つてもいいし、好きにして達者になるように心がけないとお母さんがお父さんに對しても、お祖父さまに對しても申譯がないからね……」
眞紗美が默つていつ迄も返事をしないので、一段と聲を低くした母親は、
「お父さんと言へば、もう近々御歸りになる筈だけれど、此頃少しお祖父さんのお身體が持直したらしいので、それに今むかうでは手離せない程事業が御忙しいものだから、お歸りになるにはなるけれども、少し先きになつたやうだよ。だから、それ迄におまへが一週間や二週間の旅に出たつてかまひませんよ、君江を連れて鎌倉あたりへ行つて見た

らどうだらうね」
「ええ、ありがたう」かう言つて眞紗美は重苦しい悲しい氣持になつて、蒲團の上ににじり上つて突つ伏すやうにした。
「今日本邸の方へおまへをお嫁にほしいと言つて、かういふ寫眞の人が結婚の申込を、人を誦じて申込んで來たよ。その人は醫學博士で、もう四十にもなる病院の院長さんで、奧さんに死に別れてから、ずつと一人身でゐる方ださうなのだよ。お祖父さんは老人だからさういふ人の方が我儘な眞紗美のためにいいかも知れない、殊に身體が弱いから醫學博士を良人に持つなら、そんな安心な事はないと仰しやつたんだけれど、わたしは當人に訊いて見て下さいと申上げて置いたから、おまへまたその話があつた時にいいやうに斷わるといい……これ迄どの寫眞見ても、おまへがいいと言はないものだから、お祖父さまは、自分の死ぬ迄に眞紗美の身をかためさせたいのに、これぢや安心して死ぬ事が出來ないと言つて、こぼしてゐらつしやる……そして、亮一と結婚してくれたら、これに越した事はないのにと、毎日言つてゐらつしやる」
「亮一なんかとはわたしいやですよ」と眞紗美は蒲團に顔を伏せた儘で言つた。
「あんまり慣れすぎたんですもの、親しいとは思つたつて、夫にしようなんて事は馬鹿らしくて考へられませんわ、亮さんはいい人だけれども、あんまりわたし接近して幻滅させられてるから厭だわ」
次ぎの部屋から、その話の切れ目に、
「奧さま、お夕飯の支度が出來ました」と君江が言つて、入つて來た。彼女の手には、眞紗美の膳部が持たれてゐた。
「お孃さま、お粥にいたしましたよ、召し上つて下さい」と君江は言つて、ぢイッと疊を見守つた。

六

眞紗美は稻田絲樹の家に二度目の訪問をした時、野上草人が自分に呼び出しをかけて、カフェで會つたと云ふことを話したくつて堪らなかつたが、直接に野上の名前を出す事が何となく憚られたので、或る人と云ふ不定代名詞によつて、事件そのものをありのままに話をした。そのために長い間の友達と絶交をしたと云ふ事をも附け加へた。

「先生、ほんとにその人はうるさいのですよ……わたしはその人の顏は好きではないのです、聲なんかもつと嫌なのです、それのにわたしを誘惑して仕樣がないのです」と愁嘆するやうに告げるのであつた。

「或る人とは誰れの事でせう……」と絲樹が輕く訊ねると、眞紗美は黑い眼を祕密らしくくるくるさせながら言つた、

「今にわかりますわ、先生も御存じの方ですもの……」かう言つて、それ以上の事はかたく口を噤んで言はなかつた。

絲樹は三浦の方から、眞紗美がいろんな歌會に出てゐると云ふ事を聞いてゐるので、その誘惑するといふ男も、屹度その中の一人に違ひないと思つたが、强ひてそんな事を訊いてみる程の興味も彼にはなかつたので、眞紗美の話を聞き流しにした。さうした絲樹の敢て立入つて來ない、淡泊な態度が、眞紗美には物足らなくもあり、寂しくも思はれた。彼女はもつと何とか言つて貰ひたいのである。彼女は單に絲樹に歌を見て貰ふと云ふばかりでなく、もつと彼の氣持を自分の方にたぐり寄せて、絲樹の胸に自分自身の溫柔な巢をつくる事によつて、自分の誇りを充たし、若い日の寂しさを慰めて、出來る事ならば世間の評判に立つだけの一波瀾を起してもいい位の氣持なのである。

「明日午過ぎ私の家へ遊びに來ませんか。家のものは留守で、私一人ですから、遠慮なんか要りません。是非來て下さい、いろいろお話ししたい事もありますから」

かういふ意味の手紙が、野上草人から眞紗美のところに來た時、彼女は暫くの間考へて見た。彼女は絶交狀をよこした宮子が野上に對しても絶交狀を出したであらうと思はれなかつた。此方の方へは絶交狀を出して置いて、妙な狀態になつた野上と自分との氣持を元通りにしようと骨折つてゐるのではないかと思はれた。別に宮子から野上を奪つ

てやらうといふ氣持はないのであるが、これ迄の行懸りから、續いてゐる好奇心を、まだ多分に有つてゐる彼女は、暫く考へたあとで、どんな風になつてゐるか見て來るのも面白いと思つた。若し野上が同時に宮子をも招いてゐて、絶交し合つた同士が一緒になる事があつても自分は決してかまひはしないのだと思つた。若し自分が心から野上を愛してゐるのだつたら、決してそんなに樂觀は出來ないのであるけれども、愛してゐないのだから、いづれにしても自分の方に强味があると彼女は思つた。

　君江を連れて、例の派手な友禪縮緬の單衣羽織を着た眞紗美は牛込北町にある野上草人の家を訪ねた。共同生活をしてゐる女優が、かなりの收入のあるところから、彼の邸宅は中流以上の門戸を張つてゐた。玄關に近づいた時、眞紗美はそこに宮子の見慣れた紅鼻緒の空氣草履を見出すかと思つたが、そんな派手なものは見當らなかつた。

「御免遊ばせ」と彼女は聲をかけた。

「大澤さんですか」と言つて玄關に現れた肩幅も胸幅も廣い脊の高い野上草人は、ニコニコとしてゐるのであつたが、眞紗美のうしろに一人の女がおとなしく立つてゐるのを見ると怪訝な顏をした。

「一人では家から外出の許しが出ないもんですから、女中を連れて來たんです」

かう言つて眞紗美は君江の方を振返つた。

「あなたも一緒に上つて下さい、家には誰れもゐないのですから、遠慮はいりません」と草人は君江に言つた。

二人が八疊の間に入つてすわると、野上は座蒲團をすすめたり、お茶道具を臺所から持つて來たりして、いかにも氣輕な樣子である。

「宮子さんもお出でになつてゐるんぢやなかつたんですか、後からお出でになるんぢやございませんか？」

眞紗美がかう言つてどんな返事を受取るかと待つてゐると、

「宮子さんなんぞ今日は來るもんですか、僕はあなたのみを招待したんです、それとも宮子さんと一緒だつた方がよかつたんですか？」と言つて野上はもつれるやうに反問した。

「さうですとも宮子さんがいらつしやらなくつちやつまりませんわ、かうした時に宮子さんが呼ばれてゐないッて事は、想像出來ませんでしたわ」

「その想像の出來ない事が、いくらでも事實となり得る可能性があるのが人生ぢやありませんか」と野上は言葉を弄するやうに言つて、主從二人の前に茶をすすめた。

野上は、眞紗美が女中を連れて來たといふ事が小癪なやうな氣がして、この女なかなか食へないところがあると思つたらしくて、何をするにも氣を置いてゐる樣子である。それがまざまざと眞紗美の眼には見えるので、彼女は思ふ壺にあたつたやうな氣がして、面白いやうな氣がするのである。

いろんな話をしてゐても、君江が何にも言はないで、おとなしくしてゐるので、二人の話もとぎれとぎれになつて來た。この儘ではもう二十分もすれば、眞紗美が歸ると言ひ出すかも知れないと氣が付いた樣子で、

「一つこれから連れ立つてそこらあたり歩かうぢやありませんか、尤もあなたがお差支がなければ、もう少し遠いところへ行つてもいいんだが……中野へはあなた行つた事がありますか？」と野上は言つた。

「中野でございますか、あそこならわたしはよく存じてゐますが、省線電車に乘つて行けばすぐですわね」

「ぢや、これからちよつと行つて來ませう……お差支がなかつたら……」

「行つてもよろしうございますわ」と眞紗美は承知をして、

「お宅は無人になるではありませんか」

「いや、臺所には婆やがゐるからいいんです」と野上は言つた。

君江はいい加減にもう歸つてもいいのにと言つたやうな眼付で、眞紗美をぢつと見た。眞紗美はそれに氣が付いたが、心配しなくつてもいいのよと言つたやうに目くばせした。

三人が北町から歩いて、牛込驛から省線電車に乘ると、乘客は割合ひに少いので、席は廣々としてゐた。眞紗美は野上と並んで腰をかけて、君江だけは同じ側の少し離れたところに腰をかけた。家で話してゐた時と違つて、眞紗美は氣輕なやうに、野上と喋り續けた。外にこれといふ話題のない二人は、さんざん宮子の事を話題にしてから、それが種切れになると、今度は絲樹の事を話し合ふやうになつた。野上が宮子の事を早く切り上げてしまひたいと言つたやうな態度をしたのと同じに、絲樹の事が話題にのぼると、眞紗美は言葉少なになつた。

「あなたは何にも知らんから、平氣であの男のところへ行けるのですよ」と野上は言つた。

「どんな事を知らないからです？」と眞紗美が問ひ返した。

「あの男はあれでゐてなかなか隅には置けぬ男です。うはべはおとなしさうに見せかけてゐても、何をするか分らない男です。早い證據には、彼は今から二年程前、あなた見たやうに自分の家に出入りしてゐた若い女を自分の天分も考へないで、無茶苦茶に追ひ廻して、とどのつまりは、その若い女には振られるし、細君には國へ歸られるし、さんざんな眼に遭つたんです、見てゐられない醜態でしたがね」

「まア、あの先生にそんなラヴアッフエアがあつたんですか！」と眞紗美は今はじめて聞いたからした絲樹のロオマンスを、目をキラキラさせて受け容れた。

「人は見かけによらないものね」と眞紗美は呟いて、その眼に二三囘見馴たかの靜かな書齋の人を思ひ浮べようとするやうに眼を細くした。

「僕は何も人を中傷したくはないのですが、あなたが彼の家にそんなにして出入りをしてをれば、今に面倒な事件が

起つて、綠樹には追ひ廻されるし、細君からは嫉妬されるし、世間からは、つまらぬ誤解を受けてお困りになりますよ、僕はあなたが氣の毒だから御注意するのです」

「御親切有難う……」と眞紗美は輕く受け流して、窓から吹き込んでくる風に鬢の後れ毛を吹かれながら、美しく笑つた。

「さういふあなたは、もつとロオマンスをもつてゐるぢやありませんか…宮子さんの事なんか隅には置けませんもの。稻田先生にちつと位そんな事あつたつて不思議はありませんわ、反つてそんな事があつた方が氣が置けなくつていい位なもんだわ」

「あなたは知らんからそんな事を言ふんだ、」と野上はムキになつて何か言はうとすると、その出先きを拂ふやうに、眞紗美は急に君江の方を向いたが、君江が窓の外を見てゐたので、今度は前屈みになつて、パラソルの先きでコツコツと床を叩きながら、

「ほんとにあの先生にそんな事があるんかしら、ほんたうとは思はれない事だけれど……」と呟いた。明らかに心をそそられてゐるやうな樣子である。

君江ははじめから二人の齷齪な話を別に笑ひ顏をするでもなく、ただおとなしく耳に入れながら、移り變る窓外の景色を見てゐたが、電車が東中野を離れて、靑々とした郊外の野や林の傍をこころよく走る時分には、すつかり窓の外を振り向い見ててゐるのであつた。君江は窓の外をぢつと見ながら、やはり耳に入る二人の齷齪な會話を聞いてゐると眞紗美の不謹愼さが心配になつて來て、これ迄あつた人の中で君江に取つては一番氣障に見えるこの粘々しい感じのする男と、どうしてそんなに面白さうに立入つた附合ひが出來るのだらうと、少からず眞紗美の心事を疑ひながら、間違ひのないやうにと、絕えず心が配 れるのである。

「あア、もうまゐりましたわ」と眞紗美は言つて、彼女を驚いたやうに見守る正面の乘客を尻目にかけながら、

「君江、もう中野へ來たよ」と話しかけた。けれども君江がただにつこり笑つてお辭儀をしたばかりなので、今度は野上に向つて、

「あなたは度々こちらへ御用がおありになるんでせう」と言つて、クツクツと笑ひ出した。これには野上草人も返事をしないで、ニヤリと笑ふばかりであつた。

停車場を出てから、新開町の、大八や俥の輪立ちのあとの深く掘り込まれた道を通つて、三人は西新井の藥師の方へと歩いて行つた。このあたりの粗雜な品のわるい町の空氣が、歩いて行くにつれてだんだんはつきりしてくる、安料理屋の硝子戸には、ペンキの文字が汚ならしく見えるし、しもたやからは下手な三味線のボロンボロンいふ音が聞える。まだ壁を塗つたばかりで、建具一つない家には、大工が煙草をのんでゐたりした。

かうした町を五六丁行つて、藥師に近いあたりへくると、古くから建つてゐるやうな宏大な料理屋が、最近建てたやうな矢張り大きい料理屋と裏表になつて、それぞれに女たちが閙さうに遊んでゐる。東京からの學生や二人連れの男女などの一日氣樂に遊ぶには丁度いいと云つたやうな場所である。

眞紗美も君江も、この前亮一などと一緒に、ここへ來て一日遊び暮した事があるので、よく知つてゐた。藥師の境内に入つて、參拜などは兎に角として、祠の後の方へまはつて行くと、祠の軒に鳩の巢が驚くほど盛り上つて、澤山の鳥が出たり入つたりしてゐる樣が、相變らず目を惹くのである。針金でさんざんにひねくり廻された大きい笠松のある傍らをブラブラ歩いて木立の間をダラダラと下りて行つたところに、弄びたいやうな小さな池があつた。その池の中島には木の腰掛が置かれてある。そのあたりにも連れ込み客を目當てにしたやうな旅館や料亭が立ちかかつてゐた。

「何處かで一つやすまうぢやありませんか」と野上は眞紗美をかへりみた。
「さうね、あそこの家へ行きませうか」と言つて、すぐ近いところにある家に目を向けると、野上はあんな處はいけないと言つて、先きに立つて元へ引返した。
三人が入つた家は、藥師前の大きい料理屋であつた。女中に導かれて奥の方の中庭を見下す二階の廣々とした部屋に通つた。
「割合に綺麗だわね」と眞紗美はハンケチで額をはらつて、羽織の裾をはねながらすわつた。
「君江疲れたらう」
「いいえお孃さまこそお疲れでせう」
「引つ張り廻してすみませんね」
三人がこんなに會話しながら、待つてゐると、女中がお茶を持つて來て、註文を訊いた。いろんなものを女達に註文させて野上は得意さうに煙草をふかした。
「出來るだけおいしいものを註文して下さい」と彼は十分に奢るのだと云つたやうな寛濶ぶりを見せた。
「わたしが奢りますから、あなたのお好きなものを仰しやつて頂戴、お酒も取りませうか……」
「いや、麥酒位でいいんです、今日は僕が奢るのです」
「奢つて頂いてはすまないわ……ねえ君江」と眞紗美は誇りをもつて言つた。
通したあつらへの來るのを待つ間の雜談に野上はまた稻田のことを持ち出して來た。
「先刻僕が言つた通り、全くあそこへは行かぬ方がいいんです、あなたが僕を信じてくれるのなら、この僕の忠告を聽き入れてもいいでせう、あの男は本當に危險ですよ。ちやほやされたからとて、あなたはいい氣持になつてゐると、

とんだ目にあひます、今のうちにもうお宅へは伺がひませんと、手紙をやつておしまひなさい。ナニ、あなたの歌は僕が見てあげます、綠樹なんか本當の歌は分つてゐないんです、その證據には、今の歌壇で彼をよく言ふものは一人もないぢやありませんか」

「よく言ふ人がないからと言つて、稻田先生が駄目な人だといふ事にはなりませんわ。わたしはお目にかからぬ前から、あの方が何となく好きであつたのですが、お目にかかつてからは、もつとおなつかしくお慕ひ申してゐるんでございますよ」と眞紗美はハンケチを紅い唇に當てながら、野上を飜弄するやうに言つた。「あなたは稻田さんの元からのお友達だのにどうしてそんなにあの人の爲めにならない事を仰しやるんでせう?」と眞紗美はツケツケと言つた。

「そりやあなたの誤解ですよ、僕はあなたを稻田の家へ行かせないようにするのが、つまり稻田のためにもいいと思ふからです……あなたの爲めにもいいし、稻田のためにもいいんです。あなたはあそこへ行つてあそこの細君を見たらうが、あの細君があなたの來る度に胸をハラハラさせて心配して、あなたが歸ると直ぐ綠樹をつかまへて、泣いたり騷いだりする事を知らないのですか! 僕は現にそれを見たんですよ」

「まア、それは本當でございますか?」と眞紗美が今度は引き入れられてゐる、「それだと隨分お氣の毒だわね、これからわたし隨分氣を付けますわ」

細君のことを持ち出されて見ると、眞紗美は氣がかりなやうな氣持になつて來た。全くそのやうな事があるとすれば、初對面の時からあんなに親切にしてくれた人に對して、すまないやうな心持がしてくるのであるが、それと共に、そんなに自分のために綠樹の家庭が亂されると云ふ事が誇らはしくて、もつともつと綠樹の家庭へ割り込んで行きたいやうな心持が起つて來た。

麥酒が搬ばれて來ると、野上は女中につがせて、二人の方にもコップを置いた。

「わたくし今日はよしませう」と眞紗美が言つた「お酌ならいくらでもしてあげますわ」

女中は眞紗美の顏を何といふ蓮葉な娘たらうと云つたやうに、興味深さうに見てから、

「後のはすぐ出來ます」と言つて下りて行つた。

「ぢや一つなみなみとついで下さい」と野上は飮みほしたコップを眞紗美の目の前に持つて行つた。

「あまり慣れていませんから、不調法するかも知れませんよ」と言つて、眞紗美がコブコブと音させながら、コップにつぐと泡立つたあぶれが食卓と疊との間に湧き落ちた。それを君江がハンケチで拭いてやつた。暫くたつて、濡れたハンケチを持つて、君江が小用にでも行くと見えて、座を立つて行つた。

君江の部屋を立つのを見送つてから、野上は眞紗美の方ににぢり寄つて來た。

「眞紗美さん、僕はね、あなたに話したい事があるんですよ。僕は稲田の家であなたを一目見た時から、さう思つてゐるんですが、あなたは僕が好きなタイプの人です。今度お手紙で僕の意中を詳しく話したいと思ふんですが、大體あなたにも察しはつくでせう。僕は今女優と共同生活をしてゐるんですが、あまり面白くないんです、どうしても若い美しい對象を得て僕の生活を豐富にしたいと思ふんです」と野上は眞紗美に囁きながら、右の手を眞紗美の左の手の上に持つて行つて、彼の大きい身體を、眞紗美の傍らに寄せて行かうとした。

「そんな事なすつてはいけません」と眞紗美は後に身を引くやうにして、「わたし手なんか握られること嫌ひなんですのよ。そんな事なさるなら、その麥酒瓶でいやといふ程打つてあげますわ……血が出るほどよ」

野上が工合が惡くなつて、元の姿勢になつた時に、女中が煮肴を通して來た。君江もその後から入つて來た。

いろんなものを三人で食べてから、お茶を飮んでゐる時、野上は女中を呼んで硯と卷紙とを持つて來るやうに命じ

た。
「何お書きになるのです？」と眞紗美が訊ねると、
「僕は卽興の歌を書いて見せてあげます」と野上は言つた。
女中が硯と紙とをはこんで來ると、野上はそれに一寸うまい歌を書いて見せた。そして眞紗美にも、何か書いて見せるようにと言つた。
「何も出來てゐないのよ」と眞紗美が言つて筆を貰つて、樂書をはじめたが、彼女はいろんな文字を書いて行くうちに、いつか稻田といふ文字を書いてゐた。
「筆の序に稻田に手紙を書きませんか」と野上は言つた。
「書いてもいいわ」と眞紗美は言つて、野上の顏を見て、クスクスと笑つて言つた、
「何と書けばいいんです？」
「僕が言つてあげる通り書くといいでせう、さあいいですか……わたしは今後お宅へは伺はない事にいたします。これにはいろいろ事情がある事ですが、申上げると反つて御不快にお思ひになりませうから、ただ默つてお別れ申上げます……」
眞紗美の顏からは笑ひがとまらなかつた。
「すてきな文字だわ、これを見ると稻田先生は吃驚してしまふでせう。けれどあの細君はホッとして喜ぶでせう、歸つてから出しませう」
「屹度出すんですよ、あなたの爲めにも、稻田のためにもそれがいいんだから……」
野上はこれで前の失敗を取りかへしたと思つたらしく、特にいい氣持になつた樣子で、女中を呼んでもう一度麥酒

を取寄せて飮んだ。
その日の夕方、野上と牛込驛で別れる時、
「眞紗美さん、先刻の手紙は忘れないでお出しなさいよ、いいですか？」と野上は念を押した。
眞紗美はクスクスと笑ひながら、默つて頷いて見せた。
君江と二人きりになつた時、彼女は、
「今日はおまへに隨分感謝しなければならないのよ。おまへが一寸外へ行つてた時、今の人はわたしのところにすり寄つて來て、手を握らうとしたり、口說いたりしたのよ。あの時ほんとにどうしようかと思つたわ、でもおまへが歸つて來たから大變よかつたのよ、ほんとに一人だつたら危險だつたわ……」と大袈裟に誇張して言つて、そしてその自分の言葉から、自分が今野上と稻田との間に、いかに美しい存在として介在してゐるかを思つて、かうしてこの二人から問題にされるやうになるといふ事が、堪らなく面白く思はれて來た。彼女はこの手紙を自分で稻田のところに持つて行つて見せて、今日の事件を彼に話して聞かせて、そしてそれが彼にどんな影響を及ぼすか見たいと思つた。

第二部　天鵞絨の貴公子

一

眞紗美は、昨日の料亭で、野上草人にすすめられて書いた稻田絲樹に宛てた絶交の手紙を、ためつすかしつ眺めて、この手紙を持つて行つて、稻田に見せようか、それとも手紙で送つて見ようかと考へたが、彼女の心には、絲樹に絶交する氣持のないのは勿論、反つてもつと稻田に親しんで行きたい位なので、かうした絶交の手紙も、一層彼と接近するために利用出來ると思つて、彼女はひとりでクスクス笑つてゐたが、さて愈々それを稻田の家に持つて行つて見せる段になると、何だかあまり露骨なやうで、やはり手紙で言つてやつた方が無事なやうに思はれた。

いい考への浮んだ彼女は、につこりとして、その絶交の手紙を一思ひにもみくちやにしてから、美しいレタアペエパアを取り出して、それに筆を走らせた。その手紙の中で、彼女はこの間お話をした或る人が、昨日わたしを誘つてくれまして、斷わり切れないで、中野の方に遊びに行つた事、その時彼がさんざんに先生の惡口を言つて、おまけにわたしがお宅に伺つてゐると、御家庭の平和を亂すから、今後一切行かないやうにしたがいいと言つて、無理やりに絶交狀を書かせた事、けれども自分はいくら先生の惡口を聞いても、一つもそれを信じないし、奥様のお氣持もよく存じてをりますし、絶交なんて飛んでもない事ですから、その書かせられたものは、もみくちやにして捨ててしまつた事、かういふ事を綿々と書きつらねて、その終りに、二三日のうちにわたくしの家にお二人で遊びに來てくれるやうにといふ事も書き加へた。

この手紙を書きをへると、彼女はまたもう一つの手紙を書き出した。

「昨日はほんとに愉快でございました、でも宮子さんがいらつしやらなかつたので、ほんとに宮子さんをも招いて、三人で樂しく遊びませう。さうでないと、宮子さんにわるいのですもの」

短かい文句のうちに、謎のやうな感情をほの見せた手紙を野上草人に宛てて書いた彼女は、二つの手紙を入れ間違つたら大變だと云つたやうに、細心に注意しながら二つの封筒に收めて、君江を呼んで、それをすぐポストに入れに行かせた。

手紙を書くことが非常に好きで、毎日何通も手紙を書く彼女ではあるが、この二通の手紙ほど興味のあるものはこれ迄になかつた。どんな返事が兩方から來るだらうと思つて待つてゐると、その手紙と入れ違ひに野上草人から非常に厚い封書が屆いた。開けて見ると、それには昨日の事がこまごまと囘想的に書かれてゐて、あの際私の言つた事は毛頭僞りではない事、どんなにあなたを思つてゐるか、この胸を割つて見せてあげたい。若しこの心をあなたが受け容れてくれないなら、私は生きてゐる瀬もない事、何の望みも失せてしまつて、やけになるか、自殺するか、アメリカへでも行つてしまふか、その三つの一つを選ぶより外はない事、こんな事を巧みに書きつらねてあるので、小首を傾けてそれを讀んでゐた眞紗美は、自分がそれほど思つてゐない男ではあるが、こんなに春戀の情を寄せられてゐるのを思ふと、何とも言へず誇らはしく、樂しく思はれるのだが、同時に、皮肉な揉つたいやうな心も持ち上つて來て、

「だけど、何て古臭い文句だらう、何だか此前讀んだあの人の飜譯小說の中の文句とそつくりだわ、あれの透きうつしかも知れないわ、こんな言葉にわたしが迷ふと思つてゐるのかしら、宮子さんなら隨分喜ぶかも知れないけれども、わたしはこんなキザな人は大嫌ひだわ」と彼女は呟いた。

彼女は野上から來た手紙をくるくると卷きながら、いつも自分が藏つてゐる祕藏の手紙を見たがつてゐる從兄の亮

一に、この手紙を見せてやらうと思ひ付いた。この思ひ付きは、彼女を大變愉快にさせた。
紅鼻緖の低くなつた表付きを輕く爪先きに突つかけた彼女は、上機嫌で家を出て、本邸の石の門の中に入つて行くと、門內には一臺の自動車がとまつてゐて、その傍らに屈んで車輪をしらべてゐた若い運轉手が、ヒョイと顏を擧げて、此方をジロジロ見るのを尻眼にかけながら、庭をずつと廻つて、裏庭の方に窓も入口も向いてゐる狹い離れに近よつて行つた。そこは亮一の書齋兼寢室になつてゐて、彼女がいつも退屈すると入り込むところなのである。
「亮さん、ゐるの？」
「アア、ゐるよ」と部屋の中から亮一の返事がした。
亮一は慶應の理財科に行つてゐるのだが、あまり勉强家でない彼は、月の半分位は休んでゐた。殊に此頃は、大切な病人があるため、家中が混雜してゐるのをいい事にして、こつそり自分の部屋に引つ籠つて、コナン・ドイルやルブランの探偵小說を讀んだり、繪の具をいぢつたりしてゐた。
「すてきな手紙がわたしのところに舞ひ込んで來たから、見せて上げませうよ」
眞紗美はかう言つて、亮一の机の傍らにすわり込んで、持つて來た手紙を彼の机の上に置いた。
「ホウ、これはまた新しい名前ぢやないか、何處の學生？」
「學生ぢやないのよ、そんな子供ぢやないのよ」
「子供とは恐れ入つたナ、子供でなければ、それぢや何なの？」
「この人は大した人なのよ、女優の竹川照子といふのを知つてるでせう、ソラ、あの松井須磨子と同期生で、いつも老け役になつてゐた年とつた女優だわ、その人と共同生活をしてゐる青年文士よ、野上草人つて、ソラ、この間『山の少女』つて云ふ飜譯小說を出したあの人よ」

「そんな文士があつたかね？　一體どんな處で知り合ひになつたんだね、こんな手紙をよこすところを見ると、もう餘程交渉はすすんでゐるらしいナ、油斷も何も出來やしない」

眞紗美はにこにこと笑ひながら、机のはしに頰杖を突いて、亮一の顔をなぐさむやうに見ながら、

「油斷も何も出來ないのは、亮一さんの方ぢやないの、わたしのこれは亮さんとは違ふのよ。まあ讀んで御覽なさい、あなたが誰れかにやる手紙の參考になるわ、そりや名文よ」

「それぢや一つ讀んで參考にしようか、どういふ殺し文句があるか見てやらう」と言つて、亮一はその封筒の中から、原稿紙にこまかく書いた手紙を取出して、熱心に讀みはじめたが、急に顔を擧げて、硬い目付で眞紗美を見て、「なんだ、もう一緒に中野なんかに行つてるんだね、安つぽい戀だナ……」と言つて、なほ讀んで行つたが肝腎のところにくると、

「こりや堪らない！　あなたを得られなければ自殺するといふんだ……馬鹿々々しい、こんな文句は、『面白倶樂部』や『人情世界』の小說には片つぱしからあるよ。うまい事はうまいが、一體にバタ臭くつて、おまけに古臭い、古くなつたバタは堪らないよ。これでも文士のラヴレタアかね、こんなものが僕等現代の青年の參考になつてたまるものか……」

「わたしもさう思ふのよ」と眞紗美が調子を合せた、「こんな手紙でわたしがまゐつてしまふと思つたのかしら、もつと苦味のある人かと思つたら、案外甘いので、わたしうんざりしちやつた、この人にはもうグッドバイにするわ」

「それがいい、それがいい」と亮一が言つた、「こんな男なんかに下らないかかり合ひなんかつけないで、君は此頃祖父さんがあんなに行かせたがつてゐる、あの本郷の病院の院長さんと結婚するがいいよ。何でも四十五と云ふんだから、こんな良緣はないよ、君を啻めて啻めまはすに違ひないからナ。そして君が病氣になつたら、遺憾なく診察して、

一番利目のある薬を盛つてくれるにきまつてるよ、こんな幸福が世の中にあると思ひますか、恐らくあるまい」
「馬鹿ね、亮さんは……」と眞紗美は少し紅くなつた顔をして亮一を睨んだ、「入院と結婚とを同一に論じちや駄目だわ、わたしそんな年よりの院長なんかと結婚する位なら、とつくに亮さんと結婚してゐるわ」
「僕のことはもうよしてくれ給へ、僕はもうちやんと候補者はきめてゐるんだからね」
「おあひにく樣、君江とは身分違ひで駄目だわ」
「戀に身分も糸瓜もあるものか……だが、僕の候補者といふのは君江ぢやないよ、もつと遠いところにあるんだ、……僕の候補者は藝者なんだ、それも今どうかう云ふのぢやない、僕が社會に出て、押しも押されもしない地位を占めたら、ウンと遊ぶんだ、そしてそのうちに氣に入つた藝者があつたらそれを落籍して妻にする、それが僕の理想さ。だが、それ迄はおとなしく勉强するのだ、……」
「さうしてそれはいい考へね、前途有望だわ」と眞紗美がまぜつかへした。
亮一はそれを取り上げないで、
「然しいづれにしても、僕は男だから、間違つたところで大した事はないが、眞紗美さんは氣を付けなくちやいけないぜ、あまり調に乘つた下らない冒險なんかしてゐると、飛んでもない事になるからね……僕は君が幸福になつてくれるやうにと、本當に思つてゐるんだから、君が僕との結婚を厭がつたのも成程と了解した位なんだから、今君が變な男と妙な事にでもなると、僕は二重にも三重にも苦痛なわけだから、……」
「ええ、有難う……」と眞紗美は聲を落して言つた。半ば冗談のやうに言はれた言葉の中にも、親身の思ひやりを感じて、彼女は何だか目がうるむやうな氣がした、「大丈夫よ、わたしはそんなに弱くはないんですよ。今に若くつて美しくつてやさしい、いい人を見付けて、あなたにも喜んで貰へるやうになるつもりだわ……」

「さうかね、何だか危ッかしいナ……兎に角、君がその理想のハズバンドを見付けた時には、僕にも紹介して貰ひたいね。僕がその人物を見てあげる、僕はこれでなかなか人間を見る眼はあると自信してゐるんだ」
「ぢや、頼むわ」と眞紗美は言つたが、急にまた持前の輕い戲れの氣分になつて、「わたしばかりぢやない、君江のハズもあなたが見立ててやつて頂戴、それこそわたしより十層倍も大切ぢやないこと」
「言ふ迄もない」と亮一も負けないで言つた、「僕は彼女を可憐に思つてゐるからね、彼女の幸福のためには大いにつくすつもりだ、」
一時間ばかりかうした無駄話をしたり、茶の間へ行つて母親に祖父の病狀を訊いたりしてから、彼女は家へ歸つた。
その翌日の晝頃、
「お孃樣、お手紙がまゐりました」と言つて君江が彼女の部屋へ入つて來た。
「稻田さんからだらう？」
「左樣のやうでございます」
眞紗美は稻田綠樹が何と言つて來たか、それを見るのが、大變樂しみに思はれて、その西洋封筒に入つた手紙を君江の手から受取つて見ると、その文字は綠樹の筆蹟ではなくて、彼の細君の文字であつた。輕い失望が眞紗美の心を掠めた。
「大澤さん、お手紙拜見しました、詳しくお話し下すつたので、あなたの仰しやる或る人といふのが、誰れであるかはつきりとわかりました。その或る人といふのは、野上草人氏なのだと私達は知りました。野上氏ならば、友達の事をあしざまに仰しやるかも知れません、あの人が親しい友人を傷つける事によつて、自分の誇りを滿足させようとするところのある事は、稻田も大分前から氣が付いてゐると言つてゐます。稻田にして見れば、最初あなたがお出でに

なつた時から、大變いい印象を受けたので、出來る事ならば、歌の上のいいお友達になつて、出來るだけの事はいたしたいと言つてゐるのですけれども、野上さんの言葉によつて、あなたが私達に信頼をもてないといふのでしたら、それも致し方はないと申してゐます。

これ迄は稻田の言葉ですが、私として考へれば、野上さんがあなたを愛すると仰しやつたところで、まだ處女の身であるあなたが、年とつた女の人と同棲してゐる、かたり放縱で評判な人と先き先き、どんな道筋を取つて、どんな結果をかもすかといふ事を想像すると、第三者である私として、立入つた事は申せませんけれど、出來る事ならあまり深入りなさらない方があなたの爲めにはおよろしいと思ひます。私は野上さんに對して何の恩怨もないのですから、あの方の目論見の邪魔をするのはいやなのですけれども、若しあなたがおやめになれるやうでしたら、出來るだけ早くおやめになつた方がいいのぢやありますまいか。

男のお友達とお附合ひになるのを一概にわるいとは思ひませんが、それには餘程相手の人物をよく見てからでないと、とんでもない事になりますから、どうしても、野上さんのやうな評判のわるい方でなしに、もつと眞面目で、獨り身で、しつかりした方と御知り合ひにおなりになつた方がおよろしいでせう。

二三日前、齋藤守之助といふ洋畫家が訊ねて來た時のお話に、その人の友人で、昨年歐洲から歸つて來たばかりの人で、生物學を研究してゐて、今西ヶ原の××研究所に勤めてゐる靑年紳士が、今度滯歐中の歌を集めて、大變贅澤な羊の皮の裝釘にして出したいので、序文を書いてやつてくれるようにといふ事でありましたが、今ひとつ、その人が今丁度、先き先きで結婚が出來ればするといふ風な考へで、文學の方に趣味をもつた若い女の方と知り合ひになりたがつてゐるから、もしお宅へ來る人で、さういふ人があつたなら紹介してくれないかといふ話でありましたから、その人に會つて見て、稻田なり私なりがその人柄を見た上で、いいと思へたら、一度會つて御覽になりませんか。深

い事はお考へにならないで、ただ一度會つて珍らしい話を聞くといふ位な事に考へて、お會ひになる分には別にお差支もないだらうと思ひます。」

大分氣をつかつて書いたらしいこの長い手紙を讀み終つた眞紗美は、その後半に書かれた事が、思ひもよらない事だつたので、一二度くり返して讀んで、歐洲から歸つて來た……生物學の研究……羊の皮の贅澤な歌集……といつたやうな事が、その頭に燒き付けられたやうになつて、どんな人であらうか、いづれにしても一度會つて見たい、一度話して見たいと思はずにはゐられなかつた。

これ迄彼女は理想の戀人といふ事を隨分考へてゐたが、かういふ立派な條件を具へて、その上その人が美男子で、獨身で、結婚の出來る境遇の人で、自分のどんな我儘でも、病身な事でも問題にしない人であり得たなら、それこそ理想の戀人で、そんな幸福な事はないと、彼女は思はずにはゐられなかつた。

つい自分の傍に、そんな完全な條件を具へた人が現れた事をおもふと、彼女にはもはや、宮子に對する一時の氣まぐれな對抗心にすぎない野上草人のことや、かの影山女史が紹介しようとしてゐる石川俊夫などのことは、もとより問題ではなかつた。

何とはなしに浮き浮きした氣持になつた眞紗美は、すぐレタアペエパアをとり出して、稻田磯子宛に返事を書いた、

「奥樣、御心配かけてすみません、御親切のほどよくわかりました。Nの事はわたしは初めから少しも惹かれてゐるのではないのです。面倒臭いのですから、今日私は彼に手紙を書いて、北海道に旅立つとこの秋までは歸つて來ないと申してやつて、それを絶交狀にするつもりです。生物學をなさるといふ人の事は、わたしには何の異存もございませんから、若しいいとお考へになりましたら、御紹介下すつて。差支ございません。結婚などいふ事を考へるのはいやですから、さうでなしに、お目にかかるのがいいと思ひます」

から書き終へて、そのレタアペエパアを、彼女はもう一度讀み返して見た。

稻田綠樹は、野上草人が眞紗美を誘惑しようとして、そのために自分を利用して、眞紗美にすがつて自分の事をいろいろ惡しざまに言つたあげく、眞紗美に自分に對する絶交狀を書かせようとしたといふ事を考へると、不愉快でもあり、馬鹿々々しい氣持でもあつた。

二

彼は野上とはまだ二年位の交際に過ぎなかつたが、はじめ野上の人を逸らさぬ柔かな手ざはりのいい交際振りに引き込まれて、ある友人が野上は毒のある男だからあまり深入りしないやうにと忠告したのにも拘はらず、いつか隨分立入つた友人附き合ひをしてゐたのであるが、そのうちにだんだん彼の本能的に有つてゐる惡意の刺を感ずるやうになり、殊に彼が極端に嫉妬深い性格をもつてゐて、その友人の仕事や戀愛の上での幸福を我慢が出來ないで、どうかしてケチをつけようとする策略を見せつけられては、自分よりも舊い友達が彼の周圍に一人もない事も無理がないと思つて、だんだんに彼から遠ざからうと思つてゐた矢先であるから、彼が今眞紗美に對してさうした態度に出たのも、さして意外には思はなかつた代り、愈々野上に絶交する機會が來た事と思つたのである。野上が眞紗美を誘惑しようとしたのは、「どうかして今年中に處女を二三人手に入れて見たいなど」と事もなげに言つてゐる彼としては、うまく機會を捉へたものであつたらうが、それよりも彼女が自分の家に來るといふ事が彼の氣に入らないので、それを邪魔しようといふ腹なのは確かであると彼には思はれたのである。

然し、さうかと言つて、綠樹は自分も野上が自分に對して取つたのと同じやうな態度を取つて、野上の弱點を眞紗美に言つて、彼女を警告して、野上から引離さうといふ氣持はなかつた。彼はもともと弟子など取るやうな事は嫌や

であつたが、かうなつてみると仕方がなくもあつたし、また今では眞紗美に對して、一種の興味は有つようにはなつてゐるので、丁度まだ誰れも手に觸れた事のない初咲きの花を見るやうに彼女を眺めて、その幸福を祈つてやりたいやうな氣持であつて、それは勿論戀などと名づけられるべきものではなかつた。

野上が絲樹について眞紗美に話した事は、全然の虛構ではなかつた。彼が自分の家に出入してゐた若い女に心を惹かれて面倒な事件が生じた大筋だけは事實であつたが、それはその女が絲樹の先輩に當る或る文學者に誘惑されて棄てられて、自分の處にすがつて來たので、それに同情したあまり、同情から戀になつたのであつたが、眞紗美の場合はそれとは違つて、まだ純潔な處女でもあり、絲樹としては自分の過去の愚かさと過失とを後悔してゐる場合なので、今眞紗美に對してどうと云ふ事は、彼として考へも出來ない事ではあつたが、然し、彼女が野上草人の一時の享樂に委せられる事は堪へ難かつた。

眞紗美が野上と交渉を持つ事をあやぶむのは、細君の磯子とても同樣であつた。彼女は眞紗美が最近野上とは絕交すると言つてはゐるけれど、寂しさのあまり、またどういふ事から野上に接近しないとも限らないと懸念してゐたのである。そこへ丁度齋藤守之助が來て、洋行歸りのその友人の事をいろいろ吹聽して、若い女を紹介してやつてくれないかと賴んで歸つたので、磯子はすつかり乘氣になつて、その靑年にあつて見て、その人柄を見た上で、眞紗美を紹介したならば、たとへ結婚といふ事を條件の中に入れないとしても、その二人の交際は野上草人と彼との交際よりも、ずつと彼女にとつて興味もあり、いい事でもあるであらうし、その上自分達の感情の上からも、ずつとその方が氣持のいい事であるからと言つて、絲樹の贊成を求めたのであつた。磯子としては、以前の例もある事であるから、良人がまだどんな事から眞紗美に心を動かされないものでもないといふ懸念もあつたので、此際どちらから言つても、眞紗美にその人を紹介するのはいい事だと思つたのである。絲樹も野上に對する行きがかりの氣持も働いて、磯子の

言葉に、輕卒に賛成はしないまでも、それも強ひて止めたいほどの心持にはならなかつた。
齋藤守之助の名刺をもつて、中條輝が、綠樹の家をたづねて來たのは、それから三日とはたたない日の晝過ぎであつた。磯子が買物にと門を出ようとしてゐると、紫紺色の天鵞絨の服に、絹のネクタイを胸のところにピラピラさせた、見たところ瀟洒な、色の淺黑い、面長な、すらりとした靑年が、こちらに近づいて來たので、此の人なのだと思つて、立止まるともなく磯子が足をゆるめると、その靑年は、黑のラシヤの帽子をその手に取りながら、その細い眼に、笑みをたたへて、
「稻田さんは御在宅ですか」と訊いた。
「在宅ではございますが……」といひながら磯子は、家の方へと引返して行きながら、どこか物靜かなそのものごしに好感を感じながら、
「どなた樣でいらつしやいますか」
と訊いて見た。その男は、ポケットから、齋藤守之助の名刺を取出して、それを磯子に渡して、
「僕はかういふ者です、一寸お願ひ申したい事があつて、齋藤に紹介してもらつたのですが、……齋藤が、既にお伺ひしてお話しておいてくれたと申しますが、……」
と、妙に口の中へ語尾をのみこんでぼかして了ふやうな、舌の廻らぬやうにも取れる、ポツポツした言ひ方でのべるのが、こんな用事で訪問して來たのが間がわるくて、はづかしいやうな氣がするといつた風にも取られた。
「一寸お待ち下さい」
磯子はかういつておいてから、綠樹の部屋に入つて、今丁度、こみいつた原稿をかいてゐる綠樹の机の上に、名刺をおいて、

「齋藤さんが此間話して行つた方ですよ」と言つて、磯子は、にこにこしながら、
「物靜かな上品さうな人ですわ」と附け足した。その妙にはづんでゐるやうな樣子を、絲樹は一寸皮肉な目で見た。
中條輝は、絲樹の部屋に入つて一通り挨拶がすむと、
「お忙しいところへお邪魔でせうが……」と遠慮深い人らしく氣をかねたやうにいつた。
「いやなに……」と絲樹が、輕く返事をして、それきり默つて了ふと、中條はポケットから、葉卷を二本その細長い指でつまみ出して、それを机の上において、その一本を絲樹にすすめてあとの一つにマッチの火を點じながら、
「この頃は何をお書きになつてゐます」と話の絲口を引き出さうとした。
磯子がお茶の用意をして部屋に入つて來た時分には、主人も來客も、もう餘程打ちとけた調子で、輝の專門の生物學の方に話が向いてゐた。
「人間の肉體には、實に靈妙な力があります、かういふ話があります……」と輝は話しつづけた。「普通の肥料と、人間の死體とを別々において、その中間といふよりも、ずつと、肥料の方に近いところに、何かの植物を植ゑると、その根がすつかり、人間の死體の方に向いて盛んにのびて來るのです。かういふ現象によつて、人間の肉體は、死んで了つてからも、一種の力をもつてゐるといふ事が分るので、今一層、研究がすすめば、隨分面白い事が發見出來ませう……」
絲樹が興味深さうにきいてゐるのを見た輝は、少し語調を改めて、
「ひとつ、生物學の方を、お研究になつてはどうでせう、隨分面白い事がありますよ。空想ではとても思ひもおよばないやうな宇宙の微妙な諸現象の上に、生きた詩を見出す事は容易ですよ。この間も、芥川龍之介氏が、『中央公論』に、蜘蛛の事を小說に書いて、それが珍らしいと云つて大分評判がいいので、私もよんで見ましたが、生物學の方か

ら見ると、まるで平凡なつまらない事でした。生物學の本を二三册もよめば、もつと人を驚かすやうな、面白い小說が書けますよ。芥川氏のあの蜘蛛の知識などは、實に、初歩のものですよ。私は伊太利の生物學研究所にゐた時、やはり蜘蛛の研究に熱中して、隨分いろんな蜘蛛を採集しては、いろんな研究をして見たものですが、蜘蛛の研究では、やはりアンリ・ファブルでせうね。ファブルのものを何かお讀みになりましたか？」

と輝は綠樹に訊いた。

「いつだつたか飜譯で一寸見ましたが、なかなか面白いやうですね」と綠樹が答へた。

「アア、さうですか、あの『蜘蛛の生活』といふ本ですか」と言つて輝は一寸默つたが、「あの飜譯はほんの抜萃で、それに非常に不完全なものですよ。何しろファブルの完全な稿本と云つては、今紐育の圖書館にあるものきりですから、……此前の『改造』に賀川豐彥氏がそれについて紹介してありましたが、あの紹介なども非常に杜撰で、間違ひだらけなんです。私はあまりひどいと思つたから、あれについて、少し攻撃を書かうと思つてるんですが、然し人を攻撃するといふのはどんなものでせうか、殊に賀川氏は今文壇の人氣役者ですから、そんな事するのは善くないでせうね？」

と言つて、輝は綠樹の意見を俟つもののやうに彼の顏を見つめた。

「さア、人氣のある人だから非難してはならないと云ふ譯もないでせうが……」と綠樹はどつちつかずの事を言つた。

「さうですか、でも、皆ひどくえらいと思つてるのですからね……」と言つて輝は、また一寸默つたが、「然し、そんな事をするより、やはり自分の研究に沒頭してゐた方が結局いいのでせうね」と言つて、話題をもとへ戻した、「蜘蛛の中でも一番興味のあるのはタランタラ蜘蛛といふやつです。タランタラ蜘蛛は、御存知でもありませうが蜘蛛の中でも一番毒のはげしいやつで、これに一寸でもかまれると、その嚙まれた部分を切り落さなければ、一命にもかかるので、一番おそるべき蜘蛛で、取扱の上からもかなり骨が折れます、ごく小さい蜘蛛なのですが……もし興味がおあ

りでしたら今度、持つて來てさし上げませう」

からいつて彼は、なかなか座を立たないで彼の話を傾聽してゐる磯子を見て、につこりと笑つて、「ナニ、罎に入れてさしあげますから、こはい事はありません。机の上においておかれるといいでせう。もしにげ出して、かまれても、私におしらせ下されば、解毒劑をさし上げます。今度持つて來てさし上げませう」と彼は、磯子の當惑した樣子をも氣に止めぬやうに眞面目な顏をして言つた。綠樹は二人の顏を見くらべて、一寸微笑を洩らしたが、中條のそんな申出を一寸奇異に思ふやうな樣子で、

「いや、それは頂く事を止しにしませう、夜分にその蜘蛛が、はひ出して來て、蒲團の中へでも入つてくると、一寸物騷ですから……」

「いや、かたく栓をしときますと這出す心配はありません、それにごらんになつて、もし不氣味でしたらおもどし下さるなり、また、誰れか御友人におあげになるなりなすつていいでせう」

「そんな蜘蛛をあげると、もらつた友達はみな閉口して了ひますわ。そして、よく探偵小說にあるやうに、それが犯罪的興味をよび起したりしては大變ですわ」

と磯子がいふと、輝も、少し笑つたが、

「然し、とにかく、この次にはもつて來てお目にかけませう」となかなかそのタランタラ蜘蛛を撤回しなかつた。

「瑞西から私は伊太利の方へ行つたのですが、」と輝は、やがて話題を新しい方向にもつていつた、その樣子には、もの慣れぬやうな中に、妙に人をそらさぬ上手なところがあつた。「羅馬の研究所では、研究の方でもいい收穫をしましたが、もつといい記念も得たのです。私はその研究所の番人の家に止宿してゐましたが、番人の娘に、リナといふ娘がありまして、この娘が年が若いのに、なかなか詩の天才がありまして、伊太利語でいろいろと書いて私に見せてく

れましたが、私も覺えたばかりの伊太利語で、ソネットを作つて、彼女に見せたりしてゐるうち、すつかり詩人になつてしまつて、樂しい一年あまりの月日を、異境を異境とも思はずに暮したので、今度歸朝しても、そのリナの寂しい心を思ひ、また伊太利の日、羅馬の旅舍の日を思ひ出して見ると、私も、これをこのままにしておきがたい感情となるので、今度、あちらで出來た詩に、二十歳までの歌と、それにリナの別れの詩を、私の譯したものとで、都合、三十頁位のものを、全部羊の皮に金で印刷して、リナにもおくり、知友にもわかちたいのです。それで、その詩と歌とを、一度あなたに見ていただいて、文法上のあやまりや、意味のあいまいなところなどを指摘していただきたいのです。御めいわくでせうが一つねがひます」

と、輝は聲をあらためていつた。

「出版費は三千圓と見てゐるのです。金は何でもありませんから一つ感じのいいぜいたくなものとしたい考へです。齋藤君などは、私に、あまり出版費を高くみつもりすぎる、表紙だけ、羊の皮にすればいい、全部羊の皮は、贅澤すぎて却つて、人の反感を買ふからといふのですが、僕は、何も、職業として、詩集を出すのぢやないので、僕の甘美な靑春の記念として、リナへの贈物として出すのですから、最大の贅澤をしてもいいと考へてゐるのです。で、その詩集を、僕のこれまでの生活の記念碑として、これから日本での新生活の第一步を、淸くふみ出したい考へです。齋藤君は、僕のこの考へを少しも知りませんから、單純に、僕の經濟觀念の缺乏を笑つていけません」

「詩は結局自分だけにとつては絕對のものなのだから、詩集を出す以上、自分の好み通りのものにする事が出來るなら、それに越した事はないでせう。ところで、僕が見せて頂いたところで、どうといふ事もないでせうが、拜見させて頂くだけならば、拜見させていただいてもいいのです」と綠樹は、あまり氣乘りのしないやうな言ひ方をして、得意さうな輝の天鵞絨の服を見たのである。こんな暢氣な服裝をして、瑞西、伊太利の旅の思ひ出を歌つて、ほしいまま

に生を樂しまうとしてゐるこの若い男が、彼には、空想の中の人物のやうに思はれると共に、何だか親しみのないストレンジアのやうな氣がするのだ。綠樹は物質的に優越な人から友誼の好意を惠まれて喜ぶやうな性の詩人ではなかつたのである。

輝は、なほも調子づいて、今自分は、田端にある××生物學研究所で、空氣中の窒素から食料品をとる事を實驗中で、今度の自分の研究は、十中八九まで成功する自信があるので、ここ一二ヶ月の中に、その結果が判然として、愈愈確實に成功したとすれば、これは日本の學界の驚異にもなり得る事、既にこの新發見の大體は英文で書いてあるので、最後の一點さへ判明すれば直ちにその學位論文を伊太利に送るつもりだから、この暁には勿論學位も得られ、從つて日本でしつかりした地位をも占め得ることと、そんなになれば、益々藝術にもつくしてゆかうと考へてゐるといふやうな事を話してから、この次には、詩をもつてくるからといつて辭して行つた。

中條輝が歸つて行つたあとで、綠樹は少々煙に卷かれた樣子で、暫くぼんやりしてゐたが、彼は齋藤によつて二十三と傳へられてゐるこの若い男のいろんな話に、一種の驚異と共に異樣の感を抱くを禁じ得ず、その話をいくらか割引して聞かなければならぬやうに思つたが、彼の優越を支持する條件となつてゐる大體の事實については、疑つて見る氣持にまではならなかつたのである。磯子の方では、直ぐ眞紗美にあてて手紙を書いた。それには、今訪ねて來た中條輝といふ人が、眞面目な人である事、いろいろと興味のある話材を豐富にもつてゐる人である事、伊太利での旅の詩をこの次持つて來るといつた事、色は淺黑いけれども、どことなく清新な感じのする、美しい人である事をのべて、

「稻田が、初對面の人に、あんなに、親密に話し合つた事は、まれなのです。その話題は稻田にも私にもいい印象をのこしました。くはしい事は分りませんが、一瞥したところ、趣味の豐かな、人格のあるいい靑年に見えます。あな

たが、もしお差支がありませんでしたら、この次の機會にあなたも同座して、面白い話をきかうではありませんか」と書いておくつた。
この手紙をおくつたあとで、磯子は綠樹にそのことを話し、同じ日に、二人を、自分の家に招いて見る事にしませうと言つた。
「二人が知り合ひになれば、それからは二人のしたいやうにする事でせうから、はじめだけは、かうしませうよ」
「然し、そのため、いやな事が出來ると皆にわるいから、あまり立入つた紹介はしない方がいいよ。そんな事はいい結果を生ずる事は少いのだからね」
「それもさうでせうけれど、別に、媒介するといふのではないのですもの。問題が、結婚といふ事になれば、又別ですもの。二人が交際する位の事は、二人にとつて、そんなにわるいとは思へませんわ、私は大丈夫と思ひますわ」
と磯子は、氣のりがしてならないやうに、一寸その考へを飜へしさうにも見えないので、こんな場合いつもさうであるやうに、綠樹もだまつて了つた。

三

磯子は中條輝のその日に來るといふ返事と殆んど同時に、眞紗美からも承諾の手紙が來たので、（不思議にも二人は同じ四谷の同じ××町であつた）その會合の日の來るのを待ちかねた。
彼女は眞紗美の開けつ放しな、サワサワした性格から、いい印象を受けてゐるので、彼女が時折洩らす自分の物質的に惠まれた境遇を誇るやうな言葉に、折々反感を起す事もないではないが、彼女のやうな華やかな娘が自分達の寂しい生活の中に、匂やかな紅薔薇のやうに一點の紅を點じてくれる事を喜ぶ氣持もあるので、たとへ自分の良人が

彼女の若さや生々しさにいくらか心を惹かれてゐる事を感じてゐても、よくよくの事でない限り、どんな娘が自分の良人に親しんで來ても問題にはしたくないといふ誇りをもつてゐる。野上が言つたやうに、そのためどうかういふ事もなかつたのだが、ただ彼女は、眞紗美が野上草人のところから自分達の方へ歸つて來た事を喜ぶにつけても、この上彼女との交際を末長く美しく續けるためには、また彼女が野上と疎隔した事によつて、一倍自分の良人の方にその感情をもつてくる萬一の危險を豫防する上からも此際中條と知合にさせるのが、どちらから云つてもいいと思つたのである。

そんな風に自分でちやんと定めてしまつた彼女は、その後も絲樹が、

「こんな事はなかなかうまくゆくものではない、反つて飛んでもない結果を招く場合が多いから、も少し愼重な態度をとつたらどうかね。それに中條といふ人も、どんな人物かまだ十分には分つてゐないのだから……」といくらか不安さうに注意したときも、

「だつて、齋藤さんが紹介した人ですもの、大丈夫ですよ。そんな風にあなたが言ふと、あなたが眞紗美さんを後生大事にしまつて置きたいやうで可笑しいわ」と言ひ返したので、絲樹も苦笑してそれつきり何とも言はなくなつた。

「どうぞ、今日の會合がいい結果をもたらしてくれるやうに……」

と磯子は、その日の朝、鉢にさす草花や、美しい菓子や、水菓子などを、市へ出て、買ひととのへながらも屢々心に祈つたのである。眞紗美と、中條輝とが、互に、見知り合ひ、互に理解し合ひ、それから二人の禮儀正しい、淸い美しい交際がはじまる……二ケ月、三ケ月の後に、互ひの愛情と、尊敬とが、互ひの心の告白となる……身分の調査、親達の許可、そして形式的なことはどこまでもさけた感じのいい結婚の式……二人がどこか靜かな郊外にでも文化的な新生活をはじめる……そこにはつねに美しい笑聲がわく……若い二人が、笑ひかつ抱く……およそ、かうした幸福

な美しいシイン――磯子はこれ以上正しい事、美しい事は、又とあり得ないやうな氣がするのである。善良で、物事を明るくばかり考へる性癖の磯子は、まるで自分の事ででもあるやうに、心がワクワクするのである。

十時頃に、玄關に近づいてくる靴の音がしたので、磯子が急いで出て行つて見ると、この間と同じく紫紺色の天鵞絨の服に、絹のネクタイを、ピラピラさせて、その細い眼に微笑をふくんで、中條輝が左の肩を少しく持ち上げてゐるやうな特徴のある姿でそこに立つてゐた。

「少し早すぎるのかと思ひましたが……」と彼は云つて、手にもつてゐる、紫の縮緬の包を式臺においてから、赤靴の編み上げの紐をゆつくりとときはじめた。

輝の淺黑い顏は水白粉でもつけてゐるのではないかと思はれるほど、此日は艶やかに見え、漆黑の髮は櫛目正しくかき分けられて、手のうごく度に、香水のにほひが漂つた。その樣子にはいかにも今日、若い娘が、自分を見るのだからと用意してゐるやうなところが、ありありと見える。それが磯子にはにやけてゐるどころか、反つて品よく嗜み深く見えて、野上草人などとは遙かに立勝つたこの上品な靑年が、眞紗美の氣に入らぬ筈はないと思はずにはゐられなかつた。

中條輝が書齋に通ると、身のまはりの原稿や書物などを片寄せてゐた稻田は、顏を擧げて、

「さア、どうぞ……」と言ひながら、挨拶する輝の頭から顏からを物珍らしさうに眺めた。彼は磯子とは違つて、もつと複雜な感情をもつてゐるやうに、いくらか皮肉な、批評的な眼付をしてゐた。輝はポケットから今日は金口のナイルを出して、稻田に

「いかがです」とすすめたが、ふつと相手の顏を見ると、

「アアあのタランタラ蜘蛛ですがね、今日持つて來ようと思つたんですが、私はあれから研究所を休んでゐたもので

すから、まだ取つて來てありませんが、明日あたり小使にお屆けさせませう……鑢だけ今持つて來ときました」と言ひながら傍らの包をひらいて、中から部の厚い硝子のかなり大きい鑢を取出して机の上に置いた。絲樹はその極く平凡な鑢を一寸見て、

「さうですか、いや蜘蛛の方は結構です、鑢だけの方が安全ですから……」と珍らしく冗談らしい調子で言つた。輝は口の兩端だけ開けるやうな笑ひ方をして、

「一寸お目にかけさへすればいいのですが……」と輝はあやふやに言ひながら、續いてその包の中からココアの罐を出して、

「おくさん、このココアは、二三日前亞米利加から、僕等の研究所へ送つて來たものです。ココアの事ですから、別段どうといつて、變つてはゐませんが、のんで見て下さい」

と言つて、その次に、十枚位の繪葉書を出し、その中の一枚を手にとつて、稻田にその畫面の一點を指して見せながら、「この赤い瓦の建物が、僕のゐた瑞西の生物學研究所です。伊太利もよかつたのですが、瑞西もほんとにいい土地です。一體が高山地方ですから、生物學研究には持つてこいなのです。そして、この山裾の湖水に、夕方、ボオトを浮べて遊んだりした事は、私の一生のたのしい思ひ出です。是非もう一度行つて見るつもりですが、齋藤も其時は、ぜひ、僕もつれて行つてくれ、と懇望するので、連れて行かうとは思つてゐますが、あの男も、もつと畫家としての天分があるといいんですがね……問題でないから、」と言ひながら、その山岳と湖水と赤い瓦の建物と、水際の草と、ボオトと、湖上の夕陽との鮮かな繪葉書を礒子にも見せ、それから中條は暫く齋藤の噂をして、彼が頻りに金を貸してくれと云ふので、いくらか宛貸してはゐるけれど、少しうるさくなつてゐる事を話して、

「あの男に天分さへあれば金は問題でないんですから、いくらでもパトロンになつてやるんですが……」などと言つ

たあとで、

「一つ僕の詩を見て下さい。持つて來ましたから」

かういつて彼は、二十枚位の半ピラの大型の厚い原稿紙の綴りを出して、綠樹の手に渡した。綠樹はヒョイと眼鏡を正してから、默つてそれを讀んで行くと、それはまるで小さな子供が歩いてゐるやうな、ひよろひよろしたその文字とほぼ同樣の感じのする、稚拙な中に何處か變つた面白味のある、極く短い詩章である。

（たあいもない噴水の夢、生溫い水の上に春の陽が浮んでゐる、黑い水蟲のこひのたはむれ）……成程、（銀色な秋のひざし、るり色空はしゞまに口ばしの赤き鳥は）……これも面白い、やはり生物學者の詩ですね」

と批評して綠樹はニヤリとした。

「やはりどうしても考へてゐる事がさうですから……」と中條は得意さうに言つた。

「これは……」と訊きながら、綠樹は興味ありげにその次の英語の詩を讀んだ、

IN LONELY JUNE'S NIGHT,

LIKE TREMBLING A WING OF A GREEN CATERPILLER,

I SORROW.

「I sorrow……」と誦して、綠樹はいかにも面白いものを見たと云ふやうな皮肉な顏をして、輝の方を見た。

「これはそのリナの作です、それを私が英語に譯したのです、その次ぎのが私の日本語に譯したものです」と言つて、輝は「六月の夜は寂し、靑蟲の翅の微動にも似て、我は寂し」

と追懷の情を嚙みしめるやうに誦じた。

丁度その時、玄關の方で、よくとほる聞き覺えのある女の聲がした。

「御免あそばせ」

「眞紗美さんですわ」と磯子は誰れにともなくかういつて、玄關の方に出て行つた。

「まあ……ほんとにおそくなりましたわ、お待ちあそばしたでせうね」

桃色にほんのり美しく燃えてゐる豐かな丸い頰に、爽かな微笑をたたへながら、磯子の思つたよりずつと目立たぬ服裝をした眞紗美は、ハキハキした大きい聲でかう云つて、赤い鼻緒の空氣草履を、赤い靴の編上げの紐の亂れてゐる傍に、きれいに脫ぎそろへて上にあがつた。

「いらしてらつしやるのね」

「ええ、……さつきから……」

かういつて、磯子は眞紗美の聲の高いのにハラハラした。

磯子のおいた座蒲團をしかないで、傍におしやつて、眞紗美は絲樹に辭儀をして話しかけた。

「御無沙汰致しました。あれからすぐまゐらうと思つたんですけれども……」

から云ひさして、殘りを笑つて了つて、それなりに磯子の方にむいて、

「ほんとに、うるさいつて、なかつたんですの！」

といつて、もう一度笑つてから、

「わたし、彼には、もう北海道へたつて了つたからつて、上野の停車場から手紙をいれて了ひましたの。ですから、もう私は、ここにゐないと思つてるでせうよ……」

と云つて、その美しく光る秋波で、間のわるい沈默を保つてゐる中條輝の方をチロッと見た。絲樹は、自分に初めて會つた時もあんな目付をしたよと思ひながら、二人の樣子を見てゐる。

「あなた。御紹介なすつては……」
と磯子がいふと、緑樹はかうした場面を操つたく思ふらしい様子で、二人を紹介した。二人も改つて互に名乘り合つた。
中條輝は、紹介がすむと、はじめて、心がくつろいだやうに、眞紗美の、美しく、高く、結ひあげた束髮をまじまじと見ては、眼をそらした。
「大澤さんと、中條さんとは、同じ町なのでございますよ。私、はじめから、不思議だと思つてゐますの、同じ××町ですもの」と磯子が、みんなの前に、珈琲をおきながら云つた。
「まあ……では、中條さんは、何番地でございますの？」
「僕のとこは……實は、僕のとこでなく、兄の家でしてね、僕は、間借人にすぎないのですが……百二十番地です」
と中條輝は、稻田に返事をするやうに云つた。
「では△△さんのお屋敷のご近所でいらつしやいますわね」
「さうです、あそこの隣のあの白い洋館のある家です。德田といふ家です」
「ああ、それならば、存じてをりますわ、よくあの洋館の中から、ピアノの音がもれて來ますわね」
「ピアノは僕がひくのです……たまに妹がひく事もありますが、これは下手でお話にはなりません……僕は、寂しくなると、折々ピアノにむかつて、リナが別れにくれた詩に、作曲をして、彈いたりうたつたりします、今度の詩集に、その曲譜も附して見ようかと思ひますがね」と中條輝は、傍にこれをきく少女の表情を、見ないでもない様子で、稻田に云つた。
「僕、今度、あなたの小曲を作曲して見ませう」

「それはいいわ……」と眞紗美が引取つていつた。「私は、先生のお作の『春の夜』と、『黒髪』とを、セレナアドの曲で、よくうたひますの」

「それぢや一つ僕にもきかして下さい」と中條は、眞紗美のおめず臆せず、何でもどしどし言ひまくるのが、にくいやうな氣がしだしたと見えて、少し苛つて云つた。「僕の作曲したので歌つて見て下さい」

「ええ、歌つて見ますわ……今は、のどを痛めてて駄目なんですもの」

「ぢや、この次にでも……もしよかつたら私の家には、妹もゐますから、いらして、ピアノでお歌ひになつてもいいでせう」

「ピアノで……ピアノでなら、私は十分に歌へますわ、お妹さんはお歌ひになりますの？」

「妹は歌ひません、聲がわるいのです」

「そんな事ありませんわ……私だつて、いけない聲ですもの。けどもね、私は、時々心が晴れ晴れとして昂ぶつて來ますと、何でも歌にして、小鳥のやうに、歌つてみずにはゐられませんの。そして、そんな歡喜の心持は、お三味線ではだめですの、どうしても洋樂でなくては、感情がだせませんわ。私も父が最近旅行から歸つてくると、ピアノをもとめる事になつてをりますの、やはり銀座の十字屋がいいでございませうね」

「あそこもわるくはありませんが、それよりも横濱でもとめるのがいいでせう」

輝と眞紗美とは、こんな風に親しく話をかはして行くので、滌樹も磯子もだまつて、きいてゐるのであつた。磯子がいかにも若い二人を愛撫するやうに眺めてゐるのに對して、滌樹の方は餘儀なく勤めをしてゐるやうな、この忙しいのにと言つた風で、煙草ばかりふかしてゐる。

「お作でございませう」と眞紗美が、輝の前にある草稿を見たさうにして言つた。

「つまらないものですが、見てもらひませう」
かういつて、輝はそれを眞紗美の手に渡した。
「まあ、すてきね！」と眞紗美は叫んだ、
「リナ・セリヤ孃へですつてね……この方はどういふお方……」かういひながら、食ひつくやうにしてすつかりよんで了つてから「ここに『幸福の日に』と斷つてありますのね、幸福の紀念でいらつしやるのね」
「紀念のために、この詩を、羊の皮に、金字で印刷なさるのださうですよ」と磯子が傍から言つた。
「どんなに、美しい贅澤た詩集が出來ることでせう」
「まつたくね…… 西條八十さんの『砂金』も靑い羊の皮の表紙で美しかつたけど、あまりいい羊の皮ではなかつたわ、それを、全部羊の皮にするなんて……これまでにそんなものはなかつたわ……ほんとに、お出來になつたら、皆びつくりいたしますわ、早く拜見致したい事！」と眞紗美は、心からその美しい本をあこがれるやうにいつた。
二時間あまりの後、眞紗美が歸り支度をすると、中條輝も、近くのところだと分つたのだから一處にといつて、これも歸り支度をして、二人はそろつて玄關へ出た。
中條輝が、靴の紐をあんでゐる間、立つて、待つてゐる眞紗美の美しい顏には、何ともいへぬ充ち滿ちた感情の潮が漂つてゐて、それが、この靑年の天鵞絨の服をぢつと見ることによつて、一層、漲れるやうに湧き立ちつつあるやうに思はれる、この事が、磯子を、どんなに安心させたか分らないのである。彼女は二人から轉じて絲樹の方に心ありげな眼を投げたが、絲樹はそしらぬ顏をして、中條の靴の紐をあむ手付を見てゐた。

四

二人が歩いてゆく姿は、町を往來するいろんな人の眼に華やかにうつるので、ふりかへつて見ないものはない位であつた。そして二人の樣子が、山の手によく見かけるやうな若夫婦といつたやうには見えないで、この世智辛い世の中に、何の苦勞も知らないで、毎日、面白可笑しくあそびくらしてゐるブルジョアの、恣ままに生を享樂しつつある若い男女達に見える事が、一層彼等の反感と羨望とをあつめるのだ。

「おたのしみですね」

通りすがりに嫉ましさうにかう言つて行く若い男もある。一小隊程列を亂してやつて來る軍隊の兵隊達の、渴望の眼が、この二人に雨のやうにそそがれてゆく。おれ達は、こんなに日に灼かれて、汗みどろになつて汚ない服を着て、苦しい演習に困憊してゐるのに、にやけた顏をして、ふざけた服裝で、美しい若い女をつれてゆく奴もあるかと考へると、腹が立つといはんばかりに、睨みつけるものもある。

「うまくしてゐますね」

かういつて、わざわざ眞紗美の左のやさしい肩に打突つて言つた男のあつた時には、中條輝は、びつくりして言つた。

「亂暴者！　何を失禮な事をするのだらう、どうして、かう日本の人間達は、ジエラスなのだらう、粗暴(ベルガア)で、無智で、不愉快きはまる、さうぢやありませんか」

「ほんとにさうでございますわ、實にひどいのですもの」

と眞紗美は言つて、ふつと自分の言葉に媚びのあるのに氣がついて赧くなり、赧くなつた自分の顏を、彼がまじまじと見るので、一層燃える頰をそらして、默つて了つた。

二人は別に言ひ合はしもしなかつたが、家路の方へは行かないで、兵隊達がそこから歸つて來る、廣い原の方へと

へと進んで行つた。次第に、靜かな町はづれへと來た時分には、互に、これまでの生活のあらましが相手に想像が出來る位のところまで話しあつてゐた。眞紗美が、女學校時代の事を話した時には、宮子の名が、彼女の口から云はれた。

「宮子さんには、戀人がおありになるんですの、その戀人は、年とつた女優と相愛生活をしてゐらつしやる文士なのですわ。宮子さんが、あまりに、その戀人の御自慢をなさるものですから、私、一度お目にかかつて見たいと思つて、宮子さんに紹介してもらつて、お目にかかつたんですよ、すると、どうでせう、その方が間もなく宮子さんをさしおいて、私に、いろんな事をおつしやるのです。私隨分閉口致しましてね、……宮子さんに對してもわるいのですもの、ですからその男の人に絶交狀を出しましたの、ほんとに、男ツてものは、あんなのでせうかね、私かなり驚きましたわ」

「そんな男もあり、またさうでない男もありますよ」

にやにやとその眼に笑みをふくみながら、中條は、男性のいろんな心持や、いろんなやり方について話をした。そして、そのあとで、自分の妹の藤子を、自分の友人の齋藤守之助がいつの間にか目をつけて、いろんな事を言つてゐたので驚かずにはゐられなかつたと言つて、自分はそんな多情な男性を排斥するものであるとつけ加へた。

廣い路が、原の中へと、二人をみちびいてゆく。射的場の土堤を、左に見ながら、草の上をふんで、遠くに見える雜木林の方へと歩きながら、二人はいくら話しても話しても話しつきないのであつた。眞紗美は彼に、外遊中のことをいろいろときいて見た。すると中條は、外交官である伯父が、瑞西の公使となつて赴任したのについて行つて、瑞西で一年、佛蘭西で一年、そこではR——大學に學び、伊太利で一年、そこでは羅馬の生物學研究所で研究をし、亞米利加をへて歸つて來たのは、昨年の暮であると言つて、

「近いうちに、もう一度行つて來たいと思ひますよ。文化的に、眞のいい生活をするにはやはり南歐とか、亞米利加とかがいいです、この狭い日本の生活は、私を壓迫していけないから……」

醉ふやうな心持で、きいてゐる若い女の心をとろかすやうに、彼は話しつづけた。

「むかうの人達はほんとに、美しい生活をしてゐます、戀人達は、お互に、愛しきれるだけ愛しあひ、藝術家は、皆から尊敬されてゐます。それに比すると、日本の藝術家は實にあはれです……稻山緑樹氏もずゐぶん淋しい様子ですね、僕は、あの人の詩才をみとめますから、これからあの人の保護者(パトロン)になるつもりです。」

「それは結構ですわ……私もお金があるのでしたらほんとに、どうかしたいのですけれども……」と眞紗美も、稻山緑樹の事を考へながら云つた。「詩人は貧乏つて申しますものね」

林の中に入つて、そこの芝の上に坐つてからも、二人の話はたえなかつた。中條輝は、伊太利の戀人リナの美しかつたこと、若かつた事、やさしかつた事、別れの悲しかつた事などを美しい言葉で話したり、また、自分の父は、陸軍少將で、今は西伯利亞に出征中である事、父が歸つて來なければ、結婚の出來ない事、詩集出版の金の三千圓は、母が出してくれるのである事などを話した。

「僕、あなたに、預つてゐてもらひたいものがあるのです」

と中條は言つて、内ポケットから銀の十字架を持出した。

「これは、リナが別れに私にくれたものなのです、あなたにあづけておきませう、ね、美しい十字架でせう」

「ええ、見事でございますわ」かういつて、眞紗美は、その十字架を、白い柔かな掌に受け取ると、十字架の上から輝の掌が、ぴつたりとおしつけられた、そして、眞紗美がおどろいて、手をひかうとすると、

「何でもありません、いいのです」といつてにこにこと笑つてゐるので、當惑して、そのままになつてゐると、

「あなたの眼はほんとに美しい！」
と輝は言つた。そして、立上つて、
「さあ、歸りませう」
と云つて、先きにたつて愉快さうに歩き出した。
原を出てから、二人は町の方へと歸りながら、どこかで珈琲を飲んでから、もう一度稻田綠樹氏の家へ行かうと相談してゐた。
「さぞ驚かれるでせうね、もう一度行くと……」
「ほんとにね、でも二人がかうして打とけてそろつておたづねするのですもの、先生も奥樣もおよろこびになりますわ」
「では一つ、喜ばせて來ませう」
こんなにいつて、二人が途中、小さなレストオランで、輕い食事をとり、そろつて稻田の家に來た時、二人は互に、あなたが案內するやうにと、うながし合つては、クスクスと笑つてゐた。
若い人の笑聲がきこえたので出て來た磯子も、磯子に呼ばれて出て來た綠樹も、
「原まで、あそびに行つて居りましたの、そして、今がそのかへりです」
「かうして二人で歩くといふ事に、ゼラシイを持つものがあつて困ります」などと言つて、二人がはしやいでゐる樣子を、呆れたやうに見てゐる。二人が親しくなるために、あんなに斡旋した磯子も、二人があまり急激に親しくなりすぎたのに、さすがに少し不安になつた樣子である。
玄關のところからそのまま稻田の家をあとにした二人は、市街に出るみちみち、明日のであひを話しあつてゐた。

中條は、明日、村井銀行の地下室へ、何か食べに行かうといひ、眞紗美は三越へ行かうと言つた、

「けどもね……」眞紗美は心配さうな聲をして、「私の家は、私が、稲田先生の家へ來るのはゆるしてくれるのですけども、三越や外へまゐるのには、きつとお供がつきますの、ですから窮屈ですわ」

「誰れがついて來るのです」

「多分、君江ですわ、ことによつたら婆やをつけられる事もあるんですの」

「差支ないと思ひますよ」と中條は言つた、「僕はかまひませんよ」

「私も多分、途中からどつかへ遣つて了ひますわ」

親しい心持が、次第に組み合つて來るにつれて、二人は氣樂な調子で笑つたり話したりして、電車道にそうて歩いたり、町を曲つたりして、小さな坂を上つた時に、中條輝は、向うに見える洋館のついてゐる家を指して、

「あれが、僕の假寓です、あの洋館の一室が僕のルームです。妹がベッドの世話をしたりいろいろの用足しについてゐてくれるのですけれども、やはり妹では不自由でしてね」

とにやにやして云つた。眞紗美は謎のやうなこの言葉に、何故とも知らず心のときめくのを感じて、別に、何とも返事をしないでゐると、

「ね、明日はきつと行きませう、間違ひなく」

と囁いてから、心が樂しくて居れないやうにその肩を搖つて言つた。

「あなたのお家の前まで送つて行きませう」

甘い柔かなその言葉を斥ける事は、勿論彼女には出來なかつた。その上、その親切な申し出では、十分に自分のプライドを滿たし、幸福な感情を抱かせてくれるので、眞紗美は彼の言ふなりにさせた。そして、二人が、大澤家の本邸

の前に通りかかつた時、
「ここが私の祖父の家です」
と言つて敎へた。
「ああ、この門の家が……ここならば僕、いつも通る毎に、この門の標札の文字が目についてゐました。これがあなたのお祖父さんのお家でしたか、少しも知りませんでした」
と言つて、門の中の植込を、よく見たりした。その時、丁度門の中に、砂利をふむ下駄の音がして、ふつと姿を現した靑年が、こちらにゐる二人を、ハッとした樣子で見咎めた。そして、眞紗美であるのを知るとともに、もう行つて了つたので、眞紗美は、何とも云へず、いやな氣持がするとともに、傍にゐる中條輝が、決して、みすぼらしい男ではない事を考へると、二重になつて來るある滿足とほこりとの感情をおさへる事が出來なかつた。
「今のは從兄ですの、」
「見た事のあるやうな人ですよ」と中條はすぐに言つた、「きつと度々、知らずに、この通りであつてゐるんですよ」
「さうでせうとも……」から云つておいてから、眞紗美は、今にも逢つた時、何か云はずにはすまないであらうと思ふ從兄の亮一の言葉に對する對抗的な言葉を探してゐるのであつた。
自分の家の入口のところで、名殘惜しさうに歸つてゆく、中條輝の後姿――天鵞絨の服のほつそりした姿を見送つて、夕暮れ方の町に、うつとりと立止つてゐた眞紗美は、急に大變に疲れてゐる事に氣が付いた。裾は埃で白ッぽくなつてゐるし、紅の鼻緒は一杯に埃をふくんで、朱がかつて濁つて見える。ハンカチフでかるく裾を拂つてから、家の中に入ると、そこの茶の間には誰れもゐなかつた。君江もゐないで、その代りに婆やが、臺所でなにかをしてゐた。

「この足袋を洗つてておくれ」
彼女は足袋をぬいで、それを臺所の板の間の隅においた。
「大變な埃でございますよ、お孃さん」
かういつて婆やが驚いてゐるのを見ると、眞紗美は笑はずにはゐられなかつた、
「そのはずよ、今日は往つたり來たり、五里位の道程は歩いたんだもの、下駄も足袋も臺なしにして了つたわ」
「そんなに、よく御運動が出來ましたね」
と婆やも笑つて言つてゐると、そこへ突然ぬつと亮一が入つて來て、眞紗美の背をどんと叩いて言つた、「今の一緒に歩いてゐた奴は誰？」
「奴ツだつて、ずゐぶんひどい亮さんね、」と眞紗美は、後退りをしながら挑むやうに言つた。「あの人は、新歸朝者なのよ、そして生物學者なのよ、天鵞絨の貴公子なのよ、輕蔑してはいけないわ」
「天鵞絨の貴公子ツて……」と、亮一は鸚鵡返しに云つて「貴公子かどうか知らんが、天鵞絨の服は着てゐたね、もうそろそろ夏が來ようとしてゐるのに、まだ天鵞絨なんか着こんでゐるから笑はせる、あれが先生の一帳羅なんだらう……どこで知り合つたのだい、次へ、次へと、よく知り合が出來るね、一體何ていふ男だい？」
「嫉妬しても駄目よ、何でもないんだから」と臺所から出ながら、眞紗美は言つた、「あの人は、稲田先生の御友人なのよ、そして、先生のところで、御紹介なすつたのよ、今にあの方は何か研究してゐるもので、學位を得られるのだといつてゐましたよ、博士のね……あの人のお父さんは陸軍少將です」
「何といふ陸軍少將だい」
「中條ですわ」

「なに中條……中條なんて名の陸軍少將はない、僕は軍人の事は調べて知つてるんだ」
「あなたに、あるかないか分るもんですか」
と食つてかかるやうに眞紗美は言つてから、氣がついたやうにほほゑんで、「心配しないだつてよろしいのよ、亮さん、私輕卒な事はしやしないんだから、ただ友人として交際するだけなんですからね、誤解して、お祖父さんや、母さんに、告げ口をするといけませんよ、餘計な事をしてはいけませんよ」
と柔かに言葉をためて言つた。
「僕だつて、そんな卑怯な告げ口なんかはしないよ、だが、こいつは少し變だよ。いくら稻田の紹介にしたつて、少し氣に食はん奴さ。きつと、不良靑年なんだよ、うまくあんたが欺されてゐるに違ひない」
「そんな事があつてたまるものですか、第一稻田先生に失禮よ、そんないかがはしい人を私に御紹介になるやうな方ではありませんわ。あなたこそそんなに邪推していけないのね、あなたにゼラシイがあるから、そんなに思へるのよ、私の事は、私にまかしてて頂戴！　私には私の自由があるんですもの」
「そりや、言ふまでもないさ、然し、氣をつけ給へよ、よくあんな風釆の人間にはまやかしものがあるからね、僕の注意だけは耳にのこして置いてくれ給へ」
「有り難う！」
眞紗美の不機嫌な樣子に、間のわるくなつた亮一は、何か言ひたさうにして二三度振返つてから、玄關の方へ出て行つた。
暫くの間、もくねんとして佇んでゐた眞紗美は、パツと鮮かに微笑を洩らして、自分の部屋に入り、レタアペエパアを取つて手紙を書きはじめた。

「宮子さん、其後どうしてゐらつしやるの、ちつと出掛けて來ませんか。あんまりよ、絕交をほんとにする氣になつてゐるなんて？　私は、ちつとも本當にしてはゐないのですよ、私、あなたの事を考へ出すと、とてもとても長く絕交なんて事、出來さうではありませんわ。もうあれは水に流して、これから新しい御交際を致しませう、ね、いいでせう。明日と明後日はゐませんけれど、近いうち、ぜひ來て頂戴、いろんな事をお話するわ、私の新しいラヴの事、話すわ、天鵞絨の貴公子なのよ、わかつて？　ね、きつと來て下さい、でなければいつまでもいつまでもうらみますよ、御返事下さい。野上草人さまはどうしてゐて？　それもききたいわ！　私はもう東京にゐないと言つてやつてあるのよ、私のこと、さんざん言つてゐるにちがひないわ、どういつてゐるかききたいわ、きかして頂戴」

かういふ風に書いた宮子への手紙を、臺所へもつて來て、婆やにポストまで持つて行かせた。

五

翌日の朝、眞紗美がまだ寢てゐる時分、中條輝は、眞紗美を誘ひに彼女の家の玄關へ來てゐた。君江が取次をして、それを眞紗美に傳へると、赤い友禪のメリンスの褥の上で、白い腕もあらはに起き上つた眞紗美ははれツぽつたい眼に微笑を見せて、

「まあ、隨分、早いわね！」

と樂しさうに言つた。そして君江が、そのほつそりとした頰にたたへてゐる表情からすぐに彼女が、はじめて逢つた中條輝からわるい感じは受けなかつたこと、これから先き先きの輝との交際にも、君江が便宜となつてくれる事はたしかだと看破した。

急いで君江の片付けた部屋に、中條輝が通されて、眞紗美の支度の出來るまで待つてゐる時、前夜娘から、一部始終をきいた母親が挨拶に出た。稻田緑樹の家で、稻田の紹介したその友人であるといふ事が、年取つた主婦の心には信頼のおけるものと思はれてゐる。

「娘は我儘でございますので、おつきあひ下さいますのにも、兎角お骨の折れる事でございませう。どうぞ何分不行儀なところはさうツケツケと言つて、なほすやうにおつしやつて下さいまし」などと彼女は如才なく、鷹揚に言つてから、中條の樣子を目ざとく眺めて、

「今日はまた三越へまゐりますとか申してゐますが、御迷惑でございませうが、どうぞ宜しく……」と言つた。こんなに言はれて、中條は、當惑したやうに、もぢもぢとして辭儀をするばかりであつた。君江がついてゆく事にきまつて、いい着物でもないが、こざつぱりした縮の縞のに着かへて、彼女も赤い帶をしめた。眞紗美は、紫ツぽい絽縮緬の單衣の上に、模樣の荒い絽の夏羽織をはをり、金の指環を指にはめたり、靑瑪瑙の束髮ピンを頭にさしたり、いろいろと盛裝して出て來て、

「私は今日、私の趣味を一つも申さないで、中條さんの御趣味で買物をするわ！」

と母親にともなく、他の二人にともなく呟いた。その幸福さうな樣子に、別に何の感情も持たないやうな靜かな表情で、君江は眞紗美のいい下駄を出したり、パラソルを出したりした。

こんな風にして、三越に向つた三人は、途中、電車の中でも人の眼をひきながら、日本橋の方へと運ばれて行つた。

「今日またこんなに連れ立つて、下町へ買物に來たりしてゐる事を、稻田先生達は少しもお知りにならないから、分るとびつくりなさいますよ」と言つて見て、ふと思ひついたやうに、

「歸りに、稻田先生のお家へ一寸寄りませうよ」

と言ふと、中條は一寸眉をひそめてから、君江の顔を見たりしながら、
「さア寄つてもいい事はいいんですが……」
と曖昧に言つた。
室町で電車をおりた三人は、大理石の柱の屹立してゐるこの大吳服店の中に入つて行つた。知らないものから見れば、婚約中の人々とでも思はれるやうな樣子で、眞紗美と中條とは、一階二階三階と、ぞろぞろと見て步いた。そして、眞紗美は一々中條と相談をして、笑つたり、まぜくり返したりして、夏のすずしい半襟と、レエスのかかつてゐる藤色絹のバックと、濃いコバルトの上に金の絲のからまつてゐる翡翠の留のついた帶留とを買ひ求め、それを君江のもつてゐる風呂敷の中に包ませ、食堂で辨當を取り、出口に近いところで、おいしい鑵詰を二つばかり買ひ求め、かなり疲れて、ほんのり上氣しながら店から外へと出た。
停留所まで步いて行つて電車を待つたが、くるのもくるのも滿員なので、三人は相談の上で、鋪道を日本橋の方へと步いて、心地よいアスファルトの道を、心まかせに銀座の方へと向つてゆく。肩と肩とはすれすれになる位で、揃つて步いてゐるあとから、君江がおとなしく、そしてこれも一廉樂しげについてゆくのが、誰の目にもとまるのである。
三人は芝口まで步いてそこから電車にのつたが、眞紗美がさきになつて小石川の方にまはり、疲れをもいとはず稻田の家近く來て、通りに君江を待たせて、路次を入つて行つて訪ふと、來客の下駄が二人分も並んでゐる玄關に、磯子が出て來た。二人は彼女の前に、鮮かな笑顏を並べて見せた、あたかもこれは、奥さんあなたの御紹介の結果ですよと言はんばかり。
磯子は不意に、今日もまたかうして揃つて步いてゐる二人の姿を見ると、今は呆れるやうに、不安がさきに立つて

る様子であつたが、けれども彼女はあくまで二人を信頼してゐるので、「どこへ行つておいでゞしたの」とたづねた。そして三越からの歸りである事と、君江が同道したのである事とをきくと安心したやうに、

「まあ、お上りなさい」と言つた。

「いいえ、今日はこのままで失禮します、どうぞ先生によろしく」

「どうぞ、先生によろしく」と二人はこもごもに云つて、足をそろへて、すぐに出て行つて了つた。

昨日と同じ風に歩いて、自分達の町へと歸る途中で、二人は又もや明日のであひについて話しあつてゐた。そして、明日は、眞紗美が九段下の寫眞館へ寫眞をうつしにゆくのに、中條もついて行つてくれないかといふと、これは中條の心にもかなつたと見え、愉快さうに承諾した。

「きつとお伴しませう」

「あなたの御趣味のやうに、私はとりたいと思ひますわ。着物は何にしませうかしら。私、夏の裾模樣のそれは素敵なものが、新調してありますから、あれにしませうか」

と、今から心がわくわくするやうに言ふので、そばできいてゐる君江は、ほほゑまずには居られなかつた。

中條の家の前まで來た時、彼はしきりに立寄るようにとすすめたけれども。眞紗美はこの次にといつてことわつて、明日の事をくれぐれも約束しておいて、彼の家の前で別れた。

別れようとして、ふと見上げると、洋館の一つの窓のところに、こちらを見て、ぢつと眼をそそいでゐる一人の若い女の姿が眞紗美の眼にうつつた。すらりとした姿のいかにも寂しい感じのする女である。眞紗美は何かわるい事でも見られたやうに、瞬間、何とはなしに暗い翳が心にさしたが、それが誰でもない、彼の妹の藤子に外ならないと推

察して考へると、こんなにまで、中條と親しんでゐる自分として、早晩つきあはねばならないのが、彼女である事を考へて、彼女とどこまでも親しみたいといふ事をかしこくも思ひめぐらしたのである。

家に歸つて見ると、机の上には、久しぶりの宮子から來た手紙がのつてゐたので、彼女は嬉しさに、をどるやうにしながら、立つたままで、手早く封を切つてよみはじめた。嫋々と書かれた萬年筆のあとには、宮子の楚々とした姿に包んだ勝氣な心持が見える。讀んでゆくうちに、眞紗美は救はれたやうに、明るい安らかな表情になつて、君江に話しかけてゐた。

「ね、君江、私はびつくりした事があるわ。この宮子さんの手紙によるとね、私が昨日、中條さんと一緒に、原からこちらへ歸るところを見た人があつて、その人の話で、宮子さんはもう私の手紙よりもさきに、すつかり知つてゐた事よ。隨分早く知れるので驚いて了つたわ！」

かう言ひながら、彼女は又手紙を暫くよんでから、大聲で笑ひ出した。又も君江に話しかけた。

「ね、この手紙で見ると、野上草人さんはね、私が北海道へ行つて了つたからといふあの手紙を見ると、もうその日のうちに、宮子さんのところへ、舊情を温めようとして、手紙でもつて、どこかへ行かうつて、誘つたんだつて……でも宮子さんも今度といふ今度は、冷靜に考へた事だから、彼の申出はことわつて了つてあるのよ、そして、宮子さんは、お兄さんのお友達で、藏前の高工出の人と、結婚する事にきめたのですつて……宮子さんとしてはほんとに、いい決心よ。これで野上さんは、徹底的に二人を失つた事になるのよ、さう思ふと氣の毒よ。君江、おまへを野上さんに紹介してはいけないかい」

「私を……それはいけませんわ」と君江はやはり眞面目な顔をして、ことわつた。

「なぜ？　野上さんつていへば、亮さんよりもずつと、いい男だし親切でもあるぢやないか」

「でも、私、好きな方ではありませんもの」
「それじや、中條さんはどうなの、え」
「中條さんですか……」と君江は一層用心深くなりながら、
「あの方はわるい方とは思ひません」
「さう、さう思つて？」と言つて、眞紗美は笑つた。
「おまへ、今日すつかり、あの方にまゐつたのね、さうだらう――あの方はあの方で、何か言つては、お前の眼を、まじまじと見てゐたもの、明日、私がおまへの事をたづねて見てあげるわ、どんなに、お見えになるかつて事を！」
「いけませんわ、そんな事おつしやつては……」かういつて、君江は少し上氣して、
「私などのやうなものは、おなぶりになるには丁度宜しいんですわ」と涙ぐんでいつた。
「怒つたらいけないわ、私いいものを見せてあげるからね」
眞紗美は、赤い紙入の中から、銀の十字架を取り出して、それを白い掌にのせて、ひいやりとする感觸を樂しみながら、
「これは中條さんが、外遊中に伊太利の少女からおもらひになつたものなの、一寸私が預つてあげてゐるのよ」と言つた。こんなものを見た事のない君江は、暫くその十字架の銀の光を見惚れてゐた。
「亮さんは、あの方の事を少しも信用しないのよ、けれども、私は、まさか亮さんの言ふやうな人だと、あの方を考へる事は出來ないわ。だから、私もう少しおつきあひをして見て、もつともつと心持が分りあつたら、興信所にたのんで、いろんな事をしらべて貰つて、その上で稲田先生にもおねがひして、御媒介人になつてもらつたらと思ふのよ。私もうかうかしてゐると、どんな人のところへ嫁かせられるか知れないんだものね、だから私としては、稲田先生の

御友人のとこはいいと思ふのよ。稻田先生の御友人といへば、お母さんはきつと贊成してくれるし、お父さんはお母さん次第だし、お祖父さんはお父さん次第だし、大變うまくはこぶと思ふのよ、でね、もしさうすればいいときまれば、君江も奔走して頂戴ね――」

「ええ、それは致しますとも」と君江は言つた。その語氣には、誠實な感情がこもつてゐるのである。眞紗美を、心から思つて忠實な婢として、自分をへりくだつてゐる氣性がこもつてゐるのである。「私きつと、何でもお力になるやうに致しますわ」

「きつとね、私だつて、おまへの事を妹のやうに大切に思つてゐるんだもの」かういつて二人は、センチメンタルになつて、柔かい手と手を握り合つてゐる。

君江が行つて了つたあとで、銀の十字架を手文庫にをさめて、眞美紗は今日の樂しい行樂を、美しい文字にとしためて、それを稻田磯子あてにした。その中には、いい方を紹介してくれた事を、私の母も感謝してゐるといふ事を附加へた。

「明日は、私の方から中條さんをたづねよう」

と考へた眞紗美は、翌日の朝は、珍しく早く起き出して、綺麗に化粧して、君江の手傳で、單の裾模樣にきかへてそれに白孔雀の羽根の銀でをりこまれた單帶をしめて、いかにも凉しやかな夏のいでたちとなり、その胸に鴇色のヴエールをまとひ、時計の鎖をその襟にずらりと垂らして、見かへたやうな姿になつて、婆やのよんで來た俥にのつて中條の家の方へと向つた。

威勢よくゴム輪の車は、朝の町を突き切つてかの洋館のある門の中へと入つて行くと、車夫が聲をかけた。

「一寸お賴みします」

から言つた車夫の聲が高かつたので、待つ間もなく扉が開いて、小さい肥つた女中が半身を出して、眞紗美の車上の姿を見ると、眼がさめるやうな顏をして笑つた。

「どなたでございます」

「大澤さんです」

と車夫は、その女中を叱るやうに言つた。

女中が扉の中に入つて暫くすると、スリッパをはいた飛白(かすり)の着物のいかにも無頓着なやうな和服姿の中條輝が出て來た。そして盛裝をした眞紗美を見ると、顏の神經をビクビクさせながら、

「今日は大變早いですね、」と云つた。「まあ上つて下さい。僕はまだ何の支度もしてゐませんからね」

「でも、お邪魔でございませう」

「いや、少しも……」

かういふ押問答をしてから、眞紗美は決心したやうに、車夫を歸らせて、中條のあとについて二階の彼のルームへと導かれて行つた。その八疊位の部屋は、明るい氣持のいい部屋で、一隅には安樂椅子や、囘轉椅子があり、他の一隅には高い二つの書架があつて、そこは横文字の本がピカピカと光り、抽斗つきの高い机の前にはかけよい椅子が、クッションを頂いて居り、机の上には置時計があり、卓上電燈があり、いろんな繪が枠に入つて立つてゐた。書室のやうでもあり、研究室のやうでもあり、賑かでゐて、どことなく雜然としてゐるのである。

「ほんとに氣持のいいぜいたくなルームね」と眞紗美がうつとりするやうに言ふと、

「ナニ、貧しい部屋です、もつと裝飾したいんだけれど……」と中條はいつた。

階下から、白い單衣の脊の高い女の人が上つて來て、二人の前に紅茶茶碗をならべた。

「これは僕の妹の藤子です」
と中條がいつた。眞紗美が會釋しながらぢつと見やると、額のあたりが拔け上るほど髮が薄くて、顏は血色がなく、その眼は靑いほど澄んで見える。一體の樣子が中條の妹と言つても、自分などよりも二つも三つも上のやうに見えるのである。
「兄がいつもお世話になりますさうで……」
と言つた時、その唇のあたりが痙攣して見えた。別に感じのわるいと言ふのではないが、何處か暗い影がさしてゐて、眞紗美は何となく親しみがたい心持がして、壓迫を感じたのである。
「それぢや、僕、一寸支度をして來ますから待つてゐて下さい」
かう言つて、中條は書架から四五册の畫集を取り出して、それを眞紗美の前において階下の方へと下りてゆくと、藤子も足音もなく下りて行つた。眞紗美は自分一人になると、暫く何思ふともなくぼんやりしてゐたが、やがてその畫帖をくりはじめた。それらはすべて佛蘭西の繪で、あまりに軟美で明快であつた。一枚々々くりひろげてゐると、いつか、その畫中の情趣にひきよせられて、次第に熱心に見て行つて、最後の一册がもう半分まで、すんだ時分、昨日と同じ服裝に着替へた中條輝が上つて來た、そして、にこにこして彼女の背によりそひながら、
「面白いのがありますか?」ときいて「もつと變つたのを見せてあげませう」と言ひながら書架の一番上の端から十册目位のところにある赤い表紙の本を引出した。その赤い本が彼の手に渡つた時に、どうした譯であつたか、本の頁の中からパラリと三四枚の紙片が辷りおちて、眞紗美の目の前に、その表を見せておちついた。それは眞紗美が、これまでに見た事も、考へた事もない種類のもので、足をあらはにした白皙の美しい婦人が寢たり、腰をかけたり、いろんなポオズをとつてゐて、その傍に一人の人物を配した密畫なのである。

「つまらぬものが出て來ました」かういつて心があつてか、無くつてか、赧くなつて、それを拾つてゐる中條の横顔を、眞紗美は、波立つやうな心持でぢつと見戍つた。「をかしな事をする……」と感じながら、彼女は顔中さつと赧くなりながらも、彼のするのをぢつと見てゐるのである。彼の最後に手にとつた一葉は、十八九の少女が、半身裸體で、そのみづみづしい乳房を見せてゐる寫眞であつた。それが彼の口癖にいふリナといふ女であらうかと眞紗美は思つた。

「純潔な男かと思つてゐたら！」

かう思つて眞紗美は衝動的な憎惡と輕蔑とを感ぜずにはゐられなかつた。けれどもそれとはまるで違つた反抗的な、もつと芝居を見てやれといふやうな氣持もわいて來て、惱しい感情に包まれると共に少しはしやいで眞紗美は言つた。

「お妹さんもいらつしやるといいですのね」

「妹ですか、さあ……」

中條はかういつて見て、複雜な表情を見せながら「邪魔ぢやありませんか」

「いいえ、ちつとも、却つて、私、いいですもの」

「それではさうしませう」

かういつた中條は、ベルを鳴らして藤子をよんだ。徐い足音がして、かの靑い沈んだ眼をした髮の拔けた娘が上つて來て、「およびですか」といつた。

「あ、おまへ、すぐ支度をして、僕達と一緒に九段へ行かう、そして、序にお前も寫眞をとつていいぢやないかね、K——町の方で、このごろ、逐れ逐れといつてるんだから……」

「でも私一人ぢやないのですもの、よしますわ」と藤子は傷つけられたやうにいつた、そして、眞紗美の方に苦しい微笑をむけて、「またこの次にお願ひいたしますわ」

「そんな事仰しやらないで、いらつしやるといいわ」と眞紗美が言ふと、中條がそのあとから「そんならそれでもいいね、ぢや僕一人行つて來よう、よ」と嬉しさうにいつて、藤子にいひつけるやうにいつた、「すぐ電話で、自動車をよんで下さいね」

自動車が來てそれに眞紗美が乘ると、つづいて、中條輝が入つて來た。藤子は女の兒を抱いてゐる女中と二人で、こちらを見て立つてゐる。

「では、藤子さん、お兄さんを一寸お借りいたしますよ」

と、眞紗美がはつきりした聲で、自動車の、窓ガラスごしに、藤子の血色のわるい顏を見ていふと、藤子は苦笑して、

「ええどうぞ……行つていらつしやいまし」

と言つた。その聲がいやにかすれて、不自然に眞紗美には思はれた。

第三部　海濱の痴人

一

「藤子さん。今度是非お兄さまと御一緒に私の家へお遊びにいらして下さいましね。父はいつも旅でございますのよ、母と私と小さい妹達とで、ほんとに何の御遠慮もないんでございますもの」

「ありがたうございます。兄からききましてすぐ御近所だと分りましたものですから……そのうちぜひお邪魔させていただかうと思つてをりますわ」

輝が小用で、階下へおりて行つたあとで、二人の女はその親しみをもつと進めて見ようとするやうにこんなに話しあつてゐた。眞紗美の前には湯呑や、雜誌の散らばつた中に、さつき藤子が、押入の中から取出した大きいニツケル製の箱があつて、その半分蓋を取つた間から、大小いくつもの寫眞がはみ出してゐた。その寫眞の多くは、樣々なポオズをした中條輝の半身のものや、横顏や、全身などであつたが、その鼻のあたりや口元が、輝にそつくりといつてもよいやうな、かの嫂の子であるとかいふ女の子の寫眞もあり、その女の子をいとしさうに抱いて輝と一緒にうつしてゐる藤子の姿もあつたのである。

「藤子さんはお年の若いのに、感心に、お子供のお好きな方らしうございますのね、私なんかといへば、妹なんかに、それはヒドクあたりますのよ、可愛いいとは思つてゐても、すぐ面倒臭くなつたり、齒がゆくなつたりして、泣き出すほど、しめつけてしまつたり、手で打つたりしますから、母にそんな樣子ぢや、自分の赤ちやんが出來たらどうす

るか知れんから、乳母でもおかなくツちやと言はれますの、でも……赤ちやんなんて、可愛いいけれどそれだけ面倒ですわね、」

銀泥に白い花と水色の葉とのゑがかれた扇をまさぐりながら、眞紗美が話しつづけると、藤子は何處か張りつめたやうな不自然な表情をして時々暗くなる眼を、眞紗美から、そら　そらしてゐた藤子は返事をした。

「私も思ふ半分も、子供を心から愛する事は出來ませんわ。もつと子供に、理解のある親切な心を持つて愛したいんですけども……」

「でも、今からそんなに、子供さんの御面倒がお出來になるんですもの、感心しますわ、お姉さんもどんなに喜んでゐらつしやいませうよ、この赤ちやんは、まるであなたの赤ちやんのやうに見えますわ」

かういつて、眞紗美は寫眞の箱の中から、もう一度さつきも見た、藤子と女の子との寫眞を取出して、それを二人の間においた。

「赤ちやんは、あなたにもお似になつてゐるわ、額のあたりが……一體、伯母とか、伯父とかには、よく似るものださうぢやありませんか、私なども、兩親よりも親戚の者によく似てるつてことですわ」

「さやうでございますか……それはもう……」

と藤子は言ひさして、眞紗美の取り出した寫眞を、もとの箱の中にうつむけにして入れて箱の蓋をした、そして、眞紗美の氣分をむけかへようとするやうにいつた。

「この間、兄がおともして、九段でおうつしになつたお寫眞がたのしみでございますわ、御綺麗にうつつてゐるにちがひありませんわ」

「それは保證のかぎりではありませんけど」

と眞紗美は笑つて、

「けども、輝さんが、私に一番にあふボオズをとつて下さいましたの、ですから、きつと私のやうなお顔でも、いくらかましにはとれようかと思ひますわ……」かう言つてから、眼をぼんやりと漂はせて、思出すと可笑しくてたまらないといつたやうにつけ加へた、

「輝さんはほんとに……いたづらでいらつしやいますのよ。私がいよいよレンズの前そ立たうといふ時、お姿見の前で、衣紋をつくろつてをりますとね、……つつと後にお立ちになつて、どうです、よく似合ふぢやありませんかとおつしやるんですもの。わたくし困りまして、赧くなつちまひましたわ……」

「………………」

藤子はうつむいてゐて、寫眞の箱をその蒼白い右の手でいぢりながら、別段適當な返事が心にうかばないのか、それとも默つてゐる方がいいと思ふのか、沈默してゐる。

「御一緒に歩いてゐますとね、時々、ステッキで、私の腰のところを、くすぐつたりなすつて、……大分、たちがわるうございますわ、私もつと純な童貞の方かとおもつてましたら、さうではありませんらしいのね」

「そんな事はございませんわ、」と藤子がサッと赧くなつた顏をしていつた。「決してさうではございませんわ」

「では、童貞で御純潔でいらつしやるのかもしれまんわね、一番近しいお妹さまの御保證ですもの……」

「兄は……」と藤子は辯解しようとして、かう言ひはじめて、そんなにいつて見ても仕方がないといふ事に氣が付いたといつたやうに默りこんで了つた。

「中條さんは……」と眞紗美は言つた。「稻田先生のお宅のお話では、近々の中に、羊の皮で全部綴つた大變立派な高價な詩集をお出しになるさうでございますから、私、拜見させていただくのをたのしみに致してゐますのよ」

「さうなれば、嬉しい事は嬉しいのですけれど……」

かう言つて藤子は、急に顏をゆがめて絞り出すやうな聲で言ひつづけた。

「かうしたい、ああしたいと、年中申しくらしてはゐますけれど、なかなか思ふやうにはまゐりませんので、思ふやうにならないと、癇癪ばかり出して私達にあたりちらすのです、ですが、この頃はそれはそれは平和になつてゐますあなたにお知り合ひになりましてから……」

「でも私は、中條さんがそんなに我儘お坊ッちやんだとは存じませんでしたわ」

「いいえ、それは我儘なんですの、でも、あなたの事を每日のやうにお噂しましてね……兄は、ほんとに、あなたをお愛し申してゐますわ、」

「けれど、まだほんの短いおつきあひなのですから分りませんわ」

「それはさうですけれど……どうぞ、あなたも、兄を同情してやつて下さいましね、お願ひいたしますわ」

「同情なんて事はありませんけど……でも、出來るだけはね……」

と眞紗美は亂れた藤子の樣子を、何といふ忠實な友愛の情であらうと思つて見たのである。兄弟などの一人もない眞紗美は、普通の兄と妹といふものは、このやうにまで思ひやるものなのであらうかと、今始めて見出した藤子の妹としての愛情に、涙ぐましくさへもあつた。

二人は何くれとなく話しあつてゐる中に、話題は又もや輝の上にもどつてゐた。藤子は眞紗美に問はれるにまかして、中條が外國へ行つてゐた事の話をした。藤子の話によると、中條が外國へ行つたのは、今から五年程前の事で、昨年までは鄕里である山口縣のK町に住んでゐたといふ事を話した。

「まあ、さうでございますか」

と眞紗美はびつくりして言つた。すると藤子が一層どぎまぎして、暗い表情をさつと顏にうかべた。
「まあ、五年前……私はまた、昨年むかうからお歸りになつたものとのみ存じ上げてゐましたわ」
「いいえ、さうじやないのでせうと思ひますの」
と藤子はあやふやと言つた。「中條が間違つたのでせうと思ひますの、二年ほど瑞西へ伯父について行つてかへりにあのあたりを廻つて來たのでございますわ……けれどそれも昨年ではありません、兄はどう申上げたか存じませんが……」
「でも佛蘭西ではR——大學へ入つて學んでゐらしたさうじやありませんか」
「さういふ事もあつたかも知れませんわ……」
かういつて、藤子は急に不安なやうな顏をして話題を轉じた。そして眞紗美に辯解するやうにいつた。
「兄は少し風變りなところのある人間ですから、私が傍についてゐましても、いろいろな事を思ひついたり、ずゐぶん我儘をも申しますので、私は本當に困つて了ひますの。ですから私はこれからさきざき兄とは何かにつけてお話のあふあなたに、お力になつていただきたいのでございますよ。兄は一日だつてあなたとお目にかからずには、氣が狂ふと申しますのよ」と、苦しさうに哀訴するので、それをきくと、眞紗美は痛ましいやうに感じられて、その賴みをきかずにはゐられない氣もするのである。さうした眞紗美の樣子を目敏く見ながら、
「中條はこのごろ、何につけても眞紗美さん、眞紗美さんつて言つて、あなたの事ばつかり言つて、それはそれは熱しきつてゐるんですよ。ですから、これからいつまでもいつまでも兄の心をあはれんでやつて下さいましね」と藤子はくりかへした。
「あはれむなんて……」と藤子の言葉をツキ返すやうに眞紗美は言つて、「そんなわけはないのですわ、けどももし私

の申上げる事を一番よくきいて下さるやうでしたら私、何でも申上げてもいいのですから、何か私におつしやりたい事があつたらさうおつしやつて下さいまし」

二人がこんなに話してゐるところへ、外から入つて來た中條は、どういふものか非常に不機嫌になつて、藤子に邪劍な言葉を言つて、向うへやつて了はうとしたのであつた。それでも藤子が默つて坐つてゐると、

「お前さんと眞紗美さんとは、趣味がちがふのですよ、だから、あまりお話をしては、眞紗美さんに不快を與へますよ、あなたはまるで文學の方の趣味は持たないのだもの、性質から言つても何からいつてもちがつてゐて、到底話のあひさうな筈はないのですからね」

こんなに言はれて、藤子が仕方がないといつたやうな顏をして淋しく部屋を出て行つて了ふと、中條も氣がかりになるやうにつづいて室の外に出た。そこで藤子を呼び止めて、何か、ひそひそと話をしてゐるやうで暫くするとにことして入つて來て、

「藤子は何かあなたに申しましたか」

とそれとなく、きいて見るので、眞紗美も妙にこぢれた氣持で、輝に反抗するやうにいつた。

「ええ、承りましたとも！　いろいろ……」

「いひましたか、どんな事を」

「私があなたの御洋行中の事をおたづね致しますと、あちらの方へ行つてゐたのは、五年も前の事だとおつしやいましたの。私は、昨年お歸りになつたばかりだと、稻田さんの奧さんからうかゞひましたのに」

「そんな事ですか、それは、僕のことば通り昨年歸つて來たばかりです」と中條は平氣な顏をして言つた。「僕の洋行については、妹は何もくはしい事は知りません。五年も前だなんて。何と思つてそんな事を言ふのだらう。馬鹿な奴

です……」
「でも妹さんがそんな事をまちがふなんてどうなすつたのでせうね。佛蘭西のR――大學でお學びになつたのでせうと申しても知らぬとおつしやるのです。……」
「妹はきつと外の事と思ひちがひをしたのでせう、頭がわるいから」
「さうでせうか……私の親戚に、やはり佛蘭西へ行つてゐて、最近歸つて來たばかりの人がありますから、こんど、お逢ひになりませんか、きつとあなたを御知り申上げてゐるのでせうよ」
「何といふ人です、その人は？」
「伊藤と申しますの、私の從兄の亮一の兄でございまして、今、三菱の方につとめてゐます、きつとあなたの事を間接にきいて知つてゐませうよ」
「しかしその人にきいたつて、知りますまいよ、何しろ廣い世界の事だから、……もつとも僕の洋行の事をもつと詳しくお知りになりたいなら、外務省へ行つておききになるのが一番いいでせう……」
かういつて、眞紗美の顏を見すましてから、中條は急に立上つて、室の一隅にあるピアノのところに行つて、その蓋を開いて、美しく流れて見える鍵盤の上に、無雜作に手を走らせて、單音を出して行つた。そして、眞紗美がその傍に立つと、につこりとして振り仰いで見て、
「何かお歌ひにならんですか、カルメンのあの歌は御存じでせう」
「いいえ、よくは存じませんの」
「では、私が一つ彈いて見ませう」彼はかう言つて、相當に素養のあるところを見せた、けれども中頃で、ひくのをやめて、ピアノのところをはなれて、反對の壁際におかれてある囘轉椅子の上に腰をかけて、音樂上のいろんな話を

はじめたが、いつか、その話題の中に生物學の事が入つて來た。その生物學の事は、またもや性慾研究といふ事になつて、眞紗美の當惑と、それと同時に湧く好奇心とをたくみに引出しながら、エリスの性慾學の中から面白い事を二三話し出した。

「おどろかないでもいいでせう、僕はこれでゐて、性慾學の方にも一かどの見識は持つてゐるのですよ。とりわけ生物學と、人間性慾の研究とは、切り離す事の出來ない交渉がありますからね。この二つは兩々相俟つて、一つの學問となるのです。殊に私は婦人の性慾といふ事について、氣づいた事も多いのですから、近々に一つの本を書きたいと思つてゐるのです。日本では今羽太鋭治といふ人などが、折々、そんな事をいつてゐますがどうも淺薄ですよ。まだ日本のインテリゲンチヤはとにかく一般的には、性教育の必要をさまで感じてゐないやうですから惜しい事だと思ひます、ですから僕が一つ提言してみませう、日本人はいかなる方面に於ても偏狹固陋ですが、とりわけこの性の問題については、あまりに冷淡すぎます」

「でも、そんな事、あまり知らない方がいいと思ひますわ、そんな事知るだけでもいやですもの……あんまりそんな事おつしやると私、少々、あなたの純潔をお疑ひ申しますわ、」

「何故です？」

と中條は面白い事になつたといつたやうに、ぐつと氣を入れてききかへした、「その理由は何です」

「この間のあの寫眞は何ですか……あんなものを御祕藏なすつてらつしやるのですもの、おどろき入りましたわ」

「なんだと思つたら」と中條は白い齒をチラチラさせて笑つた、「あの繪ですか、あれは研究所の友人からゆづられたものにすぎないのです、しかしあれによつて、私の純潔を疑はれるのは實にひどいですよ。性の事を研究するからといつて、皆が皆不品行で、不純であるとはきまりません、却つて反對ですよ。その證據には、羽太博士は實に、品行

方正の人ですからね」
「いくら品行方正でもそんな事おつしやる人私大きらひですわ」
「きらひなら仕方がありませんね、私はまたいろいろと面白い事を、次々に敎へてあげようと思つたのに」
「そんな事、おぼえたいとは思ひませんわ」
眞紗美はどこまでも、意地わるく、しかも輕蔑するやうな聲を出して、彼を苛々させるほどに、笑つて見せた。中條は暫し默りこんで、急に何かをたくむやうに、笑ひかへしてゐた中條はいきなりつかつか眞紗美の傍に來て、
「佛蘭西の美しい公園を、一人の紳士が歩いてゐると、そこの樹蔭のベンチにゐる女が、嫣然としてよびとめますよ。そして、喃々嬌語する事半時間位で、女はその紳士の膝の上に、こんな風に……」
かういつて、中條は自分の膝の上に、眞紗美の身體を持つて來ようとして猿臂をのばした。
「まあ、何をなさるの？　そんな女の事なんか、をしへていただきたくはないわ」
するりと、彼のところをすりぬけて、眞紗美は言つた。彼女は心から火が發するやうに、憤りを感じたのであつた。
「そんな眞似はいやですわ、いやですわ、おどろいたお方ね、……そんな事は、未來の奥樣にお求めなさいまし、私はそんな事をおゆるしするわけはちつともありませんもの」
ずつと出口のところに走つて行つて、そこで赧くなつた顔をこちらにむけて怒つてゐる眞紗美のはつきりとした美貌を、中條は全身戰慄しつつ見守つてゐる！
「私もう歸りますわ、さようなら」
彼女がスリツパの音をさせながら下におりると、そこには藤子が出て來て、心配さうに立つてゐた。そしてすぐ後

からついて、二階から下りて來た中條を見て、
「大澤さんはもうお歸りになるんですか」と呟いた。
「ああ……今日は……もう歸られるさうだ……」
と彼は强ひて平氣らしく藤子にいつてから、眞紗美には、
「稲田さんの家へながい事ゆきませんね。いつか行きませう」と言つた、「近いうち一緒に行きませう」
「そのうちに……」
と眞紗美は半分しか言葉をいはないで、中條の家を出た。道々、彼女はかつてこれまでにない異性のあつかましい事を、興奮して考へてゐた。中條が、どこまでも甘美に、何かといへば、伊太利とか、瑞西とか、フランスとか、生物學とかいふ事を持出して、ぢりぢりとあつかましくすりよつて來る事が、惱ましくも忌はしいのであつたが、心の底には、單に、それを惱ましい忌はしいとのみ言つてもしまへないやうな心持をも感ずるのである。中條の見えすいた要求を、憤りながらも、そのさまざまのしぐさに、强い酒の蠱惑といつたやうなものをも好奇心をもつて感ぜずにはゐられない。彼女はふと、前によんだ事のある、モウパッサンの『女の一生』に出てくる、美貌で、無節操で、淫蕩で姦通を常套事にしてゐたドランゲン伯爵を想ひ出した。
「あんな男なのだ……中條といふ男は」
さうした好色な男として中條の事を考へると、彼女はそんな男に指一本も觸れさせまいと、覺悟をきはめながらももつと彼の狂奔が見てやりたい、もつと彼を苦しめてやりたいといふ氣持が勃然として起つてくるのである。自分の家に歸つて、ときめく胸をおさへながら、彼女はあつい息をついて長い間ぼんやりとしてゐた。
二三日の間、中條はたづねては來なかつた、毎日のやうに來てゐた人の來ないのは、かなり寂しいものである。

「中條さんがお見えになりませんね」

と、君江も、眞紗美に、なぜ來ないのであるかたづねるやうに呟いた。このごろ亮一が中條輝の來るのに惡感を抱いて、ちつともこつちに來ないので、君江も若い女の常として、いつからともなく、亮一よりも親しく目に見る中條輝の方を氣にしてゐる樣子である。

「お前そんなに、あの人の事が心配になるの？　きつと岡惚れしてゐるのよ。私さういつて、お前の心をあの人に傳へてあげようかしら」

例の戯れを眞紗美にいはれて、君江は、いつもの通り、もぢもぢして、うつむいた。

二

家と家とが近いところにあつたからでもあるが、眞紗美と中條輝との間には、殆んど婚約の人達のやうに、訪ねたり訪ねられたり、一緒にどこかに散歩したりする事が毎日のやうに續いてゐたのである。雨の降る日には、長い間、眞紗美の家にすわり込んで、たうとう夕食を眞紗美と一緒に食べる事もあるやうになつた。田端の研究所に留つてゐるといふ話であつたのに、眞紗美が知合になつて以來、出懸けてゆく氣配もないので、彼女が心配をしてたづねると窒素から榮養分をとる方の研究が一先づかたがついて、それの研究論文は、もう出して了つてあるのだから、その結果を待つばかりである、それで、行かなくつてもすむのだといつて、其次に來た時には、僕が大切なものを預けるからと言つて、一つの鍵の入つてゐる小箱を彼女の手に渡した、そして、これは私が研究所で一番大切なものを入れてある抽斗の鍵で、これを渡すといふ事は自分の死活を、あなたに委ねるやうなものであると言つた。こんなにされて見ると、眞紗美としては、信じない譯にも行かなくなり、一日も早く彼の成功を祈ると、言はずにはゐられなかつた。

彼女はあまり夜おそくまで、輝が話しこんで歸らない時には、君江に送つて行かせたり、むかうから藤子の迎ひに來るのを待つたりした。

「お兄さま、もうお歸りになつて下さい」と夜も大分おそくなつてから、藤子が玄關に迎ひに來ると、女同士のおもひやりから小さな笑顔を交しながら、眞紗美が彼を促して、藤子と一緒に三人で門のところまで出て行く事も度々であつた。

眞紗美の母親は、稻田からの紹介でもあり、且つ又、家がすぐ近所にレキとしてある上に、彼女自身も、どことなく中條輝を信じてゐるので、かうした事もさほどに、咎めはしなかつたが、然し、折につけては、あまり夜おそくまでおいでにならないように申上げねばいけない。どこまでも綺麗におつきあひをした後に、話がまとまれば、おまへをおよめに差上げてもいいことはいいとしても、今の內は、やはり誰れからも非難されないやうにしなければいけませんよ。亮一などはとりわけ、中條さんを惡く言つてゐますからと、言柔かに眞紗美に注意した。

いつ歸るか分らなかつた父の龍藏が旅から歸つて來た。重いトランクを、玄關の式臺に車夫がはこんで來た時そこに、家中の者が出迎へて、

「お歸りなさいまし」

「お歸りなさいまし」

と、次々に、辭儀をした。日燒けをして黑くなつた顏に柔和な微笑をたたへた龍藏は、

「お祖父さんは大分もちこたへてゐられるといふが、さうか」

と、妻に聲をかけて、次には可愛いい子供達の頭を一つ一つ愛撫して、最後に、眞紗美の立つてゐるそばに來て、

「おお！……」

と言つて、眞紗美の柔かな肩を沁々と見つめて、その眼には溢れるやうな慈愛と、讃美とがみちみちてゐるのだ。別に何にも言はないでただ、「おお！……」といつて、ながめるのだけれども、それは眞紗美の心には、どんな澤山な巧みな言葉よりも強くせまつてくるのである。

「お父さん、お土産は？」

と眞紗美はにこにこして言つた、すると妹達が急に思ひ出したやうに、

「お父さま、おみやげ、」

「お父さま、おみやげ」

と叫んで、前後左右からその着物にブラさがつて、茶の間の方におしつけてついてゆく。

「ウム、そんなにおして來たら、お父さんは倒れて了ふ、一寸、まて、一寸、まて」

ワイワイといつてさわいでゐるその父と、小さい妹達の様子をそばから見てゐると、眞紗美の心には、かつて、これまでどんな時に感じたよりも強い感情をもつて、父の戀ひしさ、父のありがたさ、ふかい養育の恩がおもはれた。彼女は離れたところにぼんやり立つて見てゐるだけでも、折角、自分のものとなる父の情が、空しくなるやうな可惜をしい心持、寂しい心持、羨しい心持などがして、彼女はたまらなくなつて、とんで行つて、父の後から父の首ッ玉にすがりついた。

「こんな大きな奴までが……」

と、龍藏は高い聲で笑つて、眞紗美を後にまはして、たくましい手でしめつけて、背中にしよつて歩きはじめた。

「父さん、わたしもね、」

「父さん、わたしもね」

と小さい子供は、やつきになつてついてまはつた。こんな騷ぎを、君江やばあやが、ころげまはつて笑つて見てゐる。

「お父さんの顏を見ると、眞紗美は急に赤ちやんになりましたね」

と、母は着替へをその片手にもちながらにこにことして言つた。

「まるきりききわけのない赤ちやんだから困つて了ふ」と龍藏は大汗をふきながら、「けれど眞紗美もいい娘になつたよ、靑白く、ひよろひよろしてゐるやうだと困ると思つたのだ、この分なら心配はない。留守中大分わがままをしてみなを困らしたらう！　君江が一番いぢめられたらう！」

「君江、どう？」

と眞紗美が赧くなつた顏に亂れた黑髮をかきあげながら、君江を見ると、可愛いい小間使はただにこにこするばかりであつた、

父の歸宅で、家中は急に緊張した空氣になつた。みんなが、留守中の時のやうに氣樂ではなかつたが、同時に充實した心持を味つてゐる事が、たのしげであつた。父の姿を見たり、父の聲をきいたりすると、眞紗美はこころよくひきつけられて了ふのだ。眞紗美はいろんなことを父と話して見たかつた。とりわけ、自分の身の上のひみつの事は、一層父と話をしてみたかつた。けれどもなかなかさうした暇が父にあるとは見えなかつた。本邸の方に、大方行つてゐて、歸つてくるのはいつとも分らないのであつた。二日目には、もう、明日にも小田原の方へ、四五日出て行くといふやうな事が母から傳へられた。

今度こそ父とくはしく話し入つて見たいと思つてゐた眞紗美はそれが非常に心寂しかつた。三日目の朝、彼女が部屋で原稿紙をちらかして、例のとほりしてゐるとそこへ父が入つて來た。

「勉强か、」
と龍藏はにこにこして言つた。
「ええ」
と眞紗美はうれしさうに返事をした。
「お母さんの話では、歌も大分上手になつたさうぢやが、先生にいい點をつけていただいたのを一つ見よう」
茶の湯や、生花と同じやうに、新しい歌のことをこんな風にいつて見る龍藏は、眞紗美から一綴の歌稿をうけとつて開いて行つた。
その歌稿の中に五六首ほど、眞紗美が自分の身の上のこと、妹が、眞實自分の妹でなく、母が眞實自分の母でないのに、少しもそんな事を知らなかつたもんだから可愛がられるにまかせ、したはれるにまかせて、わがままをしたり、いぢめたりしたことが、今、心にすまないとおもはれるといつたやうなものがあつた。父はその歌をすつかり眼をとほしていつた、眞紗美は父の表情が少しく變化するのを見たが、父から何にもきかなかつた。
「この頃の歌は、昔の歌のやうに、雅び一方ではないと見えるネ」
と龍藏は歌稿を机において、
「面白い事は面白い、けれど、今からいかに先生にほめていただいても、天狗になつてはいかんネ、いつまでも修業のつもりで勉强しなければいかん、」
眞紗美が父の心を安んぜようとするやうにうなづくと、
「身體の方も廿五までは、ひとりみでゐる方がいいと、病院の先生もいつてゐらつしやるのだから、氣樂に、家であそんで、勉强したり、旅もしたり、お友達もたづねたりして、幸福にやつてゆくのがいいネ、」

「お母さんの話では」と、眞面目になりつつ父はいつた、「結婚の申込が、先生の御友人からあるといふ事だが……それはもう先生の御友人ならば、立派な人にはちがひないとは、お父さんも思ふには思ふし、お祖父さんのやうに、四十にもなる人がいいとは思はぬが、このお父さんは、何しろおまへが身體が弱いから廿五までは家において、氣樂にさせておきたいつもりだから」
「私も」と眞紗美はいつた。少し赧い顏をして、「さうさせてもらへばうれしいのよ、お父さんのおつしやるとほり、廿五まで、あそんでもいいのですわ、それに中條さんは、もつとおつきあひして見ないぢや、分らないところもあるのです」
「若しそれが先生に對してわるいやうだつたら、お父さんが稻田先生のお宅へ一度伺つてお前の事を何くれおたのみしたい、そんな事も多少お話してもいいのだが……」
「それはいけないわ、お父さんのやうな實業家は、先生は、お話が出來にくくつてお困りになりますから、やめて頂戴ね、文壯の方はお父さんのやうに無雜作ぢやないのですから」
「それもさうだらうネ、やめてもいい」
と龍藏はいづれにしても、眞紗美の心には少しもさからはなかつた。
父が小田原へと立つた日に、眞紗美は中條の家をたづねて見た。取次に出て來た女中とは、もうかなり顏見知りなので心やさしくきいて見た。
「今日はお二人おそろひで、小石川へおいでになりましたの」
「お二人ツて、藤子さんとですの」
「ええ」といつて、女中はにやにやした。

「小石川つていふと、稻田先生のお宅へかしら」
「さうでございませうよ」と女中はいつた。
眞紗美はこの頃久しく稻田の家へ行かないので、自分もこれから稻田の家をたづねて見ようかと思つたが、藤子が一緒であるといふ事が心にひつかかつて、又明日にでも一人で行つて、久しぶりに稻田や磯子と話をする方がいいと考へて家に歸つて來た。
留守には影山女史が來て、彼女の部屋に通つて待つてゐた。
「おたづね申したいと思つてゐながら、貧乏暇なしでつい失禮してましたが、あなたこそお遊びにいらつしやればいいのに、手紙ばつかりでちつともおいでがないから、御病氣かと案じてゐたら、仄かにきくところによると、大變、情界に活動してゐらつしやつたんですつてね」
と影山女史は年增女の下品な洒落を見せていつた。眞紗美は美しい眼を賢くキラキラさせながら、あたりさはりのないところまで、野上草人の事や天鵞絨の貴公子の事を話した。
「フン……フン」と一かど、女戀愛哲學者であるやうに、きいてゐた影山女史は、
「何しろ、それは愉快でしたでせう」といつて、そのあとに、かの中國の海產問屋の息子石川俊夫の事を持ち出した。
「えこひいきなしに、こちらの方にも交際して下さいネ、」
「それは、御交際してもいいんです、けども結婚とか何とかいふ事は父が反對ですから、それは最初から私、考へに入れないで、お目にかかつたり、おつきあひしたいの」
「承知よ……さう言ひますわ、何しろ、私がたのまれてゐるのですから、あなたが承諾して下されば、私、大變助かりますわ」

二人の間には、明日の午後、石川と、影山女史と、眞紗美と、この三人で、銀座のレストオランの淸風軒で、晩餐を共にして、それから、あのあたりを遊ぶことの約束が出來た影山女史は、十分にその事をよろこんで歸つて行つた。

三

今日は銀座に行くまへに稻田の家へ寄つて、久しぶりにいろんな話をしたり、父のこともいつたり、中條のこともいつたり、歌も見せたりしようと思つて、眞紗美がその支度をしてゐるところへ、折りから無人のところへ、おとなひもなく玄關を上つて來たものがある。眞紗美が亮さんかと、部屋の障子を靜かにあけると、そこに中條輝がかなり瘦せた靑い顏をしてにやにやして立つてゐた。

「まあ、驚いたわ」

「驚いたの？　僕なら驚かなくてもいいのに」

「でも無斷で、上つてくるなんていけないわ」

「それは、すまなかつたからあやまります」

中條はこんなにいつて、沁々と眞紗美の美しい薄化粧の顏や、その襟や袖から、くゆりただよふ菫の香水をかぎながら、

「どこへ行くの」ときいた。

「稻田先生のお宅へ、そして、それから影山さんと、もう一人の靑年とこの三人で、銀座をブラツイて、（銀座人）にならうといふんですよ」

「どういふ靑年です」

かういつてきく中條の聲は變つてゐたので、心に、すぐに中條の心持を理解した眞紗美は、結局それが面白いやうな氣もしていつた。

「石川俊夫といつて、私の遠い親戚の一人息子なの……私に歌を見せたいといふのよ。でも、私にはとても歌のよしあしは分りませんが、お話ならばよろこんで致しますわといつたの、そしたらぜひさうしてくれといふのです。それに俊夫はそりや美靑年なのよ」

と眞紗美はいい加減にあしらつて、中條の變つてゐる顏色や、變になつてゐる眼を見た。

「あなたはもつと、自重する人かと思つたら」と中條は苦しさうにいひはじめた、「そんなに不謹愼では僕は苦しくて仕樣がない、僕にはあなたの自由な行動を束縛することは出來ないけれど……そんな風に、不用意に若い男の人と交際するのは心配です」

「なに、大丈夫ですよ、私は御交際は愉快に致しますけれど、それと結婚とは別ですもの、遊びたいだけ遊ぶのよ。火遊びの危險な事は言ふまでもないわ、危險だから面白いのよ、痛快よ、」

「何といふ自由な考へだらう、瑞西にも佛蘭西にも、そんな考へを抱く婦人はなかつた」

「まあ!」かういつたあとで、眞紗美は案外に、小心で、生眞面目で、可笑しな事をならべてゐる中條のみぢめなところが、皮肉に見えて笑つて見ずにはゐられなかつた。

「なぜそんなに笑ふのです」

かういつて、ツカツカと進んで來て眞紗美にとびついた中條は、その手の中に眞紗美の柔かで溫かい體を抱へて、そこに、自分の思ひのままにしてくれようと、髮を亂し、荒い息をはいてゐた、さうはさせじとあらそひながら、眞紗美は全身を波打たせながら、やうやう部屋の隅の方にかけて行つて、今のさわぎでもぎとられた翡翠の帶留のこは

れたのをその手にもつて、又もや唇を尖らして寄つてくる中條の横顏を、ピシリと馭夫がその革鞭で駄馬を打つやうに打つた、中條の頰には赤い一筋の打擊のあとが現れた。
「アッ痛！―
「いい氣味！　ひどい事をなさるからだわ、私を侮辱なさるにも程があるわ」
と、眞紗美は崩れてゐる帶をひきあげながら、部屋の外に出た。
十分ほどたつて、眞紗美が部屋に歸つて來ても中條は、そこに暗い顏をしてつッ伏してゐた、それを見ると、眞紗美は惻隱の氣持になつて言つた。
「お起きなさいましよ。をかしいわ、女に打たれていつまでも泣いてるなんて」
「泣いてはゐないけれど、あなたの亂暴にもおどろいた、まさか打つとは思はなかつた……」
「でも、あんなに出られれば、打つより外はないんですもの、私だつて、まさか、あのやうな事をするあなたとは思ひませんでしたからね」
「僕は、ほんとに、あなたにかかつちやサンザンだ。稻田さんが、あなたを、僕に紹介してくれたのを、今どんなに怨んでゐるか知れない、僕はあなたの爲にすつかり失敗して了つた。」
「僕の例の窒素から榮養分を取る研究は、惜しいところで、不成功に終つたと昨夜研究所から言つて來たのです、今もう一步といふところで、私があなたと、あそびにふけつて怠けたから、駄目になつたのです、從つて、殘念乍ら次の機會まで、もう一度研究をし直さなくちやならなくなつたのです。そこで、急な話だが、近々に田端の研究所はやめて、僕の鄉里の、山口縣のK町へ歸つて、そこに新しく僕一個人の研究所を建ててもらつて、引籠らうと思ふのです。それで妹と一緒に、稻田さんの家へ今日お別れにいつて、貧しいあの人に卓上時計をおくりものにして歸つて來

たんです。あなたとあまり歩き廻つたので、すつかり健康も害してゐるし、詩集も、母があなたの事で、すつかり誤解して、金を出さないので、僕は八方ふさがりになつて了つて、國へ歸るより外はないのです」

「それはいいわ……」から言つて、眞紗美は皮肉に笑つた。

「私も御賛成しますわ、このごろすつかり痩せてゐらつしやるから、田舍へ行つてお丈夫になるのがよろしいわ。私のため、私のためとおつしやるのだけども、さうでもないわ。けれどいづれにしても、私は賛成せずにはゐられませんわ」

「僕は、この二ヶ月を、すつかりあなたに、ささげて了つたやうなものです」と中條はなほも、「けれど、僕は少しもそれを悔いてゐるのではないのです。僕の郷里の上杉町は、別に見るところもない寂しい町ですが、少しはなれたところに、虹が濱といふ所もあつて、そこは、夏、今頃いいのです。

僕の家は、十疊敷が五つもあるから、どこでも氣にいつた部屋を、あなたに提供しますから、すぐ、あとからでもいらつしやい。ね、藤子もきつと喜びますよ」

「虹が濱なら、私知つてゐます、あそこには私の父の友人の別莊があつて、私は、五年程病氣保養に、しばらく行つてゐたんですもの」

と、眞紗美は心に山陽道の美しい海岸地を思ひ出しながら言つた。

「ぜひ來なさいね、そして、もつと樂しい日々を送りませう、あなたが來てくれるとそんな喜ばしい事はない、僕の研究もどんなに、進捗するか知れないし、ほんとに、僕は幸福を感じますよ。藤子と、あなたと、僕と、三人手をたづさへて、海邊の道を歩きませう。あなたには歌や詩の收穫が隨分ありますよ」

「ええ……それにしても、十疊の部屋が五つもあるといへば、ほんとに大きい邸宅ね」とナイーヴに言つた。

その時、中條輝の顔は變に歪んだ。そして寂しい顔をして沈んで行つた。

「あなたを見ないで、暮す日の事を考へると、僕はかなり苦しいのですが、しかし、あなたがすぐあとから來て下さるなら、こんなうれしい事はない。きつと來て下さらなければいけませんよ、きつとですよ、」から言つてゐる彼の顔を、眞紗美が見るともなく見ると、いつわりならぬ涙が、その瞼にギラギラと宿つてゐるのであつた。

「きつとまゐるやうにしますわ」と眞紗美は慰めるやうに言つた。

鍵をもつて、中條輝は、いつもとはちがつて、萎れきつて靜かに歸つて行つたので、眞紗美は意外な心持となつていつまでも玄關にもたれてぢつと物思ひに沈んだ。

彼女は外出の興味も失つたのであつたが、約束もあるので、稻田の家はやめて影山女史の家へのみ行つた、そして、かの石川と三人づれで銀座へ出て行つた。

眞紗美は影山女史が骨折つて、自分に親しませようとする石川の、六尺に近い立派な體格と、柔道二段たとほこるその猛烈な腕力と、我儘らしいそのものの言ひ方などが、どんなみにくい男にも、又それぞれの見所のあるのに比べれば、十分讃美していいだけの男性としての魅力のあることは感じた。けれどもいはば、豫感といつたやうな心持から、かうした男性は、うつかり不用意には近づけない、腕ツぷしがしつかりしてゐて、わがままで、むくちで、亂暴なだけ、これまでの野上草人や、中條輝のやうにはゆくまいと思ふのであつた。

淸風軒の二階で、食後のサラダをたべてゐた時、石川俊夫は、四五日前、萩原といふ靑年の小說集を出した出版の祝賀にいつて、そこで大喧嘩して勝を得た事を話してゐた。

「どんな樣子でしたの、くはしくお話しなさいネ」

と影山女史が、息子をいとしむやうに顏をさしのぞいてたづねると、無口な彼も話し出した、

「僕が、萩原のために立つて演說をしたのです、ここにゐる萩原君の小說は、たしかに日本一の作であり、ここに會した幾田蝶一先生の歌は日本一の歌であり、新進歌人としては、僕の歌が日本一であるといつたのです。すると、會衆はみんな同感して傾聽したのに、たつた一人、千葉文夫といふ男が、不贊成演說をした、それで僕が再び立つて、反ばく演說をすると、又千葉が、不贊成だ、日本一とは高慢だ、人間はもつとけんそんでなくてはいけないといふんでね、僕も腹が立つたから、外へ出ろ、ピストルできめろと言つたのです。ウン、よし、『ピストルででもナイフでもいい』と彼奴も叫ぶしね……ところが、ようてたかつて、友人が彼奴を外へなだめて連れ出して、決鬪はおジヤンになつて惜しかつたが、彼奴のみじめな弱さが、それは痛快でしたよ」

　すると影山女史はすつかり滿足したやうに、

「さうなると痛快ね！　大いにやりませう……」と大きに喜んで、眞紗美の顏に、同じ同感を促がさうとした、眞紗美は、石川の顏をぴつたりと見てゐた、そして、こんな男は、この女を得ようとすればどんな腕力をでも――それは女が抵抗する事の出來ない――ふるつて、征服しようとする男にちがひない。こんな男にかるい氣持で入つて行つて、野上草人や中條のやうにつきあつてゆけば、その最後には自分の屈服以外何もないといふ事が、はつきり分つたやうな氣がした。

「石川さんのやうな方は」と眞紗美はいつた、

「この女を得ようとすれば生命がけでせうね」

「生命がけですとも！　僕は、何でも猛烈な性分ですから、これをかうしようと決心すれば直往邁進しますよ」

「その女がそむいたら！」

「殺して了ふよ！」

といつて聲高く笑つた。眞紗美も笑つて「よほど決心して、戀しなくつちや、大變ね」とじろりと影山女史の顔を見た。

「でも、殿方は、それほど思ひこみの強い人が、たのもしいのよ、眞紗美さんのやうな氣性の人は、石川さんとはよくあひますよ」

「さうでせう」

と眞紗美はいつて、皿をガチヤガチヤとフオフクでならしながら、アスパラカスをきりきざみ、もてあそび、時時石川の顏を見上げた。

私は外に用があるからといつて、影山女史が一足先きに滿風軒を出たので、二人はおくれて、銀座交叉點に出て、そこから上野の方へ、ゆるやかに話しつづけながら歩いて行つた。二人の前方にも男女づれがむつまじく歩いてゆくし、ふりかへると、後にも二人づれが歩いてくる。商店のショウウヰンドウには、高價た寶石がその光を發してゐるし、吳服屋には絢爛なメリンスや友禪ちりめんが、目を眩するのである、時々のぞきこんで見たり、立止つたりしては、又歩いてゆく。

中條輝と三越に來て、このやうにして歩いたのは、まだこの間であるのに、今は、石川俊夫が、側を歩いてゐるのだ。どうして、この世の中の男は、このやうに若い女を愛したがるのであらう、なぜこのやうに、若い處女に氣に入られようとつとめるのであらう。眞紗美は、石川の巨軀にぴつたりとよりそひながら、世の中には、こんなに若い男からチヤホヤされたくてもされない女もあるのだといふやうな事を考へた。そして、自分の今の自由と、享樂とを、たのしみに思へば思ふほど、むざむざ花を散らすまい。出來るだけつぼみのままで、美しく、あでやかに生きてゆきたい。いつかは男の情熱の火の中に、いづれは燃える火の中の花と消えて行かうとも、それは今ではない、今日の前

にゐるこの男のためには、さうはなりたくないと思ふのであつた。
中條などとはちがつて、これといつて話題のない石川は、眞紗美に氣に入られようとして、苦心してゐて、とはうにくれてゐる樣子である。それが眞紗美の心に興味があつた。
これといふ事件の發展もなく、なにかかうものたりない氣持の中に、神田で石川と別れた眞紗美は、夕方ではあつたが、小石川の方にまはつて稻田の家をおとづれた。
磯子も稻田もよろこんで彼女を迎へた。
「父が旅から歸りましたの、そして、お禮にまゐると申すのですけれど、父は、實業家でどうしてもお話がちがひますから、私がやめてもらひましたの」
眞紗美は疲れてはゐたが、ここに來たのを、心がおちつくもののやうに話をした。
「昨日、中條さんがお國に歸るからといつて、お妹さんと一緒にお別れにおいでになりましたよ」と磯子は言つた。
「藤子さんがおいでになつたさうですね」
「何だか、顏の色のわるい髮のうすい方でしたわ、唯だまつてらしつたのですが、中條さんのお話では、詩や歌は作らないが、婦人問題に興味をもつてゐて、女權擴張といふ事を論じた論文も書いてゐるし、ジョージサンドの飜譯も多少してゐるから、こんど國から送つてよこすから、ぜひ稻田に見ていただくがいいと申してゐましたよ」
「誰のですの？」
「藤子さんのです」
「藤子さんがまあそんな事が出來るでせうか、さうでせうか、私にはちつともそんな方には見えませんでしたけれど」
と眞紗美は、半信半疑といつたやうに首を傾けた、「それにしてはあんまりおとなしすぎますわ」

四

中條輝とその妹の藤子とが、山陽道の方に歸つて行つてから四五日ほどして、眞紗美のところへは、二人からの手紙が同封になつて來た。輝の手紙には、自分は、自分の實家であるK――町の家に、藤子と一緒に二日ほどゐたが、家があまりに廣すぎるので、研究には不適當なので、今ではK――町から少しくはなれた虹ケ濱に來て、一軒の別莊を借りて住んでゐる事、附近の風景の非常に佳い事、自分も藤子も、毎日朝夕は海岸を散歩するので、次第に健康となりつつある事などを書きつらねて、都合のつき次第、出來るだけ早く、當地へ遊びにおいで下さる事を、妹とともにお待ち申してゐる。あなたとお知り合ひになつてから、一月あまりの間の記憶は、私にとつてある意味からは苦痛でもあつたが、しかし、その苦痛も問題にはならないだけの幸福もあり、快樂もあつたと思つてゐる。東京を去つて以來、私はひとしほにあなたを見ない事が寂しいので、こちらに來て下されたらそれにこした事はない。あなたの事を常になつかしく思つてゐる私は、あなたが、石川俊夫とかいふ不良少年とお交りにならない事を祈つてゐる。日本の文士といふものの十中八九までは、卑屈な多情多淫な人物にみたされてゐるといつても過言ではない、その中でも特に、歌人と來るとたまらないものだから、あなたが不用意に彼等と御交際になるのは、どんなに危險であるか知れないと、その誤字の多い稚拙な手紙を結んであつた。

藤子は非常に達者な文字で、在京中のいろんな禮をのべたあとへ、兄が非常にお慕ひ申してゐて、毎日のやうにお噂をする事、どうぞ淋しい私達の事を忘れず、お手紙を毎日でもおめぐみ下さるやうに、遠い汽車の旅行故いかがとは思ふが、もしおいで下さる事が出來るのであれば、兄は申すまでもなく、妹の私もにぎやかになるので、うれしく、うれしくお迎ひ申しますと、墨濃く書いてゐるのであつた。

父からも母からも、旅行をすることはいつも奬勵される眞紗美は、祖父の病氣も今は小康を得てゐるので、今年の夏は何處かに旅行したいと思つてゐたが、これまで、京都へ行つた事もあり、奈良に行つた事もあり、虹ヶ濱にも四年ほどまへ、十日ほど父の友達の金山といふ人の別莊があつて、そこに暮した事もあるので、かの仲のいい兄と妹とが、一つの家をかりて住んでゐる美しい虹ヶ濱に思ひ切つて行つて來ようかといふ氣になつた。

父の龍藏が小田原から歸つて來た夜、眞紗美は夜の食事のあとで旅に出たいといつて見た。

「このごろ夜もよく眠られないし、心がいらいらして仕樣がありませんから、旅をするときつといいと思ひますから、行きたいのよ。それには、虹ヶ濱へ行きたいのよ。金山さまにおたづねして御都合がよかつたら、いつてもいいでせう」

「それはよからう」と眞紗美に對して一番あまい父の龍藏はすぐに同意をした。「お祖父さんも、今が今といふ事はないのだから行つてくるがいい、金山さんに手紙を出して、別莊の方の御都合をきくがいい」

「さうなるとほんとにうれしいわ」

母には勿論こんな場合反對はなかつた、母が自分の生みの子供はいつも片手で隅の方におしやつてでも、眞紗美を自由にさせてくれる人である事は、皆に理解されてゐた。眞紗美の性質が、誰にも魅力のあるところから來るのと見えて、こんないはば生さぬ仲の間柄ながら暗い空氣はないのである。

「虹ヶ濱へ行けば、この間お國におかへりになつた中條さんといふ方もあちららしいから、おたづねしてもいいだらう」

と母はいつた。

「ええ、おたづねして見るつもりよ」

と眞紗美は答へた。

問ひ合せの手紙を出した金山といふ人からは、虹ヶ濱の別莊には、今丁度胃腸病で病んでゐた夫人が、病後の療養に行つてゐて、日々の單調に倦んで淋しく暮してゐるから、もし令孃がおいでになつて下さるとすれば、きつと喜ぶにちがひないから、御遠慮なく行つて下さるようにといつて來た。

眞紗美は萬事好都合にゆく事がうれしかつた、其の上、もつと都合のいい事は、本郷の方で結婚してゐる亮一の兄の禎夫が、京都まで商用でゆくので、つれて行つてもらへばいいといふので、それが一層、道中の不安を案ずる親達には安心を與へ得ることとなつたのである。

旅慣れた彼女には、別段あわてるやうな事はなかつた、君江を相手にして、トランクの中を入念に支度して、白のあかしのかるい單衣に、赤のまじつた單衣帶をしめて、銀扇子を懐にさし、見送りの亮一と君江と自動車にのつて東京驛へといつた。

「眞紗美さんに言つておくがね、虹ヶ濱についたら、まづ一番に、彼の中條といふ男がどんな人間で、どんな家の息子で、どんな生活をしてゐるか、よく見なくつちやいけないぜ。僕がついて行つてあげたいのだが……僕はきつと僕の推察通り不良な奴であらうと思ふのだ、だから、君が行くといふ電報なんか打つてはいかんよ」

「亮さんは、はじめッから中條さんを不良にきめてゐるからいけないわ、私はまさかそんな事はないと思ふのよ、けれど、電報なんか打たないで、いきなり行くのも面白いから、電報は金山さんだけにしませう」

と、二人の話しあつてゐるのをきいて兄の禎夫がたづねた。

「その男はどういふ男？」

「どうも變な男なのです、眞紗美さんはすつかり信用してゐるのですが、去年まで、瑞西や佛蘭西にゐた生物學者で、

フランスでは、R――大學にゐたといふのです、兄さんはあちらを廻つて來られたから、公使館の日本人の會合か何かで、おあひになつたはずですがね」
「中條といふのです」
「きいた事のない姓だが……ひとつしらべて見てもいい、ナニ、すぐに分るから」
こんな會話を停車場の待合室で交してから、たつた一人の旅となつた眞紗美は、八時の一二等の列車に二人はのりこんだのであつた。
京都で禎夫と別れてから、若山牧水の『旅』の歌集をその膝において、時々よんで見るかと思ふと、又、車窓を眺めたり、扇をつかつたりして、汽車の進行毎に、近よつてくる面白い謎について、ほほゑんで見たりした。彼女は、亮一のよくいふほどに中條を信じないのではなかつたが、これまでの彼と、彼の妹の云つた事や爲た事に多少の疑問を見出さずにはゐられないのであつた。
神戸、岡山、廣島とだんだんに南の方へと降つて、瀨戸內海にのぞむ長汀曲浦のながめ、いくつもの大小の島々の風光を見ながら、山陽線をずつと下の關まで行つた事のある人は、眞紗美が次第にその眼にのぞませた虹ヶ濱の美しい松原を思ひ出すであらう。
明るい波打際には、三々五々、人がうづくまつたり步いたりしてゐた。海水浴場となつてゐるあたりには、白い天幕がひらひらと日にはえて、赤い旗が飾られてゐたりした。汽車が海岸線にそつてゆく間、海の涼しい風が、心も淸くなるほどにふきすぎて、海のオゾンの香が、肺の弱い眞紗美に、快いしげきとなるのであつた。十日でも、十五日でもこの海岸を、この月見草の咲く海の、近くの土堤を自由にあるいたら、どんなに身體はたつしやになるであらう！
眞紗美は四年前ここであそんだ、この海邊の村の少年達、色の黑い子供達が、今はもう京都とか大阪とかにいつた

り、又もう一かどの漁師になつたりしてゐるであらう事を考へてゐた、いつも忘れてゐた當時のこの漁村の子供が、彼女の心の底から、ポカリ、ポカリと浮いてくるやうに、思ひ出されて、あんな子供もあつた、こんな子供もあつたと思ふのである。それは何といふたのしい事であつたであらう！

松原の中には、別莊の家が少しづつ見えるのである。松原の彼方には町が見えるのである。汽車がその町の中に入つていつて停車場にとまつた時、眞紗美は改札口のところに、見覺えのある金山氏の別莊の爺やがつつ立つてゐるのを見た。電報を打つておいたので迎ひに來てくれたのである。

爺やがトランクを持つて、停車場を出た眞紗美は、そこで俥をやとつて、爺やよりも一足さきに松原の中にある金山氏の別莊にむかつた。夫人とは見知りごしであるので、一別以來のあいさつなども心易くすまし、湯に入つて身體をやすませ、その翌日は又一夜、東京のことをさまざまききたがる夫人の相手をして、白い麻の蚊帳の美しく垂れた八疊の二階の一室で心ゆくまで話をしたのであつた。

「ほんとに、あなた位御幸福な方はございませんわ」

と夫人は、かつらのやうにきれいに結ひ上げた恰好のいい廂髪のために、小さく見える寄い顔を、禮儀正しく、微笑みに色づけてもてなしてゐた、「結構なお身分でございますのね、お父さまお母さまはお可愛がりになるし、お美しい御器量ではいらつしやるし、御金は、おありになられるし、何不足といふ事がないのですもの」

「そんなに見えましても、實は決して幸福ではございませんの、ほんとに、困ることは、結婚問題でございますのよ」

「さう、さう……」と夫人は誇張して云つた、

「御結婚が一番今のところ大問題でございましたね、けれど、皆さん、折角御心配でございませうから、今に銀時計をとつた外交官であるとか、しつかり腕のある政治家とか、さういふ方面のいいお方がおきまりになりさうですね、」

「ところが、私は外交官も政治家も銀行員も大嫌ひですのよ……奥さま、私ね、困りますのよ。お祖父さんは、澤山方々からもつてくる男の人の寫眞を、蟲眼鏡で次へ次へ御覽になつては、これは生意氣だ、これはにやけてゐるとか申しましてね、おしまひに四十になる病院の院長さんがいいつておつしやるのですのよ、私ひとり、つまりませんわ。父は二十五までは獨身でゐるがいいと申しますの。私が身體が弱いものですから、私は父の申すとほりにしようとは思ふのですけれども……實は、この虹ヶ濱へ、私と結婚したいといふ一人の青年の事を、それとなくききにまゐりましたのですわ」

「まあ！ それは……」といつて夫人は、こんな緣談にはやはり興味を感ずると見えて、膝をすすめて云つた、「何といふ方でございますの。何でしたら私も出來るだけきいてさしあげてよろしいのです、どなたですか」

「中條輝と申します方……」とあつさりと眞紗美はいつて、別に心あたりのないやうな夫人の顏をまじまじと見ながら、「御存じございませんか、その方はなんでもこの虹ヶ濱の人ではなくて、K——町の方に實家がありましてね、お父さんは陸軍中將で、今シベリヤに出征してゐると申してゐましたわ。昨年まで西洋にいつてゐて、歸朝したばかりの方なのですの。その方は、私のお親しい先輩のお宅で御紹介下さいましたんですの。交際をしてゐて、趣味なり、いろんな事が理解が出來たら結婚致してもいいつて事でございまして、もう一月あまりもおつきあひ申してゐますのですわ」

「K——町の方ですね」それぢやあの時々變な風態をする方ぢやありませんか、異樣な恰好のビロードの服を着たりして、ブラブラ歩いたりするやうな方ぢやございませんか」

「ええ、さうなのですよ」

「ではあの人ですよ、分りました、分りました……」と夫人は膝を叩いていつて、その調子には、何ともいへない洒

落な氣分（案外な！）をふくませた、「あれは、東京では中條と申してゐるかも知れませんが、實は、本姓は磯元と申しますのですよ、そして、Ｋ——町の實家は、實は旅館なのでございますよ」

「旅館と申しますと？」と眞紗美は、腑におちない事を、何のツギホもなくきくので、當惑して、問ひ返した、「どうして旅館なのでございますか」

「ほんとに何も御存じないのでございますか」

と夫人はその靑の團扇で、白い胸に風を入れながら云つた、「あの男は、Ｋ——町の磯元といふ旅館の女將が、生みの母親でしてね、父親といふのが、東京とかにゐる軍人で、それも陸軍中將なんかではありませんよ、たかだか少佐位でせうよ、そんなわけですから時々東京へ行くので、いつもＫ——町にはゐないやうでございますよ、けれど時々歸つて來ては、變な風體をして歩くので、皆は毛嫌ひしてゐるやうです、」

「道理で……」と眞紗美は驚きから囘復して叫ぶやうにいつた、「Ｋ——町の實家は十疊敷が、五つもあるからと申してゐましたのよ、旅館ならあたりまへだわ」

可笑しくなつて眞紗美が苦笑すると、夫人も一緒に笑つてから

「あの男の事なら、家の爺やがもつと何かよく知つてをりますよ。昨年の秋ですよ、あの男が東京からおふぢといふ細君といつしよに歸つて來てゐました時にね」

「おふぢツて云ふと」

と眞紗美がにがいやうな不安におそはれて問ひ返した。

「御存じがなかつたのでしたね、ちつとも。あの男はもう細君もあり子供もあるのでございますよ、その子供も二人……上の女の兒は、旅館の女將が育ててゐるとの事で、その下のは二つ位で、これは東京へつれて行きましたさうで

す。その細君はこの虹ヶ濱の漁師の娘で、さほど美しい娘といふわけでもなかつたのですが、磯元へ手傳ひに行つてゐる中に、息子とそんな風になつたので、すつたもんだしてゐましたが、結局嫁になつたのです、あの時、十六でしたから今は二十四位になりますよ」
「さう……それが藤子さんなのね……」
「多分さうでせう、漁師の娘から、大きい旅館の息子の嫁になつたのですから、土地での評判にもなりましたし、親もよほど喜んでゐると申した事です、出世は出世でございますものね」
「まあ、おどろきましたわ、漁師の娘だつて！」
と眞紗美はかういつて見て、東京であのやうに取りすましてゐた、髮のうすい脊のすらりとした藤子のおどおどした姿をありありと思ひ浮べたのである。
「ほんとですか？」
「ほんとですとも、爺やにおききになつても宜しいですよ、もつと分りますから」
「では、もつとききたいわ」
眞紗美は門のそばの住居にゐる爺やがよばれてくるのが待ちかねられた。爺やは夫人に問はれることを一つ一つ大きくうなづいて見せた。そして、一番最後に齒ぐきを見せてにやにや笑ひながら、
「あの男にあふと、痛いッといふほどひつぱたいてやりたいのが、私の癖でございまして……」
と言つて、そのわけは、彼が色情狂であるからだと言つた。そして夫人の顏を見ながら、
「海岸に出てゆく町のあの裏通りに、K——町の材木屋の妾がありましてな。それが美しい妾なので、評判になつとりますと、あの磯元の道樂息子が毎日のやうに、あの變テコな洋服で、その上寫眞の器械まで持つて、お妾さんの家

のまへで、しきりに、パチンパチンやるものですから、お妾さんもツイ見たくなつて家を出たのでございますよ。すると、寫眞そこのけにして、馬鹿踊りをはじめて、有頂天になつて、傍の溝へおつこちましたわい」

「まあ、何といふ馬鹿な事」と眞紗美は苦しくなるほど笑つたのであつたが、そんな假面が取り去られ、ほんとの事が分つた苦しみの方が強くて、輕い笑ひはおしつぶされて了つた。

「ひどい男ね、ほんとに、」と眞紗美は言つた。

「先生も、先生の奥樣も、すつかり欺されてゐらつしやるわ……」

「その事を、東京では誰も御存じなかつたのですか」

「ええ、ちつとも……先生も先生の奥さまも、洋行がへりの陸軍中將の令息で、獨身で生物學者だと思つてゐらつしやるのです」

「よくまあ、そんなに欺しおほせたものでございますね」

と夫人がいふと、爺やは首を傾けて、

「それはきつと、金持の娘さんをひつかけようとして作つた狂言でありましてナ」

と喝破したのである。

五

其夜興奮してほとんど寢る事の出來なかつた眞紗美は、翌日の晝すぎ、夫人が一應は止めたのであつたが、それを言ひなだめて、決して失敗はしないからといつて、俥をよんで彼の仲睦まじい兄と妹――內實は夫婦のすんでゐる家へと向つたのであつた。

伜の上で、眞紗美はいろいろと考へた。今は、彼等に、もつとも效果のあるもつとも立派なやり方で、復讐がしたいのである。彼女は、彼等がどんなにしてゐるかが一刻も早く見たかつた。それを見てそして、ズバリと、匕首のやうな切れ味のある言葉で、自分のないがしろにされた立場をとりかへしたかつたのである。

伜は町をはなれ、街道を疾驅して山に近い方へと走つて行く。十五六丁も行つて橋を渡つてから、一かたまり家のかたまつた、一番はしの方の、小さな門のある板塀のところに來た。伜がとまつたので、門の標札を見るとそれには中條輝といふ名刺と、磯元といふ大きい門札とが並んでゐた。

門を入り、松葉牡丹の咲いてゐる庭のほの見える玄關に立つて、眞紗美は、

「御免あそばせ」

と聲をかけた。暫く待つてゐると、玄關に近づいて來る足音がして、やがて眞紗美の前に立つたのは、幾枚かの手拭ひを集めて縫つた、袖も裾もツンツルテンに短い着物を着て、細いよれよれの帶をかるく結び下げて、その胸をブワブワさせてゐる藤子であつた。不用意に、何のたしなみもなしに出て來た藤子は、その眼の前に立つてゐる美しい絽の羽織の薄化粧した眞紗美を見ると、フラフラと喪失する人のやうな表情をして、すぐには言葉が出ないのであつた。

「藤子さん、びつくりなすつたでせう」

「…………」

「お兄さまは？」

「兄でございますか？」

とやうやうにかう言つてから、心を引立て、あだかも、しつかりしなくては、すつかり看破られて了ふではない

か！　と自分の心をしかるやうな樣子で、
「ほんとに、お出で下さるのを知つたら、停車場まで迎ひに行くのでしたものを」
「いいえ、私はあなた達の不意をおそひたかつたのですよ、その方がずつと面白いと思つたから」
「意地のわるい事……でも、よくいらつしやれました事、そして、お荷物は、……」
「いいえ、私はね、父の友人の金山さんのお別莊がお宿なの。一昨晩つきましたのよ、そして、昨日一日休養して、今日出掛けてまゐりましたの、お兄さんは？」
「兄は……町の方へまゐりまして、まだ歸つてまゐりませんの。さあ、お上りあそばせ。お二階へまゐりませう、海が見えてお涼しいから……私まあこんな失禮な樣子をして……」
眞紗美を二階に通し麻の座蒲團をすすめ、婦人雜誌を四五册そのところに並べてから、藤子は着物を黑い縞の銘仙の單物にきかへ、東京でいつもしめてゐためりんすと紫の繻子との晝夜帶をお太鼓にして、紅茶を入れてはこんで來た。
「ほんとに、兄は喜びますわ、眞紗美さん眞紗美さんツてお噂をしない日とてはないのですもの。今にも歸つてまゐりましたら、夢かと思ひますわ」
「………………」
眞紗美はその口元にかすかな苦笑をたたへながら、まだ眞紗美が何にも知らないものと思つて、東京にゐた時と同じ風に、取りなしはじめた藤子のこれといつて特徴のない、まとまつた顏を見たのである。
「兄はこの間、あなたの事をおなつかしく思ふ心を、十首ほどの歌に作りまして、私に見せましたの、今夜あたりそれをかいたお手紙を、東京へおくつてお目にかけるのでございましたよ、」

「そんな事をお兄さんがなすつても、あなたは少しもお苦しくはございませんの……藤子さん……あなた、平氣でおいでなのですの」

「平氣といひますと」

藤子は冷やりとしたやうな顏をして、じろッと眞紗美を見て目をそらした。

「さうですよ、私はね、そんな心にもない事を、私に言はなければならない、貴女がお氣の毒なのよ……あなたの心が、お苦しくないはずはないんですもの。中條さんは、あなたの御良人の外の何者でもないではありませんか？　それのに……ねえ、藤子さん……それのに、……なぜあなたはそんな事が私にお言ひになれるのでせう」

眞紗美はたたみかけて言ひつづけた、

「そんな事を言つて、あなたは自分がエライ事をなすつてゐらつしやるやうに思つてゐらつしやるのですか。自分の愛のためには、一番にくい、一番苦痛な私といふものに、よくまあ、御自分の良人を取り持つやうな事が、あなたは苦しみなしにお出來になりますのね、藤子さん……おつしやつてごらんなさいよ……あなた苦しいんでせう。でも、仕方がないから、そんなに僞つて、妹だといつはつて、私をいい加減馬鹿な目にあはせてゐらつしやるのでせう」

「……………」

その全身を硬く硬くさせて、うつむいてゐる藤子は、眞紗美の聲の切れた時に、ヒイ……と聲を上げて、泣き出して、そこにつつ伏したのであつた。

「何にも私は知らなかつたものだから」と眞紗美も涙を眼がしらに浮かばせはしたが、強い心を取り直しながら話しかけた、「何にも知らず、ただ紹介して下すつた、先生や先生の奧樣のお言葉を信じてゐたものですから、こちらに來て、金山の夫人にうかがふまでは、ちつとも、さうとは知らなかつたのですよ。藤子さんはなぜ、私に、もつと早く

私に、中條は自分の良人ですと、たつた一言いつて下さらなかつたのでせう、その一言をいつて下さりさへすれば、私も馬鹿な目にあはなくつてすんだし、あなたも苦しまなくてすんだのではありませんか、そんな御辛抱は、エライどころか無智だと思ひますわ」

「そのとほりでございますわ」と藤子は懐から紙を出して、僅かな間の悲しみにすつかり亂れて、みにくくなつた涙の眼をおさへながらくりかへした、「ほんとにすみません」

「すむもすまないもありませんわ、……すんだ事は仕方がないわ。私、あなたが、この虹が濱の漁師の家の娘さんだつて事も知りましたの、そして、中條さんに見染められて、御結婚になりましたつて事も知りました。それだけでも十分結構なのに、その上、私まで二人がかりで、おもちやになさらうとするのですもの、こんなひどい事はありませんわ」

「さういふ譯ではなかつたのですの、それにはいろいろ深い譯があつて……」

「深い譯つて……それは私にも、あなたが、中條さんとさうした結婚をしたのだから、あの方のする事は何一つどうのかうの言へなくつて、屈從するより外はなくつて、どんな事でもしなければならなかつたのであらうとは思ひますけども……それにしても、あなたは、私を、あまりに、わけの分らない女だと思ひすぎましたのね。私は、中條さんに、妻子もあるのに、それを横取りしてまでも、愛し愛されようとは少しだつて思ひはしませんでしたよ。私は知らなかつたのですもの、そして私は中條さんにはじめつから少し變なところを感じてゐたのですよ、分つて見れば、私はもう中條さんに對して厭惡があるばかりですわ」

「お腹が立つのでせうけれど、どうぞね……どうぞ、ゆるしてやつて下さいましね、眞紗美さん、中條は少し病氣なのですから」

「それもききましたわ、少しアブノーマルなのでせう、お妾さんの前で、馬鹿踊をして溝におつこちたつて事ですもの……そんな事きけばきくほど、あなたがお骨が折れるだらうと思つてお可哀さうよ、でも、これからもう私の事はちつとも心配なさらなくつてもいいわ！」

「中條は、稻田先生のお宅であなたにお目にかかつてからこちら、もう心からあなたをお慕ひ申して、私がどんなに申しましてもききいれないのですもの。そして又、意氣地のない、馬鹿な私には、それが私に、苦痛ではあつてもあなたにおたのみして、お力になつていただくより外はございませんでしたの」

「中條さんは、あなたが婦人問題に興味があつて、女權擴張に關する論文を書いてゐるからつて、稻田さんでおつしやつたさうですが、あなたのそんなお考へは、女權擴張とは反對の現象よ」

「私のことを勝手に何のかのと申しますの、何しろ中條は變つてゐますので困りますの」

二人が互に話をしてゐる時、階下に、玄關の開く音がして、母をよぶ子供の聲と、妻をよぶ中條輝の聲とが、一緒に藤子を呼んだ。

「母さん、母さん」

「母さん、ゐないのか」

その父子の聲をきくと、藤子はハッとしたやうになつて、眞紗美の方をむいて伏目で、

「どうぞ、ゆるしてやつて下さいまし」

と言つた。

「御心配なさいますな」

と眞紗美はきツぱりと返事をした。

階下に降りて行つた藤子はなかなか上つては來ないのであつた、ぢつとしてゐる眞紗美の耳には、女の子の話し聲と、中條の聲とがただ一度聞えただけである。無智で忠實な藤子が、眞紗美にすつかり眞相をしられて了つた事を、その夫に話して、夫が、急に、眞紗美の前で、面目をつぶさないやうにと、用意してゐるのであらうと思つた。

「どんなに藤子が、取りなして見ても、」と眞紗美は思ふのであつた、「中條をひどい目にあはしてやる！」

藤子が先に立つて、上つて來て、その後から井の字絣の大柄の湯上りに、自墮落な帶のまき方をした輝が、にやにやしながら上つて來た。そして、眞紗美の前に坐つて、

「おどろきましたネ、だしぬけに來るなんて、ひどいですね」

と言つた。

「豫告しておいては、眞相が分りませんからね」

「それはそうでせうがね」と輝はにが笑ひをして、「僕等が夫婦だつていふ事をもう御存じださうですね」

「ええ、やうやう知りました、狂言がうまいものですからうまくだまされて了ひましたよ」

「だましたわけではないのですよ、むしろあなたを欺したのは稻田氏夫妻です、あの物事に對して、甘い、世の中知らずの詩人夫婦が、ヒトリギメに、僕を獨身者で、洋行歸りで、生物學者だときめこんで、ワイワイさわぐから、僕も、そんなにもてはやされてゐる氣はしないから、一つその洋行歸りの生物學者で、ひとり者になりすまして、享樂するだけ、德だと思つただけですよ、詩人も詩人、稻田氏のやうな甘い詩人も少いです、あはれみを感じますね」

「口の惡い事！」

「これ位言つてもいいのですよ、だますものがわるいのではなくて、だまされるものがわるいのです」

「では、あなたを稻田先生に紹介した洋畫家の齋藤さんは、あなた達が御夫婦である事は知つてゐるのですか」

「あの男が知つてゐるなら、この藤子にラブレタアをよこしたりしませんよ」
から言つて中條輝は笑つて見せた。
「あの男は、來年僕が亞米利加經由でフランスへ再遊するから、その時つれてゆくと言つてやつたら、夢中になつてよろこんでゐますよ、あの男も甘い男です」
「何をきいても驚く事ばかり……」と眞紗美はいつて、
「私はおかげで助かりましたわ、男の人がこはいつて事もよく分りましたし、馬鹿々々しいつて事もよく分りましたからね、まつたくおかげですわ」
「それでね、眞紗美さん、」から話しかけて、階段のところに首をさし出してゐるおカッパにした女の子の笑顔を、フッと見ると、藤子の背をついて、「あけみが上つて來てゐるよ」と注意した。あけみと呼ばれた母親似の男の子が、母親の藤子に抱かれて階下におりてゆくと、ふと晝寢の眼をさましたも一人の子の泣き聲も起つた。
「子供のある事をあなたに對してかくしてゐたのはすまない事でしたよ、然しわるい氣があつてではないのですから許して下さい、そして、これからどうぞ、兄と妹といつたやうに、交際して下さいね、折角親しくなつた二人ぢやありませんか」
「いいえ!」と眞紗美は聲をはつきりとさせていつた、「私は、藤子さんとは御交際致しましても、今日かぎりあなたとは絶交致しますわ」
「なぜです!　なぜ絶交です。亞米利加でも、フランスでも、妻子のある男と、相愛の仲になるのは、ロマンチックで、却つて、趣きのあるものとして、誰れでもやつてゐるのです、それが文明人の間における美しい現象といつてもいいのです」

「もう、亞米利加や、フランスのロマンチックな例などは澤山！　私は、あなたのやうな人夫(つま)の愛よりも、もつとよい熱烈な愛をささげる人があるですもの、その人は私を生命がけで愛して、私がもしその人の愛を入れなければ、私の胸にナイフをさしこんで了ふといふのですもの」

「石川俊夫がさういふのですか」

　中條輝はかういつて、その顏色が變つたのである、「もうそんな事を話してゐるのですか」

「ええ、さうですよ、石川さんは美男子ですの、脊も高いし、その顏の美しい事、それは誰の目にもつきますのよ。あの歌人の幾田蝶一先生は、南歐の女優のやうに美しい青年だと稱讃しましたわ。赤い唇の持主でしてね、私すつかり囚はれて了ひましたわ」

「僕、その男を見てやりたい、きつと不良少年だから」

「そして、あなたは？」

「僕はゼンツルマンです」

「ひどいゼンツルマンだこと！　ゼンツルマンでもなければ美男子でもないわ、私はあなたの赤黒い皮膚や、紫がかつた、腐りかかつた無花果のやうな唇や、どろりとした眼を見ると、心がくもつて濁つて來ますわ」

「ひどい事をいひますね」

「ちつともひどくないわ」

「…………………」

　座にゐたたまらなくなつたと見えて、中條輝は、次の部屋へ立上つて行つたが、それと入れかはりに、藤子が夕食の膳を二人前持つて上つて來た。

「まあ、こんな事はいけませんせん、私もうおいとま致しますのよ」
暗い夜の道を藤子におくられて、眞紗美は町の方へと歸つてゐた。藤子はこれまでの暗いおどおどした樣子とはちがつて、感激した樣子で、うれしげに眞紗美に話しかけてゐた。自分の良人の戀の碎け散つた事がいふまでもなく、彼女の心から壓迫をとり去つて、心たのしくするのでなくてはならなかつた。
松原の下をとほると、そこには涼しい海の夕風が通つてゐた。二人は浪の音をききながら歩いてゆくのであつた。
「私、何といつてお禮申していいか分りませんわ」
「お禮なんて……あたりまへですもの、私ちつとも愛なんかはなかつたんですもの」
「でも、中條をゆるしてやつて下さいましね。そして、是れまでのやうに……」
「また、藤子さん、私はそんな事いやですよ。私、中條さんのお妾ぢやないんですもの……」
「……………」
藤子は返す言葉がないと見えて、何の返事もなくうなだれてゐる。
澤山の星が空には輝いて、月はまだのぼつてゐなかつた。

愛の小鳥

一

そんなに夜更けてもゐないのに、この染井の郊外の道には、人通りもほとんど絶えて、兩側に並ぶ家々の生垣や、竹垣や、板塀などの彼方には暗い、もう人々も寢靜まつてゐる氣配で、稀れに灯影が雨戸のすきまから見える家はあつても、何の物音もしない。勤め人の多いかうした郊外の時々ポツリポツリとともつてゐる街燈をたよりにして歩くことは、慣れてゐないものにとつては、一寸爪先があぶなつかしいやうな氣もされる。

「君、そこには穴があつたかも知れないよ。」と小柄な尾村は、左側を歩く楠本にかるく注意をした。

「あ、さうか。」と脊のすつきり高い楠本は輕く受けて、そして高い頭を上げて空を見て、秋のはじめのやや濃い瑠璃色に晴れてゐる空に、冴え冴えと光る星の影の落著いた感じを見て、

「いい星空だな。」と呟いた。

「いい空だ。」と尾村も親しげにそれに答へてから、「ところで君、さつきの話の續きだが、君はまつたくそんなに結婚を急いでゐるのかね。」と小聲で云つた。

「ああ、さうなのだ。君の家では細君もゐられたし、あんまり僕一個人のうちわの話をしてもどうかと思つて、差しひかへたが、實を云ふと急いでゐるのだ。もつとも、急いだところで、こればかりは、さうさう此方の思ふとほりになる筈はないがね……兎に角僕としては、多少の缺點はあつても、僕の心持さへその女に對して動くなら、他の事はほとんど問題ではないのだ。そして僕は、その女の素質さへよければ、自分でどんなにしてでも、それを僕の妻として僕自身の滿足の出來るワイフに教育するだけの力はあると信じてゐるのサ。で、そんな婦人があつたら、出來るなら、いつも僕の身を案じてゐる母に、僕の身のかたまるのを見せ、ワイフを引合して安心させてやりたいのサ。こん

な事は、何とも平凡な事で、君から見れば可笑しいかも知れないが、然しまあ、僕にはさうした平凡な孝心がある。」
「それはいい事だよ。」と尾村は云つた。「だが、君の氣に入るといふだけで、君のお母さんに氣に入らないやうな人だと困るぢやないか。」
「それは困るに相違ない。だが、そんな問題は、母の氣に入つて、僕の氣に入らぬワイフを持つ苦痛にくらべれば、何でもないサ。だから僕はどこまでも自分本位でワイフをきめたいものだと考へてゐるのだ。どうせ僕の家では、僕がこんなにして、學校を出てからも何一つしつかりした職業を持つぢやなし、ごろごろしてゐるのを喜んぢやゐないのだ。僕が將來、文學者として相當の他位でも得たら兎に角、今のところでは、自分の仕事を理解してくれるものが、周圍に一人もゐないのだから、それだけ僕は、僕の好きな、僕を理解してくれる妻に傍にゐてほしい。多少の缺點位は何でもないのサ。こんな氣持だから、僕は大膽に、誰かこの人といふ婦人に、直接ぶッつかつて見たいと思ふ。それで若し君の方で、さういふ人があつたなら、僕に紹介してくれないか。君が僕の氣に入りさうだと思ふ婦人なら、屹度僕の氣に入ると思ふ。君は僕を幼い時からよく知つてくれてゐるのだから……」
「さう云へばさうだが……」と尾村は云つて、「まあ氣をつけておくとしよう。」とたのもしげに云つた。
やがて廣い通りに出たとき、
「何か飲みながら、もつと話をしたいね。」と楠本は尾村を振返つて云つた。

二

廣い通りに出てからも、かうした場末では、もう戸をおろしてゐる店が多く、燈を明るくしてゐるのは小さな蕎麥屋か、汚ない鳥料理位のものであつたが、大分行つてから、やつと西洋料理を見附けて、二人はその中に入つた。三

ところ位の卓の上には、少しぐつたりしたコスモスを一二本さしたベースが置かれて、ソースや燒鹽などのガラス器具が、みすぼらしい影をその卓上に落してゐる。家の娘と思はれる十六七の肩のほつそりした女が、
「いらつしやい。」と云つて、それまで見てゐた表紙のちぎれた雜誌を投り出して、誂へを訊きに來た。
「君、何を取らう。」
「何もいらない。」と尾村は云つた。
「それぢやね。」と楠本はその女に、麥酒を持つてくるやうに云つて、敷島の包を袂から出して、マッチをすつた。尾村も同じやうに煙草を出した。
「僕は君なんか、あんまり結婚を急がぬ方がいいと思ふんだがね。」と尾村は煙をプッと吐いてから云つた。「僕たちのやうなプロレタリアだと、一度さういふ機會を取りはづすと、それきりになるといふ事もあるが、君などは餘裕はあるし、候補者も次々にあるんだらうから、そんなに急ぐ事はないぢやないか。」
「そりや、家で貰つてくれる女に滿足が出來れば、さう急ぐ必要もないんだがね、然し僕は自分で見附けたいのだ。結婚といふ事を眞面目に考へるやうになると、何處迄も自分の意思を貫徹したいと思ふんだ。」
「結婚すると、いろんな意味で生活が複雜になつて來て、うるさい事が多いよ。獨身の者がうらやましい位なものだ。」
「そんな事位わかり切つてゐる……だが、結婚した者はみなどうも同じやうな忠告をするものだね。」と楠本は笑つて、灰皿に灰を落した。
麥酒を一二本飮んで、飮みながら話に興が乘つて、ひとしきり經つてから、この西洋料理店を出て、そこで二人は氣輕に別れた。
尾村はもと來た道へと引返しながら、ふと思ひついて、まだ起き殘つてゐた菓子屋で、四つになる子供の、明日の

お目覺のカステラを一袋買つて、それを懷にねぢこんで、屋敷町の道を、早足で我家の方へと歩きながら、輕い麥酒の醉ひを感じて、いい氣持であつた。彼は思ふともなく自分の家に來る妻の友人の中で、容姿の美しい未婚の婦人を、あれこれと思ひ浮べたが、適當に思はれるのは一人もなかつた。

「なかなかむづかしい事だぞ。」と彼は心に思つた。彼が今の妻と結婚したのも、實はそのむづかしい事であつたとともに、またフッとした無雜作な事でもあつた。結婚をしたいと考へてゐた間は、途方もなく、纏想のないむづかしい事で、心はかなり苦しかつたのに、いざ結婚といふ時には、彼女と知合つて、彼女の心が分つて、自分も心を打明けてからは、樂々と事がはこんでしまつたのだつた。

彼は結婚してからこちら、四年間の夫婦生活を考へて見た。見のがす事の出來ないのは、この四年間の苦しい生活の中で、一介の畫生である自分に、蔭ひなたなく盡してくれた妻のしつかりした氣性がどんなに有難かつたかといふ事であつた。その事を考へると、人間は早くとも晩くとも、チヤンスさへあれば結婚するがいい、勿論楠本も早く結婚するがいいのだと彼は思つた。

家に歸ると、彼は菓子の袋を細君の手に渡して、ドッカリと坐つてから云つた。

「オイ、楠本君に丁度いい女(ひと)を見附けてやりたいナ。」

三

尾村悦吉は畫家にならうとしてゐる男ではあつたが、他人の眼からは、畫の方よりも、寧ろ社會主義運動に熱中してゐるやうに見られた。だが、その方でも、すつかりその仲間に入つてゐると云ふのではなかつた。彼は口を開けば社會主義の理論や、勞働運動の形勢などについて話した。そしてその話題そのものの中に溺れてゐるやうに見えた。

彼が社會組織の不合理を憤り、虐げられた者、貧しい者を憐れんで特權階級の横暴を痛罵する時は、その眉は揚り、その頰は熱して、輪廓の正しい彼の秀麗な風貌は生彩を發して來るのであつた。彼は何處へ行つてもよく話し、よく論じた。その一方に、プライドの強い彼は、自分の不遇な境遇や、苦しい生活については、決して愚痴をこぼすやうな事はなかつた。人の惡口を云ふ事もなく、下品な事も決して云はなかつた。彼の缺點は、意志が弱くて、何事にも實行力を缺いてゐる事だけだと云つてもよかつた。

尾村は交友はかなり廣い方だつたけれど、既に一家を持つてゐる友人と云つては、麻布に住んでゐるN――女學校の英語教師の今井博位なものであつた。今井は彼の上京當時からの友人で、もう七八年近い交際であつた。故鄕以來の友人楠本直哉の熱心なたのみに、あれこれと周圍を物色してみた時、彼はこの今井博の事を思つたのである。今井ならばその手近に、婚期をひかへた處女の四人や五人は知つてゐる筈であつた。いつ行つても、社會主義の事や、畫の話や、文學の話ばかりで終つてしまふのだが、今日は、一つ友人楠本のために、今井に一言賴んで見ようと考へて、彼は自分の家を出た。

今井の家は、麻布でも廣尾の近くなので、その廣尾の停留所で電車を下りて、左へ入つて、すたすたと步いて行くと、自分の少しさきを行く一人の若い女に、彼は眼がとまつた。

黑と臙色とであしらつた派手なパラソルをさして行くその若い女は、年の頃は多くても二十歲を出たばかり位に、尾村には見えた。思ひ切り派手な色地に草花模樣のメリンスの單衣に、凉しげな紫の夏帶を輕くむすんで、その手にカアネーションの花を紙で卷いたのをさげて、フエルトの紅緒の草履を輕く踏みしめて行く。

この若い女が、今井の家へ入つて行く煙草屋の角を、案內知り顏にその儘すつと入つて行くのを見て、直ぐ彼は、これは今井の家に行きつけてゐる女なのだナと悟つた。彼はかういふ時には、よく氣のまはる人間だつたので、少し

遲れて自分は訪ねようと思つて、そこの煙草屋に立ち寄つて、まだ煙草はあつたが、敷島を一つ買つて、それからずつとその邊を一廻りして、十分位も費してから、今井の家の玄關に行つて見ると、かの紅緒のフエルトがそこに並んでゐた。

玄關に出て來た女中に彼は訊いてみた。

「今井君はゐられますか？」

「はい、一寸待つて下さいませ。」

から云つて女中が引込んでから少したつと、主人の今井がその痩せぎすな姿をそこに現した。

「やア君か、あがりたまへ。」

「來客ぢやないかね。」

「いや、いいんだ。」と主人は云つた。

それぢや細君の方の客なのだナと考へながら、彼が今井の書齋に通ると、次の部屋で、ひそひそと話してゐる聲と、華やかな婦人の聲とが、時々聞えるのであつた。

四

尾村は、隣室でここの細君と話をしてゐる若い女に、妙に逢つて見たかつた。どんな顏をしてゐる女かしら、後姿を見ただけなので、一層その顏が見たいのだつた。聲は襖越しに洩れて來るので、今井との話の間々に、じつと聞くと、自分の妻や、ここの今井の細君などとは、ずつと違つた、不思議に甘い感じのする聲附である。特別にいい聲ではないが、妙に異性の胸に沁む力をもつた甘い聲である。その聲だけで、少くとも、肉附のいい、色の白い、ふつく

らとした丸顔が目に浮ぶ……。然し、その女の客に會つて見たいとは思つても、女房持ちの自分が、そんな事を云ひ出すのも變だしと、一寸、考へ込んでゐた時、今井が、
「オイ、煙草がなくなつたが……」と隣室で話し込んでゐる細君を呼んだ。
「煙草ならここにある。」と尾村は云つて、先刻一つ餘計に買つたのを今井の方に出した。
「いや……どうも。」と今井は輕く云つて、やつぱり間の襖の方を見てゐる。すると、
「いらつしやいまし。」と、その襖を開けて、細君が、色の淺黑い痩せた顏を出して、微笑を含んで尾村に挨拶した。
「またお邪魔に來ました。」
「いいえ、ごゆつくり……」と言ひながら、細君は買ひおきの煙草を二箱ほど盆に乘せて出した。
「先生今日は……」と細君の後から甘い聲がきこえた。
「ああ、今日は……」と今井はニコニコして云つた。
「鈴子さん、いいんですよ。こちらのお客樣は、いつも宅へいらつしやる方ですから、ずつとこちらへいらつしやいナ。そしてお紅茶を一緒に飲みませう。」と細君が振返つて云つた。
「え、ありがたう……」とその女は云つて、ずつと出たので、丁度尾村の横へ半身が出たやうである。尾村は何だか温かいストオヴの傍にでもゐるやうな氣持になり出した。が、わざと澄まして、彼女に會釋をした。そして無關心な樣子で、今井との話題をすすめた。彼が娘の顏を見たのは、紅茶をのんでからであつた。
「お國はどちらです?」と彼は纖穗もなく聲をかけた、娘の黑目がちで、頰が下ぶくれの、南國的な感じのする稍や厚い唇を一目に見て、これはなかなかセンチユアルな娘だナと感じながら。
「わたしは福岡でございます。」

「ぢやここの奥さんと同じお國ですね。」
「ええ、同じところでございます。」
「極く近いんですの。」と細君も云つた。
娘との會話はこれぎりで切れた。それから又もや以前の話をつづけてゐると、その間に細君もその娘も、次の間に引込んでしまつた。そして間もなく、どうやら娘が歸つて行くらしい樣子であつた。
「君の家には、いつもいろんな若い婦人が來てゐるね。今の娘は今度はじめて見たが……」
「さうだらう。」と今井は一寸笑つて云つた。「家に來たのも、二度目か三度目位だから。」
「なかなか美人ぢやないか。」
「君にさう見えるかね。」と今井はまた笑つた。
「もつとも型通りの美人といふ譯ではないが、容貌の何處かに、ぐつと明るい生き生きした表情があつて、笑つたり何かすると、可愛らしい女だと思つた。」と尾村は氣がさすやうに云つた。

五

鈴子も歸り、續いて尾村も歸つて行つてから、細君が書齋に入ると、今井は微笑して云つた、
「尾村君が鈴子さんを美人だと云つてゐたよ。」
「まあ、さう。」と細君は興味深さうに云つて、「表情があんなに生き生きしてゐて、甘やかだから、尾村さんの眼を惹いたのね。さう思へば、尾村さんの好きになれる女のタイプは、鈴子さんのやうな方かも知れませんね。」
「尾村君は、もう僕等は若い美しい女の人について、何も云ふ資格はないなんて、彼らしい調子で云つてゐた。」

「えらく謙遜なすつたのね。」と、細君は笑つた。

「それはさうとして。」と細君は夫の顏を見ながら、「鈴子さんは私に何處か賄つきで、親切に世話をしてくれる家を見附けてくれないかと仰しやるんですよ。この前一緒に來た妹さんは、名古屋のお母さんのところへ歸つたので、これから一人で東京にゐると仰しやるのよ。若い女が一人でそんなにして、これといふ事もしないでゐると云ふのは、私には心配に思はれてならないのですけれど、あの方は、私は母と氣が合はないし、名古屋に歸ると、母は年頃過ぎた女がブラブラしてゐるのは、みつともないから、東京で裁縫女學校へでも行つてゐるがいいつて云ふのですつて……ね。それも無理のない事でせう。あれで二十二や二十三になつてゐるのでせうからね。」

「そんなになつてゐるだらうか、僕は十九か二十位かと思つたが。」

「どつちにしても、もう婚期におくれてゐる方ですよ。だから、あんなに暢氣にしてゐるのが不思議な位ですわ。」と細君は云つて、首を襟にうづめて默つた。

今井の家では、その主人の博は女學校に週に三四日行くばかりであとは飜譯の內職などをしてゐたが、子供は一人もなかつたので、細君は寂しいせゐか、どちらかと云ふと、人の世話の好きな方であつた。それで學校の方の女の人をはじめ、鄕里からの女の人とか、いろんな方面からの若い女の訪問客が、相當に多かつた。

今日の女の來客――小林鈴子もその一人で、まだ淺い知合ひであつたが、細君と鄕里も同じかつたし、同じ女學校を出たといふ關係もあつて、細君にはとりわけ親密に感じられる理由もあるところから、もうすつかり古くからの交際と同じ樣になつてゐて、鈴子は遊びに來ると、よく話し込んだ。

彼女は一體に、物事に包みかくしのない性質で、思つた事は思つた通りに、好き嫌ひをはつきり云ふし、物の見方などにも、至つて率直なところがあるので、今井夫妻には、直ぐに彼女のさうした善いところが吞み込めた。

彼女は二度目に遊びに來た時に、自分の身の上の大體を話して行つた。それによると、二三年前母親が事情があつて離婚の身となり、名古屋の方に來た時、彼女も妹と共に母について父の家を出たのであつた。「母はね、なかなかきつい性分なのよ。昨年も仲に入る人があつて、父ももともと通りになれと云つてくれても、もうかうなれば一人の方がどんなに氣樂だか知れない、夫なんか要らないつて云つて斷つてしまつたのですよ。そんな母ですから、妹や私が結婚がおくれても、何とも思つてゐやしません。」と彼女はさう云つて、困ると云ふやうな顏をした。

六

今井の家を出てから、尾村悅吉は眞直に停留所の方へ歩いて行きながら、考へるともなく、今會つたあの甘やかな容をしてゐた可愛らしい婦人について考へてゐた。謂はば彼は彼女が好きになつた。彼自身がどうかうといふのではないが、深い意味ではなく、その好きといふ事だけははつきりとしてゐた。そして、彼女の印象を思ひかへしながら、あの自由らしい甘いセンジュアルな柔かい眉目を、紅いダリアの花でも眺める詩人のやうな心持で、味つて見るのだつた。そして彼は先夜、親友の楠本が、君の氣に入る婦人なら、屹度僕の氣に入ると思ふと云つた言葉を思ひ出した。「さうだ。」と彼は思つた。

彼は今井の細君に楠本のたのみを話して、あの娘の事を訊いて貰ひ、恰度いいやうであつたら楠本に紹介して貰はう。それからさきは楠本の問題なのだと彼は自分に云つた。そして直ぐにも引返して賴んで見ようかと思つたが、それは餘りに輕卒だと思ひ返して、二三日後にしようと考へた。

まだ午後二時頃なので、この儘歸つたところで、別にする仕事もないし、それに元來が彼は人に親切な性格であつたので、兎に角、楠本に會つて見る氣になつて、電車を品川行に乘り替へて楠本の家のある大森へと向つた。

彼は今日のあの娘が、楠本の氣に入るタイプの女だといふ事を信じてゐた。文學者にならうと考へてゐる楠本は女優とか、女流作家とか、女學生とか、いろんな女に、一通りは交際して來てゐて、女に對して決して何にも知識がないとは云はれなかつた。だが尾村には、さういふ楠本にしても、今日見たあの娘ならばいいと云ふに違ひない。若しこれがうまく行けば、楠本にとつては、どんなにいいか知れないと思はれた。友人思ひの彼は、まるで自分自身の問題ででもあるやうに、心がソワソワするのを、自分でも氣が附いてゐた。

大森の山手の七八丁入つたところで、赤い瓦の二階建の、目立つて大きい一構へが、楠本の父の家で、彼はここにまだ部屋住の身であつた。彼の父はなかなかの手腕家で、北海道の方の或る漁業會社の重役をしてゐて、時折にしかこの本宅へは歸つて來ないので、この廣い家の中では、母と彼とが、二人の女中をおいて、靜かに暮してゐるのだつた。彼は末の息子で、上の二人の兄はそれぞれ、もう結婚して一人は米國の方へ、一人は父とともに北海道の方に行つてゐて、母の氣に入りのこの末の男の子である彼だけが、まだ獨り身であつた。彼の方角違ひの文學者志望は誰からも理解されはしなかつたが、またそれ程やかましい問題にもされないで、今に年をとれば、いづれ實業方面に出るものと、帝大の法科を出ただけに、皆に期待されてゐるといふやうな彼の境遇であつた。

「この間は失禮。」と尾村は、小ざつぱりとした楠本の二階の書齋に通つてから云つた。

「僕こそ失敬した。あれからどうしてゐた?」と楠本は云つた。

「實は今日今井君の家に行つたんだがね。」と云つて、尾村は今井の家で會つた娘の事をいろいろと話してから、「君が會ひたいやうだつたら、出來るだけ骨を折つて見よう。」と云つた。

七

一週間程たつてから、尾村は再び今井の家を訪ねた。今井は恰度學校に行つてゐて留守であつた。いつもならばそれつきり歸るのだが、今日はあの頼みがあるので、彼は細君に會ひたいと云つた。そんな事はあまりない事なので、細君は洗ひ髪を肩に垂らした儘出て來て、

「こんな風をして失禮ですが。」と云つて茶菓をすすめながら、「暫くお見えになりませんでしたね。」と云つて、不思議さうに尾村の顏を見た。

「いや、國から客が來て、ゴタゴタして、少しも出られなかつたんです。」と尾村は眞面に答へた。かういふ風に、國から客が來たといふのは、大抵尾村が暫らく來ないでゐた時の定り文句のやうになつてゐるので、細君は一寸微笑した。

一體、世間には鄕里の人間と妙に氣の合はない人もあるが、また、別して鄕里の人間と離れられない人もある。尾村悅吉がその後者であつて、彼のところには、始終鄕里のいろんな知人が來てゐた。今度も彼が、あの娘の事について今井の家に行つて、もつと詳しく訊いてくる事を楠本に約束してから、家に歸ると、鄕里の上京客が來てゐて、その人が泊り込んだので、毎日、その話相手をしたり、一緒にくだらない外出もしたりして、氣も附かないうちに一週間位たつた。その客が歸つたので、やつと肩の荷がおりたやうな氣持で、今井の家を訪ねたのであつた。

「この間の娘さんは度々來るんですか?」と尾村は、暫くしてからさり氣なくきいた。

「この間の?……」と細君は云つて見て、忽ち、この人があの鈴子を好いてゐるといふ夫の話を思ひ出して、ニツコリして云つた。「ええ、あれから一度位いらしたでせう。今日位また來るかも知れませんの。」

「あの娘さんはどういふ考の人ですかね。」と尾村はいくらか照れるやうに云つた。「やはり英語を教はりに來てゐるんですか?」

「いいえ、英語を勉強するなどといふたちの人ではまるきりありませんよ。裁縫女學校に入ると云つて、國から學資を送つて貰つて、その實、ああして美しくお化粧して、あちこち親しい家を訪ねては話したり遊んだりしてゐて、ほんとに氣儘一杯にしてゐらつしやるやうですよ。」

「そんな女の人があるつて云ふのは不思議ですね。幾つ位でせう。」

「さあ、廿でせうか。それとももつと行つて廿二三でせうか。」

「僕には十九位に見えましたがね……女の人は若く見えるものですね。」と尾村は笑つて、「今何かローマンスのある人ぢやないんですか、いろんな事を訊くやうですが……」

「さあ、あると云へばあるらしく見えますわ」と細君は答へて、ふと思ひ附いたやうに「あの娘さんに誰かいい方がありさうですか？」とからかひ氣味に云つた。

「さあ、」と尾村は苦笑して、「いや實は僕の友人の楠本といふのが、結婚の候補者を求めてゐましてね。まあ、僕が見ていいと思つたら、それでいいから是非面倒を見てくれと云ひましてね……」

「さういふ事があつたのですか。」と細君は輕く笑つた。「どうもあなたが餘り熱心だから可笑しかつたのですよ。」

「それは寃罪ですよ。もつとも、僕にとつて感じのいい女だつたからですが……」

「ええ、あの女は可愛いらしい方ですよ。まるで子供のやうで、自分でも氣儘が一ばん好きだと云つて、好き氣儘にしてゐますがね……この間のお話では、あの方の今交際してゐるのは、あなたも御存じでせうが、あの新進の日本畫家で、三年程前に、帝展に入選した津川さんといふ方ですよ。」と細君は云つた。

八

津川といふ日本畫家と鈴子との交際が、どの程度までのものであるかと云ふ事は、今井の細君もよくは知らなかつた。が、何とか楠本のために面倒を見てくれないかと云ふ、尾村の熱心な言葉に引き入れられて、彼女ももつと詳しい事を訊いてみてもいいと約束した。そしてその夕方、夫の今井が歸つて來た時、その話をすると、

「餘計なおせつかいをすると後で困るぞ。」と、夫に戒められた。

彼女も結婚の世話といふものは全く、好んですべきものではない事は知つてはゐたが、もともと女の性癖として、そんな事に興味があつたので、若い人達が知合ひになつて、睦まじい家庭を持つのはいい事だから、適當な人を紹介する位の事はさうおせつかいと云ふ程でもないと、心の中で思つたのだ。

尾村の話では、その楠本といふ求婚者は、なかなか面白いしつかりしてる人物のやうに彼女には思はれた。それで兎に角鈴子が來たら、彼女と津川との間柄が、何處迄進んでゐるものか、訊いて見ようと思つてゐると、二三日して晝すぎに、鈴子がいつものやうにお化粧して、いそいそして訪ねて來た。

「今日は大變お元氣ですね。」と、彼女の愉快さうな顏を見て細君は云つた。

「ええ、今日は氣分がいいんですの、そこら中飛び廻りたいやうな氣がしますわ。」

「さう、それぢや一緒にそこまで出て見ませんか。わたし一寸した買物もありますから。」

から云つて、鈴子のうなづくのを見て、細君は鏡臺を出して髮を撫でつけたり、顏を刷いたりして、身支度をはじめると、鈴子もその後から、鏡臺を借りて顏を直したり、髮をさはつて見たりした。

家を出て一二丁行つた時に、細君は鈴子の方をかへりみて云つた。

「鈴子さん、あなた、津川さんの家へ此頃行つてらつしやるの？」

「ええ、一昨日と昨日と二日續けてお訪ねしたのよ。先生からお手紙でお呼びになるもんですから……」

「お訪ねになつて、何かお手傳ひでもなさるの？」

「いいえ、別にお手傳ひはしませんわ。かへつてお邪魔をするんですが、非常にいい氣分になれると云つてお喜びになるんですの。」と鈴子は樂しさうに云つた。

「津川さんでは、此頃どんなものを描いてゐらつしやるの？」と細君は問ひを進めた。

「あんまり大きいものは描いてらつしやいませんわ。近いうちに大作にかかると云つてらつしやるだけで……直ぐお金になる註文のお仕事ばかりに追はれてゐらつしやるのよ。」

「そんなにお金をお取りになつてらつしやる？」

「ええ、隨分働いてゐらつしやるのよ。こんなにやくざな仕事ばかりしてゐると、筆が荒む荒むとこぼしたから、なさつてゐますわ。」

「あなた、モデルにおなりになるの？」と細君はじつと鈴子の表情を見ながら云つた。

「いいえ、わたしなんかとてもモデルには駄目！　でも、先生は、一度鈴子さんをモデルにして描きたいと仰しやつてますの。そしてわたしがお訪ねすると、どんなにお忙しい時でも、いつも筆を擱いてお相手をして下さるのよ、それはそれは親切なのよ。けれど、少しでも長居をすると先生のお姉さんが、隣のお部屋に來て、いろいろ當てつけがましい事を仰しやるので、工合がわるくて、わたし直ぐ歸りますわ。」

から言つてから彼女は、津川に親しめば親しむ程、その姉なる人が氣になつて、自分はその人には嫌はれてゐるものと思ひ切つてゐる樣子をあらはに見せるやうに呟いた。

「そりやむつかしいお姉さんなのよ。」

九

二人は話しながら、やがて、この麻布で一番賑やかな十番の通りに出てゐた。鈴子はめぼしい店屋の飾り窓の前には、きつと立止まつて下駄やら、新柄のメリンスやら、小間物類などに、しきりに見惚れては、今井の細君をかへりみて、あれがいいとか、これがいいとか、いろいろと品評するのだつた。

「なにお買ひになるの？」と鈴子が暫く行つてから訊いた。

「いい色合ひの半襟があつたら、此店で買ひませう。」と細君は云つて恰度さしかかつた半襟店に入つた。

店頭の臺に一杯に並んでゐる半襟を二人が見てゐると、番頭が

「こちらの方に上等のがございます。」と云つた。今井の細君はそこへ行つて腰をおろして、番頭の持ち出す半襟の箱の中から地味な半襟を取出して見てゐると、その傍らで、鈴子も藤色や、緑の地の自分に似合ひさうなのばかり取り出して、一生懸命に見てゐる。

「あなたも氣に入つたのを一筋お取りなさいな。」と細君は云つて、自分が定めたのと、鈴子が選んだ藤色のその代を拂つて外へ出た。

なほ二つ三つ買物をすましてから、二人はもと來た方へ話しながら引返した。

「わたしにはネ、藤色の襟がよくうつると、津川先生は仰しやるのよ。」と鈴子は云つた。

「津川さんのお姉さんは、いつもどうなすつてゐらつしやるの？」と細君は話を來た時の續きへと持つて行つた。「どうして津川さんと御一緒にゐらつしやるのですか？」

「あのお姉さんは、何か事情があつて、男の子一人を連れて、早くに離婚して、もうずつと十年近くも、津川先生と

一緒の家で、お裁縫教授をしてやつて來てゐる方ですの。ですから、ほんとにしつかりしてゐて、倹約家で、世帶持が上手ですけど、わたしなんかから見れば、みじめで、そんな暮し方なんか、ウンザリするのよ。あんなにまで切りつめた暮しをして年がら年中、世帶だとか交際だとか云つて齷齪しないだつてよささうなものだと思つて、わたしあのお姉さんの痩せた身體を見ると、何だかつらくなるのよ。」と云つて、鈴子は眉をひそめた。

鈴子の話では、津川の家では、津川自身、このしつかり者の姉の前には、殆んど頭が上らないのである。彼と姉との間柄は、普通の姉弟のそれとは違つて、まるで母とその子との間柄のやうであつて、しかもそれが何處迄も習慣的なもので、姉だけですべての事を切り盛りして、謂はば弟の生活を一からげに引きしめてゐるやうなものであつた。もつとも、かうした姉があつたればこそ、津川もこの五六年間、好きな繪の方に自分を打ちこんで、たうとう帝展に入選するまでに成功し得たのだと云つてもよかつた。從つて、彼が自分の生活方針をきめるにも、姉を中心にして考へるやうにし、姉の意見といへば、大小によらず立て通すやうにしてゐるのも、彼としては無理のない事らしい。

「津川先生は、姉さんには一生厭やといふ事の云へない方よ。そんな風な人ですもの、先生の御結婚だつて、姉さんが承知しなければどんなに先生がお思ひになつたつて、駄目になつてしまひますわ……」と鈴子は聲を落した。その調子で、今井の細君は、成程と心の中でうなづいた。

「それぢや津川さんの姉さんと、あなたとは、あまりお話が合はないのですか?」

「ええ、さうですとも。」と鈴子は云つた、「わたしの事を氣儘者で、仕方のないなまけものだと思つてゐらつしやる事は確かですわ。けれどわたし別にあのお姉さんに氣に入つて貰はなくつたつていいのよ。津川先生は、僕よりも姉に親しんでくれとお頼みになるんですけれど……」と鈴子は遣る瀬なささうに云つた。

一〇

鈴子は今井の細君と途中で別れて、青山六丁目まで電車に乘つて善光寺裏の自分の間借してゐる家へと歸つた。彼女はこれ迄妹と一緒に、この勤め人の家の二階の二間續きを借りて、この三月程すごして來たのであつたが、妹が名古屋へ歸つてしまつた今では、二間も借りてゐる必要はなかつたし、また下の家の人が、彼女が毎日遲く起きて、晝頃、こつてりと化粧しては出て行くのを、何となく變に思ふかして、時々厭味らしい事を云ふのもうるさかつたので、何處かに移りたいと、此頃しきりに思ふのであつたが、今井の細君にたのんでから、もうかれこれ半月にもなるのに、まだそれもないらしく、自分で貸間探しをするのは、何だかみじめなやうで厭やだつたので、一日のばしにしてゐるのであつた。

彼女は先刻今井の細君の買つてくれた半襟の模樣が、馬鹿にうれしかつたので、滅多にあけた事もない針箱を開いて、針に絲をとほして、それから襦袢の胴を探すと二つ三つあつたが、それがどれも汚れたのをその儘突込んでおいたものばかりなので、今著てゐる襦袢につけ替へようと思つて、急いで著物をぬいで、襦袢だけ別にして、素肌の上に、その著物を輕くかけて、紅い伊達卷の姿で、そのぬいだ襦袢の元の襟をはがしたあとに、美しい藤色の半襟を縫ひつけて、せつせとつけはじめた。

彼女は何か樂しい事があると、いつも小さな聲で歌をうたふ癖があつた。今もかうして針をはこばせながら、無意識に、聞き覺えの童謠をうたつた。それがすむと、今度は讚美歌をうたつて見た。何の物思ひもなく、ただ考へるのはその半襟を著けると、自分の顏が一層美しく引き立つだらうといふ事ばかりであつた。

けれども、さうして何の屈託もなしに、謠をうたつてゐた時、彼女はふと、母から送つてくる筈の金が、まだ屆か

ないので、小さな蟇口の中には、もう紙幣が二三枚なのを考へ出して、急に心細くなつた。
「金なんかなくて暮せる世の中だつたら……」と彼女は口の中で呟いた。

二

その時、階下から上つて來たここの家のおかみさんが、伊達卷一つの彼女のしどけない姿をチロリと見て、そして取つてつけたやうに云つた。
「鈴子さん、感心に針もつてらつしやるわね。」
「ほんと……ねえ。」と鈴子は前をかき合してから、ニツコリして、おかみさんのちんまりとした雀斑の顔を見て、
「いい襟でせう。わたしにうつつて？」と自分の襟のところに、その半分ついたばかりのを持ち上げて見せた。
「ええ、うつりますとも、あなたはお顔が美いから、どんな色の襟でもよくうつりますよ。ほんとにあなたはお仕合せな方ね。お國からお金はくるし、さうやつて氣樂に毎日遊んでゐられるんだから、結構なお身分ですわ。」
「あまり結構な身分ぢやないわ。だけど人には氣樂に見えるでせう。わたしね、いろんな事を心配してくさくさするのが大嫌ひですから氣の向き次第出歩くのよ。何處へ行つても可愛がつて下さるんですもの、氣樂にしてゐる方が得だわ。」と鈴子はニコニコして云つた。
「ああ、さう云へば、今日は津川先生のところぢやなかつたのですね。晝すぎに先生がたづねておいでになりましたよ。」
「まあ、さう、留守してすまなかつたわ。何とか仰しやつて？」
「いいえ、別に何とも仰しやつてはゐませんでしたよ。」

「さう、ぢや、これが出來たら、この襟をお目にかけに行くわ。」と鈴子は樂しみさうに云つて、又、せつせと針をはこんだ。

軈て鈴子は夕方に近かつたが急いで支度をして、四谷信濃町にある津川の家へと急いだ。

電車どほりから三丁ばかり右に入つたところの露路口に、津川の姉、竹岡いそ子の和洋裁縫教授の看板が、門燈に照らされてゐた。門口の石疊を踏んで、綺麗に掃除の手の屆いた玄關に立つて、彼女は案内を乞うた。すると田舍から出て來たばかりの女中が出て來てそれを津川のゐる方に取次いだ。

間もなく津川は、玄關に現はれ例のやうに、柔和な、やや神經質な淺黑い顏に、微笑をたたへて云つた。

「あ、鈴子さん、お上りなさい。」

「え……。」と鈴子は云つて、情のこもつたその聲を聞くと、甘えたい氣持になつた。云はれるままに、津川について、廊下づたひに、彼の書齋へと行くと、

「今日はお留守へうかがひましたよ。」と津川は振返つて云つた。

「ほんとに失禮しましたわ。わたし、今日は出かけてて遲くなつちまひましたの。」

「何處へ行つてたの？」と津川は二人がすわつてから、女のやうな調子で、やはらかに訊いた。

「今井さんのお宅へ行つてゐましたの。」

「あ、此間云つてゐたあの方の家ですか。女學校の英語の先生の――。」

「え、さうですの。奧さんと御一緒に、買ひ物に行つて、この襟をいただいたりしましたわ。」と彼女は頸をぐつと引いて、自分の襟を見せた。

それから、暫く話したあとで、彼女が今日何の話があつて來てくれたのであるかと訊くと、津川は、

「いや、別に、……急に鈴子さんに逢ひたかつたから……。」とニコニコして云つた。

女中が茶菓を持つて來てから、半時間位、さうして取りとめもなく話してゐると、津川の姉が部屋に入つて來た。

一二

津川の姉のいそ子は、痩せたその顏とは反對に、多い髮を昔はやつたかなり大きい廂にゆつて、まるで半圓形の髷でも額にかぶつてゐるやうであつた。そして、生花や裁縫などの師匠をする人に特有の、あのしやんとした、むだのない、身にしつくりとついた著こなしをしてゐた。

「今日は、よくいらつしやいました。」といそ子は型通りの切口上で挨拶をした。鈴子は二つ程つづけてお辭儀をして、もぢもぢした。彼女はこの婦人の前に出ると、いつも氣おくれがして、恰度、女學校にゐた時、とりわけ嚴格なオールドミスの修身の先生にいぢけてゐた時の氣持そつくりになるのであつた。

「妹さんがお歸りになつて、お寂しいでせうね。」

「え……。」と鈴子は言ひかけて、あとは口の中に呑んだ。

「これからあなたお一人で何をなさいます？」といそ子は云つて、弟の方を見た。津川はそれを派けるやうに、

「鈴子さん、あなた、僕の家に通つて來て、姉からお裁縫を習つてはどうですか？」と一寸長髮を撫でながら云つた。

「もつとお裁縫が上手になるといいんですけど……わたし、駄目ですわ。」

「そんな事はないでせう。女はお裁縫が大切です。家を持つて夫や子供の著物も縫へないで、片つぱしから外へ出してたら、それこそ大變な不經濟になりますからね、もつとも……」と云ひさして、いそ子はじつと眼を鈴子の半襟にそそいだ。

「わたし…… 駄目ですのよ。」
「なぜ？」と津川が云つた。
「だつて、わたしのやうな氣儘者には、お裁縫は向きませんのよ。直ぐ頭や肩が痛くなつて辛いのですもの。」と鈴子は云ひながら、ふと、いそ子の顏を見ると、そこには、いかにも非難するやうな表情が見えた。
「裁縫の嫌ひな人は、きまつてさう云ひますね。」
から云つてから、いそ子は津川の方に向いて、
「私は一寸、あの子を連れて、お湯に行つて來ます。」と云つて、その儘部屋を出た。
姉が出て行くと、津川は少し膝をくづして、壁にもたれた。鈴子も足をにじらして、氣樂にした。
「明日、僕は一日ひまですから何處かへ遊びに行きませんか。」と津川は云ひ出した。
「何處へ？」と鈴子はニッコリして訊いた。
「さあ、あなたの好きな處にしませうよ。」
「さう云はれると困るわ。」と鈴子は云つて、襖の方に輕く身をもたせながら、じつと津川の眼を見て、「わたし、何處でも、先生のおつしやるところがいいと思ふわ。」
「さう！」と津川は樂しさうに頷いて云つた。「ぢや、多摩川にきめませう。この頃の河原は屹度いいからね。多摩川の秋はいい畫題だ……」
「では、多摩川にしませう。いいのね。」と鈴子は同意して、時刻などの打合せをした。
電燈がついて暫くして、いそ子が歸つて來たと見えて、女中が津川を呼びに來た。
「一寸失禮します。」と云つて、津川は部屋を出たが、それきり十分たつても二十分たつても來ないので、鈴子は氣持

がいら立つて來て、そんな風に津川を自分の方に引張り寄せたいそ子の心持が憎らしくてならなかつた。いつそもう歸らうかと思つてゐると、女中がお膳をはこんで來て、

「お粗末でございますが……」と云つて、彼女の前に据ゑた。その膳部の品々は、いかにも本式にきちんとしてゐた。

それを見ると鈴子は何とも云へない味氣ない氣持になつた。

一三

今朝は八時頃、鈴子としては朝起きをした。朝飯をすますと、直ぐお化粧に取りかかつて、それがすむと、行李の底から、紫がかつた縞お召の袷や、羽二重の派手な帶を取り出した。それを著ながら、彼女は名古屋の母のところに置いてある着物の事を思つた。

「着物をもつと送つて貰ふやうにしなきやならないわ。」と彼女は帶をしめながら思つた。

暫く待つてゐると、津川が來た事を、おかみさんが知らせて來た。そしてニヤニヤして、

「御一緒にどちらへ？」と訊いた。

「多摩川なの。」と鈴子はうれしさうに返辭をして、いそいそと玄關に出ると、津川は道の方で立つて待つてゐた。

新宿の追分から京王電車に乘ると、やはり郊外散策らしい、女の子の洋裝したのを三人も連れた一家族らしい夫婦の外は、これといふ眼立つた乘客もないので、鈴子の派手な美しい姿が、皆の眼をそばだてた。

車窓に迫る町並の家が、次第と野趣を帶びて來て、松澤村を過ぎた時分には、垣根にコスモスの花の咲いてゐる農家や、淺緑の竹藪や、黝ずんだ杉の森などが、次々に見えて、心がせいせいした。乘客の大部分は、それぞれ途中で下りてしまつたので、終點で下りたのは、彼等二人とかの女の子を連れた家族と、外には土地の人らしい二三人に過

ぎなかつた。
停留所を出て、小さな茶店の前を左の方へ行くと、一條の小川があつて、その堤には、薄が白い穗先を揃へて風に靡いてゐた。水のふちには、伸びるだけ伸びた蘆が長い葉を垂れかけてゐた。橋をわたつて二丁位行くと、樹立の間のそこ此處に、料亭があつた。砂路の上を少し歩くと、やがて廣い河原が展開した。眞夏からずつと使ひふるした屋根舟が四つ五つ繫いであるのを見ながら、河原に下りて行くと、綺麗な小石の上に、二人の影が落ちた。
「むかうに渡りますか？」と津川が訊いた。
「渡りたいわ。」と鈴子は云つた。そして渡舟のところに行くと、そこに待つてゐた百姓體の男が好奇な眼で、まじまじと二人を見守つた。舟に乘つて、中流のところに出ると、水の中に泳いでゐる鮎の大きいのが幾尾も見えた。
「ああ、いい水ね。」と鈴子は云つて、パラソルを舟の中に置いて、ハンケチを出して、水に濡らして絞つた。津川はあちらこちらを眺めながら、煙草をすつてゐた。もとの岸の靑い堤を、あの洋裝の女の子を連れた一家族が、ぶらぶら歩いてゐる。
やがて舟がむかう岸についた時、津川は吸殼を水に捨てて、鈴子を振返つた。
「なにか仰しやつて？」
「いや、危いから氣を附けて……」津川は云つて、舟から出ようとする鈴子の帶に、かるく手をかけた。
「ずつと上流の方へ歩いて行きませう。」と津川は云つてから、「ここは花時分には隨分綺麗だらうね……。」と堤の櫻並木を見渡して呟いた。
花見の時の掛茶屋のあつたらしい木蔭などには、黄色い花を持つた雜草が、萱や薄に交つてゐた。右の方は一面に草むらの崖になつてゐて、水はその近くの方を靜かに流れてゐた。

「何て綺麗な水だらうね。鈴子さん、あちらの方を御覽！」

から云つて津川の指し示す川のずつとずつと上の方の水流は、細く一條の靑い絲をうねらせて、その背景の山々の樹々の初秋の色が磨いたやうである。

「こんな景色を見ると、もつと何處かへ行きたいわ！」と鈴子が云つた。

「さあ、いつか信州の方の溫泉にでも一緒に行けるやうにしませう。」

「ええ、信州の溫泉へ行きたいのね。」と鈴子はうつとりした眼で津川を見た。

一四

櫻の並木の何處までも續いた堤防を、二三丁も上の方に歩いて行くと、そこにまたもう一つ渡場があつた。眺望はこのあたりが一番よかつた。左の方には、のんびりとした藁葺の農家が、それぞれに木立をひかへて、見えかくれしてゐた。對岸の方には、もう一雨二雨もすれば、すつかり色づいてしまひさうな雜木林や深い黝んだ杉の森などを背景にして、料亭の二階建が、河に向つてその勾欄を見せてゐた。

「あそこへ行つて、鮎でも食べながら話しませう。」と津川は鈴子を振返り乍ら行つた。

二人が並んで河原へと下りて行くと、そこには二三人の男が釣を垂れてゐた。歩きにくいので、鈴子が遲れさうになると、津川は立止り立止りして待つた。

對岸に渡つて、河原の道を少し行くと、小綺麗な廣い道に出た。そこから少し橫へ入ると、料亭の前に出た。もうこんな秋時分なので、客は一組もなかつた。二人は二階に通つて、庭の松の樹越しに川の見える見晴しのいい部屋に向ひ合つてすわつた。

「鈴子さん、疲れたでせう？」と津川がやさしく訊いた。
「いいえ、すこしも……こんな處で遊ぶのは好きですから、わたし少しも疲れませんわ。」
「さう、それはよかつた……何かうんとおいしいものを食べようぢやありませんか。」と津川は云つた。彼は酒の飲めないといふ方ではなかつたが、遠慮したと見えて、ただ麥酒だけを云つて、あとは出來るだけ、彼女の好きさうなものを品數多くあつらへた。

津川が袂から煙草を出して、靜かにくゆらしはじめると、鈴子は障子のところに行つて、懷中鏡で顔のあぶらを拭いて、紙白粉を二三枚刷いた。やがて女中が、つぎつぎと二人前の料理をはこんで來た。
「こんなにおいしい鮎ははじめて食べるわ。」と鈴子はその鮎の燒物に箸をつけて云つた。津川も箸をつけて見て、
「實にうまいね。さう云へば、僕の姉は鮎が何よりも好きだと云つてゐるが、今日姉を連れてくればよかつた……。」
「まあ、何ていふお姉さん孝行でせう！」と、鈴子は大きい聲で云つて、彼女はこんな時にも、姉の事を云ひ出さずにゐられぬ津川の顔をつまらなささうに見た。
「いや、それ程姉孝行でもないけれど、姉があゝして何處へも行かないで、働いてばかりゐるので氣の毒だから……。」
「だからお姉さんは果報だと思ふわ。先生のやうな方は、結婚なすつても、そのために姉弟氣まづくなるなんて事はないんだから……」
「さう云へばさうだらう。僕は一生姉を大切にしたいと思つてるから……今度は姉も、姉の子供も、あなたも皆一緒にここへやつて來て一日遊ぶといいナ。」
「さうだつたら、わたしは來ないわ。わたし、先生のお姉さんと一緒にゐて、氣兼ねしたくないんです。折角いい處に來ても、氣兼ねなんかしてゐちやちつとも面白くないわ。」

「なぜ、そんな事を云ふの？」
「だつて、わたしはお姉さんに嫌はれてるんですもの。」
「そんな事はないね。僕から見れば、あなたの方こそ、僕の姉を嫌つてゐらつしやるぢやないか……だから僕が困つてゐるんですよ。さきざきの事を考へると、どうしても、あなたに折れて貰はなくてはね。」
「わたし折れて行つたり何か出來ない性分ですもの……」と鈴子は云つて、鮎の腹をかへして、默つて食べはじめた。

一五

やがて食事がすんだ。津川はお茶を飲みながら、
「あなたは姉に折れて出たくないと云ふし、姉は姉で、今の儘の鈴子さんではどうも困ると云ふし、僕が板ばさみの形でね……困るんですよ。あなたが本當に僕と一緒になつて下さるんだつたら、それ位の事はつとめて貰へない事はないと思ふがね……」と云つた。
「先生から見ればさうでせうけれど、わたしから云へば、そんな事はつまらないわ。人間の性分ッてものは、そんなに變へられるものぢやありませんわ。一度や二度折れて見たつて、どうせいつかは衝突しますよ。もうわたし、先生と結婚するんだつたら、先生とだけ結婚したいわ。お姉さんなんか問題にするやうな結婚したくないわ。」
「それは僕だつてさう思つてゐますよ。然しね……あなたは僕の姉をたしかに誤解してゐますよ。あなたは僕の姉が、昔風な人間だから好かないんでせう。けれど、あなたがもつと附き合へば、物分りのいいところがわかるんだがね。表面は窮屈さうだけれど、眞底は情の厚い女なのですよ。あなたの方から折れて下すつて、昨夜も僕の云つたやうに、隔日位にでも、僕の姉と一緒に話をするとか、縫物をするとかして、親しくなるやうにと骨折つて下さいね。ね、分る

でせう。僕のためにね……」

「ええ……でも、わたし、そんな事出來さうもない女なんですもの。わたしのやうなものは、結婚なんかしないで、一生獨身でゐた方がいいと思ふわ。」と鈴子は云つて默り込んだ。彼女には、僕のためにに姉の機嫌を取つてくれといふ津川の言葉が、餘りに蟲がいいやうに思はれた。

夕暮れ方、多摩川から歸つて來て、家のそばまで送つてくれた津川に、一寸でも寄るようにと云つたけれど、津川は今夜は一寸用事があるし、今日の事は、姉には內密なんだからと云つて、さうは云ひながらも、名殘り惜しさうにして、別れて行つた。鈴子は自分の部屋に入つた時、心が物足りなさで一杯であつた。

机の上を見ると、書留の手紙が來て居たので、彼女は母から金が來た事が分つて、急に疲れも忘れて、ニコニコしてそれを開いた。と、中から五十圓近くの爲替と、短い手紙とが出て來た。その手紙には、妹が歸つて來ていろいろ話すところによると、學校へも行かず遊んでゐるとの事、それでは心配になるから、どうしても學校へ行かないのなら、歸つて來るやうに、なほゐるやうであつたら著物を送る事、妹の話では、津川先生が大變親切な方との事、萬事先生に御相談するやうにと書いてあつた。

「ああ、その先生が、あんな風な方なんだもの、つまらないわ……お優しいことはお優しいけれど……はがゆい方……」

から考へると、鈴子はいつそ名古屋へ、妹のやうに歸つてしまはうかと思つた。然し彼女は妹と違つて、さうさう無雜作な氣持で、名古屋には歸られない行きがかりがあつた。

彼女が名古屋で、二年ほどの間、彼女の性分としては不適當な小學校の女教師をしてゐる時に、その小學校の教師を二人まで、いよいよといふところで、氣持が變つて、突放したのがもとで、その一人は朝鮮に行き、他の一人は、最近、あてつけがましく、彼女の親しい友達であつた女教師と結婚したとの事なので、たとへ自分の方で振り棄てたの

であるとは云つても、そんな有樣を間近に見る事は、彼女としては厭やな事であつた。

一六

あくる日、鈴子が眼をさました時は、もう晝に近かつた。彼女は身體中、寢汗が感じられて、頭も妙に重かつた。

「今日は一日寢てゐようかしら？」と呟いて、彼女は左の腕をずつと伸ばした。白い軟かな、肉附のいい二の腕から五本の指の先きまで、なよやかな曲線が、たわんだり、ふくらんだりして、美しい手を描いてゐる。それをじつと見てゐると、豐滿な青春の血汐が生き生きと匂つてゐるやうで、彼女はあだかも花の咲き切つたやうな今の自分の若さを感ぜずにはゐられなかつた。

「こんなに何處もわるさうにもないんだのに、どうしてこんなにだるいのだらう？」と彼女は呟いた。日によつては、身體全體が、自分一人で荷ひ切れないやうに、暗い惱ましい氣がして、少し熱ばんで脚なども重く鈍くなることを思ふと、彼女はやはり、何處かに病氣が潛んでゐるのだが、それが今の若さによつて隱れてゐるのかも知れないといふ氣がした。

「わたしは何て弱いんだらう。こんなでは、とても外の女のやうにあくせく立働く事なんか出來やしない。出來る事なら、一生、じつと身體の無理をしないで、氣樂にぶらぶら遊んで暮したい位なんだもの……」

およそ半時間位も、さうしてぼんやりしてゐると、

「まだおやすみですか。」と云つて階下から、おかみさんが上つて來た。「一寸あなたにお目にかかりたいと云つて來てゐる人がありますよ。」

「どんな人？」

「それが、靑山署の方なんですつて！」と云つて、おかみさんは大仰に眼をまるくしてゐた。
鈴子は刑事かしらと思つて、あまりに思ひがけない事なので、一寸ドギマギした。
「いやな事だわ！」と彼女はひとりごちた。
しぶしぶ身支度をして階下に下りて行くと、玄關口に、その刑事は和服姿で立つてゐた。髭のない四角な平顏の男で、彼女を見ると無理につくつたやうな笑顏をして會釋をした。
「いや、何でもないんです。」と其男は鈴子の不機嫌な顏をじつと見ながら、なだめるやうな調子で云ひ出した。「一寸おたづねしたい事がありましてね。」
「はあ！」と、鈴子は氣の乘らぬ返辭をした。
「いや別に大した事ではないんですが……あなたはよく方々にお出かけになるやうですね。今何をなさつてらつしやいますかね？」
「何をといひますと……」
「まあ、御職業と云つたやうなものですがね。」
「何もしてやしませんわ。」
「はは、さうですか……ぢや、學校の方へでも？」
「いいえ、何處へも行つてゐませんわ。身體がわるいもんですから、今のところはぶらぶら遊んでゐるんですわ。」
「さうですか、そりやいけませんナ。」と、男はお愛想を云つてから、「ナニ、何でもありません。一寸かういふ事を伺つておく必要もあるのです。あなたのやうに人目につく、若い美しい方が、まあさう云つた工合になすつてゐると、職業柄まづ一應は、おたづねしておく必要もありましてね……殊に、この頃は、女の人にも無政府主義者とか、社會

主義者とかが、なかなかあるもんだから……」

「わたし、そんな主義者ではないんです。」と鈴子は口先を尖らした。

一七

刑事は鈴子の激昂を見ると、ニヤニヤして、

「いや、あなたが不穩人物だと云ふのではないんです。兎に角、一寸おたづねした迄で、別に何んでもないんですから、氣にかけないで下さい。」と云つたが、一寸調子を變へて「それから、これは御注意迄に申上げておきますが、この邊には不良少年が澤山ゐますから、あなたのやうに、一人さうしてらつしやると、お氣を附けねばなりませんね……いや失禮しました。」と云つて、歸つて行つた。

「くだらないわね。」と鈴子はその後姿を見送つて呟いた。

「ほんとに厭やですね。」と、おかみさんが鈴子のところへ出て來て調子を合せた。「あんな事、餘計なお世話ぢやありませんか、それ位の事、あんただつて御存知ですものね。」

「さうですとも、女一人ゐるッて事が、何で心配なんでせう……わたしばつかりぢやないわ。一人でゐる女の人は澤山あるわ。」

「けれど鈴子さん、あなたやつぱり學校へいらつしやるとか、お仕事をなさるとかした方がいいんぢやないでせうかね……いくらお困りにならんかッて、そんなに遊んで出歩いてばかりゐらつしやると、やつぱり人が變に思ひますよ。」

と、おかみさんも忠告するやうに云つた。

「いいのよ、わたしもう直きに名古屋の方へかへりますから。」と云ひ捨てゝ鈴子は二階に上つて行つた。

けれども彼女はこの突然の事件のためにすつかり氣持が擾き亂されて、家にじつとしてゐる事が出來なかつた。殊に今のおかみさんの立入つた言葉を考へると、非常な侮辱を受けたやうな氣がして、一刻もここにゐるのが厭やになつて、今日中にでも引越してしまひたかつた。彼女は何がなしに無暗と心細くなつて來て、今は昨夜の不滿の事などは、すつかり忘れて津川に會ひたくてならなかつた。津川に會つて、部屋のことなどもよくよく賴んでみたいと思つた。

鈴子が顏をなほしたり、着物を著替へたりして、階下に下りて行くと、そこで縫物をしてゐたおかみさんが、

「お出掛けですか。」と聲をかけた。

「ええ、ちよつと……」

「御飯召し上つてらつしやいな。」と云はれて、彼女はまだ自分が朝飯も食べてゐないのに氣が附いたけれど、それには何とも返辭をしないで、彼女は玄關に出た。そしてこれぎりに、あの細君の顏も見ないで了ひたいと思つた。

津川の家の見慣れた廣い玄關の前に立つた時、彼女はそこに赤や紫や藤色やの鼻緒の表附の下駄が、一列に五六人分も並んでゐるのを見て、今日は妙に壓迫を感じた。今頃來ればいつだつてかうして、津川の姉に裁縫を習つてゐる娘たちの下駄の並んでゐる事は知れ切つた事なのだ。けれど、この下駄の主の中から適當な娘をえらんで、弟の妻、自分の義妹にと考へること久しいらしいいそ子の心持が、今日はとりわけ、ピシリと頭に來て、鈴子はどんな點から見ても、自分なんかこの家には緣がないのだと考へずにはゐられなかつた。

彼女はいつそこの儘引返して、今井の家に行つて見ようかと思つた。けれど津川の事を思ふとそれも出來なかつた。あんな賴りない人だとは思つても、津川のあの優しさを考へると、やつぱり會つてみたかつた。

女中に型どほりに迎へられて、津川の部屋にとほされた。

「先生、昨日はどうも有難う。」と鈴子は津川の顔を見ると、急に元氣が出て晴れやかな聲で云つた。
「僕こそ。」と、津川はニッコリした「さあずつとこちらへ……」
鈴子は津川の小さな紫檀の机の横にすわつた。

一八

「昨日は疲れた?」と津川は鈴子に囁くやうに訊いた。
「いいえ。」と云つて、鈴子は机の上の繪筆を拔いて、手まさぐりながら、
「わたし、ほんとに厭やな事が出來ましたのよ。」と云つて眉をしかめた。
「ホウ、どんな事が?」
「今朝、突然、刑事だといふ男が來たの……そして、わたしにいろんな事を訊きましてね。しまひの果てに、女の主義者ではないかと云つたり、このあたりには不良少年がゐるから氣を附けなさいと云つたりして……女が一人ゐると思つて、輕蔑して來たに違ひないわ。」
「まさかそんな事はないだらうが、妙な事があるものですね……しかしあなたに逢つてみれば、あなたが主義者かどうか分らない筈はないでせう。」と津川は苦笑して云つた。
「でも、厭やですわ。主義者と睨まれても、曖昧な女に睨まれたにしても、わたしとしては不愉快ですわ。」
「はつきりあなたの身の上の事を云ひましたか?」
「云つたわ。」
「それぢやいいでせう、ちつとも氣にする事はないでせう。女だつて一人ゐて惡いと云ふ事はないんだから……」

「それはさうよ……けれどね。刑事が來たりすると、宿のおかみさんが、前よりもつと變にするやうに思へて仕方がないの。わたしもう一日もあそこにゐたくないのよ。」

「そんな事を云つたつて、今直ぐにどうする事も出來ないんだから、まあ、辛抱するんですね。そのうちあるから……僕も友人に聞いて見てはゐるんだが、どうもいい處がなくてね。」

津川の調子は、何處となくゆつくりした風なので、鈴子はいらいらしたやうに、

「でも、わたしの身になれば、今が今、厭やなんですもの。あのおかみさんの顏を見るのも厭なのですもの。」

「それはさうでも、世の中は、思ふ儘にはならぬのだからね。もう一寸待つて下さい。そのうちにあるから……何處かしつかりした婦人ホオムのやうな處があるといいんだが……」

「駄目だわ……そんな處は、わたしには一日だつてゐられやしません。」

「それもさうだらうが……まあ、もう少しの辛抱だから、ねえ。鈴子さん。」と津川はやさしく云つた。「僕たのみますよ。もう四五箇月、掛くとも來年の春まで……そしたら僕は名古屋のお母さんの方にお話して、きれいに鈴子さんを貰ひ受けて、二人きりの自由な家庭をつくりたいのだから……」

「わたし、駄目ですわ。」と鈴子は投げ出すやうに云つた。「來年の春のことがわかるものですか。」

「そんな事を云ふものぢやないね。」と津川はそれをなだめるやうに云つた。「人間には忍耐が要りますよ。氣儘にしたいのに限りはないけれど、それが許されはしないのだから。僕だとて、あなたを一日も早く引取つて、僕の傍にゐて頂き度い。けれど、そのために周圍を犠牲にするといふ事は、どうも厭やでね。」

「それはさうでせうよ。」と鈴子は怨めしさうに津川の顏を見て云つた。「先生には、お宅にいらつしやる方の中からおとなしい、やさしい、お裁縫の上手な、つつましやかな方を、お姉さんが、もうちやんと選んでゐらつしやるわ。

そして、それがいいんですもの……」
「そんな事があるものですか。」と津川は困つたやうに云つて、「僕は鈴子さんにきめてゐる……ねえ、鈴子さんさへ承知して下されば……」
「駄目ですわ。駄目ですわ。」と鈴子は口早にそれを遮つた。

一九

「先生はお家の平和ばかり考へてらつしやるのですもの……わたしなど先生には向きませんわ。わたしのやうなものは、誰にだつて向きませんわ。こんな我儘な、なまけものですもの、それに身體だつて弱いのですもの……」
から云つて見て、鈴子は何だか辛い氣持になつて來た。
「そんなこと云ふもんぢやないよ。」と、津川はなだめるやうに云つた。「あなたが厭なら仕方はないけれどね……僕は鈴子さんの事は少しもいけないなどと考へた事ありやしない。だから、姉にいつもさう云つてるのだ。あの人は氣儘かも知れないが、今になほるッてね。」
「なほりつこありませんわ。生れ持ッての性分ですもの。」と鈴子は突つかかるやうに云つた。「兎に角わたし駄目ですわ。」
「そんなに駄目、駄目と云ふもんぢやない。」と、津川は笑ひ出した。「今日はひどくやんちやを出すね。」
「ええ。」と鈴子はうなづいた。
「ね、もう少しだから、辛抱してゐて下さいよ。」と津川は云つた。
「だつて、わたし待てさうもありませんわ。直ぐこんなに辛い目に遭ふんですもの……母からは歸つて來いと云つて

來ましたわ……」
母の事を云ひ出すと、鈴子は急に涙がホロホロと膝に落ちかかつた。
「わたし、名古屋へかへりますわ。ええ、もう歸ッちまふわ。」
「そんなに辛いのかね。」と云つて津川は腕をこまねいた。「せめて、もう二三箇月、今の狀態でゐてくれませんか。ねえ鈴子さん。此間も僕の云つたやうに、隔日位に僕の家に來て、姉と會ふのが厭なら、僕のこの部屋でゐて、僕と話をして……」
「駄目ですわ。わたしかうして二三日毎位にお伺ひするのさへ……どんなに氣を兼ねてゐるか、先生は、お察し下さらないのですもの……」と云つて、鈴子は袖を顏に當てて、しくしくと泣き出した。
「困るね、鈴さんは……何も僕の家に遠慮はないぢやないの。それにね、僕ももう少ししたら別に家を持ちたいと思つてゐるんだから、せめてここ二三箇月位待つて下さい。ねえ、さうして下さいね」
「出來たらわたしさうしますわ。」
「それぢや、もう泣かないで……」と津川は何處までもやさしく云つた。「泣いてる顏を人に見られるといけないからね。」
「ええ。」と鈴子はうなづいて、もう赤く腫れた眼で、いつもの笑顏をしようとしたが出來なかつた。
泣顏がなほつてから、彼女は津川の家を出た。もうその時には玄關には、娘たちの下駄は一足もなかつた。送り出してくれた津川は明日も是非來るようにと、繰返して云つた。
「あんまり心配しないがいいですよ。今によくなるから。」とも云つた。
鈴子は朝からだるかつた身體がもつとだるかつた。もう今井の家に行く氣もせず、早く歸つてやすみたかつたが、

いやな自分の家の事を考へると、行場のないやうな氣持になつた。いつその事、名古屋に歸らうかとも思つたか、それも氣が進まなかつた。どうしたらいいかしらと考へてゐると、むかうから、旅行用のバスケットを提げた若い男が足早に歩いて來た。彼女とすれちがつた。その旅の支度が、彼女の心を唆つた。母から來てゐる金も、今の彼女には充分餘裕のある金だつた。

「わたし、一寸旅へ行く事にするわ。」と彼女は呟いた。そして、この春、妹と一緒に四五日行つてゐた信州のK溫泉を思ひ浮べた。そこの湯は彼女にはよく利くやうに思はれたので、こんな時こそその溫泉に行かうと思つた。

二〇

「どうしたのでせうね。鈴子さんが此頃來ませんが……」

今井の細君は、その日丁度學校へ行かずに、家で好きな讀書をしてゐる夫のそばにすわつて、思ひなつかしむやうに云つた。

「名古屋へ歸つて行つたのでせうか。それならさうと、葉書でも來さうなものですのにね。」

「ナニ、家でじつと落著いてるんだらうよ。」と今井はいい加減な返辭をした。

「でもあの人が五日も六日も落著いて、じつとしてゐられるとは、わたしには思へませんよ。屹度何かがあつたのでせう。ことによつたら、津川さんとの仲が纏まりでもして、一緒に何處かへ行つてらつしやるのぢやないでせうか……」と細君は頻りに氣がかりらしく云つた。

「さあ、さういふ事も、あるかも知れないね。」

「若し、そんなだつたら尾村さんのいつかのお話は駄目ですのね。」

「だから、僕は餘計な事はしない方がいいと云つたんだ。」

「でも、それはそれでいいと思ふわ。まだ大した事ではないのですもの。」と細君は急いで辯解した。そこへ、玄關の方で郵便の投げ込まれた氣配がしたので、急いで出て行つた細君は、一枚の繪葉書を持つて歸つて來て云つた

「まあ、あなた、鈴子さんはね、信州の溫泉へ行つてらつしやるわ。」

「溫泉へ……」と云つて、今井はその繪葉書を手に取つて、じつと見た。樹のこんもり生え繁つてゐる山が、三方を圍んだその山懷に、一村落を形づくつてゐる、いかにも靜かな素朴な田舍の溫泉らしい寫眞であつた。旅行好の今井は、「ホウ、K溫泉つてなかなかいい所だね。」と云つた。

「まあいいところへ鈴子さんはいらしたのね。」と細君は云つてからニツコリして訊いた。「一人でせうか?」

「さあ、ひとりかね?」

「屹度、津川さんと一緒だわ。」と云つて、細君は、その繪葉書を夫の手から取つて、またその文句を讀んでみたが、それは極く簡單で、ただこつちへ來てから氣分が落著いたといふ事と、二三日中に歸るつもりだといふ事だけで、肝腎の事を想像させるやうな文句はちつともなかつた。

「屹度、二人だわ。それでなくちや今頃信州の溫泉へ一人で行つたりする筈はないから……」と細君はすつかりそれに定めてゐる。

「萬事、いいやうに行つたのならいいわ。津川さんつて方は、鈴子さんのお話を聞いても優しい人だつて事ですもの、屹度いい工合になつたんだわ。いつまでも女が親の許を離れて、一人ブラブラしてをれば、いくらしつかりしてゐるやうでも、又フツと何か問題が持上りますからね。ほんとにそんなになつたのなら、祝つて上げようぢやありませんか。」

「ウン。」と今井は生返辭したばかりで、もう相手にしなかつた。

今井の細君は、今度尾村が來たら、この繪葉書を見せて、もうそんな風になつたから、仕方のない事を云はねばならないと思つたが、その尾村は、その翌日も、翌日も來なかつたので、あんなには云つてゐたものの、尾村もまた、あの事はあれきりに忘れてしまつたのではあるまいかと、細君は思つたりした。

恰度その翌日、それまでに見馴れぬ友禪縮緬の袷に、恰好よく帶を結んで、薄藤色の絹編ショオルをかけた鈴子が、爽かな元氣のいい顏をしてひよつくりと訪ねて來た。挨拶がすむと、鈴子は途中の驛で買つたらしい、日本アルプスの富貴漬を土産にと云つて出しながら、

「ふつと思ひ附いて行つて來ましたわ。」と云つた。

二

「此頃の信州はよかつたでせう。」と今井の細君は云つた。

「ええ、ようございましたわ。溫泉もよかつたのですが、輕井澤がもつとよく、汽車の窓から見ると、薄だの桔梗だのの秋草が一杯に亂れてて、ほんとに高原の秋といふ感じが、その儘出ててようございましたの。」とニコニコして鈴子は云つた。

「あの方も御一緒？」と細君が云つた。

「え？」と鈴子は眼を見張つた。

「津川先生も御一緒だつたのでせう。」

「いいえ、なぜ？」と鈴子が問ひ返した。

「ええ、ただ、わたし、若しかしたら、さうぢやないかとひよつと思つたばかりです。もう御結婚でもなすつて、御一緒にゐらしたのかとね。」

「まあ、さう！」と鈴子はからかはれたとでも思つたかして、少し赧い顔をして、

「そんな事があるもんですか。先生とわたしとは、決してそんな間柄ではないのよ。」と云つた。

「では、わたしの大變な思ひ違ひね。ごめんなさいね……でも、なぜでせう？」と今度は細君が問ひ返した。

「なぜつて？　まだ、何が何やらわからないんですもの……」

「でも、津川さんは、あなたを望んでゐらつしやるんでせう？」

「それはさうですわ。けれど先生はわたしにいつも、僕の結婚の出來る時まで待つてゝくれるといいねッて仰しやつてばかりゐますの。でもね、わたしは、待てるか待てないか、先きの事はちつとも分りませんわ。その時になつて見なければと、御返辭してあるのよ。それに、この頃のわたしは、いくら先生がよくして下すつても、あそこの家のお姉さんが嫌ひですから氣がすすみませんわ。」

「でも、お姉さんと結婚なさるのではないんですもの、御當人がよければいいぢやありませんかね。そんな點にはあの方は極く自由な新しい考へをもつてらつしやりさうに思はれるわ。」

「さうなら、いいんですけれど、あれで、先生もお姉さん同樣、形式家ですわ……ですから、わたしちつともそんな事考へてゐませんわ。先生と結婚するなど……」

さうは云つても、鈴子の顏には一寸暗い表情が動いたのを、今井の細君は見逃さなかつた。こんな事を話してゐるところへ、尾村がやつて來た。丁度いいと思つて、細君は直ぐ茶の間の方へ尾村を通した。

「やあ、あなたとよく御一緒になりますね。」と、尾村は云つて、いかにも無雜作にお辭儀をした。鈴子も一寸笑つて

挨拶をした。
「尾村さん、鈴子さんは、信州の温泉へ行つてらしつたんですッて。」と細君は云つた。
「さうですか、それは結構でしたね。長い間行つてらしたのですか？」
「いいえ、ほんの四五日ですの」と鈴子はじつと尾村の綺麗な眉目を見ながら云つた。
「旅はいいですね。殊に溫泉はね。」と尾村は歎ずるやうに云つて、「お連れは？」と訊いた。
「連れなんかあるもんですか、わたし一人で……」
「それは元氣ですね。女の方としては……尤もこれからの婦人はその方がいいのですよ。」
「知合ひの宿があつたんですの。この春妹と行つてた處ですから。」
「何といふ溫泉です？」と尾村は鈴子の話を誘ひ出した。その二人の話のはじまる頃、細君は臺所の方へ行つて、お茶の用意をしながら、考へるともなく、尾村の友人と鈴子との緣といふ事を思つた。そして、それにしても、尾村はどんな風に話をすゝめるかしらと思つた。

二三

今井の細君が茶の間に入ると、尾村と鈴子とは心置きなく話をしてゐた。
「女が一人ゐるつて事は、厭やですのね。」と鈴子が云つた。
「そんな事はないでせう。男でも一人ゐるのは氣樂でいい。」と尾村は云つた。
「僕の友人で、この頃頻りに結婚をしたいと云つてゐる男があるのですが、その男に僕は矢張りさう云ひましたよ。結婚なんかちつとも急がなくていいんだとね。」

「あの方、楠本さんですか？」と細君が、わざとその名を云つて、鈴子の方をチラと見た。
「さう、僕楠本君にさう云つたのですが、結婚した者は皆さう云ひたがるものさとかへつて笑はれてしまつた。一人でゐるものはみな結婚がいいものとしか思へないやうです。鈴子さんはどうです？」と、尾村は微笑して云つた。
「わたしですか？」と鈴子が答へた。「わたしはね、やはり一人で行きたい處へ行き、遊びたい時には遊び、誰に遠慮氣兼もせずに、一生氣樂に暮したいと思ひますのよ。結婚なんかするのはつまらないと思ひますわ。結婚すればみんな不幸になるんですもの……」
「さうとも限りませんね。僕のやうなものは別だが……大抵女の人は幸福になるとも云へますがね。」と尾村は云つた。
「そんなことないわ？」
「さうですよ。そして特にあなたはさうですよ。」
「わたしが、……」と云つて鈴子はひどく笑つた。
細君も笑つて云つた。
「わたしもさうだらうと思ひますね。」
「わたしの氣儘を許してくれる人があつたらですが、どうもありさうにありませんわ。」と云つてから鈴子は一寸眉をひそめて、
「でも、女が一人でゐると、厭やな事がありましてね……」と云つて、旅に行く前に刑事だといふ男に訪ねられた、あの不愉快な出來事を一通り話した。すると非常に興味をもつて聞いてゐた尾村は、
「それは本當の刑事だつたんですかね。下らない事を訊きにくる奴もあるもんですね。本當の刑事だつたらなほ面白い。私は正眞正銘の社會主義者で、しかも過激派で爆彈の二つや三つは持つてると云つてやればよかつたですね。」と云

つた。

「まあ。」と云つて鈴子は驚いたやうに尾村の顏を見た。

「僕の處へもよくやつて來ますよ。錢をかけるやうな事を云ひましてね。馬鹿々々しいから、いつも出放題を云つて脅しつけてやるんです。」と、その滑稽な應酬な刑事の口眞似をしながら話した。

そんな話のあとで尾村は、

「近いうち、ここの奥さんと一緒に是非私の家へ遊びに來て下さい。」と云つた。

「ええ、伺はせて貰ひますわ。」と鈴子は、尾村の樣子にすつかり親しみを感じたやうに云つた。

やがて尾村の歸つて行つた後で、今井の細君は鈴子に云つた。

「あの方とは話しよいでせう?」

「ええ、いかにも藝術家らしい氣持のいい方ね。」

「あれでなかなか社會主義の傾向を持つてゐらつしやるのですよ。尤も實際には何もなすつてはゐませんけれどね。」

「あんなにやさしい方がさうでせうか……」と鈴子は一寸驚いたやうであつた。

そのうちに、主人の今井が學校から歸つて來たので、三人でお茶を入れて話しながら細君は今日尾村が二人で是非遊びにくるやうにと云つたから、二三日して行つてみたいと夫に相談した。そして夫にも鈴子にも、それに同意をさせた。そしてその夜尾村へ宛てて二人の行く日を知らせて萬事の打合せをしたりした。

二三

尾村の家へ行くのは、今井の細君としても初めてであつた。鈴子と連れ立つて、省線に乘つて、駒込橋のところで

下りて、染井の町はづれの、不規則に家の建つてゐる靜かな通りを、此處かしことたづねながら歩いて行つた。
「遠いわね。わたし草臥れてしまつた。」と鈴子は途中で呟き出した。
「もう直ぐでせう。きいて見ますわ。」と細君は云つて、とある家の垣根のところまで行つて、その中で洗濯をしてゐる女に訊いてみると、大凡の見當がついた。やうやくたづね當てて、その家の前に立つて聲をかけると、直ぐ玄關のところに尾村が出て來た。二人を見ると彼はニコニコして、
「さあどうぞ……僕の所は汚いですよ。」と云つて先に立つた。
それは彼の云ふ通りであつた。そこらには、子供の玩具が散らかり、襖や障子の下の方は、すつかり破れ放題になつてゐた。それでも、尾村の部屋の四疊半は取り片づけられて、中央に、一輪挿を置いた机があつた。その樣子で、今日の來客を心あてに、尾村の細君が用意した事がよく知られた。
「奧さんは……」と今井の細君が訊いた。
「ええ、一寸買物に行きました。今に歸るでせう。」と尾村は云つて、二人の顏を等分に見ながら、
「ゆつくりして下さい。」と云つた。
暫くの間、三人で話をしてゐると、子供をおぶつた細君が歸つて來た。額の廣い、澄んだ眼をした、いかにも理智的な感じのする細君は、臺所に買物を置いて、子供を先に立てて入つて來た。そして、二人に挨拶をして、いつも尾村が世話になつてゐる禮を云つた。畫家と云つても、何となく畫家の生活らしく思へない位、この夫婦は無雜作であつた。そこへ誰か客が訪れて來た。やがて、尾村に案內されて、そこへ入つて來たのは、脊の高いすらりとした身體に、しつくり合つた洋服を著けた、立派な品のいい靑年であつた。
「ひとつ御紹介しませう。これは僕の親友で、楠本直哉君です。」

「僕、楠本です。」とその青年は改つて云つて、お辭儀をした。そして、今井の細君に一寸眼が合つたのをはづして、ほんのり赧らんだ顏をして、煙草を取り出して、尾村と話をはじめた。
「この間は失禮したね。」
「僕こそ失禮した。あれからまた客があつてね……」と尾村は云つて、暫く二人は二人だけの話になつた。今井の細君は、その時、見るとなく、鈴子を見た。と、じつとうつむいてゐた彼女は、ふと顏を上げて、ニツコリして云つた。
「可愛い坊ちやんだわ……。」
丁度部屋の敷居のところに、尾村の子供が、襖につかまつて立つて、こちらをもぢもぢ見てゐたのだつた。
「いらつしやい。」と今井の細君は手をのばした。けれど、子供は一つ首を振つて、母親の方へ走つて行つた。
「鈴子さん、あなたはこちらの方は初めてでしたか？」と尾村は鈴子の方を見て云つた。と、楠本も深い眼附で、じつと鈴子を見て、直ぐ眼をそらした。
「ええ、初めてでしたの。一寸遠うございましたわ。」と云つて、鈴子も見るともなしに楠本を見て、そして俯いた。
彼女には彼の面長な顏、濃い眉、高い鼻、そのいかにも男性的な純潔な容貌が深く印象した。

二四

楠本は不圖、鈴子と眼が合つた時、
「お國はどちらですか？」と彼女に聲をかけた。
「福岡でございますの……でも、母は名古屋にをりますので、この二三年名古屋に住んでましたわ。」
「名古屋はどのあたりですか？」

「中區の金澤町でございますの。」
「金澤町と云ふと……大須觀音の近くですね。」
「さうですの。岩井町通りを少し入つたところですの。」
「あのあたりは賑かでいいですね。」
「君は名古屋には詳しいのだつたねえ。」と尾村が口を挾んだ。
「詳しいと云ふ程でもないが、時々行くからね。」
「まあ、さうでございますか。」と鈴子が云つた。
「あそこには親戚があるんです。年下の從弟もありましてね。今八高の文科に入つてゐます。」
「文科の何年でいらつしやいますか。八高の文科の方は大分知つてゐますわ。」
「ぢや、ことによつたら、あなたを知つてるかも知れませんね。」と楠本は微笑した。
「さうかも知れませんわ。」
「一つ鈴子さんの名古屋時代を訊いてみるといいね。」と尾村が笑つて云つた。
「まあ、いやですわ。そんなこと……」
「何かあつたからですか?」
「あつてもなくつても……」と鈴子は美しく顔を赧らめた。
それからみんなで打解けて、いろんな話がはづんだ。楠本は話の序に、二人に連立つて自分の家へも遊びに來てくれるやうにと云つた。この間に、尾村の細君があつらへた洋食を食べたり、水菓子を食べたりして、氣持よく話をしてゐると、三時が打つた。

「もうおいとましませう。」と今井の細君は鈴子を振返つた。鈴子もうなづいた。二人はやがて禮をのべて、尾村の家を出た。處々にでこぼこがあつたり、穴のあつたりする、屋敷町の靜かな路を、生垣や塀に沿ひながら歩いてゐる時に今井の細君が云つた。

「鈴子さん、あの、今日お目にかかつた方ね。楠本さんをどうお思ひになつて？」

「どうッて？」

「立派な方でしたのね。」

「わたし、そんなにも思ひませんでしたけれど――」と鈴子は妙に口籠つたやうに云つた。「尾村さんとすつかり感じが違つてましたのね。それなのに、隨分仲がよいやうでしたわね。」

乘客の少い電車に乘つてから、鈴子は云つた。

「わたし、津川先生ところへ行きますから、四谷の方へ切符を切つて貰ひますわ。」

「まだ旅から歸つて、お出でにならなかつたのですか？」と今井の細君は訊いた。

「いいえ、昨夜一寸伺つた事は伺つたのですが、默つて旅に出たものですから、先生はつらかつたと云つてましたわ。」

「そんなに心細がるんですか？」

「ええ、ですから毎日わたしに來てくれつて先生は仰やるのよ。でもさうも行きませんものね。それに、お話をしてゐると、時々氣が沈んで、わたし默つてしまふ事もありますの。でもね、わたしが行かないと、先生は寂しいと仰しやるものですから……」

「あなたはお優しいのね。」と今井の細君は仕方なささうに云つた。「あなたは本當は津川さんを愛してゐらつしやるのよ。」

「いいえ……愛してくれと仰しやるんですけど……」と鈴子は云ひさして默つた。

二五

鈴子が訪ねて行くと、津川はいつものやうに迎へて、

「今日は、何處かへ行つてゐたの？」と優しい調子で訊いた。こんな調子で訊かれると、鈴子には隱すと云ふ事が出來なかつた。

「ええ、今井の奥さんと一緒に、尾村さんのところへ行つてましたの。」

「尾村といふ、その人はどんな人？」

「洋畫の方をしてらつしやる方で、それは氣持のいい藝術家らしい方ですの。」

「鈴さんは、いろんな人と今井の家で知合ひになるのだね。」

から云つた津川の聲は陰氣にかすれた。

「そんなでもありませんわ。尾村さんと、今日尾村さんのお宅で、楠本といふ方にお目にかかつた位ですわ。」

「楠本といふ人はやはり洋畫？」

「さあ、どうですか。脊の高い見るからしつかりした人で、何の苦勞もなく育つたやうな鷹揚な方でしたわ。そして、その眼のきれいだつたこと……」

「では、鈴子さんにひどく感じのいい人だつたのだね。」

「ええ……」と鈴子は云つてから胸を轟かした。彼女は確かに津川の柔かな心を十分傷つけたのを知つて、慰めるやうに云ひ直した。

「でも、尾村さんの方がやさしいわ。」

「尾村といふ人は、未婚の人なの？」

「いいえ。」と鈴子は笑ひを聲に含ませて云つた。「大變しつかりした奥さんがあつて、もう子供さんが四つ位ですわ。早く結婚なすつたに違ひないわ。」

「も一人の人は？」

「あの方！……楠本さんは、まだ奥さんなんかあるやうな樣子ではなかつたわ。」

鈴子はかう云つて、嘘の云へない自分が厭やだつた。彼女は津川が眼に立つて憂鬱になつたのに氣が附いたので、すまない氣持で一杯になつた。それで一層その方に話を續けた。

「好きと云ふ程ではありませんわ。まだ何もお話といふお話はしないのですもの。近いうち、今井の奥さんと一緒に遊びに來るやうにと仰しやつたんですけれど……わたし行かない方がいいでせうね？」

「さあ、家はどちら？」

「大森ですつて……」

「行く行かぬは、あなたの自由なんだから……」

「でもね……」

「行くのもいいでせう……」と津川は弱く云つた。

「僕は何一つ、あなたにこれこれなさいとはまだ云へないのです。それはあなたの自由だもの……ただ僕として見れば、寂しいですよ。あなたが今井さんの家とか、尾村さんの家とかで華かに笑つてる時、僕ここで一人寂しくうなだれてゐるのだもの。」と津川は繪筆で紙に蘭の葉をいくつもいくつも重ね書きしながら云つた。

「僕はどうしてこんなに寂しがりやなんだらう、一日でもあなたが來ないと、何も手に附かない位、心が落著かないのだものね。あなたの顔を見ると、心が明るくなるが、あなたがゐないと暗くなつてしまふ。この間中なんか、僕はどんなに心寂しく思つたらう。この頃僕といふものは日にましウイークになつて行くんですよ。」
「わたしだつて、さうですわ。」と鈴子は涙もろくなつて云つた。その返辭が嬉しさうに、津川は鈴子の白い手をじつと握つて云つた。
「僕の事を思つててくれるの。」
「…………………」
鈴子はうつむいた。
「都合のよくなる時まで待つてくれるのね。」
「…………………」
鈴子は、やはりうつむいた儘だつた。

二六

母のところから、やうやう送つて來た著物の中から、その時々の氣分で、あれこれと著替へては、鈴子は毎日のやうに津川の家に行くのであつた。そして今井の家には暫く行かなかつた。
或る日、彼女が津川の家から歸つてくると、階下のおかみさんが彼女を呼びとめて、突然で氣の毒だが、田舍から親類の若夫婦が來るので、他にいい部屋を探して引越してくれと、云ひ憎さうに云つた。これまでそんな親類などのありさうな話も聞かなかつたので、これは大方、いつぞやの刑事の來た事などから、下の夫婦がそんな風に相談をした

のかも知れないと思つた。鈴子はこちらの方から出たい出たいと思つてゐた矢先き、先手を打たれたやうな氣がして、くやしい氣持がした。そして津川の家にばかり通つてゐた間に、部屋を探しておくのだつたと後悔した。

「津川さんに御相談なすつたら、何處かいい處があるんでせう。」とおかみさんは云つた。

「ええ、それはありますわ。」と鈴子は云つたが、津川に相談しても甲斐のない事は、もう彼女には分つてゐた。

翌日、今井の家に行つて、からかうと事情を話すと、今井の細君は氣の毒がつて、二一寸私に考へる事があるから、ここで待つててくれるやうにと云つて、出て行つた。そして半時間位して、ニコニコして歸つて來た。

「まあいい都合にゆきましたよ、鈴子さん」と云つた。生垣のむかうの隣家では、主人が海員なので年中留守勝ちなため、そこの奥さんは男の子二人と寂しく暮してゐるのだが、近所附合で親しくなつてゐるので、こちらの事情を話して、いい部屋の見附かる迄、暫時面倒を見てくれないかと頼んでみると、當分ならばと承知してくれたと細君は話をして、今直ぐあなたを先方の奥さんに引合はしたいと云つた。鈴子ははじめてホツと安心する事が出來た。

隣家に行つてみると、もう四十を越した奥さんは、苦勞しぬいた女によく見るやうな、蒼い、寂しい顔をした人だつたけれど、話をして見ると、津川の姉などと違つて打解けて行ける人で、それに話好きでもあつたので、鈴子にはこれが何より居心地よささうに思はれた。部屋は二階の日當りのいい床の間つきの八疊で、その一方に主人の本箱が二つ三つ並んでゐた。

奥さんが下へ降りた時、鈴子は、

「ほんとに有難う。」と今井の細君に禮を云つた。

「氣に入つたら、明日越してらつしやい。」

「ええ、やつと助かりましたわ。」

そんなに喜んでゐるのが、いぢらしく思はれるやうな顔附きで、今井の細君は云つた。
「ここにゐて、それからボツボツいいところを探し當てる事にしませう。」
明日越して來る事にして、歸るみちで鈴子はこの事を津川の家に云ひに寄つた。
「ホウ、それはよかつたですね。」と津川は云つた。「何處です？」
「今井さんのお隣なの。今井さんは近いし、部屋はいいし、下の奥さんは親切さうだし、わたし、本當に助かりましたわ。」
「さう……」と云つて、津川は暗い寂しい顔をした。
翌日の晝すぎ、もうすつかり越して來たからと云つて、鈴子は上氣して紅くなつた顔をして、今井の家に細君を誘ひに來た。連立つて行くと玄關のところに津川が立つてゐた。
「まあ先生！」と鈴子が云つた。
「もうすつかり片附きましたかね……」と津川が工合のわるさうに、今井の細君の方を見ないやうにして云つた。
「ええ、どうぞお上り下さい。」
かう云つて、鈴子は今井の細君を振返つた。
「わたし後で伺ひませう。」と云つて、今井の細君は津川に一寸默禮して歸つて行つた。

二七

鈴子が今井の隣家に引越して來てから二三日たつた時分、鈴子の事に馬鹿に熱心になつてゐる尾村が、今井の家にやつて來た。

「あの鈴子さんは、此頃どうしてゐますか？」と尾村はいきなり訊いた。

「それがね……」と細君はニコニコして、鈴子が隣家に引越して來てゐる話をすると、尾村は吃驚したやうな顏をして、

「それはいゝ都合でしたね……ところで、やつぱりあの日本畫家も時々時びに來るでせうね？」

「引越した日に、もう訪ねて來てゐましたよ。鈴子さんは相變らず出かけて行つてゐるやうです。それでゐて何が何やら分らないのださうです。待つてくれと云ふが待てるかどうか分らないとか、先方の姉さんが難かしいから、ちつとも氣が進まぬとか云つてゐますが、すつかり離れるのでもなし、ぐらぐらしてゐるやうですよ。」

「女ッてそんなものですよ。」と尾村は斷案を下した。

「ところで、楠本にはすつかりあの鈴子さんが氣に入つたんです。あなた達が歸られた後で、いろいろ話しましたがね。是非僕にもあなたにも此上頼みたいと云ふのです。もつとも他に鈴子さんの氣に入つた人があつて、既にその人が承諾を得てゐるなら、潔く引退るが、さうでないなら、僕はもつと接近して、直接ぶッつかつて見たいと云ふのです。それですみませんがね、今度ひとつ、楠本の家にあなたが鈴子さんを遊びに連れ出してくれませんか。」と尾村は熱心な調子で頼んだ。

「そんな事をすると、わたし、津川さんに怨まれてしまひますわ。」

「そんな事はないでせう。」と尾村は笑つた。

この訪問の事を、鈴子に切り出す時、今井の細君は、云ひにくさうに云つた。

「ねえ、鈴子さん、あなたが厭やならいいんですよ……ただ尾村さんがあんまり熱心に頼むもんですから……」

「本當に尾村さんは面白い方ね。」と鈴子は笑つた。「わたし行きますわ。」

「何だか津川さんに惡いやうな氣がするけれど。」と細君が言つた。
「わたしも惡いやうな氣がするわ。あなたのお宅や、尾村さんのお宅へ行つた事を聞いても、津川先生は、暗い寂しい顏をなさるんですもの……でも、わたし氣儘にしたいわ。行きたいところへ行くわ。わたしいろんな方とお知合ひになりたいのよ。そんな事でわたし、津川先生に遠慮する事は止めるわ。」
「そんなに仰しやつたつて、あなたはやつぱり津川さんに義理を立てる方よ。」と細君は云つた。
間もなく晴れた日曜日が來たので二人は一緒に家を出た。尾村悅吉に敎へられてゐるので、大森の楠本の家は直ぐ分つた。門を入つて玄關口に立つた時、鈴子はふとその家の立派な事に吃驚してゐた。ベルを押すと、女中が出て來たので二人の名を云ふと、女中は引つ込んで行つて、間もなく、銘仙のふだん著の上に兵古帶を無雜作にしめた楠本が出て來た。
「お揃ひでよく來て下さいましたね。さあどうぞ……」と云つた。
通されたのは、廣い十疊の客間で、小松と躑躅とを芝生の上にあしらつた廣い庭が見渡された。部屋の中央には、大きい紫檀の机が一つあるばかりで、見るからにせいせいしてゐた。
「さあどうぞ、敷いて下さい。」と楠本は眞新しい絹の座蒲團を二人の方にすすめながら
「今日はゆつくり遊んで下さい。今に母も出てまゐりますから……」と云つて、部屋の隅の柱に取附けられたベルを押した。

二八

此間會つた時の事を話題にして尾村の議論好きな事や、その細君のしつかりしてゐる事などを話してゐると、三人

の間には、次第に親しみが出來て來た。
そこへ、楠本のお母さんが、靜かなものごしで出て來て、挨拶をした。小さな丸髷を結つた、細面の、眼鼻立のととのつた、上品な婦人である。しつかりした夫を持つて、一生ずつと幸福に暮して來たと云つたやうなところが、その平和な樣子に現れてゐた。
「どうもこれがいろいろお世話になりましてね。」と、お母さんはにこやかに云つて、今井の細君に會釋した。そして女の兒もないので、女中ばかりを相手にして、退屈に暮してゐる事などを話してから、じつと鈴子を見て、
「こんな遠方ですが、どうぞこれから、いつでも、ゆつくりお遊びに來て下さい。今日も夕方迄お遊びになつて下さい。」と云つた。
やがて、そのお母さんが座をはづした後で、ここぢやどうも落著かないからと云つて、楠本は二人を自分の書齋へ案內した。書齋は廣緣傳ひの離れになつてゐた。六疊の部屋の二方には、書棚がづらりと並んでゐて、丸窓の下の机の上には、原稿紙がキチンと眞中に置いてあつた。
「毎日書いてゐらつしやるのですか？」と鈴子が云つた。
「いや……書きたい事はあるんですが、どうも頭が纏まらなくつて……」と楠本は云つた。
「でも、こんなにしてゐらつしやれるのは、本當にお仕合せね。わたし羨ましいわ。」
「これで人の知らない苦勞もありますよ。」と楠本は笑つた。
「そんな苦勞なんかなささうだわ。わたしなんか苦勞が多すぎるわ。」
「あなこそ苦勞がなささうだが……もつともあなたは求めて苦勞なさるのかも知れないね。」
「ちつとも求めての苦勞なんかしてやしませんわ。それなのに心配事が絶えないのですもの……ねえ。」と鈴子は同意

を求めるやうに今井の細君の方を見て、「もつとも、名古屋にゐた時にくらべると、今の方が氣は樂ですけれど。」
「さう云へば、名古屋といふところは、」と楠本は話頭を轉じた。「隨分派手な處ですね。着物なんか東京よりも派手ぢやありませんか。廣小路なども立派だし。」
「でも、つまらない處よ！　長くゐると厭やになるわ。みんな考へが舊式で、うるさくつて……」
「然し、此頃は隨分ひらけたぢやありませんか、カフエーなども澤山出來たし、すつかり文化式になつて、文學なんかも盛んなやうですね。」
「ええ、それはさうよ。鶴舞公園のところには、文化茶屋といふのが出來て、よく名古屋文士が集まりますつて！」
「名古屋文士ですか……」と楠本は受けて、「僕の從弟なども、歌なんか道樂にやつてゐますから多分その名古屋文士の一人でせう。」と笑つた。
其時女中が入つて來て、楠本を呼んで、小さい聲で何か云つた。
「あア、さうか、今行きますよ。」
楠本はかう云つて、女中が出て行つた後で微笑をたたへて二人に云つた。
「つまらぬものですが、一つみんなで晝飯を食べませう。」
「とんだ御迷惑を掛けましたのね。」
「ほんたうにね。」と鈴子も云つた。
楠本に隨つて、茶の間に入つて行くと、そこに大きいチヤブ臺があつて、その上には四人前の鮨の皿が一杯に並んでゐた。
「ほんとにつまらないものですがね。」とお母さんは云つて、じつと鈴子の立姿を見上げた。座をきめてから、

「さあ。」ともう一度お母さんが云つた。
「ここらの鮨はまづくつてね……」と楠本は云つた。

二九

食事の後では、茶を入れて、みんなで寛いで話をした。話題にはお母さんの興味をもちさうな世間話がえらばれた。こんな打解けた團欒の氣分が、鈴子には大變氣に入つた。彼女は時々、楠本の純な美しい眼附をじつと見入つて、その明るい、何の曇りもない、男らしい濶達な樣子に、自分まで心が生き生きするやうな氣さへするのだつた。みんなの親切が、とりわけ嬉しくて、鈴子は絶えずニコニコしてゐた。
「鈴子さんは、毎日何をしてるのですか？」と楠本がやはりニコニコして訊いた。
「わたし？」
かう云つて、鈴子は一寸間がわるさうな笑ひを浮べて、今井の細君を振返つて云つた。
「遊んでますのよ。」
「それぢや退屈でせう。家の母も話相手がないので、退屈してゐますから、氣が向いたら、話しにいらつしやるといいね。」と楠本は云つた。
「ええ、お邪魔にあがりますわ。」と鈴子は嬉しさうに云つた。
「どうぞ、遠慮せずと來て下さい。私はいつもかうして家にばかりゐて、世間の事はあまり知りませんから、面白いお話を聞かせて下さい。」とお母さんも云つた。
「ええ……でも、わたしお話は下手ですのよ。いつも母に、おまへは少しもお世辭が云へないねッて云はれ通しなの

ですもの。」
「お世辭なんか云はない方がいい。」と楠本は云つた。
二人は書齋にもどつた。楠本の出す畫集を見たり、また、彼が度々旅行した時のいろんな話を聞いた。鈴子も此間行つた信州の溫泉の事を話すと、楠本も輕井澤へは行つた事があるので、話がはづんだ。
「さあ、もうそろそろお暇いたしませう。初めてうかがつて、いい氣になつて、長居しましたこと。」
から云つて、今井の細君は、鈴子に歸りをうながした。
「まだいいんでせう……」と楠本は殘り惜しさうに云つたが、二人とも立上つたので、あとからついて書齋を出た。そして廊下で云つた。
「お母さん、もうお歸りですよ。」
「まあ、もつと御ゆつくりなすつてよろしいぢやありませんか。」と云つて、お母さんは出て來て、楠本と一緒に、二人を玄關口まで送り出した。
「僕は一寸そこまで見送つて來ますから。」と楠本は云つて、下駄を女中に出させた。
「おまへ、それで著物はいいかえ。」
「いいですよ。」と云つて、彼は先きに立つた。そして、ここからは數町もある大森の驛へと歩きながら、いつか三人は、また尾村悦吉の事を話したり、旅の事を話したりした。
「鈴子さん、近いうちに、來られたらいらつしやい。あなたのやうな人が、家の中で遊んでばかりゐると、病人になりますからね。少し散歩するといいから。」と楠本はやがてまた思ひ附いたやうに云つた。
「だつて、もうわたし、病人なんですもの。」と鈴子が云つた。

の。」
「何處がわるいのです。」
「何處と云つてきまらないのですけれど、時々熱が出たり、寢苦しい事があつたり、身體がだるかつたりするんです
「ただそれ位の事なら、結婚前の人には有りがちの事ですよ。」
「さうですかしら……津川先生も同じやうに云つてましたわ。」
「津川先生つて云ふと？……」
「帝展に通つた日本畫家ですの。」と鈴子は輕い調子で云つた。軈て三人は大森の驛の構内に入つた。

三〇

鈴子と今井の細君とが、東京行の電車に乘つてから、プラットホームで、その電車の出てしまふまで立つて見てゐた楠本直哉は、自分も一緒に東京に出たいのを、じつと我慢してゐるのだつた。彼は二人を東京まで送つて行つて、銀座の資生堂あたりで、何か快い夕餐でもとつて、もつと彼女と話をしたかつた。けれども、今は今井の細君も一緒だし、それに、今からそんな風にするのは、自分が餘りに安ッぽくなるやうで厭やであつた。まだ焦る事はないと、彼は自分の心をなだめた。先刻鈴子がふッと不用意に、津川といふ名を口に出した時、折りかへして、それは誰だと自分の訊いたのに答へて彼女が「日本畫家なのよ。」と云つた言葉の調子が、かねて尾村から一寸聞かせられてゐた、今の彼女のローマンスが、どんな性質のものであるかを、はつきり示してくれたやうに思はれたのである。

彼が尾村の家で、はじめて彼女――鈴子に會つた時のファスト・インプレッションは「可愛い女ー」ただそれだけであつた。そして、それは可愛く思はれさへすればそれでいいのだと、長い間考へてゐた彼にとつては、想像以上にピ

ッタリと合つてゐると云つてよかつた。彼は彼女の容貌を、嚴密な美の標準から云つて、さほど高くは買はなかつた。他にもつと輪廓の整つた美人は、いくらでもゐると思つた。また彼女が、尾村悦吉の妻などのやうなしつかりしたワイフになれる女ではない事も、彼は一目で分つた。それでゐて——いや、それだからか、妙に心を囚へられて、彼女の様子が自分の心にからみついてくる。彼女の事がしみじみ心配になる。かうした心の變化が、彼にとつては、どんなに不思議だつたであらう!

自分の家に歸つて、母に會つた時、楠本は今日の母の遣り方には感謝したい心持が一杯だつた。何と云はなくても、母はよく自分の心を察してくれるやうな氣がして、彼はじつと母を見ながら、口では別の事を云つた。

「今日、僕はお父さんに手紙を出しますが、何かお母さんの言傳てでも書いときませう。」

「さうだね……いや、別に何もないよ。」と母は云つて、思ひ出したやうに、

「あの、鈴子さんとやら……可愛らしい娘さんだつたね。おまへいつ頃から、お知合ひになつたのかえ?」と訊いた。

「五六日前、尾村君の家で、やはりあの細君が連れて來てゐたのに會つたのです。」と楠本は答へた。

その夜、楠本は、卓上電燈の下で、父にやる手紙を書かうとしてペンを取つたが、ふと思ひ附いて尾村悦吉に當てて書き出した。

「君、あの事については、いろいろ有難う。どんなに感謝していいか分らない。今日、今井夫人と一緒に、彼女はたづねて來てくれた。そして、かなり長い間話をした。そして、君の家で會つた最初の印象が、あやまちでなかつた事を、さらに僕は確かめる事が出來た。彼女は僕の探してゐたその女だつたのだ。間違ひもなく、僕の待つてゐた女だつたのだ。僕の部屋にパッと飛込んで來た小鳥——さうだ、彼女は全く小鳥だ。ただ、居心地のいい所にのみ向つて行く小鳥だ。その小鳥が僕の部屋に飛込んで來た。僕はこの小鳥を見て、僕の鳥籠の中に入れたいと思はずにはゐら

れない。僕でなければ、誰かがつかまへるのだ。だから、僕は自分の腕をひろげて、それを鳥籠にする。そして僕の鳥籠の中で、彼女を氣儘に歌はせ、氣儘に遊ばせてやらうと思ふ。これがこの小鳥に對する僕の遣り方だ。そして、かうした氣持は、單なるリイベばかりではない事は君にも分るだらう。僕は彼女のために、一生十字架を負ひたいと思ふ……」

三一

二日程たつた時、楠本は朝から東京へ出て、銀座の菊屋で買つた母への土産の杏の罐詰だの、苺のジャムだのの包みを提げて歸つてくると、玄關に女客の下駄があつた。

「あア、來てくれたナ。」と楠本はニッコリした。茶の間に入つて見ると、そこで母と鈴子とが、澤山の家の人々の寫眞を見てゐるところであつた。

「お歸り。」

「お歸りなさい。」と二人が云つて迎へた。

「大分待ちましたか？」と楠本は鈴子に訊いた。

「いいえ、そんなでもありません。ほんの一時間位ですの。」

「さう……」と楠本は云つて、母にと思つて買つて歸つた杏の罐詰を女中を呼んであけさせた。

「よく來てくれましたね。」

「お邪魔をしてはわるいと思ひましたけれど、今井の奧さんも勸めて下すつたのでまゐりましたの。」と鈴子は云つた。

そして、彼女は女中が匙を添へて持つて來た杏の皿を、楠本とお母さんとの前にチヤンと並べた。

「多分さうだらうと思つて、こんな土産を買つて來たと思ふでせう……ところが、僕は多分あれきりお出でがないだらうと思つたのですよ。」と楠本は云つて、自分も銀の小さい匙で、杏を口にはこびながら、鈴子がその柔かな紅い口に杏をはこぶのをじつと見た。

杏を食べてしまつてから、少しの間、世間話をしてゐると、お母さんが、不圖思ひ出したやうに、

「ああ、おまへ、この間の帝國ホテルの切符ねえ。鈴子さんに差上げて、一緒に聞きに行かうではないかえ。」と楠本に云つた。

「それはいいですね。」と楠本は云つた。「クライスラアといふ有名な提琴家の音樂會です。」

「まあ、さうですか。お伴させて戴くとわたし嬉しいわ。いつですの？」

「しあさつてです。」

「さう、丁度いいわ。」と鈴子は喜んで、楠本が取り出して來た切符を、彼の手に返しながら、「わたし、その日早くお宅に來ますから……」と云つた。

やがて楠本は鈴子を誘つて、自分の書齋に入つた。そして、机を中にして坐つた。

「いいお母さんねえ！」と鈴子は坐るなり云つた。「わたしなんかお母さんがきついから、他の家で、おやさしいお母さんを見ると、涙ぐましくなるわ。」と呟いた。

「そんなに、あなたのお母さんはきついのですか？」

「ええ、さうなの。」

かう云つて、鈴子は母と自分との事を話しはじめた。ヒステリイを引き起した母に、いきなり髮をむしられた事だの、著物をこしらへてくれても、なかなかそれを渡してくれなかつた事などを話した。こんな話は、女同胞のない楠

本には、珍しくもあつたし、可笑しくもあつた。彼女が母といさかひをして、たたき合つて、後で二人とも泣き出した事など話した時にはくすくすと笑つた。

「それでゐて、母はわたしの事が一番心配になると、いつも云つてますわ。」と鈴子は云つた。「我儘な子ほど可愛いものださうですね。」

「さうかも知れない。僕なども、我儘をはたらくけれど……もつとも、あなたのやうなチツポケな我儘ではないね。」

「さう！」と鈴子は一寸變な顔をして笑つた。

「我儘位はいいよ……女だつて、生々してる方がいいからね。女の人の感情のいぢけてるのは、みにくいからね。」

「わたしもそれが好きなのです。何でも自分のしたい通りにするのが好きなのです。さうしないと、折角生れて來た甲斐がありませんもの……」と鈴子は云つた。

三三

「いろいろお話してると、わたしいい氣持になりますわ。」と鈴子は楠本の顔をじつと見ながら云つた。

「僕は女の方と話する時は、どうしたものか困りますね。女の同胞がないからかも知れないですね。表面ばかりの話ならいくらでも出來るが、こんなに二人きりで靜かな話をする時など、何をいつていいか分らなくてね。」

「あら、そんな事仰しやつたつて駄目よ。わたしチヤンと分つてますわ。あなたはかなり女の人と話するのに慣れてらつしやるもの、屹度いろいろなロマンスがおありになるわ。」

「さう見えますかね、さうだといいんだが、これ迄にちつともそんなものはないんですよ。これでね……表面きりの話をする女の人には、かなり附合つて來ましたが……」

「表面きりなんて？　どうだか……」
「それよりも、あなたこそいろいろな面白い事があつたらしい。尾村もそんな事を云つてゐましたよ。」
「あら、尾村さんが……あの方何も御存知ぢやないわ。」と、鈴子は白い可愛い齒の見える笑ひをした。
「この前あなたが云つてゐた津川とかいふ人はどうしたのです？」
「何でもありませんわ。あの方。」と鈴子は首をかしげて云つた。そして、津川が自分にその心持を打明けて、來年の春か夏までに準備をするから、それ迄待つて、結婚してくれるようにと云はれてゐる事を、飾りのない言葉で話して、
「でもわたし、そんな先の事は、その時にならなければ分りませんもの、まだ御返事をしてないのよ。」と云つた。
「なかなかあなたは考へ深いね。さう見えても。」と楠本は微笑して云つた。
夕方近くなつた頃、見送りかたがた銀座の方で何か食べるからと云つて、楠本は鈴子を伴つて家を出た。
「それではしあさつての音樂會に是非來て下さい。」とお母さんは念を押した。
二人は家を出て、銀座の千疋屋の二階の洋食部に上つた。二人きりの座席が、隣席から見えないやうに出來てゐるので、二人は落着いて話する事が出來た。
「津川さんは、こんな人のために氣を揉んでゐるんだね。」と楠本が云つた。
「どうだか分りませんわ。男の人は複雜ですもの。けれど、津川さんはあれで幸福ではないのよ。いつも不幸さうで、寂しがつてゐますわ。ですから、わたしはお可哀相になつて、いつも行つてあげてますの。するとお喜びになつてるわ。」
「それぢや不幸とは云へない。」と楠本は苦笑して云つた。
「でも……」と鈴子は云つて、一寸默つてから、

「わたし此頃だんだんと心細くなるんです。この間など、ゐるところが無くなつて、どんなに困つたか知れないのよ。」と云つて、あの刑事の來た事、宿を斷られた事などを話して、
「こんな苦勞は女には辛すぎるわ。」と云つた。
「あなたは、女優になりたいとか、女文士になりたいとか云ふやうな野心があるんですか？」と楠本は訊いた。
「そんな野心なんかあるものですか。」と鈴子は首を振つた。
「それぢやどんな考へ？」
「わたしは、さきざきの事などで苦勞するのはつまらないと思ふわ。さうでなくてさへ、苦勞が多すぎるのですもの。わたしはね、じつと怠けてゐたいのが一番の望み。」
「ちつぽけな望みだね。あなたのやうな人はそんなにさせてやりたいものだ。」と楠本は笑つて云つた。
食事の後で、二人は何となく打解けた隔てのない氣持になつて、手を取り合はんばかりに寄り添つて、銀座から日比谷の方へ、明るい灯の中を歩いて行つた。

三三

その夜、鈴子が楠本と日比谷の停留所で別れて、家に歸つてくると、津川の手紙が來てゐた。なぜ來てくれないのでせうと云ふやうな言葉が、今の彼女には、とりわけすまないやうな心持がされたので、翌日の晝すぎ、彼女は出かけて行つた。
「まあ、鈴子さんですか。さあお上りなさい。」と、どういふわけか今日は津川の姉のいそ子が、自分で出て來て彼女を迎へた。こんな風に出られると、これ迄の行き懸りはあつても、いい顔をせずにはゐられない鈴子であつた。いそ

子に迎へられた儘に茶の間に通つて、その長火鉢の向うにすわつた。
「先生は？」と鈴子は訊いた。
「あれは今、一寸來たお客と一緒に外に出ましたが、直ぐ歸ると云つてゐました。ことによつたら、あなたのお家へ寄つたかも知れませんよ。」
「まあ、さうですの。わたしもつと家にをればよかつたのでせうか。」と鈴子は呟いた。
「ねえ、鈴子さん。」とお茶を入れながら、いそ子は話し出した。「此間、あなたのお母さんや妹さんから、お手紙を頂きましたよ。」
かう云つて、いそ子は柱のところの狀差しに眼を向けた。鈴子が見ると、名古屋市中區云々と見覺えのある妹の筆蹟が目についた。何だか間の惡いやうな氣がして、鈴子は云つた。
「何を云つて來ましたの？」
「何ならお目にかけてもいいんですよ……」
かう云つて、いそ子はその狀差しから手紙を拔き取つて、鈴子の前に置いたが、彼女はじつと見た儘で手を出さなかつた。
「どうせつまらない事を云つて來たのよ。」
「そんな事はありませんよ。お母さんなればこそ、お妹さんなればこそ……」と、いそ子は、そのこゝこに力を入れて云つた。
「こんなに御心配なさるんですよ。それで私、昨晩御返事いたして置きましたよ。鈴子さんはお達者で、毎日宅においでになつて、私と一緒に縫物をなすつてゐます。そのうち……」と云ひさして、いそ子は考へ深さうに默つた。

鈴子はさてこそと思つた。來た時からのいそ子の樣子に、これ迄にない、つとめて此方の意を迎へてゐるやうな待遇が見えたので、はじめのうちは、すまない心持で受けてゐたが、次第にその底の重大なものが現れてくるやうな氣がしだしたので、彼女も默つた。こんな時、早く津川が歸つて來てほしかつたが、玄關にそれらしい音もしない、じつと俯いてゐると、いそ子が口を切つた。

「弟の話によると、此頃鈴子さんは、お友達が新しく出來たとの事ですが、さうですか？」

「ええ……」と、鈴子は云つて、ふつと上を向いて、いそ子の眼の妙な光にぶつ突かつて、まごついた。

「大層立派な家の立派な方ださうですつて、本當ですか？」

「そんなでもありませんわ。」と云つて、鈴子はいそ子がどうしてそんな事をなじるのか、不思議に思つた。

「でも、あなたは、いくらでもお友達が出來る方ですね。よくさう廣くお附合ひがお出來になる事ね。私などから見れば、一人の友達を持つといふのでも、こちらの實意を盡すとなれば、いろいろの心づかひだけでも大變ですから……たくさん要らないやうに思ひますがね……」

「わたしには實意がないから、いくらでも出來るんでせう……」と鈴子は云つた。彼女はいそ子の云つた皮肉に、もつと強い言葉を酬いたいと思つたが、直ぐには考へつかなかつた。

三四

津川が歸つて來て、茶の間に入つた。そしてそこに鈴子のゐるのを見ると、彼は嬉しさうに、ニコニコした。彼の淺黑い顏は、少し飲んだと見えて、酒の醉ひを發してゐた。

「おお、よく來てくれましたね。姉が何かあなたに話があると云つてましたがもう聞きましたか？」と彼は云つて、

額の髮を右手で搔き上げた。
「ええ、もううかがつたわ。」と鈴子は云つた。
「それぢや、僕の部屋へ行きませう。ねえ、姉さん、僕の部屋へ引取つてもいいでせう？」
「いいですとも……」といそ子は云つた。
「あああよかつた……、丁度、鈴子さんが來てくれたからね。姉さん、すぐ何かレモン紅茶でもこしらへて下さい。僕、喉が渇きますからね。」
「まあ、大分お醉ひになつてるのね。」と鈴子は云つて、先に立つて行く津川を見た。その肩のあたりの影の薄いのが、今の彼女には、しみじみとこたへるやうであつた。
「僕はね、鈴子さん、あまり醉つてゐないのですよ。心はハツキリしてゐる……ですから、いいでせう、さあ、坐つて下さい。」
部屋に入ると、彼はかう云つて座蒲團を敷いて、そこに鈴子をすわらせた。
「さあ、何から話しませう……何か澤山話がたまつてゐるやうな氣がしますよ。鈴子さんに會つたらば、それを云はうと思つてゐたのに、それがなかなか出て來ない。でも、今に云へるのでせう……さあ、どうぞ、樂にして下さい。」
と云つて、津川は後の壁に身をもたせて、充血して赤くなつた眼をうつとりさせてゐるが、口もとに時々、痙攣的に泣き出しさうな表情がチラチラと動く。
「わたし、はじめてよ。先生のお醉ひになつてるのを見るのは……」
「さうかしら……僕はお酒を飮むと沈む質でしてね……」と津川は云つてから、急に聲を引立て、
「大丈夫です。僕は少しも醉つてゐませんよ。心はハツキリしてゐる。心は、悲しみでハツキリしてゐる……」

から云つて、津川はぐつたりしたやうに俯向いた。
長髮の頭が、鈴子の目の前に亂れた。
「僕はね。」と津川は、突然顏をあげて云ひ出した。眼はじつと鈴子を見ながらかがやいた。
「僕はね。昨夜、夢を見たんですね。どんな夢だか、あなたには分りますか？ そして、これが或ひは夢でない、夢よりも、もつと惡い或る前兆だといふ事が、私に思へるのをあはれみませんか？」
「でも……惡い夢を見たつていいんですつて。逆夢が多いつて云ひますもの……」と鈴子は慰め顏に云つた。津川はそれには答へないで、云ひはじめた。
「僕はこの壁にもたれて、かうして坐つてゐた。そして、僕は闇をじつと見てゐた。じつと見てゐた……」と彼は繰返した、鈴子は何だか恐ろしいやうな、また、そそられるやうな氣持でじつと聞いた。
「私はね、鈴子さん。その闇の中で、ハツキリと見たのだ、私のこの胸が、その闇の中に、一すぢのヒビが入り、そのヒビが、次第に大きくなつて、開いて、そこに裂け目が現れて、絶えずビクビクと痙攣しながら、傷と裂目とが、私の身體と同じ大きさになるのを……私は苦しんだ。そして泣き叫んだ。だが誰も來てくれない。ただ私は、一秒一秒と裂けてなくなりさうなのだ。で虛空をつかんでアツと呻つた……それで眼が醒めると、身體中は汗で濡れてゐた。誰もそばにはゐない。ただ、私がここで坐つて、苦しい息をついてゐるばかりだつた。夢のやうな氣がしない。あんなに胸の破れる感覺……それが僕以外の人の誰に分るかね……」と津川は喘ぐやうに云つた。

三五

鈴子がうつむいた儘、何とも云はないので　津川は云ひ續けた。

「その時、僕はさう思つたね……これは或ひは僕の身にとつて惡い前兆かも知れないぞとね……僕の望み、僕の願ひに、無慘なカタストロフイが來るんぢやなからうかとね……僕の愛は泡のやうにかき消えてしまふ。僕の夢想は失はれてしまふ。そして夜が來ると、この窓にもたれて、じつと秋風に鳴る黑い木の葉のさやぎを見るんです……僕は誰をも怨まない。それがどんな事であらうと、僕は運命論者です……僕は所詮ハムレツトなんだ。だからみな成行にまかせるんだ。誰を怨む事もない。ただ僕は僕の胸の裂けた傷をじつと見て、その痛みに泣くのだね。身體中をふるはせて、じつと……永久に泣くのだね。名も要らない。戀も空しい。ただ悲しみが、僕を長い間、この世につなぎとめるのだ……そんな男なんだよ。僕はね……」

かう云つて津川は、がつくりと首を垂れた。その頭髮が少し動いた、と、肩がビクビクとして彼は泣いてゐるのだつた。その樣子を見ると、鈴子はすつかり津川の調子に引込まれてしまつて、何故だか譯は分らないが、心の底から津川が氣の毒で、氣の毒でならない氣がして來て、自分も袖を顏に當てゝ、しくしくと泣き出した。

「僕はね……」と津川は云つて、鈴子の顏をじつと見つめた。

「僕は多分、あなたの棄てたあの二人の男、あの名古屋の男になるよ。そして多分僕はその第三の男になつて、じつと遙かに、あなたと云ふ女性の幸福を祈りませうね。どうもそれが、あなたに對する僕の一番いい愛の表白だと考へられるから……」

「なぜ、そんな事を仰しやるの?」と鈴子は涙まじりに、喞つやうに云つた。

「わたしには分らないわ。ええ、ちつとも分らないわ……わたしはかうして、いつも先生の仰しやる通りしてるぢやありませんの?、來いと仰しやれば來てゐますし……ですから、これでいいのぢやありませんの。」

「ああ、いいですとも、これ迄のあなたの優しいお心はよく分つてゐます。これ以上求めようとする私が無理だ。」

「先生に御無理なところは、ちつともありませんわ。こんなにわたしを大切にして下さるんですもの……ですからわたし先生と結婚しないんだつたら、誰ともしませんわ。わたしはこの儘で行けるところ迄は行くつもりです。これからもつと先生に、何もかも御相談するわ……」

「僕に何もかも相談してくれるのですね。」

と津川は嬉しさうに云つた。

「ええ、わたし、何もかも先生にお話いたしますわ。わたし頼りにしてゐますものを。」と鈴子は云つた。

その時いそ子がレモン紅茶をこしらへて入つて來て、二人の樣子をヂロッと見て、一寸顏色を變へたが、直ぐ取り繕つて、そこにすわつて、

「先刻も云つた事ですがね。お母さんからのお手紙もあるのですし、これからは、もつと私達も鈴子さんの事を氣を付けてあげませう。どうせ私のやうな舊弊な人間の考へなど、鈴子さんから見れば。」といそ子は、見ればいいに力を入れて、「堅苦しくて、お厭やでせうがね……弟もさう云ふのですが、あなた此方に越して來ませんか。私の家は、今はいけますまいから、私の家に來る娘さんの所で、何處かいい所を聞いてあげますからね。よろしいでせう……」

「ええ、有難うございます。いづれ御願ひいたしますわ。けれど、折角今井の奧さんがお世話下すつたんですし、わたしとても度々引越すのは、疲れて厭やですから、今の所にゐられるだけゐますわ。」と鈴子は云つた。

三六

帝國ホテルの音樂會に行く日が來た。鈴子は支度をして楠本と約束した通り、早めに大森の楠本の家に出かけて行つた。玄關に取次に出て來た女中なども、もう彼女には心置きなく、直ぐ奧に通した。楠本のお母さんは、彼女を迎

へて、

「私には西洋の音樂など、よくは分りません。けれど、まあ賑かなところへ、たまに出て行くのも氣晴しですから……」などと云つた。楠本が出て來たので、一緒にお茶を入れながら、名人會の話とか、流行の話とかを、このお母さんの相手をして、氣樂に話してゐると、鈴子には、何となく、落着けるやうな氣がするのだつた。食事は東京でしようと云つて、電燈がついてから三人は愈々出かける事になつた。

「まだ自動車は來ぬかえ？」とお母さんは女中に訊いた。

「さあ、もう來さうなものでございますが、もう一度、お電話をかけませうか。」と、女中が云つた。

「ナニ、いいよ、もう少し待つてゐよう。」と楠本が云つた。電車で行く事とのみ思つてゐた鈴子は、自動車をよんで、それに三人が乘つて行くのだと知つて、何とも云へず樂しい氣がした。間もなく、女中が自動車が來たことを知らせて來た。

「さあ、出懸けよう。」と楠本は先きに玄關を出たので、續いてお母さんを先きにして鈴子も玄關を出た。まだ新しい自動車の中には紅いカアネエションの花が飾りに挿してあつた。お母さんと鈴子とのすわつた前に、楠本は腰を掛けた。すると、自動車は門前の砂利をきしつて動き出した。見るともなく硝子越しに見ると、通行人が皆振返つて、車の中をまじまじと見入るので、鈴子は何だか面はゆいやうな氣がした。そして、妙に津川の事が思ひ出されて、すまないやうな氣がした。灯のついた八ッ山の鐵橋を越して、品川から芝の方へと自動車は夜の都を疾驅して行つた。やがて帝國ホテルの正門を廻つて、高架線に近い方の門內に入つて行くと、そこには停つてゐる自動車が二三臺もあつた。三人が自動車からから下り立つと、そこらにゐた數人の學生が、一度に振返つて見た。

「まだ始まるまで三十分位ありますから、グリル食堂でゆつくり食べませう。」と楠本が云ふので、食堂の中に入ると

飾燈の下では夕食を攝つてゐる人々が一杯ゐた。その大方は、富裕な人々で、中にはきらびやかな洋裝の日本婦人もゐたし、外國の旅客達と思はれる人々も、ここかしこに坐つて、いかにものんびりと美食を攝つてゐる。濃厚な絢爛な色彩と氣分とが一杯に漲つてゐて、こんな贅澤な生活が、この都の眞中にあつたのを今まで知らなかつた自分といふものを、鈴子はしみじみとあはれに思つた。

ウエータアのはこぶ幾皿もの調理で輕い食事をしてから、そこを出て、通路を通つて、もう聽衆を入れてゐる會場の方へと行くと、孔雀のやうに著飾つた令孃や、貴婦人達がツンとすました顏をして歩いて行く。その人達の態度も顏も、鈴子の眼からは、何となく冷たく無表情に見えたのである！ 上品と謂はば謂へ、それは或る意味では氣味の惡いやうな澄まし方であつた。話してゐる人々の樣子はといへば、いかにも形式的で、わざとらしくつて、通り一遍な附合のやうに見えた。

楠本の後について、二人はやがて一等席についた。そこは舞臺の左寄りの稍や後の席であつた。席について、ふと氣が附くと、お母さんが先きに入り、次に自分が入つたので、彼女の隣には楠本が腰かけてゐた。

「クライスラアつてどういふ方ですの？」と鈴子は楠本に訊いた。楠本は小さい聲で、この世界的音樂家の生れた國と略歴とを云つて聞かせた。そして今日のプログラムを彼女に渡した其時、二人の手は觸れた。

三七

靈妙なヴァイオリンの音律がばつたり絕えて、二十分休憩の幕が引かれると、美しい夢からはじめて我れにかへつた鈴子は、ふッと振返つて楠本を見ると、楠本は彼女の眼を迎へて、微笑んだ。そして立上つたので、彼女はお母さんの方へ向いて、

「あちらへまゐりませうか？」と囁くと、お母さんも頷いて立上つた。三人連れ立つて、ゆつくりと廊下に出ると、そこには、土産物の袋物とか、こまごました趣向品とかを賣つてゐるところがあつて、女の人が、二三人並んでゐる。帝劇などと違つて、直ぐ露臺に出ると云ふ事の出來ないところなので、その廊下に立つてゐると、ふとそこに通りかかつた瀟洒な洋服の青年が、顔見知りと見えて、楠本に聲をかけた。そして、暫く立話をしながら、時々、じつと鈴子を見る眼附が、いかにも、これは楠本のそれなのだな、と云はんばかりなので、面はゆい氣がして、彼女はくるつと背を向けて、丁度、お母さんが袋物を見はじめたので、そこに行つて、自分も一緒に見た。

「よく出來てるわネ。」とお母さんが云ふ品を、自分も眼を張つて見てゐると、つい傍らに、紳士が來て立つたので、何の氣もなく見上げると、その紳士の横顔から、肩のあたりなどが、津川にそつくりと云つてもいい位なので、彼女はハツとして、胸が轟いた。そしてじつと竦んでゐると、その紳士が立去つたので、後を見送ると、遠くなつて此方を向いた。その顔を見ると、それは津川ではなかつた。考へて見ると、津川が今夜こんなところに來てゐさうな筈はなかつた。やつと彼女は安心したが、やはり胸は靜かではなかつた。やがて次の鈴が鳴つた。楠本が話してゐる人と別れて、こちらに來たので、彼女は覺えずニツコリして、彼の傍により添つた。そしてお母さんを先きに立てゝ座席に著いた。

演奏の全部終つた時分は、もう十時過ぎてゐた。皆急いで外へ出る中に、廊下に立つて、樂になるのを待つてゐる時、楠本が鈴子の耳元で云つた。

「母がさう云つてるのですが……こんなに遲いしするから、あなたさへかまはなければ、今夜、僕達と一緒に大森へ歸りませんか。どうです？」

「ええ……」と鈴子は答へて、一寸赧い顔をしてお母さんを見た。すると、お母さんも、

「ほんとに、よかつたら、一緒に大森へお歸りなさい。かまひますまい？」と口を添へた。
「でも……御迷惑でせうもの。」と鈴子が口籠ると、
「そんな事ないよ。」と楠本が心安げに云つた。
いつの間にか、楠本が、チヤンと自動車を迎へに來させてゐたと見え、外に出ると、前燈をつけた自動車が待つてゐた。三人がそれに乘ると、直ぐカアブして、帝國ホテルを出て、銀座の方へ行つてから、右に折れて芝口の方へと走つて行く。右にも左にも、キラキラと美しく灯のついた店々が立並んで、鋪道にはまだ賑かな人通りである。
「さすがにうまいものでしたネ。」と楠本は云つた。鈴子は自分に云つたのだと思つたので、
「ええ、さうでございましたわ。わたし初めてあんな立派なヴアイオリンを聞いて、仕合せでしたわ。」と答へた。
「私にはやはり呂昇の義太夫の方がいいやうに思つたよ。」とお母さんが云つた。
「くらべてはいけないよ、お母さん。呂昇は呂昇でいいのだし、クライスラアはクライスラアでいいのだもの、まるで違つたものとして、聞かなくちやね。」
「さういふものかね。」とお母さんは笑つた。

三八

自動車が玄關にとまると、
「お歸りなさいまし。」と女中が出迎へて云つた。そして、楠本を殘して、二人が先に茶の間に入ると、留守の間にも女中がチヤンと支度してあつたので、やがて楠本の入つてくるのを待つて、香り高い綠茶を入れて、そこで暫くの間話をしてゐると、十一時を打つた。

「さあ、もうやすむとしませう。」とお母さんは云つて、女中に、鈴子の寢床を客間へつくるやうに云つた。

「ゆつくりおやすみなさい。朝も早く起きなくてもいいんですよ。」

「ええ。」と鈴子は答へた。何から何まで優しくしてくれるのが嬉しくもあり、妙にすまない心持がされた。やがて女中が支度の出來た事を知らせて來たので、

「さあ、おやすみなさい。僕達にかまはないで……」と楠本が云つた。「だが、鼠に引かれないやうに用心をしてね。」

「まさか……」と鈴子は笑つた。

女中の後について、八疊の客間に入ると、そこには柔かな絹の夜具が敷かれてゐた。そして、お母さんのかと思はれる單物の寢卷もチヤンと置いてあつた。女中が立去つてから、彼女は寢卷に著替へて、著てゐた著物や帶をキチンと疊んだ。そして、横になつたが、眼は冴えて、なかなか寢附かれさうにない。こんな廣い家なので、物音一つ聞えない。たゞ時計の音が離れた茶の間から仄かに聞えるばかりである。

一時を打つた時分、外にしとしと雨の降る音が聞え出した。鈴子はじつとその雨の音を聞きながら、考へるともなく考へたのは、かの津川のことであつた。此間の津川の云つた事、した事がまざまざと思ひ出された。あの夢の話をして泣いた彼の樣子を思ふと、津川が可哀相でならない氣がするのだが、今離れて考へると、その夢の話なども、何だかあまりにたはいがないやうな氣がして、あきたらなかつた。が、昨日も今日も、自分が行かなかつたから、津川は寂しかつたに相違ないと、彼女は思つた。それと同時にあの妙に、態度を變へて來た津川の姉のいそ子の事を思ふと、何だか底が知れないやうな氣がしてならなかつた。そんなこんなから、今の自分の身の上を考へると、この世の中のままならぬ事がしみじみと思ひやられて、涙ぐましいのであつた。彼女は一昨日、津川に約束した事をも考へた。

「あなたと結婚しないのでしたら、わたし一人で行けるところまで行きますわ。」

から云つた言葉は、彼女の心を僞つた言葉ではなかつた。事實彼女は出來るだけ、苦勞の多い結婚生活を避けて、ひとり身の自由を享樂したいと云ふ心持が强いので、そんなに結婚はあこがれてゐなかつた。この前名古屋のあの二人の求婚者たちにその承諾を與へなかつたのも、そのためで、人から見れば薄情な女のやうに考へられても、彼女自身、意識しての飜弄をほしいままにしたわけではなかつた。

寢ついたのは、二時頃であつたのに、早く眼がさめて、六時頃にはチヤンといつでも起きられる位に、心がはつきりしてゐた。かうして他の家に泊つてゐると、氣が張つて、よく寢ることさへも出來ないことを考へると、彼女はやつぱり自分の家がよかつた、と想つた。何處にも物音一つしない。起き上つて、寢亂れ髪をなほしながら、耳をすますと、昨夜からの雨はまだやまないで、雨だれの音が軒をつたつてゐる。

「こんなに雨になるのが分つてたら、昨夜來るのではなかつたのに……」と彼女は呟いた。

三九

女中が雨戸をあけて行つたので、部屋がパッと明るくなつた。鈴子は天井の高い廣い部屋の中を見廻して、いつまでも此處にやすんでゐるのが、妙にそぐはないやうな氣がして、急いで起き上つて蒲團をあげて、キチンと身支度をした。そして、廊下に出て行くと女中が朝の挨拶をしたので、顔を洗ひたいからと云つて見た。すると女中は、

「こちらへいらつしやいませ。」と心易さうに云つて、臺所の傍にある洗面所に案内した。

「雨でいけませんのね。」と女中は硝子戸の外の雨あしを見ながら云つた。

「ほんとにね。こんなに今日降らうとは思はなかつたわ。かうして雨が降つて、だんだん寒くなるのだわ。」と彼女も云つた。

そのうちに、楠本もお母さんも起きて來て、茶の間に揃つた。どてらに兵兒帶をくるくると卷き附けた楠本のかまはない樣子が、鈴子の眼を惹き付けて、彼女は何となく微笑ましく思はれた。

「感心に朝早く眼を醒ましたぢやありませんか。」と楠本は鈴子に云つた。

「さう？　わたしは、ひどい朝寢坊なんですけど……」と鈴子は云つて笑つた。

「そんなに早く起きなくてもよかつたのにね。」と楠本のお母さんも話の中に入つた。おみおつけに、燒海苔で、あつさりとした朝飼をすましてから、彼女は楠本の後について、その書齋に入つて見るとまだ掃除されなかつたので、女中から箒などを借りて來て、掃除にとりかかつた。

「あなたがしてくれるのですか。」と楠本はわざと驚いたやうに云つた。

「ええ、何でもないわ。これでわたし氣が向くと綺麗好きなのよ。」と彼女は笑ひながら云つた。そこに女中が飛んで來て、一緒に手傳つたので、すぐ部屋は綺麗になつた。

「すつかり正體が分つた！」と楠本が突然大仰に云つた。「僕の睨んでゐる通りだ。あなたの氣儘は、氣を向けさせられさへすればこの通りになるんだよ。だからそれさへ心得てをれば、雜作はないね。」

「アラ、いやだわ。何かと思つたら、あんな事を云つて……」と鈴子は、楠本の顏を見ながら云つた。

二人はそこにすわつた。昨夜の音樂會の話を暫くしてゐた後で、鈴子が云ひ出した。

「隨分綺麗にした人が來てゐましたわね。けれど、どうしてあんな風に外の方を鎧つて、冷たい顏附をしてゐるんでせうね……あの人達の中には、あんなにしたいばつかりに、金持と結婚してゐる人もあるんでせうが、綺麗な着物を著て、賑やかな所に出て、孔雀のやうに振舞つてゐるのが、どれほど樂しいんでせう？　そんな虛榮心や野心の持主を見ると、あさましくつて、可哀相だわ。」

「ひどく氣焔をあげるね。ぢや鈴子さんは、そんな結婚はしないのだね？」
「ええ、さうですとも……まさかわたしなんかに申込する金持もないでせうが、あつたつて駄目よ。」
「それぢや、やはり金はなくてもしつかりした人間が氣に入るわけだね。」
「それはさうですとも……その上に、わたしはどんなに氣に入つた人でも、係累があれば厭よ。係累があれば、始終つまらぬ事でゴタゴタして、そんな時女が一番割がわるいんですもの、二人ぎりの生活でなくつては……」
「それは無論、結婚したら二人きりにならなくちやいけないよ。」と楠本は少し笑つて云つた。
「そんなことなんか當り前ぢやないか。可愛い細君のためには、係累と離れる位何でもないと僕は思ふ……」
「ところで、さうでないのよ。男つてものは本當にさうでないのよ。」鈴子は繰返した。

四〇

楠本は、鈴子が母の雨下駄をはき、雨傘をさして歸つて行つた後で、長い間机にもたれて思ひに沈んでゐた。外には雨が、なほしとしとと降つて、硝子越しの庭先きには、楓の紅い葉がハラハラと土にこぼれてゐるのが見られた。
「よし！」と楠本は自分に云つた。「俺は大膽にやつて見よう……」
彼はその日、ずつと閉ぢ籠つて二通の手紙を書いた。一通は名古屋の從兄へ、今度の事を詳しく書いて、鈴子の家の事や、彼女自身の事を、出來るだけの方法でよく調べてくれるやうにと頼んだ。今一通は、今井の細君に宛てて、お呼び立てしてまことに濟まないが、一寸お話しいたしたい事があるから、お遊びかたがた、いらして下さいませんかと書いた。
手紙が着いた匆々着てくれたと見えて、その翌日の午後、今井の細君がやつて來た。そして鈴子が持つて歸つたあ

の雨傘と下駄とを持つて來て、彼女が加減がわるいと云つてやすんでゐる事を話した。
「何處がわるいのですか？」と楠本は訊いた。
「ええ。」と今井の細君は少し笑つて、「大した事はないんでせう。けれど、風邪をひいたとか云つて、やすんでゐました やうですよ。」
「それぢや此間の音樂會で疲れたのかも知れません。」と、楠本は云つて、この間の夜の事を一寸話した。暫くお茶をのみながら、そんな話をしたあとで、彼は今井の細君に自分の考へを話し出した。それを默つて聞いてゐた今井の細君は、
「そんなに、御決心になつたのでございますか。尾村さんからも重々、そのお話は伺つてはゐたのですが……それで、あの方の變つてゐる點も、何もかも御了解なすつての事でせうね？」と聲をひそめて訊いた。彼女から見れば、鈴子といふ婦人が、あんな風な辛抱といふ事の嫌ひな人であるから、初めに餘程その點を念を押しておく必要があると思つたのだ。すると楠本は何の不安もなげに、
「それは心配はないのです。あの氣儘は大して問題にする程のものぢやありません。こちらの出方次第で、どんなにでも柔順になるところがある人です。」と云つた。
「お家との方は？」
「家の方との折合ひの事など、僕にとつては問題でないのです。それに、母にも氣に入つてゐるやうですから、僕はちつとも心配してゐません。ただ僕が氣になるのは身體の弱い事ですが、これも熱海とか、鹽原とかで一年位も靜養するとなほりさうです。」
「さうですね。身體が丈夫になれば、あの方の氣儘もなほるのでせう。」と今井の細君はうなづいた。そして、不圖思ひ出したやうに、

「實は今あの人のゐる處は、一時ちよつと預つて貰つてゐるだけですから、早晩出なければならないので、何處かいい宿はないかと、私も探してゐるのですよ。」と云つた。

楠本は暫く考へてから、

「若しそんな事でしたら、當人さへよければ、僕の父の友人の別莊が房州の千倉溫泉の方にあるんです。そこへ行かれるやうにするといいな。頼んであげる事は、直ぐあげられるのですがね。」と云つた。

今井の細君は、その晩鈴子の部屋をたづねて、今日聞いた楠本の決心をそれとなく話した後で、よく考へてみてくれるやうにと云つた。

「そんな事はわたしの身に餘るお話ですわ。有難すぎますわ。」と鈴子は云つて、暫く考へてから、

「けれど、わたしはこんなに何の支度も出來ない身分なんですもの、金持の家へなんか行くのは餘りにみじめですわ。」

と云つた。

四一

それから十日ばかりたつた日の晝頃であつた。鈴子が今井の家の玄關のところで、細君を呼んだ。それで細君が出て行くと、

「あのねえ、わたし、一寸御相談がありますの……」と鈴子は云つた。細君は玄關を出て、山茶花の咲いてゐる木戸口のところで佇んで話を聞いた。

「どういふ事？　何か心配な事でも起つたのですか？」

「いいえ、さういふ譯ではないんです。けれども……妹からかういふ手紙が來ましたの。」と云つて鈴子はその手紙を

今井の細君に渡した。
「何を云つてらしつたの？」
「あの楠本さんがね、名古屋で、人に頼んで、わたしの事をいろいろ聞き合してゐるツて事を知らせて來たんです。そして妹から姉さんは津川先生と結婚するのかと思つたら、また別の人が出來たのかつて云つて來たりして……わたし、厭になりましたわ。何だつてそんな風に、わたしが承知もしないうちに人の事をいろいろ調べまはるんでせう。」
「だつて鈴子さん、誰だつて申込をする前に調べますよ。調べられたつていいぢやありませんか。」
「ええ、構ひませんわ。別に身に暗い事はないいんですから……でも厭だわ。いつかは刑事だといふ男に來られて、厭な思ひをしたでせう。今度はまたこんな目に遭ふんですもの、津川先生なんか、あんなにわたしを望んで下すつても、何處迄もわたしつていふ人間を尊重して下すつてますから、わたしの過去を調べたりなんかなさらないわ。」
「ぢや、あなた、どうなさるの。」
「わたし、これから一寸、楠本さんの家へ行つて、抗議云つてくるわ。何だか氣がくしやくしやして仕様がないんですもの。」
「それはいいのね。兎に角行つてらつしやるといいのね。」と、今井の細君は少し笑つて云つた。
「兎に角、鈴子さん、この問題はよくお考へになる方がいいわ。それは楠本さんがどうしてもお嫌ひなら仕方がないでせうが……もうあなた二十三でせう。二十三にもなればもうさうゆつくりは出來ませんよ。今こそいくらでもあるやうな氣がしてゐても、これで四五年もたてば、またどんな寂しい目にあふか分りませんよ。何かの才能で身を立てようといふ考なら、それでいいけれど、あなたはそんな考へはないのですもの……」
「それは、さうかも知れませんの。兎に角本當に考へて見ますわ。」と鈴子は云つて一寸眉をしかめて、「でも、わた

しにはむづかし過ぎるわ。わたしには、そんな事を決める強い心がないんですもの、何が何やら分らなくなつてしまふばかりですもの……それは二人ともお優しいし、二人ともそれぞれ、しつかりしてらつしやるだけに今急にどちらかに定めるのは難かしいわ。わたしの心はどつちの方も傷つけたくはないのですものね。」と鈴子は袖を折るやうにして云つた。

「それはさうでせうね。」と今井の細君は同情するやうに云つた。鈴子は言葉を次いで、

「津川先生は、わたしを尊重して大切にして下すつて、恰度、兄さんのやうでせう……けれど、わたしとたつた二人きりで家庭をつくるといふ事になると、どうですか萬事不決斷ですからつまらないわ。あの方は實行家ではないのですもの……楠本さんは、ハキハキしてゐて、あの剛情なところや、かまはないところなどは、わたしには氣に入るんです。けれど、それだけわたしが支配されてしまひさうよ。それにあんなお金持の家の方ですもの……あそこのお母さんはお優しいけれど、それはわたしがお客で行つてればこそで、嫁姑の間柄にでもなればどうですか……叔母姪の間柄でも嫁姑になれば又格別だといふぢやありませんか。」と鈴子は云つた。

四二

鈴子が楠本の家へ行くと、玄關に出て來た女中が、奥さんは今名古屋に行つてお留守中だと云つた。

「直哉さんは？」と鈴子は訊いた。

「若旦那様は、昨夜、名古屋からお歸りになりました。今お書齋にゐらつしやいます。」

「さう……それぢや、わたし喫驚させて上げたいから、直ぐお書齋へ行くわ。」と云つて、鈴子は女中と眼を見合せてにつこりした。

彼女は、そつと書齋に入つて行つて、むかう向きにすわつてゐる楠本の肩を叩いた。
「おお喫驚した。」と、云つて、楠本は向き直つて鈴子を見た。
「名古屋へ行つてらしつたつてね。」
「どうして知つたの？」
「今、あそこで訊いたのよ。何の用で行つてらしつたの？」
「あなたの事を訊きに行つたのだ。」と楠本は無雜作に云つた。
「あたし、怒りに來たんですよ。そんなに人の事を調べたり何かして、刑事ぢやあるまいし、失禮だわ！」
「僕はちつとも失禮したとは思つてゐない。お嫁さんを貰ふ時、問合せをしない奴があるものかね。」と楠本は態々ざつくばらんに云つた。
女中がお茶をはこんで來たので二人は一寸默つた。女中が立去るのを待ち兼ねたやうに、鈴子は口を尖らせて、
「だつて、それは失禮ですよ。津川先生なんか、わたしと知合つてもう隨分になるのに、まだ一度だつて、わたしの過去を調べたりなすつた事はありませんよ。」と云つた。楠本は一寸癪にさはつたやうに、
「それはさうだらう。津川君はあなたと結婚するつもりはないんだからね。調べる必要もないだらう。」と云つた。
「そんな事あなたには分りませんよ。」と鈴子は妙な顏をして云つた。
「僕はさう思ふね。津川といふ人は、とりたててあなたでなくちやならぬと云ふのではないのサ。ただあなたが目の前に現れたからと云ふだけの事サ。僕は、そんな事云ふのは厭だから今日迄云はないでゐたが、津川といふ男は男らしくないよ。あなたに對するその遣り方なんぞ、僕から見れば隨分變に見えるよ。あなたのやうな人に愛を乞ふなんて云ふやうな事があるものか！」

「まあ、あんなひどい事を云つて……津川先生は本當に可哀さうなんですもの。」
「可哀さうなんだつて、女から惘まれるなんか、男の名譽ではないよ。」
「あなたはひどい方ね。」と鈴子は暫くして云つて、「わたし、今井の奥さんに伺つたら、わたしを欲しいつて云つてらつしやるつて事ですけれども、あなたと一緒になつたら、わたし隨分ひどい目にあひさうだわ。」
「それは或ひはさうかも知れない……けれどつまらない事に優しくして、いざと云ふ時に役に立たない男に僕はなりたくない。」と楠本はきつぱり云つた。こんな風に云はれると、鈴子は何ともいへない氣がして、じつと楠本の顏を見た。
「今井の奥さんから、もう聞いてくれたのね。」と楠本は優しく云ひ出した。「その事を僕は本當に望んでゐる。よく考へて、僕と云ふ人間が厭でなかつたら、僕の方に來て貰ひたい……僕は我儘で隨分剛情だ。けれどそれだけにあなたのやうな婦人に對して、誰よりもふさはしい人間だと僕は考へたのだ。優しい點になれば、僕は津川君には及ばないだらう。然し僕のは津川君のやうに言葉だけではないのだ……これが分るかね?」
「分りますわ。津川先生に對してわたしの物足りなかつたのは、そんな所爲だつたかも知れませんわ……でも、わたしはあなたと御一緒にはなれません……どうしても。」と鈴子は調子を强めて云つた。

四三

鈴子の言葉を聞いても、楠本は格別驚いたやうにもしないで、
「ぢや、僕といふ人間が厭だからだらうか?」と冷靜に云つた。鈴子は一寸眼をそらしながら、
「いいえ、決してそんな爲めぢやないんですのよ……ただ、お金の澤山ある家の人とは、一緒になりたくないんです

の……」
鈴子はかう云つて、何と楠本が答へるかと耳をすました。彼女は彼が何處まで自分にまゐつてゐるかが見たくもあつたのだ。
「あなたは僕を金持だと思つてゐるのだね。」と、云つて、楠本は眼を少しキラキラさせながら話し續けた。「若しさう思つてゐるのならそれはあなたの誤解だ。僕は決して金持ではない。尤も、僕の父は多少の金を持つてゐる。然し、それは父が獨立獨歩、長い間かかつて働いた結果贏ち得たものなのだ。さういふ父の財産に對して、僕はいつも自分の立場といふ事を考へさせられてゐる。一體、僕は今何を持つてゐるかね？ ただ親がかりの身に過ぎないぢやないか。金もなければ家もない。僕はこれから父のやつたやうに、獨立獨行で自分の生活を築き上げたいと思つてゐるんだ。僕は金よりも人間の魂を尊重してゐる。だからあなたのやうに、僕を金持々々と云ふのを聞くと、僕は厭な氣持になるんだ……」と楠本はムキになつて云つた。
「御免なさい。」と鈴子はすつかりすまない氣持になつて云つた。「でも、世間ではそんなには云はない事ね。あなたのやうに…… それぢやあなたは御結婚なさると、二人ぎりで生活をはじめるのね？」
「無論さうしますよ。そして、細君を好きなやうにさせますよ。僕が若し親をたよつて遣つて行くつもりだつたら、結婚だつて、親のきめる通りの形式的なものにしなけりやならん筈だからね。だが、僕はさう云ふ考へでないのだ……」
「そんな考へならいいのね。」と鈴子は云つて、じつと楠本の顔を見て默つて考へ込んだ。楠本は少し聲を低くして、
「僕は別に家を繼ぐ譯でもないし身一つで結婚を求めるのだから……ねえ、それならいいと思ふが……」
「でも……わたし、この事は今直ぐとは定められませんわ。なぜつて云ふとね。あの津川先生があるから……先生は長い間、いつもわたしに一緒になつてくれるやうにとお頼みになつてゐらつしやるでせう……ですから、兎に角先生

にこのお話をしてでなくては惡いと思ふのよ。ですから、今直ぐ御返辭するといふ事は出來ないのよ。」
「それは多分さうしなくてはならないと僕も思つてゐた……では、どうしよう……」
「わたしまた御返辭に來るわ。」
「いや、今度は僕が行きませう。明日の午後……」
「明日ですの、急だわね。」と鈴子は當惑したやうに楠本を見て暫く考へてゐたが、「ええ、よろございますわ。今夜、津川先生のお家をたづねて、よくお話をしてみるから……」
「その相談の結果、あなたが津川君と一緒になるのだつたら、僕は綺麗に引きさがる……その點では僕は津川君以上にあなたの意思を尊重したいのだから……あなたの決心通りにね……それから云つて置きますが、僕はあなたを屹度幸福な女にしてみせる……僕は可愛い美しい妻として一生あなたを僕の翼の下にはぐくんで行きたい。僕に何もかもまかして、僕に賴り切つて、そして充分に快活に幸福に一生の送られる女にしてあげたいのだ……僕は噓は云ひたくない。又この上喋りたくもない……だからよくこの事を考へてくれるやうにね。」と云つて、楠本は默つた。
「ええ、よく考へて見ますわ。」と鈴子は云つた。彼女はすつかり疲れきつて、熱い眼附で瞬きをした。

四四

楠本の家を辭した鈴子は、歸りみちで、津川の家に寄らうと思つてゐたが、何だか非常に疲れ切つてもゐたし、問題が問題だけに、その事を今直ぐ津川に話す事は、さすがに率直な彼女にも躊躇された。兎に角、今夜一晩、家でゆつくり考へて見てからにしようと思つて、彼女は眞直に自分の宿の方へと歸つて行つた。
夜、彼女は、宿の細君が、男の兒の學校の復習をする傍で、煙草をすひすひ、じつと坐つてゐるところへ話しに行

つた。
「さあ、一つ」と細君は、鈴子に熱いお茶を出してから、いろいろの世間話をした。
「ねえ、小母さん。今、わたしは緣談の事で一寸思案に暮れてゐるんですよ。二つもあつて……」
「それはまあ、御結構ですね。」と細君は好奇心をそそられたやうでにこにこして云つた。
「あたたはお美しいし、それにお優しいから、お望みになる方の多いのも無理はありませんわ。」
「そんな事もありませんわ。ただ、こんなまはり合せでせうと思ふの……その一つは、ソラいつか來た色の黑い、長髮にした方…。津川さんですの。わたしを是非と仰しやるんですのよ。けれど、お姉さんがわたしは厭なの、それにまあり、弟思ひのお姉さんですから、さきざき困ることもあらうかと思ふのよ。」
「そんな事もありますまいがネ。」と細君は鈴子の湯呑に湯を入れながら「もう一つは？」と訊いた。
「それは今井の奧さんの方のお話なのよ。その方は、當人はそれはしつかりしてゐますの。家にはお金もありますし、わたしには餘りよすぎるので、かへつて、わたしがみじめだと思つて……」
「そんな事もありますまいがネ。」と細君は先刻と同じやうに云つてから「お姑さんは？」と、訊いた。
「おありなの……でも、當人は結婚すると家を別に持つと云つてますのよ。」
「それならようございますが……さあ、これはどちらが、どちらとも定めにくい事でございませうね。まあ、わたしから云はせれば今井の奧さんを御存知申してゐるせゐか、そちらの方にひいきしたいやうな氣もしますが……」と笑つた。
「ことによつたら、こちらがいいかも知れないと、わたしも思ふ事があつてよ。」
「玉の輿といふ事があるぢやありませんか。」と細君は少しはしやいだ調子で云つた。「ですが、緣談といふものは、

話のきまります迄がなかなか氣苦勞でしてね……いいと思ふのが惡かつたり惡いと思ふのがよかつたりして何が何だか分りませんよ。それに女は一度はじめの結婚がうまく行かないと、一生の事にかかりますからね。お家の方とよく御相談になつて、充分に向う樣の事を聞合せして、念には念を入れる方がようござんすよ。」

「それは、さうだわね。」と鈴子が云つた。「面倒なものね。」

「さうでございますとも……いづれにしたところで、結婚なされば、夫に仕へる姑に仕へるこの苦勞だけは避けられませんよ。でもまあ女は、相當の歳にもなれば、その苦勞はする方がいいんでございますよ。ところで私から考へれば、後家さんの小姑よりも、御亭主のあるお姑さんの方がやりいいかも知れませんよ。もつとも御當人次第でせうけれどね……」

「小母さん、うまい事云ふのね。」と鈴子は感心して云つた。「まつたくだわ。あの楠本さんのお母さんは、ことによつたら、そんなにむづかしくない人かも知れないわ。」と彼女は呟いた。

四五

翌日十時すぎた頃に、鈴子は津川の家に出かけて行つた。その途で彼女は津川の家へ裁縫に通つてゐる一人の娘に出會つた。顏見知りなので、互ひに挨拶をして、一緒に話しながら歩いた。

「あなた津川先生と御結婚なさるんですつてね……みんなさう云つてゐますわ。」とその娘は云つた。

「そんな事はないのよ……みな勝手な噂してることね。」と鈴子は妙にてれて云つた。

「さうかしら……わたし達はあなたが毎日のやうに先生をお訪ねになつてるから、もう御婚約なんかとつくに定つてゐるんだと思つててよ……津川先生はおとなしくてゐらつしやるから、あなたは、お仕合せよ。」

「そんな事云ひつこなしよ。どうだか分らないんですから。」

から云つて、二人は津川の家に來て、玄關を入ると、娘はいそ子の裁縫室の方へ行き、鈴子は女中に案内されて津川の部屋に通つた。

彼女は津川の顏を見ると、直ぐに切り出した。

「ねえ、先生、わたしはお斷りしたんですけれどね……」と云つた風に、楠本直哉からの結婚の申込みを話した。

「多分、さういふ事になるだらうと思つてゐたんだ。」と津川は云つたが、その顏色の變つてゐるのは隱し難かつた。

「けれど、あなたがお斷りしたんなら、それでいいんでせう……」

「でも、その場では、そんなにきつぱり斷れなくてよ。わたしは弱いんですもの……それにいくら斷つても、聽き入れて下さらないんですの。」

「だつて、それは亂暴だね。そんな事は無理强ひすべきものぢやない。あなたの心の動くのを待つてるべきだからね。」

「ほんとに待つてなんか下さる方ぢやないのよ。あの方わたしを頭から征服しようとしてるんですもの。」

「征服？」と津川は云つて、鈴子の顏をじつと見守りながら云つた。「そんな態度に出る人は恐ろしいですよ。そんな人と一緒になると屹度あなたは不幸になりますよ。ほんとによく考へなくちやいけないね。」

「でもね、先生、あの方はさう仰しやるの。あなたのやうな女の人は、ぐんぐんと支配して行つた方がいい。さうでなくつて、わたしのやうな女に愛を乞ふなんて事は男らしくないんですつて……」

「そんな考へ方は野蠻だ！」と津川は赤くなつて云つた。「愛といふものは、お互ひに尊重し合ひ、愛を求めるところから成り立つのだ。一方が他方を支配して、自分の意の儘にすると云ふやうな事は、封建時代の遣り方だ、そんな亂暴な話はない！」

から云つて津川は息を切つて、髪を撫でた。

「僕はほんとに苦しい……早くあなたと一緒になりたいんだがね……この上僕はあなたに待つて貰ふのもすまないし、僕とても待つのが堪らない。兎に角、僕一寸姉のところへ行つて相談して來ませう。」

「でも先生、一寸待つて頂戴。」と鈴子は思ひがけない結果になりさうなので、あわてて止めた。

「わたし、いつかお姉さんが仰しやつたやうにするのは、厭なのですもの。」

「それぢやどうすればいいか云つて下さい。」と津川はハラハラしたやうな調子で訊いた。

「御心配なさらなくつたつていいんですよ。わたし先生に無理にとは云ひませんもの……でも先生がさうして下さるならいいと思ひますわ。」

「どんなにでもしませう。あなたの好きなやうに……」

「それぢや先生、姉さんを捨てて今直ぐここを出て下さい。わたしと一緒になるためにと云つて。」

鈴子は津川の顏をじつと見詰めた。

四六

「今直ぐ？……」と津川は驚いて訊いた。

「ええ、早い方がいいわ。お姉さんなんかどうだつていいぢやありませんか……先生がさうして下されば、わたし楠本さんにお斷りがしいいんですもの。あの方はさうなれば綺麗に身を退くと云つてらつしやるわ。」

「そんなに云はれると、僕は毟れさうな氣がする。そりやあなたに云はれる迄もなく、今が今にでもさうしたいんだけれど、僕にはそんな無茶な事が出來ないんだ。そしてまた、そんな無茶な事をしなくてもすむと思ふんだ。兎に角、

姉によく相談して、姉にも譲歩して貰ひますよ。あなたにこんな事は云ひたくないんだけれど、僕としては、姉が別居してもやつて行けるだけの事をしておいてからでなければ、我身の事は義理にも出來ないのだ。それで今その用意をするために、うんと稼がなくてはならない……何しろ僕は不運だからナ。」

「不運ッて事はないわ。先生があんまりお優しすぎるんだわ……」と鈴子は皮肉な調子をこめて云つた。

「僕はあなたと僕との愛は、そんなにも淺いものだとは思はないのだがね……」と津川は暫く沈思した後で云つた。

「僕の外にあなたの心持をよく知つてゐて、それをなだめてあげる人間は外にはないと思ふんだがね……僕には金もないし、地位もない。だが、僕の持つてゐるこの理解こそは、あなたを充分に幸福にしてあげられるものだと僕は思ふ。僕はこれ迄あなたをどんなにいたはつて來たか、どんなにいつくしんで來たか、よくそれを考へて下さい……あなたが何の理解もない亂暴な人の細君になつて、一人で泣くといふ事を考へると、僕の胸は裂けてしまひさうだ。ほんとに女にとつて感情を虐げられる程不幸な事は他にあるかどうか、よく考へて御覽なさい。殊にあなたはその通り感情ばかりで生きてゐる女ぢやないか。とても、楠本と云ふそんな男の人にあつちやかなはないよ。それにその人とあなたとの歳まはりはどうなつてゐるの？」

「あの方は、たしか二十七ですわ。ですからわたしと四つ違ひなの。」と鈴子はすつかり津川の調子に引き入れられて云つた。

そこへ女中が入つて來て、

「これを俥屋が持つてまゐりました。」と云つて、一通の手紙を差だした。鈴子はそれを受取つて開いて見ると、今井の細君から、楠本さんが今見えてゐるから、至急この俥に乘つて歸つて來て下さいと書いてあつた。

「まあ、もう楠本さんが來たんだわ。今夜來る事かと思つたら……」鈴子は云つて、その手紙を津川に渡した。

「何だか狂人じみた男らしいね。」と津川は少し顔を歪めて云つた。
「行かなくつたつていいんでせう　手紙で斷りを云つておやりなさい。」
「ええ、でもわたし、やはりお目に懸つてきつぱりとお斷りしますわ……でないと、いかにも薄情なやうで厭ですから。」
「構はないよ。」と、津川は面に憤激の色を漂はせて云つた。「僕はその楠本といふ男が恐ろしい氣がする。今あなたを歸すと、どんな事をするか分らないやうな氣がする……それに僕はこの月の鈴子さんと僕との運勢を見たが、二人とも今月は身を愼しまなければならないとあつたから、お互ひにやりすぎをしてはいけない。出來るだけ消極的にじつとしてゐやうね……」
「それもさうでせうけれど。」と鈴子は云つたが、何だか不甲斐ないやうな氣がムラムラと起つて、
「だつて、逢つてキッパリ斷つた方がいいぢやありませんか。」と云つた。
「さう、それならいいが、ほんとにキッパリ斷らなけりやいけませんよ。」と、津川はたうとう讓歩した。「ぢや行つて來なさい。然し直ぐ歸つて來て下さい。僕はその間苦しくて仕樣がないんだから……」

四七

鈴子が津川の家を出て、そこに待つてゐた俥に乘ると、俥は一直線に走つて、やがて今井の家の玄關先にとまつた。その音を聞きつけたと見えて、今井の細君が飛んで出て、
「ああ、鈴子さん、お歸りなさい。」と云つて迎へた。その玄關には、見憶えのある楠本の靴がチヤント並んでゐた。
案内された部屋に行くと、今井の主人と楠本とが、もう打解けて話をしてゐた。鈴子は今井の主人に挨拶をしてか

ら、楠本に一寸目禮した。楠本も極く輕く首を下げた。
「もういらつしやりさうなものね。」と今井の細君が云つたので、鈴子は此上誰か來るのかと思つて訊いてみると、尾村悦吉を今電報を打つて呼んでゐるのだと云つた。
「まあ、尾村さんを呼ぶのですか、なぜ？」と鈴子は眼を圓くして訊いた。
「宅がお呼びするがいいと云ひましてね。此事ははじめから尾村さんの御熱心の結果ですもの……」と細君はニッコリして云つた。
「では、失禮してあなたの部屋に行かう。」と楠本は云つた。
「さうねえ。」と鈴子は云つて、今井の細君の顏を見た。細君もうなづいた。
二人が鈴子の家に歸ると、宿の細君が、玄關の開いた音に出て來て、二人の揃つた姿を見て、少し眼を見張つたが、成程と思つたらしく、ニッコリして、
「さあどうぞ。」と迎へて云つた。
二人は二階に上つた。そして、大きな鏡臺と、トランクと、本箱と机の外には何もないその部屋にすわつた時、楠本は云つた。
「今井の奥さんが云つたが……ここにも長くゐられぬやうだつたら、僕の親父の友人の別莊が房州にあるから、そこに暫く行つてると身體がぐつとよくなるがね……」
鈴子は鏡臺のそばに坐つて、その臺の上に肘を少しかけて、楠本をじつと見上げて云つた。
「房州の何處ですの。」
「千倉といふところで、溫泉もあるし――溫泉と云つても鑛泉だが――海岸だから空氣がいいし、靜かな海のほとり

に行つてると云ふだけでもいいね。」
「ええ、別に溫泉でなくつても、田舍でありさへすれば、身體はよくなるのよ。これからは、だんだん寒くなるのに、また宿なしになるかも知れないと考へると、わたし辛いわ。ゐられるだけ此處にゐたいんだけど……でも、千倉もいい所らしいのね。」
「いい所といふ譯ではないが、氣樂にゐられるのが、何より身體にはいいと思ふね……何しろ、僕としては、出來る事なら、あなたがここを去る方がいいやうな氣がする。」
「なぜ？」
「云ふ迄もない事だと思ふ……僕にとつて、もつと都合のいい所がいい。」
「でも、わたしは出來るだけ、あなたから遠い遠い所がいいわ。あなたの都合なんか……厭だわ。」と鈴子はいたづらさうな眼附をして云つた。「でないと、わたし支配されて困るわ。」
「ちつとも困る人ではないよ。」と楠本は云つた。「支配されたがつてゐる……」
「あら、あんな事を云つて……」
妙に二人の會話は、本題に入つて行かないで、その近くをまはり歩いてゐた。その時、階下の方で玄關の開いた音がした。鈴子はギックリして、覺えず耳をそばだてた。暫くたつて細君が上つて來た。
「鈴子さん、津川さんと云ふ方がお出でになりましてね……一寸あなたにお話があると云つてらつしやいますが。」
「津川先生だわ？」
かう鈴子は叫ぶやうに云つて、楠本の顏をキッと見た。その顏を楠本はじつと見返しながら、
「ここに上つて貰つたらいいだらう。」と云つた。

四八

鈴子が下へおりて來ると、玄關に立つてゐるのは婦人であつた。それが津川の姉のいそ子であるのを見ると、鈴子はサッと蒼くなつた。彼女は挨拶も忘れて、默つていそ子を凝視した。

「どうぞ此方の部屋へお上りなさいまし。」と下の細君が、見兼ねたやうに、玄關寄りの四疊半の方を開けて云つた。

「いいえ、さうはしてをられませんのです。」といそ子はキッパリと云つた。

「あの……何でございますか……」と鈴子はやつと口籠りながら訊いた。

「鈴子さん……」といそ子は、馬鹿にゆつくりと云つて、じつと鈴子をし据ゑるやうにして、

「弟が直ぐ來てくれと申しますがね……」

「ええ、まゐりますわ。けど、今まだお客様がゐらつしやいますから、後程うかがひますわ。」

「そんなに大切になさらなくちやならないお客様なんですかね。」といそ子は抉るやうに云つた。

「あなたは、私の弟をどうなさるおつもりですの？」

「どうするつもりつて……どうもしませんわ。」と鈴子は云ひ返した。

「そんなに、蛇の生殺し見たやうな風に苦しめないで下さい。それで私がさう云ふんですよ。おまへがそんなに思つたつて、向う樣ぢや御迷惑なんだからとね……」とねちねちした調子でいそ子は云つた。

「兎に角、今行かれませんわ。さう先生に仰しやつて下さい。」と鈴子もムッとした氣持になつて云つた。

「さう申しませう。兎に角、鈴子さんは金に眼がくれて、寢返りを打つやうな方ではないつて事を弟に云つて、安心させてよろしいですか？」

いそ子は丁寧に挨拶をして出て行つた。鈴子がその後姿を、くやしさうに見送つてゐると、宿の細君が出て來て、

「ほんとに、あれぢやおむづかしい小姑さんですよ。」と同情するやうに云つた。鈴子はただきみしく笑つて、二階に上つた。

「どうしました。津川君は歸りましたか？」と楠本は鈴子の顔を見るなり訊いた。

「いいえ、津川先生ではないの、お姉さんなのよ。」

「なに、津川君でないつて……」と楠本は意外さうな顔をして「それで何と云ふんです？」

「あたしに直ぐ來いつて云ふの。」と鈴子は楠本の顔をじつと見て云つた。「そして、わたしの事を金に眼がくれて寢返りを打つやうな事はないでせうねだつて……」

「そんな事を云つたのかね。」と楠本は眉をぴくりとさせて云つた。「隨分侮辱するぢやないか。」

「そして、蛇の生殺し見たやうに弟を苦しめないで下さいだつて……」

「ひどい事を云ふね、蛇の生殺しは自分の方の事ぢやないか。自分の方でいい加減に引きずつて苦しめてゐたんぢやないか。」と楠本は憤激して云つた。「だから、ここへ上らせて、僕に應待させればよかつたんだ……それに第一、どうしたんだ。をかしいぢやないか、津川君が來ないで、姉がくるなんて……」

「そりや姉さんがくるわ。だからあそこぢや姉さんの權力が強いとわたしが云ふんだわ。」と鈴子は呟くやうに云つた。

「成程……さうか、僕は津川君が來たんだらうと思つて、用意してゐたんだ……」

「用意して……あの、あなたは津川さんと喧嘩するつもりだつたんですか？」と鈴子は云つた。

彼女の唇は色を失つてゐた。

四九

「さうサ、充分喧嘩していいと思ふね。」と楠本は云つた。「僕は津川君に會つて云ひたい事がいくらでもあつたんだ。ピッタリ顏と顏とを見合つて互ひに云ふだけの事を云つて、それで先方が僕より餘計にあなたを愛してゐる事が分つたら、僕は潔く身を退いて歸るつもりだつた……ところが當人が來ないで姉が來た……姉が來て厭味を云つて歸つた。妙な話ぢやないか。僕の見るところでは、津川君は僕に合ひたくないからと云ふよりも、そんなにしてまであなたを得やうといふ、考がないんだ。どんなにしてでも、あなたを得たいのなら、自分でやつて來るよ。」と云つて楠本は一寸默つて、鈴子の樣子を見ながら、

「つまり、あなたよりも我身が先きなんだ。そんな人に愛されて何の誇りかね？」

「…………………」

鈴子はうつむいて、ポロッと涙をこぼした。

「つまり、津川といふやうな人はあなたとは、何處まで行つても並行線で終る人達なんだよ。戀愛といふものはそんなもんぢやない。」

「つまらないのね……」と鈴子はつぶやいた。

「そんなつまらない所に引ッかかる事はちつともない。もつと明るい自由な所へ飛び出す事だよ。」

楠本は鈴子が色を失つた唇を食ひしめて、さみしい顏をしてゐるのを見て、手をさし伸ばして云つた。

「ここへおいで。」

「…………………」

彼は彼女のうしろに廻つて、その肩に手をかけて云つた。
「あなたはほんとに津川を愛してゐたのではなくて、同情してゐたんだよ。ところが、そんな同情なんてもの程、つまらないものはないんだ……」
「でも…… わたしはつらいのよ。」
かう云つて、鈴子は楠本から離れて、襖のところに立つて、そこから、じつと彼の方を見つめながら呟いた。
「わたしはまだ自分の心が分らないから……」
「分らぬ方が本當だ……ただ僕だけが分ればいいぢやないか……女は、それでいいのだ。女は男に何もかもまかせてしまふ……そして小鳥のやうに、甘く樂しく一生をすごせばいいのだ……」
「そんなに何もかもまかせられるといいけれど……あア、わたしつらいわ。わたし、どうしていいか判らないのですもの……今日はね……ですからね。これでどうか歸つて下さいね。ね、どうか……」
「それぢやあなたはやつぱりまた津川君の方に引かれてゐるんだね。」と云つて、楠本は立つて鈴子のそばへやつて來て、彼女の顏をじつと見ながら、「あなたが僕を捨てて津川君を取るつもりなら、それでいいから、僕は歸ることにしよう……」と云つた。
楠本にかう云はれて見ると、鈴子はこの儘楠本を歸すことが出來ない氣がした。彼女は先程まであんなに手をとつて、親しく語つてあんなに自分を愛してくれてゐた津川が、かういふ場合、自身が來ないで、姉をよこしたりしたのは、たとへいそ子が自分から進んで來たのにしても、餘りに賴みにならない事が見え透いたやうで、心が底の底から白けたのである。そして、それだけに、今はもう楠本の外に、この人こそと思ふ人のない事を痛切に感じたのである。
「わたしも行きますわ。今井さんの家へ……もう尾村さんも來てゐるでせうから……」と彼女は弱い聲で云つた。

二人が階下へ下りようとした時に、宿の細君が上つて來て、一通の厚い封書を鈴子の手に渡した。津川さんから使の者が持つて來たのだと云つた。

「何を云つてらしつたのかしら？」と鈴子は楠本の顏を見上げて云つた。

五〇

「ほんとに津川先生は氣の毒な方だわ。」とその長い手紙を讀み終つて鈴子はさう云つた。「何處までも何處までも、わたしに愛してくれと仰しやるんですもの……でも、それは無理だわ……」

「そんなに長い手紙が、全部さういふ事で埋まつてゐるのかね？」と楠本が云つた。

「ええ……いろいろと書いてあるわ。上手なんですもの、あの方のお手紙は……まるで小説のやうですもの、讀んでると引き入れられてしまひますわ。」と鈴子は云つて一寸眉をしかめて、「でもおしまひの方には、わたしとあなたとの相性の事が云つてありますの。二人が一緒になると、屹度不幸になるんですつて……」と云ひながら、鈴子はその終りの方だけを楠本に出して見せた。

「つまらない事を云ふ男だなあ。」と云ひながら、楠本はそれを一寸見て、「僕等には相性なんかどうでもいいんだ。相性がわるけりや、一層努力して、仲善くするだけの覺悟があればいいぢやないか……今どき妙なものを擔ぎ出して來たものだ。そんなに僕とあなたとの相性がわるくて、自分の方がいいのなら、そんなに愚圖々々してゐないで、やつて來て、あなたを連れて行けばいいぢやないか。」と憤るやうに云つた。

「わたしも相性の事なんか問題にしないわ。」と鈴子は津川の手紙を疊の上に置いて云つた。「隨分舊弊ね。わたし津川先生はまさかこんな事を仰しやらうとは思はなかつたの……」

「つまり、何とか云つて、ケチをつけたいのだよ……そんならそれで自分が當面に立つて、責任を引受ければいいんだ。それもせず、僕の方にもよこしたくない。そんな無責任な話はない。それがあなたに對して愛情のある遣方かね。僕は惡意としきや思へない。」

「そんな事もないけれど……津川先生は弱いんだわ。」と鈴子は辯護した。

「では、どうします？　津川君のところへ行くなら、もう行つていいでせう。でなければ、僕の云ふ通り、直ぐ明日にでも、ここを去るんだね……どつちでもあなたの好きなやうにするがいいのだよ。」

こんな風に楠本に云はれて、鈴子はじつとうつむいて考へ込んだ。

「これから、どんな苦しみでも、みな僕が引受けてあげる……」と楠本は、鈴子の耳のところで云ひきかせた。「あなたは、僕にまかせきればいいのだよ。僕にたより切ればいいのだよ。僕のこの手の中で、我儘氣儘をするがいい。僕の生活の中で好きなやうな事をして、自由に樂しく生きるんだ……」

「でも、それほど氣儘もしたくないの。」と鈴子はやつと云つた。「わたしだつて、ひと通りの考へはありますもの……」

「それならなほいい……兎に角、僕はどんな事でも、それが過去の事件ならば何とも云はない。だがね、かうして僕のところに來てくれたなら、これからは、愛情の方の氣儘だけはゆるさないよ。いいかね。それが一番わるいのだからね……」

楠本はいつのまにか、鈴子をその腕の中にかかへて、小さな聲で云つた。

「ええ。」と鈴子はうなづいた。「それではね……わたしからは、あの事をして頂きたいのよ。あなたと二人きりの家を持つやうにね。ねえ、屹度よ。二人きりの家をね……」

「ああ、さうするよ。」と楠本は云つた。「ぢや、これから二人で、今井さんの家へ行つて、二人の話の纒つた事をお

話しよう。もう尾村君も來てるに違ひないから……あの三人は僕達の恩人なのだ。行つて禮を云はう……」
「ええ、さうしませう。」と鈴子も云つた。
「一寸待つて……」
から云つて、楠本はもう一度彼女をしつかりといだきしめた。

五一

今井の家では、楠本と鈴子とが出て行つた後、半時間程つてから、電報で呼んでおいた尾村悦吉が遣つて來た。彼は玄關に竹のステッキを立てかけて、出迎へに出た細君に云つた。
「何事が起つたんです。……一寸驚きましたよ。」
「今日、楠本さんのあの問題の解決がつきさうなんです。ですから、最初からこの事のかかはりのあるあなたにも、出て頂き度いと云ふ事になりましたの。さあお上りなさい。」
「そんな事だつたんですか……それならまあいい。」と云つて、彼は笑つた。
尾村は書齋に通つて、今井と相對して、いつものやうに煙草をすひながら、楠本と鈴子との事を話し出した。
「それぢや、今鈴子さんの部屋でその話をしてゐるんですね……」と、尾村は一寸昂奮した口調で云つた。「我々には、もうこんな事は經驗出來なくなつたと思ふと、一寸寂しいですね。」
「さあ……」と今井は苦笑した。
「そんなに何度も、さういふ經驗はしない方がいいわ。」と細君が笑つて云つた。
「ところで鈴子さんは、承知なさるんでせうか？」

「大丈夫でせう。」と尾村が云つた。

「然し、津川氏の方でどう出るかナ？」

「津川さんが出かけて來れば、かなり面倒なんぢやないんですか。」

「津川氏は此事をどの程度まで知つてゐるんです？」と尾村が訊いた。

「今朝も津川さんの家へ行つてゐたのを、こちらから俥で呼びに行つた位ですから、充分に知つてゐますわ。わたしは多分、津川さんが鈴子さんをこちらによこしてくれないだらうと思つたんですよ。ところが案に相違して、鈴子さんが直ぐにやつて來たんですよ。」と細君は說明した。

「そんな風なら、多分、楠本のものでせう。まあ僕が考へても、鈴子さんは楠本君と一緒になつた方がいいんだ。あれで楠本君はなかなかしつかりしてゐるし、我々と違つて、細君なるものは、可愛ければいい、別に何も出來なくていいッて流儀ですから、恰度向いてゐますよ。津川氏の方なら、さう出來ないだらうからナ……」

こんな風な話から、尾村はだんだんと楠本の事をいろいろと話し出した。一時間あまりも、こんな風に話してゐると、玄關のあく音がしたので、細君が急いで出て行くと、入つて來たのは、楠本一人であつた。

彼は書齋に通ると、今井の方に一寸頭をさげて云つた。

「や、どうもいろいろ有難うございました……あちらを殺す事にしました。」

今井はじつと楠本の顏を見た。尾村もピクツとして、楠本の顏を見た。楠本は尾村の方を向いて、

「君を呼んだりしてすまなかつた。たうとうきまつたんだ。それで僕は形式的な事は嫌ひだから、今日から、もう彼女をずつと引取つて今夜は大森で泊めようと思ふ。そして明日は僕が連れて、房州の方へ行かうと思ふ。いづれにしてもここを去る方がいいと僕は思ふ。」

「それは勿論さうすべきだらうね。」

「ところで、一寸お頼みしたいのですが。」と楠本は今井の方を見て云つた。「多分、もうこれで御迷惑のかけじまひだらうと思ひますが……ほんの形式的な申込だけは、親もとにしておく方が穏當だと思ふもんですから、一つこちらのお名で、手紙を一本出して頂き度いんですが、いかがでせう？」

「さうしませう。何でもない事です。」と今井が云つた。

五二

やがて、鈴子が來た。彼女は直ぐ書齋に通らないで、細君の茶の間の方にすわつた。

「鈴子さん、あなた御返辭なすつたんですつてね。」と細君は云つた。

「ええ……」

「ほんとに、あなたのお心からなの？」

「………………」

鈴子はうなづいた。その樣子の常になくしみじみしてゐるのが、細君にはいぢらしかつた。

「こちらへ來てはどう？」と楠本が書齋の方から、鈴子を呼んだ。彼女は云はれる儘に立上つて行つて、書齋の入口のところにすわつて、尾村に挨拶をした。

「いや……」と云つて、尾村は鈴子の顏をわざと見ぬやうにして、煙草をせかせかとすつた。

「それぢやもう支度は出來たの？」

「ええ。」と鈴子はうなづいた。

「それぢや、あんまり遲くなつてもわるいから行かう……ところでこれだけはしておかう。」
「なに？」と鈴子が訊いた。
「あなたから津川君に、手紙の返事を出してやつときなさい。」
「わたし書けないわ。どんなに書いていいか分らないんですもの……」と鈴子は聲を顫はせて云つた。
「それぢや僕が云つてあげよう……一寸失禮します。」と云つて、楠本は茶の間に行つて、そこにゐた細君に向つて、
「一寸すみませんが、ペンと紙とを貸して下さい。」と云つてペンと紙とを細君から受取ると、
「僕の云ふ通り書かなければいけないよ。」
「ええ。」
二人が緣先にあつた机にむかふと、細君が氣を利かせて出て行つた。
「どう書きますの？」と鈴子が訊いた。
「一寸、待つて……」と楠本は云つて、少し首を傾げて、考へた。
「よし、かう書かう……さ、ペンを持つて……」と楠本は指圖してから、聲を改めて云つた。
「さやうなら。」
「さやうなら。」と鈴子は書いた。
「わたしは。」と楠本が云つた。
「わたしは。」と鈴子が書いた。
「薄情者です。」と楠本が云つた。
「つらいわ。わたし、自分を薄情者だなんて書くのは……」と鈴子は云つて、突然、破れるやうに泣き出した。

「そんなに氣が弱くつてどうなるか。泣かないで、お書き！　かう云はないでは、いけないのだ。」
「でも、つらいわ……」
「つらくつても、薄情者でいいのだ。チヤンと書くがいい。」
「でもね……ひどいわ。いくら何でもこんなに書くのは……」
「ひどいのがいいのだ。あなたの爲めよりも津川君のためにいいのだ。」
「どうしても書くの？」
「あア、書くのだ。」
鈴子はたうとう書いた。そしてその後に日附と自分の名と津川の宛名とを書いてから、烈しく泣き出した。
「よし。」と云つて、楠本はその紙を疊んで、封筒に入れて、も一度鈴子にうは書きをさせてから、その手紙を自分のポケットに入れた。そして、時計を出して見て、
「恰度いい。」と云つて、書齋の方へ行つて、
「いや、どうもいろいろお世話になりました。」と今井に云つてから尾村に向つて、
「君、一寸そこまで附合つてくれないか。」と言つた。
「あア行かう。」と尾村は云つた。

五三

鈴子が玄關に出て行くと、今井の細君は、まだその眼に涙の光つてゐる、彼女の顔を見て云つた。
「鈴子さん、それぢや大森にいらつしやるの？」

「ええ、さう云ひますから……」
「では、またいらつしやるがいいわ。」
かう云つて、今井の細君は、そんなに楠本の云ふ通りになつてゐる彼女が不思議に思はれた。
鈴子は一寸身づくろひをして、踏石に下りて、どういふものかぬぎ捨てた儘になつてゐた楠本の靴をチヤンと直した。
そこに、楠本と尾村とが、今井に送られて出て來た。
「どうぞ大森の方に是非來て下さい。」と楠本は今井夫妻に云つた。
楠本と尾村とが先きに立つて歩いて行く後から、鈴子がついて行く。煙草屋のある曲り角まで行くと、尾村が、
「あ、ステツキを忘れた。」と云つて急いでそれを取りに引返した。
「お母さんには、僕が萬事いいやうにするから、心配しない方がいい。あなたに間のわるいやうな事は決してさせないから……その代り、何でも僕の云ふ通り忠實にやつてほしいナ。」と楠本は鈴子の方に少し身を寄せて云つた。
「ええ、さうしますわ。」と彼女は低い聲で云つた。
そこへ尾村が竹のステツキを持つて歸つて來た。
三人が通りへ出ると、楠本は立止つて、
「ここらに、ポストがあつた筈だが……」と云つた。
「ええ、あの曲り角のところにありますわ。」と鈴子が云ふと、楠本はポケツトから先刻鈴子に書かせた津川への手紙を出して、彼女に渡した。
「わたし、自分の手でポストに入れるのはつらいわ。」と彼女は苦しさうに云つた。

「では僕が入れる……」
から云つて、楠本はその曲り角まで歩いて、その手紙をそこにあつたポストの中に落した。
「これでいい、これですつかり片が附いた……」と楠本はこちらに來て云つた。
「この手紙が行つたら、津川先生はどんなにお泣きになるか知れないわ……。」と鈴子は訴へるやうに云つた。
やがて、賑やかな十番の通りに出た。楠本が先きに立つて、かなり大きなレストランに入つた。そして、食事をあつらへて、それを待つ間、三人の間でいろいろの事が話された。楠本は尾村の杯に麥酒をつぎながら、今後の方針を話し出した。形式はいかに重んじないと云つたところで、人から非難を受けるやうな輕卒な態度には出たくないから、明日鈴子を連れて房州の方へ行つたら、そこで當分靜養させて、そのうち旅先の父が歸ると、內祝言だけをすまして、房州の方で家を借りて、そこで世帶を持たうと思ふ事、披露といふやうなものは、いづれはしなければならないが、それはまあ急いだ事はないと思ふなどと打明けて話をして、
「何しろ君のうちのマダムと違つて、こんな人なんだから……」と云つて、楠本は愛撫の眼を鈴子に投げながら、幸福さうに笑つた。
「みんな君のお蔭だつた……」
「いや、そんな事はない。兎に角君の運がよかつたんだよ。」と尾村は云つた。そして麥酒をぐつと飲んだ。彼はこんな場合にこそ、友達の夫婦の前途を祝して、氣の利いた事を云つて祝杯を擧げてやるべきだと思つたが、何だかがつかりと力拔けがしたやうな氣がして、二人の方を見ないやうにして、麥酒ばかりを立て續けにぐいぐいと飲んだ。

空色の國

こころよく晴れた明るい春の空にまぎれ込んで、その姿の見えない小鳥の聲が、遠くのどかに聞えてくる。丁度春のやさしい音樂のやうに。

一

路の兩側には、麥がめつきり丈高く伸びて、靑々と色艶の濃いその柔かな葉を、そよそよと吹いてくる軟風にまかせてゐる。路は次第にだらだらと下り坂になつて、古い藁屋の庭さきを一まがりすると、もう水のたたへられた稻田の中へ入つて行く。稻田と稻田との間には、小さな用水の流れがあつて、その兩側の土手には、時を得がほに、雜草の繁みがむらむらとつらなつてゐて、遲く咲いた蒲公英の黃がちらほらと見える。

なんといふ美しいのどかな田舍の景色であらう！　眼に入るもの、耳に入るもの、一つとして爽やかでないものはない。

何もかもが健康さうで、しかも素直で、輝かしいのだ。柔かでたのしいのだ。その心にどんな惱みのある人でも、かうした豐かなのんびりとした田舍の路を步いて行くと、その惱みを忘れて自然となごやかになり、生きてゐる事に感謝したくならずにはゐられないであらう。そして、その土手のところで遊んでゐる子供の顏が、あまりいい色艶に輝いて、生き生きしてゐるのに、思はずうつとりと見惚れてしまはずにはゐられないであらう。

通りがかりの人が、じつとこちらを見てゐるのを感ずると、房子は蒲公英をさがしてゐたのをやめて、その人の顏をニツコリと笑つて見た。

「お孃さん、渡し場はどつちの方ですか？」とその人が訊いた。洋服を着て、肩から水筒をかけた、人の善ささうな小父さんのやうに思はれた。房子は少しその小父さんの方に近づいて行つて、沼の渡し場の方を敎へてあげた。

「あ、どうもありがたう。」

かう云つて、その洋服の人は、氣持よささうにぶらぶらとそちらの方に歩いて行く。

「わたしもうお家へ歸るわ。」

房子はかう呟いた。そして、土手から路の方へと出て、坂を上つて行きながら、今路で、渡し場を敎へてあげた人はと見かへると、伊兵衞の渡場の小屋の前で、その人の彳んでゐる姿が小さく見える。あの人は何處から來たんだらう。たぶん東京から來たんだわ。かう房子は考へた。すると、東京の事がなつかしくてならないやうになつた。一月の間に一度、房子はばあやに連れられて、東京のお家へ行くのだつた。東京のお家では、でつぷりと肥つたお父樣だの、お美しくて何だか恐ろしいやうなお母樣だの、ハイカラな姉さんだの、親切な兄さんだのがゐらつしやる。それからまた、泣いてばかりゐる赤ちやんだの、意地わるの弟だのもゐる。自分ばかりみんなに離れて、かうして「沼のお家」で暮してゐなくてはならないのは、なんて寂しいことだらうと、いつになく彼女は、今日は考へ込んでしまつたのだつた。

沼の方を見渡すことの出來る麥畑のはしに、ぼんやりとたたずんで房子は手にもつてゐる蒲公英の花瓣を、いつのまにか一枚々々バラバラにむしつてゐるのだつた。

「そこに何してるの、房子さん。」

かう云つて、房子のところに、一人の男の兒が近よつて來た。

「まあ高史さんね。わたし、びつくりしたわ。」

「僕も……」と高史が云つた。「そんなところに房子さんが、まるで草花みたいに立つてゐるんだもの……」

「草花みたいに……そう……何の草花みたいに。」と、房子はずつと近づいて、高史の頸に手をまきつけて、その顏を

さしのぞいて笑つて訊いた。
「菫みたいに？　蒲公英みたいに？」
「いいや……」と高史は濡らかな眼でじつと房子を見て云つた。「僕には何だかツてことは云へないよ。」
「をかしな人ね。云つてもよくつてよ。」
「でもね……云へやしないのだよ。」
「そを……では、あなたはどこへ行くとこなの？」と房子は自分の指で、小さな高史の肩をいぢりながら訊いた。「おつかひ？」
「いや、僕は沼を見て寫生をしようと思ふの。」
から云つて、高史はその路上にしやがんで、新聞の包を開いて見せた。
その中には畫用紙が二三枚とクレヨンとがあつた。
「まあ、そう……ではわたし見てあげるわ。どんなにうまく描けるんでせうね。」
「うまくは描けないね。まだ下手だから。でもいいや、房子さんに見られてもいい。」
「わたしだつて、高史さんの繪ならほんとに見たいことよ。」
「では、どこへ行かうか。」
「沼の一番美しく見えるところがいいわ。」
「ああ、どこがよく見えるかしら？」
「天神山のあの松がよかなくつて？」
「ウン、あそこならいいね。」

「では、行きませう。」
「ええ、行きませう。」
二人は意見が一緒になつたので、何もかもそれまでの事は忘れたやうに、バラバラにした蒲公英の花瓣をそこの記念にのこしておいて、天神山の方へと立去つた。

二

今日の沼の何と柔かなことだらう。
一杯にたたへてゐる水が、まるで微温湯でもあるやうで、うつとりとうるんでゐて、その小波には、春の日が白く乳のやうに溶けこんでゐる。そして、對岸の丘陵が、森だの、松林だの、竹藪だの、農家の藁屋根だの、舟だの、小屋だのを從へて、とろりこに霞んでゐる。
高史はクレヨンの紫をとり出して、畫用紙に沼のスケッチをするのであつた。房子は傍で暫くの間は、じつと見てゐたが、たいくつしたので、そこを離れて、林の中をここかしこと、足音をたてないやうにして見歩いた。と、松の木の根には、紫の菫の花がたくさん咲いてゐた。
房子がさうして菫の花をつんでゐると、それまで沼の方ばかり見てクレヨンをつかつてゐた高史が、今度はクレヨンと畫用紙とを取りかへて、しきりにこちらの方を、眼をすがめのやうにして、見ては描き、見ては描きするので、
「あら、わたしのことを描いてゐるのかも知れないわ。」と呟いて、房子がバタバタとかけ出すと、
「シッ、いけない房子さんだ。じつとしてゐるのよ。モデルはじつとしてなくちや駄目だ。」と高史が大きな聲で云つた。房子はいやいやをしながらも、承知をしてモデルになつてゐた。やがてよしといふので、かけて行つて見ると、

靑いクレヨンで、花をつんでゐる少女の姿が、巧みにそこに描かれてゐた。
「まあお上手だこと！」
「ナニ、これは失敗作です。」
「さうでもない事よ。うまいわ。でもわたしにちつとも似てなくてよ。」
「似てなくつてもいいのよ。」
「さう……なぜ？」
「僕は、自分の氣分を出せばいいと思ふからね。」
「まあ、氣分なんて生意氣ね。」
「でも、先生はいつもさう云つてるよ。繪は氣分を重んじるのだつて……」
「では、その氣分ッてなに？」
「房ちやんには、まだ分らないよ。」
から云つて高史は、今度は沼の方をもう一度あらたに描きだしたのだつた。
この田舍で、この寂しい沼の家での房子の何よりのたのしみは、お隣の家の坊ちやんである高史と、こんなにして遊ぶことであつた。
高史はもう高等科の一年だつた。そして、成績がよくて、いつも級長なのだつた。房子はいつも高史に、むづかしい算術を教へてもらつたり、面白い話をきかして貰ふことが出來るので、まるで兄のやうになつかしがつてゐるのであつた。それで毎日のやうに行つたり來たりして、そんなにして遊ぶのであつたが、もつと房子にとつて嬉しい事は、東京から兄の正秋がやつて來て、彼もまたこの高史と仲よしなので、三人で打つれだつて話したり遊んだりする事で

あつた。
「あ、もう疲れちやつた。」と云つて、高史はこちらにやつて來た。そして、大人のするやうに腕組をして云つた。
「僕はね、房子さん。近いうちに東京へ行くことになつたのですよ。」
「まあ、いつ？」と房子は云つて、美しい眼をパッと見ひらいた。
「多分、今年の夏からずつと東京へ行くのです。東京では本郷の兄のところから學校へ行くの。そして、中學を東京でやる事になつたのです。僕はうれしいの。」
「いいのね。」と房子は寂しい顔付をして云つた。「でも、わたし、寂しくてつまらないわ。」
「房子さんも東京のお家に歸るといいね。」
「それはいいんですけれども、わたしには呼んでくれる人がないんですもの。それは東京へ行くと、賑かですし、正秋兄さんがゐますし、それはいいんですけれどもね。わたし、お母さんのおつぱいを飲まずに、こちらに預けられたのでせう。ですからみんながさう云ひますわ。房子は沼の家の娘だつて。東京へ出れば田舍娘ですつてね……」
から云つて、房子は今にも泣き出しさうな眼付になつた。
「それはあなたが弱いからだ。」と高史は云つた。そして急に聲をやさしくして、「そんな心配はしない方がいいですよ。僕も東京へ行くんですし、正秋君ももつと可愛がつてくれるでせう。大丈夫ですよ。お母さんが、さほどあなたを可愛がつて下さらなくつても、寂しかありませんよ。それよか、東京の女學校で、ウンと勉强して、あなたのいつも云つてるやうに、女の音樂家になるといいのね。」
「ええ、そうしたいのですけれど……」
「それがいいのです。僕は畫家になりたい。えらいえらい畫家になりたい。そして、僕の畫が展覧會で評判になると

いい。その時は房子さんにも見に來て貰ひたい。それが僕の理想です。」
「どうか、さうなつて頂戴ね。きつとね。わたしよろこんで見に行きますわ。その代り、もしかして、わたしがいい音樂家になれたら、あなたききに來てくれる？」
「ええ、僕もよろこんで……」と高史は力をこめて云つた。そして、この約束がきつと實現されさうな氣がして、二人はかたい約束をしたのだつた。二人には丁度、眼の前の美しい沼の上に輝く空、空の奥深く、いかにも輝かなたのしい望みの國があつて、自分達を手招きしてゐるやうな氣がして、その純な幼い心で、互ひに、「勉強しませう。」
「ええ、きつと、きつと。」と手を握り合つて、約束せずにはゐられなかつたのであつた。

三

「高史さん、東京の兄さんが來ましたからいらつしやいな―　房子より。」
かう書いた紙を、房子はこの沼の家の男の兒――彼女の乳兄弟である仙三に持たせてやつた。そして、日當りのいい六疊で東京から來た中學の制服姿の兄の正秋と、少しの間遊んでると、やがて飛白の單衣を着た高史がやつて來た。
「よオ、高史君。」と正秋がニコニコして云つた。
「この間はおハガキありがたう。」と高史が云つた。
「お待ちしてゐました。」
「ありがたう。もつと早く來たかつたのですが、學校の課題がいろいろあつてね。それがまたむづかしかつたので、閉口しちやつたのです……まあ上りたまへ。」
「でもすぐ出るといいですね。沼の方へ。」

「さうね。すぐ行かうか。」
「ええ、兄さん。行きませう。そして高史さんにお船を漕いで貰ひませう。いつものやうに。」と傍で房子がいそいそとして云つた。
三人が沼へ出ると云ふと、ばあやが出て來て、あまり遲くならぬうちに歸つてくるやうにと云つて、房子を呼んで、メリンスの美しい單物に着かへさせた。
「ばあや、わたし、何かお菓子を持つて行くわ。」
「では、いつかの干葡萄だの、ミルクキヤラメルだの、出してあげませう。」
かう云つて、ばあやは茶戸棚の罐から、そんなものを出して風呂敷に包んで、それをばあやの子供の仙三に持つて行くやうにと云つた。このばあやは、東京のお邸へ上女中に來てゐたが、それからこの下總の沼のほとりへ歸つて、この家にかたづくことになり、今では仙三をかしらに三人の子供を生んで育ててゐるが、身體が弱いからとて、東京の邸から預かる事となつた房子を、自分の子供など問題にならぬほどの愛をもつて、かうして何くれとなく面倒を見てゐるのであつた。
「よくお氣をつけてね。」
「ああ、大丈夫よ。では行つてくるわ。」
かう云つて、房子は仙三と一緒に、もう門の方へ出てゐる兄の正秋や、親友の高史のあとを追うて行つた。
やがて、伊兵衞の渡場のところから、伊兵衞の持船を借りて、それを高史が棹さして、四人乘つた船は、のどかな夏のはじめの沼の上へと、靜かに靜かに漕ぎ出された。
「君が疲れたら、僕にかはらせてくれたまへ。」と正秋が高史に云つた。そして、心地よく吹いて來る水の上の風に、

大きい息をして、その眼を彼方に投げて、たのしさうに景色を見て、
「やはり田舍がいいな。」と云つた。
「でも單調で駄目ですよ。」と棹さしながら高史が答へた。
「ねえ、兄さん、わたしねえ、東京のお家へ歸りたいのよ。そしてね、東京の女學校へ入りたいのよ。高史さんもさうおつしやるの、それがいいつて。わたしほんとに歸つて行きたいのよ。」と房子が兄に訴へるやうに云つた。
「僕もこの夏休きりで東京へ行くでせう。さうすると房子さんがどんなに寂しいか知れないのですよ。」
「それはさうだけれど。」と正秋が年長らしく云つた。「この頃、東京ではお母さんが病氣でね、大方寢てらつしやるから、今は一寸どうにも出來ないけれど、房子もやがて東京へ歸れると僕は思ふね。」
「さう……それならいいけれど。」と房子は云つて、沼の上から既に小さく見えるばあやの家の方を、そのやさしい黑い眼でじつと見返した。ばあやが庭からこちらを見てゐるので……。

四

樂しい沼の舟あそびをした日から、一週間たつた土曜日の晝すぎ、房子はばあやに連れられて東京の母の病氣見舞に行くことになつた。路の兩側に、櫻の樹が一杯に生へ並んでゐる停車場の構內に入ると、もう高史と仙三とが先きに來て、こちらを見てニコニコして二人を迎へた。そして、切符が賣り出されると、高史は僕が買つてあげると云つて、ばあやから金を受取つて、上野行を二枚買つて來た。
「僕も早く東京へ行きたいな。でも、房ちやんの方が僕よりさき行きさうだよ。」と高史は云つて一寸寂しさうにした。
そのうち上りの汽車が入つて來た。この間兄の正秋が東京に歸る時には、高史と二人で見送つたのだが、今日はか

うして自分が見送られるので、房子は高史が帽子を振つて、兄さんによろしくと云つた時には、少し寂しい氣がしたけれど、汽車が人氣もない野の中に出て行つて左側の車窓に、松林が一杯つらなり、その丘と丘との間に、ちらりと沼の水の色が見えかくれする時分には、何とも云へぬ幸福な氣持になつた。

「ねえ、ばあや、東京へ行くのはうれしいね。」と房子は云つた。ばあやは東京へのお見舞の品――この土地でとれた鰻のつくだ煮の箱を包んだ風呂敷を、大切さうに膝の上において、房子の白いレエス附の赤いパラソルと、自分の黑のパラソルとを右の膝に寄せかけてゐたが、

「そんなにうれしいだかね。」したが、東京のお邸へ行つたら、上手にお母様にお見舞を云つて下されね。」と房子の顔をじつと笑つて見て云つた。房子はコクリとうなづいた。それはよく分つてるわと云ふやうに。

やがて、松戸の驛もすぎた。荒川の鐵橋も見るまに過ぎて行つた。そして、だんだんに家で一杯になつて、見果てもつかぬ都會の屋根の海を、千住の驛のあたりで見た時には、房子の胸がドキドキした。そして、ばあやが東京の地震の時の事や燒けた家の事や、バラックの事を、その隣の見知らぬ女の乘客と、もう心やすげに話をしてゐるのを片耳に聞きながら、窓から身を乘り出してゐた。

「お美しいお孃さんですね。」とその女の乘客がばあやに云つて、じつと房子を見たので、房子はパッと赧くなつた。そしてじつとうつむくと、ばあやは自慢さうに、このお孃さんは東京のお金持のお家の娘さんで、私がお乳を上げたのだとか、今はずつと私の家であづかつてゐますだのとか云ひ出したので、「まあ、お喋りのばあやだわね。」と房子は思つたが、口に出さないで顔を赧くしてゐた。

「上野……上野」と呼ぶ聲。そして、停車すると、アスファルトのプラットホームを、降車の人の下駄の音が騒々しかつた。房子とばあやとはずつとおくれて、プラットホームを出て、驛の入口で、これまで一緒だつた女の人と別れた。

その女の人は、名殘惜しさうに二人を見返り見返りしてゐた。ばあやは消魂しい自動車の音にビクビクして、むやみに危ない危ないと云つて、房子の袖をつかまへては、まごつくので、その度びに房子はをかしくて笑はずにはゐられなかつた。

上野の廣小路まで來ると、ばあやはそこの榮太樓の甘納豆を買つて、

「これは子供さん達のお土產にしますだよ。」と云つた。それは房子がさげた。そして俥を二臺雇つて、眞直に家へ行く事になつた。

二臺の俥は、やがて萬世橋に出て、神田のバラック町を通り、九段下で右に折れて、飯田町中坂上の大きい石の門の前でとまつた。その石の門の標札にある「大鄕三藏」といふのが、房子の父の名であつた。植込を右に曲つて、內玄關の方の戶をあけると、見馴れぬ年の若い女中が出て來たので、我孫子からだと云ふと、丁寧にお辭儀して一寸お待ち下さいと云つた。

「奧樣のお見舞に我孫子からばあやとお孃さんとがまゐりましたと云つて下さい。」とばあやはくどくもう一度云つた。房子は自分の父の家に歸りながら、こんな風に他人行儀にされるのが、今更に一寸寂しくてヘンな顏付をした。するとばあやはそれを慰めるやうに、

「上手にお挨拶して下されや。」と囁いた。

やがて女中が出て來た。その後から、十五六に見えるローズ色の洋服姿の娘が出て來て、

「まあ二人だわ。よく來たのね。さあこちらへおいでなさいね。」とおとなのやうな口振で云つた。そして、房子のそばに來て、

「房ちやん、大きくなつたわね。」と云つて房子の手を握つた。

「姉さんも……」と房子はその手を握りかへして、その美しい姉の洋裝をじつと見つめると、姉は眼を胸の上に一寸落して、

「ねえ、似合ふでせう。私のこの服！　こなひだこさへたばかり……母さんのお見たてなの、いいでせう。」と云つた。

「ええ、いいの、ほんとにいいの。美しく見えるわ。」と房子は繰返し感心して云つた。實際に美しかつた。姉の綾子の姿は美しかつた。

「さあ、こちらへ行きませう。」

氣が付くと、ばあやはもうそこにはゐなかつた。房子がまごまごすると、

「ばあやはおしつこに行つたのよ。」と綾子は笑つて云つた。

五

「どうぞ、奥様のお部屋へお通り下さいませ。」と、女中が來て云つたので、ばあやと房子とは、女中について廊下を通つて、ずつと奥まつたところにある、庭に向いた八疊の靜な部屋へと入つて行つた。部屋の床の間に近く、白いシーツの病床があつて、ふうわりとかかつた黄色い羽二重のかけぶとんの紅入り友禪縮緬の襟の中から、黒髮のややほどけかかつた束髮の靑白い顏が、じつとこちらに向いてゐた。そして、二人がお辭儀をすると、寂しく笑つて、

「いらつしやい。」と低い聲で云つた。ばあやの長い長い見舞の挨拶がすんでから、

「お母さま、おかげんはいかがでございますの。だんだんおよろしうございますか。ばあやと一緒にお見舞にまゐりましたわ。」と房子は、我孫子の家で敎へられた通りに、つつましやかに見舞を述べた。

「ええ、ありがたうよ。大した事はないんだけれど……」と母の伊勢子は云つて、それからばあやの長いおしやべり

を聞いてから、
「ばあやも房子も、ゆつくりしてお行きね……」と云つた。そして、房子の顔や身柄をじつと見ながら、「大分たけが高くなつたね。ずつと風邪も引かずにゐたの？」と訊いてくれた。房子は嬉しかつた。その母の言葉が……。そして、何か言はうとすると、房子のかはりに、ばあやが何もかもの返事をした。その時、姉の綾子が入つて來た。そして、
「ねえ、お母さま。房ちやんも私のやうな洋服めすと、美しくなれるわね。」と云つた。さもこんな田舍風では美しくないのだと云ひたさうに。
「ねえ、房ちやん。こつちへ來て御覽なさいな。」
綾子がはしやいで呼ぶのを、房子が云はれる儘に行つて、綾子の傍に立つと、二人は殆んど同じ位であつた。
「まあ、お二人とも、可愛らしい。」とばあやが感心したやうに云つた。
「身たけはよく似て來たけれども、やつぱり綾子の方が派手に見えるわね。」と母が云つた。
「さうでもない事よ、お母さま。着物のせゐだわ。私、房ちやんに私のお洋服着せて見るわ。きつと派手になる事よ。」
と綾子は云つて、房子の手をギユッと引張つた。「ねえ、私のお部屋へいらつしやいな。」
どうしようと、じつとはあやを見ると、ばあやがうなづいたので、房子は次ぎに母の顔をじつと見ると、母も、
「行つていらつしやい。」と云つてくれたのでその部屋を出た。姉の綾子の部屋はそこから二間はなれたところの三疊だつた。そして、その隣が食堂になつてゐた。
「ねえ、姉さん。兄さんは今日は何處へいらしたの？　それから貞ちやんや、千代ちやんや、駒ちやんは何處へ行つて？」と、その食堂をのぞくやうにして房子は兄や幼い弟妹たちの事を訊いた。
「ええ、兄さんはお友達のところへ行つたんでしよ。貞ちやん達は、今お母さまがわるいから麻布の叔母さんとこへ

預けられてるのよ、喧ましくつて仕樣がないんですもの。」と綾子は云つた。

「まあ、さう。」と房子は云つたが、小さい時から何處へも預けられず、この家で、母の一番のいとし子で育つてゐる姉の綾子が、どんなに羨ましかつたであらう。その姉の綾子の顔を見ると、子供心にも、姉は幸福で、自分は幸福でないと云ふやうな氣がした。

「あ、これがいいわ。」と綾子は云つて、自分のクリーム色の洋服やその附屬品を揃へてから、房子に云つた。

「房ちやん、おべべぬぎなさいよ。」

房子が云はれる儘に帶をといたり着物をぬいだりすると、綾子はまるで人形遊びをするやうにした。着つけがすんでから綾子は急に氣が付いたやうに、

「こんな髮の結ひ方駄目よ。今のはやりの髮にしてあげるわ。」と云つて、房子の髮をすつかりときほぐして、鏝をかけたいのになどと云ひながら、もぢやもぢやにして、そしてリボンでしばつて、

「ああ、いい子になつたわ。それでやつと私安心したわ。來た時のみじめさつてなかつたもの。くすんだ田舍ツぽうでね。」と云つた。

そこへ兄の正秋がぬつと入つて來て、驚いたやうな顔をして、

「誰かと思つたら房ちやんなんかね。そんな洋服なんかどうして着るの。ちつとも似合やしないぢやないか。」と云つた。

「まあ、いやな兄さん。なによけいな事云つてるの。」と綾子が白い眼で睨んだ。

六

その夕方、京橋の商會の方に一日中出てゐる父の三藏が、電話で我孫子から二人の來たのを知らされて、少し早目に歸つて來た。そして、玄關に迎へに出た皆の中に、洋服の房子を見て、

「オオ、房子か……」と眼をまるくして云つた。「いゝ服を着てゐるね。」

「ええ、お父樣、綾子のを貸してやつたの。」と綾子が冴えた聲で云つた。「いいでせう。ねえ、お父樣。あまり田舍ッポで、變だつたもんだから。」

それから父は、暫くの間、母の病室へ行つてゐたが、やがて食堂に出て來て、夕食をみんなと一緒に食べた。ここでは食事だけは、文化生活風に椅子で食べるのだつた。ばあやまで、女中さんと一緒にあちらで、と云ひ張つたけれど、椅子にかけさせられた。

「僕は今日、房ちやんが東京に來ようとは思はなかつたよ。此間その話はちつともなかつたからね。」と兄の正秋が食事の後で、珈琲をのみながら、皆の話をしてゐる時房子の方を見て云つた。

「この間は愉快だつたね。」

「ええ、高史さんも。」と房子はあの沼の畔に、今頃夕食をしてゐるであらう高史を思ひ浮べて云つた。「喜んでた事よ。よろしくつて……來る時停車場まで送つてくれたの。」

「さう、親切だね。」

「あんなに親切だから、私隨分高史さんが好きですわ。」

二人の話を聞いてゐた隣の綾子が、神經的に口をはさんだ。

「何なの、え、何のおはなし？」

「何でもないのよ、姉さん。」

「何でもないんだ。此間僕が我孫子へ行つて、髙史君だの房ちやんだのと、沼の上で舟であそんだ事を話してたのさ。」
「まあ、さう。」と綾子は云つたが、一寸考へてから、「田舍のお話なんかつまらなくはない事！　私、田舍ツポのお話、あまり好きにはなれないの。」と云つて、じつと房子の顏を見て、「房ちやん今度は一週間位、東京にゐないこと！　それよりか、ずつと東京にゐないこと？　そして、私と一緒に、ピアノだのダンスだの習はない事？　それがどれ位いいか知れないわよ、ねえ。」
「でも、姉さん、私の勝手には何にも出來ないわ。」と房子が云つた。
「それもさうね。」と云つた綾子は、くるりと父の方に向いて、
「ねえ、お父樣。もう房ちやんを東京へよび戻して上げて頂戴。田舍ツポになるのは可哀さうだもの。」と云つた。
「房子の事か。」と父はそれ迄ばあやと田舍の方の話をしてゐた顏をこちらに向けて云つた。
「歸つて來たいといふのか？」
「ええ。」と綾子が云つた。
「女學校へ行くやうになれば、無論、歸らねばならん。」と父は云つた。
「私ね、お父さま。」とやつと房子が云つた。
「我孫子の方は好きなのですけれども……今年の夏休みに歸つて來たいんですの……」
「ああ、いいとも。」と父は無雜作にうなづいた。「さうしてあげよう。いづれお父さんとお母さんが相談の上、おまへのいいやうにきめてやる。何も心配しないがよい。」
そして、父はまたばあやの方に話をかへた。
その夜、房子は姉の綾子と一緒に、二階の寢間で並んで寢た。そして、東京に來る度びにいつもするやうに、綾子

と同じ白いナイトキヤツプをかぶつた。

「ねえ、房ちやん　東京へ歸つて來たら、姉さんがいろんな事を敎へてあげるわ。女學校の入學試驗だつて、姉さんが隨分面倒みてあげるわ　姉さんと一緒に文華學園に入るとどんなにいいだらう。」

「でも私、そんないい學校へ入れるでせうか？」

「何て臆病な子！」と綾子はあはれんだ。「それは大丈夫入れてよ。でももつと活潑にならなくちや駄目よ。あなたまるで借りて來た猫の子のやうだもの。父さんにだつて、母さんにだつて、もつとおダダ云ふといいわ。あんなに丁寧にお辭儀ばかりしてるなんて、他人みたいで可笑しい事よ。」

「でも私、姉さんのやうに出來ないの。」

かう云つて、房子は顏の上にかけ蒲團をひつかぶつた。いつか眼には淚が浮んでゐるのだつた。けれども、東京に歸る事を思つたよりも容易く父が承知してくれたのを思ふと、氣が引き立つた。今に自分が女學生になつて、好きな音樂を稽古したり、あの親切な高史と東京で時々話が出來たりする、かうした未來の事を想像すると、何とも云へぬ幸福感に胸が顫へるのであつた。

七

房子が沼の家から、東京の父母の家へ戻つて、姉の綾子の通つてゐる文華學園へ同じ樣に通ふやうになつて、三年の月日が過ぎた。で、もう姉の綾子は卒業まぎはであり、房子はそこの二年級であつた。田舍にゐたためか、姉の綾子よりも背がすらりと伸びて、健かに見える房子が、姉と同じやうに洋服で並んで步いてゐるのを見ると、何にも知らない人は、よく双生兒かと見まちがへた。けれども、この姉妹の性質は、ほとんど反對であつたし、その容貌など

も似たやうな目鼻立でありながら、その人に與へる感じはすつかり違つてゐた。姉の綾子は白羽二重にぽつちり紅みをかけたやうな明るい華かな血色で、その白い眼は冴え冴えと、いつも才氣で輝いてゐるが、妹の房子はクリイム色を帶びた柔らかな顏で、その夢みるやうな潺んだ眼眸には、つつましやかな愛くるしさが溢れるやうであつた。

房子は何から何まで、姉の綾子に相談もしたし、また從順にその云ふ事をきいてゐるので、まるで姉の小間使ひのやうであつた。姉の綾子の方は、勝氣で、派手で、むかふ息がつよくて、才はじけてゐるので、おつとりとした房子のやり方にはよく不滿で、

「まあ、房ちやんはぼんやりね。なぜ、それ位のことがわからないの?」と云つて、房子の耳を引張つて、叱りつける癖があつた。こんな風にきめつけられると、房子とても腹の立たない事はないのであつたが、何かそれについて言ひ譯でもすると、

「おだまり、田舍者のあなたに何がわかるの?」と綾子は一層高い聲で、輕蔑的に云ひけなすのであつた。そして、それを傍で母が聞いてゐても、別になんにも云つてくれないのが、房子には物足りなかつた。それで姉にはどんな事でも反對をすまいと思ふのであつた。ところが、またそんなに何でもかでもその云ふ通りになつてゐると、

「まあ房ちやんのおざなりには呆れるわ。わたしの云ふ事を上の空に聞いてるんですもの。あなた低能ね。」と云ふのである。そして、母に何かと云ひつけるので、房子は時々母から、何か遠廻しに、とんでもない事で苦情を云はれるので辛かつた。綾子はかういふ風にいつも氣まぐれで、いろんな事々思ひ付いては、仲間に引張りこんでおいて、思ふやうにならないと云つてはぢれるので、房子はいつもひどいこと困るのであつた。そんな時　兄の正秋がゐると、いつも味方をしてくれたが、それがもう一度感情家の綾子を昂奮させた。

「いいわ、いいわ、覺えていらつしやい。」

こんなにその美しい眼に涙をたたへて睨んで云ふので、姉を心から好いてゐる房子は、自分も泣きたい位になつてしまふのである。

或る日の事、丁度その日は土曜日であつた。空には初夏の日が晴れやかに照つて、この都會の上を吹く風も、何となく靑々しい感じのするやうな愉快な日であつた。姉の綾子とその仲よしの友達の敏子とが、小石川の植物園へ行くといふので、房子もそれについて行つた。電車をおりて植物園の方へ歩いて行くと、行き合ふ人がみんな振返つて、この三人の美しい少女を見るのであつた。房子が或る曲り角で、靴の工合をなほして、少し後れた時、むかうの方で二人が立止つて云つた。

「早くいらつしやいな。」

「房子ちやん、先きへいらつしやいよ。」

やがて植物園の門を入ると、二人は房子を先きに歩かせて、自分達はゆつくり歩きながら、

「まあ、さうなの、今日ここへいらつしやるの！」

かう云つたのは姉の綾子であつた。

「ええ、今日ここへ來てゐる事が分つてたから、あなたをおさそひして來たんだわ。屹度どこかの阿亭に待つててよ。」

かう云つたのは、敏子であつた。房子は誰が來てゐるんだらうと思つて、いろいろ考へてみたが、見當がつかなかつた。けれど彼女にはそんな事はどうでもよかつた。それに姉から、そんな事に興味をもつて、聞きたさうにしてゐると思はれるのが厭だつたので、わざとさつさと歩いて、池のところへ出て行つた。そこはクローバの小さな葉の密生してゐる草地と、芝生との續いたところで、池の上の前面は、躑躅の一杯に生え込んでゐる丘陵で、その花は日向の方のが、もう七八分までぱつと咲いてゐるので、その明るい濃紅色や、淡紅色で、そこら中の土地も空氣も彩られ

てゐるやうに見えた。いろんなみなりの子供達や、家族連れが、その間の路を上つたり下りたりしてゐた。また池畔に畫架を立てて、その景色を描いてゐる長髮の青年もあつた。

八

「まあ、よく咲いた事！」

から呟いて、房子が不圖振返ると、はるかむかうの灌木のところで、姉たちが新らしい夏帽をかむつて白い靴を穿いてゐる、すつきりした一人の若い紳士と立話してゐるのが眼についた。

「まああの人だつたのね。」と房子は呟いた。そして、それがどんな人だか、一層見當がつかなくなつた。

綾子と敏子とその若い紳士との三人づれが何か話しながら、ゆつくりした調子で歩いて、そばまで來た時、房子は誰にともなく一寸頭を下げて、この三人の後にまはつた。

「ねえ、房ちやん。この方宮本さんでいらつしやるのよ……ねえ……これはわたしの妹の房子と申しますの。」と綾子が紹介した。

「あ、さうだらうと思つてゐました。あなたによく似てゐらつしやるから……」と輕く云つて、その宮本と云ふ若い紳士はいかにも上品な笑顏をして、その愛嬌の籠つた眼を房子に投げた。

「さあ、一緒に行きませう。」

やがて四人は、躑躅の間の小みちを高臺の方に下りてくる人達とすれ違ひながら上つて行つた。そして、櫻の樹の幾十株となく生へ並んだところの草生の片隅のベンチに、宮本、綾子、敏子、房子といふ順に腰をかけて憩うた。

「なんて、きれいな聲でせう。」と房子は宮本が綾子と敏子と談笑する聲を聞いて思つた。そのきれいなのは、聲ばか

りではないと思つた。宮本はすらりと脊の高い色の白い靑年で、年は廿四五位で、身體にぴつたりと合つたいい洋服で、玉蟲色のネクタイをつけてゐるその姿は、まるで繪の中の貴公子のやうであつた。

かうしてゐるうちに、房子は宮本といふ名を、此間姉の口から聞いた事のあるのを思出した。

「房ちやん、それは、きれいな人をわたし見たわ。宮本さんと云つて、敏子さんのお知合の方なの。」

房子が端しの方で、あまり默つてゐるので、隣にかけてゐる敏子が、時々振返つて、何かと話しかけた。けれど、姉の綾子の方は、ただ宮本と話をする事ばかりに氣をとられて、敏子と話する事さへも少なかつた。

それから四人は、園の中をあちらこちらと、花や樹や動物を見て廻り、いつか出口の方に來てゐた。そこで宮本はみんなに云つた。

「では、これで今日はお別れですね。何だかもつと遊んでゐたいけれど……」

「ええ、でもまた近いうちに何處かへまゐりませう。」と敏子が云つた。

「今度は僕の家へ來て下さい。みんなで遊びませう……房子さんもぜひ姉さんといらつしやいね。」と宮本はやさしく云つた。房子はぱつと赧い顏をして、口の中で「有難う。」と云つてお辭儀をした。

みんなに別れて二人きりになつた時。房子は姉に云つた。

「姉さんはあの方とお親しいやうでしたのね。」

「さう見えた事？」と綾子はニツコリして云つた。「今日で二度しかお目にかからないのよ。この間敏子さんのお家でお目にかかつたばかりなの。そして、大變お話が面白い方だつたから、敏子さんにお願ひして、今日お目にかかれるやうにして頂いたのよ。ねえ房ちやん。この事はお家へ歸つても、屹度お母さんに云はないで下さいね。お母さんなんかちつとも理解がないから、わたしの心持を誤解するにきまつてるわ。」

「ええ。」と房子はうなづいた。けれど、あんなに姉に優しい母に對して、こんな事を云ふ姉の心が分らなかつた。
　家に歸つてくると、二人の歸りがいつもより遲いので、家中のものの夕飯がすんでゐた。そしてみんな何處へ行つてゐたのかと訊いた。兄の正秋まで、こんな時刻まで何處にゐたのだと、訊いた。
「何處だつていいぢやないの。」綾子はツンとして云つた。その樣子に正秋はムッとしたやうな顏をして、
「あア、そりや何處へ行つたつていいんだけれどね。氣をつけないといけないよ。そこらあたりに不良少年が一杯ゐるからね　氣をおつけ。」と云つた。
「まあ、なんておせつかいな兄さんでせう、……いやになつちまふわ。」
かう云ひ捨てて、綾子は女中が夕飯をすすめるのを、ちつとも欲しくないからと云つて、自分の部屋に入つてしまつた。
　房子はひとり女中のお給仕で夕飯を食べた。そして、久しぶりにおいしい夕飯だと思つた。それから、兄の部屋へ行つて問はれる儘に、敏子と三人で植物園に行つてゐた事、躑躅が美しく咲いてゐた事などを話した。そして、そこで姉がかの宮本に會つたといふ事は、何だか兄に話さねばならないといふ氣もしたけれど、云つたあとの騷ぎが恐ろしかつたので、彼女はそれを胸一つに祕めてしまつた。こんな話をしてゐるところへ、兄をたづねて來た客があつた。それは正秋の親友であり、房子にとつても、あの田舍で――沼の家で暮した時分からの、なつかしいなつかしい友達の高史であつた。
　高史は房子と同じ年に東京へ出てから、學校の傍ら繪の勉强をして、美術學校に入る準備をしてゐたが、時々正秋をたづねて來て話をして、時によつては泊つて行く事などもあつた。この高史が來ると房子は心からうれしく、力强い氣がするのであつた。それで房子は高史がそこにすわると、

「いらつしやい。」とやさしく云つた。高史はそれにかろくこたへてから、
「綾子さんは？」と訊いた。

九

高史が來た時に、綾子が來ないと、「綾子さんは？」と訊くのがおきまりであつた。そして「呼んで來なさい。」と正秋に云はれて房子が呼びに行くのであるが、綾子は機嫌よく出て來た事は少なかつた。
「わたしあんな田舍ッぽ好きでないわ。」と綾子は云つてゐた。
房子が綾子の部屋に行つてみると、まだ歸つたばかりの姿で、ぴつたりと机によりかかつて、綾子が手紙を書いてゐる最中であつた。房子の入つて來た音で、ハッと振返つた綾子の美しい顏は、妙にきむづかしく歪んだ。
「いやな人ね。房ちやんは猫みたいにそうつと入つて來るんだもの……何の用なの？」
「あの……何でもないの。」と房子はおづおづ云つて、その儘立去らうとすると、綾子は急に思ひ付いた事があるやうに房子を呼びとめた、
「まあいいわ。一寸ここへ坐つてね。」
それで房子がおとなしくそこへ坐ると、綾子はレターペーパーを、つと房子の前に出してこれを讀んでみるやうにと云つた。
房子はその手紙が今日の宮本といふ人に宛てたものであるのを見ると、妙に胸が苦しいやうな壓迫を感じた。
「いいのよ、ちつともわるい手紙ぢやないわ。おしまひに房子からもよろしくと書いておいた事よ。」と姉が云ふので見ないわけには行かず、目を通した。そこには宮本に對してもつともつと親しくなりたいといふ姉の感情が、いろい

ろな言葉で述べられてゐた。まだ二度しか合はない、しかも異性の人にむかつて、こんなに親密な手紙を出していいものかしらんと思つて、房子は何だか重苦しい氣持になつた。

「何處かまづいところがあつたら云つて頂戴。」と綾子は云つた。そして、この手紙を見せたいといふ事と、房子と名をそこに書入れてある事とで、あなたを自分の味方にしてゐるのだから、そのつもりでおいでと云ひたさうな顔をしてゐた。

「わたしには分らないわ。」と房子が云つて、それを返すと綾子は美しい封筒の中にそれを収めて宛名を書いてから、

「これから一緒にポストに入れて來るから行きませうよ。」と云つた。

町はもう賑かな夜の人の出ざかりの時であつた。こんな屋敷町でも、往來の人の影は絶えなかつた。空には圓い月がのぼつて、いかにも初夏の溫みをもつたやはらかな光を放つてゐた。手紙をポストに入れてかへるみちみち、綾子は云つた。

「ねえ、房ちやん。わたしがあの宮本さんとお親しくなれるやうにあなたも祈つて頂戴な。この事をあなたが同情もつて、わたしのいいやうにいいやうにとしてくれれば、わたし一生あなたを大切にするわ。若しあなたが同情を持たないで、邪魔をしたり、告口したりすると、わたし一生あなたを妹だとは思はない事よ。え、わかつて？」

「ええ……」と房子は云つた。が、何といふ姉さんだらうと云ふ考が、心に一杯になつた。彼女は姉のする事がいいとは、どうしても思へなかつた。こんな風にして「ひみつ」をこしらへようとする姉の身の上が恐ろしい、あぶなかしい氣がしてならなかつた。そして、これから姉のする事に目ばなしをすまいと思つた。家の前まで來ると、丁度そこへ正秋と、高史とが門をくぐつて出て來た。正秋は二人を見ると、これからそこまで高史君を送つて行かうと云うた。すると綾子は、

「いやだわ、わたし……」と云つて、いきなり房子の手を引張つて、門の中へ驅け込んだ。その途端、房子は高史の顏が苦痛な色で染められて、瞬きもせぬ表情を見た。その眼付を見ると、その心が波のやうに搖れ立つた。そして、姉の綾子が高史にとつてどんな大切な人になつてゐるかと感じて、彼女ははじめて恨みのこもる底知れぬ寂しさを味はつた。

一〇

青葉若葉の上に降りそそぐ雨脚を、窓にもたれて、じつと見守つてゐる房子の美しい眼には、一杯の寂しさが漂つてゐる――。

「ああ、わたしはたつた一人なんだわ……誰からもしたしく思つてもらふ事の出來ないさみしい娘なんだわ……高史さんからさへも忘れられて了つてゐるんだもの……」

父にも母にも姉にも、妙にかけはなれた立場におかれてゐる今の房子には、あのなつかしい幼馴染の高史にさへも、閑却されて了つた自分の事を思ふと、えも云はれぬ悲しさに、丁度しとしとと降る雨に、庭の水溜りの中にうつる椿の木のかげが、絶えず亂れて見えるそれのやうに、心は亂れてくるのであつた。それは彼女がこれ迄知らなかつた、をとめ心の寂しさ、悲しさであつた。

人間はふだんそれ程に思つてゐなかつた傍らの親しいものが、ふとした事で失はれると、はじめてその尊さが感じられて殘念さ、名殘惜しさ、慕はしさなどが、二倍にも三倍にもなつて、やるせなく胸が引きしめられるものである。房子とてもさうで、高史の親切さは、當り前の事として馴れ切つて了つて、高史をまるで自分の身體の一部のやうに思ひ、高史の心の中は、丁度自分の心のやうに、分りきつてゐるやうな氣がしてゐたのである。ところが昨夜、あの

門燈の下で、高史が姉の綾子に「いやだわ、わたし」とはねつけられて、こらへきれない苦痛と情熱との燃え上つた石炭の火のやうなものを投げつけた。(ああその高史の眼の光りは!)それが房子の心にこびりついて、今日になつても、彼女を暗い思ひに引き込むのであつた。

「ああ、そんなにも姉さんはいいのかしら!」

から思つた房子は、美しい姉、才のある姉、父からも母からも兄からも愛され、今はまた高史からあんなにも心を寄せられてゐる姉への羨ましさに、心がわくわくするのである。

「でもわたし、決して人を怨まないわ!」と暫くしてから房子は呟いて、亂れかかつた髪を紅い唇でぷつぷつと嚙みきつた。「ええ、それでなくてはいけないわ。人を怨むなんて何ていやな事でせう。お美しい綾子姉様は、わたしだつてどんなに好いてゐるでせう。もし高史さんが好かないと云つたら、わたしは姉さんのいい乙女である事をどんなに申したでせう。高史さんが姉さんの崇拜者である事を喜ばねばならぬわたしではなかつたでせうか……」

から云つて見ても、房子のさみしい心持は、一層强められて行くばかりであつた。そして、考へるともなく考へるのはあの沼の畔で暮した幼い日の事であつた。あの美しい沼で、あの沼の上の松林の中で、いつまでもいつまでも仲よく遊び、仲よく生きて行ける自分たち二人であつたなら! けれど、もう幼い日は再びは歸らないのだ。流れて行つた水がもとにもどる事がなぜありえよう。

「ああ、何だかつらい氣持だわ……」

房子はハラハラと大粒の涙がこぼれさうになつて、眼の中が湯のやうに熱くなるのを、こらへようこらへようとしてゐると、後から肩を叩かれたので、ハッとして振返ると、女中が、

「お手紙が來てゐます。」と云つて、水色の封筒を渡したので、眞赤になつた眼を伏せながら、脣には愛嬌をふくませ

て、有難うと云つてそれを受取ると、急いで自分の部屋に歸つて、その手紙を開封した。それは姉の友達の敏子からのもので、昨日の樂しかつた事を一寸のべてから、「次の日曜には、姉さんにもさう云つてはありますが、わたしからもぜひあなたが姉さんと御一緒にいらつしやるのを、おねがひしとかねばなりませんわ。あの宮本さんもさう仰しやつたのよ。ぜひおそろひでとね。よくつて。」と書いてあつた。

　房子はそのまま机の上に額をもたせて眼をつむつた。そして「行くの止しませう。」と自分に云つた。彼女は姉の綾子と一緒に行くと、どんな處ででも、あるひけめとある氣苦勞とを味はふのが常であつた。女王のやうに華やかに振舞ひたい氣性の姉にとつて、侍女のやうな自分が必要なのかも知れない。引立て役として……でもそれは、房子のやうな性質の乙女にとつても、いやでもない迄も、つらくない事ではなかつた。彼女はほんとに姉が眩しすぎると思つた。そして心の中で叫んだ。

「ああ一人になりたいわ。あの靜かな靜かな山の中で一人でゐたいわ。誰にも會はないで、じつと一人で……」

　かうして彼女がぼんやり物思ひに沈んでゐるところへ、何にも知らない姉の綾子が入つて來た。そして輕い調子で、

「おや、まあ泣いてるの……」と云つたが、聲を變へて唄女のやうに、「何のなげきやもちたまふあはれ……乙女子よ、愁ひは君の身をやぶらん。あはれ乙女子よ、ぬぐひとらせんその涙……」

　と半ば唄ひながら、綾子は妹の肩をゆすぶつて云つた。

「快活におなりなさいよ、房ちやん。そして兄さんの部屋にいらつしやいナ。また例の田舍ツポが來てるから、行つて遊んでやりなさい。あなたの大仲よしのお百姓さんが來てるわよ。」

一一

兄の部屋へ房子が入つて行くと、正秋はゐないで、綾子が云つた通り、高史が一人兄の机にむかつてすわつてゐて、スケッチブックにその鉛筆を走らしてゐたが、振返つて、

「綾子さんが今行つたのでせう。」と云つた。

「ええ。」

「今まで珍しくここで僕と話してたのですよ。」

「…………」

「綾子さんの云ふには。」高史はちつとも房子のさみしさうな表情には氣がつかないで、あたかも相手が自分と同じ心ででもあるかのやうな調子で云ひはじめた。「どんな青年を見ても、ただの一度だつて感心した事がない。どうしてあんなに男性といふものは汚いのでせうッて云ふので、僕が今、それは綾子さんの考へがほんとにめざめてゐないからだと云つて、男性のために辯解してゐたのです。綾子さんは第一、男性は女性よりも動物に近いと云つて攻撃するし、物質的で現實主義者だと云つて非難するし、あたまから侮蔑してかかるのだが、そんな事はヒステリイ的な見方でよくないと思ふのですよ。ねえ房子さん、あなたは姉さんと考へがちがふでせう。それともあなたも男性――靑年はみにくい、汚いとおもひますか？」

「それは女だつてさうかも知れませんわ。でも、女は男のやうに我儘で、移り氣ではございませんわ。」と房子はその言葉に力をこめて云つたら、氣がスイとした。

「何だ、あなたは姉さん以上の男性侮蔑家だつたね。」と高史は笑つて、「そんな云ひ方をしてくると、僕默つてゐませんよ。」と云つて、彼はいろんな昔の傳說や、西洋の物語の中の例などを持出して、我儘で心變りをするのは、男よりもむしろ女性――乙女だと云つた。それからまた、かうも云つた。男性といふものは、女性のためにその生涯を苦し

みと涙との中にひたし、その心をずたずたに引裂かれてしまふ。だがたとひさうなる事が分つてゐても、未來の苦しみと涙とが分つてゐても、女性の白い手の動く方に、夢遊病者のやうに動いて行くところに、男性――青年の幸福と生甲斐とはあるのだ。だから女が不實で心變りすればするほど、愈々男性にとつては愛らしくなるのだと云つて、一つ大きい熱い吐息をした。

「ああ、そんなものでせうね。」と房子は微かに云つた。「ほんとに可哀相なのは男ですよ。純で、やさしくて情熱家でちつとも疑りぶかくない男は馬車馬のやうですものね。このおひとよしの馬車馬は、御主人のお孃さんとお話をしたい、仲よくなりたい、それのためにはどんな事でもする心なのに、そのお孃さんは馬車馬なんか見るのも汚い、話すのもいやだとつけつけ云ふんだからな……」

その時部屋の外で、彈けるやうな笑聲が起つた。そして障子が開かれて、あまり笑つて上氣して赧くなつてゐる綾子の激しい眼が、やや横柄に、こちらの二人を見て輝いてゐた。

「そこで、聞いてゐたのなら、もつと云ひたい事があつたのに、惜しい事をした。」と高史は間のわるさをかくすやうに云つた。

「今でもおつしやるがいいわ、何でも……」と綾子はすかさず云つた。「どんなにおつしやつても男性はきたないわ。ほんとに馬車馬のやうなのは嫌ひだわ。わたしは馬車馬よりも、乘馬の馬がいいわ。ああわたし馬に乘りたい、馬に乘りたい。黒い乘馬服を着て、いい馬に乘つて、あの宮本さんのやうな方とくつわを並べて、五月のクロオヴアーの野の中や、林の中を仲よく話しながら行つたら、まあどんなにいいだらう……」

この充分亂暴と云つてよい綾子の言葉には、房子はハツとして、高史を見たが、うつむいてスケツチブツクに何か樂書きをしてゐる高史の顏色は見えなかつた。

「その宮本といふ人は誰れ？　小說中の人物ではないのかね。」と高史は呟くやうに云つた。すると綾子は、
「何でもいいぢやなくつて……何のかのとあなたは生意氣だわ。あなたはね、房ちやんとまゝごとするのが丁度いいのよ。」と云つて樂しさうに笑つた。

二

つひに約束の日曜日が來た。房子ははじめ行くまいかと思つたが、やつぱり姉の事が氣がかりになつたので、自分も行く支度をした。二人とも新調のセルで、縞柄こそちがつてゐても、色合ひはいづれもほんのりと匂ふ藤色のそれであつたので、そこに二房の藤の花かと匂ふけれど、姉の綾子は、黑地に眞赤なダリヤの花の浮き出した羽二重の帶をしめて、その氣性をその花で示してゐたし、房子の方は薄桃色の地に紅の撫子と水の總模樣の少し地味な柄であつた。

二人が、敏子の家に行くと、待つてゐた敏子も、同じやうに辨慶のセルにあかい博多の帶を胸高にしめてゐた。三人は東中野にある宮本の家へと、飯田町から省線の電車に乘つた。電車の中で、この美しい三人の乙女は、どんなに多くの人々の視線をひいた事であらう！　綾子は席が一つあくと、房子に腰かけるようにと云つて、自分は敏子と何か小さな聲で話してゐるうち、間もなく代々木で席が出來たので、三人はそろつて腰をかけた。

「それはいい方！」と敏子はニコツとして云つた。「でも、いくら美しい靑年と云つても、あの宮本さんのやうな方は一寸少いわ。」

「わたしもさう思ふの。あの方のあの美しい橫顏は、まるでヨハネのやうだわ。なよやかで、整つてゐて、そして、しつかりしてるんですもの。」と綾子は、此間家であんなにも男性は汚い、みにくいと云ひすてて、一本調子の高史をいらいらさせた事を忘れてゐるやうであつた。こんなにその時その時の調子でものを云ひ、その人その人と相手次第

で、まるで別々の事を云ふのが、綾子のならひなのであつた。

やがて東中野で下りて線路にそうて一二丁行き、橋を左に渡つて二三丁行くと、微風はそのあたり一帶の樹立と靜かな家居との上の空氣をゆるがして、暖かな日ざしはやや暑い位である。生垣越しに見える家々の庭には、薔薇の花とか百合とか紫陽花とかが、いかにも爽かな彩りを見せてゐた。鐵の門に「宮本」とある家からは、その應接室とも思はれる、木立の蔭の空色に塗つた洋館から、美しいレコードの調が流れて來るのであつた。それはもう來客を待つ支度……ウエルカムのそれと云つてもよかつた。案内されて上に通され、磨かれた廊下づたひに、その應接室に入ると、中には大きい圓卓を中にして、二人の靑年と二人の乙女とが、もう樂しさうに談笑してゐた。その二人の靑年の一人は、云ふ迄もなく、此間植物園で會つたあの瀟洒とした靑年紳士の宮本元雄であつた。

「さあ、どうぞこちらへ、大分お待ちしてゐましたよ。」

「それはすみませんでした。」

「いや……おいでにならぬつもりかナなど思つてゐたんだが、來て下すつてほんとによかつた……」と主人役の宮本はもの馴れた調子で云つて、三人の乙女をもてなした。そこへ家の人も出て來たり、紹介もすましたりして、だんだんくつろいで來た。卓上には、果物とかが一杯に並んだ。そして、レコードは更に新しい輸入したての新曲に變へられたので、ミルクストロペリイとか曹達水とか、快いさらさらとした風の音、水の音、花の匂ひのやうなリズムが、みなの耳を娛しませた。

「さあ皆さん、今日はほんとに樂しくしませう。くつろいで……遠慮なんかしないで、そして後でみなそれぞれに、みんなで樂しむといふ事に協力して下さい。」

宮本はその態度にも言葉にも、何處迄も禮儀正しいものがあつた。「そして、いろいろな面白い話をしては、皆々喜

ばせた岡澤とよぶ今一人の美裝した靑年は、眼のきらきらした敏捷さうな小柄の男で、非常な早口で、輕くしやべるのであつた。彼は宮本の話がまだ切れないうちに、横合ひから話をとつては、少し粗野な冗談を云つたりして少女達を笑はせた。

興がたけなはになつた時に、敏子は岡澤と何か喋つてゐたし、綾子は宮本に頻りに話しかけてゐた。ほかの二人の娘は、家の人と一緒にきらく(ヽヽヽ)に話してゐるのであつた。房子はひとり默つてそして靜かにレコードの曲に耳をすまして、指でその膝を輕く打ちながら、その曲に聞きとれてゐた。彼女はいい音樂を聞いてゐると、いろんな事をすつかり忘れて、醉つたやうないい心地になつて、その胸が喜びに波うつのである。ところが、この房子の樣子に氣のついた宮本は、立上つて、つかつかとこちらに來て、房子の肩によりそつて云つた。

「この曲御存じですね。では一つうたひませう。僕ピアノを彈きますから……」

「ええ。」房子は少し赧くなつて頷いたが、見るともなく姉の綾子の顏を見ると、彼女はハツとしてしまつた。綾子は「何て生意氣な！」と云ふやうな、嫉ましさうな嶮しい眼付で、こちを睨んでゐた。姉のこんな眼付に睨まれる度に、房子は大抵は直ぐに讓步するのが常であつたが、今はどうしようかと心が迷つた。

宮本は室の一隅にあるピアノの前にかけて、房子を呼んだ。

「さあ、いらつしやい。房子さん、なにも恥かしがる事はありませんよ。」

「さうですとも、ほんとに房ちやんはいい聲でいらつしやるのよ。」と敏子が云つた。つひに宮本が立つて來て、やさしく促したので、房子はもういなみ難い氣持になつて、ピアノの傍らに立つた。轟く胸で――。

一三

やがて、ピアノの鳴りはじめるにつれて、その轟く胸のひびきをまかせてゐた房子は、淸い若々しいソプラノでうたひはじめた。しつとりしたものがなしい「夜の調(セレナーデ)」である。

「…………………

あはれ床しき夜のしらべ
夕はるかに胸に聽けば
心はかへる、たのし昔
ああ唱へや、君よ、とはに唱へ
うたへ……うたへ……ああ、とはに……」

美しい顫音(トレモロ)、なつかしい韻律(メロディ)、心も消え入るやうな靈魂のノスタルヂヤが幽玄に漂ひわたる。それはいつしかに、乙女の涙をささそふ哀調であり、それは若き日のよろこびに心もそぞろなる嘆きではあるまいか。

唱ふ人、彈く人の呼吸がぴつたりと合つて、それはあだかも一輪の大きな情熱的な紅ばらのやうな感じで、この曲が終つた時、じつと聽き入つてゐた人々は、はじめて、ハツと我に返つたやうな顏をして、拍手をした。

「まあ、何ていいソプラノ！……」

かう一人の令孃が敏子にささやいてゐるのが、房子の眼にうつる。房子は上氣して、ポツとした顏をして、自分の席につくと、みんなが、もう一つ、ぜひもう一つトラビアタか、ベニスの舟唄かをうたつてほしいと云つたりした。

「房ちやんにはそんなのとてもうたへませんわ……ちつとも本式にやつてるのぢやないんですもの。ただ、うちでレコードでやつと覺えたのですから、お里が知れるばかりよ……わたしが恥かしくなつちまふわ。」と綾子が皮肉に云つた。

「そんなことありません。この方のやうな正式の聲と、素直な本格の唄ひ方をする方はさうありません。すつかり僕のピアノと調子がのりましたね。一度もこれまでに合はした事もないのに……えらかつた。」

かう云つて宮本は、心から愉快さうに房子を賞めてから、今度はワグナアのレコードをかけて置いて、むかうの方に立去つた。やがて、日本髪の、白いエプロンをかけた女中が、そこの卓上に、かはるがはるいろんな食器を並べて行き、臺付の瀟洒なコップに、黒いのや赤いのや、白いのや靑いのや、いろんな洋酒がつがれて行つた。

「房子さんばかりに唄はせたんではいけないね。この次ぎ誰れかうたはなくつちやね。」かう云つたのは、かの岡澤であつた。

「さあ、今度はぜひ綾子さんにうたつてもらひたい。」

「どうぞ、どうぞ……」とみんなが云つた。手をたたいたりした。

「わたしはそれこそまづいのよ。でも房子よりはましかも知れないわ。」

かう云つて、綾子はあでやかに立上つた。と、ピアノのところに行つたのは、宮本ではなくて岡澤自身であつた。岡澤がピアノにむかつたのを見ると、その刹那に綾子の眼にサッとただならぬ色が走つた。ああ、彼女は、そのピアノこそはどんなにか宮本その人であると思つたのに——

「それはいい。岡澤君がひいてくれる……岡澤君は實にうまいのです。」と宮本が誰にともなく云つて、靑いコップをぐつとのみほすのを、綾子は美しく睨んで云つた。

「卑怯でいらつしやるのね。お逃げになつて……」

「いや、どうして……岡澤君は僕よりうまいんですよ……さあ……」と宮本はうながした。それから綾子は、あの奔放なカルメンの一節をうたひ、ブラアムスの「子守唄」をうたつた。そのあとで、岡澤は巧みな彈き方で、コレルリ

の「フオリイ・デスパアニユ」を奏した。まことに宮本の云つたやうに、岡澤は素人とはおもはれない程のいいピアニストであつたのだ。

一四

岡澤は非常に話が上手であつたので、何とも云へず、みな愉快に笑ひさざめいた。岡澤は、どう云ふものか、自分に對して、ツンとした態度をとつてゐる綾子を見て、「まるであなたはフランスの公爵令孃といつた氣位ですね。僕には、あなたのその高慢な樣子が、一層美しく見えますよ……」などと、ひやかすとも、賞めるともつかぬ事を云つたりして、少しづつ少しづつ綾子に親しみを深めて行かうとしてゐる樣子であつた。

「さあ、餘興！　餘興！」と敏子が云つた。そして、二人の令孃としばらく打合せをしてから、

「ねえ、みなさん……このお二人がこれからミニユエットををどつて下さるのです……少しここをよくして、急のステエジにいたしませうよ。」と云つた。

それは何より何よりとみんなが云つて、女中も呼んだりして、假りのステエジが作られた。と二人の令孃は、美しい樣子で、そのところに出て、そして、レコードの奏樂をかけて貰つて、あの雅びやかな足さばき、あのしなやかなポオズのミニユエットををどつた。

歡を盡して、宮本の家をみんなの引上げたのは、其日の夕方であつた。停車場まで、宮本が送つて來て、岡澤と二人が、まるでこれらの五人の美しい乙女の保護者ででもあるやうに、ついて歩いて、音樂の話とか、キネマの話とか、文學の話とか、思ひ思ひに話しつづけた。そして、この日の會のやうなものを、月に一度づつこれから開いて行かう。人數はあまりふやさないで、十人內外で、何處までも仲のよい、美しい、文化的會合をしたいなどと、これはかの

宮本が云つた。みんなそれに賛成した。

「では　またそのうちに……」と送つて來た宮本は、停車場で、みんなが電車に乘つてしまふと云つた。そして、房子には、

「房子さん、この次、もつと練習して來て下さい。もつと大きいものをうたつてね。」と云つた。房子はこのやさしい宮本の言葉に、胸が一杯になる位感じて、ただじつとお辭儀をした。何といふ美しい、やさしい、上品な方であらうと、彼女はこれまでに、かつてこんな人を見た事もなかつたので、愛と尊敬とに、その心が一杯になつてゐたのである。姉の綾子はと見ると、むかうの方で、岡澤とぴつたり並んで腰をかけて、何かしきりに、岡澤に媚びられてゐる樣子が、いかにもはしやぎ切つた感じがするので、房子は何となくホツとして、一人吊り革に手をかけて、あの宮本のやさしい言葉をしみじみと思ひしのんだのである。

やがて電車は牛込驛でとまつた。そこで房子と綾子とはみんなに別れておりて、九段の自分の家まで歩いた方がよかつた。

「さようなら。」「さようなら。」と挨拶をかはして、房子がホオムにおり立つと、まだ綾子がおりて來ないので、じつとイんで待つてゐると、綾子が出て來た。

綾子はチラツとも妹の房子の方をば見ないで、少しうつむいて、切符を改札に渡して、早足に停車場を出て行く。その樣子が、一目で、云ふに云へないものがあるのを房子は感じた。ああたうとう思つた通り、姉はおこつてゐると房子は思つた。で、こんな時、何か話しかけても、返事をしてくれないのが分りきつてゐるので、房子はもう姉のあとをば追はないで、ゆつくりとした調子で歩いたので、彼女が九段へ行く道へ出た時には、もう姉の姿は、ずつとむかうの町角に消えてゐた。

房子はかるい少しの疲れを感じながらも、今日は何となく悲しい、然しまたいい氣持だつた。一つはあの心ゆくばかりの「夜の調」をうたつたあのためかも知れなかつた。そして、歩きつつ彼女は、よく小さい時から云つてゐるやうに、將來音樂家になりたいといふ自分の希望を思ひ出した。ああ然し、考へて見ると、それは今の家の樣子で、しかも自分のやうに父母の愛のうすい娘の身で、はたされる願ひであらうか。レコードで聽くワグナアの曲、又はロシアの民謠、スカンヂナビアの唄……美しい唄の中に、身も世も忘れて生きてゐられたらと、彼女はひたすらにあこがれるのではあるが、どうしてもそれは「失望」の二字に到達してしまふより外ない事が感じられる。

思ひ沈んで、うつとりと灯の町を歩いて行くうちに、耳のところで、自分の名が呼ばれたので、びつくりして立止つて見ると、それは高史であつた。

「まあ……」と房子は身ぶるひした。

「びつくりした？」

「ええ、ずゐぶん、びつくりしましたわ。」

「どうしてさう驚くの？」

「ええ、少し考へ事をしてたから……」

「どうしてひとりなの。姉さんは？」

又しても高史は、姉の事を訊くのである。房子は寂しく笑つて、今しがた一人さきに歸つた事を云ふと、高史はいかにもつまらない顔をして、

「今日はなんてわるい日だつたらう。僕には……」と云つた。

「どうして？」

「だつてね。」とさすがに高史もそれとは露骨に云ひかねて、ニヤニヤとしてから云つた。
「房ちやんを送つて行かう。」

一五

「此頃どうしてさう仲がわるいのかね？」
かう云つて、病床にゐる母が訊いた位である。もうかれこれ一週間近くにもなるのに、綾子は何と打ちとけない事であらう。房子がくるとその場を立去るし、房子がゐないと、そこに來るといふ風である。別にこれといつて、以前のやうに手きびしい事も云はないが、實に冷淡で、その底に憎みのやうな、嘲りのやうなものが祕められてゐて、險しい眼付で、房子の方をじつと見てゐるのである。何を誤解をしたのであらう。わたしは何もわるい事はしないのに……もしわるい事と云へば、あの宮本さんの家で、あのセレナアデを唄つた事の外にはありやうはなかつた。ところで、それがそんなにもわるい事だつたかしらと、房子は思ふ。
「ああ何もかも、わたしには辛すぎるわ。」
房子はかうして姉の冷遇があまりにも悲しいので、あやまりたいので一杯なのだが、その機會を與へないと云ふのが、今度の綾子の心持だつた。そして、その眼はかう云つてゐるやうにもとれるのだ。
「もう姉妹ではないわ――」
寂しい寂しい房子。でも、心の素直な彼女は、じつとこの冷たさに辛抱しようと決心して、それをまぎらすために、一人學校の事を勉强したし、夜はあのたつた一つの慰めのレコードに、その一時間を聽き入る事をたのしみにしたのであつた。こんな風にして、次第に暑い夏が近づいて來た。毎月しようと云つたあの宮本の家での會も、それきり開

かれないと見え、敏子からも何とも云つて來なかつた。
此頃では、學校への行き歸りも、姉妹は別々になつてゐたので、七月のはじめの、カッと暑い埃の神田の通りを、わざと電車にも乘らないで、房子がコッコッ靴音かるく、自分の家の方へと歩いてゐると、向の方から、ニコニコといやに笑つてくる若紳士があつた。――見ると、それはあのいつか宮本さんの家で知り合ひのあの岡澤順三であつた。
「房子さん、お久しぶりでしたね。」とから岡澤はなれなれしく聲をかけた。そしてくるつと踵をかへして、房子の行く方へとついてくるので、房子は肩を小さくして、つつましく低い聲で返事しつつ、何かから大きい鳥に見込まれた小鳥のやうな氣持である。
「ぜひも一度お目にかかりたいと思つてゐたんですよ。丁度よかつた……ところで、あなたは、どうして姉さんと一緒にいらして下さらないのです。僕の家へ……」
「でも……」
「でもぢやない。さあ行きませう。今日はあなたの姉さんも來てゐらつしやる筈だから。」
「姉が……姉がまゐつてますの？」
「ええ、いらつしやつてますよ。いつもあなたがちつとも來てくれないので、僕は變におもつてゐたのです。さあ行きませう……ね。いいでせう。一寸……」
「でも……また今度にしますわ。」
「まあ、ばかに遠慮なさるのだね、あなたのやうな人が、あの綾子さんの妹さんだとは思へませんね。あの派手な、何事にでも快活な姉さんとは大違ひだ……」
「ええ、みなさう云ひますわ。」と房子は云つた。彼女は心からの反感を、この岡澤に對して感じた。けれども、先刻

の岡澤の言葉はしつかりと、房子の心をしめつけてゐた。姉がこの人の家へ行くとは何事であらう。それがあまりにも不思議なので、房子は思ひ切つて、

「姉はちつともわたしに申してくれませんので、わたし……どうしてだか分りませんわ。伺ふつて事が……」と云つた。

「さう、ぢや、綾ちやんは。」と岡澤はこんなにもう馴れ馴れしげに綾子の名を云つた。「隱してるのかね。どうしてだらう……」と呟いてから、「僕の家ではダンスを敎へてゐるのですよ。僕が敎へてゐるのぢやないのです。僕の姉がやつてる。姉は永いことアメリカにゐたものですから、ダンスには一かどの修業が出來てゐるのです。さう……一週間に二度づつ、それに先月からずつと綾子さんは習ひに來てゐらつしやるのです。敏子さんも折々來られますがね。姉さん……大分上手になりましたよ。」と云つた。

「まあ、さうでしたの。」と房子は云つた。そして、不安と好奇心とが一緒に胸にわき上つて來た。とにもかくにも、一度そこを見よう。いや、見ておかなくてはならない、と彼女は思つた。

「ああ、そこには、どんな姉の祕密があるのであらう！」

一六

「まあ、面白いから見て行くんですね。」とその家の近くなつたところで、岡澤は滑かな調子で、

「あなたにダンスをお習ひなさいとは云ひませんよ。もつとも、踊つて下さると實にいいんですがね……」と云つた後で、多分今日はいつぞや宮本の家でミニウエットを踊つたあの二人も來てゐる筈だと云つた。

房子は岡澤のかうした言葉を聞きながら、胸がわくわくしてゐた。これが平素考へ深く愼しみ深い房子であらうか。

こんなに姉の祕密にむかつて、立入つて見ようとする心持は、單に姉の身の上が心配なためばかりであらうか。
「では、宮本さんも來てゐらつしやるのですか。」と房子は訊いた。
「いいえ。」と岡澤はさりげなく云つた。「宮本君はいまゐないのですよ。彼は神戸に行つてゐます。神戸へ――彼は蘆屋に別莊があるのでしてね。よくその蘆屋の方に行きますよ。」
「まあ、さうですの。」と房子は云つた。そして呟いた。「まあわたし、いつかあんなに云つて下すつたのに伺はなかつたわ……」
「え？」
「いいえ、何でもありませんのよ。」と房子は一寸赧くなつて云ひ消した。
「宮本君、お好きですか？」とぶしつけに岡澤がたづねた。
「好きでも嫌ひでもありませんわ。ただあの方は音樂をなさるんですもの。」
「音樂をするからですか……ぢやあ……僕も房子さんに立派に好いていただく理由はもつてゐるわけですね。」と岡澤は愉快さうに笑つた。
その家は、こんな町の中としては珍しい形の文化住宅で、その入口の扉には、美しい裝飾がされてゐた。そして、舞踏教授所――池山富子といふ標札が出てゐた。
「さあ。」と岡澤にうながされて上つたとつつきの應接室は、狹いけれども綺麗で、壁には薄絹一つをひるがへす裸形のダンサアの繪が、いろいろと揭げられてもゐたし、あの有名な露西亞の踊り手カルサビナが、男の踊り手の肩にかかつて、飛魚のやうに手足をひらめかしてゐる情熱的な寫眞や、ドガの踊り子の繪などもあつた。圓い卓子の上には、來客用の寫眞帖があつて、勸められる儘に一二頁めくると、ニジンスキイの踊り姿とか、パヴロバ夫人の踊り姿とか、

いろいろの寫眞版が出て來る。それを岡澤に説明されて聞いてゐると、心が熱くなつてくるやうだ。そこへ岡澤の姉だといふ四十に近い婦人が出て來た。亞米利加に長くゐたといふだけあつて、いかにも社交上手に房子をもてなした。

「あの方たち―― 綾子さんたちはもう來てゐる？」と岡澤が訊いた。

「ええ、いらつしてますよ。あつちに。」

「ぢや、行きませう。あつちへ。」

「さあ、どうぞ御遠慮なく。」

かう二人に勸められて、會釋しながらついて行くと、厚い扉が開かれて、廣いダンスホオルが房子をむかへた。そのダンスホオルの眞中に若い男女が五六人、思ひ思ひに立つてゐるのが、一齊に此方に向いて顏を見ると、姉の顏はなかつた。房子はホッとして、不圖見てると、扉の右よりに椅子に腰かけてゐる乙女のそのむかうが、姉の綾子であつた。

綾子はこちらに向いて、サッと顏色を變へた。眼が三角になつて、脣がキッと引きしめられてしばらくの間、空間をにらむあのきつい凝視が續いた。

「どうです、綾子さん。あなたがちつとも連れて來ないから、たうとう僕が房子さんを連れて來ましたよ。」と岡澤は何かかう皮肉にとればとられるやうな云ひ方をして、綾子のそばへ行つた。

「どうも有難う……御親切だわね……房ちやん、ここへいらつしやいな。」

こんな冷たいものと、やさしいものの入り混つたやうな切口上で、綾子は見下すやうな險のある眼でこちらを見た。何かかうおどおどしながら、房子は姉のそばへいつて、

「岡澤さんがおすすめになつて、つい伺ふ氣になりましたのよ。」と云つた。

「いいわよ、來たつて……面白いから見ていらつしやいよ。」と綾子はいかにも尊大な姉ぶつた云ひ方をした。

一七

午後一時から五時までは、ここでスパニッシュ、グリイク、スコットランド、エジプト、印度など、各國のダンスの個人教授をし、夜は京橋の日東洋行の三階で、ソシアルダンスを教へてゐるといふこの池山女史の親切な教へ方は、見てゐても氣持がよかつた。

「ダンスの事を何のかのと云ひますが、これは單に趣味だけではなく、心のためにも身體のためにもいいのですから……」と池山女史は房子の心の動くやうに云つて、それからむかうに行つた。二人の娘がこちらに來て、房子たちの傍にかけた。そして、みんなで池山女史の教授ぶりを眺めながら、帝國ホテルの土曜日の夜のダンスや、「すみれクラブ」とか「みさを會」とか、「さみどり會」とか、香川靜枝、英百合子などいふよく踊る人々の噂などをした。

こんなことを見たり聞いたりしてゐると、妙に心がときめいて、自分でさへも、一種特別な氣持になるのだから、姉のやうな派手好き、遊び好きの性格としては、それはそれは堪らないものだらう。から房子は思つて、綾子の樣子を見るともなく見やつた。けれどそれにしても、姉も自分もまだ學生の身ではないか。若しこんなにダンスホオルに出入してゐる事を學校の人々が見たらどう思ふであらう。いくら自由を重んじてくれる學校でも、ここ迄の自由は許してくれない筈である……それを房子は考へて見ないではゐられなかつた。

一時間位して、もつともつと留められるのを斷つて歸りを告げると、

「ぢや、わたしも歸るわ。」と綾子も云つた。そして、ニッコリと房子を見やつてから、

「ねえ、先生、これからこの妹をつれてまゐりますわ。わたしよりか上手になるかも知れませんわ事よ。」と云つた。

「さあ、さうかも知れませんね。とにかくいつでもいらつして下さいね。見にだけでも。」と池山女史はさらりとした調子で云つた。

「あんな事を云つても、嘘さ。綾子さんは、何かにつけて妹に負けるとくやしいと思つて、わざとつれてくるのをやめるのだと僕は思ふ。」と岡澤がいやがらせのやうにいふと、

「まあ、あんな憎らしい事を……覺えてゐらつしやい。」

かう云つて、綾子が睨んだその眼つきのなまめかしさを見た時、房子は何だかぞつとするものを感じた。

外に出て、姉妹は、かなり長い間默つて歩いた。電車にも乘らないで、ペーヴメントを、こつこつと何處までも歩いた。そして、やつと綾子が口をひらいたのは、九段下のところであつた。

「ねえ、房ちやん。話したい事があるわ。あちらへ行きませう。」

「ええ。」と云つて、房子は、その話したい事とは、きつと苦情に違ひないと思つた。そして、ただッ子の姉の事だから、今日の事なんか打ちもかからん位怒る筈なのに、こんなにやさしく云ひ出すのが、一寸氣味わるいやうな氣もした。

やがて坂をのぼり、廣場を越えて、二人は靖國神社裏の噴水の方へと歩いて行きながら、はじめは何となく探り合ひの話であつた。

「ねえ、房ちやん。あなた何かわたしにお說敎したいわね……ええ、さうでせう。わたしにはわかるわ。たとへば、學生の身で、ダンスホールに出入するのは惡いとか、男の人とあまり親しくしすぎるとか……でも、そんな事云つて、綾子がそれをやめると思つて？」

こんな風に、綾子は搦め手から來た。

「でも、わたしさう思ひたいわ……房ちやんは姉さんに意地の惡い事をする人ぢや決してないつてね。ね、さうでせう。きつと親切でせう。わたし、房ちやんが同情心の强い、いい娘だつて事を知つてるんですもの。わたし位これを知つてるものはないと云つてもいいわ。」と綾子は云ひ續けた。

「うれしいですのよ。信じて下さるのね。」と房子はうるんだ眼で姉を見ながら云つた。「わたし、姉さんにお說教なんか出來はしなくてよ。今日など、わたし、心から見たくなつて行つたんですもの。姉さんの祕密をさぐり出さうといふつもりぢやなかつたんですもの……」

「それは房ちやん、どつちでもよかアないこと！」綾子がおつかぶせるやうに云つた。「ほかの話にしたいわ。ねえ房ちやん。わたしはね、この二三ケ月の間、隨分房ちやんをいぢめたわね。つらがらせたわね。わたしそれをよく知つてゐるのよ。そして可哀さう可哀さうと思つたの。こんな姉をもつた妹は何て氣の毒だらうつてね。でも、これ迄の事は許して頂戴ね……そしてね、もし姉さんがゐなくなつた時……」

ハッとしたやうに、綾子は口をつぐんだが、その不意の言葉が、房子の心にぐつと來た、「妙な事を姉さんはいふ……」と彼女は思つた。すると綾子は直ぐ云ひ直した。

「今にも姉さんがお嫁にでも行けば、らくになるつて事よ……」

一八

二三日雨が降りつづいて、からつと暑い日照になつた日である。學校のかへりに、校門のところで、姉の綾子が立つてゐて、出て來た房子を見るとニッコリと笑つて云つた。

「ねえ房ちやん。今日わたしね、敏子さんのお家へ行くから、お荷物になるもの、持つて歸つて頂戴な。何も持たな

いで行きたいわ。」

「ええ、持つて歸りますけど、早く歸つてね。」

「あ、早く歸るわ。早く歸るわ。」

から綾子は繰返して、もう一度その黑い美しい光に充ち滿ちた眼で、じつと房子を見て、そして、早足にさつさと遠ざかり、ずつとむかうに行つてから、ちらつと振返つて、もう一度笑つてお辭儀をした。房子も笑つてお辭儀をした。そして房子は嬉しいのであつた。たうとう姉さんが優しくなつた。何といふ嬉しい事であらう。こんな優しくしてくれる姉を、少しの間でも怨んだ事が、彼女は恥かしい位であつた。姉の荷物をもつて家近く汔歸ると、そこらに小さい妹や弟が遊んでゐた。姉に優しくされた事で、すつかり上機嫌の房子は、小さな妹や弟を、抱いてやつたり頰ずりしてやつたりしてから、家に入つた。そして、兄の正秋にあつた時、から云はずにゐられなかつた。

「兄さん、あなたは綾子姉さんを見そこなつてよ。わたし、あんな優しい綾子姉さんをもつて、何て幸福でせう。ほんとに今日は優しかつたわ。優しく優しく笑つて下すつたの。嬉しかつたわ。」

「それは當り前サ。」と正秋が云つた。「ふだん當り前の事をしないもんだから、特別に嬉しかつたわけサ。僕だつていつも冷淡にしてやりたいナ。僕の親切を知らぬのだもの。」

「アラ、いやだ……兄さんはね。もうそれこそそれこそ飛切の親切よ。そして、わたしは何て幸福でせう。姉さんと云ひ兄さんと云ひ、高史さんといひ……」

だが、高史――高史は親切な名で云へるであらうか。房子はじつと口を閉ぢて暗い眼をした。此頃の高史はもう房子などは何とも思つてゐないやうで、いつも綾子の事ばかり、やきもきしてゐる青年にすぎないではないか。

「でも、無理はないわ。あの美しくて優しい綾子姉さんは、誰だつて好きなのだわ。あの人――あの岡澤さんの、姉

さんへのおべつかはどうでせう……」この事を考へると、房子は妙に不快だつた。
子供たちだけでの食事もすみ、父も京橋の高館から歸り、それから夜の郵便も來たし、子供達も寢しづまつたし、女中達ももう寢るばかりの十一時、十分……二十分、三十分、と時は過ぎるのに、どうしたのか、綾子は歸つて來ないのである。
「まあ、どうしたのかしら、どうしてこんなに遲いのかしら、お姉さんは？」
房子はひとりベッドの上で、心配に小さな胸をわくわくさせてゐると、女中が入つて來て云つた。
「お孃さま、お母さまのお呼びでございますよ。」
「さう……」
白い寢卷の儘、眉のところに皺をよせながら、房子は母の部屋――病室へ入つて行つた。この年中の病人である母の事を考へると房子の心は暗くなつてしまふ。母の病のために、自分の家では音樂の好きな彼女が何の稽古も出來ないのである。その上、姉には優しい母も、生みの子でありながら、乳を貰はないばかりに、何かからよそよそしいところがあつて、そのために房子は母の前では妙に神經質になつてしまふのである。
「あの……お母樣、お呼びでございましたか？」と房子は手をつかへて云つた。
「何かい。綾子は何處へ行くと云ひましたかえ？」
「敏子さんのお家へつてお云ひになつてゐました。」
「では、もうお歸りと電話をおかけ。」
「はい。」房子は電話室へ入つて、電話をかけた。青山×××番、敏子を呼び出して、
「もしもし、敏子さん。こちらは飯田町の大鄕でございますがね。姉にもう直ぐ歸るやうに仰しやつて下さいません

か。」

「まァ房子さんなのね。綾子さん……綾子さんは今日はいらつしやりはしなかつたわ。」と敏子の聲がはつきり聞えた。

「まあ……さうなんですか。わたしにはお宅へ上ると云つたのよ。どうしたんでせう。何處へ行つたんでせう。」

「いけない綾子さんね。もしかするとあの池山さんの家ぢやないこと。多分何處かのダンスへ行つてるんぢやないの。」

「さうかも知れないのね……どうも有難う。ぢやおやすみ……」

房子は電話を切つて、電話室を出たが、はたと途方に暮れた。姉が祕密にダンスホールに出入してゐる事を、父や母の耳に入れたら、どんな事になるだらうと胸が一杯になつた。

一九

「姉の家出——そんな事がありうるだらうか。どんなに氣儘一杯な姉さんでも、そんな、そんな非常識な事をなさらうとは思はれないもの……いまに歸つていらつしやる。きつときつと今に歸つていらつしやるわ。」と房子は電話室の扉にもたれてひたすらに姉の早く歸つてくれる事を祈りに祈つた。とにもかくにも、敏子の家に行つてゐないといふ事を、母に云はなくてはならないのであるが、まづそれよりも、兄の正秋に相談してみようと、その部屋に行つて、もう夜中の夢をたどつてゐた兄をゆり起した。

「フン、さうか。」と正秋は房子の話を聞いてしまふと事もなげに云つた。「一晩位歸つて來ないかつて、何でもないぢやないか。あんな我儘女のする事を、一々心配してちやこちらがたまらないよ。いい加減に思つてりやいいのさ。お母さんには、敏子さんに電話をかけたが、敏子さんもゐませんよつて云つときよ。」と云つたきり、もうぐうぐうと寢てしまつた。そんな嘘を云ふのは房子としてはつらかつたが、何もかも明日になれば分ると思つて、兄から敎へら

れた通り母に復命した。

「敏子さんもかえ！」と云つて、母は眼を白くさせたが、それ以上何も云はず、重苦しく押黙つてしまつた。

「だがまた、何處かで事故があつたのではあるまいか。自動車にひかれるとか、わるものにかどはかされるとかして……」

あゝ美しい姉がいろいろと惱んでゐる光景、不吉な有樣のかずかずが、房子の頭に閃いて、心氣が亢進してどうしても寢られない。そのうちに、その夜が明方近くなつて、もう門のところに牛乳配達のけはひがした。

いつも女中と一緒に早く起きる房子が、もう學校へ行く支度は出來たけれど、姉のゐないことのためおどおどしてゐると、母の部屋の方では、父の大きい聲が暫くの間續いた。それは姉の綾子が無斷で外泊するなどと云ふ不都合な事をして、みんなに心配をかけるのも、母親のしつけが惡いからだと母を叱りつけてゐたのである。そして、母もそれに何か口返事をしてゐる樣子であつた。そこへ、やつと起きて來た正秋が入つて行つて、

「なにネ、お父さん、大丈夫ですよ。御心配にならなくつてもいいんですよ。あの綾子は氣まぐれものですから、何かきつと思ひ付いた事があるんですよ。ほつとけば今にポカンと歸つて來ますよ。あんな性質の女は、あんまり叱ると、反抗的になつて、何をするか分りませんから、歸つて來てもお叱りにならないで下さい。」と、さすがに兄は兄らしくとりなしてゐる。

房子は一層心が苦しくなつて、もう默つてゐる事が出來なくなつたのでつと父の部屋へ入つて行つた。

「綾子はまだ歸らないが……おまへ何處か心當りはないか？」と父は暗い顏をして房子に訊いた。一夜のうちに、父はそんなに變つてゐた。寵愛の娘であつただけに、かうした綾子の裏切りは、兩親にとつても二重の責苦である事が父の暗い顏付にはつきり見えてゐた。房子は父が氣の毒でならなかつた。それで房子は、姉が池山女史のダンスホー

ルに通つてゐる秘密を打明けて、
「わたしを、これから一寸たづねに行かせて下さいませ。」と頷つた。
「おお、そんなわけなら、おまへ行つてきいてくれ。だが正秋も一緒に行くのだぞ。」と父は急に勢ひづいて云つた。
ダンスホールときいて、正秋も一寸驚いた顔をして「なるほどナ。」と呟いた。
だが、池山女史のダンスホールにも綾子は行つてゐなかつた。
「どうなすつた事でせう？」と池山女史は寝耳に水と云つたやうな不審な表情をした。
「何處かほかにもお心當りはないでせうか？」
「さあ、別に……弟でもゐましたら分るのですが、あれは大森の方にゐるものですから……」
「ぢや、その弟さんをお訊ねしてお話をうかがつて見ませう。」と正秋は云つて、かの岡澤の宿所を聞かして貰つて、その足ですぐ大森へと急いだ。やうやう探ね當てて行つて見ると、そこの宿のおかみさんが、正秋と房子の様子をヂロヂロと見ながら、
「岡澤さんでございますかネ。あの方は四五日行つてくると云つて、大阪の方へ昨夜おたちでしたよ。」と云つた。
「連れでもありましたか。」
「さうですネ。一二度お遊びにいらしつたお嬢様とお二人で出られましたが、そのお嬢様の方は、さア大阪迄も行くと云ふお支度でもなかつたやうでしたが……」
「ぢや、それだ……」と正秋は呟いて、もうそれ以上訊かうとはしなかつた。

二〇

大森の停車場の方へ、正秋はいかにもにがにがしさうな顏をして步いてゐたが、やがて房子を振返つて云つた。
「房子は疲れたらうネ？」
「いいえ……」
「バカな女ぢやないかネ。綾子は……」と正秋は口の中から吐き出すやうに云つた。
「でも兄さん、これには何か深い譯があるに違ひないわ。何よりもその岡澤さんがいけない人ぢやないかと、わたし思ふのよ。いつかしらも、それは厭な顏をして姉さんを見てた位だもの……だけど、わたし、何だか譯が分らないわ……」
「多分、こんな事になるだらうと、かねて思つてゐたんだ。第一、お母さんがあまりに甘やかし過ぎてたからネ……仕方がないサ。」
「わたしだつてわるかつたわ。もつと姉さんの事を心配してあげてたらよかつたんだわ。」
「そんなに妹の身では出來ないネ。それにあのプラウドな綾子が、妹のおまへに氣取られるやうな遣り方をするものか……だが、どうしたものかな。これから先きは……」
「さあ……」と云つたきり、房子も暗い暗い顏をした。いろいろ相談したあげく、とにかく家に歸つて、二人の知り得ただけの事情を父母の耳に入れて、それからの事にしようと決めた。一方房子は敏子の家へ電話をかけて、宮本の所を訊いてみる事にした。
「でも又歸つてらつしやるかも知れないわ。」と房子にせめてものたのみをそれにかけるやうに云つた。そして、ともかくも二人が九段の下まで電車に乘つて、家の前の通りまで歸つてくると、むかうから來る敏子にばつたり出會つた。敏子は急いで來たと見えて、せいせいと息をはずませてゐた。

「まあ敏子さん、丁度よかつたわ。わたしあなたの處にお電話をかけようと思つてたのよ……」と房子は云つた。
「さう……わたしもあなたに早くお知らせしたくつて……」
「綾子の居所が分りましたか?」と正秋が訊いた。
「ええ、一寸……」と云つて、敏子は房子の袖を一寸引張つて、「わたしあなたに一寸申上げればいいのよ。そこまで一緒に來て頂戴な。」と云つた。
「どんな事?」と云つて、房子は胸を轟かした。正秋が氣を利かせて、その儘ついと門の中へ入つてしまつた。後で、二人が町の四つ角の人通りのない石垣のところまで行つた時、敏子はその懷中から一つの手紙を出して、
「ねえ、一寸、綾子さんには、わたし困つちまつたわ。これを見て頂戴。あなたこれをどう思ふ事?」と云つたその眼がキラキラとあやしく濕んだ。その手紙を見ると、綾子の筆で、しかも鉛筆の走り書きなのである。
「わたしはいけない女かも知れないわ。一番やさしいお友達のあなたに裏切つてしまふのですもの。でも、責めないで頂戴ね。ほんとにわるいめぐり合せなんだもの。誰がわるいのでもないわ。わたし、これから神戸へ行きます。あの方のところへ――そして、そこで何もかもきめるでせう。生きるか死ぬるか、その時きまるわ。では、さやうなら……」
「神戸つて……宮本さんの事なの。」と敏子は云つた。そして少し聲を沈ませて、「わたし、綾子さんを見そこなつたわ。こんな亂暴な方とはちつとも思つてなかつたんですもの。私も神戸へ行かうと思ふの。かうしてゐられるものでせうか。あの宮本さんは、わたしにとつて、どういふ方とおもつて?」
はらはらと涙が敏子の美しい眼からこぼれた。それを拭ひもあへず、敏子はじつと房子の眼を見守つて云つた。
「宮本さんは、わたしの婚約者なのですものを。」

二

大鄕の家には、陰氣な日が來た。女中たちも、臺所の方にかたまつてヒソヒソ云つてゐた。父の三藏は、その日は下町行をやめにして、家に引籠つてしまつた。そして、皆の相談の結果、敏子への綾子の手紙でいくらか手がゝりがついたので、警察へ捜索願を出す事はやめにして、とにかく神戸の宮本のところへ、正秋が出向いて見る事にきまつた。

その晝すぎ、久しぶりに高史が、いつものやうに氣樂な樣子で、正秋のところに遊びに來た。彼は綾子の失踪の事を聞くと、顏色を變へた。

「一體どうしたんです。どうしてそんなに急に家出なんかしたんです！」と、まるで正秋を詰問でもするやうに叫んだ。そして、前後の事情を正秋の口から聞いてゐるうちに、彼の顏色はだんだん暗く沈んでしまつた。やがて彼は、正秋がその夜の九時三十分の急行で神戸へ發つと云ふ事を聞くと、その儘慌しく歸つてしまつた。

その夜、正秋が愈々神戸に發つと云ふので、女中や妹たちと一緒に、房子も見送りに行つた。みんなふだんのやうに樂しい話もしないで、中央停車場のホームに入るとそこの柱のところに、思ひがけない高史がもたれて立つてゐた。彼の顏はいくらか蒼ざめて、尖つたやうに見えた。

「大分待ちましたよ。」と彼は一行を迎へて云つた。

「見送りになんか來なくつたつてよかつたんだ。」と正秋が云ふと、高史は一寸きまりわるさうな樣子をして、

「いや、僕も行かう。行きたいんだ、ね、行つてもいいだらう。」と云つた。

「それには及ばないよ。どうしてそんな事云ふのだ？」

「だつて、そのつもりで來てるんだから……」

「君の厚意は有難いがよしたまへ。つまらないから……」
こんなに云つて、正秋は頻りにとめたけれど、高史はどうしても一緒に行くと云ひ張つてやめなかつた。
その二人の對話を、こちらに立つて聞いてゐた房子は、高史がそんなに迄して、神戸に行つて見ずにはゐられぬ氣持を考へると、心がしびれるやうな切ないものを感じた。そんなにも姉の事が氣がかりになつて、心配で堪らぬ高史の心であつたのか！
「どこまでも、どこまでも、愛するものはついて行く。マノンにその身も心もささげたデグリウウのやうに、僕も行くのだ……」
かういふ言葉が、今にも高史の脣から叫び出されさうな氣がして、房子はおもはず顫へた。およそ何が苦しいと云つても、こんな苦しみに比すべきものはないであらう。親しいものの心の益々そむいて行くのを怨まずに見る心！
「でも、こんなにわたしの心を傷つけてゐるといふ事など、御存じのない高史さんだわ……」
房子は正秋と小聲で話してゐる高史の横顏を見て、云ひたい事が胸一杯になるのであつたが、その高史が姉の綾子から一生―多分一生與へられるであらう侮辱――その深い傷手をおもひやると、云ふに云へない哀憐の中になやましく頭を垂れるのであつた。彼女はそれが人生のすがた、思ふにまかせぬ悲しい人生のすがただと思つた。何もかも我儘一杯にふるまふ姉の綾子が、やはり、あんなに慕つてゐる宮本の愛を、果して得る事が出來るであらうか？房子には、まだそこに一點の疑ひがある……あのやさしい宮本が、あんなに愛らしいやさしい婚約者の敏子を捨ててまで、綾子を愛する人であらうか？……けれど、姉の性格と魅力とをおもふと、どうなるか分らない氣がして、胸がわなわなと顫へた。あゝ何て可哀さうな敏子さん！どうかそんな事にならないやうに、姉はどんなに失望しようと、宮本さんが心を動かして下さらないやうにと房子は祈つた。けれど、若し高史が綾子を連れて歸つたなら、そして二

人がどんなにか親しい人になつてしまつたら……

「では、房ちやん、あとをたのむよ。なに、大丈夫探し出してみせるよ。なにもかもちやんと片づけてみせるつもりだ。」と汽車に乘り込んでから正秋は云つた。

「きつと姉さんをつれて歸りますよ。」と高史も云つた。

その二人の乘つた汽車の遠ざかるのを、じつと見送つてゐるうちに、房子のまぶたには熱い涙が湧き上つて來た。

「ああ、このさみしいわたしをどうしよう！」

二三

その翌日、學校もやすんで、空虛な氣持でぼんやりとしてゐた房子のところに、敏子からの長い長い手紙が來た。いたましい氣持で、房子はそれを開いて讀んだ。

「今日はたうとう學校をやすみましたわ。そして一日中苦しんでゐます。丁度とりこにされた小鳥のやうに、ひとりでもがき苦しんでゐます。こんなにしてゐる間にも、わたしの望は失はれるのではないか、わたしの幸福は奪はれるのではないかと、思ひわづらひながらも、どうしても、思ひ切つて飛び出して、走り出して行くことの出來ない自分のもどかしさを悲しんでゐます。まだこの事は、家の方にも話してゐませんの。それさへわたしには出來ないのですもの……房子さん、どうかわたしの心をくんで下さいね。

一昨日からわたしは、三通もの手紙を宮本さんに出しましたわ。今日も朝から手紙ばかり書いてますの。ばかなわたしはこれまで暢氣すぎましたわ。今急にわたしの愛はめざめたの——もう人に奪はれてしまつたかも知れないのに——でもね、わたしから云ふと、あの宮本さんが、わたしとの婚約を、さうむざむざお破りになる方とは思へなくて

よ。ね、さうお思ひにならなくて？　どうか神様に祈つて下さらない。綾子さんの上にも、宮本さんの上にも、少しのまちがひのないやうにとね……」

心もそぞろに書いてゐるやうなかうした言葉の中に、敏子のいかにも、やさしい乙女らしさ、あはれさがしみ出てゐて、それが房子の胸にこたへるのである。

「御心配なさらないがよいわ。」と房子は敏子に書いた。そして一昨晩、敏子と一緒に歩いた時、姉がかの岡澤と一緒に行つた事を云つて、敏子を慰めた事を思出して、もう一度それを書いて、彼女を慰めなだめた。けれど、その岡澤といふものが房子にとつては、そんなに問題にはならないのであつた。岡澤のやうな男を、姉が心から好かうとは思はれなかつたから。それよりも、房子には高史の事が氣がかりでならない。神戸でどんな事が起つてゐるであらう？姉の綾子はどんなになつてゐるであらう？　そして、宮本、岡澤、それから高史と正秋との四人の間に、どんな場面がつくられ、どんな言葉がとりかはされ、どんなに事件が開展してゐるであらう？　それを想像すると、ただもう胸が一杯に苦しい！　敏子の苦しみもどんなにか深いものであらうが、房子の苦しみもそれに劣らないものであつたけれども、父母の苦しみを思ふと、房子は自分の事などは何でもないと思はずにはゐられなかつた。

「若しこのまま姉さんが歸つて來なかつたら……」と、房子は奥の部屋で、昨夜からの不眠と心配とで、熱の出たといふ母の事をおもひやると、何と云つて母を慰めていいかさへもわからないのである。

こんな風に、房子がとつおいつ思ひに暮れてゐると、その日の夕方、神戸發信の正秋からの電報が來た。

「アヤコ　キタ　アンシンセヨ。」

ただそれだけの文言であつたが、さすがに暗雲にとざされた家中も、それによつてひとまづ愁眉をひらいた。けれども、兩親の心には、やはりまた別種の心配があるらしかつた。それが房子には、實にいたいたしかつた。とにもか

くにも姉が若い男と一緒に(？)、さもなくとも、若い男のもとへ失踪して行つたといふ事が、いかに深い打撃を、溺愛してゐればゐるだけ、その父母の胸に、まさかりの刃のするどさをもつて打ち込んだ事であつたか？

その夜からの房子は、兄の正秋のかへるのが今か今かと待たれた。そして綾子が、あの輝かしい誇りと美とに冴えかへる黒い瞳を持つた姉の顔が、この家の中に再び現れる事を考へると、胸がをどつた。そして、これまでにない姉戀しさを、しみじみと房子は感じたのである。

ところが、兄の正秋は、その翌日はつひに歸らず、その翌朝になつても、まだ歸つて來ないので、再び、大鄕の家では、何事か異變のあつたものかと、みんなが氣をもんだ。そんなところへ丁度その日の晝時分、正秋からの長い長い手紙が來た。父母にあてたものと、房子にあてたものとの二通であつた。父母にあてたものには、どんな事が書いてあつたものか房子には知るよしもなかつたが、房子にあてたものには、かう書いてあつた。

「房子へ

ふしだらな妹をもつた兄は、かはいさうだつた。まだ歸つて行くことが出來ない。實はこちらに來て驚き入つてゐるのだが、綾子はどうしても歸らぬといふ。もう親の家へは絕對に歸らぬといふのだ。まあ、これは家出した娘のどんな時にでもいふ言葉で、きまりのわるいところからの抵抗と見れば見られるであらうが、綾子の場合には、さうではないのだ。おまへなどには、綾子の不良さがちつともわからぬだらう。綾子には實に困つたところがある。自分の美貌を鼻にかけて、その美貌の力で、出來るだけ享樂的にやつて行かうとするのだ。そしてそれを新しい、意義のある生活だと思つてゐるのだよ。まあ、くはしい事は歸つてから話す。

ただ一言云はう。姉さんはもう結婚してゐるよ……」

姉さんが結婚した！　では誰と結婚したのだらう？　どういふわけか、正秋はそれを書いてゐない。

二三

「姉さんが結婚なすつたんですつて……」

から房子は云つて見て、自分の云つた言葉でこんな苦しい氣持のものはこれ迄にないやうに感じた。房子か「結婚」といふ言葉で、これ迄おぼろかに知つてゐる輪廓、又は內容は、もつともつと長い時日のかかる、もつと禮儀正しいもつと靜かなしつとりした、キチンとしたものでなければならなかつた。まづ母親の笑顏、それから、お嫁入りの支度、それから幾度も幾度も念には念を入れての相手の家との交渉、それやこれやの古くからのしきたりといふものが周圍の人々の期待と祝福との間に徐々に進行して行つて、そして、愈々といふその吉日には、まあどんなに喜ばしい家の中の混雜さであらうかと、いつも彼女はホツと赧い顏をして、姉の綾子や、自分のさうした喜びに包まれる日の、遙かなイメエジを追うて見た事もあつたのだから。とりわけ、あでやかな美しい姉の綾子の花嫁姿、牡丹の花にたとへよか、ダリヤの花にたとへようか、世にも美しいその乙女姿の咲き切つた日の美しさを、誇りにもし、樂しみにもしたのであつたのを……

「おお、何の惜しげもなく捨てて、もう結婚をしたのだ……」

房子は祝はねばならない姉の結婚が、ただ事ならじと思ふと共に、その結婚をした相手の人といふのが、もうかの宮本に相違ないとはつきり定める事が出來た。

「敏子さんの失望……思つてみてもつらいわ……」と房子は呟いた。そして、なほそれ以上に慘酷な失望者の一人として高史の破れた心を思うて見た時、何とも知れぬ冷たい淚がこぼれてくるのである。「どうしてらつしやるのだらう、高史さんは……」失戀をして、そしてひどいひどい打擊のために病人のやうになつて歸つてくる高史の心のせつ

なさは、また房子自身の心の切なさであつた。彼女はかう自分に云つた。
「どんな言葉であの方を慰められるのでせうか……ああ、神さま、どうぞわたしにその言葉を——その心持をお敎へ下さいませ。」
今か、今かと待つてゐた兄の正秋が歸つて來たのは、もうその日も夜の十一時頃であつた。彼はすぐに父の部屋に閉ぢ籠つて、明け方近くまで話し込んでゐたが、翌朝は早く早く起きて、又もや出かけて行つた。何處へ行つたのだらうと思つて、その日は學校も半日でひいて歸つて來たが、まだ兄は歸つてゐなかつた。丁度その時、玄關におとなふ人がゐるので、出て行つて見るとそこにはあの神田のダンスホールの池山女史が立つてゐたが、房子の顏を見るとハツとしたやうな、いかにも苦しさうな顏をして、お辭儀をしてから、
「お母さまへ、內々でお目にかからせて下さいませんかしら」と云つた。房子がその事を病床の母に取次ぐと、青いやつれた顏をしてゐる母は、考へ深い顏をして、
「會ひませう。應接室へお通しして……」と云つた。そんな事は珍らしい事なので、房子は心配さうに母を見たが、母の方では急いで女中を呼んで身ごしらへをして、應接室へ行つて、二時間あまり何か話をしてゐるところへ、兄が歸つて來た。そして彼もまたそこへ入つて行つて、いろいろ話をしてゐるところへ父も歸つて來て、やはり應接室へ入つて行つた。

二四

「ねえ兄さん、わたしに話を聞かして頂戴な。」と正秋がこちらへ來たのをやつとつかまへて、房子は訊いた。「まあ、わたしどんなに心配してるでせう。姉さんの事をくはしくくはしく……どんなになつて？　どうして？……」

「心配しないがいいよ。」と正秋は妹の房子の肩に手をかけて云つた。「こちらへおいで。」
云はれる儘に、房子が兄の部屋に入つて行くと、正秋はじつと房子の顏を見て、
「房ちやんは何ておとなしい、いい子だらう！　とりわけさう思ふ。あのおてんばの綾子に閉口した僕からは、たまらなくやさしく見える。」と呟いて、机の上に頰杖をついて、神戸での一部始終を話しだした。彼は高史と一緒に神戸驛で特急を下りて、すぐ俥で蘆屋まで引返して宮本の別莊を探し當てると、宮本は心持よく出て會つた。そして、こちらの云ふより先きに、
「もう綾子さんはお歸りになつた筈ですよ。僕の友人の岡澤がおつれして、昨日發ちましたよ。もう多分お歸りでせう。」
と云つた。それから、宮本は綾子の訪ねて來た時の樣子を詳しく話して
「もう餘程落着かれたらうと思ひます。くれぐれもよく考へ直されるやうに私が申してありますから……」
「どんな事を申してゐたでせうか？」
「なにネ。」と宮本は笑つて云つた。「あんな夢を追うて家を出なすつたのかと思ふと空恐ろしくもあり、可愛らしくもあると思ひましたよ。綾子さんはかう云はれるのです。いつかあなたはわたしと云ふものが母婦型でなくて、娼婦型だ、コケット型だと仰しやいましたね。それを聞いて以來、わたしもそれが本當だと思ひ、コケットになつて、そんな風な生き方をしようと考へて出て來たのだとから仰しやるのです！　實に困りまして……ね。」
コケットらしい生き方をしよう。かういふ事を云つて、自分の眼の前に美しい眼の燃えるやうな熱望を見せられた時、宮本のそれ迄の用心深い心持も破れさうであつた。が、宮本は強い意志と正しい心の持主であつた。この誇りの強いプラウドな娘とのロマンスの相手として、彼は刹那の衝動に驅られて行く考へはなかつた。それなればこそ、こ

の廬屋まで彼女を回避してゐる彼の氣持だつた。

「私は正直に云ふと、あの綾子さんだけしか知らなかつたならば、或ひはあの綾子さんの熱烈さに動かされたかも知れません。けれど私は綾子さんを通じて、ある愛らしい娘さんを見たのです。そして私の好きな娘さんは、綾子さんよりも、むしろその内氣なやさしい、愛情の深い、草かげにうつむいてゐる野菫のやうな乙女なのです。そして、その娘さんといふのは、あなたの妹の房子さんです。」と宮本は云つた。

「だが、私は房子さんをも綾子さんをも心から愛すればこそ、その乙女美を尊く思へばこそ、それを汚れない處女として遙かに眺めてゐたいのです。私にはもう敏子といふ婚約者があります。その敏子の素直な正直な性質を私は愛してゐます。だからあの人のいい、正直な敏子を悲しませるやうな事を私はしたくないのです。かういふわけで、私の心の扉は、綾子さんには開かれぬ扉だつたのです。」

二五

正秋と高史とは顏を見合せた。高史の顏は極度の緊張を示してゐた。宮本は更に語をついだ。

「けれど、ありの儘の氣持を云へば、どんなに綾子さんの心を傷けるか知れないので、私は婉曲に云ひました。私はあなたのコケットなところを賞めたのではない。それだからこそ氣を付けてコケットでない素直な生き方をして頂きたいとさう思つて云つた事なのですと云ひますと、綾子さんはたうとう泣き出してしまひました。わたしはあなたがコケットなのをお好きかと思つてたわ。え、さう思つてたわ。そして私の事がお氣にめして下さると思つてたわ。それなのに……と云つて、大變お泣きになるので、いろいろなだめすかしてゐるところへ、思ひがけなく友人の岡澤が東京からやつて來ました。別室で彼に會ふと彼は綾子さんがこちらに逃げて來た事を知つて心配になつてやつて來た

のだと云ふのです。何でも彼がつい何の氣もなしに、僕と敏子との間に婚約のある事を口をすべらしたので、綾子さんが大變昂奮して、こちらにやつて來る氣になつたので、はじめ自分は留めてみたが、どうにもならぬので、自分も決心して保護のために後を追つて來たといふのです。それで綾子さんの處へ連れて行くと、綾子さんはいきなり、岡澤に向つて、岡澤さん、丁度いいところへ、……わたし無分別な事をしてしまひましたわ。けど、もうもう分りましたから、東京に歸りますから、つれて歸つて下さいなと仰しやるのです。それで私も岡澤も大變安心したわけでした……かういふわけで、もう歸つていらつしやる筈です。」

じつとその話を聞いてゐた高史が、この時、

「いいや、歸つちやゐないでせう。僕はもう綾子さんは歸らないだらうと思ふ」と高く叫んだ。

「僕はよく分つた。まつたくよく分つた。その岡澤といふ男が、惡者だ……憎い奴だ」と繰返し叫んだので、宮本が驚いたやうに高史の顏を見て、

「あの男に限つて決してさういふ心配はありません。」と辯解してゐるところへ郵便が來た。それを手に取つて一目見た宮本は、カッとしたやうに眞青になつて、

「これを……これを見て下さい。」と云つた。

差出された葉書にはかうあつた。

> 私達は今度結婚いたしました。
>
> 岡澤順三
> 大郷綾子

二六

「そして高史さんは……」と房子は氣遣しげに正秋の顏を見た。
「もう國へ歸つちやつた……國へ……」と正秋は投げ出すやうに云つた。
「國ッて云ふと……」
「沼の家へサ」
「いつ？」
「をととひ……もう東京へは出て來ないと云つてたよ。」
「かはいさうね……かはいさうね……」
かう云つて、房子はオロオロ泣いてしまつた。
姉の家出、思ひがけない岡澤との自由結婚、高史の歸國——それやこれやの事を思ふと、房子は云ふに云はれぬ人生の悲哀と寂寞とに打たれて、しばらくは喪心したやうになつてゐた。それを慰め勵ますのは正秋であつた。正秋はもう一人前の男子のやうに、一家の責任を双肩に擔つて沈み勝ちの父や母を勵まして、綾子の事件の後始末をつけるのであつた。學校の方の始末、池山女史との交渉、親戚との協議——そして仲に立つ人があつて、とにもかくにも、綾子達は寶塚に新家庭をもつ事になつた。姉の久しぶりの便りによると、彼等は來年の春は、そこの勤めを辭して一緒に上海へ行く事になつてゐるといふ。
それから寂しい日が來た。大郷の家に寂しい沈默がちの日が、來ては行つた。
「人の世はとまれかくまれわれはわが正しき道を行かんとぞ思ふ。」

それはある姫君が、七年もの間の婚約の破れた時に、その血ににじむ心持の中から、うたひだした調子の高い歌である。何とやさしい眞實な祈りに充ちた力強い信念の聲であらう！　この歌はいかに寂しい房子にとつての慰めであつたであらう！　この歌を短册に書いて、房子は自分の部屋の机の上に飾つた。そして日夕、その歌をくちずさみ、心をもつと正しくしようといそしむ誓ひの彼女であつた。

かの宮本元雄は、その年の秋十月に、音樂研究のために、二年間の豫定で獨逸及び佛蘭西に洋行してしまつた。彼の歸朝とともに、盛大な結婚式が擧げられる事になつてゐるので、可憐な敏子は、二年後のその樂しい日を、今から指折り數へて待つてゐる。彼女は綾子の戀の相手が宮本でなかつた事を、どんなに喜んだらう！　そして、それがまるで房子のせゐででもあつたやうに涙を流して、房子に感謝したので、敏子と手を取り合つた儘、一緒に長いこと泣いたのであつた。

高史はその後、房子の家に來る事はなくなつた。東京に出てゐるものか、やつぱり國の方にゐるものか、兄の正秋もふつつりと彼の噂をしない。

房子は時折り高史の事を思ひ出して、なつかしく思ふのであつたが、さればとて、どうにかして高史の消息を聞いて、會ひに行くといふやうな事は、彼女としては考へても見られない事であつた。

「姉の我儘に見ならつては……」と母の房子に對する監視が、あの後益々ヒステリカルになつた事は云ふ迄もない。が、房子自身そんなつもりはちつともないので、よく學校にいそしみ、そして正秋と仲むつまじく、ひとへにつゝましい女として生きて行かうと地味なその樣子が、人の心をも動かすのであつた。

二七

「まあ、かうして房子樣も、お丈夫で、お美しくて、いつ來て見ても、ばあやは嬉しいだよ……」

から久しぶりに我孫子から出て來たばあやは、この二三日病床から不思議にも離れてゐる夫人に云つて、そして續けた。

「今はもうかうして學校は御卒業になるし、ほんにおひまもあるんだし……ひとつ今日サわしと一緒に沼へござらつしやらぬか。」

「沼へ……いいわね……この頃はいつも沼の事を、わたし思ひ出してゐたわ。もう岸など草が青々してるわね、行つて見たいこと！」

「行つていいよ。」と夫人が機嫌よく云つた。そしてばあやと房子との方をおだやかに見て、

「行つておいで！　ねえ、ばあや。今日は房子をつれてつていいよ。いつもいつも、わたしの用事ばかりで、家にばかりをらせて、かはいさうだものね。二三日行つて、はればれといい空氣を吸つておいで……」

何といふやさしい母の言葉であらう！　この年月の心ざし、母へ、母へとの親しい孝養の情のむくいられたよろこびに、房子の頰はゆるまずにはゐられない。

「……もうもう、うれしいわ。」と房子がいふと、

「では、お借りして行きませう。ナニ、大事の大事のお孃樣に、指でもさしはいたしません。わしがついとりますから。」

こんなにばあやは、亂杭になつた齒を見せて、からからと樂しさうに笑つた。それから、何くれと土産物の用意などして、ばあやと房子とは上野驛へと向つた。

思へば、ばあやに連れられて、沼の國から都へと來てから、もう五年にもなる――この間に、ばあやも年を取つた！

今のうち、ばあやを喜ばせる事をしたいと房子は思ふ。
やがて、車中の人となる。車中の目は、忽ちこの美しい房子の令孃姿に一齊に注がれた。
發車のベル、振動——次第々々に展けて行く展望、千住もすぎ、松戸もすぎ、次第々々に近づいてくるなつかしの沼よ！
「おお、わたしは、何と沼に呼びかけよう！」
かう房子は呟いた。
「沼よ、なつかしの沼よ。おまへは水色の波で、わたしを迎へてくれるのだネ！　おまへは綠の芦の葉で、わたしを迎へてくれるのだネ。朽ちた岸邊の小舟で、行々子(よしきり)の聲で、うすがすみで、雲雀の聲で蛙の聲で、わたしを迎へてくれるのだネ。もしもおまへ——沼よ。何がおまへに感謝する一番大きい事であるかと、おまへがわたしに問ふなら、わたしはさう云ふわ。おまへのわたしに與へてくれた『健全な身體とやさしい忍耐の精神』だと。沼よ。おまへがわたしの心の母であつた、この自然からこそ、わたしはいゝ感情を學んだのだつたわ……」
車窓に凭れ、爽かな外光を白い美しい頰に受けながら、房子はこんなに冥想した。
「あびこ……」
「あびこ……」
やがてかう叫ぶ聲がした。さあさあと、ばあやが促すので、房子が下り立つと、一つ先きの列車から下りた一人の畫家が——髮を長くした、いかにも畫家らしい靑年が——振返つたのを見ると、それは高史であつた。姉の事があつて以來、どうしたものか、ちつとも消息のなかつた彼であつた。
「おお、高史さまぢやねえですかえ。」

から何も知らぬばあやが頓狂な聲をかけた。高史は房子の方をじつと見ると、ハッとしたやうに耳朶を少し紅くし眼を伏せたが、やがて氣を取直したやうに、

「房子さんでしたか……」と少し顫へる聲で云つた。

「高史さま、お久し振りで……」と房子も口籠つた。ばあやは二人が挨拶するのを見ると、非常に嬉しさうに云つた。

「さあ、わしの家サ行きませう。」

三人は步き出した。

青空――何と爽かな雲雀の聲であらう！

二八

再び、房子は、昔馴染のあのなつかしい沼の畔りの、天神山の樹立の中に立つた。すべては昔と同じ事である――やはらかにうるんで、一杯にたたへた水、岸邊の小舟や小屋、對岸の森や丘陵、その上に流れ落ちる春のやはらかな日影も、昔の通りである。

そして、房子のそばには、高史が立つてゐる――丁度五年前と同じやうに。

ただ二人は、もう昔のやうな子供ではなかつた。

「ほんとに僕は何と云つていいか……あなたにどう云つてお詫びをしたらいいか……」

と高史は口籠つた。

「いいえ、そんなに仰しやらなくつても……あなたのお苦しみは、わたしよく存じてをりますもの……」

「上海からは何か便りがありますか？」

「ええ、時たま……姉の結婚も何だか不幸なやうで、自分でも後悔してゐるやうでございますわ……」
「さうですか……」と云つて、高史は默つた。
二人の立つてゐるところは、丁度、あの時、無邪氣な少年少女であつた二人が、そこで遊んで房子が菫の花を摘んでゐると、高史がそれをこつそりとクレヨンで寫生した丁度あの場所であつた。そこらの立木は、みんな見覺えがあつた。その大きな松の木の根には、昔のやうに、紫の菫がたくさんかたまつて咲いてゐた。
「房子さん。」と高史が口をきつた。「あなたは覺えてゐますか。ここでしたね。僕があなたをこつそり寫生したのは……」
「ええ、覺えてゐますわ。」と房子はニッコリ笑つて答へた。
「あの時はほんとに樂しい時でしたね。あなたはあの時、二人で約束した事を覺えてゐますか。あなたがいい音樂家になり、僕がえらい畫家になつて……」
「ええ。」と房子はうなづいた。
「僕はね、長いことそれを忘れてしまつてゐたんです。ほんとに僕は馬鹿だつた。どうしてあんなつまらない氣持になつたものか……」と高史は今更に自分を責めるやうに云つた。「僕はあなたの事をすつかり忘れて、あなたの姉さんに夢中になつてゐたんです。そして、僕はその罰を受けました。神戸での事はもう何も云ひません。あの時僕はあなたの兄さんに別れて、眞直ぐにこちらへ歸つて來ました。そして、二三ヶ月の間といふもの何もしないで、ぼんやり考へ込んでゐたんです。この山この沼をひとりで歩き廻つたり、船を漕いだりしながら、畫もかかないでじつと考へ込んでゐました。そして、自分が飛んでもない間違つた道へ這入つてゐたつて事に氣が付いて、ハッとしてしまひました。その時、僕はあなたを思出してどんなにあなたに會ひたかつたか知れない。あなたに會つて、僕の罪をお詫びしたい

と思つたのです。」
高史はかう云つて、一寸青空を仰いで、それからまた房子の顔をじつと見て云ひ續けた。
「けれど、また考へ直しました。僕があんなに綾子さんの後を追うて行つたり何かしたのも、要するに僕の畫に對する熱心が足りなくて、昔ここであなたと誓つた事を忘れてゐたからだと……だから、これからは一生懸命に勉強して、以前の不勉強を取り返さう。そして一人前の畫家になつてから、あなたにお目にかかつて、お詫びをしようとね……それで僕はまた東京に出ては行きましたけれど、わざとあなたのお家をお訪ねしなかつたのです。」
こんなに話しながら、二人は沼の方へ下りて行つた。歩きながら、高史は時々房子の方をかへりみては、その計畫を――美術學校を卒業したなら、直ぐにこちらへ歸つて來て、家の農業の監督などをしながら、田園畫家として、靜かな生活をするつもりだといふ事などを話して、
「僕は都會が厭なのです。都會にゐると、心が荒んで、間違つた方へ走りがちですから……」と云つた。
「ほんとにさうですのね。都會よりも田舍の方が、どんなに淸らかで、靜かで、本當の生活が出來るか知れませんわ。」
と房子も同感した。
「さうですとも……たとへばあの空を御覽なさい。都會の空はこんなに淸らかに澄んではゐませんよ。この空の下で、僕は僕の仕事を完成するつもりです。あなたも時々遊びにいらして下さい。」
「ええ、まゐりますわ。わたしも田舍に住みたいと始終思つてゐるんですもの……」
「さうですか、あなたも……」と云つて、高史は嬉しさうに、感謝するやうに房子を見た。二人は目を見合せて、そこに立止つた

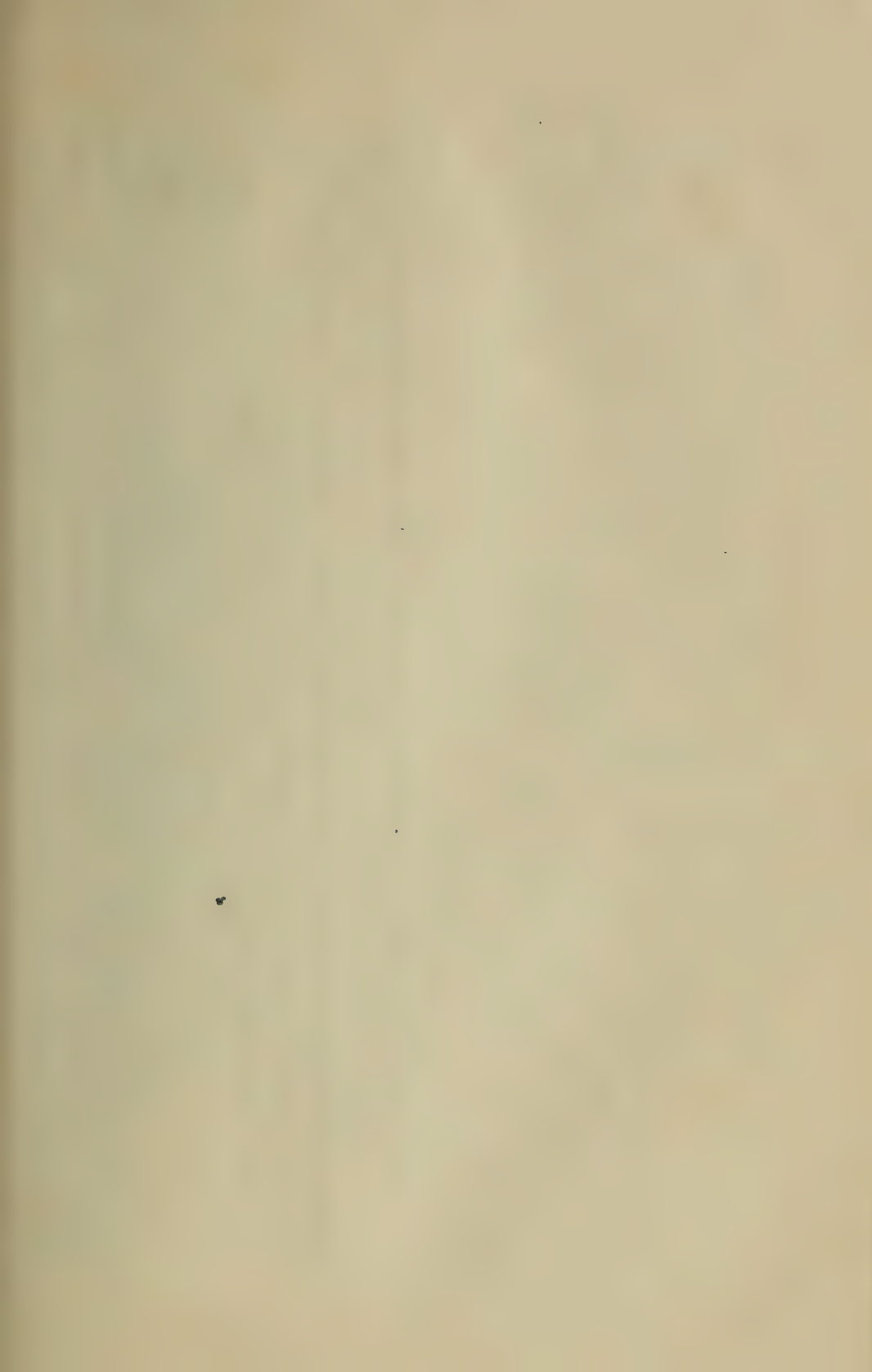
× × × × ×

美術學校出の秀才、山本高史の名が、人の口に屢々のぼるやうになつたのは、それからまだ幾年と經たないうちの事であつた。彼の力作『いとなみ』は、帝展で評判になつて、佛蘭西のミレエの面影のある田園畫家としての彼を、世間に顯はした。けれども、さうした世間的名聲に頓着しないで、沼の畔りに隱れて、農民の友として、愛する農民の生活を描いて倦む事のない彼の謙虚な生活は、一部の人から非常に尊敬されてきた。

然し、かうしたつつましい寂しい藝術家の生活も、青葉ばかりの庭園を彩る一叢の薔薇の花のやうに、傍らにより添うて離れる事のない、彼の愛妻の美しさと、やさしさとによつて、樂しい華かな彩りを加へられた。そして、その愛妻といふのは、房子その人に外ならなかつた。彼女は昔、高史に誓つたやうに、音樂家としては立たなかつたけれど、高史の畫室の隣りには、一臺のピアノがおかれて、彼女の奏でる妙樂が、どんなに良人の筆を生動せしめるか知れないのである。

彼等の憧れた空色の國は――この青い空と、この青い水との間に見出されはしなかつたらうかと作者は考へるのである。

母を慕ひて

一

樹々の茂りのために、この頃重苦しいほど蒼暗く濕つて見える庭の面には、小さな水溜りが二つ三つあつて、その小さい水の中に草の芽が二三本づつ立つてゐるのが、何となく柔かに心に沁みるのであつた。

石燈籠の立つてゐる庭の一隅にはかなり莖のふとつてゐる藤が伸び上つて、梅の樹の枝と、その隣の槇の樹の枝とを、氣儘勝手に、身の支へにして、伸び放題に伸びてゐる。

「いつの春だつて、この藤の花を見たことがない。一體いつこの藤の花は咲き出すのだらう……」

恭子はさびしい浮かぬ顏をして、このふるめかしい、暗い庭園を、あちらこちらとあるきまはりながら、この頃は、何を見ても、それが腹立たしくかなしかつた。

恭子は若い娘の身として、何がなしに華やかな賑やかなことが好きでもあるし、晴れやかに澄み切つた青空のやうな、快活な、無邪氣な、明るい、その日その日を送りたくもあつたが、今の境遇をかへりみると、どう考へて見ても無氣力な、疲れ切つた、まるで息詰りさうなこのさびしい周圍の中から、自分自身を救ひ出すだけの力はないやうに思はれた。

「こんな古朽ちた家の中に七十いくつになる祖父母と、何にも知らない三人の弟、それも年のゆかない男の子と住んでゐるのだもの、何で、樂しいものか！　何で、滿足が出來ようか！　かうして、この陰氣な庭を見ながら、いつまでもいつまでも、悲しい思ひをして、來る日も來る日も同じ沈滯し切つた氣持で生きてゆくのが私の運命だといふのなら、そんな運命なんか少しも有難くない、根こそげ打つちやつてしまつてやる……」

縁側に腰を投げやりにかけて、じつと庭の方に向いて、いつもの癖で、兩手でその顏を、こめかみのあたりで押へ

て、彼女はひとりでさんざん悲しんだり、怨んだりするのである。かうしてゐると、恭子はいつも、この暗い古い家から、にはかにその影を消してしまつた自分の母親――母親といふ名は、もう法律上呼ぶことをゆるされない一人の女の、その罪に陷つて行つた心持の佗しさやるせなさを、しみじみ思ひやる事が出來るのであつた。

恭子の眼には、色の白い、身丈もすらりと高く、その上、身體全體の肉附の豐かな、目鼻立の鷹揚に整つた、いつも黑い髮を丸髷に結ひ上げて、紫の手絡なんかかけてゐるので、誰れの眼にも三十前後にしか見えないで、美しい、美しいと評判されてゐたといふ、自分の生みの母親を容易に思ひ浮べる事が出來るのだ。母の出て行つたのは、恭子の十五の春の暮れであつた。その頃はまだ子供のこととて、ただ祖父母が澤山の人達に取り圍まれて、泣いたり、怒つたりしてゐた事や、毎年夏の休みに一度しか歸つて來ない父が、慌しく朝鮮から歸つて來て、眞蒼な顏をして、座敷にすわりきつてゐた事やが、鮮かに、しかし、とりとめなく思ひ浮ぶのである。

美しい彼女の母親は、年に一度しか歸つて來ないその良人とは、どういふものか氣が合はないでもう子供の四人もある仲でありながら、その間柄は、どちらかといふと、冷かな方であつた。そもそもが、養子緣組で、いや應なしの結婚であつたからだ。當時には非常に突飛にさへも思はれた女學校教育を受けて、從つて氣位も高かつた家附の娘である彼女は、氣がすすまないのを、どうする術もなくなつて、そんな夫婦になつたのであるが、表面は睦まじけに見せて行つても心の底はどうする事も出來なくて、たうとうそんな取り繕ろひを持ち堪へられない時が來たのであらう。――その上、家の格式のいい割りに、十分の財產とてはないので、世話する人のあるにまかせて、父親が內地よりも收入が多いからと言つて、朝鮮の大邱にある某會社の出張店に勤めに出向いてしまつてからは、家の中はひつそりとしてしまつた。良人がゐなくなつてから、妙に快活になつた母親は四十といふ年齡が近づくにつれて、惱ましい肉附の美しさを見せて來た。そして、こんな陰氣な、古朽ちた家で、その日その日をつれづれに送つて行くことを、いか

にも物足らなく、苦しく佗しく覺えはじめたことが、その立居のはしはしにも現れ出したのである。

家の主人がこんなに始終留守なので、訪ねてくるものは、親類の者か、出入の植木屋か、でなければ、すぐ附近の交番の巡査が、老人との茶飲話に來る位のものであつた。山梨といふその廿五六の美髯をたくはへた若い巡査は、時時やつて來て、庭の方へすぐに廻つて、緣側に、服の埃を手ではらひながら腰をかけて、その時々の世間話をしたり、時には、老人と碁將棋をうつたりして、愛嬌よく、人をそらさぬ交際をしてゐた。恭子は外から歸つて來た折などに、この山梨巡査を度々見かけたのではあつたが、少女時代には妙に巡査といふものが、憚られるやうな、馴染みにくい感じがして、ついぞ一度も馴れ馴れしくはせず、ただ遠くから、その母や老人たちと氣輕に話しながら、團扇をつかつたりしてゐるのを見てゐた位のものである。

山梨巡査には、年の若い細君があつた。不幸にも、その細君が病身で、大方里の方に歸つてゐたので、いつも家内をもつなら身體のたつしやな女でないといけない、私のやうな目にあふからと冗談ともつかず、愚痴ともつかぬことを言つて、笑つたやうに、恭子は覺えてゐる。

古い屋敷町のそこここに咲き亂れてゐた櫻の花も散つて、春も行かうとするなま暖い或る夜の夜中に、母親がどことも知れず姿を隱してしまつたときに、それと一緒に連れ立つて駈落をして行つた若い男が、山梨巡査であつたことは、その翌朝に、すぐにわかつた事であつた。老人達は、山梨巡査をすつかり信用して、たのもしがつてゐただけに、その憤りも一層であつた。それから事件は面倒になつて、駈落をして行つて落着いた先きが東京だと分つてから、もすこしで訴訟沙汰にもならうとしたのではあつたが、家附の娘であるのと、その上こんな不名譽な事實を世間にさらしたくないとの恭子の父のたつての主張から、次第に妥協が出來て、離婚の上、彼女の籍は、その細君を離別した山梨巡査の方に送られたのである。

「淫奔な母親」をもつてゐる娘としての、世間に對する遠慮氣兼は、これまで恭子の、いやといふほど味はされた苦しい氣持である。彼女は女學校で、修身の時間などに、女の貞操について、教師の謹嚴な講話がある度びに、前後左右から、皆が自分だけを見守つてゐるやうな氣がして、こんな恥しい思ひをする位なら、いつそ死んでしまつた方がどんなにいいか知れないと、思はずにはゐられなかつた。

母親が自由の世界に走つたことは、娘の心持に重い束縛となり、母親が氣儘に生を享樂したことが、娘にとつては、生に對する呪咀とならずにはゐられなかつた。市の東南にある港に、朝夕の汽笛を、空高くボウ……ボウ……と鳴らす汽船の事を考へると、恭子は母親が若い男と手をにぎりあひ、ヒソヒソと囁き合ひながら、その長い棧橋をわたつて、仄暗い船室に潜り入る淺猿しいイメエジを、追ひ拂ふ事が出來ないのである。どんなに考へて見ても、あんた年をして、墮落なんかした母親は、淺猿しかつたけれども、どんなに淺猿しいとさげすんで見ても、彼女のたつた一人の母親に對するなつかしさ、慕はしさは、もみ消してしまふわけには行かなかつた。母親のことを考へると、何がなしに胸が苦しくなつて、涙がこぼれさうな氣持になつてくるのであつた。

女學校を卒業して、もう一年近くかうして家で縫物や、家事をしてゐる恭子には、時々、結婚の話も持上つたが、いろんな意味で、まだ一度も、本當に、家族の間で眞面目な問題として考へられたことはなかつた。今の家の事情として、恭子を嫁にやるといふわけにも行かない、養子をとるといふわけにもなほ更ら行かないのであつた。それには彼女の母親のこともついて廻つた。

「自分はこのさきざき、どんなになつて行くだらう……」

若い娘の前途に對する不安の心持は、恭子には、とりわけ重くのしかかつて來て、その問題を考へる毎に、暗い寂しい、たよりない、滅入るやうな氣持になると共に、どうでもなれと言つたやうな反抗的な氣持にもなるが、またそ

の後から、人戀しさ、人なつかしさ、誰れかにすがりついて思ふさま泣いて見たいやうな心持も湧き上つてくるのであつた。そんな時には、きまつて母親のありし日の面影をなつかしく偲び出し、母親をそんな罪深い境遇に誘つて行つた山梨をさへも、憎いとは思へないばかりか、母がそんなにまで慕ふやうになつてしまつたのは、屹度彼にいい美點があるからに違ひないと思はれて來て、この二人があんなに世間の人の口から、嘲られ、さげすまれてゐるのが、いたはしくてたまらないのである。

恭子は長い間悩みに悩んだあとで、たうとう大決心のもとに、東京にゐる母親に宛てて長い長い手紙を書きはじめた。母親の住所は、叔母の家に來てゐた書狀で、もうとつくから知つてゐたのである。彼女はその手紙に、今の境遇の佗しく悲しい事、一度上京したい事、暫くなりとも母上の傍らで暮して見たい事などを、あはれになつかしく、こまごまと、書きしたためたのであつた。

「なんの理解もない、因襲に囚はれた世間の人達は、母上樣に對して、ずゐぶんひどい惡口を申しますの。聞くにたへないやうな事を申しますの。そんな同情のない、口さがない事を聞くまじとすればするほど、なほ聞きますので、私の心は、ただただ陰鬱にのみなつてまゐります。毎日毎日、私は青葉の生ひかぶさつた、花一つ咲かない暗い庭を眺めては、わが身の不運をかこち、佗しい日々を送つてゐますわ。私はお父さんの不幸も考へますし、お母さんの不幸も考へます。そしてこんな老い朽ちた廢屋のやうなところに、生き甲斐もない日を送る自分の若い日の不幸を考へると、何とも知れず憤ろしくなりますわ。世間の人に言はせると、こんな不幸は、みんなお母さんのなすつた事から來たのだと申しますけれど、私はさうとは思ひませんの。誰もわるいのではありませんわ。誰れの心も、神樣のお眼から見れば、おんなじものだと私は考へますの。そしてみんな神樣のお眼からは同じだと考へる度に、お母さんに遠く離れてゐることが、大變な間違ひのやうな氣がしますの。これまでは私の心は、あまりにお母さんから離れすぎてゐ

たやうな氣がします。これからは、もつと度々おたよりもいたしますわ。近いうちに、東京へ行つて、お目にかかり、しばしなりとも、近いところで、お話もいたしたいと考へます。お母さま、どうぞ寂しいあなたの娘のことを思つて下さいまし。そして、おやさしいお返事をお惠み下さるやうねがひますわ……」

恭子は丈なす手紙をくるくると巻いてゆくうちに、涙ぐましい心持やら、安心したやうな心持やらを覺えるとともに、また母がこの手紙を讀む時の複雜な心持を想像したりして、寂しい微笑をたたへずにはゐられなかつた。

手紙の封をしてから、彼女は大變な事を忘れてゐたのを思ひ出して、又もや封を破つて、「この手紙の返事は、匿名『大塚みよ子』といふ名で下さるやうに、これは私の友人の名ですから、誰れに見られても辯解は出來ますから……」と書き足して、急いで封筒に入れたのに、新しい墨をふくませた筆で、――東京市本所區△△町△△△番地、山梨康子樣と、宛名を書いて、自分の母親の名前を、こんな風に他人がましく書いて見なければならないのを、今更のやうに物佗しく思つて、暫くはその裏書をためつすかしつ見てゐたが、誰れにも見付けられないうちにと、古い庭下駄をつつかけて、庭口から柴折戸の方にまはつて行くと、玄關脇の小部屋の日あたりのいい緣で、もうすつかり頭の白くなつた祖母が、眼鏡をかけた鈍い眼で、ごそごそいはせながら、孫の汚れた着物の幾枚かを、根氣よく解いてゐる、皺枯れた小さい屈まつた姿が見えた。耳はもう遠いのであるが、眼はわり合にはつきりしてゐる方で、臺所の仕事でも何でも、ゆつくりゆつくりと、その老いた腰を屈めながら、氣長に丹念にやつてゐるのである。そんな樣子を見ると、恭子はこんな痛々しい人達をよそに振捨てて、どうかして上京したいと、その機會ばかりをねらつてゐる自分の野心――その我儘な自分勝手な心持がひどく、憎々しく思はれるので、胸が苦しくなつて、目をそむけて、一思ひに門を出て行つた。

二

どんな返事が來るかしら、それとも何とも言つて來ないのぢやなからうかなどと、まるで戀人にはじめて意中を打ちあけた娘のやうな、そはそはした心持で、恭子が落着かぬ苦しい數日を送つてゐた時、或る朝、弟が、

「姉さん、お友達からお手紙だよ。馬鹿に厚い手紙だよ。」

から言ひながら、「旅より、大塚みよ子」とある手紙を持つて來て、にやにやしながら、

「僕が讀んであげようか。」と言つて、差しのぞくのを、

「いいわ。そんなおせつかいをしなくつたつて……」

かう言つて見て、その手紙が、自分達の生みの母、弟にとつてもただ一人しかない生みの母の手紙だと思ふと、見せてやりたいに限りはないのであるが、今が今、それを言つてやつて、萬一それが祖父母の耳にでも入らうものなら、一波瀾持上らずにはすまない事が、十分に分つてゐるのでそれを我慢した。祖父母とても、自分の生みの娘のことなれば、腹の底をわつて見れば、なつかしい、可愛いい、可哀さうの情は並々ならず、それが互ひに、來る日も來る日も、老いの日の悲しい祕密となつてゐて、二人きりの夜の物語には、互ひにそれとなく間接な言ひ方をしては涙をそつと拭ひはしても、表面には、どこまでも踏みつけにされた養子への固い義理を立て通して、あの夜以來、ふッつりと娘の名一つ言いはない位である。

恭子は母親の手紙を自分の部屋に持つて歸つて、胸をとどろかしながら讀み出した。美しいお家流で、行と行との間をゆつくりとあけて、春の野のいささ流れの水のゆくへのやうに書き流した、その母の手紙を見ただけでも、その時分にはまだ珍らしかつた進んだ女學校の教育を受けた彼女の教養が窺はれるのであつた。その手紙には、この度突

然の手紙は、思ひがけぬので驚きもしたが、驚きとともに、非常にうれしかつた事、自分の罪のために、そんなにも可愛いあなたを苦しめてゐる事は今迄にも十分知つてゐて、蔭ながらわびてゐた事であるが、今更にその感じを一層深くした事、思つたよりもよく理解してくれた事がうれしくて、泣かずにはゐられない事、あひたい事は山々であるから、いつでも來られたら來てほしいと思ふのであるが、昔かたぎな御父上にはどんなに言ひつくらふつもりであるかなどと、こまごまと書いて、その下に、山梨も恭さんからの來書を大變よろこんでゐると書き添へてあつた。

恭子はこの手紙を幾度もくりかへして讀んで、やさしい母親の息吹を、あたたかに顔に受けるやうな喜びに浸つたのであつた。それから、いろいろと、小さい胸一つに、權謀術策をめぐらす段取りとなつた。まづ彼女の考へた事は、東京に祖母の一番すゑの妹で、年頃は母親よりは一つ年下の大叔母が牧師の奥様になつてゐるので、その大叔母にたのんで、一年程の間、東京の割烹女學校の講習を受けたいといふ事であつた。彼女は祖父にむかつて、その女學校の講習を受けて歸れば、家にゐて、割烹教授をして立派にやつてゆけるからと言つて、それから何回となく、遊學の許しを求めると共に、一方では、朝鮮にゐる父親のもとに手紙を出して、家計も苦しいし、御父上にいつまでも苦しい思ひをかけるのも心が咎めるので、一年だけ東京の遊學を許していただいて、修學後は必ず家に歸つて來て、それでいくらかでも家計をたすけたいと申し送つたのであつた。父親からは思つたよりも諒解のある返事が來た。萬事大叔母の家で面倒ながら保證人になつてくれるなら、折角の決心ゆゑ、學資は自分が都合するゆゑ、よく勉强するなら許していいと云つて來た。父から同時に東京の方へも云つてやつてくれたと見えて、東京の恩田牧師からも手紙が來て、東京には、今は他人となつてゐるが、生みの母がゐる。然し世間の義理から自分も一切出入りはしてゐないのだから、恭子が來ても、決してその母をたづねないといふ事を約束して貰ひさへすれば、安心してお世話をするからと云つて來た。恭子は萬事がすらすらと搬んで行くのが嬉しかつた。彼女は年とつた祖母に、又もやもう一年臺所やいろんな

事をふりまかして行くのがすまないので、「お祖母さんにはほんとにすみませんけれど、私も今が大切ですから、どうぞ我慢して出して下さい。一年といつても直ぐですわ。それに休暇もありますから、その時には歸つてまゐりますからね……」と、祖母の汚なくなつた眼のまはりを見ながら言つた時、祖母はショボショボしながら、

「朝鮮のお父さんと、お祖父さんとが、いつてもいいといつてゐるだけん、わしもいいと思ふわナ。家の事はまだ一年や二年、わしには出來るに、心配しなくてもいい、だけれど、東京で『あれ』をたづねて行つては、第一お父さんに義理がすまんぞ。途中でひよツこり逢ふ分はかまはんが、それとても、話などせんがいい。『あれ』は不埒をした人間だ……おまへも母だもん、逢ひたからうが、そこが世の中の義理がさうはいかんのだ。それを守つてくれんと、お祖父さんが立腹して、わたしが困るぞえ。」と、幾度も幾度も繰返す事によつて、その心細い感情を慰めてゐるやうに見えた。

恭子は祖母があはれであつた。彼女は萬事首尾よくすすんだ事を母親へ書いて送る時、この祖母の言葉をつけ加へる事を忘れなかつた。

「こんなわけでありますから、私はお國を來る五日にたちますわ。そして大叔母さんの家には十日にたつと申し送ります。するとなか五日あります。この五日の間、お母さんのお手許にをらせて下さい。さうすれば、恭子は一生のたのしい思ひ出として、いつまでもいつまでも、感謝いたしますわ。山梨さんへは、お母さんよりよろしくお取りなし下さい。そして東京着の時間は、お知らせいたしますから迎へに出て下さい。どうぞ、よろしくおねがひ申上げます。」

恭子はこの手紙とともに、東京の郊外の大叔母の家には、十日に出發するが、出迎へはなさらないやうにと書いて、二つの手紙をいそいそしながらポストに入れた。彼女はほんとに嬉しかつた。牢獄から解放される人のやうに、ただもう單純に喜んだのであつた。

三

汽車が箱根あたりへさしかかつた頃、もう夜闇は深く、軌道のかなたこなたに見える小驛の灯が旅なれぬ恭子の心を哀愁に引き入れて行つた。彼女は今や刻一刻東京に近づいて行くといふ事が、たまらないほど不安でもあり抑へきれぬほど嬉しくもあり、妙にヒステリカルになつて、嘆息をつづけざまにした。電報を打つてあるので、母親が驛まで出迎へに來てくれてゐるのは、間違ひのない事に思はれれば思はれる程、今、四五年振りに相見る母と娘との邂逅が、ひどくロマンテイツクなものに思はれて、涙ぐましい氣持がすると共に、顔など見忘れてゐては大變だと、今更にそのかみの母の面影を心に描き出したりして、心は頻りにわくわくするのであつた。

「何處でお降りになりますか？」

恭子は隣の紳士からから問ひかけられて、ハッと顔をあからめた。この紳士は京都から乘り込んだ客で、どんな身分で、何の職業の人かは知らないが、妙に生溫かい眼付で見やつては、時々いろんな事を簡單に問ひかけたりたのみもしないのに、途中で買つた『ニコニコ』といふ雜誌を「讀んで御覽なさい。」と言つて貸してくれたりした。恭子は長い長いトンネルを通過してゐる時、この客がわざと寢た振りをして、自分の身體にもたれかかつて來た時には、つと立上つて、その男の重みをはづしてやつたのであつた。彼女は一人旅の女の身が不安であつた。萬一、驛に母親が迎ひに來てゐなければどうしようと考へると、擔ひ切れない心配を感ずるのであつたが、さり氣もない風をして、無遠慮に聲をかけた紳士には、何の意味もなく會釋をしたのみで、ハンケチをとり出して、煤煙のかかつてゐる額をそつと撫でた。

乘客は次第にいろめいて來て、神奈川驛まで來ると、もうみんなは、生々と蘇つたやうな顔をして、ゐずまひを直

して、荷物を引寄せたり、窓から顔を出して、もう初夏らしい野風、海風を吸ひながら、東京を待ちのぞむやうに、驛々の灯を讀んだ。

「あなたのお荷物を持つてあげませうか。私も東京驛でおりますから。」とさつきの紳士は、こりずに又もや親切ごかしに申出た。さまで澤山の荷物ではなかつたが、女の手としては十分な重いトランクを二つも恭子は持つてゐたのである。

「いえ、私一人で持てますから……」

かう言つて恭子が外を見た時には、もう轟々たる音とともに、汽車は停車場に近づいて行つた。

恭子はわざと乘客の一番あとから車を下りて、カラカラと乾燥した音のするコンクリイトの上を氣恥かしいやうな氣持で歩き出すと、直ぐ傍らに四五人立つてゐた人の中から、セルのひとへにもうかなり弱つた絹の羽織を無雜作に着流した中肉中背の男が、つかつかと寄つて來て、

「恭子さんぢやないですか？」と聲をかけた。

「はい……さうでございますが……」

氣おくれがしたやうに、恭子が返事をすると、

「ああ、見附かつてよかつた。實は『あれ』は今日風邪でね。どうしても出られないので、僕が來たのですが、あなたの顏をよくは知らんので、見分がつかんかと思つて、實に心配でした。」

親切さうな神經質な樣子で、その男は恭子を迎へて、二つのトランクを手にとつて、

「さあ、出て行きませう。ついておいでなさい。」と促した。

恭子はじつと見られると、その眼に、何か魔力でもあるかのやうな氣がして、從はないではゐられなかつた。

山梨のいかにもこんな場合に慣れ切つたやうな歩きつきには、彼の巡査といふ職業を思はせるやうな或る調子があつた。そして、かうして恭子を連れて歩くのが、いかにも勝利であるかのやうな欣然とした顔付をして、にこにこしてゐるのが、恭子には妙に眩しいやうな、壓迫されるやうな氣持であつた。

恭子は母親が來てくれてゐなかつたのが、何とも言へず佗しかつた。母親さへ來てゐてくれればあの緊張したままの心持で、どんなにか感激した氣持で、その親子のロマンテイックな邂逅を感謝し得たか知れないのである。

「ほんとによく來てくれましたですナ。」と山梨は、停車場前の寂しい廣場で、二人きり遠い電車の走る灯を見ながら歩いてゐる時、大きい聲をかけた。

「『あれ』も喜んで、今日は一日ゴタゴタ何か支度をしてゐましたよ。ほんとにいい都合だつた……」

山梨のかういふ言葉には、種々な立場からものをいふので、混亂したものがあつた。妙に、父親が幼ないものに向つて言ふやうであつたり、また從僕が主人のお孃さんに向つて何か氣遣はしげに言ふやうでもあつた。

一臺ばかり滿員の電車を見送つて、やうやう乘つた電車には席がなかつたので、二人は並んで、吊革を握つた。車體が動く度びに、その吊革が搖れて、山梨のモヂヤモヂヤ毛のはえた二の腕が、恭子の眼の前であらはになつた。それを見ると、恭子は何がなしに、あるショックを感じた。いやな、いやな氣持である。

彼女は母親ばかりでなく、自分もまた、この山梨のために、生みの父親、祖父母をふり捨てて、邪まの道に出奔して來たもののやうな氣がして來て、急にこんな處にこんなにしてゐるのが、飛んでもない事のやうに考へられて、心は苛責の針でチクチク突つかれるやうである。朝鮮の父がもしこれを知つたならば、どんなに苦悶を感ずるであらう。父にとつては、怨す事の出來ない仇敵と、こんなに親しく連れ立つて歩いてゐる自分を、父はゆるす事が出來るであらうか……たとへどんな事があつたとて、この八字髭をはやした、色の白い、妙に取りなしのもの柔かな、媚のある

眼をした男に――自分の母親のみそか男に、自分がこんなに接近して、ゆるして、親しんで……

「ああ、これは何といふ淺猿しいことだらう……」

彼女は東京に着く迄思ひもかけなかつた、山梨に對するこんな妙な複雜したなまなましいやうな感情に壓し潰されて、理性と感情との錯雜に、頭が重くなつてしまふ……何が何だか分らなくなる……「ああ、何が何やら分らない。」

恭子は國のあの陰氣な庭のある古い邸宅を思ひ出した。そこにゐるすべての人に對してすまないやうな心持がある。とりわけ祖父の立腹が考へられる。祖父がこの男をいかに憎んでゐるか、それを恭子は今迄に消す事も出來ないほどはつきりと知つてゐるのだ。

「この次で乘り替へますから……」

山梨はかう言つて、二つのトランクを足許に置いて、身體をふらふらさせながら、男くさい口の匂ひをそのあたりに漂はせながら恭子に目くばせした。恭子はうなづいて、一つのトランクを持上げようとすると、

「僕が持つからいい。」と山梨が制した。恭子はあかくなつた。

本所のゴミゴミした通りの町を、幾度も幾度も折れ曲つて、酒屋と理髮屋との間の露次を入つて行くと、右と左とに對ひ合つた五軒長屋の二階屋があつた。その家毎に、四五人の子供があると見えて、騷いだり泣いたりする聲がする。また、或る家の中からは、下手な尺八の音がするし、或る家の中からは、白い煙が矢鱈に吹出しては、まはりの空氣を濁してゐる。

山梨は先に立つて泥溝板を歩いて行つたが、その一番奧の家の前で、恭子の方を顧みながら、家の中に向つて聲をかけた。

「おい、戻つた……いい工合に見付かつたよ……」

障子が開かれたと見えて、中からの電燈の光で、パット浮き立つた山梨の神經質らしい、美髯をたくはへた四角な白い顔は、勝利者らしい幸福を、善良な微笑にたたへて見えた。それを見ると、恭子はもう何がなし、山梨を人がいいのだと思つた。

「さう……どうもありがたう。」かう言つて、中から女が半身を出した。櫛卷にした肩付の豐かな黑い女の影には、何だか、恭子を當惑させるやうなだらしないところがあつた。

「恭子……遠慮しないで入つておくれ。どんなに待つてゐたか知れないよ。」と、その年増女は、良人からトランクを受取りながらニコニコして言つた。

家の中……そこには、柱に三味線がかかつてゐて、その隣りに制服にサアベルがつるしてあり、柱の下の方には長火鉢があつて、鐵瓶がチンチンと鳴つてゐる……恭子は自分が闖入者であることを感じて、じつと佇んだ。

「見違へはしないかと大變氣を揉んだよ。おまへだと直ぐ分るんだが……僕は幼顔を一寸しか知らんからね・……でも、よかつた……」

「ほんとに、お世話さまでしたね……ほんとに、なんていい娘になつてるのね！」

子供の一人もない――一人出來た子が昨年の冬死んでしまつた――二人暮しの寂しさが、急に春にでもあつたやうに若々しい聲を出してそんなに言ひながら、トランクを部屋の隅へ持つて行く母の樣子には、格別何處といつて病氣らしい風も見えないので、そんなら出迎へてくれてもよかりさうなものを……と恭子は何だか怨みたいやうな氣持で、それだけ一層、この不馴れの遠い都のこの旅の空の自分の寂寞が毒々と、身に感じられて來て、寂しい淚をじつと抑へながら、埃にまみれた足袋をぬいだり、下駄を山梨の靴の並んだ下駄箱の上に片付けたりしてから座敷に上つた。そして、そこにきちんと置かれたメリンスの色の褪めた座蒲團の上に手をついて、前にすわつた母親を見ると、

面長な頬のゆたかな、いかにも派手な顔立の中には、想像してゐたとほりの母があつた。もう五十に近いと思はれない若々しさは、家出をした折りと餘り變つてもゐないやうな氣がしたが、こめかみに頭痛膏を張つたりしてゐる樣子の何處となしに、いかにも裏長屋のおかみさんらしい品さがつたなまめかしさが見えて、これがあの氣位の高かつた母――その頃まだ稀らしかつた女學校教育を受けて來た母かと疑はれる位であるけれども、その女がじつとこちらを見守つてゐる眼には一杯の涙がみなぎつてゐる……。それを見ると、恭子は思はず、

「お母さん……」と言つて、その自分を捨てて行つた昔の母親の前に手をついて、ホロホロと涙を流した。

美しきもの

滅びゆくものはうつくしく
うつくしきものは滅びゆく

斷章

一

この春、私は名古屋、岐阜での講演をすまして、そこからただひとり、同行の友人と別れて、西行の汽車に搭じて、絶えて久しい郷里への旅——十三年振りの歸省の旅にと就いたのであつたが、京都から更に山陰線の列車に乘り換へた私は、丹波、丹後の山深い小驛から小驛へと搬ばれながら、急に四圍の空氣が暗くなつたやうな感じがして、數へ切れない隧道の連瓦（つらなり）に目まで疲れながら、

「何といふ佗しい旅途だらう。自分の故郷の町は、こんなにも暗い寂しい山々や、隧道や、砂丘の彼方に埋れてゐるのであるか！　自分はこんな避遠の地に生れた人間であつたか！」と呟いた。そして今更のやうに、人間とその生れた土地との關係——土地から與へられる影響のいかに深甚であるかを思ひめぐらして、自分の陰鬱な、いつも引込思案な、消極的な性質なども、こんな暗い裏日本に生れたからでもあらうかなどと考へ沈んでゐると、やがて、地の果に、白く現れ出して、車窓に沿うてついてくる日本海の色までが、自分の陰鬱な生活の象徴のやうにさへ思はれたのであつた。

郷里、米子の市は、活氣に乏しい山陰道の多くの市街の中で、特に異色のある目ざましい繁榮ぶりを見せてゐることも、これまで聞いてはゐたが、今歸つて來て見ると、全くそれに相違なかつた。市の廣さは、私の少年時代のそれの二倍大にもなつてゐて、昔私が遊んだ廣い田圃ももうすつかり町になつて、その時分私の父が青い稻を刈らせて建

てた町外れの家も、町の中央になつて、もう隨分住み古されて、今は新炭問屋の家になつてゐて、後の倉――それは私達の酒藏であつた――は横に入口があけられて、そこに炭俵を擔いだ男が出入りしてゐた。筋向ひの講社ものんびりしてゐた境內を人家に蠶食されて、その廢れた祠が形ばかりを殘してゐると云ふひどい變遷の仕方である。

鄕里の人達は、どちらかといへば、久し振りに歸つて來た私に對して、冷淡ではなかつた。私は喜んで迎へられ、町の唯一のカフエーで、私のために一夕の宴も張られた。その歡迎會に送迎された自動車が町の本通りを疾驅するとき、私は兩側の記憶に親しい店舖を眺めながら、我が故鄕の更に繁榮せんことを心から祈つたのであるけれども、慌しい行程と、なほ別に目的とをもつてゐる私は、皆にもう少しゐるやうに止められたけれども米子の町にはたつた二日ゐただけで、大社行きの汽車に搭じて、私にとつて久戀の地、思慕の國――出雲の松江へと更に旅立つたのである。

出雲の國の、とりわけ松江の市、これは人も知る如く、裏日本に於ては最も美しい市街である。宍道湖にのぞんだこの古風な、松平不昧公の遺風がその儘殘り止まつてゐるかのやうに思はれる靜かな美しい市街には、市の北方に千鳥城がその天主閣を日に輝かしてゐるし、湖上には嫁ヶ島が畫上の一線のやうに浮び、ジユネエヴのモン・ブランの橋に比せられる大橋の上に立つて東をのぞめば、まるで、一幅の繪のやうに、彼方の靑空の果てに、出雲富士――伯耆の大山が、その端麗な山容を見せてゐる。橋の下を流れる大橋川から、ずつと湖上にかけては白魚が獲れる。まだ春淺い時候ではあつたけれども、旣に引上げられる四つ手網の中には、かの美しい少女の纖手の指にたとへて見られる白い小さな魚がその銀鱗ををどらせてゐた。私は卽興の詩を、此地の安來節の曲調になぞらへて歌つて見た。「松江大橋、四つ手の網に、白魚いとしや、四つ手の網に、わたしやあなたにすくはれる。」俗調であるとはいへ、これには私のいつはらぬ出雲禮讃の情が託されてゐるのだ。

この美しい市に於いて、私は幸にも、文學愛好の若い人々の招きによつて、大橋川に面した某の水亭で、忘れ難い

一夕を歡語の中に過す事が出來た。その時集つた十四五人の若い人々の中に、三人の女性がゐた。その若い女の人は、その地の女學校の生徒と、少し離れた村の小學校の女教師と、去年東京から歸つて來て、今は病氣療養中であるとかいふ女子美術の人とであつた。

この女子美術に行つてゐたといふ人が、三人の中では一番美しい人であつた。他の二人にくらべると、肩付がほつそりしてゐて、色が白く、腺病質なその楚々とした體格のもつてゐる、一種の病的な痛々しいやうな美が、見るものの眼に、不思議な感銘を殘さずにはおかない。殊に、その黑漆の一双の眼は出雲の女にとりわけ懷かしく見出されると云はれる、あの溫柔な感情の過剩を洩らすやうに、しつとりとうるんで、その小さい口元は、まるで柘榴の花のやうに鮮かに見えるのである。私は出雲の國が美人國である事、美しい女の多い事を聞き知つてゐたが、汽車の中でもさうした女を見かけず、市でもさして目にとまらなかつたので、單に、それは傳習の言葉に過ぎないのかも知れない位に思つてゐた。然るに、今自分と同じ席上にゐるこの若い婦人に、こんなにも典型的な出雲美人を見出したのであるから、女性を性的な興味でのみ見て恣まに品評するやうな、或種の文士、小說家達の傾向を厭はしく思つてゐる私ではあるが、かうした美しい楚々たる姿を傍らに眺めて、この人の生活や性格などを想像してゐると、あだかも、芳香馥郁たる花の呼吸の中に漂ふやうな思ひをし、自分の愉悅の的たる出雲の國の精靈が、さながら現身に見出されたかのやうな滿足を覺えたことを正直に告白しておく。

やがて記念の寫眞を撮つて、皆がすつかり打ろくつろいだ氣分になつた時であつた。この夜の幹事の一人である井上芳郎といふ靑年が、水にのぞんだ障子のところに、二人の女の人と愼ましくすわつて、他の人達の聲高の話をしづかに傾聽してゐた美しい彼女に聲をかけた。

「澤井美佐緒さん。あなた、何か先生におたのみしたいと言つてゐた事がありましたね。今おたのみなさるといいで

せう。」
かう言つた井上の言葉は、その持前の優しさから、女達の手持不沙汰をとりなしたものである事はいふ迄もなかつたが、澤井と呼ばれた彼女は、心持はにかんで、その黒目のつやつやしい瞳を、丁度美しい贈物でもささげるやうに私の方にそそいで、
「……お差支はございませんでせうかしら……もつと、後程でも宜しいのでございますが……」と控へ目に言つて、ものなつかしく會釋して、微笑んだ。こんな眼付と、こんな淑かなとりなしとは、私に十分の好感を與へた。私は默つてゐてはすまないやうな心持となつたので、今さされた一つの盃を下において、
「どうぞ、おつしやつて下さい。」と言つた。
「ほんとにすみませんけれど……私は一寸書いていただきたい詩がございますの。先生の詩ですの……」
彼女は立上つて、私の横の方へ來た。そして、その懷から、緋縮緬の包を出して、その中から白い大幅のリボンの一尺位あるのをそこにひろげた。そして、その白いほつそりした手で、自分の膝の衽(おくみ)の縫ひ目などを、そつと撫でるやうにしながら、
「(少女子は人を怨まず、たかぶらず)といふあの先生の抒情小曲を書いていただきたいのでございますわ。私は大變その小曲が好きでございますから……」とやはらかで、しかも滞らかな聲で、靜かに言つた。
「書いてもいいのですが……」と私は言つて、見るともなく彼女の美しい首のあたりに目を漂はせながら「私はあまり上手ではありませんから、實は、今度の旅でもそれには困つたのですが……」と言ふと、傍らにゐる井上が言葉を添へた。
「なに、そんな事はありますまい。書いてあげて下さい。實は、僕等もその後でみな書いて頂きたいと思つてゐるん

ですから……」と言つて、彼は後の大きな床の間のはしに置かれてゐる、色紙や短册の包を手を差しのばして取り寄せたのである。私はことわり切れないで、それではといふと、井上は傍らにゐた靑年に、筆墨の用意を女中に命じてくれるやうにたのんだ。私は名古屋や岐阜などでも、さんざん弱つてしまつた經驗を思出し、今度東京へ歸つたら本式に字を勉强しようゝ思ひながらも、硯が來て、井上が墨をすつて、その白い筆の新しい穗先に工合よく含ませると、それを受取つて、白いリボンの光澤のある布地の上に、

（少女子は人をうらまず、たかぶらず、ことにふれてはただ泣くのみ、少女子なれば）

と平假名を多くして書き流した。

「まあ、綺麗ですわ。」と、女子美術に入つて、繪心のある彼女は、心から鑑賞するやうに言つてその白いリボンを引寄せて、うれしさうに見てゐたが、それを傍らに來てゐる二人の女に渡してから、も一度私に禮を言つて、むかうの席へかへつて行つた。それから私はかなり澤山の短册や色紙に、思ひ出すまま、自分の詩を、こんなに書けば少しは字もうまくなるだらうなどと思ひながら、次ぎ次ぎに書き流して、やうやくその責を果した時分、眼を上げると、三人の女はもう歸り支度をしてゐた。

「あまりおそくなつてはいけませんから。」

このやうに言ひながら、彼女達はもう一度私のところに挨拶に來たが、かの澤井美佐緒は人なつかしい中に一種の哀感のこもつてゐるその眼をじつと私に向けながら、私の出發の日を聞いてその時はお見送りしたいなどと言つたあとで、

「ほんたうに寂しうございますわ。またいつお目にかかれませう……」と、心から寂しさうに言つた。そして二人の同伴者が席を立つと、一番最後に、彼女も、今はもう又とは（たとへ私が再び松江の市を訪ねたとて！）相見る事の出

來ない、しかも永く忘れる事の出來ないその美しい黑漆の一双の眼を、これを限りに、惜しみなく、私に見せてくれるものの如く、やはらかな視線を殘して、彼女もまた立上つて、部屋から外へ出てしまつたのである。

女達がゐなくなつてから、靑年達はあたかも解放されたやうに、今はもう一味の遠慮もなく、夜の更けるまで、自由な華やかな若々しい話に興じ合つたが、會が終つて、この水亭を出て、宿に送られて歸る道すがら、私はなにゆゑともなく、時々振返つて、水上に浮く料亭の明るい灯に、かの黑漆の瞳のうるんでゐる事を思ひ出さずにはゐられなかつた。

「さつきの澤井さんですがね。」と、ほんのりと醉つて上機嫌になつてゐる井上は話し出した。

「病身ですから、とても今夜は來ないだらうと思つたんですのに、よく出かけて來てくれました、やつぱりあれが書いてほしかつたのでせう……」それから彼は聲を少し低くして、

「それにあの人には、今一つ込み入つた事件があつて、大變煩悶してゐるやうです。私も詳しい事は知りませんが、よくある通り、ブロオクン・ハアトの悲しみです。その相手は僕の友人だつた男ですが、どうもその男がよくない男でしてね。現に今晩も、その男は……西岡といふ男ですが、西岡は私がこの歡迎會の發起人であると云ふだけの理由で、出席を斷つて來たのです。つまり、私があの女の人に同情をもつてゐるのを好まないと見えるのです。それに私の非難をも恐れてゐるからでせうが……」と言つた。私はこの井上の話を直ちに信じかねるやうな心持で聞いた。私としては、今そこにゐたかの美しい少女が、既に心の破れ傷ついてゐる人であると思つて見るのは、あまりに苦しかつたのである。そんな事もあり得る事には思ひながら、彼女の生活をそんな暗いものにして考へるのは、私には堪らない事であつた。然し、かの感情の過剩を洩らす涙ぐましい黑い眼の示すものが、ただ處女時代に普通である單純な惱み、稚い感傷のあらはれに過ぎないとは、私には思はれなかつたのであるが……。

二

東京に歸つてから四五日目に、井上芳郎からの手紙が來た。それには、松江での旅寓がいかにあなたに感じられたかを訊いてから、我々はもつともつと歡迎したいと思つたのに、時日がなかつた爲めに殘念であつたと述べて、今度來られたならば、必ず附近の玉造温泉にもお伴をしたいし、嫁ヶ島にも渡つて、月夜には波の音、千鳥の聲に、この世ならぬ哀感の美しさに醉ひたいなどと、筆達者に書きしるして、その最後の一節に、あの水亭の會に列席してゐた澤井美佐緒さんが、あの夜歸つてから熱が出て病床にゐる事、彼女の戀人であつた西岡は、彼女をそんな病中におきながら、彼一流の嫉妬でいつまでも彼女をいぢめてゐる樣子であると書き加へてあつた。

私は澤井美佐緒のことがもつと委曲をつくして聞いて見たかつた。その戀人との複雜な關係などにも、心にかかるものが多いので、具體的な事實がもつと聞きたいと思つたのであるが、何事にでもさうであるけれども、とりわけかうした事件には、一層自分の心をこんなにも露骨に持出して行く勇氣が出ないので、格別、井上にたづねて見ようとはしなかつた。もし自分がたづねてやれば、どちらかと言ふと、彼は喜んで彼女について話したであらうと豫想したが、それだけまた、私の氣持としては、こんな好奇心が恥かしいものに思はれたのである。

水亭でうつした大きい寫眞が、十日目位に井上から送つて來た。どんなにうつつてゐるだらうと思ふと同時に、彼女は、かの美しい黑い眼の女は！　と私は思つて、心を動かされずにはゐられなかつた。表面を蔽うた薄紙をあけて見ると、一番前にゐる、私を取りかこんで、傍らに井上がすわり、その外の人達がおもひおもひにすわつてゐる。三人の女が後の眞中に立つてゐる。彼女は右の方にゐて、若い人の間に、やや斜めになつて、その半身をすらりと見せてゐる。優肩の樣子、ほつそりとした顏の樣子、そのままの彼女がそこに立つてゐるのであるが、惜しい事には、目

を俯せてゐるために、かの表情の深刻な、美しい瞳は見えないけれども、私には、これだけでも十分なのであつた。一度見たなら到底忘られないやうな彼女の瞳は、自分の眼底に殘つてゐる。

「病氣といへば、肺病なのであらう。さういふ體質なのだから……」と私は思つて、その美しくて悲しい、まだうら若い彼女の身をあはれに思つたのである。けれども、どんなに心を惹かれてゐるとはいつても、それは戀とは違つてゐた。もつとさうした「私」をまぜない愛のやうに私は思ふのである。それは私の生れもつての性癖である。美しくて脆くて哀しい凡てのものに注ぐ、一種の詩人的同情に基く愛なのだと思ふ。然し、若しかして、それが戀となつたとしても、このゆくりない邂逅の思出は、必ずしもこれを恥ぢるには及ぶまいと思ふ。

　私が彼女に書いてやつた詩は、自分でも好きな詩なのであつた。そして自分の好いてゐる詩を同じやうに好いてくれる少女の心に、自分の魂の反映を見出したことは、詩人にとつていかにうれしい慰めであらう！　あんなに望んで書かしたのであるから、彼女はいつもそれを手にとつて、かつ讀みかつ見とれする事がないとどうして云へよう。寂しい時、悲しい時、やるせない時、彼女の涙は白いリボンの上に落ちるであらう。「ただ泣くのみ少女子なれば」から口ずさむ時、彼女の泣きじやくりする美しい口元には、小さい靨ひがいつまでも止まぬであらう。かはいさうな少女よ、泣かないでくれ。幸福な日はまたと來ない事はない。病はなほらない事はないのだから。然し、泣く事は慰めになる。心の鬱積をやはらかに溶き流すものは涙であるから、泣くのはかへつていいことだ。それよりも泣かないで、暗い險しい考の中に自分を閉ぢ籠めてはいけない……私はもう又と相見るよしもないと思ふ彼女について、こんなに呼びかけ、こんなに感情的にならないではゐられなかつたのを、我ながら不思議に思ふ。

　然るに、ただその日だけの知己としてのみ考へてゐた私のところに、二週間もすぎてから、思ひもかけない彼女からの初めての手紙が來た。この時の私の心持を想像して見られたい。それは喜びに相違ないが、ありふれた喜びでは

ない。丁度今迄に見えないでゐる二人の間の何かのつながりが　はつきり分つて來たと云ふやうな、一種不思議な感動である。私はさうした心のどよめきの中で、急いでそれを開封して見ると、此頃若い女の好んでつかふ草花のカットのついた水色のレタアペエパアに書かれた文字は、絹絲のやうな美しい姿に見える。

「御歸京になりまして、もう長いお旅のお疲れもおなほりになりました頃と思ひます。御出發のせつは、お見送りもいたしませんで、病氣のためとは申しながら、まことに殘念でございました。それに折角遠いところから、こんな寂しい松江の市においで下さいましたのに、これと云つてお目を慰めるものもなかつた事を、何よりもすまない事に存じます。けれど、あの私達のためにお出で下さいました湖畔の水亭の一夜が、多少なりともお心をお慰め申し得たのでございましたらそんなうれしい事はございません。あの夜の會は誰れの心にもなつかしい印象となつたやうでございます。とりわけ幹事としてお働きになつた井上さんは、大變喜んでゐらつしやる御樣子でございます。私は、實はあの夜から風邪の心持で、打臥しまして、四五日の間は、何をいたしますのも醫者から禁じられてをりましたのでございますが、昨今は大分よくなりましたので、延引ながらおたより申上げます。寂しい病床の枕近く、私の心は、我身、我世、ともに悲しく、ともに憤ろしく、どんなにしてもまぎらし難い苛々しさにとらはれながらも、じつとそれを耐へる事によつて雄々しく生きて行かうと思つてをります。けれどこんなに思つて見ましても駄目なのです。身に病のあるものの心ほど、あてにならないものはありません。今まで靜かに歇など思つてをりましても、俄かに空のかき曇るやうに、陰鬱な、自棄的な心持となりますし、泣き濡れて怨みがましくなつてゐた心も、どうかすると、日がかつと雲の間からのぞくやうに、あはれな束の間の歡喜を感ずることもございます。ほんとに病氣のあるものの心は、七面鳥のやうだと思ひます。けれど今日はこんな事を考へて、自分を笑ひ得るやうな餘裕さへ出ましたから　嬉しうございます。今私は褥より離れました。久し振りに庭に下りまして、早春の小さい草の芽を垣根ちかく見出したり、日

向で白い鷄の親子が、ク、ク、となきながら、互に愛し合つて遊んでゐるのをうつとりとして見てゐたりするのが、かなり樂しい事に思はれて、我れにつれなき人の事も忘れてゐるのでございます。あの美しい夜のお目もじの折りに、書いていただきました詩は、いつも愛誦してをります。美しく生を終らうとする心持が、そのままにあの詩には現れてをりますか、つ女の身ながらも、人をも世をも怨まず、美しく生を終らうとする心持が、そのままにあの詩には現れてをりますから懷かしうございます。あの白いリボンは、自分の短かい青春の記念とする一二册の手帳とともに、私の死の寂しいふところに抱いて行かうと思ひます。こんなに申しますとさだめし異樣にお感じになるのでございませうが、私は人が死について本當に心から考へる時は、死は何とも云へず温かくなつかしいものであると思ふのでございます。病氣の人は、はげしい病苦をとり去つてくれるものが、死よりは外にないと考へて、死を待ちませうが、私のやうな、若い不幸な女にとつても、死こそは私の樂園であり、あこがれの夢でもございます。考へれば考へるほど、私は靜かな安息が、死より外にはないと思ひます。私といふものの見た人間の生活は、あまりに汚れてゐて、塵埃が多くて、私の弱い肺はそれを吸ふのに堪へませんの。どうぞ弱蟲といつてお笑ひ下さいますな。こんなに死といふものを待つてゐる、悲しみ破れた心持からかへつて、何の迷ひもなくなつて、死といふものにあこがれ、淸い死、華やかな死、靜かな死についていつも夢見てゐる一人の少女のことを、夕風そよぐ河邊に一つ仄白く立つ月見草のその花の姿にもたぐへて、お思ひ出しなすつて下さいまし。今は何の不平もございません。何の怨みもございません。自分がゐなくなれば庭の白い鷄が、毎朝私から餌をもらはれなくなるのが、氣の毒なことの唯一つであるほどにしか、私はこの世に愛着はないのでございます。私は不幸な女でございますけれど、そのかはり純潔な娘として、十九の若さと誇りとをもつて逝くのでございます。それはうれしい事でなくてはなりません。それでは御健康を祈つて、いと惜しき惜しき筆をとめます。」

私はこの哀切な感情に充ち滿ちた長い手紙を讀んで、暫くの間考へ沈んだ。私のところには毎日となくいろんな若い人達の手紙が來るが、その中には時たま私を驚かすやうなものもある。一度などはそれは九州の阿蘇山の麓のY――町の青年であつたが、親展の手紙をよこしたので、開いて見ると、自分は今一時間しか此世に生きてゐない身である。命の絡らんとするいまはに、あなたが私の心に一番親しく感ずる人であつた事を告げて、末長くあなたの御幸福を祈りますとあつたので、私もかなり驚いて、これは阿蘇の噴火口にでも飛込んだのではないかと隨分心配してゐると、四五日して、ケロリとしたやうな言葉で、この間は高い熱にうかされて書いた手紙をお送りしたので、中に何を書いたのかも分らぬ位ですと言つて來たやうな事などもあつた。總じて若い心は、理性の繫縛を知らないから、その自由奔放な感情や空想の中に浸つて、この散文的な現實から逃れて、美しい國へ一思ひに飛んで行きたいとあこがれる。私自身にしても、十七八から二十四五の時までは、確かにそんな一むきな純な氣持であつて二十五といふ美しい盛りの年には華やかに死んでしまはうと思つてゐた位であるから、この十九の少女の、しかも病氣と戀とのために惱んでゐる心が、こんなに死を見つめて、死にあこがれの情を寄せるのも、無理からぬ事に思つたのである。

私はその手紙に對して、別に立入つた事は書かなかつたが、誰れでも若い日には、堪へ難いやうな苦惱が多く、人生が非常に重たい負擔と考へられるものである事を述べて、然し人間としてはじつとそれに堪へて行かねばならないと言ひ、「生死何れにしても、自然にまかせる事が一番いいのだから」などと慰めた言葉を記して送つてやつたのである。さうして、彼女からの二度目の書信を心待ちに待つたのであるが、もうそれつきり、彼女からは何のたよりもなかつた。

三

私のところへは歸京後、二三日目毎に、松江の新聞が、井上の親切な心から送つて來られるやうになつた。そしてその新聞には、井上の作つた詩や感想などが載つてゐて、彼はその上にいつも朱筆を引いてゐた。ある日、私のところに來たその新聞に、特別の大きい◎のしるしがついてゐたので、刮目してそれを見ると、かの澤井美佐緒の小さい詩が載つてゐるのであつた。『哀傷祕曲』といふ題をもつた――斷章の七つほど集まつた詩に一貫してゐる感情は、いつぞやの手紙にあつたのと同じやうなものであつた。

私はそれを見て、今度はたうとう思ひ切つて、井上芳郎に彼女の事を訊いてやつた。どんな哀史を聞くであらうかと思つて待つてゐると、井上からの手紙の返事はなかなか來ないのである。そのうち私の期待の滿たされない寂しい心持も、多忙な賣文生活の繁雜にまぎらはされて、忘れるともなくその事から心が遠くなつた時分に、井上から厚い手紙が來た。それには、社用で大阪の方へ行つてゐた爲めに返事がおくれた事を詫びてから、次ぎのやうに認められてあつた。

「澤井さんと、僕と、僕の友人の西岡邦三と、この三人は、小學校時代からの仲のいい友達なのです。西岡と澤井さんとは、級こそ二級ちがへ、ともに首席をつづけ、僕は西岡の次席といつた風でありましたし、家も近かつたので、學校を卒業してからも、同じ文學に對する愛好の心から歌會のやうな眞似もしたり、雜誌の眞似のやうな事もしたり、互ひに文通も毎日のやうにしてゐるうちに、澤井さんは、その心では私を非常にたよりにして、兄とも同胞とも思はれると言つてその家庭の出來事――例へば、嫂がきびしくて、母親が時々泣いてゐるのを見るのが辛いとか、昨日これこれの人が來てこんな話をして歸つたとか、時には、猫の兒が何匹生れたとか、その猫の兒が何處で遊んでゐて、ころがり落ちて泣いたとか、女中がいかにも可笑しい失敗をしたとか何くれとなく話をするので、大變可愛いい妹をもつたやうに、僕も一々その話相手になつてゐたのです。僕とは反對に、西岡に對しては、彼女は非常に氣をつかつて、

よくよくの事でなければ、自分の心持なんか打明けはしないで、いつもむしろ對抗的にやつてゐるやうでしたが、彼女が十八の春を迎へた時分には、それが非常にひどかつたのですが、今考へて見ると、澤井さんにとつては僕は何處迄行つても友達である人間で、反對に西岡は戀人となるか、敵となるかと云ふさうした運命の對象人物であつたのです。彼女が女學校の三年の夏の事でした。僕は弟と一緒に、あのあなたも御存じの袖師ヶ浦の地藏様のところへ遊びに行つたものです。すると、その時そこの草道に、あの澤井さんが、マガレットのおくれ毛を湖の風に吹かせながら、ぼんやりとして立つてゐるのに逢ひました。連れもなくたつた一人で立つて、湖の方を見てゐるのです。私が不思議さうに立止まると、澤井さんはずつと近寄つて來て、あの黒い美しい眼に涙をためて、私はあなたにすまない事をしましたと申します。その様子が變つてゐますので、弟を遠方にやつて、そこらに立止まつて話を聞いて見ると、彼女は西岡から愛を求められて、今直ぐとはいへないがその愛を受けてもいいと約束したと申すのです。そして心ではこんなにあなたが心置きなく思はれるのに、愛は他の方に與へてしまつたのを、悲しまずにはゐられませんと云ふのです。私もさう聞いて見ると、何だか嫌な心持がしましたが、あきらめられない氣分でもないので、さまざまに彼女を慰めて、それから出來る事ならば、二人の幸福のため盡したいと思つてゐると、間もなく、澤井さんは東京にゐる伯母さんをたよつて上京し、それから女子美術學校へ通ふやうになつたといふ事を聞いたのです。無論、澤井さんと西岡との間には、戀愛の關係はずつと續いてゐたのです。ここ迄はザラにある平凡な話なのですが、これから問題なのです。

西岡は相當の財産のある家の一人息子なので、家の事情として、どうしても妻帶しなければならない破目になつて、みんなが寄つてたかつて强制するので、澤井さんに歸鄕して結婚してくれと頻りに言つて見たらしいのですが、その時分、澤井さんとしては、そんな急な結婚は出來ないから待つてくれるようにと言つたところ、「それではあなたとの

結婚はあきらめてあなたの愛のみを永久に私のものとしたいと云つて、人の世話で、極く普通の細君を迎へてしまつたのです。この細君を迎へた事によつて、西岡の心は澤井さんから去るかと思つてゐると、かへつてそれが反對の現象を生んだのです。彼は一層澤井さんを愛しはじめ、一層確實に彼女を專有しようとする欲望に燃えはじめたのです。ところが、澤井さんの方では、西岡の結婚を知つてから、心が冷えたのです。彼女は病氣から來たのか、その性質に潜んでゐたのか、妙に冷たい、清澄な性質の人となつてしまつて、今は西岡のことが非常に嫌になり、これまで忘れてでもゐたやうな私に、頻りに手紙をよこすやうになりました。去年、東京から養生のために歸國してからも、頻りに私に逢ひたがり、私にこれまでの事を種々懺悔して許しを乞ふのです。こんな風になつてからといふものは、西岡は私に非常な憎惡をもち、これ迄の交際は破れてしまつたわけです。澤井さんは西岡から來る脅迫の手紙を、そのまま私に渡してゐる次第です。「私の愛したのは私の夢なのでした。かういふ橫暴な人を愛したのではないのです。」と寂しく笑ふ時の、あの少女の瞳をあなたにお見せしたいものです。

どうぞおひまがおありでしたら、あの人の病床に、お手紙を惠んで下さる事を私よりもおたのみ申します。私は彼女を戀人にとも妻にとも毛頭思つてゐません。私は彼女を骨肉の如く愛するのです。そして彼女のやうな女は、まことに、こんな愛でなくては愛してゆけない女です。つまり、私はあの少女は、竹取物語にあるかぐや姫のやうな、この塵の世の女ではなくて、月の宵やかに照り冴える夜、空とほく、白く透きとほる雲の來迎を待つて、この世から飛んで行つてしまふ精靈のやうに、禮讃したいのです——」などと書いてあつた。私はその手紙を封筒に藏めながら、いろいろな思ひが胸中に往來するのを禁じ得られなかつた。

世の中にはいろいろな事がある。かういふ事もあり得るだらうと私は思つた。

殊に、この三角關係で興味のある事は、非上芳郎が彼女の靈魂をたたへて、その美を禮讃してゐるのに對して、西

岡邦三といふ男は彼女を肉體的に自分の物にしようとしつつある事である。井上のロマンテイシストらしい心持ももとより美しいが、西岡の荒暴な心持も、一概に憎むべきものとは、私には思はれなかつた。自分は結婚しておきながら、なほその戀人を自分の手許におかうとするやうな、さうした利己的な心持は、一般の男子にいくらかは共通のものであるやうに思はれるからである。

愛といふ名は美しくても、男女間の戀愛の歴史はかうしたエゴイズムの爭闘史である場合が、むしろ普通であるやうに思はれるが、然しこの男子の利己的な心もちに對して、女性の方では堪へる事が出來ないで、その行爲に對して非常な失望を味はふのはもつともなことであるから、彼女の心が西岡から去つたのは、まことに當然のことでなければならない。

しかも西岡がなほ彼女をあきらめ得ないところに、この人生の不合理な相(すがた)がある。

井上は彼女を竹取物語のかぐや姫にたとへた。

まことに、近代的な、放縦な、娼婦型の、脂肪過多に墮つてゐる女も多い今の世にも、あのこの世ならぬ天女のかぐや姫を、さながらに見るやうな清麗な、端楚な少女もないとは云へないと私も思ふ。そして自分もまたそんな少女が好きである。私は彼女を井上とともに、かうした少女として考へて見たいのである。

その後、井上の言葉どほり、私は彼女に何かたよりをしようと思つたのであるが、あとからあとから山積する仕事に忙殺されて、不本意ながらその儘になつてゐると、丁度私が松江で彼女達と語つてから二ケ月もたつてからである。また井上からの手紙が來て、彼女――澤井美佐緒が、その病床で自殺をしたといふ事を知らせて來た。

彼女は西岡に對する極めて短い手紙と、井上に對する丈なす長い慰めの手紙とを、その枕元に置いて、適量のモルヒネを服用して、枕元にあつたアネモネの眞紅の花を、その蠟のやうに白い頰に押しつけながら、苦痛のあともなく、

眠つたのであつたといふ。
「西岡は發狂しさうになつて、昨日も、神師ヶ浦の地藏のところをブラブラしてゐたといふ話です。」
と井上は、その不幸な友人について書くことも忘れなかつた。
「たうとう……」と私は呟いた。「あの美しい黒い眼は、とこしへに閉ぢてしまつた。」
私は何といふ事なく、眞間の手古奈を思ひ出して、美しく生き、美しく死んだ少女の短い一生を、一篇の詩のやうに考へて見た。

漂泊と夢想

――ああ、我れは凡ての町を知る、
されどまた凡ての處に
限りなき鄕愁は我を捉ふる、
「汝の故鄕はなほ遠し、
遠き遠き彼方にあり」と……

――靈魂の秋――

自序

これは私の散文の謂はば小さな序曲(プレリュウド)である。一人の作家として新しい生涯を踏み出すに當つて、漂泊と夢想とに費された私の寂しい青春の記念を玆に集めた。言ふ迄もなく、これは甚だ貧しい收穫ではあるけれども、なは私には捨て難いものである。なぜかと言へば、私は今日再びここに我が踏み來つた幾山河(いくやまかは)を顧みて、「はるけくも來つるものかな」といふあの感慨無量の樂しい嘆息を洩らさずにゐられないからである。思へば遙かな旅であつた。他の惠まれた人々に取つては門出であるべきこの驛路まで辿り着くためには、いかばかりの彷徨、いかばかりの蹉跌(さてつ)、いかばかりの絶望を經驗しなければならなかつたであらう。しかも今日、更に新しい勇氣を鼓して、更により險しい艱難の道に上り得ることを思へば、私も幸福だと言はなければならない。

私は曾つて野邊の小鳥の歌ふやうに、河邊の蘆のそよぐやうに、誰れのためでもなく、ただ自分自身のために、止むに止まれぬ内心の衝動からして、ひとりで寂しく歌つて來た。そしてまた、それと丁度同じやうに、今日、散文の作家としてここに立つ時に於ても、私はそれと同じ態度を續けて行きたいと切望してゐる。私の弱い性格は時として此のあまりの寂寥と索寞とに堪へられないで、かの哀れな夜(よる)の蛾のやうに、華やかな才人たちの火光を慕ふこともある。然しそれは私の破滅でないとはどうして言へよう。人それぞれに天分を異にする。運命もまた然りである。光彩陸離、觀る者をして眩惑せしめずんば止まないやうな、アポロオンの神の氏子たちもあれば、地下の牢獄に呻吟するティタアンの族もある。日の車を馭する時、ファエトンは遂にその身を焦してしまふ。かりそめにもそんな身の程知らずのことを考へるのは、思ふに、私の意志と確

信との恥づべき干潮の瞬間に相違ない。さうしたきらびやかな舞臺に立つて見得を切つたり、氣の利いた身振りをしたりするためには、私はあまりにオークワアドである。それは到底私の性に合はぬことである、私のすべきことではない、私にはやつぱり此の寂しいひとり旅、此のたどたどしい默々たる歩き方が一番自然なのに違ひない。かう思ひ返してくる時、私の文壇に要求するところは、甚だ、甚だ僅かなものとなる。ただ願はくば、何等の背景をも有たぬ此の孤獨者をして、文壇の靜かな片隅で、勝手に自分の好きなことを書き續けることを許して貰ひたい、ただそれだけである、その外に何もない。

我々がひとへに自己の個性に執するとき、そこには何等のスクウルも成立しない。私もまた私一人である。私の過去は弱く醜くはあつたけれども、それでも全く唾棄すべき程に弱く醜くはなかつた。孤立無援の語を以て、私の文壇的地位を氣の毒がつてくれた親切な一友の友情には、深く感謝するけれども、曾つて孤獨なる寂しき詩人であつた如く、今日以後、また孤獨なる寂しき作家であらうことは、私の弱い魂のためには、まことに尊き試錬であらねばならぬ。私はこの拍車によつて、我が足弱き駒が更に力強く疾走すべきことを望む、頷きつつ望む。

私は少年時代の數年を朝鮮にさすらひ過した。その日の記憶は今私には極めて尊いものとなつてゐる。私はいつも夢みて過した。しかも當時私は一個の少年たるに過ぎなかつた。それゆゑ我々の寂しい隣人についての私の記述は、屢々失策に堪へた謬つた觀察であり、空しい感情の投影であつたり、とりとめなき幻影の曲に過ぎなかつたりするではあらうけれども、なほ幾分かの眞實は傳へ得たことと思ふ。いや、それすらなほ一つの自誇であらう。私は自分がかの荒凉たる海のあなたの人々について詩を以て語つた我が文壇に於け

る最初のものであることだけで滿足しよう。あやしき運命の糸は私を此の寂しい人々と結び付けた。その人人の洩らし難い嘆息を織りなして、小さな『獵人日記』を編することは、やがて私の生涯の任務の一つとなるであらう。未熟なる今日の私は、まだこの心中の激動、この抑へ難い昂奮をも口にするだけの資格はない。

顧れば私の才能は屢々絶望に値するほど貧しく小さくきれぎれである。しかもこれからの私の踏んで行く道について幾分の暗示を與へるに止まるだけの、此のミゼラブルな舊稿を前にしては、ただ恥ぢ且つ口籠るの外はない。然し私は昔日の散漫な生活を一掃して、常に劍(つるぎ)に觸れて泣かんことを覺悟してゐる。この少年の見た世界の幼い白日夢と甘やかな抒情詩とは、よし自らその純粋と素朴とを愛するとは言へ、今日の私の決して滿足するところではない。私は私を愛する諸友、私を激勵して倦むことなき愛友に苦(にが)き失望を與へることを最も虞れてゐる。私は斃れるまでは進まねばならない、力盡きて斃れるまで。

然しながら此の小册子の無力のために、私の言が自ら揣らぬ大言壯語と見えたならば、私はこれを哀れなる道化者(クラウン)の愛嬌とのみ取つて頂き度いと歎願しよう。ヨリックよ、汝は餘りに饒舌である、汝は不言實行の美德を學ばなければならぬ。

一九二〇年の終りに當つて

生田春月

聖書

今日來て見ると、Kさんの書卓の上に、ついぞ見なれぬ褐色のきたない三六版ほどの厚い書物が載つてゐた。
「先生、それは何です？」と訊くと、
「まあ見たまへ」と、ワイルドの『デ・プロフンディス』や、Kさんの大好きなスヰンバアンやアーサア・シモンズの詩集の下から引出して、僕の手に渡してくれた。見るといかにも古色蒼然たるものだ。全部厚革で、製本はひどく堅牢だ。革はところどころはげたり、すりむけたりしてゐる。縁も煤けてゐる。何だかから漁師町の娘でも見るやうな氣がする。意外に輕い。
無雜作に開いて見ると、これは聖書だつた。細い字が隙間なしに植ゑてある。まんざら漁師町に關係のないこともないと思つて、
「聖書ですね」とKさんを見ると、Kさんのその貴族的な、いかにも旗本の血統を承けてゐるらしいすつきりした顏は、微笑にゆるんで、やや得意の色があつた。
「掘出し物だ。ヴィクトリア朝のものぢやない、どうしても百年前のものだね」
「へえ」と今更感心して見る。
「夜店で買つたんだ。初め十錢だつて云つたが、こんなもの買ふ人はありやしない、五錢に負けろと、たうとう五錢で買つて來た。さあ、どうしてあんなところにあつたものかなア」
「へえ、五錢……夜店で」と僕は驚いたやうな聲を出した。この貴族的な詩人が五錢で聖書を買つてゐる光景を眼前

に描き出して、何とも云へず面白い氣持がした。が、そのすぐあとから、自分が毎日敷島を二つ宛喫ふことを思出して、惜しいやうな氣がした。何が惜しいのかわからないが、兎に角惜しいやうな氣がする。

むやみにいぢくつて見る。何やら古い、尊い香がする。――氣が付くと、Kさんの話はいつの間にかどしどしイプセンに進んでゐた。イブセンと聖書。イブセンは常に聖書だけは座右を離さなかつたといふから、これもまんざら關係がないでもないと思ふ。

Kさんが立つて呼鈴を押すと、とんとんとんと、いかにも面白さうに調子よく階段を踏んで、女中さんが現れた。僕がこつそり好きな女中さんで、頰つぺたがまろく、目が人形のやうにぱつりちしてゐて、動作がいかにもはきはきしてゐて、リズミカルだ、さすがに詩人の家の女中さんだと來る度に感心する。

僕は聖書を書卓の上に置いて、目の前にあつた葉卷を一本取上げた。「さあ、葉卷はどうです」と二度ほど勸められて、もう疾くに隔ての取れた間なのに、やつぱり遠慮してゐたその葉卷だ。女中さんは妙にくすりと云つたやうな微笑をうかべて僕の手つきを見て、それから若旦那の方を見て、

「あの、御用でございますか?」

「あのね、奥の居間の押入にね、ウヰスキイとキュラソオの瓶があつた筈だから、あれを持つておいで」

女中さんが大形のウヰスキイの瓶と妙な恰好をしたキュラソオの瓶とを盆に載せて持つて來た時、Kさんは安樂椅子にずつと反身になつて、上靴をつけた片足を膝の上に載せて、肱をもたげて半ば灰になつた葉卷を支へながら、壁に掲げたロセッテイの受胎告知の繪の方をぢつと見てゐると、僕も丁度その眞似をするやうに、同じく椅子の上に身を反らして、片足を膝の上に載せたはいいが、恥しながら眞黑な足袋の裏を見せて、やつぱり葉卷をささげて、少し首を入口の方へふり向けてロセッテイを見てゐた。この頗る冥想的な場面に女中さんの紅くふくれた頰が例の階段上の彈奏

を先き觸れにして現れた、と思ふと、いきなりぷつと噴き出した。

「おや、どうした？」とKさんは冥想を破られて言つた。

僕は女中さんの顏を見ると、ひどくきまり惡さうに丸い頰を一層紅くして、目を落してしまつた。これはきつと僕に何かをかしいところがあつたのに違ひないと思つて、僕もすつかり照れて、ふと手の葉卷を見ると火が消えてゐた。急いでそれを灰皿につつこんで、僕はまた例の聖書を手に取つた、眞黒な足袋の裏をあわてて下におろしながら。

どうも僕の樣子はまづこの聖書ぐらゐは見すぼらしいに違ひない。それが立派な旗本で、今は會社の重役の次男なる主人公と同じ貴族的な態度ですまし込んでゐたのだ、と思ふと、僕は顏が眞紅になるやうな氣がした。だが、女中さんの噴き出したのは、ただ何がなしにその場のシテュエーションの然らしめたところだらう。若い女といふものは箸が轉んでも笑ふと云ふではないか、尠くともそれは僕に對する嘲笑ではない筈だ。それは彼女の目がよく證明してゐる、などと僕はひとりでしきりに推究した。なほ進んでは、此家の主人公がこの白銅一個を以て購ひ得た古書、無限の價値を見出して賞玩するやうに、このかはいらしい女中さんも僕の見すぼらしさの中から何等かの價値を見出してくれてゐるかも知れないなどと、例の詩人らしいいい氣な自惚れに沒頭してゐると、

「さあ、今日は酒でも飮みながらゆつくり話さう」と云つて、Kさんは二つの杯になみなみとウヰスキイをついだ。

僕はすぐ醉つてしまつた。Kさんのふだんはぼんやりと霞がかかつたやうにやはらかな顏が、輪廓がはつきりして來て、妙に鋭くなつてゐる。Kさんが醉ふといつもかうだ。二人の話は愈々はずみ出した。僕は調子に乘つて、象徴詩を罵り始めた。

「僕は詩壇をあやまるものは今の象徴詩だと思ひます。象徴詩は人間を殺します、一體今の象徴詩などを作るには何も一個の人間であるを要しません、ただ綺麗な言葉をたくさん知つてゐて、それをいい加減に出鱈目に並べさへすれ

ばいいんです。それでゐて詩人の本當の人間らしい叫びを說明だなどと貶すのは僭越ぢやありませんか。シェレイの『雲雀の歌』などを持つて來て、意味ありげな言葉をつなぎ合せて、でつち上げたばかりの自分の象徴詩を辯護しようなんて滑稽ぢやありませんか。象徴詩なんて、要するに空虛な詩工には持つて來いの隠れ場で、彼等はその中で文字の輕業をやつてるだけです」

僕は口がだるくなつて止めにした。Kさんは時々「ふむ、ふむ」と受けながら、穏かな微笑を浮べて聞いてゐたが、

「まあそんなに憤慨しなくてもいいよ。つまらないまやかし物は時の審判の前には滅びてしまふのだから。早い話が、基督はいくら十字架にかけられても」と聖書を手に取上げて、「その精神は今日此中に生きてゐるぢやないか。いくら壓迫されても無視されてもいいから、本當の詩を書かなくちやいけない」と云つてまたそれを下に置いた。僕はこの先輩の聲援にすつかりいい氣持になつて、その聖書をまた手に取つてしきりに引つくり返しながら、いつになく盛んに氣焔を擧げた。

歸る時に、僕があまりその聖書を熱心にいぢくつてゐたものだから、

「何なら持つて行きたまへ」とKさんは云つてくれたが、僕は、

「いえ、なに」と立上りながら云つた。御馳走ではないものだから、Kさんは「遠慮したまふなよ」とまでは勸めなかつた。下へをりると、奥の方で賑かな女の人の笑聲がした。門を出ようとして、横の方を見ると臺所の窓のところから、例の女中さんの顔が此方を覗いてゐた。僕は玄關に立つてゐる主人に云ふ風をして、「さやうなら」と、一寸彼女の方に頭をさげた、何だか彼女がにつこり笑つたやうに思はれた。僕はひどく愉快な、はしやいだ氣持になつて、

「Kさんは珍らしいものを見つけたものだな」と心に呟いて、あの聖書（バイブル）のことを考へてゐるつもりでゐながら、いつか女中さんのことを考へながら、そのぷつと噴き出したのはどうした譯だつたらうと、いろいろな想像を逞しくしなが

ら、本郷三丁目までてくてく歩いた。

雨傘

彼は歩いてゐる。牛込のとある街路(とほり)である。彼は傍目(わきめ)もふらず。さも何か用あり氣に、さつさと急いでゐる。然し、何も用事があるわけではなかつた。どんな散歩の時でも、通行人の多い街(まち)なんかだと、何か後暗(うしろぐら)いことでもあるかのやうに、追はれるやうに急いで立去るのが彼の常であつた。殊に緣日の人ごみに出逢つた時などは、人の肩から肩にぶつ突かりながら、こそこそ逃げるやうに行つてしまふ。彼は人間が嫌ひであつた。その癖、何とはなしに人なつかしい、蔓草が竹の柱などにすがり付くやうな、何かしら賴りになるものを求めるやうな氣持で、毎日々々、我知らず家を飛出して、あてもなしに、東京の市中をさまよひ歩くのであつた。

先刻(さつき)からしとしとと降り出した春雨に、彼の長い髮はしつとりと濡れてゐる。その頃讀んだ或る本の中に、「額つき愁はしげに、長髮わざとらしき詩人の群れ」といふ文句があつたが、さうした氣取つた高踏派の詩人たちを彼は嫌つてゐた。然し、彼自身も額つき愁はしげに、髮を長くした一人の詩人であつた、まだ十七歲の名も無い小詩人ではあつたけれど。

彼はもう十年も東京にゐるやうに感ずることもあるが、實際はまだ二月(ふたつき)にもならないのである。遠い西の方の片田舍から、立派な詩人になりたいと思つて、兩親の反對するのもかまはず、半ば逃げ出すやうにして、東京に出て來たのであつた。東京へ出て來ても、誰れ一人として賴りにする人もなかつた。祖父の弟の養子にあたる人がゐたので、父

親も仕方なくその人に懇々と依頼の手紙を書いた。それで彼もその人の家に暫く厄介になつて、いろいろと親切にして貰つたのだけれど、夫婦暮しの小さな家庭に、何だか自分が塵埃のやうに舞ひ込んで、綺麗に掃き清められた疊の上に溜つてでもゐるやうな氣がして、氣の毒で、氣づまりで、氣になつて仕方がないので、三四日たつた時、その近所に間借りをして、父の方から漸くいくらかの金を當分の間送つて貰ふことになつて、どうしたものだらうと身の振り方に惑ひながら、その癖何とか適當の手段を講ずるでもなしに、ただ漫然と、つい路傍に自分の未來を開いてくれる鍵でも落ちてゐるか、または街路で行き會つた人が、もしもしと呼び留めて、世話でもしてくれさうな氣で、足にまかせて縱橫無盡に何處まで行つても果てもないやうな、大都會の町から町へとさまよふのであつた。內心、滅入るやうな心細い氣持がしても、世に時めいてゐる詩壇の大家を訪ねて行くのも、恐ろしいやうな、きまりの悪いやうな氣がして、急には決心することも出來ず、臆病な眼で賑かな街の光景を盜むやうに見てただ歩き、歩くばかりであつた。けれども、彼は幸福であつた、頭の中は美しい空想で一杯になつてゐたのだから。自分の今毎日のやうに、ノオトに書き付けてゐる詩が、上等の舶來紙の上に綺麗な活字で鮮明に印刷された一冊の詩集となつて、薔薇の花のやうな目ざめるやうな模樣の表紙に裝はれて、著者の肖像付きで現はれる……そして多くの人々に爭つて愛誦され、忽ちに何版も重ねて、日本のハイネだとかバイロンだとか唱はれて……そして若い美しい女學生が……空想は何處までも行つても盡きないで、むしろ益々奔放になつて、つい目のさき二三尺のところに未來の大詩人の幸福な生活がちらちらするのであつた。

　幾組といふこととなしに、後から後からと學生の群れが通つて行つた。雨なんか物ともせず、眞黑な拳を振廻して、聲變りのしつつある聲を張り上げて、野球の話に夢中になつてゐる三四人の後から、いきなり驅け寄つて兩手でポンと肩を抑へ付けて、そのびつくりして振返るのを見て大笑ひする中學生の群れもあれば、細卷の蝙蝠傘を芝居の花道

でも行くやうに輕く振りかざして、金口の煙草を口にくはへながら、新劇の女優の噂をして行く角帽もあつた。いづれ早稻田の文科の生徒であらうが、文壇の現狀を罵つて、彼が偶像のやうに尊敬してゐる大家を、××なんざ……とさも輕蔑するやうに呼び棄てにして、「葬つちまへ！」と不穩な合唱(コオラス)をとなへながら、いかにも一ッぱしの新進作家らしく構へ込んで得々として行く連中もあつた。

流行を追うたその服裝、傍若無人なその擧動をちらと見流しては、彼は顏をしかめて、横向いた。身の程知らずの傲慢を苦々しく思つた。彼等の方では雨に濡れて行く田舍縞の筒袖を着た見すぼらしい少年などには頓着もしなかつた。仰山な聲を立てて、つまらぬ事を喋り立てては、をりをり高く笑つて、言ひ爭ひをやつたりする。

「馬鹿！　きさまのやうな頓ちきに何がわかるものか！　一昨日來やがれ」と罵倒すると、一間ばかり前を歩いてゐた水白粉でもつけてゐるのではないかと疑はせるハイカラの學生がくるりと振返つて、

「何言やがるんでえ。田舍者の鼻つたらし小僧め。きさまなんザ犬のやうに東京中を毎日ほつつき歩いてたつて、都會人の氣持なんかわかりつこねえんだ、憚りながら俺樣は江戶ッ兒なんだぜ」と、いづれ田舍漢(ゐなかもの)であらうのに、いやに江戶ッ兒がつて罵り返して、さも愉快さうにカラカラ笑つて、丁度向うから來かかつた彼の顏をちらと見て、フフンと云つたやうな冷笑を浮べた。それは別に彼のことを云つたわけでもなく、第一彼なんか眼中にも無いのだらうけれど、彼はてつきり自分の事を罵倒されたもののやうに感じて、むらむらと腹が立つた。いきなりその前に立ちはだかつて、三町も先きに響くやうな大きな聲で、

「意氣地なしの穀潰しめ！　親の汗水たらして儲けた金で、いやにメカシ込んで、下らぬ眞似ばかりして、得意になつて威張り散らしてゐる馬鹿者め！　僕は詩人だぞ、ゲエテやハイネのやうな大詩人になるんだ、その時になつて急に僕を讃美したり崇拜したりしたつて何(なん)にもなりやしないんだ！」と云つて罵り辱(はづか)しめてやりたかつた。けれども、さ

う思ふと、ただ自分の胸ばかりが早鐘を撞くやうに無暗と動悸が昂まるばかりで、喉がつまつて口の中が乾いてしまつたやうで、呼吸をするのも苦しかつた。彼はすつかり俯向いてしまつて、「僕は反抗の精だ、飽くまで強い者に反抗して、弱者の爲めに奮闘するんだ……」とか、「僕は悪魔になるんだ、そしてそれからまた救世主になるんだ……」とか考へたり、「憫れな奴、憎い奴、何の煩悶もなく、心配もなく、憂愁もなく、馬鹿話や馬鹿笑ひばかりしてゐる無智な奴……」と彼等を罵倒したりして、その實、何となく八方から嘲笑の眼で見送られてゐるやうな、穴があれば入つてしまひたいやうな面はゆい、羞恥と恐怖とに苦しめられながら、荒物屋、駄菓子屋、魚屋、米屋と、片側の商家をつぎつぎと軒並に覗くやうにして歩いて行つた。

けれども、丁度學校のひける時分なので、學生の連續はちよいと絶えさうにもない。

「こんなに學問をする人間が殖えたのかなア」と彼は心の中で呟いた。そして學校にもろくに行けないで來た自分の身の上がたまらなく寂しまれた。學生の中には、彼をじろじろ見るものもある。それが癪にさはつてたまらないと同時に、愈々彼を臆病にした。そしてこの雨にしよんぼり濡れて行く自分のみすぼらしい姿が今更のやうに顧みられた。

雨は一向止みさうにもない。彼は傘を買はうと決心した。そして懐の蟇口に思はず手を觸れて見た。その中にはたつた三十錢しかないのである。

一丁ばかしもじろじろと兩側を注意して歩いて行くと、やつと一軒の小さな傘屋が見付かつた。不景氣さうな店で、店頭には誰もゐなかつた。彼はその店に飛込んで、二三度聲をかけたら、やつと奥の方から貧相な主人が出て來た。

「傘をくれたまへ」

「へえ、どんなのがよう御座います」

男は庭の方に並べてあつた傘を一つ一つ手に取つて、これは四十錢、これは三十五錢と、値段を云つては、開けた

りすぼめたりする。

「もう少し安いのはないかね」

「へえ、こんなのでしたら二十五錢で……」

黄色い粗末な番傘である。それを買ふことにした。男は頭へ黑い紙をかぶせて、彼の手に渡した。

それを肩にして、彼はすたすたと一丁ばかり歩いた。すると向うから學校の子供が一人來た。傘をぐるぐる手で廻して、雨滴が八方に散るのがさも面白さうである。

彼はそれを見ると、自分も昔あんなことをしたつけと思出して、なつかしい氣持になつた。そして自分もその眞似をして、傘をくるくる廻して見た。

クロオヴアの花咲く頃

主人も同居人の勘さんも新宿の終點にある店の方へ出かけて行つた。二人の女の兒も學校へ行つてしまつて、家の中はひつそりと靜まり返つてゐる。時々臺所の方で主婦さんの水を使ふ音がするばかりだ。私は妙に寂しい、空虛なやうな氣持になつて、路から小高くなつてゐる此の家の前の庭に出て見た。

低い垣根に手を置いて、ぼんやりと眼の漂ふがままに向うの方を眺めやつた。前に通じてゐる一條の小徑からは、少し左へ行つた處で、青々した畑と、やや傾斜を帶びてだんだん高くなつて行く草原との間に岐路がわかれてゐる。草原の先きには崖があつて、丘になる。丘の上は、行儀正しく野菜を植ゑつけたアメリカ風の畑で、洋服の仕事着を

つけた男が二三人、わき目も振らずに立働いてゐる。その向うは疎らな松林で、その間に新築の家が二三軒、午前の日光に片側白く光つて、硝子戸がきらきらと反射してゐる。家の屋根越しには、遠く淀橋浄水場の煙突が靜かに煙を吐いてゐる。私の頭の上では、櫻の葉が輕くひそめき合つて、初夏の風が爽かに吹き過ぎる。あたりは寂然としてゐて、路を通る人もない。私は暫くとりとめのない夢想に耽るやうに、其處に佇んだ儘、いつか愛誦の詩句を口吟んでゐた。

その時、家の中から主婦が出て來て、私が振返ると、

「一寸買物に行つて來ますから、お留守をお頼みします」と云つて、家の右手に續いてゐる小松の間に隱れてしまつた。その世帯やつれのした、小づくりな後姿を目送してゐると、何處か遠くの樹で蟬が一つ鳴き出した、細く尾を引つ張つて鳴くと、そのあとから、家の四周の樹から、枝から、葉蔭から、聲を揃へて寂しさうに鳴き出した。まだ聲は弱々しい。私はそのまゝ家の中に入つて、机の向つた。何だか氣分が纏らないので、つい此間買つて來たばかりの竹の本立に、乏しげに置き並べてある書物の中から、暫く考へた上で、一册の書物を取出して机の上に開いた。木下尙江の『飢渴』といふ、假綴の白い表紙に赤く表題を印刷した書物である。一週間ほど前の夜に、いつものやうに四谷の通りを遙かに麴町の方まで散歩した時、麴町の電車通りの小さな古本屋で偶然見付けたものであつた。まだ朝鮮の方にゐた時、人から借りて同じ人の『良人の自白』を讀んだが、餘りの面白さに、一册また一册と、一日の間に何遍もあとを借りに行つて、全部讀んでしまつたが、作者の烈しい精神が滓のやうに心の底に殘つてしまつた。それで此本を見付けると、飛び付くやうに云ひ値で買つて來て、それからは朝も晩も取出しては讀むのであつた。そしてその中に充ち溢れてゐる、基督敎的社會主義とも云ふべき熱烈火のやうな叫びにすつかり若い魂を貫かれてしまつてゐたのだ。

「おい君、S君」と不意に入口に向いた窓の外から聲を掛ける者がある。見るとT君だ。
「おお、T君か。さあ上り給へ。隨分わかりにくかつたらう？」
「いや、わかつたよ。郡役所の裏だと訊いたら直ぐ知れた。この邊の景色はどうも素敵だね。それに此の家の少し坂になつた上り口の工合などはすつかり氣に入つてしまつた。君はいい處を見付けたね」と彼は編上げの靴をほどきながら、眼を擧げては櫻と楓とを植ゑ交へた玄關を眺めたがら云つた。
　玄關の二疊が私の部屋だ。そこに上つてすわると、彼は、
「どうだね、變りはないかい？」と云つて、笑ひながら私の顏をぢつと見た。これがこの友の癖であつた。その空のやうに澄んだ眼と眼を合せると、そこには小學時代から一緒に喧嘩をしたり仲直りしたりして大きくなつて來た竹馬の友でなければ見出すことの出來ないやうな親しさが湧き出るのである。私は、
「ああ、相變らずさ」と打つちやるやうに云つたが、その聲はいかにも嬉しさうに晴れ晴れしてゐた。
　二人は對ひ合つてすわつた儘、暫くの間默つて顏を見合せてゐた。友は今日は新調の背廣を着けて、きれいに梳つた長い髮は額の上に亂れて、そのくるくるした才氣走つた眼と相俟つて、いかにも年少の才人といつた感じを與へるのであつた。私がそこらの雜誌や、ノオトや、原稿の束などを取片づけてゐると、友は机の上の書物を見て、
「何を讀んでるね？」と云つて、手を伸ばして取上げて見て、
「おや、尙江のものぢやないか。面白いものを讀んでるね」と興あり氣に私の顏を見た。
「ああ　此間見付けて來て、愛讀してゐるんだ。何だか僕の將來を暗示してくれるやうな氣がするんだ。僕は美しい言葉を並べ立てるばかりでない、本當の貧しいもの、虐げられたものの爲めの詩人になりたいと思ふ」と私は醉つたやうないい氣持で昂然として云ひ放つた。

「さうだ、さうだ、それでこそ本當の詩人だ、さうでなくちやならん」と友は言葉に一々力を籠めて云つて、激勵するやうな眼をまた私に向けた。

その時、外から主婦さんが歸つて來て、

「Sさん、ただ今、お客樣ですの？」と窓の外から聲を掛けて、T君と眼を合せると輕く頭を下げたが、重さうに風呂敷包を持ち替へて裏口の方へ廻つた。やがて親切にお茶を持つて來てくれた。友はその熱いお茶を一息に呑み乾すと、茶碗を下へ置きながら、急に嚴肅な重々しい顏をつくつて、

「君、僕は今度郷國に歸らねばならんことになつた」

「えつ、郷國へ？　どうして？」私がその意外なのに驚きの聲を發すると、友はそれを制するやうに、極く落着き拂つた態度で、

「實は、いろいろ事情があるんだよ。かねがね僕に賴んで來てゐた金井先生の愛生校が竣工して、來月匆々開校することになつたので、至急歸れつて電報が來てね……、近頃一寸考へたこともあるし、それにつくづく東京の生活が厭やになつたから、暫く國の方におとなしく退いてゐて、みつちり本でも讀まうかと考へたんだ。けれども君、その最大原因はまだ外にあるんだ。君！　僕のイヴは死んだよ、たうとう死んでしまつた……君、驚いたらう、僕にも戀はあつたのだ」と云つて友は强ひて笑つたが、その顏は悲痛な表情に鋭い線を刻み出してゐた。

私は呆氣にとられて、暫くまじまじと友の顏を見てゐた。彼はこれ迄さうした話を一度もしたことはなかつたからである。然し私の心には、不圖思ひ當るものがあるやうな氣がした。

彼と私とは本當に字義通りに竹馬の友であつた。裏日本の二つの湖水、連結してゐるその一つの湖水のほとりの町の、しかも同じ町內に生れて、同じ尋常小學に通つて、一緒に遊び一緒に勉强して來たのであつた。私が文學に志し、

詩を作るやうになつたのも、この友の啓發してくれたお蔭であつた。彼は異常に早熟であつた。私よりたつた一つ年が上なだけであつたが、二人の精神上の差違はいつでもそれ位の差ではなかつた。私は十一二の時、『少年世界』を愛讀して、短かい文章や歌などを投書してゐたが、彼はその頃、白雪と號して、既に『文庫』といふ青年投書雜誌の錚錚たる詩人であつた。二人の學校の先生で平田と云ふ人が大變な文學愛好家で、『新聲』だとか、『文庫』だとか、『明星』だとか云ふその頃の文學雜誌は大抵取つてゐて、その周圍に輝かしい眼付をした青年を集めてゐた。その中に私たち二人も加はつて、俳句の運座があつたり歌の會があつたりすると、負けないで互選の結果時々秀逸を取つたり、一等になつたりするのであつた。皆の話はいつも晶子の歌や、泣菫、鐵幹の詩で持ち切つてゐた。そのうち私たちは投書だけで滿足が出來なくなつて、『若草』と題する回覽雜誌を始めた。美濃判を二つに切つて、それを二つに折つて綴ぢたもので、それに平田先生の弟で畫家になる志望で毎日寫生に出たり水彩畫を描いたりしてゐた義正君に表紙畫や挿畫を描いて貰つた。二人は中庭に向いた私の書齋に集つたり、打綿屋であるT君の家の危い梯子を上つた二階で、机を並べ、顏を突き合せて、細書（こまがき）の筆で熱心に自分たちの草稿を淨寫したり、集つて來た友達の原稿を書き寫したりした。私たちの感化を受けて、同じ少年仲間で、私たちの小さな會に仲間入りするものもだんだんに出來て來たが、T君は隱然その首領となつてゐた。何といふなつかしい時代だつたらう！　私たちは新詩社風な歌――その時分は新派和歌と云つた――を作つたり、文庫派風の詩を作つたり、小說を書いたりしたが、滑稽なことは、その美濃判紙半枚の紙で三四枚の文章に麗々しく長篇小說と銘打つたことである。しかもその小說たるや義正君の挿繪入りで、二人は完といふ字を終りに威勢よく大きな字で書いたものである。T君はとりわけ小說が得意であつた。それは大抵、「由良川の川口に添ふ松林の下に坐して、暮れ行く空を眺めやれば、……」と云つたやうな綺麗な叙景で始まつて、何かと云ふと星（スタア）を三つ並べては、場面（シイン）を變へて、「健一を尋ねて我が家を去りし敏子は今いかに。亂れし髮をいづちの風に

や吹かすらむ」などといふ風に終つてゐるのである。T君のかうした長篇小說に『片われ月』といふのがあつた。それは俊秀の才人が相愛の女主人公を慾に目のくらんだ女の母親の爲めに引き裂かれて、女は泣く泣く嫌やな男の處へ嫁いで行き、主人公は絶望のあまり自暴自棄に陷つて、何處かへ姿を隱してしまふといふやうな筋で、例のやうに「あはれ血に泣く文子の心やいかに、怨みの涙を飲みて姿隱せし時雄の行衞やいづこ」と云つた風に結ばれてあつたが、仲間うちでは近來の傑作と云ふ評判であつた。私も無論それに同意見であつたが、ある夜彼を訪問すると、彼は「いいものを見せよう」と云つて、机の下から文箱を取出して、中から女の手紙を二三通出して見せた。それは水莖のあととは成程こんなのを云ふのだらうと私をして思はせた程の、水の流れるやうな達筆で、夢のやうな事を書き連ねてあつたが、私にはよく字が讀めなかつたけれど、その人の名前は文子といふのであつた。

「片われ月のモデルだよ」と友は得意さうに云つて、手紙をただ感嘆してゐる私の手から素早く取つて、文箱に投げ込んでしまつた。その文箱の中にはまだいろいろなものがあつた。美しいしをりもあつた、女の寫眞もあつた。こんな風で、私が戀といふ文字をむやみに使つてゐる癖に、一向その戀なるものの本體を知らず、想像もつかないでゐるうちに、たつた一つ違ひに過ぎないのに、T君は本當に戀をしてゐたのであつた。それが十二三の少年なのである、何といふ早熟であつたらう！

　其後、『若草』は私が主として編輯する事になつて、『花籠』『天使』などといろいろ題名こそは變つたが、十三の歲の終りに私が一家と共に朝鮮に渡る事になつた、その頃まで續いてゐた。

　遠く離れてからも二人は始終手紙の取り遣りを絶やさずにゐたが、T君は縣廳のある市に小學敎員の講習に半歲程行つてゐて、それから故鄕の町の近くの村で準敎員になつたが、私が一度朝鮮の方から歸國した時、つまらぬ行違ひから絶交までしたけれど、勿論それは一時の事で、今度上京したのは、一年前に上京してゐたT君に勵まされて出て

來たやうなものであつた。全くこの廣い東京で私の知つた人と云つてはT君の外になかつた。T君がゐなければ臆病な私は、とても意を決して上京は出來なかつたかも知れない。それゆゑ、今突然歸國の事を聞いた時、私は何よりも先づ心細い、賴りになるものを失ふやうな氣持がした。

「どうしても歸るんかね？」と私は覺えず呟くやうに云つた。

「アア、歸れといふ電報が二ところからも來たもんだから、僕も實は驚いたんだ。然しなに、大した事はないよ。すぐまた出て來るよ……それよりも君はウンと勉强して、一日も早く文壇に出るやうにしなくちやいけない。今日は歸鄉の準備やら何やらで隨分忙しいんだが、君に會はないで歸るのは殘念だから、始め手紙を書かうと思つたんだが、それは止めて、かうして訪ねて來たやうなわけだから、僕はもう今日はこれで失敬する。名殘に君の近作を聞かせて貰ひたいが、そこまで一緖に來て、みちみち讀まうぢやないか」と云つて、友ははや歸り支度になる。では其處まで見送りかたがたいろいろ話さうとて、私は手もとのノオトを懷に入れて、一緖に外に出た。

二人は並んで步いた。畑よりも草原の方が多く、靑々しい雜草は風にさわさわ音立てて丸い葉や長い葉や尖つた葉を、中には白く裏返して見せたりして、薄紅い小さな花を擁してゐるのもあつた。路傍にはいぢけて曲りくねつた小松が續いて、その中に櫻や杉などが堂々と立交つてゐた。

「幾つだつたんだね、その人は？」友があまり默つてゐるので、それ以上默つてゐるのが息苦しくなつて、私はかう云つて訊いた。するとそれを待ち受けてゐたかのやうに、

「いやまだほんに若かつたんだ、だが僕はもう諦めてゐるよ。凡ては運命だ。僕は甘んじて運命の笞を受けようと思つてゐる。運命に屈するものこそは眞の賢者だと昔の哲人も云つてゐるぢやないか。僕はこの頃つくづく人間の小なるを感ずるよ。ああ、到るところ人間は小さく醜い、いつも大きいのは天だ、大自然だ！」と友は、嗟嘆するやうに

しみじみと云つて、さも快ささうに白い雲の飛んでゐる空を眺めやつて、それから大久保へ通る高臺の心持よげに開け放された家々の二階に眼を轉じて、それからまたその夢見るやうな眼つきを私の顔に向けた。

路は崖について曲つた。

友はみちみち現代の沒趣味なこと、滔々として腐敗し、墮落してゐること、眞正の戀愛と眞正の藝術とを殺さずんば止まぬこと、靑年を無氣力ならしめ、若い女を打算的ならしめることなどを、深く慨嘆したやうな語調で論じた。私は時々合鎚を打ちながらそれに耳を傾けてゐた。そして心の中ではこの友の見識と才氣とをまた更に驚嘆して、わづかに夢のやうな詩を書き散らすばかりの自分の貧しさを深く憫れんだ。

路から少し小高くなつてゐる左手の草原にはクロオヴアの花が紅く白く、いかにも柔かに鮮かに咲き亂れてゐた。友は手を伸ばしてその花を一つむしり取つて、匂ひを嗅いだり、葉をちぎつたりしながら、

「花はどんな花でもいいね、まあ此の匂ひを嗅いで見給へ」と私のつい鼻の下まで持つて來て、「匂ひが無いと云つても、花にはきつと匂ひがあるよ。匂ひ、匂ひ、匂ひの無いやうなものは駄目だ。現代に蔓つてゐるものを見給へ、收賄、詐欺、賭博、僞善、一として匂ひのあるやうなものはないぢやないか。あればそれは惡臭だ。さうだ惡臭だ、到るところ惡臭紛々としてゐる。だが君、君だけはこの花のやうないい匂ひのある詩人になつてくれたまへよ」

「全くだね、僕も本當にさう思ふ。つくづく厭やになつてしまふ。何方を向いて見ても、黄色つぽい風ばかし吹いてゐる。到るところただ僞善と、暴虐と、不義とがあるばかりだ。殊に僕は近頃木下尚江のものを讀んで、一層さう思ふんだが、本當の詩人ならばかうした社會の不合理を平氣で看過することは出來ないと思ふんだ、……僕はどんなに苦しくとも、淸い、純潔な心を失はないで、美しい純情の詩人でありたいと思ふ……」

「さうとも、さうとも」と友は力强い同意を與へて、「一つ君の近作を讀んで聞かせたまへ」

幸ひあたりに人もないので、私は懷のノオトを取出して、顫へた聲で調子をつけて二三日前に作つた詩を讀み始めた。

われは燕にあらねども
去年のふる巢のくづれては
鳴く音もしげきいとなみに
都の泥をはこぶなり

「どれ見せたまへ」と友は性急にノオトをひつたくつて、心から悲しげな、パセティックな聲を上げて、そのあとを讀み續ぐ。友の聲は昔から評判のもので、校友會の時にはいつも作文の朗讀をして拍手喝采を受けたものである。彼の演說がいつも大變な成功をかちえたのも、一つにはその聲の所爲たつたに違ひない。彼の聲は人の心に突き入るやうなところを有つてゐる。

われは燕にあらねども
海原こえてはるばると
こひしき國に來て見れば
こともさびしき世なりけり

「成程、うまい、ここも寂しき世なりけり、さうだ、全くさうだ」と感嘆して、さてまた、

われは燕にあらねども
ここも海原すさまじき
浪のどよもす音きけば

都かなしく鳴くものを

「都かなしく鳴くものを……」と彼は何遍も年古い名だたる酒でも味ふやうに、しみじみと繰返してゐたが、

「いい詩だ、泣菫といへどもこの眞率な哀調は有つてゐない、僕はつくづく思ふよ、君は生れたる詩人だ、本當の詩人だと……」さう云ひながら、友は時々立止まりながら、なほそのあたりの「ああ虐げられたるものの涙流る」と云つたやうな激越な詩を讀んでゐたが、やがてそのノオトを私の手にかへして、しみじみと私の顏を見ながら、

「人はよく自惚と云つて笑ふが、僕は毫も笑ふべきものでないと思ふのだ。人は人、自分は自分だ、人は何と云つてもいい、自分だけは信じてゐたらそれでいいぢやないか、ね君、自信を失つちやいけないよ」と云つて、ひとり頷いて、「さうだ、自分の作の最愛讀者は自分なのだ。自愛したまへ！」

そのうち右側の畑が盡きて、家がぽつぽつ建つてゐる。とある家の前まで來かかると、丁度その家の前で遊んでゐた五つ六つの男の兒が、いきなり二人の方へ驅け寄つて、丁度T君がまた鼻の下へ持つて行つて匂ひを嗅いでゐたロオヴアの花を見上げて、

「兄ちやん、その花おくんなさいな」とあどけなく云つて、小さな手を差出した。色の白い、眼のくるくるとした、睫毛の長い兒で、可愛らしく二人を見上げてゐる。

「アア、可愛い坊ちやんだね、おいくつ？」と友はやさしく云つて、そつとその頭を撫でて、右手にささげてゐた花をその手に渡した。

「兄ちやん、有難う」と子供は可愛く云つて、にこにこしながら、家へ驅け込んでしまつた。友はそれを目送してゐたが、

「ねえ君、野に咲いて野に萎むあの花だ、罪のない子供の手に渡つたら、むしろ本望だらう」

「さうだとも」と答へたまま、私は暫く黙り込んでゐたが、

「僕は何だかこれで君と別れるやうな氣がしない。隨分慌しい別れだね。僕も此頃は何故だか知らないが、妙な空虚なやうな寂しい感じがしてならない、それで君の悲みが一層深く身に沁みるやうな氣がする」と云ふと、友は頷くやうにして、

「さうだね、僕も暑中休暇で學生が歸省でもするやうな氣もするよ。然し君、僕は歸つた方がいいのだ。詩人が云つたやうに、神は田園を作り、人間は都會を作るだ。都會は罪悪のはき溜だ。田舎は自然の慈母の懷だよ」

小徑を出ると、大久保の方から來てゐるかなり廣い通りがあつて、荷車が通つたり、通行人がそこらを歩いたりしてゐる。二人はその道を横つてまた小路へ入つて行つた。靜かなところへ行くと、僕は少し躊躇しながら訊いた、

「して、そのなくなつた人はどんな人なんだね、幾歳ぐらゐだつたんだね？」そして私の心の中には、友は歸國するのだ、そしてその郷里には、その愛する女性の遺骸が待つてゐるのだと思つた。また『片われ月』の女主人公が私の頭に浮んだ。

友は寂しく笑つて、煙草の吸ひさしを投出して、手をズボンの衣嚢に突つ込んで、

「君にはわざと話さなかつたんだが、悪く思つてくれたまふな。お美代と云つて、僕の從姉に當る女だ、君がまだ國にゐた時分に、僕の家に遊びに來てゐたのに會つた事があるかも知れない。今年十九になつたばかしだ。たに、つまらない娘だつた。そのことはもう云つてくれたまふな、僕はもう諦めてゐるから……僕の胸に記憶として殘つてゐる限りは、死んだのぢやない、まだ生きてゐるのだ、生きてゐるとも！」と云つて、ぢつと高く澄み渡つてゐる初夏の空を見上げたが、急に私の方に眼を轉じて、あまたたび瞬きして、

「僕は近頃『死』といふ厳粛な、畏ろしい人生の大事實が、實際自分の直ぐ隣まで來てゐるやうな氣がしてならないん

だ。つい此間も、郷里で一緒に勤めてゐた事のある景山と云ふ女教師が自殺したがねえ、いろいろな複雜な事情があつての事なのだが、新聞には單に墮落の結果だとしてあつた。その前には松田さんと云ふのが死ぬし……」

「ホオ、自殺した、可哀さうなことをしたね。僕は自殺した人の事を聞くと、生きてゐたいのは誰でも同じ事だのに、自分の手で絶ち難い生の執着を斷つたかと思ふと、悲壯な氣持がするのだ。そして僕自身もよく自殺といふことを考へる事があるよ」

「どうせ仕樣がないよ。我々は自殺した氣で生きて行くんだね」と友はしんみりと云つた。

「それはさうだね」私はその一語にいたく動かされて嘆息した。友は更に語を次いで、

「何だかみんな死んで行つてしまふやうな氣がする。今年になつてから、先づ伯父がなくなるし、松田さんが死ぬし、……もう何人知つた人が死んだか知れない。それが皆人の事だとは思へないんだ。その都度、自分が死ぬやうな氣がするんだ、尠くとも自分の一部分が死んでしまふやうに感ずる。非常に心細くてたまらない。人生といふものが實にはかなくて、無意味なやうな氣がしてならない」とすつかりセンティメンタルな調子になつて、「僕が郷國に歸るのは、一つはその爲めでもあるんだ。親兄弟の聲でも聞いてをれば、少しは力強くもならうかと思ふんだ。僕も弱くなつたものだね。まア、その間に、しつかり書物でも讀んで、新しく生れ變つて來よう。君、自分の味方は結局自分一人だ、さう思つて自愛したまへ」かう云つて、友は私の手を握つて、强ひて笑つた。私は心底から眞面目な人に造り改められたやうな氣がした。そしてこの親しい友との間に、何だか犯し難い嚴肅な大河が流れ始めたやうにも感じた。

淀橋の大通りの、新宿の踏切近くへ出た。

「ぢや、此邊で別れよう」と友は云つた。

「さう、では——どうか身體を大切にしてくれたまへ」

「君こそ大切にしたまへ。大切な身體なんだから……」

二人は暫く對ひ合つて彳んだまま互に顏を見合せてゐた。やがて友は思出したやうに、

「君の祖母さんに何か言づては無いかね？」私の祖母は故郷の町に一人住んでゐるのである。

「ア、逢つたらよろしく云つてくれたまへ」

「アア、いろいろ君の樣子を話して上げよう、では御機嫌よう」

「御機嫌よう、さやうなら」二人はもう一度笑顏を見交して、かたく手を握つた。

さて、友は步き出した。私は暫く其處に彳立して、新宿の方へ立去るその後姿を見送つた。眞直に伸びた正しい姿勢、しつかりした從容迫らぬと云つたやうな態度、これがどうしてまだ十八ぐらゐの少年と見えよう、それは一個の若い紳士のやうであつた。私は此の人が自分の親友であると今更に思つて、何とも云へぬ嬉しい氣がして、雙手を頰へ當てたのである。

一月の後、自分の出した手紙の返事が來た。――

御手紙拜見仕り候、不本意ながらの延引、悪しからず、敢て辯明は申さず、肉體も精神も共に忙し、定めて君も然らむ。境遇が變れば思想も變る、悠々自適が必要にて候。君と別れて早や一ヶ月は經過いたし候。淀橋の通りにて盡きぬ別れをなせし事も、携へ給ひし詩稿も、愛らしき子供に與へしクロオヴアの花も、共になつかしき思出にて候。

其後如何、ただただ味方は自己一人、友は自己一人の感を以て、自愛せられむことを切望いたし候。祖母君にもお逢ひ申し候。君が前途の使命を思うて、歸國の不可を懇々と說明致し候。君よ、眞の愛は骨肉以外には容易に現るるものにては無之候。

君よ、到る處人間は小にて候。

君の手紙は野生をして大なる崇敬の念を起さしめ候。乞ふ自重せよ。いづれ餘は後便にて、その單なるを許せ。

T――生より

S――樣

忘れえぬ少女

その頃私は動坂の方の、ある素人下宿にゐて、ある本屋の仕事をしてゐた。その仕事と云ふのは、いろいろな雜書の編纂で、何よりも根氣が要つた。私はコツコツと毎日々々よく倦きもしなかつたものだと驚かれるほどよく働いてゐた。中でも某博士といふ靑年學生間に人望のある學者の等身に及ぶ著書を涉獵して、その中から警句や、敎訓や、格言を拔萃する仕事はかなりの大仕事で三月位もかかつた。なかなか面倒な仕事ではあつたけれど、その以前から博士の崇拜者であつた私は、さまで苦しいとも思はず、むしろ張り合ひと張り詰めた氣分を以て、貸本屋や友人から借りて來たり、圖書館に通つたりして、博士の著書は一册も洩らさないで讀んでは、一般の讀者の心持を察すると云ふよりは、むしろ自分の感心した個所を原稿紙に寫し取つた。そして家にゐて一日且つ讀み且つ筆寫して、仕事に疲れた時には、窓をあけて、窓の敷居に腰かけて、さまで廣くもない庭を眺めながら、ぼんやり取り留めのない事を思ひ耽るのであつた。

私には戀もなかつた。散歩などをして、通りすがりの美しい女の姿を見ては、徒らに心をときめかして、その瞬きの間に行き過ぎてしまふ華かな顏かたちの名殘を惜み乍らも、振返つてまで見る勇氣はなくて、流れる花のそのまま

流れるにまかすやうな物足りない寂しい氣持になつて、その女の人が美しければ美しいほど、その顏が自分の好みに合つて心を惹付けられれば惹付けられるほど、一層センティメンタルな厭世的な、ただ何がなしに、人生の無常……不如意……などと云つたやうな漠然とした哀感にすつかり意氣を沮喪させられながらも、その一番心に沁みた面影を大切にかき抱きながら、ひとり寂しく下宿にかへつて、机の前にぼんやりすわり込んで、何時間もそのままぢつとしてゐるやうな事も多かつた。いつでも胃袋のやうに、心が空ツぽなやうな氣がしてゐた。けれどもその空虛を滿たすすべもなく、第一なぜそんな氣がするか、その原因も自分で悟られないで、いつでもその悲哀寂寥の感を「生きてゐるのは辛い……」と直ぐ一般的に生活の方に結び付けて、自分の境遇を悲しみながら、「でも仕方がない……」と抑へ付けては、また仕事に精を出すのであつた。私には戀がなかつたのだ、戀の對象にすべき女性がなかつたのだ。若しそんな時、自分のゐる下宿に若い娘でもゐたなら、よしそんなに美しくはないとしても、直ぐはかない片戀の對象にしたであらうに、生憎、良人に死に別れたお婆さんに何處かの會社に勤めてゐる息子と、ただそれだけの寂しい家庭だつたので、いつもゐるのかゐないのか分らないやうなおとなしい書生さんと呼ばれてゐた私は、心の中までも哀れなおとなしさに過すの外はなかつた。私の遣り場のない情熱は慘めな内攻を遂げて、僅かに藤村張りのセンティメンタルな詩や、新詩社風の華かな歌に、そのはけ口を見出してゐたばかりであつた。けれどもあてのない戀の歌は、徒らに空虛な響を反すのみで、張り合ひがなくて、つまらなくて、味氣なかつた。

そのうち私の餓ゑた情熱は、つい間近に、長い間空しく荒野をさまよひ歩いてゐた獅子のやうに、食を選ばぬ獲物を見付けたのである。もつとも、今餓ゑた情熱と云つたのは誤解される虞れがあるから、むしろ餓ゑた愉悅と訂正した方がいいかも知れない。

私の窓の外は前に云つたやうにこの家の庭で、その庭は玄關の方から家の横を通つて裏に延びて、そこでかなりな

擴がりを取つたもので、隅に寄つて松の樹や、梅の樹や、百日紅の樹などがあつて、その中にかなり高い銀杏の樹が出來るだけ枝を空へ張つてゐた。空地はいつも洗濯物の乾場にされてゐて、お婆さんのユモジからホカホカと暖かさうな湯氣が立つ時などは、私も少し閉口したものである。裏の家との隔ての垣根のところに車井戸があつて、二軒の家で共用になつてゐた。裏の家はいつもひツそり閑とした實に物靜かな家で、子供のない夫婦暮しであつたが、細君といふ人は人好きのしないむツつりした人で、井戸で落合つたとき、宿のお婆さんが、「今日はいゝお天氣で……」とか、「どうやら雨になりさうな模樣でございますね……」などと挨拶をしても、ただ「へえ、さやうで……」と答へるだけに過ぎなかつた。主人と云ふのは中學の教師だといふことであつたが、毎朝井戸端へ出て來ては眞裸になつて、小半時間も全身をゴシゴシ摩擦して、眞紅になつた身體から溫かい水蒸氣の上るのをさも愉快さうに、自得した顏付で逞しい兩腕を撫しながら眺めて、それから學校へ出かけて行くのであつたが、これもまた細君にゆづらぬむツつり屋さんで、宿では、「似た者夫婦だ」と云つてあまり評判がよくなかつた。ところが或日、その中學教師夫婦は何處かへ引越して行つた。

その次ぎの日の夕方、私が圖書館から歸つて來て、袴を取つて、餘り暑いものだから窓をサツと開けると、私はハツとした。前の井戸端に一人の女が水を汲んでゐたのだ。障子を開けた音で彼女もひよいと此方を向いた。脊の高いほつそりした女で、むしろ長すぎる位の細面の鼻のツンと高い、何處か冷たいやうな感じはするけれど、街路などで出會つてもかなり目に着きさうな、まづ美人と云つていい女である。年はどうしても二十は越えてゐる。私は瞬間にそれだけのことは見て取つたが、急に先方には聞えもしないやうな聲のくせに、辯解でもするやうな調子で、「アア暑い！」と呟いて、障子のかげの机の前の方へ引込んでしまつた。然し心の中は忙しかつた。どんな家だらう、あれは細君かしら、それともまだ娘かしら、幾歳ぐらゐだらうなどと頻りに思ひ耽つてゐた。何だか細君のやうに思

はれて仕方がなかつた。然しそれは細君ではなかつた。

翌日、茶の間にお茶を貰ひに行くと、所在なささうに息子の着物の仕立直しをやつてゐたお婆さんが私を引止めて、世間話を始めた。私も仕方なくお茶を飲んでは「は、は」と返事ばかりしてゐるうちに、話は裏の家のことになつた。私は急に心を緊張させて、時々は此方からも問ひを出したりして聞いてゐるうちに、大體のことがわかつて來た。今度のうちは、昨夜もかなり騷々しく、女の華かな笑ひ聲や、男の子の聲で薩摩琵琶の眞似などしてゐたので多人數だとは察せられたが、果して、老人の夫婦に子供が五人もあつて、何でも恩給で生活してゐるらしく、それに姉娘が電話交換局に勤めていくらか家の足しをしてゐるらしいが、中學へ行つてゐる長男の外、小さな子供が二人もあるのだからなかなか苦しからうとお婆さんは同情してゐた。昨日のあの女は姉娘なのだなと私はひとりで合點した。それから私は始終氣を付けてゐたが、その後は姉娘は一向出て來なかつた。水汲みに出るのは、いつも母親か妹娘だつた。この娘は姉とは違つて、容貌が惡かつた、しかもどうしたものか凡てが姉とは反對に圓かつた、圓顏で眼も圓くて、鼻がちよつぴりとつまんだやうに付いてゐて、頰が紅かつた。脊も低い方で、よく肥つてゐて、身體全體に愛嬌があつた。それによく笑つた。井戸端で此家のお婆さんと落合つた時など、お婆さんの話に對する返事の半分は笑ひであつた。家の中でも始終笑ひ聲がしてゐたが、それもみなこの妹娘の聲だつたらしい。私は初めこの妹娘には一向注意も向けないで、ただ一遍見た、むしろ長すぎる位の細面の姉娘の顏を見たいと思つて、水汲みに裏の家の人が出ると、すぐ障子の穴から覗いて見たが、いつでも母親か妹娘かだつた。家のお婆さんは、いい話相手を見付けたと、洗濯などをやりながら、井戸端で母親と話し込んで、毎日々々親密になつて、しまひには頻りに往來をしたりして、到來物や、時折りの御馳走をやつたり貰つたりするやうになつたが、そんなものを持つて來るのもやつぱり母親か妹娘かだつた。私はわざわざ廻り道をして、竹村と小さく標札の出てゐる裏の家の前を通つて見たりした。その後一度通りで姉娘に

出會つた。眞直向いて、反身になつて歩いてゐたが、私が頻りに顏を見て一寸お辭儀でもしさうな樣子をしながら、もじもじしてゐると、彼女は急に私の顏をぢろりと見て、そのままた知らん顏をして、ツンとすまし返つて行つてしまつた。私は一寸その後姿を振返つて見て、何だかひどく侮辱されたやうな氣がして、心の中に瘤でも出來たやうな嫌やな不愉快な氣がした。

「いやな女だ！」と私は心の中で云つた。「妹娘がかはいらしくていい」私はさうも考へた。

それから暫くしてだつた。ある夕方、私は窓をあけて、薄れ行く外光のもとで、熱心にツルゲエネフの作品を讀んでゐた。その頃私は詩や歌ばかりでなく、小說でさへも聲に出して讀む癖があつた。勿論、小さな聲であるが、興に乘ずるといつか高聲になつてしまつてゐた。その時もいつかすつかり周圍を忘れてしまつて、いい氣持になつて、恰かも自分が作中の主人公ででもあるやうな氣で、頻りに昂奮して讀んでゐると、不圖くすくす笑つてゐる聲が耳に入つた。何かと思つて、ふつとその方を見ると、裏の家の妹娘が井戸端に水汲みに出て來てゐたのが、水桶をそこへおろした儘、梅の樹の下に佇んで、私の方を見ながら、さも可笑しくて堪らないやうに、身體をひねつて笑つてゐるのだつた。娘は私の眼に出會ふと、どぎまぎして急いで釣瓶をたぐり始めた。私は私で、またすつかり赧くなつて、途方に暮れて、急いで障子を閉めてしまつた。あとでは姉娘が家の中から、

「咲、どうしたんだえ、騷々しいぢやないか」と云つて、頻りに妹を叱つてゐるのだつた。

そんな事があつてから、彼女はよく私と途中で行き逢つたり、顏を見合せたりするやうな時には、默つて恥かしさうに頭を輕く下げるのだつた。私も同じやうにして、その度びこのよく笑ふ娘が好きになつて行つた。そしては仕事に疲れた夜などに、あかりをぢつと眺めながら、裏の家の姉妹を比較しては、美しいものの冷たさ……などと云ふ事を考へた、美しい女はどうしても自分の美貌を恃みすぎて、高慢でいけない、そんなに美しくはなくとも溫かい女の方

が僕にはいい……などとも考へた。咲子、咲子、咲子……などと原稿紙のはしにいたづら書きをしてゐるやうなことさへあつた。私のはかない片戀はいつの間にか姉から妹の方に移つてゐるのだつた。

けれどもそれも長くは續かなかつた。三月ほどすると、裏の家は他所へ越して行つてしまつた。何でも姉が今度ある船員のところへ嫁づいて行くことになつたし、妹娘は奉公に出すことになつたので、もつと狭い家に引越すのだと母親が挨拶に來て話した。移轉さきは田端の方だつたが、妹娘はどんなところに奉公に出たんだらうと、その後私はいつでもいろいろと想像しては、がつかりしたやうな、自分の手の中の珠を奪られてしまつたやうな、はかない氣持になつた。

間もなく私は外國語の勉强を始めて、神田の學校に通ふことになつて、なるべく學校の近くをと思つて麹町の方へかはつたので、いつかその娘のことも念頭から遠ざかつてしまつた。が、それから半歳ほどして、ある日動坂にゐる友人を訪ねた序に、いろいろ世話をしてくれたお婆さんの親切を思ひ出して、もとの下宿へ寄つて見たら、お婆さんが大變喜んで、いろいろ歡待してくれて、私には餘り興味もないやうな話をあれこれとやり出したが、その中に急に私の胸はドキドキしだした。此間裏にゐた竹村の細君が立寄つて、咲が此頃男をこしらへて何處かへ姿を隱してしまつて、一生懸命探してゐるけれど、一向居所が知れないと泣いて話したと云ふ思ひがけない話だから。

「あんなおとなしい娘がねえ……」とお婆さんも驚いてゐた。私はそれを聞くと、何だかあり得べからざる事のやうな不思議なやうな氣がしたが、やがて寂しい、暗い、何とも云へない索漠たる氣持で、同時にまた彼女のやうな快活な娘は不幸に陥りやうがないと考へて、その幸福を祈りながらお婆さんの家を辭し去つた。

星

新阪の或る下宿屋の二階に友と相對してすわつてゐた時だ。
ふと窓の方を見ると、靑白い星が一つ目についた。磨硝子のまん中に普通の硝子がはめてある、その少し右に寄つた方にたつた一つ、ぴかりぴかり凄く光つてゐる。なかなか大きな星である。
外は暗い。硝子の面は妙に深味があつて、丁度萱草の野原のやうでもあるし、また大きな海原で、星の光りは船舷燈のやうにも思はれる。室內の燈火と云へば、天井にくつ着けた高い電燈であるし、それに窓が遠いので、一番右の端の硝子だから、ただわづかに室內に行き渡つた光が序でのやうに撫でてゐるばかりだ。
私はこの硝子の奥に何か不思議な國でもありはすまいかと思つた。それは一つの知られない世界で、其處に我々の夢想してゐるやうなものがあるやうな氣がしてならない、どうも言葉に出して見ると何だか無意味になつてしまふけれど。
「君、星が一つ見えるぢやないか」
何か面白い言ひ廻しもあつたらうに、ついこんなことを言つてしまつた。すると友は半分ばかり吸つた煙草を深く灰の中に突つ込みながら、
「星かい、ありや毎晩見える」と、ぢつと窓の方を見て、
「それが不思議なんだ。いつも一つ同じやうな星が硝子戸の左から出て、僕が寢る時分には定まつて右の方へ隱れてしまふのだ。それについて僕は妙なことを考へた。君はホルマン・ハントの『世界の光』といふ繪を見たことがあるかい。

あれさ、僕はあの星を見ると直ぐあの繪を思ひ出す、そしてね、あの星が基督の手にさげた燈明ぢやないかと思ふのだ。どうも神がこの硝子の奥に居て、そして同時に僕等の胸に宿つて居られるやうな氣がして仕樣がない」

新しい煙草を取出して火をつけながら、友はぢつと私の顏を見た。私は二人の思つてゐることがひどく似通つてゐるので、一種の神祕的な心持を覺えた。そして何がなしに、

「ふうむ」と感嘆して、窓の方を見ると、いかにも星は少し右の方へ寄つてゐる。

さういふ事から、二人は一しきり星について話し合つた。

友は語つた。

彼がまだ小さな子供であつた時、ある夜、母に連れられて二里あまり隔つた田舍へ歩いて行かねばならないことがあつた。母が父とひどく言ひ爭ひをして、すつかり昂奮してしまつて、子供を連れて實家へ歸る氣になつたからである。途上母はすつかりセンティメンタルになつて、なくなつた父親の事や叔父の事や、また長女の事を話して、ふと天を指して、

「みんな彼處に行つてしまつたのだよ……」と意味深さうに言つたので、幼い彼は天を仰いで、

「ではあの星がさうなの？」と訊くと、母はしづかに頷いて、

「アア、あの星になつてしまつたんだよ。そしてね、私たちも今にあの星になるのだよ」と云つた。その時の母の悲しさうな顏つきとしんみりした聲とは今に忘れない。かう話して見ると何でもない、つまらない話だが、靜かな、風もない秋の夜で、星の光りがとりわけ美しく眺められたその折りの心持は、何だか自分の生涯に深く沁み付いてゐるやうな氣がすると友は結んだ。

私もまたさうした子供の時の記憶を話したが、それから二人はあの星の光が地球に到達するのに驚くべき年月を要

するといふ宇宙の廣大さを嘆じ合つた。そして私はまた、曾つて、女々しい煩悶に沒頭してゐた時、ある友人から「あの星を見給へ、實に美しく淸らかぢやないか、あの星の下で、つまらん事をくよくよ思つてどうする？」と言つて勵まされて、心の底からすつかり感動してしまつたことなどを話した。

暫くして歸らうと思つて立上つて見たら、星は磨硝子の方へ隱れてゐた。窓の下には、螢合戰のやうに、ずつと街の灯が入亂れてゐる。外へ出ると暗い夜の空に、病人のやうなたくさんの星が寂しく瞬いてゐた。しかし、そのうちには、あの硝子の中の星らしい星は見えなかつた。

帽子

ポストがぼんやり立つてゐた。手紙を入れようと思つたが、切手を賣る家がない。一體切手を賣る家はポストのつい傍になくちやならんのだが、此のポストの横は勸工場だ。

「まあ兎に角入つて見よう」と森が云ふ。

「よからう」と氣まぐれものの二人は、廣小路の寒い風に吹きさらされた顏を並べて、手紙をさげたまま入つて行つた。中はむつと暖かい。

見るところ眞四角な建物らしいが、同じところを二度歩かせないのは、なかなか工合よく仕切つたものだと、まづ感心する。狹い路の兩側に、同じやうな店がづらりと並んで、同じやうな男や女が番をしてゐる。若い娘もちよいちよいゐる。あまり光彩のない文房具店でも、若い娘が賣子だと、つい立止まつて、何か買つてやり度くなるのも、御

同様、若い男の若い男たる證據なんだから、餘り非難して貰ひ度くない。

此處はすでに電燈がついてゐる。いや、一日電燈がついてゐるのらしい。

「妙だね」と云ふと、森は妙にすましこんで、

「暗いからさ」と云ふ。暗いのはわかつてゐるが、晝も電燈を見て、洞穴の中のやうなところに若い女がゐると云ふことが妙だと思つたのだ。

ひよろ長い森の後について、ぐるぐる廻つてゐると、ぱつたり階段に突き當つた。その横に小さい硝子戸があつて、「みだりに出入を嚴禁す」と張紙がしてある。

「どうするのだ」

「まだ二階がある」森は用捨なく階段を飛びあがる。兎のやうな男だと思ふ。僕等のあとから女學生の一群や、若い夫婦連れや、肥つた老人などが來たが、みな買物をするから後れてしまふ。二階をぐるぐる見廻ると、また三階があつた。行けば行くほど遠くなる路のやうだ。辿りついた穴の奥に、狐の子が一匹ちよこなんと坐つてゐさうな氣がする。

窓である。森は何と思つたか、立止まつて下をじろじろ見下した。群集がうぢうぢ這うてゐる。そのなかを虎のやうに電車が走る。

「かうして見ると憫れむべき蠢動ぢやないか」と森はさも輕蔑したやうに云ふ。

「カアライルはどうだい？」森は大好きなカアライル、そのカアライル式の毒舌に長じてゐる。

「鼻糞を丸藥にひねつて、投げつけて、當つた者を大臣にしてはどうだらう、かね」

「それも面白からうが、さしあたり大臣の空席が無いやうだから、まあ止しておかう」

「それもさうだね、桂内閣が朝鮮か何處かへ移轉してくれればいいのだがね。まあ步かう」

銀貨の音がする。銹びた笑ひ聲がする。やがて下りになる。階段を下りる時は、森も威勢のないこと夥しい。ふと彼はふりかへつて、

「何か買はうぢやないか」と僕の頭をじろじろ見てゐたが、

「君は帽子がないぢやないか」と云ふ。髮ののび放題な頭を撫でて見ると、成程ない。今迄帽子をかぶつてゐるやうな氣でゐたが、もとから無いのだ。

「ぢや買ひたまへ、買ひたまへ」としきりに勸める。たうとうとある店の前で立止まつた。五十錢だ七十錢だといふ鳥打を、すぽんすぽんと僕の頭へかぶせて、しきりに、

「似合はん、似合はん」と云ふ。人の頭をおもちやにすると云つて腹を立てても、森は僕より二寸せいが高いから仕方がない。店の男がしつこく勸める。森は少しうるさいやうな顏したが、

「これはどうだ」と緣の廣い黑の山高を、すぽんといきなり頭にかぶせた。鼻のところまで來たので、眼が見えない。

「おい、冗談はよせよせ」

「何、いいぢやないか。これにせよ、これにせよ、詩人はこんな帽子をかぶるものだ。ヹルレエヌのかぶりさうな帽子ぢやないか」

ぬいで見ると、なに、いつかキブソンがかぶつてゐた帽子にそつくりだ。

「いや、キブソンのかぶつてる帽子だ」

「う、キブソン、キブソン、さうだ、彼奴がよくかぶつてるな。ぢや、君にはいけない」と森は大きな聲で叫んで、その大きなキブソン式帽子をもとにかへした。キブソンとは僕等の教會の牧師で、亞米利加人の弱點を十分に具備し

てゐる人物である。

たうとう七十錢の鳥打にきめた。

「君はひどいことをするよ、キプソンの帽子には驚いたよ」と少々恨んでやると、

「よく似合ふ、よく似合ふ」と森はこの最も平凡な鳥打帽を激賞してやまない。

いつのまにか、我々は自然と出口に出てゐた。ポストを見てびつくりした。

「君、手紙は知らぬか」と云ひながら、あはてて懐を探つて見ると、そこにちやんとあつた。萬一、落して人に見られたら、少々ならず恥しいことがその中に書いてあるのだから、今の一言には平常でない語調があつたのは云ふまでもない。けれども森はそのいづれについても知らないのだ。

「大變なことをした、肝腎の切手を忘れちやつた」

「なかつたやうだぜ、勸工場で切手を賣るものか」と森はどしどし歩く。

僕も仕方がないから大切な手紙を大切にかかへて、後について行つたが、ただ紅いものや青いものが眼さきにちらちらしたばかり、生れて始めて見た勸工場は要するに頭をぼんやりさせたばかり、何だか忘れものでもしたやうな氣がする。

二人は久しぶりで、西郷南洲の呑氣な顔を見るべく、公園に入つて行つた。

郊外の路

郊外である。あまり廣くもない、一筋の乾いた路が、灰色に果てしなく續いてゐる。田の中、畠の中、村落の中、林の中、河の中を横斷して、恐らくは盡きるところまでは續いてゐるのだらう。歩く度びにパッパと砂塵かはねあがる、足袋と下駄との間がざらざらしてゐるのはまだいい、足の裏と足袋との間のざらつくに至つては氣持が惡くてならない。

それは、あだかも田の間を通つてゐる時だつた。頃は春らしい。春だと記憶する。何でも遙か遠方に一抹の靑を横たへて、うす霞んでゐる山なみから、つい僕の足もとまで、生意に充ちた色彩が層をなしてゐた。嬉しさうに緑の着物を見せびらかしてゐる丘の上には、ちらほらと薄くれなゐに花の模樣が織りなされて、陰氣な松の樹がその間に頑固親爺のやうに頑張つて、てこでも動かないぞと云つたやうな氣勢を見せてゐる。路の傍らにも若草が子供の遊びのやうに、氣まま放題に轉げ込んで、陽炎がほのかにゆらゆらと立ちのぼつてゐる。頰を撫でる風はなまぬるく、憚るやうにそろりそろりと忍んで來ては、ついと素早く撫でさすつて、いつか後へ飛んで行つてしまふ。ほかほかと暖かい日影に、木の葉の上の露とともに身體が溶けて行きさうである。

僕の前を急いで歩いて行く男がある。握つてだらりと垂れた兩手の拳が馬鹿に大きい。草履をひつかけた足は毛むぢやらだつた。黒つぽい著物を着た肥つた姿が、何だか牛のやうに見える。顏は見えないが、いづれ何處かこの邊の若い者だらうと思つた。その男が非常に早く歩くものだから、それに引きこまれて、何と云ふことなしに、僕も早く歩かなければならないやうに思つて、下駄を烈しく引きずつた。

その男の三四間前には、派手な矢がすりに、海老茶の袴の色彩を入亂れさせて、一人の女學生が靴を高く擧げて歩いてゐる。追はれる小鳥のやうに慌しげに歩いてゐる。僕はかの男の肥つた强さうな後姿と、このほつそりしたかぼ

そい姿とを見くらべると、何となく穩かならぬやうな氣がして來た。若しかこの男は女學生のあとを尾けてゐるのではあるまいか、ふと僕はかう思つた。そして無意識に僕は後にふり向いた。すると一寸うしろにきらりと光つたものがある、巡査のサアベルである。黑い服からは一直線に白い煙草の煙が靜かにのぼつてゐた。それを見ると僕は何だか安心したやうな氣がしたが、直ぐそのあとから今度は自分も女學生を尾けてゐるやうに思はれはしないかと云ふ危虞が不意に心に浮んで來た。僕は一體、いつでも人通りの餘りない寂しい路などで、若い女の後について行かねばならない破目になつた場合は、事實何でもないのだけれど、ひとりで氣が咎めて、その儘に歩いて行くことが出來ないので、わざと足を遲らすか、それとも走るやうにしてその人を追ひ越してしまふのであるが、そのいづれの道を取つても苦痛感は敢て變りがない。第一の場合には追ひ拔けるまでの瞬間が、追跡してゐるやうに思はれはせぬかとの恐怖を數倍にしてその間だけに縮めるのだし、後の場合には故意に足をゆるめるのが退屈でもあり、焦立たしくもなつてくる。それでどちらかと云ふと、やつぱり驅け拔けた方がまだましである。そしてその度毎に、自分の神經質と臆病な心とを呪はしく思ふのである。

　然し此際は、さうした苦痛に對してはかの牛のやうな若者が一種の安全瓣とも云ふべきで、反つて有難くも思つたけれど、それでも、何だか急に恐ろしく耳につき出したやうな氣のする巡査の靴音をおもふと、なんだか自分がこの若者と同じ仲間の者のやうな氣がして來て、いづれにしても氣が落着かず、いつそ田の中に縱横についてゐるあぜ路へでも逃げ込まうかとさへ思つた。然しそれもならず、いい加減な間隔を取りながら、目を絶えず前に、心は後に注ぎながら歩いてゐた。

　何處か遠方で長閑に鷄の鳴く聲がした。何だか急に馬鹿々々しい氣がしてくる。あまり氣がくさくさするから、近郊散策に出かけて來たのだに、こんなつまらぬ事に心根を勞するとは何といふ愚かな事であらう。何といふ妙な性癖

だらう。一體どうした事だと自分で自分を叱つて見た。

そしてはつと氣が付いて前方を見ると、燃えるやうな袴の色、女學生の脊の高い若竹のやうに潑剌とした姿は、小さな靴を輕く動かす威張つた歩き振りで、何事にも無關心なやうに、やつぱり同じ歩調で歩いてゐる。男はどうした、から思つて目で探すと、右手の田中道を丸い男が急いでゐる。あれだ、あれに違ひないと呟いた。すると急にまた不安な心持が二倍になつた。我知らず後を見ると、巡査は遠方にその脊の低い後姿を見せてゐる。何のことだ、元來た方に引返したのだ。僕はホッと溜息をついた。そしてどうも春さきのせゐか、自分は此頃頭がどうかしてゐるのぢやないかと、然しそれほど心配もしない、餘裕を以て考へた。

それから十丁ほどの間、十字路上で東西に別れてしまふまで、それまで餘り何方にも氣を使つたせゐか、その時だけはもうすつかり女學生の心持に對する氣兼を失つてしまつて、その若い女の威張つたやうな後姿を見ながら、埃の中に微かに殘つてゐる少し外輪の靴のあとを踏みながら、僕は何となく、くすぐつたいやうな氣持を抱いて歩いてゐた。

こがらし

駒込の奥の小さな湯屋だ。朝の十時、男湯の方は客が一人もない。僕は少し熱すぎるやうに思はれる湯槽に下屛の近くまで沈めて、細い眼をしてあたりを見廻した。隔ての硝子戸は少し曇つてゐるけれど、つまらなさうにぼんやりしてゐる娘の顏が、美しく番臺の上に見える。いつも歸り際に、僕にはとりわけ丁寧に挨拶してくれるやうで嬉し

い。いや、實はそればつかりで、近くにいい湯屋があるのに、わざわざこんな見すぼらしい家に來るのだ。

浴室は甚だ透明だ。人がたくさん來だすと、湯氣が立ちこもるから妙だ。やたらに手拭でざぶざぶ顏を洗つてゐると、ふと電線に引つかつてゐる破れ凧が目に付いた。横手の窓に二枚の硝子戸がついてゐる。ところどころ白紙で間に合せたところもある。窓の外の空地には、勢ひのない竹やらひよろひよろした松やらが植はつてゐる。その低い板塀の向が小さな路だ。この小さな路はやや大きな路からわかれた枝である。電線はそのやや大きな路の上に流れてゐる。凧は丁度、何とか云ふ華族の家の石垣の上あたりに引つかかつてゐる。寒い風にぴゆうぴゆう鳴つてゐるらしい。硝子戸のがたんがたんと鳴る音でどうもさうらしく思はれる。凧は折々動いてゐる。怒るもののやうに、悲しむもののやうに、磯に投げ上げられた魚のはねるやうに、微かに動搖する。それをぢつと見てゐると、知らず識らず涙が眼ににじみ出た。甘いやうな悲哀が胸を壓搾した、涙はぽたぽたと白い垢の浮いてゐる湯の中へ落ちた。何が悲しいのか。あの凧の運命を悲しんでか、さうではない。來る時に、此家の高い煙突から白い煙がむくむくと出て來ては、北風に吹き拂はれてゐるのを見て、ふと遠い故鄕の今は人手に渡つた生家の酒藏の煙突のさかんな煙を思出したが、そのためか、さうではない。鏡に映つた自分の痩せこけた身體が眼に浮んだためか、さうではない。ただ何がなしに心細い、寂しい、滅入るやうな氣持がして來たのだ。それにはあたりが妙にひつそりと靜まり返つてゐる所爲もあらうが、今月の下宿の拂ひのあてもないのに、ある先輩に賴んだ仕事の口もどうやら駄目らしく、どうしてこの瀨戸際をくぐり拔けようかと、かはいさうな程氣の小さい自分は、外の人ならばほんの何でもないところを、もう二三日前から頻りに胸を痛めてゐるのだが、大方その爲めにこんなに心細い、寂しい、滅入るやうな氣持になつたのだらう。いや、溫かい湯のあまりの快さのためにこの浮草のやうに浮いて漂うてゐる垢の中へ清い涙がしたたるのではなからうか…

その時、表の戸ががらりとあいて一人の老人が入つて來た。

「おお、すいてるな」と、此方を見るなり大きな聲で言つた、聲だけは元氣がいいが、着物をぬぐと、肋骨が浮彫にしたやうに浮いて、深い皺が身體中をのたくり廻つてゐる。友達に枝のやうだとひやかされてゐても、僕はまだあんなには痩せこけてゐないと僕は思つた。

「おお、寒い、寒い」と言つて、老人は硝子戸をあけた。

僕は急いでざあと手拭で顏を洗つた。

小犬

小犬が今朝また來た。昨夜何も食はなかつたと見えて、一層餓ゑたやうな樣子をしてゐる。私の裾へ纏ひついたり、私の顏を見て飛び上つたりする。その眼付――餓を訴へるやうな、媚びるやうな悲しい眼付は、何だか獸の眼付でなく、人間の、可憐な幼兒の眼付のやうに思はれる。そして折々ウ……と、丁度幼兒が母の乳を求めるやうにうなるのである。

私は可哀相な生物よ……と思つた。おまへもやつぱり一つの存在だ、おまへも生きたいのだ、生きねばならんのだ。それにおまへは親の手をはなれて、無慈悲な人間のために捨てられてしまつたのだ、ああおまへはどうして生きたらいいのだらう、誰れもおまへを拾つて養つてくれる人はないのだらうか。

でも、また考へて見れば、おまへを捨てた人も無慈悲なのではなからう、おまへを養ひ育ててやりたいのは山々だが、後から後からと生れて來る犬の子を際限なく飼つて行くといふことは、いくら生活に餘裕のある人だつて不可能

だ、また他所の家にやらうとしても、さうさう貰つてくれる人もない、それで仕方なしに、誰れか氣まぐれに、また憐れを知つて、また稀れには必要によつて、拾ひ上げてくれる人もあらうかと思つて、わざわざ遠方の原つばにおまへを捨てに來たものに違ひない。

けれども、おまへを拾ひ上げてくれる手が果してあるだらうか。この邊は大抵勤人の家ばかりだ、さうたいして困らない家も多からうけれど、大抵は手一杯の生活をしてゐるのだ、それに此頃は物價が毎日のやうに高くなるばかしだもの、番犬によつて護らなければならぬ財産とても無いのに、どうして犬を飼はうなどと思ふ人があるだらうか。犬を飼ふのは富豪ででもなければ、まづ贅澤だと云はなければならない。現に昨夜一夜何處かそこら中をほつき廻つてゐたのだらうに、おまへのクンクンいふ悲しさうな訴へを、うるさいねと舌打ちぐらゐしたにしても、おまへを拾ひ上げてくれるどころか、牛乳一杯ふるまつてくれた家もないらしいではないか。から云つてゐる私だつて、おまへを拾ひ上げてやることは出來ない。いくらおまへが可哀相だと云つたつて、ただ可哀相だ可哀相だと口で云ふだけで、どうすることも出來ないのだ。私のやうにまだ自分の生活の方角もたたないで、實家から送つてくれる僅かばかりの金と、好意で極く安く置いてゐてくれる、この家の親切な主人のおかげとで、かうして餓ゑもしないで生きてゐるだけの貧しい若者が、どうしておまへの世話を見てやることが出來よう。こんなやうなことを心の中で云ひながら私は小犬の頭を輕く撫でてやつた。これが今のところ私の同情の唯一の現し方なのだ。だが、いくら撫でてやつても腹はくちくならない。同情といふものはその實を伴はなければ何にもならぬものだ。然るに、この同情といふやつは、硝子のやうに自己の利害の棒が突當ると直ぐにこはれてしまふ、脆いか弱いものなのだ。

小犬は踏石にのぼつて、緣に足を戴つけて、頻りにクンクン云ふ。待つておいで、今に朝飯が來たらわけてやるからと云つてすかすと、その言葉がわかつたかわからないのか、庭の隅に尾と鼻とをくつつけて眞丸くなつて、をりを

りブルブルッと身顫ひしながら、おとなしくぢつとしてゐる。ああ、飢餓は寒いものだ！

柔かな毛なみが少し赤味を帶びて、觸つた手に何とも云へぬこころよい感觸を與へる、見るから可愛らしい小犬だ。然し、全身泥まみれになつて、一見むさくるしくて、氣持がよくない。一體、世間の人は動物を飼ふのでも、愛らしいと云つては飼ひ、汚ならしいと云つては叱々と追ひやつてしまふ。從つて犬にも自然の淘汰、優勝劣敗が行はれざるを得ない。思ふに、人間も犬も、生れ落ちるとから已にその幸不幸は、その運命は定まつてゐるのではあるまいか。殊に犬などは一層運命に抗して行くことが覺束ないのではないか。

貧民の膏血をしぼつて得たる不義の金で、妓に擁せられて、富豪どもが未だ朝夢昏々たる時、世には幾多の餓民が或は食なきに泣き、或は破椀をもつて走り、一口の食を爭ふのである。現に今私のもとには、このやうに飢餓に戰慄せる哀れな小犬がゐるではないか。これが犬だからよかつた、もし人間だつたなら、私の弱い心はどんなに苦しく虐げられたことであらう。ああ、禍の世よ。富豪、彼何者ぞ。不義不道の利を得むためには、萬人の血涙を屁とも思はぬものは彼だ、然して權門これを助く。彼が食へぬと云つて捨てるものは窮民には一生得難い珍味である。彼等の奴僕がまづいやと云つて捨てるものは、この小犬のためには生れて始めての珍味なのだ、などと、こんな幼稚な憤慨に耽つてゐると、やうやく食事がはこんで來られた。

私はまづその飯の半分を新聞紙に包みながら犬の方を見ると、靜かに眠つてゐる。食をやるところをこの家の人に見られたくないので（それは私の食を半分節したものだけれどさうでなくて勝手な事をしてゐるやうに思はれてはならぬと考へたので）私は匆々に食事をすまして、小犬を呼んで散歩に出た。飯はこつそり懷に入れて。富豪を破れ破れと、當てもない小さな憤慨を燃やしながら、私はすたすたと歩いて行くと、犬は一生懸命に尾を振りながらついて來た。けれども十間ばかり行くと、つまらないと思つたものか、あとに引返さうとする。そこでソッと懷のものを取

出してその鼻のさきに押當ててやると、頻りに鼻をびくびくさせてまた尾を振り出した。漸く草原に出たので、地面へ新聞紙をひろげてやると、犬は矢のやうに飛びついてしまつた。ああその嬉しさうな態よ。ああ、世の變節者を咎める刎れ、探偵ユウベル、彼は畢竟餓ゑたればなり、餓とはそんなにも辛いものなのだ！　餓の前には人情も道義も何にもないのだ！

小犬は盛んに尾を振つて、尾を振り立てて、もう一心に、ガツガツと食つてゐる。痩せ細つた蚊が私の痩腕に食ひついた時もかうであらうか、身體中が口になつたやうに、見る間に食つてしまつた。それでも長い間空であつた胃の腑はまだ承知せぬらしい。犬は紙にくつ付いてゐる一粒々々を、大騷ぎをやりながら、焦つたさうに舐めてゐる。私はその様子を佇んでぢつと見てゐた。

そこへ私のゐる家の店に勤めてゐる勘さんといふ人が來かかつた。そして、

「どうしたんです？」と云つて私たちの方へやつて來たが、

「飯を食はせてるんですか？　此奴は昨夜おれんとこへも來たんでね、飯を食はせてやつたが、かまふもんぢやないですよ、こんなもの……」と云つて、私の顏と犬の姿とを見比べて、小鼻のあたりで笑つて、そのまますたすた家の方へ歩き出した。私は、

「何處の犬でせうか……」と云ひながら、犬の頭を一遍撫でてやつて、勘さんのあとを追つた。

小犬はまたもついて來る……

變な神々

―をかしな幻想―

「貴樣はまた何處かの女を引つかけたと云ふ噂だぜ、おい」
かう云つて印度人のやうな神が「フフン」と冷笑した。失敬な奴である。おれは成程、今或る女と愛し合つてゐる。事實である。然し「引つかけた」とは失敬千萬ぢやないか。おれも立派な一人前の人間だ。いくら神だと云つて、かう踏みつけられては默つてゐるわけには行かぬ。そこで云つた。
「一體あなた方は私を何と見ておいでになるのですか？」
「蛆(うじ)だと見とる」言下に、おれのすぐ右手にゐた老人(としより)の神が云つた。そしてさものん氣さうにその赤い鬚を撫でた。
「蛆？　おれが蛆？　怪(け)しからん……」じろりと座を一瞥すると、みな冷然とすまし返つてゐる、横向いてにやりとしてゐる者もあれば、天井を睨んで空嘯いてゐる者もある。咄！　何か言ひこめてやらうと考へたが、ただ口のあたりがむづつくばかりで、とみには言葉が出ぬ。そこで仕方なしに、緋の布を覆うた卓の上にあつた、でつぷりづんぐりした瓶の手近にあるのを取つて、透明な酒を杯についではむやみに飲んだ。酒の味は苦(にが)かつた。杯を置いて見ると、その色は毒々しいほど赤いが、手に取つて見ると雪のやうに白く見える。
やがて醉つてしまつた。「あアあ」つい深い溜息が腹の底から出て來た。
「大將、たうとう凹(へこ)んで了つたと見える」隅の方から誰れとも知れず、黄色な聲で云ふと、
「かはいさうに、顏の色が黒くなつてしまつて……」と筋向ひにゐた女の神まで口を出す。言葉だけはいかにも同情

したやうで、語調はひやかしのそれである。腹が立つ、腹が立つてもどうする事も出來ぬ。「仕樣のない奴等だ、もう相手にはなるまい、馬鹿々々しい」と思つて、素知らぬ顏して、首を後へ引いたり、ぬつと前へ差出したりして、瓶に映る自分の顏の、長くなつたり、圓くなつたり、蟇のやうになつたり、蛇のやうになつたりするのを一心に見てゐた。

神々はおれの事などはもうかまはずに、何事をか盛んに言ひ爭ひ出した。彼等の言葉は思ひ切つて亂暴で、放縦で、惡辣だ。變な神々もあつたものだ。たがひに相手の一番の祕密を齒に衣着せずとツケツケと云つてのける、挑發された相手も負けないで、シツペイ返しをやる。まるでこの頃の友達の弱點を書き合つて喜んでゐる新進作家みたやうだ。中でも女の神が一番辛辣で、手きびしい。大抵エロティックな方面のことだから、さまで氣を留めないで聞いてゐるこのおれ自身が、顏が眞赤になるやうな事ばかりだ。

「……そんなに威張つた顏してゐたつて何になるもんですか。此間の夜はどうでしたね、あの眞闇な中を蜘蛛が這ふやうに忍んで行つた恰好つたら、人間の漫畫家に持つて來いの材料でしたわねえ……」などと云つた風だ。から何もかも知られてしまふんぢや神樣の地位もなかなか容易ぢやないナとおれは寧ろ同情が起きた。

彼等の聲は愈々騒々しく、卓上の香爐のあたりでこんぐらがつて、煙と一緒に頭の上をさまよふ。おれはすつかりウンザリしてしまつて、瓶とばかり睨めつくらをしてゐると、フイと素的な疑問が浮んだ。「自分は何だ？」これである。自分は何だ？　蛆だと云はれて怒つたが、蛆でないとはどうして證明出來る……蛆とは頭に毛の三本あるものの事だ、辭書には下等動物だとある……そして、おれがそのウジムシ、將してそのウジムシだらうか？……成程、見たところ、おれは下等動物ではない、頭に三本毛も無い。然し、おれの心はどうだ、心の顏はどうだ、心の頭はどうだ、心の首、手、胸、腹、足はどうだ？――おれは何だかどす黒い氣持になつてしまつた。そしてやり込め合ひをやつて

ゐる神等の熱した顔を見ると、それが皆卑しく、猥らで、奴等自身蛆ではないかといふ疑問がフッと起きて來た。と、おれは桑原々々と思つた。そしてその解決もつかぬうちに、おれはツイと外へ出てしまつた。解決をつけたくなかつたからだ。おれは解決をつける事の嫌ひな人間だ。いや恐ろしいのだ、恐ろしくなくとも、こんな事を考へてゐるのを、意地惡な神等に悟られたらまた困るぢやないか。それでおれはコソコソ外へ滑るやうにして出てしまつた。

此の町は恐ろしく長い町だ。町はづれから町はづれ迄、まづ眼で測量して見ても、確かに五里はある。それに道幅が馬鹿にだだッ廣い。氣取つた洋館まがひの家が、書齋の棚のクロオス本みたやうに、兩側にづらりと並んでゐる。曇つた空がどんより四角な屋根を壓してゐるけれど、なアに、やつぱりいつものやうに、小人の躍るやうなピアノの音はよく聞える。

「女の家へ行くのだぞ」誰やら耳もとでかう囁く。

地面が窪むやうな氣がするので、かなり小刻みに歩く。小刻みに歩くと小人物だと賤しむ、が然し、これはその賤しむ方が反つて小人物に違ひあるまい。何かといふと人の事にケチを付けて喜んでゐるやうな人間が世の中には澤山あるが、そんな奴等は一生涯他人の奴隷で終る下根者なんだ、一生他人の私行の噂に沒頭して、自分の生活を我から他人の奴隷に捧げて、自分ではつひに生きない、影法師のやうな憫れむべき徒輩だ。

家毎に門の兩側に草花を植ゑてゐる。それがまるで墓のやうな氣がする。けれども、惡い氣持はしない、微風が渡るたんび、紅白の花の列が首を傾けて、まるで女學生が體操をやつてゐるやうだ。美しい、家の行列ではなくて、草花の行列だ、家並は此の場合單なるバックに過ぎない、だから「華かなものでなくては駄目だ」と昨日も日記に書いて置いたのだ。よく見ると、花はみな一軒毎に種類が違つてゐる。薔薇があるかと思へば、百合がある、牡丹がある、菊がある、それかと思ふとヒヤシンスや、カアネエションや、ダリヤや、スヰイトピイのやうな花もある。四季さまざ

まの、いろんな種類の花が殘らず美しく咲き揃つてゐる。——はて變だわいと思つたが、生きた植物の標本でも見るやうな氣になつて、別に氣にも留めなかつた。

人通りはない、少しもない。唯だ犬が痩せこけて、ぴよこぴよこと歩いてゐるだけだ。おれは犬は大嫌ひだ、赤い舌ばかりぺろぺろ出して、一日のらくらくしてゐる、仕様のない色情狂のやうな奴だ。高い窓から女の顏でも覗きはしまいかと注意して歩いたが、今日は少しも見えない。よくオーケストラの華かな演奏が外へ洩れてくるので、てつきり舞踏場だと思つて、いつか入りかけて、露西亞人のやうな髯面のぢぢむさい門番の老爺に叱られた、あの五階立のすばらしい家からは、今日は狂人じみたギオロンの合奏が魂消るやうに耳を貫く。此の間の侮辱がよつぽど胸にこたへたので、忘れようとしても忘れられず、「何か復讐してやるものは無いか」とじろじろ其邊中を見廻すと、あつた、あつた、門側の花壇だ。暫く人の氣配をうかがつてゐたが、いきなり二三本今を盛りの白百合の花を引きむしつて、帽子の中へ隱し、素知らぬ顏してすたすたと急いだ。何だか人の呼ぶやうな聲がするので、ふと振返つて見ると、窓の一つから、例の露西亞老爺が鋭く此方を睨めつけながら、何やらどなつてゐる。「なに糞ッ」と口さきまで出たが、それでも自然と歩調が早くなつてくる……

「おい、あけてくれ」

不圖氣が付くと、おれは例の扉をこつこつ叩いて、こんなに叫んでゐた。しまつた！と思つた。今日はどうも來ていい日ぢやなかつたやうだ、何だか四邊の空氣がおれの息と調和しない。どうしようと思案したが、やつぱり歸るよりは……折角此處まで來たのだ、歸るのは殘念だ、歸ることは出來ない……扉を叩くのも止めて、暫くもじもじしながら一人で當惑してゐた。

そのうち、自づとのやうに扉が中の方へくるりと開く。

……と、何も見えない。まつ闇だ。大きな底の知れない洞穴だ。ただもう全身がぐにやぐにやになつて、千年の疲勞が一時に押寄せて來たかのやうに、目蓋が持ちこたへられない位重くて、ぶらさげた手が今にも拔けるかと思ふほどだるく、何か千貫目もする重石でも持つてゐるやうに重い、非常に重い。そして踏む足も醉つたやうに他愛がない。何かの上にどつさりぶツ倒れてしまつた。

「ああ、苦しい」誰だか呻いてゐる、おれのやうでもある。

「苦しい、苦しい……」

「あなた、どうなさいましたの？」かう優しく云つて、腹の上を靜かにそつと撫でさすつてゐてくれる人がある。女らしい。女だ。そら、あの手の皮膚のやはらかさ、あの指の細さ――確かにおれの戀人だ、と思ふと、そのにつこり笑つた齒ならびの白く透通つたやうな美しい顔がありありと目の前に現れて來る……

夢心地と云つたのでは、餘りに淡くなる、まるで戀死を死んだやうな氣持だ。ただ腹を撫でさする快い感覺だけが、百里も遠方のやうに微かに、微かに感じられる、何とも云へぬいい氣持だ。どうやら此儘死んで行けさうである、宛かも擔荷か何かで搬ばれて……穩かな內海を大きなヨットに乘つて行くやうに、心は限りなく平らかに、靜かに、ゆるやかに、深く深く時間と空間の外へただよつて行くやうな……

「おや、こんな花があるわ、まあ……」遠くの、國境の山の上あたりで誰やらが叫んでゐる。おや、その頂上の一本松に雪がちらちら降り出した。寒からうに、なぜあの女はあんな處にゐるのだらう？　一人の細長い女が、丁度蜻蛉が羽をひろげて直立してゐるやうに袖をひろげて立つてゐる、いや、それは天使の姿のやうでもある……

「どこから貰つて來たのかしら……百合の花だから……」

突然、腹が寒くなつて來た。

ハックション……

「ねえ、しつかりなさいな、さ、しつかりなさいつてば！」

……白い手が腹の上に驅け廻るのが一間ばかり前方に見える、梭が機の臺の上を飛んでゐるやうにも見える、裸體の子供が鬼ごっこをやつてゐるやうにも見える……と、惡魔のやうな、長い、長い眞黒な影が動き寄つて、いきなり外套をはぎ取つたやうな感じがした、その途端、全身が感電でもしたやうに、ぶるツぶるツと顫へた――不圖、心配さうな、靑い女の顏がぽつちり眼の前に現れた。全く見知らぬ顏だ。

急に手が痛み出す、足の裏が痒くなる、腹のあたりが空洞になつたやうにちくちく痛み出す――忽ち、褐色の壁が現れる、あまり高くない天井が現れる、それは例の馴染の部屋だ。

「アア……」と心のすべてがぐつたりと內にくづをれて、安心といふものが、頭のてつぺんから足の爪先まで行きわたつた。

「もう落着きなすつて？」

靑い顏の女がから馴々しく云つて、そつとおれの額に接吻した。おれは無暗に腹が立つたので、

「貴樣は何者だ、醜い女め、おれの戀人は何處へ行つたんだ、早く呼んで來い」

靑い顏の女は吃驚したやうに、目を大きくして、ぢつとおれを見詰めてゐたが、やがて寂しく笑つたまま、無言で彼方へ行つてしまつた。かたこと、かたことと滅入るやうに音がする。

おれはまた眼を開けた。あまり廣からぬ部屋には、着物やら帶やら、湯を汲み入れた金盥やら、紅い紐やら、白粉の空瓶やら、無茶苦茶に雜然と散らばつてゐて、足を踏み入れる餘地もないやうだ。その向の壁のところには、一人の女が腰のもの一つで、むつちりした背の肉を見せながら、せつせと化粧してゐる。顫ひ付き度いやうな好い姿だ。お

れの女に違ひない。さつきの女が呼んで來たものらしい。頻りに飛んで行つて聲をかけて見たいと思つたが、どうも立上る氣力がない、仕方なくやつぱりうつらうつらしてゐた。

……眼の前は往來だ。顏が頻りに通る。しかも顏だけだ、身體はない、首ばかりが飛んでゐるのだ。その中には、印度人に似た顏、女の神の顏、老人の神の顏、露西亞人の顏、靑い女の顏、いろんな顏がごちやごちやに入亂れて、上になつたり下になつたり、接吻し合つたり、ぶッ突かり合つたり、遂ひには戰爭をはじめた……

「お起きなさいな、さア、もう元氣をお出しなさいよ」

眼をこすつて起きた。おれはいつの間にか眠つたのであつた。一體おれはよくから云ふ癖がある。眠るのを知らずにゐる癖がある。困つたものだ。口の中でぶつぶつ云ひながら着物を探したが、無い。

「着物はどうしたね」

「エ」女は怪訝な顏をしたが、急にフッフとさもをかしさうに笑ひ出して、

「寢ぼすけさんね、そこに着てゐらつしやるぢやありませんか」と云つて、此方を指差した。不思議に思ひながら、おれはそのまま默つて食卓についた。

日はすつかり暮れた。窓にはカアテンが引いてあるので、外は見えない。煌々と眩しい電燈が部屋の眞中から花形にぶら下つてゐて、その光線が懷しいやうな、うら悲しいやうな一種異樣な思ひを胸に起させる。「ああ今日も暮れてしまつたナ」と思ひながら、つくづく女の顏を見ると、眞白な頰のあたりにほんのり紅味がさして、黑く暈を帶びた丸い眼が一層大きく輝いて、唇が今にも熟み割れさうに眞紅である。何といふ美しさだらう、いつ見ても、世の中にこんな美しい女は外にはないとつくづく思ふ。

おれが支那にゐた時には、まだ十五だつたが、ある晩、年上の同僚に連れられて、これ迄見た事も想像した事もな

い、妙な薄暗いやうな處へ行つた。あの時は不思議な、恐ろしいやうな、腫物が吹き切つたやうな痛いやうな快いやうな感じがした。その時、某――が云つた「女は年増に限る、殊にA君(とおれを指さして)のやうな若い人は、年上の女にせいぜい可愛がつて貰ふことサ、ねえ君、せつせと年の多いのを探すことサネ」彼奴はなかなか奇抜な事を云ふ男だつた。年上、さうだな、何だか眞理らしくもあるな。おれが十九で、女が確か二十五だと云つたから、まあ四つ違ふのだ。眉のあたりに老人染みた表情が見えるから、とても二十五ぐらゐぢやあるまい、ひよとすると三十五かも知れない、が、何しろ年上だから結構だ、彼等は人生のあらゆる快樂を身體中に吸ひ込んで來てゐるんだからナ。

こんなことを考へてゐると、

「何考へてゐらつしやるの、そんなに茫然してサ、さあ一つお飲みなさいナ」と云つて、女は杯になみなみと眞紅な酒を注ぐ。卓上を見ると、青いもの、赤いもの、黄なもの、食べるより見た方が旨さうな、眼を刺戟する色の配合ばかりだ。おれはそれを見ただけでもすつかり幸福になつて、「おれは生きてるんだ!」と思つた。酒はうまい。まるで血のやうだ、若い美しい少女の血のやうだ、舌の上をつるつると滑つて、内臓へ洪水のやうに流れて行く。だが然し、おれは何時どうして此處へ來たのだらう? どうも覺えがない。ただ犬がぺろぺろ舌を出すのを見ただけはよく覺えてゐるが……

「ねえ、おれはどうして此處へ來たらう?」

女はまたにつこりして、白い齒並を見せて、ぽつと美しく上氣した顏を砂糖のやうに甘くして、猫などのするやうな妙なシナをつくつて、

「そんな事まあいいぢやなくつて、それより早く片付けて、もうやすみませうよ。明日は私、ちよいと用事があるのでね、早く歸つて下さらないと……」

おれは覺えずムッとした。
「なぜだい?」
けれど女は返事をしないで、薄笑ひを浮べておれの怒つた顔を見てゐる。おれは同じ事をいつ迄も繰返す根氣のない男ゆゑ、有耶無耶のうちに食卓を離れた。しきりに大きな欠伸が出る。
女は何か小聲で歌つてゐる。昔何處かの小路で聞いた事のあるやうな節廻した。文句は何だかはつきりわからないが、いい聲だ。……歌はいつか止んでしまつた、と、私の脣はカッと熱い火に觸れた……
——ふと眼が醒めた、日はもうカッとカアテンを透して室內を赤く浮上らせてゐる。何だか頭が重い。耳がガンガン鳴る、そしてそれが、丁度蓄音機でゞもあるやうに、
……おお美しいスフィンクスよ! おお戀よ! おまへの凡ての幸福が、死の惱みと一緒にまぜられてゐるのは、それはどうしたわけだらう?
といふ文句を、繰返し繰返し鳴り立ててゐる——おれは何だか悲しくなつて來た、ああ、どうしておれはこんな處へ來たんだらう……蛆、蛆、ふつと思出した、蛆、蛆、ああおれは蛆蟲に違ひないんだ。「自分は何だ?」「自分は何の爲めに生きてゐるのだ?」痛切な悔恨の情が忽ち心頭を衝いた。
おれは忌はしい耳の歌を聞くまいと無益に苦鬪しながら、頻りに輾轉反側してゐると、私の橫の方から、いきなり女がはね起きて、窓の日足を見るや否や、
「ああ、寢すごしちやつた!」と大業に叫んで、烈しくおれの肩を叩いて、
「あなた大變よ、もう十一時だわ、さあ早く起きて下さいな」と叫んだ。その癖此處には時計なんかありはしないんだ。わざと寢た風をしてゐると、

「お起きなさいよ、お起きなさいつてば！」と金切聲を立てる。細目に開けて見ると、髮を振亂してまるで狂女のやうだ。ふッと見るとその顏！　靑い顏、靑い顏、昨日のあの女だ！

その時、扉をけたたましく叩く者がある。

「おい、こら、早く開けんか、おれだ。おれだよ」

と、女の顏は見る見る變つた。

「どうしよう、どうしよう……」と云ひながらただうろうろしてゐたが、どうしたのか、急に思ひがけなくぷつと噴き出してしまつた。

「なんて滑稽なんだらうねえ」

おれも妙なことになつたものだと思ひながら、むくむく起き上りかけたところへ、扉がするりと開いた、するりと開いてしまつた。ああ、鍵をかけて置かなかつたのだ！

入つて來たのは見た事もない一人の老人であつた。六尺近い肥大な男で、眼が鋭く光つて、鼻は鷲のやうに曲つてゐる。あの變な神のタイプに似てゐる。兎に角すてきな大男だ、一寸見たところでもおれの三倍はある。これが女の亭主なのだらうか？　それとも情夫なのだらうか？……何しろこれは大變だ、大變な事になつた。おれは齒をガタガタ鳴らして、いきなり蒲團をかぶつて縮み上つてゐた。

女は突拍子もない聲で笑つてゐる。男はぢつとおれの方を睨んで、そのビスマルクに似た、いかにも惡黨らしい鐵のやうな顏が、憤怒の形相にすさまじさを幾倍して、默つて何か考へ込んでゐる——それがおれにははつきり見える。

「汝、太え奴だ。おいこら、ふざけるねえ、何が可笑しくて笑つてけつかるんだ、……おい、其處にゐるへなちよこ野郎は何だ、さあ返事をしろ！」

「ああ、可笑しい……」

女はますます笑ひを高める。女が笑ふだけ、男の方は益々たけり出した。夜一夜の濁り切つた空氣が烈しく震動して、室内の器具が皆踊り出すやうな氣がする。

「やい、此の賣女め、默れ、默らんか、これ、默らんと……」男の吠えるやうな一語々々が鋭くおれの心臟に釘を打込む――黑い翼に抱きすくめられて、地獄の底へでも連れて行かれるやうな恐怖に胸は凝結して、息も出來ない。蠟で塗り込められて木乃伊にでもなつてしまつたやうな、一種形容の出來ない氣持だ。

「こら、よく聞け。貴樣は何だ、まあよく考へて見ろ、貴樣はおれの奴隷だ、よしか、おれの奴隷だぞ。それを、よくまあ恐ろし氣もなく、へなちよこ野郎といちやつきやがつたな。此のすべた奴……さあ、返答がありや云つて見ろ、聞いてやらア」

「おまへさん、何を云つてるの、靜かにしておくれよ、外聞が惡いぢやないの」

「フン」と冷笑した模樣だ。

「これは私の私の弟ぢやありませんか……」

おれはチクチク蚤がさすので、搔くに搔かれず、もぢもぢ必死の苦みをしながら、弟、弟、よくある奴さ、普通の場合なら兄さんと云ふ處だ、奧の手を出したね、だが老爺、うまくその手に乘るか知らなどと、不安なやうな、一道の光明を見付けたやうな氣がして、いくらか息もつけて來て、ぢつと足を曲げてゐた。

「弟だ？　フン、弟とはうまいことを云ふなア。だがな、おい、おれの此の眼玉はまだ黑いんだぜ、馬鹿にしてくんねえ、ハハハハ……」と急に面白くて堪らなくなつたやうに、馬鹿々々しく大きな聲でカラカラ笑ひ出した。

「まあ、冗談ものだよ、此人は……これだから可愛いんだわね」

「この阿魔つちよ奴、おい、おい、冗談ぢやねえ……」

女が飛びかかつて行つたと見える。

おれはもうぢつとしてゐられないやうな氣がした。一つ飛出してやらう。恐ろしい? 何が恐ろしい? おれが人間なら、奴も人間だ……よし神にしたつて……と思つて、眼のところ迄少しのぞけて見る、と、何の事だ、女はあのビスマルク面に脊延びをして頻りに接吻してゐるのであつた。

「野郎、のぞいてけつからア」男は不圖此方を見ると、さも馬鹿にし切つたやうにから云つて、いきなり女を突きのけて、驅け寄つて蒲團をはぎ取つた。冷水を頭から浴びせかけられたやうに、おれはハツとして、思はず立上つた、ああその時の見すぼらしい、そして滑稽なシヤツ一枚のおれの姿! その時はおれも確かに完全に蛆だつた、蛆蟲だつた……

「フン、まだ若え野郎だナ」と赤く鞘走つた底光りのする眼が、おれの毛穴を一本々々數へるかのやうに、きつと睨み付けて、彼は象のやうに突立つてゐたが、

「蛆蟲のやうな野郎だ。まだ尻尾に卵のカラをくツ付けてやがる癖に、太え野郎だ、……だが今度だけは許してやらア、今度こんな事があらうものなら、只ぢや置きやしねえぞ、いいか、こら、小僧め」と云つて、瘤々立つた兩腕でいきなりおれを抱へ込んで、まるで塵でも棄てるやうに、扉の外へはふり出した。女の顏を見るひまもなかつた。紅、靑、紫、黃、さまざまな色の糸が、まるで汽車にでも乘つてゐるやうに、眩暈の眼を横切つてちらつと黒髮が目したに消えたかと思ふと、身體は茶碗のやうに敷石にケシ飛んで、同時に冷たい者が千萬聲を揃へて、おれの不義を責め立てた。身體が烈しく痛む。暫く凡ての物が舞ふ——ああ、神よ!

……寒いのもその筈である。おれはシャツ一枚でゐるんだ。帽子も、着物も、靴も、ステッキも、みんな部屋の中へ

つてゐる……おれは恐ろしくなつた、いきなり一散に驅け出してしまつた……

青い顏の女が泣く……接吻する……老人が怒號する……おれが逃げる……見るも恐ろしいキラキラ光る大刀を持つて、黑い顏が追つかけてくる……おれの頭はそんな事を際限もなく描き出してゐる、その癖、足はどんどん走つてゐるのだ。と思ふと、今度は不圖どうした機みか、昨夜、おれが家の神達の事を話した時、女が、「神、あれが神？」と押へ切れない可笑しさにブッと吹出して、「あれが神樣、あれが神樣なら私達もみんな神樣よ、あなたも神樣だわ」と云つて、急におれの耳元へ口を持つて來て「神つて云ふのはね、羞恥といふ氣をなくした人間のことですよ……私たちが恥かしくて出來ない事でも平氣で大ッぴらに出來るから神だと思つてるんですよ……私たちだつて今は神よ……」と囁くやうに云つた、それを思出した。と思ふと、またビスマルクに似た恐ろしい顏をありありと目に浮べた。やつぱり追手の息を背頸のところに感じながら……

いつか家の前まで來てゐた。と氣が付くと、急に堪らなく息苦しくなつて來て、

「アッ、」と叫んで、入口の敷臺を蹴飛ばして、薄暗い廊下へおれは飛込んだ。と、何かに突當つた。見ると女の神だ、あの皮肉な女の神だ。

「まあどうなすつたの？」人を馬鹿にしたやうなその言葉に、憎惡の念が一時に込み上つて來た。

おれは全身を擧げて突ッかかつて行きたかつた。

「神だつて、貴樣等が神だつて、フン、笑はせやがらア。よくも今日までおれを欺して居やがつたなア。神樣だなんどと思ひ込ませやがつて……。恥を知らぬ下司女郎！ 羞恥を感じなくなれば神だといふのなら、貧民窟と淫賣窟には神樣ばかりあらア、このビッチめ」おれの言葉付きはいつかかの野卑な老人そつくりになつてゐる。

「何を云つてらつしやるの？　え、どうなすつたの？」と云ひながら女は蛇のやうに近寄つたかと思ふと、フイとおれを小脇に抱き込んで、そして

kiss, kiss, kiss, kiss,…………

と云ひながら、二三度もおれの血を吸うた。蝙蝠のやうに黒い翼が二つの肩から急にひろがつて、齒は鋸のやうにギザギザに尖つてゐる。

おゝ、美しいスフィンクスよ！　おお、戀よ！

といふ文句が再びおれの心に響いた。女はまた kiss, kiss, kiss, kiss,…………と小唄のやうに云ふ、と、それがいつか death, death, death, death,…………と聞える。そして女は時々おれの血を吸ひながら、走る、走る、眩暈のするばかり走る、ただもう走るのである。

「放せ、放せ！」おれは呻き乍ら懸命にもがく。氣の拔けた空氣枕のやうに、身體中がスカンポになるやうに感じながら……

戸に、壁に、天井に、甃に、柱に、何處まで行つても果てのない暗い暗い隧道の中に、」

death, death, death, death,……

の聲は、八方から恐ろしい反響を返して、一杯に充ち滿ちてゐる……

アラン唄

苗を植ゑ付けてから四五年にしかなるまいと思はれる低い小松山に、ある初夏の眞晝、私はひとり佇んでゐた。眼したには廣い廣い單調な畑原が展開してゐて、その果てに低い丘陵が緩漫な波線を描いてゐる。空は心地よく晴れ渡つて、昔風の繪によく見るお玉杓子のやうな白雲が、何處から何處へ行くともなく、ふわふわと飛んでゐる。

畑からも、畑の中を走つてゐる路からも、ぽッと夢のやうに水蒸氣が立昇つてゐる。ずつと右手の河沿ひの高い堤の上を、小さな牛に鞭つて、朝鮮人が一人のそりのそり歩いてゐる。堤の上の白楊の並木は、淡々しい緑の色を誇り顔に日に輝かせて、いかにも初夏の喜びに顫へてゐるやうに見える。見る限りの青々しい畑には、白衣の姿が三々伍伍操り人形見たやうに動いてゐる。そしてその畑の彼方此方から、

「アララン、アララン、アーラーリーヨー」と、單調な、然しその中に何處か遣る方ない悲哀を訴へるやうな調子で唄つてゐる。私は暫くその唄聲に耳を傾けてゐた、亡國の音とはこれを云ふのであらう、ぢつと聞いてゐると不思議に氣が滅入つて、そのまゝ消えてしまひたくなるやうな唄だ。直接これを耳にしたことのある人でなくては、いくら說明してもその感じはわからないに違ひないが、それは咽ぶやうな旋律でもなく、腸を斷つやうな音曲でもない、我我日本人の旋律は、例へば「鳥も通はぬ八丈が島に……」と云ふあの追分節の如き、ぢつと聞いてゐるうちに身體中がゾクゾクして來て、まるで電氣でも閃き渡るやうで、魂の底から深い嘆息が湧き出してくるほどの沈痛な、悲壯な、ペエソスが籠つてゐるのだが、この唄の中にはそんなものはない、丁度この國の何かと云ふと大袈裟な絶叫となつて亂發されてゐる「哀號、哀號……」といふあの號泣の辭と同じ意氣地なさ、無氣力さ、國全體が腰を抜かしてぺたりと坐り込んでしまふやうなたよりなさ、さういふものが一條の絲のやうに貫き通つてゐて、聞いてゐる此方の方までもグニャリとして了ひさうにさへも思ふ。これは必ずしも長年月の傳統を異にし、習慣を異にしてゐる異鄉人の偏見ばかりではないと思ふ。それは確かに國亡びて山河在る朝鮮の唄である。數百年來の虐政に虐げられ、膏血をしぼり

取られ、骨拔きにされてしまつた哀れな民族の、惰弱に慣れ、みじめな惑溺に憔悴した。痛ましくも安價な快樂主義者たちの、奄々たる氣息それ自らとも云ふべき、底力のない訴へに外ならないのである。私はまた更にこの亡びたる帝國のくすみ切つた歷史を囘顧した。新羅、百濟、高麗の昔から、李朝の勃興、その暴政、下つてはいかにも朝鮮的な詭詐の人傑なる大院君の生涯、さうした幾多の場面や人物の、悲喜劇を繰りひろげてゐたが、私の胸に悲壯な鮮かさを以て押し迫つて來て、私に漢詩を作ることが出來たならば、一篇懷古の詩を賦して見たいとまでも思はせるものは、ただ一つ善竹橋上の悲劇あるのみである。我國特有の忠臣を偲ばしめる鄭夢周の悲壯な最期である。そして私は曾つて讀んだことのあるこの誠忠なる學者の詩句の其處此處を覺束なくも想ひ起した。ああ、彼は大韓國數千年の歷史中の唯一人なのであるか、果してさうであるか、それは私の偏見と、詩人的偏好と、異鄕人的無理解と、貧書生的淺學不識の致すところではなからうか。然しながら、尠くとも、——この我が日本よりも更に古い老大國に於て、その長い歷史を顧みて、殆んど一個のすぐれた詩人文學者をも見出すことが出來ないといふ事は、それは一體どうした事であらう。この蒼古の國が殆んど獨立したその國特有の文學史をも有しないとは！ 私はこの痛ましい事實の前に、そのあらゆる政治的、民族的な悲慘と沈倫に對してよりも、より多くの悲哀感寂寥感を禁ずることが出來ない。然し、私は絕望すまい、その故にこの哀れな民族を輕蔑することもしまい、私はその凡ての過去の前に目をふさいで、ただただその輝かしい未來をのみ翹望しよう、この國の奇蹟的な文藝復興、いな、より正しく云へば、文藝發生を、その國民的の全幸福と共に、深くまた烈しくも待ち望まう。私はこの無氣力な、滅入りこむやうなアララン唄の中に、この中からも、强健な、生氣潑剌たる新興民族の湧き上る新潮のやうな活力を見出したい、そのあらゆる頹廢と惰弱とにもかかはらず、さうだ、腐つた果實の中からも青々した新しい芽は芽ぐむではないか……

私はこんな事を考へながら、ぢつとその唄聲に耳を傾けてゐたが、不圖、何處かで小鳥が啼く聲を聞き付けて、忽

ち夢から醒めたやうに、ハッとして、帽子をぬいで、ほのかな額の汗を拭ひながら、ゆるゆるとそこら中を行つたり來たり歩き出した。

朝鮮名物の空ッ風は何處へやら、靑々しい六月の微風が絶えずひそやかに廻りを搖れ動いて、しッとりした雨上りの空氣は身をも心をもやんわり眞綿のやうに包んでくれるやうで、何となく甘い戀にでも醉つてゐるやうな氣持になる。左手の禿山の上には遙かにより高い禿山が重つて、その上には名殘の雪が僅かに一抹の白粉をとどめ、コバルト色の空から鮮かに地を區切つてゐる。竹藪の蔭からちらちら見える韓人部落の、饅頭笠を伏せたやうな家々からは、さもだるさうに靡きながら、ぽつぽつ心細い煙が立昇つてゐる。今その家の一つの前で紅い着物を着た二人の子供が何か惡戲でもしてゐるらしいのが、スクリインの上の眺望の點景人物ででもあるかのやうに眺められる。それを見てゐると不思議に眼がうるんで來た。寂しく短かつた自分の少年時代の追懷であらうか、まだ見もせぬ何物かに憧れる惝怳の思ひであらうか、形をなさぬ音樂のやうな心持が渦卷いてゐたが、やがてその中から忽ち漂泊の悲みと云つたやうな、漏らし處もないやうな感情が鮮かな象を取つて湧き上つて來た、烈しく胸を衝くやうに……

漂泊の悲み！　おお、確かにこの言葉が一番よく今の此の思ひを盡してゐるに違ひない。すべてはこの醫し難い放浪癖にかかつてゐる、止むに止まれぬ衝動が內から私を押し進める、あだかもボオドレエルが「唯だ行かんが爲めに行かんとするものこそ眞個の旅人なれ……如何なる故とも知らずして、常に唯だ行かん哉、行かん哉と叫ぶ」とあるのは正しく私のやうな人間の上を云つたものに外ならぬ。暗く侘しい世を逃れようとてか、先きへ先きへとやみ間なく進んで行くけれども、つひにその鄕愁を醫すべき心の故鄕を見出し得ぬ終世の旅人こそは世にも憫れむべき人間ではなからうか。彼等の求めるものは、彼等の安息と倦足との安らかな寢床は決して此世のものではなく、その渴望の靑い花はあの靑空の奧にしか見出されないかも知れないものを……。しかも私は死ぬまで漂浪するのだ、漂泊に漂泊

を重ねて、かの薄命なる漂泊の兒ハインリッヒ・ハイネの悲しくも歌つたやうに、

見知らぬ人の手をかりて
沙漠に埋められる身だらうか?
それとも荒れた海岸で
波にとられる身だらうか?

と云ふさうした身の上はまた私の運命なのでもあるまいか。世界の果ての冷たい國で、誰一人悲しんでやる人もなく、無縁の死骸として河へでも投げ込まれるのではあるまいか。ああ、私は本來の性情の變らぬうちは、その死態は必ず悲惨なものであるに違ひない。呪ふべきこの病――未知の國に對するこの烈しい憧憬、この永遠なる懷郷病! その爲めには親には見放され、同胞とは別れ、幼馴染の戀人をも人手に渡していろいろな土地をさまようたあげく、今かうして朝鮮の片田舍にさすらうてさへもゐる……

故郷にあつて北海道の山水にあこがれた。東京にあつて京都の少女に心を通はせた。南の國に北國の雪の底の生活を經驗したいと思ひ、北の國にあつては黒潮の熱い血を贈る南太平洋岸の奔放なる生活を羨む、そしてつひには大陸的な壯大な情と景とを求めて、ここまでも來た……此上何處へ行くのであらう、自分でもわからない、滿洲、蒙古、その果ては――恐らく死の國ではあるまいか、ゴビの沙漠のその果ては! だが何處へ行つても人間の生活は人間の生活だ、冷たい人の情に私の情熱は空しく冷却されてしまふ。殊にこの朝鮮に來てゐる人間の中には、最も冷酷な、卑しむべき人間が多い、いかに弱者の武器なる虚僞と背信と詭詐とに充ちてゐようとも、私はむしろ朝鮮人の弱さを愛する、その方がまだしもましだ! 私はまた生れ故郷が戀しくなつて來た、旅の終りも近づいたのだらう、今度もまたおめおめと故郷に歸つて行くのであらうか、私は寢られぬ夜などに、

「やつぱり故郷が一番いい！」と呟くのであつた。しかもこの故郷が歸つてみると、私の一番鄙ひな土地なのだ。それの本當の故郷ではない、本當の故郷は何處か他にあるのだから……だが、そのただ身體にだけの故郷にも、今は容易に歸つて行けない、私の翼ももう大分疲れて來た、もつと散文的に云へば、つまり、私の財布も輕くなつてしまつた。と云ふより、父に隱して私に倦むことのない母の愛を示してくれる私の母の財布が輕くなつたのだ。

アララン唄は遠く近く起る。

「アララン、アララン、アーラーリーヨ――」それが何處までも何處までも、私の心の中の果てなき寂寥の國に反響する。

靜かな日である。私は草生の上に腰をおろして、袂から卷煙草を取出して、マッチをすつた、煙は靜かに大空に昇つて行く。暖かい日光は私の顏へ、私の手へ、さも嬉しさうに戯れかかり、煙草の煙は透明な紫色に輪をゑがいて、果てもない光の海へ碎け散つてしまふ、その煙の行方を無心に見入つてゐると、後の方に輕い足音がしたので、振返つて見ると、二人の少女がのぼつて來た。あの少女たちだ。自分の寄宿してゐる家の裏の方の畑の中でよく働いてゐる姉妹らしい、あの二人だ。

姉は少し長味を帶びた顏で、妹は圓顏だが、いづれも色は白く、血色がよくつて、頬が櫻色にほんのり匂うてゐる。二人は毎日々々畑で草を刈つてゐる。快晴が續いて、さらでも雨量に乏しい南朝鮮の初夏は、土が黄色く乾き上つて、終日埃が舞つてゐる。今日のやうな穩かな雨あがりの日とては少ないのだ。そして果てしない畑原には、雜草が毒々しく蔓つて、刈つても刈つても無くならない。姉妹は笠もかぶらないで、せつせと刈つて行く。感心に色が黒くならないのが不思議である。知合ひの總角の話では、姉は十五、妹は十三だといふ。二人は曾つて離れてゐたことがない。いつでも一緒に連れ立つて、まるで形と影のやうに、ついぞ離れてゐたことはない。

二人はいづれも頭に圓形の籠を載せてゐる。籠の中には辨當を入れて來たらしい金椀がピカピカ光つてゐる。
「あの人よ」と妹が囁くやうに云ふ。
「アア」と姉は大人らしく輕く頷いたらしい。知らん顔してあらぬ方を向いてゐる私が、何を云ふかと聽耳立てゝゐるとは氣付かぬらしく、
「あの人はね、朝鮮を見に來たんだつて。大層おとなしい人だつてお父さんが云つてたよ。そしてね、お酒が大層好きだとさ、朝鮮の酒はなほ好きだつて……」
彼等は私が朝鮮語を知らぬと思つてゐるらしい。私はをかしくなつて、急に振向くと、
「アラ」と小さく叫んで、顔をサッと紅くして、姉の方はどぎまぎしてしまふ。
「今日は、……面白いことを云つてますね。僕は本當に酒が好きなんだよ、朝鮮の酒はなほ好きだよ、朝鮮の娘はなほ一層好きだ」と云ふと、姉の方はいよいよ伏目になつてしまつて、妹の方を一寸見て、
「まア、あんなことを……」
「なに、遠慮はいらぬよ。ここへお出で。本當にいい天氣だね、ここからはよく畑が見えるぢやないか」などと馴々しく話しかけると、二人とも籠をおろして私の前へ踞るのであつた。さすがに呑氣なものである。
「おまへさんたちのお父さんは誰れ？」と私は姉の方に訊いた。
「鄭書房と云ひます、あの宿屋の畑の手入をしてゐます」割合に日本人馴れがしてゐる。
「あ、さうか、あの爺さんか、いい人をお父さんに持つてますね」と云ふと、
「ハイ」と笑ふ。
鄭書房は私も知つてゐる。極めて几帳面な男として信用されてゐる男だ。私が厄介になつてゐる同鄉の福井の家で

雇つてゐる王書房と肝膽相照す親友らしく、始終往復してゐるので、私も時々話し込むこともある。六尺近い大男で、その上でつぷり肥つて、疎らな朝鮮髯をしごきながら、切れの長い眼を忙しく瞬きながら、底力のある聲でゆつくりゆつくり話す男だ。勿論、別に敎育とてあるわけではないが、なかなかいい頭を有つてゐて、物わかりが早い。日本の事情なんかも、いつも剽輕なことを云つておどけてばかりゐる低い額をした王書房には一向何の事やら合點も行かぬ事でも、飽くまで要點々々を逸らさぬ質問を續けて、やつと合點が行くと、さも意を得たりと云はぬばかりに大きく勿體振つて頷くのである。いつも口癖のやうに、

「韓國は駄目です、皆なまけ者で、日本人方のやうに働かないから駄目です」と慨嘆するやうに云ふのであつた。いつかも主人と晩酌をやつてゐるところへ、彼が丁度其時他處へ行つてゐた王をたづねて來たから、緣に上げて、一獻さしてやるとひどく喜んで、感激した口調で日本酒を賞めて、今度はぜひ自分の家へ遊びに來てくれ、別に御馳走もなし、また汚ないと思はれては惡いから、あつてもただらうで玉子ぐらゐしか出さないけれど、その代り自慢の酒を差上げ度いと思ふと云ふやうなことを云つた。そのをり福井が、

「このT――君は日本一の酒豪なんだ、家の王書房なんかに負けるどころぢやない、それに朝鮮酒ときたら一倍飲ける方だから、今度はぜひ遊びに行かせて貰はう……」などと云つたものだから、すつかり私を日本一の酒豪と信じこんだものらしい。さてこそ、この娘たちもあんなことを話してゐたのだらう。が、その實私はあのどぶどぶした白い酒を見ると何だか蛆でもゐさうな氣がして、胸がむかついて來るのである。けれども私は打ちとけた微笑を浮べ乍ら、

「僕はこの間君のお父さんに遊びに來るように招かれてゐるんだが、行つたら御馳走してくれるかい？」と云ふと、二人は顏見合せてにつこり笑つたが、姉の方は眞面目な顏をして、

「ええ、いつでもいらつしつて下さい。酒はどつさりありますわ……」と云つて、また妹の方を見て笑つた。妹は何

だかこそばゆいやうな顏をして、うつむいて地面に指で何か書いてゐるのであつた。
妹は寡默らしいが、姉の方はよくしやべる。ところどころ早口で餘り朝鮮語の達者とは云へない私には分らない處もあつたが、彼女は無邪氣に私の顏を見ながら、あのアラランの唄は、朝鮮の國は惡い國だ、弱い國だなどといふ事を唄つたもので、あれを聞いてゐると悲しくなるけれど、それでもやつぱり唄はずにはゐられないのだとか、また此處から一里あまり北の方に××といつて、靈泉の湧き出る處があつて、毎年夏になると、女だけが身體を潔めに行つて、砂に穴を掘つて身體を埋めて、靈泉に浴して歸ると、病氣にもかからないし、安産をすることが出來るとか、また酒をこしらへる酵母は×××まで行かなければ買へないとか、そんなことを、それからそれへと取りとめなく話しては、その度びに妹の方を向いて、
「ねえ、さうだわね」とその同意を求めて、
「ええ」と妹が可愛らしく頷くと、自分もまた頷いては、またそつと私の顏を見上げて、嬉しさうに笑ふのであつた。
　やがて二人は立上つてこの山の裏にある自分たちの部落へと歸つて行つた。その腰にさげた小刀が、頭の上の金椀もろともにピカピカ光るのが、何だか私にはなつかしいやうな、一種の神秘的な感じを與へた。ぢつと目送してゐると、その後姿はすぐに小松の中に見えなくなつてしまつた。
　私は立上つた。そして今更に、この大陸的な眼前の光景に深く見入りながら、半ば無意識に鄭書房の二人の娘の行末を想ひやつてゐた。行末は誰が肌觸れむ紅の花といふ古人の句がまた私の記憶に蘇つた。あの娘たちはこれからどんな生涯を送る事であらう？　朝鮮人は子供の時は可愛らしいけれど、大きくなると概ね醜くなつてしまふ。人間はみなさうかも知れないけれど、その變化が餘りに甚しいので、私はいつも不思議に思つてゐるのであるが、あの娘たちも今こそこのやうに可愛らしく、あどけないが、今に大きな眞黒な乳房を胸ばかりの短かい上衣と袴との間からだ

らりと垂れて、大聲で罵り叫ぶそこらの洗濯女みたやうになるのではあるまいか？　さう思ふと、つくづく可哀相でならなくなつた。けれども可哀相なのは、この私とても變りはないのだ。ああ、私の行末もどうなる事であらう……私もかうしていつ迄もこんなにして當てのない漂泊の旅を重ねてゐるよりは、いつそあのやうな娘と結婚して自分も一人の朝鮮人になつてしまつて、何の野心も何の理想もない、怠惰な無爲の一生を送つたらどんなであらう……それが反つて幸福なのではなからうかと、ふとこんな事を考へてゐると、いつかまた想ひはこの國の運命の上に走つてゐるのであつた……

　アラランの唄はやつぱり聞えてくる、——

「アララン、アララン、アラリ、オウ、アララン、ウルサ、バイデエウラ、ムングン、サイチャイパクタアラン、ムウ、ホン、ドウカイボンマアニ、タアナカンダア…… ……」

燕

春になつた。燕がやつて來た。禿山と雜草ばかりの此の寂しい朝鮮の片田舍にも、この美しい舞踏の鳥はやつて來た。

　故郷の家にも燕が巣をくうてゐた。大膽な企業家だつた父が、まだ靑い稻田を刈り取らせて、町はづれに建てた、後に大きな酒藏をひかへた家、私が夢のやうな少年時代を過した間口の廣い、あのなつかしい家の軒端にも燕は巣をくうてゐた。この見すぼらしいちぐはぐな材木を惜しみ惜しみつかつてあるアンペラ圍ひの寂しい藁屋にもやつぱり

その巣がある。いや、燕はこの古びた藁屋根の下を出入りするのが、あの造酒屋の嚴めしい瓦の間をくぐるよりも一層樂しさうにさへ見える。

春になつた。燕がやつて來た。

私はそれが何だか故郷から來たやうに思はれてならない。故郷の家に、昔から子供たちと別れて、獨りであきなひをしてゐる祖母の、ひとり遠くの子や孫を思うて、糸車ひきながら春の日の午後を悲しい悲しい唄をうたつてゐる祖母の、なつかしい便りを持つて來たのではあるまいか。その傳言を聞いて來て、私にそつと告げてくれるのではあるまいか。さう思ふと、今物干棹にぴよいぴよい飛んで、彼方へ向き此方へ向き、首をかしげて、チュッチュッといふその啼聲が、私に云つてゐるとしか思へなくなつてくる。

けれども、それはあはれな空想にすぎない……私の故郷は北の國である。

南の國から來たこの燕は、丁度私の家にかうして巣をつくつてゐるやうに、彼處でも安らかな巣をもつてゐるに違ひない。毎年季を忘れずに、私の軒へ來てくれるやうに、秋になるとまた彼處の巣にかへつて行つて、幾月を樂しくそこに暮すのであらう。

南の國――それはどんな土地であらう。

南洋といふ、そのたつた一語を聞いただけでも、私の胸には熱い血がをどり上つて、眼前に奔放な美しい繪巻が繰り展げられる。芭蕉の樹が丈高く、そのだだつ廣い葉をこんもり擴げて、跣足の足の裏を嚙み付く熱砂になさけ深い蔭を與へてゐるところに、小さな小舍が轉がつてゐる、その小舍の軒端に燕は巣くうてゐるのであらう。そして、その小舍の中には、燃えるやうな赤道直下の熱血が身體中にどくどくと流れてゐる色の黒い少女が住まつてゐる……彼女の耳輪や、頸飾りは灼くやうな日光にきらめき、ふさふさした髮には孔雀の羽根がかざされて、かすかな文身を施

した黒い皮膚からは、烈しい生活力が發汗してゐる……その少女はめまひのしさうな匂ひの強い煙草をすぱすぱふかしながら、奇妙な短調の唄をうたつたり、何物かに投げ付けるやうな叫びを發したりして、頻りに小舍を出入りしてゐる……そしては遙かに白銀と輝いてゐる北の海を眺めやつて、その向うから來るものに待ち焦れるやうな夢のやうな目付をぢつと据ゑてゐるのではなからうか……

燕よ、燕よ、それを私に話してくれ。いや、おまへはそんなに絶間なしに喋つてゐるのだけれど、悲しや、人間と鳥とはいつの世よりか言語が通じないやうにされてしまつたのではないか……

然し、この私の空想は全くノンセンスではなからう……そんな少女もきつとあるに違ひない……私はせめてこの鳥が南へ歸る時には、その首に戀の歌を書いた手紙を結び付けてやらう、さうするとその少女がきつと見るであらう、そして燕が來年來る時には、また違つた戀唄がその脚に結び付けられてゐる……戀の文とは氣がついても、その文句はどちらも少しもわからないであらうが、それでも、熱いあこがれの思ひは感じられるであらう……いやいや、燕はその重さに堪へなくて、途中で海に落ちて死んでしまひはしないだらうか……

燕が啼く。風は操るやうに吹いて來た……私はおろかしい、途方もない空想から呼び醒まされた。

私は曾つて、永井荷風氏の『醉美人』といふ小説を讀んで、不思議な蠱惑に囚へられてしまつたことがある。あの佛蘭西人のやうに、あのやうな黒檀色の少女の魅力に囚へられて生を絃つたなら、どんなに幸福であらう……どうせ我々は人生の囚人である、我々の生は儚く電のやうに閃き去るのだ、美しい少女の黒髮に縛められて、靑春の盛りに花と散つたならば……生命とは、いづれ束の間の惡夢にすぎないものとしたならば……

ああ南國の女！　熱帶地の女は、たしかに溫帶や寒帶の女よりも、より多くの陶醉を男性に與へるに相違ない。こんな放縱なことを思つてゐるうちに、燕は何處かに行つてしまつた——多分餌をあさりに行つたのであらう。

考へて見ると、燕が私の家の軒へ來るのを見たのも、もう今年で五度だ。ああもう五年たつたのか。青春の誇りも失せて、美しい花も、戀すべき少女もない、沙漠のやうな此國に、私はかうして老いて行くのであらうか……だがこれも運命だ、もう泣くまい、悲しむまい……

ああ燕は何處へ行つたらう……鳥のクインみたやうなあの鳥は……

韓錢さげて

時候は今はつきり憶えぬけれど、何でも夏の初めであつたらう。たまたま眼に入る田の面には、たしか青い波が立つてゐた。

晝前の日光を麥藁帽子に受けて、釜山から艸梁への街道を、ぶらぶら歩いて行く十三四の少年があつた、それが私である。手帳と、錢さしにさしたいくらかの韓錢とを懷にして、元氣よく歩いて行く。朝鮮へ渡つてからは學校へ行くではなし、狹苦しい家の中にごろごろして、近頃とりわけやかましくなつた失意の父に邪魔者扱ひにされるのも厭やなので、持前の好奇心の導くままに、殆んど每日ぶらぶらと、艸梁、釜山鎭の方までぶらつき廻つた。よく飽きなかつたのを不思議に思ふ位。そして韓錢でもつて、朝鮮人から飴や、餠を買ふのを、唯一の樂しみにしてゐたのであつた。

釜山から艸梁へは、本道は海岸通りを、北濱の方から行くのである。丁度山と谷とぐらゐ、右手の埋立地からはずつと高い路の、左はすさまじい岩山で、よくダイナマイトを爆發させては通行止をしたものである。小十町も行くと

坂になる。坂の上には西洋人の宣教師の立派な洋館が聳え立つて、風雅な煙突から一條の青い煙を、海の方、または山の上へ吹き靡かしてゐる。そのあたりには、朝鮮人の汚ない家も危なく縣つてゐる。坂を下りると左手が、路よりずつと低い窪地になつて居て、其處には韓人部落がある。そのごちやごちやした小さな家の重なり合つた間に、大きな乳房をだらりと垂れた女が立廻つてゐたり、裸の子供たちが騙けずり廻つてゐるのを俯瞰すると、塵芥溜でも見るやうな氣持になる。支那居留地は其處から直ぐである。この支那街のはひり口には料理屋があつて、物々しい支那風の家造りの、例の慾張つた文句を記した紅い唐紙をべたべた貼り付けた門口に、小さい臺を出して、それに饅頭に似たやうな菓子を並べてある。自分はこれを支那饅頭と名づけて、その頃の好物の一つに數へ、その方へ行く度にそれを買つて食べた。「オイ、オイ」と二三度呼んでも、支那人、ちよいと出て來ない。路とほる人が自分の顏をじろじろ見るので氣まりが惡く、立去らうとする時分、のこのこと豚のやうな老人が出てくる。銅貨を投げ出し、饅頭をふところに、艸梁の方に急ぎ足に立去り、一町ばかりも行つて振向いて見ると、支那人は矢張りまじまじと、柱によりかかつて自分の方を見送つてゐるのが例であつた。

さて歩く。故郷と違つて、知つた人が無いから、少しも遠慮は要らない。小僧つ子がどんな風をしてゐようが氣を付けて見る人もない。今思つてもをかしいが、見やう見眞似に肩を怒らして、のそりのそり歩いてゐる擔荷夫の大きな奴にわざと突當つては、朝鮮語でもつて罵詈を加へる。「モーヨ」と向も應ずる。やい此小僧位なことは言ふのであるが、それが面白い。餘り罵詈がひどい時には、朝鮮人は始終口からはなさない長煙管を威嚇するやうに振り廻す。少年は大急ぎで逃げてしまふ。

艸梁の停車場は廣い。汽車も故郷で見る横貫式とは違つて、頗る大きなものである。驛前のあの廣い道を、鞄をさげた、インバネスを着た、中折、鳥打、靴、駒下駄…… 理由もなしに朝鮮人を叱り飛ばしながら行く工夫體の男、子

供を抱いた夫婦連れ、車上の人、歩く人、それはさまざまな人が行く。一度はあの汽車に是非乘つて見たいものだと、私は羨ましげに、釜山鎭へ行く道からいつも列車を見上げ、見送りしたものだ。

　停車場の左側の路、だんだん高くなつて、また平坦になる。左手は崖で、右手には官舍がづらりと並んでゐる。そこを少し行くとふたたび青い海が見えだす。朝鮮舟が二三隻、陸に沿うて帆を上げてゐる。遠くに一帶の山が、禿山のやうにもなく紫色にかすんで見える。はるかに後の方を見返ると、絶影島がによつきり高く聳立つて、その前には大きな汽船が十隻あまり、ぽつぽつ煙を吐いてゐる。少し引込んで、白堊、粉壁、赤煉瓦、バラック、疊々と連つてゐる――そこは釜山の街なのである。

　ぽつぽつ惡臭い家屋が斷續するあたりに、暖かい日光を背から浴びて、一人の老人が露店を開いてゐた。津山あたりの訛りゆゑ、生意氣にも、「お國はどちらです」と問うと、(もつともこれはこの土地では初見參の人には必ず持ち出す言葉なのだが)「はい、作州で」と答へて、それから老人は詳しく私の故鄕、父母、境遇などのことを問ふのであつた。美作は隣り國だし、私は何となくこの老人がなつかしく、賣臺の後にうづくまつて錢さしを客にして買つた餅や菓子を食べながら、老人の重たい口から、朝鮮人の奇妙な風俗などの話を聞いた。そんなことから、老人はたうとう私の家とは親しくなり、雨の日などにはよく話しに來たものであつた。私はこの老人に十錢の借金を負うてゐる。返さう返さうと思つてゐるうちに、加德の方へ行くことになり、二月ほどたつて遊びに歸つた時、老人が北韓に行くとて訣別に來たと母が話した。それから杳として消息がない。こんなことは在韓の日本人には珍しい事ではない、で、ついそれきりになつてしまつたのであるが、私はそれを甚だ殘念に思つてゐる。この老人、昔は何の何兵衛樣とでも呼ばれたお歷々の庄屋樣でもあつたらう、人品賤しからぬ人で、頗る人の善い氣樂人であつた。十八九になる娘が一人あつて、父親について商賣に出て、朝鮮人や工夫などに猥らなことを言つてからかはれて顏を眞紅にしてゐるやう

なこともあつたが、二人とも、その母のことを訊くと、何とか曖昧なことを言つてはぐらかしてしまつたものである。何か深いわけがあるのだらうと私の家では言つてゐた。

老人の店から少し行くと、大きな韓人部落になる。その中にはちよいちよい日本人が駄菓子や、煙草などを賣つてゐる店もあるが、その部落へ入るとむつと物の饐ゑたやうな臭ひが鼻を衝く。片眼の婆だとか、裸の子供だとか、例の大きな乳をだらりと垂れた女だとか、むさ苦しく、垢づいた朝鮮人たちが到るところにうようよしてゐる。その村端れには少し引込んだ狭い家があつて、そこでは戸を開け放したまゝ、十六七から四十にもなる總角(未婚者)が十人ばかり車座になつて、しきりに花を引いてゐた。その隅つこには、十三四のきれいな少年か二三人、默つて菓子を食つてゐる。私は何だか厭やな氣がして、その前は足早やに通り過ぎた。

小さな橋をわたると、もう釜山鎭である。……

板洗ひ

前もない、後もない。

釜山の北郊を流れるある小川の畔りである。白楊が二三本立並んでゐる。私は草の上に蹲つて、川の中の三人を面白さうに見てゐた。十三位の時である。

水の色は青いが生溫さうである。けつたるく流れて行く。日はぽかぽかと照つて、水はふざけるやうに輝いてゐる。風がないので動く草もない。川の中には、十四五から十八九位の朝鮮人の娘が三人、股のあたりまで高く袴の裾をか

かげて、おなじく腕も半分ばかりあらはして、四角い板をごしごし洗つてゐる。その板は何の爲めに用ゐるものか知らないけれど、樹木のない朝鮮ではそれだけの板でもなかなか大切なものに相違ない。

娘たちはいづれも目の大きい、睫毛の長い、圓い顏である。默つてはゐるが、皆いかにも面白さうだ。板をこする音が靜かに響く。

私はその動く手元や、水に映つてゐる姿を、初めのうちはぼんやり見てゐたが、暫くすると、店頭の繪草紙を皆自分のものにしたいやうに、この三人を皆自分の友達にしたい氣がしだした。

三人は顏から、身體や手足の恰好から、殆んど同じやうだ。ただ順々に小さくなつてゆくだけである。脊が高くて、肉付きがいい。足が長くて、股からだんだん細くなつてゆくところが何とも言へず美しい。

十分の後には私も川の中へ入つてゐた。水はさすがにひんやりする。私は睦まじく三人と話をしながら、一番大きな娘の板を持つてやつた。おなじ手傳ふなら、板を持扱ひかねてゐる小さな娘の手傳ひをするのが本當であるのに、何だか大きい方の娘が好きだつたから、その傍へ行つたのである。けれども、よく私に語して聞かせるのは小さな娘であつた。中の娘もちよいちよい私をからかつた。私の傍らの娘はただ默つて微笑んでゐる。その熱い頰は幼い心を無理やりに熟せしめようとするやうに私の頰に絶えず觸れた。

私は溫室へでも連れて行かれたやうな氣持になつて來た。

水の中に四人の足が透いて見える。私の足が一番小さいので、何だか恥しいやうな氣がする。手がだるくなつて來たので、一生懸命に板を握つてゐると、指の長い甲高な足が、突然私の足をそつと踏みしめた。柔かい綿でもかぶさつたやうに、別に痛くはなかつたけれど、その爲めに中心點を失つて、私は危く水の中へ倒れようとしたら、待ちまうけてゐたかのやうに、六本の手が早くも三方から支へてくれた。

私は呆氣(あつけ)にとられて三人の顔を見廻すと、二人の娘はさもをかしくてならぬやうに、兩手で顔を隱して笑ひ出した。ひとり傍らの娘だけは顔を眞紅にして、私の耳もとへ口をあてて小さく、
「勘忍して頂戴ね」と言つて、
そして私のうなづくのを見て、やつと安心したといふ風で二人の妹に向つて、
「もうこれでいいから、早く持つてお歸り」と言ひつけた。
すると二人とも素直に板を抱へて、二三歩行つてから、一緒にふり向いて、
「姉さん、いいこと？」と意味ありげに云つて、につこりして、また水の中をじやぶじやぶと川下の方へ行つてしまつた。私はなぜ川の中を歩いて行くのだらうと、それればかりに氣を取られてゐた。
二人きりになると、娘は私の顔を覗くやうにして、
「あなた、おいくつ？」と目を細くして訊く。いくつかを答へると、
「まあ、そんなに小さいの！」とさも驚いたやうな聲を出して、烈しく頬ずりをした。私は一層吃驚して、不思議さうに娘の顔を見ると、日かげを浴びたその顔は紅い花のやうであつた。
氣が付いて見ると、私の足の裏は滑らかな、ともすると滑りさうな苔や小石を踏んで、二人はいつか川上(かはかみ)の方に水の中を歩いてゐたのであつた。私の胸はわくわくと、ただ何がなしに顫(わなな)きふるへた。
もう別れた二人の娘のことも忘れてしまひ、樹の上から飛び立つ眞白(まつしろ)な朝鮮鴉(てうせんがらす)にも氣が付かず、ただ夢うつつに、ひたと柔かな腕(かひな)に頸(うなじ)を卷かれながら、覺束なく歩いて行く私の肩は、娘の腋(わき)の下にふれてゐる。何だか自分で自分の身でないやうな氣もする。
この川が何處までも盡きなければいいと思ひながら、

「何處へ行くの？　え、姉さん」と私が訊くと、
「つい其處……いい處よ……」と遥か遠方からのやうな聲であつた。
私は再度、頬が燃えて焼けさうなのを覺えた時、もう堪へられなくなつて、覺えず娘の胸にしがみ付いてしまつた……

ただそれだけである。ボッとぼかしたやうにこのあとは薄れて消えてしまつてゐる。ただこれだけが今ふつと胸に浮んだのだ。これは昔の空想であつたらうか、いつの日にか見た夢であらうか、それとも事實あつたことであらうか？こんな事があらう筈がないと自分で打消すと、微かに誰れやら、いやさうではないと、何處か遠方から答へるやうな氣がする……

豚を飼ふ少女

朝鮮の九月。夏に繁かつた雨のおとづれも絶え、日光は毎日々々禿山の頂上を黄色く辷り落ちる。畠に煙草も大きくなつて、その一本毎に早くもぼつぼつ頭に薄紅い花をつけはじめた。一帯に地平線を覆うた青色は、今その單調を破つたのである。村はこれから忙しくなつてくるのだ。

今日も眩しいばかりの快晴である。不恰好に四角張つた連山と連山との間に、遥かに低く薄雪でも降つてゐさうな、藍色の遠山が見える。白い雪が淡くたなびいて、果て知れぬ空には夏の名殘がほのかに漂うてゐる。野には人影もない。私は爽かな初秋の風に吹かれながら、うかうかした穏かな氣持で、畠路を家の裏まで戻つて來た。

私の家は一つ家である。畠を半丁ばかり隔てて韓人の家が二三軒あるばかりだ。前の街道に立つて見渡すと、村や

日本人街は、二階建の家といふものが無いから、ただ僅かに不規則に並んでゐる茅葺の屋根が見えるばかりだ。家の裏は崖のやうになつてゐる。そして勾配の急なところと緩かなところとあつて、その緩かなところに路がついてゐる。崖には雑草が刈られて、薊やゝひよろひよろした小松や、灌木の類だけが殘つてゐる。街道から始まつて、小高くなつた赤楊林に絶える崖下は一面の煙草畠である。

畠から出て、崖を上らうとして、私は塵芥棄場にたかつてゐる大きな黒い塊りの群に驚かされた。それは豚の群れであつた。私の家から毎日投げ棄てる廢物が山のやうになつて、一種の惡臭を放つてゐる。それを漁つてくれるのは野良犬と、韓兒と、そしてこの豚の一族とである。

黒い毛は泥で固つてゐる豚群は、鼻で鼻を押しのけては我れ勝ちに、雨にたたかれて板のやうになつた古新聞紙や、破れ笠などの下を掘返してゐたが、私の足音に驚いて、後をも見ずに五六匹、短い足で驅け出した。中には股の肉を昨日あたり切取られたものか、赤い肉を露出して跛ひいてゐるのもある。ぱつと飛立つた青蠅の中を、彼等は異樣な唸り聲を發しながら走つて行く。

私は立止つてぢつと見送つた。やや蔭つた日射に、豚の影は丁度醜い老婆がいさかひでもしてゐるやうに草間にちらちら動いた、が、それもぼんやり遠くなつてしまつた。

何時か私はある朝鮮人の家で、壁にかかつてゐる豚の皮を見たことがある。私は不圖それを思ひ出した。毛には乾上つて黒く固つた血がついてゐて、なまぐさい臭ひがした。

田舍の海岸町に生れた私は、朝鮮に來て初めて豚といふものを見たので、彼等は貧しい朝鮮人の不潔な溫突生活と相俟つて、私の心の中に朝鮮の概念を構成してしまつた。そして日本人街の街頭に打たれる朝鮮人を見る毎に、私は豚の幸福を想ふのであつた。思ふに神經組織の粗笨なだけ、生物はより容易に生きられるであらう。そして敏感にな

ればなるだけ、生きることは愈々困難になるに相違ない。人間の仲間に於ても、デリケエトな心と肉との、堪へがたい困憊を、私も自分自身の上に嘆かないではゐられない。豚のやうに打たれ、豚のやうに生身を殺がれるためには、豚のやうに凡ての苦痛に不死身なものでなくてはならない。私は激しい感情と鋭敏な神經とを有つた爛熟した古い民族なる朝鮮人の日毎の生傷の痛ましさに目をそむける。然し、それはまた本國を逐はれたこの一人の若い敗殘の流浪者の悲しい運命でもあるのだ……私はまたいつか自分自身のことに考へ耽つてゐるのであつた。

ふと後の方で短い叫び聲がした。振り返つて見ると、いつもよく見かける金書房の娘である。朝鮮髷が黒々と垂れ下つて、いかにも陰氣臭い、いつも怒つてゐるやうに見える大男の金書房の娘とは思はれないほど、可愛らしい瓜實顏をした、色の白い娘である。彼女は私の眼と眼の出逢つた時、顏を眞紅にして、何やら口の中に呟いて私に腰をかがめた。私も少し面食つて、「やア」と云つた。娘は直ぐ小走りになつた。

ぼんやり見守つてゐると、娘は何やら悠長に叫び出した。すると今迄、畠の中へもぐり込まうとしてゐた豚の群れは、直ぐに引返して、ぶうぶう唸りながら娘を取卷いた。娘は街道の方へ歩き出す、豚は行儀よくのこのこ附いて行く。私は我ともなく微笑みながら、すらりとした娘の淡紅色の袴をつけた後姿を見送りながら崖を上つた。

もう一度こちらを向かないかなと、さう思つた時、娘は立止つて私の方を見返して、手を目の前に一振りして、何か言つてにつこり笑つた、ほんのりした桃色の顏の中に白い齒がきらめいた。私はその長い睫毛のゆらぎさへ、はつきり見えるやうに思つた。そして自分も手を振つて、「さやうなら」と聲に出して云つて見た。

崔書房の花嫁

崔が結婚した。我々はその當日、何がな珍妙な趣向で祝してやらうと相談までしたが、朝鮮人のことだから、どんな習慣があるかも知れぬ、止せ止せと云ふので、見に行くのも止めにした。

翌朝、彼は定刻に出て來た。彼は小柄な三十男で、今日まで獨身でゐたのだ。無駄使ひ一つしないのを感心だと思つたが、それは婚費をせッせッと貯蓄してゐたのであらう。

「昨夜はどうだつた？」といたづらものの吉井が問ふ。

「え、へゝゝ」と笑つてゐる。

「お嫁さんはどんな女かい、いつか見に行くが見せてくれるか。別嬪かい？」

「え、まだ娘でし」

「さうか、結構だな……」

そんな話をしてゐるところへ、同僚の上田が入つて來て、

「やア、崔書房、今日は！」とおどけたやうな大聲で叫んだので、一座はどッと笑ひ出した。

「おお、さうだな、今日からは書房だナ、ミスタア崔と云ふところか」と吉井は面白くて堪らないやうに云ふ。朝鮮では獨身者は白髮頭になつても、少年の時のままに辮髮を背中に垂らして、一人前の男子を以て目せられないのである。

崔はそんな話はなるべく避けるやうにして、黙つてせッせと働いて、例日より少し早く歸つて行つた。皆がやるお

かず、の殘りや、菓子なども、其場でもぐもぐ食つてゐたのが、今度は新聞紙に包んで持つて歸るのであつた。着物もさつぱりと新しい仕立おろしの眞白なのを着てゐる。第一、頭だ。これ迄は大きな風體をして、だらりと髮を後に組み下げてゐたのが、いかにも意氣地なしの標本のやうに見えた。それを一際大きな髷に結び上げて、網巾を卷き、馬尾帽を恭々しく頂いてゐる。それが嬉くしてならないと見えて、幾日も幾日も仕事をするのに帽を取らなかつた。兎に角人品が一段上つたやうだ。いかにも一人前の男になつたやうに、貫目がついて來た。

「まさかあの汚ない家ぢやあるまいな……」とまた吉井がからかふと、

「ええ、違ひまし、違ひまし」と崔はムキになつて辯解して、最後にぜひみんなで遊びに來てくれと云ひ出した。

「どんな風にしてゐるか、一つ行つて見ようぢやないか」と吉井は度々云つてゐたが、ある晩たうとう皆を引張り出した。

果して元の家ぢやなかつた。あの汚ないところとは大變な相違で、一寸した門もあつて、勿論さまで大きくはないけれど、その邊の韓人家屋中では目立つて小綺麗な家だつた。崔が見せたがるのも無理はなかつた。巾へ入つて見ても、溫突の壁をきれいに油紙で張り詰めて、花蓆などを敷いてゐる。いかにもすべてが光つてゐた。

崔は喜んで迎へた。

「お嫁さんはどうした」と云ふと、崔は困つたと云ふ顏付をして默つてゐる。

「見せたらいいだらう」

「朝鮮の習慣に違ひまし」と頭を搔く。

「まあ宜いよ、外の者ぢやない、僕等だもの……」と吉井は頻りに口說き立てる。ではとたうとう崔は不承々々に立つて次の間へ入つて、何か頻りに云ひ合つてゐる模樣だつたがやがて出て來て

「會ひまし」と云ふ。
どんな女だらうと思つてゐると、頻りにごたくさ着物でも着かへてゐるらしくヒマ取つてゐたが、やうやく此方へ出て來た。年の頃は二十位であらう、小柄だがなかなかの美貌で顏は白いと云ふよりもむしろ蒼く、睫毛の長い眼の瞳は、しきりに敏捷さうにくるくる動いてゐる。妓生の寫眞で誰でも知つてゐるやうに、髮をきれいに後に垂れて、薄靑い袴をつけてゐるのは別に珍らしくはないけれど、何となくその樣子に氣の利いたところがあつて、朝鮮人とは思へないやうだ。吉井は眼を圓くして見てゐる。

女は皆の顏を見ると、一寸顏を赧くしたが、さまで臆した樣子もなく、何か丁寧に挨拶をした。崔が皆を一々紹介すると、また何かしづかに云つて深く頭を下げた。崔の通辯で、良人のいろいろ世話になつてゐる御禮と知れた。暫く我々も默つてゐた。やがて、女は氣を利かして、小さな陶器の皿に菓子を盛つて出した。それは昨日、我々が崔にやつたそれであつた。そしてそれつきり彼女は退いてしまつた。

間もなく我々も崔の家を出た。その路で吉井は云つた、
「いい女だ、崔が見せ兼ねたのも道理だ。なかなかしつかりした處があるぞ、何か冗談云つてやらうと考へて行つたが、大違ひ。權がある。いい女だ」

結婚した允

一日、釜山の街をぶらついてゐた。

ふと向うから藍色の胴着を着た男がやつて來る。近頃結婚したばかりと見えて、大きな髷を戴いてゐる。眼の大きな、色の白い、なかなかの美男子だ。何だか見たやうな顏である。はて、誰だらうと、これまで知合ひになつた朝鮮人の名を繰つて見たが、ちよつと誰れだつたか思ひ出せない。

「誰れであつたかしら、見たやうな顏だが……」と、私はなほも記憶の頁を繰りながら歩いた。暫くして「ああ、彼男だつた」と呟いた。と、髮を荒く組んで後へだらりと下げて、皆のおもちやになつてゐた、あの時の彼の姿が眼の前に現れてくる。あの時、私は十四だつた。彼は十五だつたが、身體は私より小さかつた。何だか日蔭に育つた草のやうな生氣のない、ぼんやりした少年であつた。

あの時分、それは私が早く忘れ去つてしまひたいと思つてゐる生活で、愉快な記憶ではない。ある工場で、そこにはいろいろな人間がゐた。多くは本國に居たたまらなくなつた、もう救はれる見込みのない無頼漢、怠惰者で、私が今日まで彼處にゐたなら、きつと墮落してしまつたに違ひない。社會の最下層の、野卑淫靡な地獄であつた。

工場の下の方には淫賣屋が軒を並べてゐた。夜になると干瓢のお化見たやうな女たちが、暗い軒下にうぢようぢよしてゐた。職工等は安香水をぷんぷん匂はせてよく出かけて行つた。けれども多くの場合、みなあまり金を持つてゐなかつた。それであの朝鮮に於て特に甚しい忌はしい風習が、彼等の間でも頻りに行はれて、五人の朝鮮少年は常にその犧牲に供せられてゐたのであつた。そして美少年の彼は特にひどく虐められてゐたらしい。

私は家から出勤してゐたので、職工部屋の様子はどんなものか少しも知らなかつた。けれども恐ろしく野卑な、亂暴な空氣が支配してゐることは疑ひなかつた。仕事がすんだ時などに、中でも意地惡の中田といふ鬼瓦のやうな顏をした職工がやつて來て、

「さあ、チョンガアども、來た、來た」と云つて、居合せた鮮童を二階へ引張つて行くやうな事があつた。そんな時は

職工たちは、大抵醉つ拂つてゐるのであつた。そして二階では歌をうたふやら、罵るやら、大變な騷ぎがおつぱじまるのである。それを私が不思議がつて、

「君たちをなぜ二階に呼び上げるの？」と或朝訊くと、彼は心もち顏をあかくして、

「え、何でもないでし」と下向いてしまつた。

その後私はこんな處へ置いては、この兒の爲めによくないと云ふので、知つた人の世話である銀行の給仕に入り込んだ。それつきりもう彼には會はなかつたのだ。今見ると、大分變つてゐる、やはり彼處にゐるのかしら、もう結婚したらしいが……などと思ひながらやがて歸途に就いた。

するとまた向うから、四角い箱を提げて忙しさうに彼がやつて來た。今度は聲をかけて見た。

「おい、武夫君（彼はこんな名を頂戴してゐた）」

「へい、誰様？」と云つて彼は私の顏をぢつと見たが、

「アア、君でしか」と急ににこにこ嬉しさうに笑つた。日本語も大分うまくなつてゐるな、さう思つて私も微笑した。かうして彼と相對して立つてゐると、何だか兄弟の前にゐるやうな親しみを感ずる。いつの間にか彼は私よりずつと脊が高くなつてゐる、身體もすつかり逞しくなつてゐる、顏にも子供々々した處はもう少しもない。彼はまだ十七八には過ぎないのだが、朝鮮人は結婚すると皆こんなに急に大人になつてしまふのだ。

「久し振りだね。君、彼處は出たか、あの工場は……」

「お久しう……アア、工場は出ました、つまらんから……」

「今何處にゐる？」

「つい近くの山三商會でし」

「いつお嫁さんを貰つたの？」
「あ……」と彼は顔を眞赤にして、
「昨日……いいや、先月……」
私もまだ無邪氣なもので、それ以上別に追窮もせず、二言三言話してから、
「ぢやね、僕の家はあの郵便局の裏手だから閑があつたら遊びに來たまへ、ね、武夫君」
「はい、有難う、いちか行きまし。それからね。名は今武夫でなうて一郎でし……」朝鮮の少年は大抵その屆はれた先き先きで勝手な日本名を頂戴するのである。
「さう……ぢや失敬」
「さやうなら……」
二三間歩いて私は振返つて見た。彼は右の手で頭髪を掻き撫でながら歩いてゐる。チョッキの背が垂髮の油で黑く光つてゐないのを見ると、何だか變な、不思議な氣がした。そして、彼も變つた、然し呑氣なところは元の通りだ……と思つた。

鄭先生と金チョンガア

一

……彼はよろよろしながら、樹の枝にかけて置いた衣服を取つて、背中へふわりとかけた。まだしとしと濡れてゐ

る。それから手に唾をつけて、暫く髪を撫でつけて、後にだらりと垂下つてゐる辮髪を頭へ巻きつけて手拭をかぶる。
李兄弟は後の方へはふり出してあつた鍬や、鋤などを縄でからげてゐる。彼はその方を見て、
「牛はどうさつしやつた」
「牛かね、牛は嬶につけて歸しただ」と縄を引きしめながら、しぼつたやうな聲で言ふ。彼は、
「ふーん」と返事をしながら、巾着から圓い懐中鏡を取り出して、入念に顔を映して見る。やつぱり醜い顔だ、青黒い、口の大きい狐面であるけれども、彼は中位の好男子だと思つてゐる。殊に彼はその眞白な粒のそろつた齒と、すつと長くのびた眞直な鼻とが自慢である。

彼は村の美男とうたはれてゐる李兄弟の方をちよつと見た、弟はなかなかの好男子で、第一色が白くて、どうしたわけか日に焼けない、眼の柔和な、よく整つた顔立で、もう三十だけれどまだ二十五六にしか見えない。然るに彼は二十六なのに、年より大分老けて三十位にも見える。かう比べて見ると、また腹立たしいやうな氣になる。で、そそくさと鏡をしまひ込み、齒くそをせせりながら、
「歸らうかね」と氣のない聲で言ふ。
「さ、用意はええな、こらア路は暑からう、早く歸つて寝よう、まあ仕方がねえだから……」
「どうにかならうず……」

そこで三人は木立を出た。李兄弟は農具を少しづつ背負うてゐる。彼も畑へ飛んで行つて、鍬を取つて肩にかけて、一緒に歩き出した。

午後四時頃で、太陽はまだがつがつしたやうに照つてゐる。路傍の草は皆力なくうなだれて、その中へ眼をきよときよとさせて飛込んだ蛙のあとを追うて、艶のない蛇が路をよぎつた。日本人街の方からは、笑ひ聲や罵るやうな聲

が雜然と響いて來る。

彼は李兄弟と物が云ひたくなかつた、顏を見たくもなく、また一緒に歩きたくさへもなかつた。身體はぐつたりして、冷たい汗が腋の下にじくじく湧き出すやうで、妙に氣味が惡い。彼は何思ふともなく自失したやうに歩いてゐたが、とある日本人の農園の垣根まで來た時、不意に先へ立つてゐた李兄弟に、

「うら、川へ入つてくるべい、汝達ア先きへ歸らつせい」と云ひ捨てたまま、ツイとわき路へそれてしまつた。

「アア、暑いからの……」と兄貴の方は一寸此方を振向いたが、またスタコラスタコラ歩き出した、路が少し隔たると、二人は何やらくどくど云ひ始めた。

二

二人と別れて、ひよろひよろしながら、灰色のからつと乾上つた狹いでこぼこ路を、彼はうなだれて歩いて行つた。此頃はいつもからだ、それでも朝のうちは力が全身に充ち滿ちて、鍬をふり上げる手を朝風に吹かせて、をりをり青空を見ては今の自分の身を顧みて得意な氣持になる、そしてはそのいい方面のことばかり心の中で數へ立てて見る、衣食をくれて一年の給料が二十貫文であるから、煙草や酒にも困らない、それに自分は正直者だから、皆に金總角金總角と可愛がられてゐる、閑な時には奥山へ入つて木を伐り倒して、これでも相當の錢にはなる、……こんなことを幾つも數へ上げて、さて飲んだくれの李爺や、十人あまりの足手まとひを抱へて慘めな生活をしてゐる姜書房や、なまけ者の朴敦厚などに我身を比較して、ひとりで悦に入るのであるが、然しそれも長くは續かない。だんだん日が登るにつれて、暑さがひどくなる、苦しくはなる、疲れてはくる、畑の横の半ば倒れかけた葦垣の穴をくぐつて、常得意の飯屋で、濁酒を一杯傾け、晝飯をすまして、暫く眠つて、さて今度仕事にとりかかる段になると、身體はぐつた

りしてしまつてゐる、手や足は蝶つがひがゆるんだやうで、頭もぐらぐらする、けツたるくてならない。それで半日限りでつい怠けてしまふ事も度々である。

主人が見てゐないのだから、少しぐらゐ怠けたつていいわけであるが、畑の傍らの小高い家に、子供を集めて學問を敎へてゐる鄭先生と普通呼ばれてゐる白い髯の長い老人がゐる、これが主人の遠い親戚とかで、彼の監督でも頼まれてゐるらしく、よく小言を云ひにやつてくる。高慢ちきな老人で、我こそ天下の大學者と云つたやうな顔付をして、たかだか十人位の子供を集めては、我大韓國は世界中最も強い國であるとか、兵船とは海上で震天雷と云ふ恐ろしいものを打つて戰するものであるとか、いろいろな下らぬことを敎へてゐる。それが折々四角な七むづかしい字を書いたものを彼に見せて、うまいかまづいかと問ふ、若し煮え切らぬ返事でもしようものなら、きつとひどく不機嫌になつて恐ろしい顔をするものだから、彼もその呼吸を心得て、字を見せられると、いつも極力賞めそやす、と、老人はにこにこもので、

「まあちつと遊びに御座れ。わしが少し學問を敎へて遣はすぢや……」などと云ふ。

彼は腹の中でちやんちやら可笑しいと思つてゐるが、口さきでは、

「己も學問をして學者になりたいで……」などと云ふのであつた。

その癖老人の顔を見るたびに、學者といふものが嫌ひでたまらなくなるのだつた。あんなに　　が威張り散らして、自分たちを牛馬のやうに虐めるのも、みな澤山の　　や、軍艦を有つてゐるからだ、それにやれ大韓國が一番強いの、震天雷だのと、ヘン可笑しいやいと、腹の中で老人を嘲り且つ憎んでゐるのである。

彼は何思ふともなく歩いてゐた。ただ雲の中を歩いてゐるやうに、うかうかと、何處をあてともなく、一つとして取留めのない事を考へながら。ただ身體がだるい、頭が痛い、肩にある鍬が重たい――ただこれだけが僅かに意識さ

れるばかりである。

ふと心付くと、彼はとある木蔭に踞つてゐた。二三本樹が集つてゐるので、圓く蔭をなしてゐる。ただ葉の隙間からところどころ日が洩れて、彼のいろんな斑點のにじんだ茶色に色變りのした着物に面白い模樣を投げかけてゐる。鍬は行儀よく一本の幹にもたせかけてある。彼は兩手で顳顬を……

（この一篇は原稿の始めと、終りの大部分が紛失してしまつた爲め、何を書かうとしたものかそれすら今では思出せないのを殘念に思ふ。）

號泣

密使事件で京城に大騒擾のあつた折りのことである。

韓兵解散に引續いて起つた暴動はかなりひどいもののやうで、京城から此方へ歸つて來た知人の話では、一時は目も當てられぬ修羅場を現出したらしく、商店はいづれも戸をしめきつてゐるし、市中は憲兵によつて物々しく警戒されてゐたが、殺氣立つた朝鮮人は決死の氣勢を以て各所に出沒して、時々衝突しては、盛んに小銃を發射して、彈丸が人家の壁を貫くやうな事もあつて、ある時などは自分たちは恐ろしさの餘り床下に潜んでゐたとその人は話した。

そんな折りに、私は止むを得ない商用で、町から小十里隔つたある山間の一部落——戸數が百戸にも足らぬ寂しい一小村に出張することになつた。その土地は今が始めての土地ではない。時々、米穀買入やら貸金取立やらのために、會社から出張を命ぜられるところなので、私はもうその村の人々とはかなり知合ひも出來てゐたが、今度の用事は少

しこみ入つた土地の賣買に關する事件のところへもつて來て、世話人の宋書房があいにく病氣で寢付いてゐる始末で、交渉もひどく骨が折れて、なかなか折合ひがつかず、一向埒があかないものだから、私も少しいらいらして來た。が、宋書房も大分身體がよくなつて、二三日のうちには起きられさうだと云ふから、まあそれまで待たうと決心して、泊りつけの村の宿屋の塵埃と南京蟲との中に、ぐうたらに寢ころんでヤケに煙草ばかり吸つてゐた。

三疊敷ぐらゐの狹い溫突で、壁も天井も紙で張り廻して、下にだけ油紙が敷いてある。天井は低く、小さい入口が一つついてゐるきりだから、何だか窖の中ででもあるやうで、息苦しい氣がする。その上この狹い中に、私と、私の手先きに使つてゐる韓人と、外に耕作に雇はれて行く勞働者が三人と、都合五人がごろごろ丸寢するのであるから、その狹苦しさ暑苦しさと云つたらない。それにこの手合がみな不潔な人間ばかりなのだから、汗や垢にまみれた毛穴から放散する惡臭の上に、身體中に沁み込んでゐる韮や大蒜の臭ひがムツと鼻を襲ふのには、朝鮮に來てから不潔といふ事にはかなり平氣になつた筈の私もすつかり辟易してしまつた。そこへ以て來て蚤と虱と南京蟲とが天下晴れての跳梁を逞しうするのだから、とても寢てゐられたものではない。絕えずムニャムニャ云つては齒ぎしりする音が妙に不氣味に反響するかと思ふと、ボリボリと遠慮會釋もなくのび切つた爪で身體中を引つ掻き廻す氣味の惡さ。これが暑い時分だと軒下に蓆を敷いても寢られるが、まさかそれも出來ず、その前夜も一晩まんじりともしなかつた。

朝早く朝鮮人たちは皆出かけて行つた。私は氣味の惡い黍六の飯をすまして、暫くぼんやりしてゐたが、いつかついうとうとと寢入つてしまつた。何處か寂しい山路で大男の朝鮮人の追剝に襲はれて、逃げようにも足が動かない恐ろしい惡夢にうなされて、ハツと眼を醒まして、ホツと太息吐いてゐると、ふと、隣の部屋で誰かと爭論でもしてゐるやうな甲高な此家の媼の聲がするので、何だらうと私は聽き耳立てた。するとまた皺枯れた老人の怒りを含んだ聲がした。二つの聲は盛んに入亂れて、頻りに罵り喚くのである。私のあまり達者とも云へない朝鮮語の知識では、殊

にそんな彼方の話聲を聞き取る場合には、なほさら苦心を要するのであるが、それでもやつとその話の要領だけは飲み込めた。

老人らしい聲の云ふのには、韓國と倭國とは今戰爭をしてゐる、そんな際に何故倭人などを泊めてゐるのか、これが、若しこれが倭國の兵士であつたらどうするか……と、かう詰問するのだ。が、媼も負けてはゐない、私の家は宿屋が商賣だから日本人でも何でも金さへくれれば泊める、それが何故惡いと、いきまくのであつた。論戰は何やら馬鹿に七くどく、同じやうな事を何遍も何遍も繰返して、退屈するほど長つたらしく續いてゐたが、やがて、何やら一きは大きな聲で怒鳴り立てたと思ふと、その聲の主であらう、想像の通り五十餘りの大男がツカツカ椽を踏み鳴らして、私の部屋へ侵入して來た。手には京城の諺文新聞を携へてゐる。

彼はどつかと胡坐を組んで、暫くぢつと瞬きもせずに私の顏を睨んでゐた。私も何糞ッ失敬なと思つて、負けぬ氣になつて穴のあく程相手の顏を見てやつた。今迄に一度も見たことのない、頬骨の飛び出した長い顏で、白い顎鬚は長く垂れ下り、頭には馬尾帽を斜に頂いてゐる。殺氣立つた眼は人間の眼ではない、たしかに野獸の眼である。

私も少し不安な氣がしたが、どんなことを云ふかと思つて待ち構へてゐると、やがて重々しい聲で、

「貴樣は日本の兵士か？」まるで泥坊でも調べるやうな調子である。私は腹が立つたが、強ひて押し鎭めて、

「いや、商用のために來てゐるのだ」

「何處から來た？」

「××から」

「さうか、よう御座る。ところで　お訊ね申し度いが、今度の戰爭は一體どうした譯で御座る？」

「一體何ですか、今世界中で戰爭してゐる國は何處にもありませんよ」

「いや、さうは云はさぬ。お前さんが知らん筈はなかろ、今現に大韓國と倭國とは、戰爭をしてゐる。京城で……これ見なさろ」と新聞を突きつけて、爪の長い太い指で記事をさし示す。勿論私には例の梅の花文字は一向何の事やら讀めもしないのだが、その太い指を見てゐると、私はふと持前の惡い癖が出て、此奴一番驚かしてやれといふ氣になつた。

「さうです、今現に日本は百萬の精兵を出發せしめようとしてをる。百隻の軍艦はもう既にこの朝鮮を包圍してしまつてをる……朝鮮國の滅亡も既にここ數日のうちにある筈だ……」

「エ、エ、何云はつせる」老人はすつかり度膽を拔かれたやうに、呆然と私の顏を見てゐたが、暫くすると始めの元氣は何處へやら、

「本當の事を云はつしやろ、嘘つくときかんぞ」

と云つたが、その聲は何等の自信もなげに顫へてゐた。私はこの際少しでも弱身を見せてはならぬと思つて、此方も先方に負けないやうに顏を硬くしながら、あることない事いかにも尤もらしく喋り立てると、彼はやや蒼褪めた顏の筋肉をぴくぴくさせながら、思案に暮れた風で默つて聞いてゐたが、暫くしてぢつと私の顏を見たと思ふと、忽ち、「あア、いよいよ來たア」と絕望の調子で叫んで、ピクピク顫へる手を顏へ押當てたが、突然思ひがけなく、「哀號、哀號……」と號泣を始めた。大きな男の泣くのは餘り見ともよい圖ではないが、それが眞劍だからむしろ恐ろしい位である。入口の外に樣子を窺つてゐたらしい媼は飛込んで來て、

「何させつた〱」と云つたが、老人はそれには答へないで、つと立上つたが、淚で濡れた顏を片手で抑へたまま、悄然としてとぼとぼ歸つて行つた。亂暴でもしやしないかと思つて內心ビクビクものでゐた私は、何だか拍子拔けのしたやうな氣がして、その寒さうな後姿を見送つて、何だか氣の毒な氣がした。秋風百里、亡國の山河は、この老愛

國家の慘めな有様を眺めて笑つてゐるやうに見えた。私はそれから暫くぢつと目前の禿山を眺めながら、いろいろな事を思ひ耽つてゐた。

其後この南韓方面にもだんだん物騷な暴徒の噂がまちまちしだして、八助峠の慘殺などの事も耳に入つたので、何だか恐ろしくなつて、それから二三日して用事は宋書房にすつかり一任して、私もその村を引上げてしまつた。

明太魚

「うら市場へ行つてくるから、また酒飲んだら承知しねえよ」と言ひ捨てて、末の兒を背負つて嬶は出て行つた。

四十恰好の酒肥りに肥つた親爺は、それには返事もせず、溫突の隅に寢ころんでゐたが、いつかぐうぐう眠つてしまつた。一時間位で眼がさめた。もう晝だ。

「どりや、そろそろ用意しべい」と呟いて、嬶がこしらへて置いた飯やお菜を盛つてゐると、五六人ぞろぞろ歸つて來た。いづれも其日稼ぎの勞働者で、この家に泊つて工事場で働いては、その金で博奕を打つたり酒を飲んだりして、だらしなく年とつて行く連中である。一騷ぎの後、それ等が出て行くと、ろくすつぽ返事もせずに、苦々しい顏してゐた親爺は、早速片隅から飛び出して、嬶が虎の子のやうに、大切にしてゐる酒甕から、福、壽などと四角い字を稼起よく書いた德利に酒を波々と汲み入れて、棚から明太魚と牛腸とを引き下して、さて悠々と手酌をはじめた。

「鬼の留守の間の洗濯たアこの事かい」と大恐悅の態である。そこへ、

「親方、ござらつしやるか」と若い男が入つて來た。

「やあ、李書房か、宜え處へ來た、一つ飲め」と言つて、先刻、客が食ひ散らして行つた儘はつたらかしてある大きな金椀を一つ取つて來て、なみなみとつぐ。
「いつも景氣が好えな」と言ひながら、若い男は草鞋をぬいで溫突の中へ上つて、どつかり胡坐をかくなり、遠慮はない、ぐつと金椀を一飲みして、
「時に親方、己ア親爺がやかましくて、ろくに遊びも出來んで、閉口だア」と少ししよげた顏をする。
「困つた事だ、己も嬶衆が怒るもんで、どうもならない」と明太魚を引き裂いて食ふ。この明太魚といふのは、一向味のない、まるで紙を嚙むやうな乾魚であるが、朝鮮人はひどく好物にしてゐる、こいつを裂いて食ひながら酒を飲むのは、殊にこの親爺にとつては何よりの喜びで、彼は自分が市場へ行つた時は、無茶にこの魚を買ひ込んで、いつも嬶に叱られるのが常であつた。
「だつても親方は親方だ、どうでもなろが、己なんかホンにどうもならない、いつそ大邱の方へでも行かうか思つとる……」と考へ込んだ調子である。この男は親爺といつも博奕を打つたりする道樂者なのだ、二人は暫く互ひに不景氣な話ばかりやつてゐたが、
「時に己ア思ひついたことがある。市場さ遠いで、金水洞の衆因つとるだろ、そんでな、あん河へ舟浮ばせて、錢取つて渡しするたアどうだ、今度こそきつと儲かるぞよ」と不意に親爺は得々と云ひ出した。
「なんぼ遠くても、錢が要ら乘る者アんねえよ……」若い男はそれでもなかなか考へてゐる。親爺は得意の計畫を二の句も次げぬほど頭ごなしにやられてしまつて、またそれがいかにも理の當然なので、すつかり鼻白んで、
「ウ……」と何やら云ひたさうに唸つてゐたが、やがて、
「それもさうかい……だが、郡守サ頼んだらどうか……」

「郡守だとて何だとて、錢には勝たれない」
「ううむ……」と親爺は腕を組んで、何か考へる模様だつたが、やがて不意に、
「花さよかとて山邊の花は、折りに行くのに骨をれるッ」とうたひ出した。
「や、面白い面白い」と、若い男はすつかり悅に入つて手を拍つ。
「酒を飮んだら面白ござる、あとの拂ひがつろござるッ」となほも手拍子とつてうたふ。
「己もうたふべい……」と若い男は舌なめずりをしてから、
「君さ靡くならうらが方に靡け、うらは金持、いろ男」
こんな風に大騷ぎをやらかしてゐると、そこへ十五の少年が入つて來た。
「お父さん、また騷いで御座る。うら、今歸つて來ただ」
「やア、トンクラか、よオ歸つた、さ、まア酒一つ飮め」
「ええ」と少年は若い男を見て、媚びるやうな笑ひ方をした。これは親爺の總領で、今二三里先きの驛の官舍に奉公してゐるのだ。
「や、トンクラさ、今歸つたか……」と若い男はとろんこした眼を此方へ向けて、ニヤリと飴の溶けるやうな笑ひを浮べた。
トンクラは腰から二百文韓錢を取り出して、
「三百文貰つて來ただが、百文はおら使つてしまうた」と云ひながら、それを親爺に渡した。
「仕樣のねえ餓鬼だ」と口には云つたが、にこにこもので、親爺はそれを引奪るやうに取つて、手早く腰にさしてしまつた。

トンクラはつまらぬ顔してゐたが、若い男の隣へうづくまつて、まづさうに酒を一口飲み、明太魚をばりばり食つたが、

「食へん、こんなものア……」と吐き出すやうに云ふ。

「勿體ないこと云ふもんだない」と親爺は叱り付けて、トンクラの手からそれを取つて自分の口へ投込んでもぐもぐさせてゐたが、

「うらは山邊のいばらで御座る、刺があるので人が來ぬ……」と大元氣で、またうたひ出した。

ところへ、すたすたと嬶が戻つて來た。

海岸通り

郵船會社の横を出ると、魚市場を中心にして朝から晩まで雜沓を極めてゐる海岸通りに出る。其處には露店が並んでゐて、大福餅を燒いたり、飴ん棒や豆板などを並べたりして、韓錢一文二文の商ひをしてゐるのであるが、いつも呑氣な朝鮮人たちは、長煙管をぷかぷか吹かしながら、悠々と行つたり來たりしてゐるが、不圖知合ひの顏を見るとその方へ立寄つて大きな聲で果てしなく喚き立てるので、一寸見るとまるで喧嘩をしてゐるやうである、が、實はこれが彼等の最も興味ある話題を捉へた時で、少し上向いてカラツカラツと高笑ひをやる。そのうち少し退屈してくるか、ひもじくなつて來るかすると、大切さうに前にぶらさげてゐる巾著を開けて、板のやうな葉煙草などと一緒に藏ひ込んである韓錢を探り出しては、最寄の露店へつかつかと立寄つて、いきなり熱した板鍋の上でじりじりと焦けて

ゐる大福餅を掴んで大きな口へはふり込む。これ等は生活に餘裕のある兩班(やんばん)や、町に取引に出かけて來た小地主などといふ連中であるが、その日暮しの擔荷夫(チゲクン)どもは半裸體を埃だらけにして、海から吹いて來る風に赤茶けた箒のやうな髮を吹き靡かせながら、額から流れ落ちる玉の汗を拭はうともしないで、仕事のとだえた時分などに、そこらの板壁に崩れるやうに凭れ込んで、うとうとと居眠りを始めるのもあれば、始終そのあたりを往復してゐる飴賣の鮮童(チョンガア)を呼びとめて、その紐で前の方に吊してゐる四角な木の箱の中から太陽の熱で柔かに溶けさうになつてゐる白い飴を、節くれ立つた太い指でつまみ上げながら、猥らなことを云つてからかつたりしてゐるものもある。そして其のあたりには、何處を見ても倦怠と頽廢の空氣が漲つてゐるやうで、理由もなしに朝鮮人どもを罵倒したり突き飛ばしたりして行く日本人の仲仕や、人足なども、妙に間延びのしたやうな歩きかたをしてゐる。

その海岸通りから本通りへ出る町角の少し引つ込んで雜沓のやや鎮まつてゐるところへ蓆を敷いて一人の盲人がすわつてゐる。白衣を着けた上半身は、海の方から射して來る午後の日にぽつと黄色く浮いてゐる。私はその前に立止まつた。

盲人は痩せた手で長い鬚を撫でてゐる。五十あまりの老人で、破れた馬尾帽を冠つて、容態(ようだい)振つてはゐるけれど、その顏は油紙のやうな色をして、それに一つ一つの苦痛を刻み込んだやうな皺が大波のやうに額から流れ落ちて來るその双の頬は、げツそりこけてゐる。老人の傍には十二三の色の白い、可愛らしい圓い顏をした少年が踞つてゐて、飴を頬張りながら、物珍らしさうにあたりをきよろきよろ見廻してゐた。多分老人の孫でもあるのだらう。私は二人の姿を見くらべて、痛ましい思ひに打たれながら、ぼんやり佇んでゐた。

のん氣な朝鮮人たちは、見るまに十人あまり其處に集つた。彼等は互ひに肩をつついたりふざけ散らしたりしながらも、或る程度の熱心をその眼に現して、老人の手の動き出すのを待つてゐる。

ぢつと足音を數へてゐた盲人は、おもむろにその手に携へてゐた竹で作つた笙のやうな樂器を取上げて、こけた頰をふくらませて、劉喨と吹き鳴らしはじめた。それは極く單調な、ものうい、しかもその底に何處か寂しい哀愁を含んだ旋律である……

老人の顏には多少の活氣が浮んで來た。

少年はやつぱり默つて皆の顏を見まはしてゐる。

韓人等はみな踞つたまま、何か小聲で囁き合つてゐる。日影は老人の身體をだんだんのぼつて行く。白壁が日に反射して、見る眼にまぶしく、妙に神經が疲勞してくる。

一曲彈じ終ると、私は白銅一つ投げ出した。すると韓人どもは、みな不思議な顏をして私を見るのだつた。先刻から立止まつてゐた一人の洋服の紳士が、自分も直ぐまた十錢銀貨を投げ出して、一寸私の方を見てから、すたすたと立去つた。

老人は少年に金を拾はせて、また新しく吹奏をはじめた。

私も默つてそこを離れた。そして「哀れな人間が一人……いや二人ゐる……」と心の中に思ひながら、歩き出した。

海の方を見ると小蒸氣が飛び、艀(サンパン)が梭のやうに馳せ違うてゐる。そしてその向うに、絹影島が禿山を高々と殺風景に聳立たせて、その下の方の家々からは細く煙が吹き出してゐた。

佛蘭西の水兵

十三の時だ。朝鮮のある港町に住んでゐた。ある日、佛蘭西の軍艦が入つて來た、そして水兵が上陸した。家の前をぞろぞろ通る、士官もゐる、水兵もゐる、皆嬉しさうに笑ひ立てながら通る。それが遊廓にくり込んで、大變な大騷ぎをしたあげく、晩方に千鳥足で三々伍々艦へ歸つて行く。

私の家から一軒おいて隣りに酒屋があつた。毎晩の例で、その日も燗徳利をもつて父の晩酌の酒を買ひに行つた。まだ燈はともつてゐなかつた。

店に水兵が一人ゐた。深く落ち込んだ碧い眼、軍帽の下からはみ出した縮れた髮、それは他の外國人とさして變りはないが、右の手に小さく錨の形を文身して、指に黄色な硝子の指輪をはめてゐた。それが物珍らしかつたので、私は酒をつめて貰つた徳利を手に持つた儘うつかり見てゐた。店頭にも、弟やその友達や近所の子守女や隣りの桶屋の親爺など五六人、何かひそひそ言つたり、口あんぐりさせたりして見てゐる。

水兵はコップについだ日本酒をまづさうにちびちび飲んでゐたが、ちよつと此方の方を見てから、奇聲を放つて更に何をか要求した。多分、火酒でもあつたのだらうが、言葉が通じないので、丁稚は麥酒や葡萄酒をな取りかへ引きかへ出して見せたが、皆氣に入らない。つひにチョッと舌打して、不滿さうに何かぶつぶつ言ひながら、ポケットから圓形の蟇口を取り出し、五十錢大の銀貨をぴよいと疊の上へはふり出して立上り、つと街路へ出たが、何思つたか立歸つて、そこらをきよろきよろ見廻した。そしてやつぱりぼんやり見てゐる私の傍へ、千鳥足でやつて來て、私の持つてゐる燗徳利に口をもつて行つて、それを飲む眞似をして、にやりと笑つて、私の頭をぐるぐると撫で廻してやさしい聲で何やら言つたまま、ひよいと外へ出て、そこらをぞろぞろ歩いてゐる同僚を呼んで、泥のやうに醉つたのや、折詰をさげたのと一緒に、海岸の方へ行つてしまつた。大分醉つてゐたやうだ。

氣のきかぬ丁稚どもは、例の銀貨をひねくつてぼんやりしてゐた。私は氣が付いて弟を連れて家へ歸つた。けれど

私は、あの水兵が踊るやうな樣子をしながら酒屋の店を出て行つた姿はいつまでも忘られないでゐる。

西藏へ

京釜街道――鐵道線路に沿うたり離れたりして、灰色の路が何處までも何處までも走つてゐる。時たま思ひ出したやうに日本人の街が、或は片側或は兩側に、それも申し譯のやうに、亂杭のやうに、家を連ねてゐることもあるが、大抵は韮と大蒜との臭ひに咽せ返りさうな韓人部落が、丸い石塊を無雜作に積み上げて泥でかためた僞頭笠のやうな家を無遠慮に兩側から接觸させてゐるか、または一見荒野のやうな感じを與へる畑が續いてゐるかである。時によると嶮しい石山に迷ひ入ることもあるし、饅頭を無數に雜然と並べたやうな墓原を横ぎることもある。然し、何處まで行つても、單調で、腹立たしいほど單調であるのは變りがない。

丁度五月の末で、手近の小山や、遠くの茫漠たる野原も、さすがに新綠の若々しい裝ひを凝らし、天には初夏の光が行き場に迷つてゐるやうに漲り溢れてゐる。まだ朝のうちで今し方列車が北に向つて騒々しく通過した後は、野に動く白い群れも、路に行き交ふ白い姿も極く稀れで、時折り何處かずつと山の彼方の方で、岩でも切出すのか、ダイナマイトを爆發させる音が坊主頭の山々に反響を呼び返すばかりで、ひつそりと靜かだ。この單調な灰色の路を、北の方をさして、奇異なる一人物が歩いてゐる。單衣の身に輕い法衣のやうなものが肩を垂れて、その肩には油紙包みを振分けにして、草鞋をはいた二十五六の靑年である。

「おお、やつと町だ」と彼は呟いて、急に足調を早めて町へ入つて行つた。町と云つても停車場を中心にして出來上つ

てゐる小さな部落で、兩側に、でも感心に家並を揃へてゐる平家建の列の中には、珍らしく二階建の旅館らしいものもある。小さい家々の中にはみな日本人がゐた。剝げちよろけた横手の壁を天日に曝してゐるとツつきの家は、御料理一式といふ古びた看板を出したきりでまだ戸を閉めてゐた。それから乏しげな雜貨店、石臼の音をあたりに響かせてゐる米屋、何々醫院と看板だけは堂々とした新築の安つぽい醫者の家、さうした家々の打續いてゐる間には、未練かましく時々朝鮮人の脊の低い家が土塀を圍ひにして混つてゐることもある。旅人はゆつくりと足を踏みしめるやうにして、物珍しげに兩側を眺めながら、細帶一つの髪を亂した若い女が二三軒隣りへ走り込んだり、子供が二三人連れ立つて何か罵りながら急に家と家との間に入つたりする中を、三丁とは續かない町の中程まで來ると、丁度煙草を賣つてゐる店があつた。肥つた四十男が店頭にだらしなく寢そべつてゐた。靑年は立止つて、懷を探つてゐたが、

「煙草をくれたまへ」と云つて、つと家の中へ入つて行つて、チェリイとヒイロオとを手に取つて、

「少し休ませて下さい」と云つて腰をおろした。

「さあどうぞ」と主人はむくむく起上つて、其處にあつた新聞を取りかたづけながら、じろじろとこの奇裝の人物を眺めた。靑年はマッチを借りて、煙草をうまさうに吸ひ出した。

「あなた、何方へお出でになりますので……」主人は不思議さうに訊いた。靑年はふうと煙を吹いて、

「え、僕ですか、なに、宗教修業のため、朝鮮、支那を經て西藏まで行かうと思つてゐます」と事もなげに云ふ。

「え、西藏へ？」時にはむづかしい政治論でも上下しさうな、髭のぴんと立派にはねた主人は聊か驚いたらしい聲で反問した。

「さうです、なに、別に難儀ぢやありません、なに、わけのない事ですよ」なんと云ふのが癖であるらしい。

「何年もかかるでせう、それで歩いて行くんですか？」

「年限はさう、まあ三年位でせうな、なに、歩いたつて譯はないです、それに歸りは汽船ですからな」
「ほう、三年！」主人はあきれたやうに云つて、つくづくと此の若い旅僧を見た。顏色の惡い、荒い皮膚をした男で、全體に何だか營養不良らしいたるんだところがあつた。主人は腹の中で、かはいさうに、途中で死んでしまやしないかナと思ひながら、
「で、西藏にはなかなか入れないと云ふ話ですが、うまく入れませうかね？」
「いやなに、それは入れますとも。既に河口慧海師なども入藏してますからな、また多少の困難はあるにしろ、その時はその時でまた別に方法もあるのです」
「成程」と主人は自分も煙管をぷつと吹かしながら云つた。
旅僧は快活な調子で、梵魚寺に泊つたことや、野道に行き暮れて困つたことやを、面白さうに話し出した。
主人は煙管をはたきながら唯だ「へえへえ」と感嘆してゐるばかりだ。暫くすると、
「どうも御邪魔でした」と旅僧は包を肩にかけて立上つた。
「いや、どうしまして、どうか御健康で……」
「有難う」と彼は振返りもしないで云つた。
主人は得意らしく笑つて出て行つた旅僧の姿をぢつと見送つて、不思議な男もあつたものだ、今の若い者の中にはあんな人物もあるのかなアと感心しながら、その靈氣の足りない顏、脊の低い姿を思ひ浮べて、どうか安全に彼方に着かせてやりたいものだと、さう思つた。

『都の白粉』

一

世の中にはこんな女もある……とN君は話し出した。

僕の家が朝鮮のM――といふところにゐた時のことだ。

ある日、母が外から歸つて、

「都にはまた酌婦が二人來てゐるな。皆、妙な顏した女たよ……それに一人なんかはな、白粉ばかりコテコテ塗つて、知らぬわしにまで、どうぞ以後よろしく御引立て下さいますようになんて云ふのだよ、まあ」とかう云ふのだ。

「まあさう、いやらしいねえ」潔癖な姉はいつもの癖で眉を顰める。

この都と云ふのは、韓人の家を借りて、煙草や駄菓子の一文商賣のかたはら、いや、むしろ本業として女衒に類したことをやつてゐる家で、何處からか女を連れて來ては何處へか賣りに行くのであつた。主人は洪洞といふむづかしい名前で、骨張つたゴツゴツした五十近い脊の低い男で、前身は坊主だつたさうだ。細君は四十五六の水肥りに肥つた、色の黑い、くすんだやうな大女で、太い鼈甲の眼鏡をかけてゐた。三日にあげず夫婦喧嘩をやるので、近所では初めのうちこそ仲裁にも出たが、のちには「また始まつた……」と顏見合せて、クスリと笑つて、その物音や爭論の言葉に好奇の耳を澄ましてゐるだけで、知らぬ顏をしてすますやうになつた。すると、兩方から隨分あとで考へると恥しくなりさうな事まで口に出して罵り合つてゐるが、いつとなく草臥れて默り込んでしまふのであつた。時による

こそこそ隣りにある朝鮮人の宿屋へ酒を飲みに行つてしまふ。と、そのあとでは細君が息をゼイゼイ云はせながら、涙をポロポロこぼしながら、ぼんやりした顔をして道路を眺めてゐるのだつた。然し、そんな騷動のあるのは、多く洗洞老人が毎日々々家の中にゴロゴロして、煙草ばかりヤケにふかしてゐるやうな時で、女を連れて來たり、何處かへ連れて行つて歸つて來た時などは、二人さし向ひで晩酌をやりながら、至極仲睦まじく納まつてゐるのであつた。

と隨分烈しい立廻りをやる事もあつて、洗洞老人がいつも小ッぴどく投げ出され、組敷みかれて、「ウヌ、覺えてやがれ、畜生め……」と同じ威脅の文句を繰返してゐるが、そのうちに眞蒼な顏をしながら、

その家といふのは、どうせ韓人家屋だから、店と奥との二間きりで、合せても六疊に足りない狹苦しさで、女が來てゐる時などは、主人は隣りの宿屋の溫突に朝鮮人と一緒にゴロ寢してゐることなども多かつた。店の駄菓子の盞は、年中埃を浴びて、ザラザラしてゐたが、それでも煙草だけは手際よく棚に並べて、細君はいつでも店さきで、襤褸みたやうなものをつづくッてゐた。

二

「今度はどうも二人とも此處に置くらしうございますよ」と下女が云つた。

「警察が捨てて置くまいが……」

「それが、あのやかまし屋の上田が轉任したからで御座いませう」

「さう云へば今度の巡査は氣がよささうだね、でもあんな家ではニッチもサッチもゆくまいに……」と云つて母は笑つた。

何も珍らしいことのない田舍のこととて、かうしたことが兎角話題に上るのである。

二三日すると、女は五六里奥のＫ――と云ふところへ連れて行つたが、どうしたものか、それが一人だつた。

三

或る日、その殘つた一人の女が買物に來た。自家は一寸した雜貨店をやつてゐたのである。

「御免なさい……」と云ふ聲まで、いかにも乾からびてかすれてゐる。

母は姉の袖を引いて、

「あれだよ、都の女は」と囁いた。

瞳がどんよりすわつて、涼しい光などは少しもなく、唇が薄く、鼻がつまんだやうで、白粉をコテコテ塗つた顏は靑ぶくれてゐる。すべてが艶がなく、色が褪め切つて、ガツカリ疲れたといふ風だ。

「お暑うございますね……よくまあこの暑いのに、仕事にお精をお出しになりますわねえ……」などと、不馴れさうな東京辯で頻りにお世辭を述べ立てながら、彼女は上り口に腰を据ゑて、母と姉とがさしむかひになつて、せツせと縫物をしてゐる、すばやい針の動きを物珍らしさうに眺めるのであつた。

「ええ、もう……」と母はちよいと顏を上げたばかりで、直ぐまた仕事に目を落したが、姉はふだんから反つてゐるやうな下唇を一層反らせながら、ちらちらと女の方に目をくれては、默つたまま針を走らせてゐた。けれども、彼女はさうした冷淡な二人の樣子には無頓着に、

「お宅樣はお國は何方でいらつしやいますか……鳥取……へえ、隨分遠方でいらつしやいますねえ、私は福岡縣の生れで御座いますが……」などといつか座敷へ上り込んで、だらしなく橫ずわりに膝を崩しながら、遠慮もなく身の上話など始め出したので、母もいつか興味を誘はれたらしく、お茶を入れてすすめたりした。

女の話はとりとめがなかつた。十七の時、男にだまされて、家の金を持出して驅落をして、大阪で男に棄てられて、それから諸方々流浪して、つひには流れ流れて此の朝鮮まで來たのだといふやうな話だつたが、中には隨分辻褄の合はないところもあつて、何處までが本當で何處からが嘘なのか、それはわからなかつた。彼女はそんなことを話しながら、急に涙ぐみさうなしみじみした溜息になるかと思ふと、また急にうつろなやうな聲を立てて面白さうに一人で笑ひ立てて、妙にはしやいだ風を見せたりしながら、ひよいと姉の縫つてゐる着物を手に取つて、

「まあ、いい柄ですわねえ、どなたのお着物ですの……」などと訊いて、一しきり着物の話をしたり、これ迄ゐた三浪津といふ土地の話などをしてゐたが、やがて、

「穢い處ですけれど、どうか皆樣一度お遊びにいらつしやい」と云つて歸つて行つた。左の手で前髪をかきあげる癖がある。僕は何となしに、「髮の拔けて落ちさうな女だ……」と思つた。彼女が歸つて行つたのち、いやな顏をしてゐた姉は、

「まあ厚かましいものね、あんな家へ遊びにでも行かうものなら大變だわ」と笑つて云つた。あんな樣子ではこんな境遇になつてから、もう三四年にはならうと思はれる。それからと云ふものは、いづれお花とかお竹とか名前もあつたらうが、僕のところではただ『都の白粉』と呼んでゐた。

四

此の『都の白粉』は、忽ちのうちに土地の評判になつてしまつた。若い血氣盛りの男ばかりで、女旱りの處だけに、夜分など、大柄な浴衣を着込んだ、頭髮をきれいに分けて香水を匂はせた男たちが、都の店頭へ集り出して、棚に燻つてゐた卷煙草の賣れ出したことは非常なものである。

五

或夜、僕はひよつこり停車場の驛夫室へ遊びに行つた。驛夫や郵便局の配達人が五六人集つて、下らぬ話をやつてゐた。大抵血氣にまかせて國を飛出して來た道樂者の寄合ひのこととて、そこにはいつでも亂雜な猥雜な空氣が漂つてゐた。僕の顏を見るといきなり、

「やア、武君か、君はまだ色氣がないから困る」とかう云つたのは、二六時中喋り立てたり唄をうたつたり、一分間でも騷がずにはゐられぬと云ふ水野と呼ぶ九州の男だ。

「なアに、君こそ色氣があり過ぎて困りものさ」と云つたのは、三十にもなつてまだ驛夫をやつてゐる、非常な酒のみの男で、今も罎詰をぐいぐいやり乍ら、

「時にどうだ、都の女は？」

「君も氣があるかね、然し顏はさつぱり駄目だね。それに僕ア一件が恐いから、まづ形勢を見てゐるのさ」

「なアに、大丈夫さ、虎穴に入らずんば虎兒を得ずさ」

「君等にも似合はん、まだ引下つてるのか」と隅から色の白い男がにやにやしながら口を出した。

「何だつて、君はどうだ？」

「さうよ、それが可笑しいんだ、まあ聞きたまへ。俺がポイントにゐたら、奴さんぶらりぶらりやつて來るのさ。散歩でもしてゐるのかと見てゐると、俺のとこへやつて來て、突然（今夜お話ししたい事がありますから、どうか七號官舍まで來て下さいまし、待つて居りますよ）つて、乙な眼付をして、平氣ですうつと歸つて行つたがね、實際俺も面喰つたよ。それにどうして七號の空屋なのを知つたのかな……」

「で、　かい」
「無論さ！」と昂然として云ふ。
「道理で二三日前の朝、あの方面から狼狽へて歸つて來たな。色男から手始めとは忌々しい、畜生」眼のぎよろりとした配達夫の森田が齒莖をほぜりながら云つた。
「兎に角、珍々妙々だ。よく駐在所で默つてゐるね」
「何、あの巡査が怒るものか」
「都洗洞君萬歲！」と誰かが頓狂に叫んだので、皆はどつと笑つた。

六

其後僕は、彼女を見る每に、殊更「魂の拔けた女」と云つたやうな事を考へるのだつた。かうして一月は過ぎた。
彼女の評判は大したものである。專ら噂するところによると、彼女は獨身者と見ると、押し掛けて行つて無理にも泊り込むさうである。現に河井の下女が、或る朝離室の電信工夫の部屋を掃除しに行つて見ると、工夫が急に蒲團の中へ隱れたので、よく見ると枕が二つ並んでゐたと云ふ。
餘り甚しいので、都の主人と彼女と駐在所へ呼ばれて、いろいろと說諭をされた。後でつい此間赴任して來た濃い髮を七三に分けた山口といふ好男子のよく冗談を云ふ巡査が、
「彼女には實に手こずつたよ。都の親爺は女中に置いてるのですから、彼女が情夫をこしらへたとて私は知りませんと云ひ張るのに、彼女は自分で淫賣だと云つて、別に恥辱とも罪惡とも思つてゐないのだからな……つまり境遇が作つた一種の不具なんだね。まあ可哀さうだから大目に見て置かうとは思ふが、實際ああなつては人間も駄目だよ」と

その事を話して呵々と笑つた。
勿論、そんな說諭ぐらゐで止める筈もなく、いやそれどころか、近頃に都と喧嘩をしてその手を離れ、別に一家を持つて獨立したといふことと、配達夫の森田と、驛夫の水野の二人が熱心に通ふといふことを聞いた。が、そのうち皆もう飽きたと見えて、噂もやつと下火になつた。
かうしてまた二ヶ月は過ぎ去つた。

七

秋晴の日であつた。僕は裏口の薪を積んだ上に蓆を敷いて、横になつて、ぽかぽかと暖かい午後の日光の下で、書物を讀んでゐた。が、ふと何氣なく目を擧げて見ると、二十間あまり向うに、先年の洪水のために河原になつて、その此方側に楊柳が薄い林のやうになつてゐる中に、一人の女がなやましげに額に手を當てて、脊の高い身體を少し前屈みにさせて、北の方を見て立つてゐる姿が見えた。あの女だ。
空は晴れて一點の雲もない。風はそよそよと日本の風みたやうに吹いてゐる。遠くの連山も角度のひどい無骨さを、淡青くやはらげられて、すべてが物なつかしい氣分に溢れてゐる。その爽かな大氣の中に、黑い髮、白粉、見かけ倒しの紅や紫の勝つた派手な着物が浮んでゐるのを見ると、何だか自分の空想でこしらへた童話のやうな氣持になつた。輕蔑と可笑味とでいつも話されてゐる、この淪落の女が、夢の中に現れる王女のやうにさへも思はれた。またそれほど、その時の彼女の憂鬱な身振りには何かしら靈的なものがあつたのである。
けれども僕はそのまま別に氣にも留めず、また讀書の方に心を奪はれてしまつた。暫くすると、小刻みの引きずるやうな足音が畑の方から近づいて來た。見ると彼女である。彼女は此方へやつて來て、隣の駐在所の、ここばかりの

嚴めしい板塀の節穴を見付けて、一寸うちを覗く風をして、それから僕の方を向いて、おどけたやうな、上ずつた氣輕な笑ひを浮べて、僕の家の裏手をめぐる葦の垣の今はもう腐つて倒れてしまつて、ないのも同樣であるのを跨いで、僕の傍へやつて來て、不思議さうな目をしてゐる僕の方へ顏を少し突き出すやうにして、左の手で前髮を押へながら、甘つたるいやうな妙に姉さんぶつたやうな聲で、

「坊ちやん、何なさります？」とにつこり笑顏をつくつて云ふ。

「いえ、何も……」と臆病な僕はどぎまぎして答へた。何だか上から壓し付けられるやうな息苦しさを感じながら。

「此處は暖かうございますねえ、坊ちやん」と彼女は始終囁くやうな小聲である。

「さうです」と僕はもう無遠慮な觀察の餘裕もなく、氣詰つたやうな堅苦しい無愛想な調子で答へた、やつぱり眼を上げもしないで。

「小說ですか、面白うございますの？」

「ええ」

「その中には私のやうな女も出てまゐりまして……」

「え……」と答へながら、そつと盜むやうに彼女の顏を仰ぎ見た。するとぢつと此方を見下してゐた眼と眼がばつたり出逢つた。ああその眼！　それを何と形容していいだらう、それはすべてに絕望したやうな、と云ふより、もう絕望を享樂でもしてゐるやうな、とでも云つたらやや眞相に近いであらうか、とてもこの女の眼とは思はれないほど奧の深いやうな眼であつた。

「小說の中ではみんな最終には幸福になりますわね……」

彼女はぼんやり雲の走るのを見送りながら云つた。僕はその顏をぢつと見た。

すると……僕は悲しい、寂しい、暗い氣持になつた。ああ、その憐れな心細さうな姿！　以前より一層やつれて、もう精も根も盡きたやうに、ぐつたりした風である。がさがさと皮膚は荒れて、ぼろぼろ粉になつて落ちてしまひさうである。頭髪も櫛でかいたなら、ばらばらと皆抜けてしまひさうに思はれる。彈力のない竹の柱に枯れかかつた朝顔の蔓か、河邊の枯れた柳の枝みたやうな氣がする……すると彼女はまた、

「坊ちやんはお幾つですの？」と云つて此方を見返つたので、僕はまた眼を落しながら、

「十六です」と答へると、

「いいわねえ、勉强してえらくおなんなさいな、坊ちやんは男ですもの……」と云ひながら、彼女は默つて暫く僕を見守つてゐるやうだつたが、やがてほうと溜息をついて、

「坊ちやん、さやうなら」としんみり云つたが、板塀を一寸覗いて見て、そのまま横手の路をすつと表通りの方へ行つてしまつた。その力のない落膽したやうな姿を僕は見送つて「魂の抜けた女」とまた感じた。

あとで此の事をそつと姉に話すと、

「おまへの處へ來るなんて、よつ程どうかしてるわねえ」と姉も事もなげに笑つたが、僕は悲しい、寂しい、夢でも見てゐるやうな氣持で、それからは妙に彼女が戀しく、なつかしく、また憐れなやうな氣がして、とりとめのない空想に耽るのであつた。

八

それから一週間ほどたつた。聞けば、彼女は不意に家をたたんで、誰れにも訣別もせずに北韓の方へ行つてしまつたさうである。彼の馴染客の水野の話では、大田までの切符を買つたといふことであつた。その後間もなく、都の主

人はまた脊の低い女を一人連れて來た。

……から語り終つてN君は、彼女は今何處にどうしてゐる事であらう。今でも僕は時々あの女の事を思ひ出すことがある……と附け加へた。

二臺のミシン

ある晩、松本といふ男が、ふとこんな話をした。

私が朝鮮の釜山にゐた時のことです。一體、海外の居留地なんて云ふものは、それは實に雜駁な、殺風景極まるものです。釜山だつてその通りです。日本各地の失敗者、驅落者、無賴漢、一攫千金の徒輩など、一人もろくな者はをりません。このうち、商業の失敗者は大抵好人物です、私の父などその一番いい例でしたらう。——こんな處に私は十三から十六の歳まで住んでゐました。

その頃父は米屋をやつてゐました。勿論小さなものです。內山といふ長崎の人から、五俵十俵づつ借りて來ては韓人に搗かせ、少しばかりの華客に、私が肩にかけて持つて行つたものです。それまでにも父は次々にいろいろな商賣を思ひ付いては、中途の一寸した障害に厭氣がさして、結局入費倒れになるばかりで、母は「家のお父さんにも困つたものだ」と愚痴をこぼし乍ら、萬仕立物所の張札を出して、姉と對ひ合つてせつせと縫物をやつてゐました。長いこと一家は殆んどその縫賃に依つて支へられて來たのでした。そのうち父は今云つた內山といふ、かなり大きな米屋の主人の信用を得て（父は不思議に人に信用される性質でした）米屋を始める事になり、いつもの癖ですつかり勇

み立つて、母や姉の少し許り殘つてゐた着物を質入れして、大きな石臼を仕入れて來て、店から裏口へ通ずる土間に搗場をこしらへて、景氣よくカマスを店頭に積み上げて、自分は篩を手にして、搗場から上つて來る埃を座敷から掃き落すのを仕事のやうにしてゐました。註文があると、その時分家でごろごろしてゐた私が、棒縞の絆纏を着せられて、普通メリケン粉の袋を使ふところを、昔酒屋をやつてゐた時分の酒袋を、此方で酒を造るつもりで持つて來てゐた、それに入れた白米を、一斗二斗と市中の遠近に持つて行かせられました。私はそれが死ぬほど厭やなのでした。街の外にある佐須土原といふ遊廓の中に持つて行く時など、重荷が二倍になつて肩に食ひ込むやうで泣きたくなりましたが、それよりも、「へえ、今日は、米屋で御座います」と云ひながら入つて行つて、「どうも毎度有難う御座います」とぺこぺこ頭を下げて出て來る迄が消えてしまひたい程辛くつて、結局ぐづぐづ譯のわからぬ事を口の中で呟いて、ヘンな小僧だナと思はせただけでしたらう。そしてその代金を取りに行くのは、私で埒があかぬ場合には、屹度母か姉かが行かねばならないのでした。

（新式按摩、灸點、易斷一切、西町一大崎屋方枝井新助）裏町の板塀などに、よくこんな赤インキで書いたビラを見たものですが、この枝井と云ふ眼のしよぼしよぼした貧相な男と、ふと父が知合になつて、この男の紹介で、大崎屋といふ家へ米を持つて行くことになりました。あまり立派でもない家で、店には白く塵を浴びたミシン機械が二臺、小さな硝子戸棚にはネルが少しばかり積んでありました。下宿屋は女房の內職で、亭主は仕立屋をやつてゐるやうでしたが、ついぞ店にすわつてゐたことはなく、次ぎの間に長火鉢を中に女房と對坐して、煙草をぷかぷかふかしてゐるか、寢轉んで新聞を前にひろげて欠伸をしたりしてゐました。三十五六の脊の高い、顎のあたり髯を剃つたあとがいつもくつきり靑く、眉の濃い苦味ばしつた男で、いつも黑い羅紗の厚司を着てゐました。女房はいづれ藝者の果てらしく、意氣な、ちよつといい年增でした。客は相當あつたやうでした。

で、初めの二月はまづ申分なく支拂ひもしましたが、三月目からは澁り出して、つひには明日、明後日と日延べするばかりで、一向に埒があかなくなつてしまつたので、母と姉とが交替のやうに行つて催促しても、いや今日は留守の、いや明日はきつと此方から持つて上るのと逃口上を並べるばかりなので、

「だけん最初から信用が出來んと思つとつただ……」と母が又例の後の祭の苦情をじりじり持出して、十年前からの貸倒れの温習を始めようとすると、默つて聞いてゐた父も疳積筋を額に現して、

「うるさい、わかつとる、明日わしが行つて來たる！」とビリビリした聲で云つたが、その翌日の午後、不機嫌な顏をして自身で出掛けて行きました。

どうなつたのだらうと、一家心配して待つてゐますと、日が暮れてから、父は鼻唄をうたはんばかりの千鳥足で歸つて來ました。

「どげな風だつたな？」と母が心配らしく訊くと、

「いや上首尾々々々、やつぱり男でないといけぬ」と一人でうなづいて、醉眼をとろんこさせながら、得意らしく膝に突いた片手で顎を撫で乍ら、自分が行つたら夫婦揃つて飛んで出て、ちやほやと御馳走を出したりして、實はあなたの方にお拂ひいたし度いのは山々ですが、御覽の通り近頃はとんとお客もなし、何しろここは場所が惡いため仕事も休んでゐるも同然な始末ゆゑ、どうか今暫く御猶豫を願ひたい、で、若しどうしてもそれが御承知願へなければ、自分の方に一つ名案があるが、その相談に乘つては頂けますまいか、相談と云ふのは外でもないが、お見受けする處あなたのお店は大層場所柄がおよろしいやうだから、あのミシン機械二臺を金の抵當にあなたの方に差上げて、そしてあなたのお店へ私が出張つて仕事をして、利益を山分けに——つまり共同事業と云ふ事にしてはどんなものでせうかと相談を持ちかけて來たから、一も二もなくそれに定めて歸つたが、

「やつぱりお前等ぢや埒があかぬ。がみがみ云ふばかりが能ぢやねえ、な、そげなら芳(姉の名)にも仕事が教へて貰へる。こげな旨い話はそげにあらせん、そげだら、よからう、な、……兎に角、明日は先生やつてくる筈だから……」と云ひながらも、早や横に倒れてしまひました。

翌の日、先生、威勢よくやつて來ました。二臺のミシン機械と、一反ばかりのネルと、座蒲團と、藥罐とを兩手に重さうにさげて、

「おツと、ここだツたツけ」と云つて、一條の溝川を眞中に兩側に町の出來てゐる通りを一寸見廻して、家に入るなり、

「やあ、此邊はどうも見晴らしがいいですなア」と仰山らしく叫んで、つかつかと上り込み、胡坐を組んで、いきなり腰の煙草入をスポンとぬいて煙草を吸ひ付け、

「此の間はどうも失禮しました。どうも近頃はとんと不景氣でしてね、全くお話にも何にもなりませんよ……それはさうと、今日は始めだから一寸準備だけにして置きませうかね、それと、よし、ところでお父さんは?」

父は丁度留守であつたから、母が、

「昨夜は大層御馳走になりましたさうで、あげなことをなさいまするど本當に痛み入ります」と律義に挨拶すると、

「なに、あれはほんの前景氣ですよ」と答へて、それから彼は悠々と、二三町隔てたところにある同業者の惡口や、藝者の噂などをしながら、機械をあつちへやつたり此方へやつたり、そそくさと其處らを片付けて、其日は歸つて行きました。

夕方に歸つて來た父は、直ぐに帳簿を買つて來させて、例の頑張つた筆付で、表紙に「金錢出納帳、松本、林(これは大崎屋の姓である)合同商店」と書きつけ、その冒頭第一頁に、「目出度初め、一ネル一反……錢也、林出」と出

の字の下を妙に撥ねたくつて、パッタリ筆を擱くと、母の方を顧みて、
「さア、これからだぞ、これから好うなるわ」と云つた。母は何か云はうとしたらしかつたが、何にも云はなかつた。
で、それから彼は毎日通つて來だしました。朝はいつも眠さうな顔をしてゐる男で、來ると直ぐ火鉢に藥罐――小形な磨けるだけ磨いたピカピカ光るやつを懸けて、その沸く間を機械の塵を拂うたり、座蒲團をはたいたりしてゐる。白湯がわくと、毎日持つてくる風呂敷の中から、非常にいい香のする上茶を出して入れ、竹の皮包みをあけて、その頃でも一本二十錢以上もしさうな羊羹を取り出して、私等にもくれたりして、父と茶を飲みながら、つまらない世間話を面白さうに遣り出すか、でなければ、米搗の韓人を極く卑近なありふれた朝鮮語まじりにからかつたりする。まづこのやうな風で、仕事も早く、腕もなかなか立つやうでしたが、何しろ怠け者で、仕事をしてゐる時の方がむしろまれだと云つてもいい位なものでしたが、それでも其頃は丁度遼陽が落ちて、(日本勝つた日本勝つた露西亞負けた、遼陽とられて眼がさめた)と唄つて、居留民一同有頂天になつて騷ぎ廻つてゐた時の事ゆゑ、やれ國旗の、やれ仁輪加の衣裳のと、仕事もそれ相應に立てこんで、彼は「かなはぬ、かなはぬ」と頻りにこぼしてゐました。
かうして一月ほどは過ぎました。母は初めから、よし店頭にしても毎日他人に來られたのでは氣づまりだし、一體知らぬ者には氣心もゆるせない土地柄なのに、殊に頭から信用の置けさうもないあんな男のことだからと云つて、此の合同事業には不賛成でしたが、父がいい話相手と半日も話し込んだあげく、お酒といふことになつて、始終のやうに一緒に酒を飲んだりするので、すつかりやきもきしだして、
「あげな者は相手になるもんだない、早よやめるがえい」と、威勢のいい挨拶をして彼の歸つたあとでは、毎度のやうに父に小煩さく云ふのでしたが、そんな時、父は忌々しさうに舌打ちして、
「チェッ、やかましい、默つとれ。譯もわからん癖して。先方さんがあげに好え風に出とるに、それがまだ不足だか。

これがもつと外の者なら、どげなところだか知らんのか！」と叱り付けると、母も負けてはゐない、家が破産する迄に、毎日のやうに入浸りになつて、追從たらだら酒を飲み倒して、その揚句には、いつも莫大な借金や受判の尻を押付けて、後足で砂をかけて逃げたが最後、今度はもう寄つ付きもしなくなつた鍋直だとか、三崎だとか云つた座敷乞食どものノッピキならぬ先例を擧げて、用心するようにと、くどくどと說き立てると、父は言句につまつて、さも口惜しさうに顏の筋肉をピクピクさせて、下唇をぢつと嚙みしめながら默つて聞いてゐるが、母の言葉があんまりしつこくなると、もう我慢もくそもならぬと云つたやうな、猛然たる憤怒の顏をもたげて、

「女子供の口出すことぢやない、默らんか、こら！　默つとれ！」と頭から抑へ付けるやうに聲荒らげて怒鳴りつけるのでした。

かうした家庭の小波瀾は、しまひに父が大崎屋に誘はれて芝居見物に行つたり、遊廓へ飲みに行つたりしだしたので、もうすつかり慢性の狀態になつて、家の中は暗い空氣に蔽はれて了ひ、それからは彼がどんなにお愛想を云つても、母や姉はろくろく返事もしないやうになつて了ひました。彼もそれを煙たく思つたのか、それとも最う仕事そのものに厭氣がさしたものか、其後一日二日來ないことも珍らしくなくなつたし、また仕事の方の註文も餘り來ないやうになりました。機械にはそろそろ塵が積り出しました。

彼が三四日姿を見せなかつたある晩方でした。私は散步の途次、ふと彼の家の前を通つて見ましたら、高等下宿大崎屋の看板は同じ事ながら、家の樣子がいつもとは違つてゐて、いつも夫婦の對ひ合つてゐたところには、ついぞ見たことのない、でつぷり肥つた赭ら顏の男がすわり込んで、下宿人や近所の者を呼んで、酒宴を開いてゐるのが、硝子戶越しに眺められました。

その後かの枝井が來ての話には、彼は百五十圓の借財を殘して、女房と一緒に元山の方に逃げて行つたと云ふこと

でした。母はひよツとすると、父が大崎屋に金を融通してゐたのではないかと、深く疑つてゐるやうでしたが、問題が少しでもその方面へ觸れて行くと、父がムキになつて抑へつけるやうな言ひ方をするので、姉と二人でこそこそ話してゐるだけでした。

五圓の抵當に殘して行つた二臺のミシンと、座蒲團と藥鑵とは、今も私の家にあつて、永く彼の面影を語つてをります。

少年のわかれ

晝すぎ、船は濱田港に入つた。いつものやうに、船中が急にざわつき出して、甲板の上を足音が縱橫に馳せちがひ、ガラガラとけたたましい音を立てて、船は錨を下した。港の中から威勢よく艀がやつて來た。

此處で同行の少年が下りるのである。

私は彼の荷物を半分持つてやつて、一緒に甲板に出た。昇降口には早やもう四五人の客が集まつてゐた。彼は殘り惜しさうに私の顔を見て、妙にかすれたやうな聲で、

「どうもいろいろ有難うございました」と云つて、私の手から風呂敷包を受取つて、

「では、御機嫌よう」

「お大切に」と私も答へて、そそくさと艀に乘移る彼のそのみすぼらしい姿をつくづくと眺めた。垢染みた白地の浴衣に、古ぼけた麥藁帽子、後のちびた下駄、荷物と云つてはただ小さな竹行李と風呂敷包とだけである。まあ何とい

ふうら寂しい姿であらう。生活に疲れたやうな色の惡い顏、瘦せ骨立つた手、それには少年の明るい無邪氣さなどは見ることも出來なかつた。彼は釜山で或る硝子屋の徒弟をしてゐたといふことである。

私は釜山から此の宮島丸に乘つた。浦鹽、元山方面からの客で、三等船室は殆んど滿員であつた。例の船室特有の噎せるやうなペンキの臭ひに面を撲たれながら、二段になつた檻のやうな客室をぐるぐる廻つて見たら、隅の暗いところに蓆二枚分あいてゐた。早速そこへ攀ぢ登つた。客の中にはすさみ切つたやうな淫賣婦らしいのもゐた。職人もゐた。失敗商人らしいのもゐた。私は棧橋で別れた母の泣顏、弟の萬歳と叫んだ聲、父や姉の顏、それ等を思ふでもなく、ただごろりと橫になつて、餞別だと云つて人のくれた煎餅や、別れる時に母が買つてくれた菓子をむしやむしや食ひながら、明るい方をきよろきよろ見廻してゐた。

出帆間際に四五人の乘客があつた。みな狹苦しく立て込んでゐる明るい方に割り込んで行つたが、兩手に行李と風呂敷包とを重さうにさげた一人の少年だけは、私の橫になつてゐる暗い方へやつて來た。彼は元氣のない眼付で、其處ら中をぐるぐる見廻してゐたが、私の傍があいてゐたので、やつと安心したやうな顏になつて、二三度しくじつた後で、やつと上の棚へ飛び乘つた。

彼は長い間、行李を弄つて見たり、風呂敷を結び直したりしてゐた。私は話しかけて見ようと幾度も思ひながら、どうも口を開く勇氣が出なかつた。そのうち船は港を出はなれた。小さな船窓から覗いて見ると、禿げた骨々しい山のつらなりが波の烈しくなつた夕闇の中に寂しげに兀然と聳えてゐた。私はあの大陸的な身を切るやうな空つ風の吹き荒む馴染のない國で、一人の友達もなしに、しよんぼり過した私の尊い少年時代の一時期を顧みて、何だか心細い、滅入るやうな氣持になつた。窓から眼をはなした時、行李にすがり着くやうに身を伏せてゐた隣の少年がふと顏を上げたのを見ると、ぼんやり薄暗い中に彼の双眼は涙できらきらしてゐた。

やがて夜になつて、ほの暗いカンテラが船室の其處此處の柱にともされた。私は思ひ切つて、
「君は何處へ行きますか？」と訊いた。行李に肱を突いて細い眼をしてゐた彼は、暫く私を見てゐたが、氣の乘らないやうな臆した聲で、
「濱田まで歸るんで……」と云つた。
それつきりまた話は絶えた。周圍の船客たちは、つい二三時間まへに初めて顏を見たばかりなのに、早や十年の舊知のやうに、自分の經驗談や、生れ故鄕のことや、北韓の景氣やらを盛んに喋り立てたりしてゐる者など賑かであつたが、もう玄海が近くなつたと云ふので、船暈を恐れて一人寢、二人寢して、だんだん寂しくなつてしまふ。
私はどうにかして自分の厚意を示したいと思つて、
「あの、君は船は大丈夫ですか？」とまた彼の方を向いて訊いた。
「え、來る時はそんなでもないでした」
「僕も割合に平氣です」などと話して、私はそれから菓子をすすめたり、持つてゐた雜誌を見せたりして、出來るだけの厚意を示さうとした。彼は始終浮かぬ顏をして、ふさぎ込んでゐたが、それでもだんだんと打ち解けて、時によるとつい笑ふやうにもなつた。そのぼつぼつ重さうに話すのによると、彼は私より一つ年上の十六ださうで、去年叔父を賴つて釜山に來たところが、間もなく叔父が京城の方へ行くことになつたので、その儘徒弟に入つたのだが、仕事は餘り樂ではなし、給料は少いし、初めいろいろ美しい空想を描いて、朝鮮に行きさへすれば、直ぐにも思ふままの生活が出來るやうに思つて、兩親のとめるのも聞かないで無理に家を出て來たのが、すつかり裏切られてしまひ、半歲もするともう國へ歸り度くて歸り度くて仕方がなくなつてしまつたが、そこへ以て來て今度はまた脚氣に患つたので、驚いて、つひに歸國する事になつたのだ。彼はさう話すと、

「こんなになつてゐます」と云つて脚を出して見せたが、成程靑くふくれ上つて、指で押したらぶくぶくと氣味惡く穴があいた。私は氣の毒でならなくなつて、自分も國に歸つても家はもう人手に渡つてゐるし、祖母が一人で隱居してゐる小さな家へ歸つて行くやうな譯だから、君の方がまだお父さんの家があるだけ幸福だなどといふやうなことを云つて、彼を慰めた。

翌朝、下の關に着いた。客は其處で殆んど大半上陸してしまつた。船には七八人しか殘らなかつた。これ等はいづれも裏日本の地方へ歸つて行く人々なのである。私たちも明るい舷側近い方へ席を移した。二人はもうすつかり心安くなつてしまつた。下の關を出帆する手と右に沿うて懷しい日本の靑い海岸が窓外に流れるやうになつて、もう故郷も近づいたといふ事がはつきり感じられる。その所爲でもあらう、彼は大分元氣付いて、時をり、

「甲板へ出て見ませんか？」と云つて、私を誘つた。二人はうららかに海上の日の當つてゐる舷側にもたれて、果てしもない日本海の波濤や、陸地の珍らしい松の姿が翠色を連ねて、いかにも邊鄙らしい小さな漁村に乏しげな藁屋がかたまつてゐたり、山の傾斜に拓かれた畑に農夫の立働いてゐたりする景色を眺めながら、いろいろな事をまとまり無く話し合つた。彼はとりわけ自分の故郷の景色のいい事、釜山のつまらない事を話して、何もわからない癖に家を飛出した自分の輕率を頻りに後悔してゐた。ある時は悲しさうな、思ひ諦めたやうな調子で、

「僕はもう何處へも出ない。家が一番いい。僕は死ぬまで百姓をします」としみじみ云つた。私はその言葉を、自分の身の上に持つて來て、その方が本當かも知れないとつくづく考へた。

彼は飯を食ふのに、顏をしかめて、少し宛つ口へはふり込んでゐた。それがいかにも鹽からい船の飯のまづさを思はせて、私も食慾がすつかり引込んでしまふやうな氣がした。ああ、けれども、これが別れだ。もうこれからは彼と一緒に對ひ合つて飯も食ふことは出來ない。恐らくは最早終世彼と會ふことはあるまい。彼は石州の片田舍の生れ故郷

で、鍬と鋤とに老いる運命にある人なのだから。然し、たつた二日一緒にゐただけだけれど、私は永久にこの寂しい少年を忘れることはないであらう……

彼は艀の上で仰向いて、ちよつと帽子を取つた。頭髪の長くのびた頭が現れた。私もハンケチを振つて、「さやうなら！」と云つた。艀は舷側を離れた。五六人の乗客の中にまじつてゐる、そのしよんぼりした後姿を見送りながら、私は心の中で「友よ、いつまでもいつまでも健康で幸福でゐたまへ！」と叫んで、商船會社の前に艀が着いて、小さな姿が物蔭に消されてしまふまで、ぢつと欄干に立ち盡してゐた。

池の畔り

故郷の町に近く、池の内と云つて、池の澤山ある村があつた。

ある日、私は吾一といふ友達と二人、學校の帽子をかぶつて、互に手を組みながら「靑葉しげれる櫻井の里のわたりの夕まぐれ……」といふその頃學校で敎はつた唱歌をうたひながら、その村へ行つた。十二位の時であつたらう。

その日はいやに曇つた、春さきによくある生暖かい風の吹く日であつた。麥畑は靑々として、ずつと山の方まで續いて、その間に菜種の黃色がところどころに點綴されてゐる。遠山はぼつと霞んで、遙か夢のやうに空に溶け込んでゐる。畑には人影があちこちと動いてゐる。

吾一はいつか默り込んでしまつた。私も默つてしまつた。何だかつまらない氣がして來たので私は途中から引返

さうかとも思つた。吾一は重箱を重さうにさげて、ぼんやり考へ込んだやうにして歩いてゐる。池の内には吾一の叔父の家があつて、そこへ多分彼岸の御馳走か何かを持つて行かせられたものであらう。私は竹切れで路傍の草を叩いたり、草の中から飛び出す蛙を追ひ廻したりしながら、始終後になりなりして行くのであつた。

吾一といふのは眉の濃い、顔の青白い、虚弱さうな、然し可愛らしい兒であつた。私より三つばかり年上であつたが、大變にませてゐて大人みたやうなことをよく云つた。その頃もういろいろな小説を讀んでゐたらしく、金色夜叉不如歸、己が罪などと云つたやうな小説本がその小さな本箱に並べられてゐた。私の近所には彼の外にもまだ同年配の男の兒は澤山ゐたけれども、その多くは泥深い小川にざぶざぶ踏み込んで雑魚をすくつたり、山の村の方へ行つて他家の柿の樹に登つて旨さうに熟した柿の實を盗んで食べて、禿頭の老爺に見付かつてすんでの事とつつかまへられさうになつたりするやうな、悪戯の友達で、しかも大抵最後には私を虐めて泣かせるのだから、さういふ子供たちとは餘り遊びたくなかつた。私はおとなしい吾一と一緒に、田圃道を歌をうたつて歩き廻つたり、山に登つて通草を探したり、または暖かい火燵にあたつてお伽噺を讀んだりするのが樂しかつた。それで二人はだんだん仲よしになるばかりであつた。私が何か無理を云つても、吾一は素直に譲歩してくれるので、二人の間には喧嘩口論一つ起らなかつた。悪童どもはさうした二人の仲のいいところを見、自分たちの上に超然としてゐる様子を見ると、癪にさはつて堪らないと見えて、つひには二人の姿を見ると、

「やアい、男をんなやアい、男の兒の仲間はづれヤアい!」などと囃し立てて悪罵するのが常であつた。男をんなとは、女のやうな男といふ意味で、二人のおとなしいのを嘲る言葉なのである。けれどもさうした迫害は、二人を一層仲よくするのに役立つばかりであつた。そして私は仲がよくなるに從つて、何が一番吾一を喜ばすかを發見するやうになつた。そして私は無意識ながら狡猾にも、「何家の何さんはおまへに惚れてるよ」などと云ふのであつた。すると

彼は直ぐ顔を紅くして「馬鹿ッ」と云ふのであつた。けれども私は小さな嘘つきではなかつた、町内の娘たちはみな吾一を好いてゐた、そして例の悪童どもによつて、普通講社と呼ばれてゐる神社の御殿の横の壁には、よし子吾一、美代子吾一などといふ相合傘が後から後からと書き付けられるのであつた。そして相手は變つても男主人公はいつも吾一ばかりである。何といふ幸福兒であつたらう！　彼は落書を見ると、やつぱり「馬鹿ッ」と云つて、壁に向つて罵つたが、然しこの年下の觀察者はなかなか油斷のならぬ心理學者であつたのである。

小さな土橋を渡ると田圃路は本道へ出る。すると其處には、雜木山が鼻を突き出して、中にはその鼻の穴のやうに、藁葺屋根が山麓にうづくまつてゐたりする。やがてそのうちにいつか村の入口になる。多少の間隔は取りながらも家が相接してくる。それ等の家はみな相當の中農で、相應に田地を有つてゐるのが多いから、家もみなさまで見すぼらしくはない。中には石州燒の赤瓦を葺いた、土藏の白壁の日に輝いてゐるやうな家もある。吾一の叔父の家は殊に立派であつた。平家建ながら二階建のやうに脊の馬鹿に高い大きな家で、嚴めしい冠木門をくぐると、門內には砂利が敷きつめてある、築山がある、植込がある、瓢簞形の花壇にはいろいろな季節の花が咲き誇つてゐた。これは農業學校を中途まで行つたことのある吾一の從兄の園藝趣味の發現の一つなのである。

吾一は私の方を偸むやうに見て、敷居の高い、薄暗いやうな土間に入つて行つた。私もおづおづとついて入つた。土間は隨分廣くつて、その一隅には米俵が山ほど積んであるし、何か搗きかけてほつたらかした臼などもあり、壁には簑や笠がつるしてあつたり、箕がかかつてゐたりして、一體に何だか百姓らしい臭ひが漂つてゐて、いかにも田舍へ來たといふ感じがはつきり頭に來る。

一家は野良へ出て、家には芳江といふ十六七の娘が一人留守居をしてゐた。はち切れさうに肥つた、脊の高い、眞紅なつやつやしい頬をした娘で、人並すぐれて美しいと云ふのでもないけれど、その大きないつも驚いてゐるやうな眼

には何とも云へぬ潤ひがあつて、妙にさつとながし目で人を見る癖があるのが、またひどくなまめかしく、心をそそるのであるが、それにひどくよく笑ふ娘で、一體娘といふものはよく笑ふものだけれど、これはまた特別で、何か一こと云つては笑ひ、立上つては笑ひ、すわつては笑ふ、といふ風である。

「今日は、今日は……Y（私たちの町の名）からあがりました……」と吾一が上り口にやつと重箱をおろして、その儘手を疊につけながら云ふと、

「アーイ……」と返事があつて。娘は賑かに笑ひこけながら、手毬のやうに奥から驅け出して來て、吾一を見ると嬉しさうに眼を輝かせて、

「吾一ちやん、何持つて來たの？ さア上んなさいな」と云ふ。身體の大きい割りに、何處となく子供々々したやうで無邪氣な感じを與へる。吾一は私の方を一寸見返つたが、默つて、テカテカ黒光りに光つてゐる板の間へ上つて、重箱をうやうやしく差出して、娘の前に手を突いて、私が母によく敎へ込まれる文句、

「お粗末なものでございますが……」といふあの文句を、しかつめらしく復習する。と、娘はもうもう可笑しくて、可笑しくてどうしていいかわからぬと云つた工合で、

「アレ、まアあんなことを……」と云つて、キャッキャッと笑ひこけながら、妙に甘えたやうな舌つたるい調子で、

「さア吾一ちやん、そげな事もうええわ。此方へお出でよ……さア、貴方もよ、さア……」と、此方を見て、ぼんやり指をくはへんばかりにして立つてゐた私にも云ふので、私もおづおづし乍ら、吾一について奥の間へ連れられて行つた。

吾一はひどく憂鬱な顏をして、餘り口かずもきかず、ぼんやり物思ひに氣を取られてゐるやうに見えたが、娘の方はまるで野原に飛んでゐる小鳥のやうに、またゴム毬のはね返るやうな嬉しさで、其處ら中をそそくさと取り片付け

たり、ギーと重たい音をして開いた戸棚から煎餅の罐を取出して、二人の手に取らせてくれたり、古い昔の草双紙を出して見せたりして、二人の機嫌をとりながら、絶えず喋りつづけるのであつた。

八疊ぐらゐの座敷で、古い建物だから、天井も鴨居も柱も皆煤けて、黒光りに光つてゐる。それに障子が閉切つてあるから極く陰氣で、座敷の隅にある大きな物々しい佛壇ばかりが妙に心を重く抑へ付けるやうな氣がする。こんな中から芳江さんの派手な笑ひ聲がいべつに湧き出すのが、私には何だか不思議な、何かしら空恐ろしいことのやうにさへ思はれた。

私は煎餅をポリポリ噛りながら、しきりに草双紙の繪をめくつて見てゐたが、

「この老爺さんは何だらう……」などと訊くと、いつもならちよいちよい讀みにくい假名を拾つて說明してくれる吾一が今日は芳江さんと對ひ合つて窮屈さうにすわつたまま、默つてゐて敎へてくれない。芳江さんは芳江さんで今はもう私などの方には眼もくれないで、

「吾一ちやん、あのね……ソオレ、あれを上げませうか、いや？……」などと私には何の事やら一向わけの分らない、二人ぎりの特別の話をして、面白さうに笑ひ立てるのだが、吾一は私に對してすまないと思ふらしい遠慮を見せながらも、いつとなく嬉しさうな笑ひを顏一杯に湛へて、少し首を傾けながら返事をしてゐた。私は妙にのけものにされたやうな、寂しいやうな、つまらないやうな氣持で、字を讀むのは面倒だから、繪ばかり見てゐたけれど、それも面白くなく、いつそ歸らうかしら……と思つてゐると、芳江さんが不意に、

「裏の池へ行つて見ませう……」と云ひ出したので、私は勇んで飛び起きた。そそくさと足を滑らしたりして、下駄を突つかけて駈け出すやうにして行く芳江さんの後から、吾一はしぶしぶついて來る。私はいつか芳江さんをも追ひ越して、裏口から林の中へ獵犬みたやうに走り込んだ。裏はもう直ぐ林になつてゐるのだ。

淺綠にやはらかな葉が飜つてゐる、その隙間から曇つた空がちらちら覗いてゐる。木の葉のかさこそ擦れ合ふ音は、小雨が通り過ぎるかのやうである。何處か近くで小鳥がささ啼きしてゐる。みづみづしい何處か濕つぽいやうな匂ひが鼻を打つ。私はもうすつかり嬉しくなつて、いそいそ飛んで行つたが、ふと後を見返ると、吾一と芳江さんとはもうすつかり後れて、木立の間にちらちら姿を見せながら、並んで歩いてゐる。私が心細くなつてまた少し引返して行くと、その時、

「僕いやだもの……」

「だつて、いいぢやないの、吾一ちやん、いいわ、なぜそんなに御機嫌が惡いの……」などといふ二人の言葉が聞えた。が、私の傍に來たのを見ると二人とも默つてしまつた。

林が盡きると池が現はれる。周圍が三四町ぐらゐはあらうかと思はれるかなり大きな、この村の池の中でも一番大きな池で、お玉が池と云つて、昔お玉といふ娘が身投げしてから引續いて、よく身投げや心中があつたといふ池で、近年になつてからはそんな話も聞かないけれど、もとはいろいろな傳說を云ひ傳へられてゐて、何でも一丈餘りの鯉が住んでゐて、それが池の主だと云はれてゐる。また現に今でも若い男女が戀の吉凶を石を投げて占ふと云ふ話だ。いかにも主でもゐさうな、氣味が惡いほど靑く澄んだ池の面には、蛇のやうに水草がふわりふわりと浮いてゐて、魚がはねるたんびに波紋が擴がつて、いつかまたもとの不動の水面に返つてしまふ。三方は山になつてゐて、雜木が限りなく重なり合つてゐる。池畔には栗の樹がたくさんあつて、秋になると、子供たちはよく栗拾ひに町からやつて來る。私も去年一度腕白な友達に連れられて栗拾ひに來たことがあつた。其時、あまり夢中になつて山の上の方まで分けて行つて、いつか連れにはぐれて泣いてゐると、遠方からオーイと呼ぶ友達の聲が聞えたので、蘇つたやうに元氣付いて、自分も一生懸命で叫び立てながら、やつとこの池の畔りへ出て來たことがあつた。それゆゑこの場處は私に

は始めての處ではなかつたが、然し、しめやかな四邊(あたり)の空氣や、飛び廻つては啼く小鳥や、そこらの草の穗に咲いてゐる名もない花までも、私には嬉しかつた。吾一は芳江さんと、とある栗の樹にもたれて、何かひそひそ話してゐるので、私はなぜとも知らず、ひとり離れた方へ走つて行つた。

私はそこら中を駈け廻つて、美しい草花をつんだり、大きな蛙を追つかけたりするのに夢中になつてゐるうち、いつか池の反對の側に來てゐた。こちらの方は池から直ぐ傾斜になつてだんだん高まつて行き、立樹も一層密で、一條の道はついてゐても、それがいかにも山路といつたやうな感じを起させるのであつた。と、不意にポーンと水の音がするので、見ると池の向側で芳江さんが石を投げ込んだと見えて、大きい波紋の立つてゐるのを、ぢつと眺めてゐた、續いて吾一も石を投げた、するともとの波紋の上へ落ちて、また新しい波紋を立てたのが、丁度もとのと同じ波紋であるかのやうに見えた。

「あれ重なつた、重なつた、……」と云つて芳江さんは嬉しさうに袂を振つた。

吾一はふと此方からぼんやりそれを見てゐた私に氣が付いて、何だか急に顏をあかくして、芳江さんに何やら云ふと、彼女は私の方を一寸見て、勝誇つたやうな大膽不敵な笑ひ方をした。その笑顏を私は今に忘れない。私が急いで二人の方へ走つて歸ると、吾一は何だかそはそはしたやうな、後暗(うしろぐら)いやうな顏つきをして、私の方をちらちらと見るのであつた。私は何だかもう此上此處にゐるのが惡いやうな氣がしだしたし、また氣持も面白くなかつたから、

「僕歸る」と急に云ひ出した。すると吾一は困つたやうな顏をして、相談するやうに芳江さんの顏を覗ひながら、

「もう少し遊ばう、ねえ、いいだらう、もう直き僕と一緒に歸らうね」となだめると、芳江さんも、

「いいわね、もつと遊びなさいな」と留めるのだつたが、私は振り切るやうにして池に沿うてさつさと歸つてしまつた。あとには二人が草の上に腰を下して何やら話してゐるらしく、芳江さんの笑聲が賑かに反響した。歸途、私はい

ろいろな事を考へた。吾一ちやんは何故あんな變な擧動をしたのだらう、池の主といふ鯉はどんな鯉だらう、芳江さんが池の主ではあるまいか――何だか謎のやうな、夢を見てゐるやうな、譯のわからぬ心持になつた。もとよりその解決はつく筈はなかつた。

それから半年ほどたつて、吾一は病氣になつて死んでしまつた。その時分家が破産したため、間もなくずつと北の方の町外れの小さな家に引越したので、私はその後はたつた一二度會つたばかりだつた。會つてもあの日のことは兩方とも一言も口には出さなかつた。吾一の死んだと聞いた時、私はあの日の事を想ひ出し、池へ石を投げたから池の主が祟つたのではあるまいかと、不圖そんなことを思つた。

續いて、私も兩親に連れられて朝鮮の方へ移住する事になつて故郷をあとにしてしまつた。

此頃聞けば芳江さんは町のある富豪に嫁して、もう母親になつてゐると云ふ事である。芳江さんは今も吾一の事を忘れないでゐるだらうか、一度逢つて訊いて見たいやうな氣もする。

歲月流れて既に一星霜、人生の苦を知らないで世を去つた少年の墓には、早く既に苔が生じたことであらう。私は吾一を思ひ、芳江さんを思ひ、あの時分のことを思ふと、また再び幼い情緒に立歸つて、悲しいやうな寂しいやうな、それでゐて夢でも見てゐるやうな樂しい氣持になる……。

投票用紙

四五人集つたある席上でのこと。
ラヴの話や女の話の頻りにはずんで來た時に、ある一人が不圖、
「藝者なんてものはよく死ぬものだね」とさも心底から感じたらしい聲で云つた。
「考へればかはいさうな氣がするよ。自分の一二度も招んだことのある藝者が、心中したとか、無理心中で殺られたとか新聞に出てゐるのを見ると、何とも云へぬ一種の感を催すね。それに肺病などで死ぬのが隨分と多い。何だかどうも彼等は平均して三十歳までは生きないやうな氣がする。何と言つても不幸な人間だよ。ところでこんな話がある、一つ聞いてくれたまへ」と彼は一座を見廻して、少し笑みを含んで話し出した。

某新聞に藝者の人氣投票を募つてゐる時のことだつた。ある晩、僕は勸坂のきたない理髪店で髪を刈つてゐた。非常に寒い晩で、硝子戸がガタガタ鳴つて、寒さが腹の底まで沁みわたる。バリカンの走る音が妙に寂しく、氣が滅入つてしまふ。刈られた長い赤味を帶びた髪の毛が、一かたまりづつ白い布の上に落ちる度毎に、まるで着てゐる着物を一枚づつ剝がれるやうに、寒さが加はつてくるやうな氣がする。

場末のことだから路を通るものもめつたに無く、ただ遠方でガヤガヤ云ふやうな聲がするばかりだ。僕は夢みるやうな眼つきで、ぢつと冷めたい瓦斯の燈を見守つてゐた。その時、
「えらい寒いこつちや」と呟きながら、突然硝子戸を開けて入つて來た者がある。すッすッと鼻水をすすりながら、火鉢の傍へ腰をおろした。見ると法被着た姿だけは威勢がいいが、もう五十を三つ四つも出たらしい老爺だ。何處かで酒を飮んで來たものと見えて、皺のよつた顏は赤かつたが、絶えず胴顫ひしてゐる。

床屋はバリカンの手をやすめて、
「どうです爺さん、今日はどれぐらゐ集まりましたね」と好奇らしく訊く。老爺は頻りに火鉢の上で手を揉んでゐた

が、

「いや、ねつから駄目でごぜいやす。たつた三十枚……」と云ひかけて、急に大きな右の手を法被の腹掛へ突込んで、もみくちやになつた紙片を摑み出した。それは新聞の投票用紙であつた。

僕は頭を洗つて貰つて右の椅子に移つた。冷たい床屋の手は顏の肉をつまんで、剃刀はすッすッと動いて行く。

老爺は投票用紙を丁寧に揃へて、また腹掛に入れ、兩手を顏に押し當てて生欠伸してから、

「何分にも二人だもんだから追付きやせん」と情なささうな顏して、寂しく鼻水をすする。床屋は、

「此頃はどちらが景氣がいいですね？」

「近頃姉の方が景氣が惡いさうでごぜいやすから、彼奴に皆送つたらうと思つとります」と云つて、老爺に何やらぼつとしたやうな眼付で、燈をぢつと見てゐる。

「さうですかな、私はまた松代さんの方がいいのかと思つてゐた」

「それが何でも菊香の方には早稻田の學生さん方が肩を入れてゐてくれるさうでしてな」

僕はぢつと眼をつぶつて二人の話を聞いてゐた。その中やつと話の要領がわかつて來た。老爺は此の理髮店の隣に汁粉屋を開いてゐて、傍ら植木屋の手傳ひをやつてゐるのだが、娘が二人あつて、姉の方は葭町、妹の方は神樂坂の藝者に出てゐるので、今度の投票一件で、一生懸命になつて、かうして植木屋の得意先きなどでその新聞を取つてゐさうな家をかけ廻つて、毎日いくらかづつ投票用紙を集めては娘たちに送つてゐると云ふのだ。

「近頃の寒さはまた格別でごぜいやすなア」と老爺はいかにも寒さうな聲で云つた。

剃刀を磨いでゐた床屋は、

「さあ、さう……」と眠さうな聲で曖昧な返事をする。老爺は妙にがつかりしたやうな顏をして暫く默つてゐたが、

やがて、
「では親方、おやすみなせえ」と云つて、少しよろけ氣味で外へ出て行つた。隣の家でガタピシ戸を開閉する音が響いた。

今まで氣が付かなかつたが、不圖、老爺が神樂坂に出てゐる妹の方を菊香々々と云つてゐたのがちらと胸に浮んだ。それならば此の三四ケ月前に、ふとした機會で呼んだことのある妓だ。その時、つい近頃一本になつたとか云つてゐた。年は十七、無口な素直な女だつた、さう聞いてみると、額の廣い、眼尻のやや下り氣味の圓顔が、どうやらあの老爺に似てゐるやうな氣もする。きつとそれに相違ないと思ふと、妙になつかしいやうな心持がする。

「今の爺さんはどんな人かね？」と僕はさりげなく訊いた。床屋は、鏡の方をちよいと見て、

「え、あれですか、困つたもんです。娘は二人とも評判な孝行者でしてね、おとなしい娘なんですがな、そりやかはいさうですよ。何分あの爺が仕様のない呑んだくれでしてね……」と眞實二人に同情した口吻である。僕は何だか胸を打たれるやうな氣がした。

歸りに隣の家を氣を付けて見たら、間口の狹い家で、軒下に大きな石がころげてゐた。中はひつそりして、燈火も消えてゐた。軒燈には赤く「しるこ」とあつて、横には松菊亭とあつた。成程姉が松代で妹が菊香だからナと私は不圖さう思つた。

翌日、僕は同じ下宿に丁度その新聞を取つてゐる男がゐたので、借りて來て投票欄を注意して見ると、成程、神樂坂の菊香が出てゐる、しかも大分いい位置を占めてゐる。松代といふ方はずつと下で、六號活字の部でやつと見付けられる位なものだ。それからは毎日注意して見てゐると、姉の方がずんずんせり上つて、締切間際には妹よりも上の位置にすわつてゐた。僕はそれを見ると、呑んだくれの親父が、「近頃姉の方が景氣が惡いさうでごぜいやすから、彼

奴に逢つたらうと思つとります」と云ひながら、一日驅け廻つて、皺の寄つた用紙を娘に持つて行つてやる姿がありありと眼に浮ぶ。

それから半月ぐらゐしてからだつたらう、僕は下町の方へ行く途中で、ふとその新聞を買つて、何氣なく雑報欄を見ると、「葭町の無理心中」と云ふ記事が眼に付いた。本紙の人氣くらべでかなりいい位置を占めてゐた葭町の流行妓松代、といふ文句がまづ目を射たので、熱心に讀んでみると男は妻子のある會社員で、かなり前から松代の馴染であつたが、近頃株に手を出して大穴をあけた爲め、進退谷まつて、松代に情死を迫つたものらしく、女を細紐で絞めて、自分は短刀で見事頸動脈を切つて自殺したといふ悲慘な記事で、それには動坂町何十何番地植木職山田權三郎と云ふ老爺の名も出てゐた。殺された！　かはいさうに、老爺はさぞ落膽したらうと思ふと、どうしたわけか自分でもわからないが、そんな場合には不釣合な、ひどくユウモラスな氣がした。けれども、直ぐそれは消えて、そのあとから微かな哀感が起つて來た。

その後十日ばかりして、夜、牛込に友人のAを訪ねた歸りに、ふと妙な好奇心が起きて、神樂坂へ廻つて菊香を呼んだ。不思議に僕を忘れずにゐた。

僕が何かの拍子と云つた風に、それとなく、

「此の間葭町に無理心中があつたね、あの松代つてのはおまへの姉さんだと云ふぢやないか？」と云ふと、

「ええ、姉も可哀さうな事をしました」と云つて、菊香はほろりした。

「運が惡かつたのだね、とんだ男に見込まれてしまつて……」と云ふと、

「考へれば考へるほど世の中はつまらなくなつてしまひます」と平常からあまり賑かではないのが、すつかり陰氣になつてしまつた。

私はなほあの酒飲みの老爺に會つたことも話したかつたけれど、あんまりふさぎ込んでしまつたので、冗談にも話し出せないやうな氣がした。

それから二三ヶ月してからだつたらう、友人のAの小說集の出版を記念かたがたAのために會を開いてやつたその二次會に、AやNなど最も親しい友達だけ三四人で神樂坂へ廻つたとき、

「お馴染は？……」と訊かれて、菊香をと云ふと、

「可哀さうに、あの妓も此間なくなりました」と云ふのだ。何でも急性肺炎で一週間とたたぬうちになくなつたのださうである。僕は頭から冷水をかけられたやうな氣がした。姉妹とも僅かの間に死んでしまつたといふ事が不思議なやうな、可哀相な氣がした。直ぐに僕の胆に浮んだのは、法被着て胴ぶるひしてゐた酒飲みの老爺である。僕には何だかあの老爺が、永久にこんな事は夢にも知らないで、毎日々々一生懸命になつて投票用紙を集めてゐるとしか思へないのだ。然し實は夢にも知らないどころか、命の綱の二人に引續いて死なれてしまつたのだから、どんなに落膽して、悄氣込んでゐることだらう、多分毎日々々自棄酒ばかり呷つてゐるのぢやあるまいか、かう思ふと、つくづく氣の毒な氣がした。

兎に角藝者といふものは、可哀相なものだよ。それは僕等のやうな藝術家だつて大抵短命で不幸には違ひないだらうが、藝者に比べたら遙かに幸福だよ。

かう話し終つて、彼はホッと息をついた。その彼といふのはMと云ふ赤門出の新進作家である。

花時分

胃腸を害めてゐるので、春が來たとて面白くも嬉しくもない。

毎日々々烈しい便祕が續いて、頭が重い、まるで孫悟空の鐵の輪でも箝められてゐるやうである。腹がごろッごろッと鳴る、そして丁度船暈のときのやうに、胸がむかむかして來て、嘔吐したいやうな氣持がする。身體中が妙にだるくて、骨と骨との蝶つがひがゆるみ切つてしまつたやうで、一寸机の前にすわつてゐても、すぐ身體が横になつてしまふ。書きたいことも書けず、讀みたい本も讀めず、讀んでも一向感興が湧かず、したいことも出來ず、要するにただ懶くて、何にも手につかないのである。

春、といふと、いかにも一年中の一番いい時節のやうに云はれ、思はれしてゐるが、時は春、といふその時ほど實は辛い、苦しい時はない。そよりと生暖かい風が吹いてくると、もう頭がぼんやりと重たくなつてくる。そしてその生暖かい風が薄氣味わるく、街頭をのたうち廻ると、こまかい塵がそれに應ずるやうにパッとあがつて、店屋の硝子箱の上などにざらざらと溜る。一寸外出して歸つても、襟首や口の中がざらざらしてゐるやうで氣味が惡い。花時分は殊に埃がひどい。三春の行樂に打興ずる花見連れの華かな一行の上から、花びらと一緒に浴びせかけてくるその埃、これも東京といふ武藏野の都の名物の一つかも知れない。春は厭やだ、どんより曇つた日はもとよりだが、からつと晴れ上つた日の日光さへ、何となく不健全な要素を培養するやうに思はれて、一寸佇んでゐても眩暈がしさうだ、そこに例の生暖かい風だ、もうどうしていいかわからなくなる、殊にぽかぽかと暖かくなりかける春さきは、私のやうな神經

衰弱が膏肓に入つたものには、ああまたいやな春が來たと、心の底から深い溜息が出るばかりで、それからだんだんと胃腸が惡くなつてくる。春だ、春が來たね、さあこれからだ、面白い時になるぜなどといふ人の話を聞いて、はじめは不思議がつてゐるが、今度はいつともなく、こんなに胃腸を害めては、春が來たとて面白くも何ともないといふ嘆息が洩れ出るといふわけである。

此頃は、通じの藥を毎日飮んでゐる。三日にあげず買ひに行くのだから、多分藥屋ではもうあの靑い顏した通じ藥さんとでも呼んでゐるかも知れない。氣のせゐか、藥屋の硫酸でも浴びたやうな色のどす黑い女房が、いつも妙な笑ひ方をしてゐる。

藥を飮むときつと下痢である。近頃は下痢ばかし續く。ばかりでなく、その下痢を一日待つてゐるに至つては悲慘である。その頃の日の長いこと、その長い一日をぢつと何にもしないで家に閉ぢ籠つて、起きるでもなく寢るでもなく、ぼんやり過してゐるのは實に堪へがたい苛責だ。

然し誰れも私の病氣を顧みてくれる人はない。遠い故鄕の親兄弟のもとを離れて、知らぬ他國で覺束ないその日その日を送つてゐる身分だからばかりではない、大體、人間といふものは他人の身體の故障なんか、まづ新聞で情死の記事を讀んだほどにも感じないものなのだ。自分のことは自分で始末をつけなくてはならない。けれども醫者にかかるは臆劫だ、殊に一度醫者にかかつて、勿體ぶつた診察を有難くして貰つたはいいが、隨分高い藥價を拂つて、それが賣藥ほどの效果も擧げないでしまつた苦い經驗がある。まあ、痩せた肋骨の浮出した胸をさすつては、ただ通じ藥を飮んで、毎日々々ぶらりぶらりとしてゐるの外ない。

かうして病氣はずんずん進んで行く。

やつとのことで考へついたのは、朝飯を食パンに變へることだ。これならば金も要らない。一體、今日まで胸がむ

かむかしたり、吐氣がしたりしたのは、みな朝飯を食つてゐた爲めだ。毎日々々欲しくもない朝飯を食はねばならぬ義理でもあるやうに、もぞくさ食つてゐるから、かうして毎日船暈のやうな氣分に苦しんでゐたのだ。かう悟つてくると、むつとする味噌汁にあつい飯を、鼻の頭に汗粒を浮出させながら、もぐもぐ食つた自分が急に馬鹿らしくなつて來た。食パンだ、食パンに限る。何なら三度とも食パンにしよう、そして藥屋に行く代りに洋食料品店に通ふやうになつたらどんに愉快だらう。かう考へると、もう病氣がなほつたやうな氣がする。

もう櫻が咲いた。窓の外の枝垂櫻も蕾がほころびかけた。いい匂ひがする。青い柳のみづみづしい若芽と並んでゐるのを、ぢつと眺めてゐると、印象派の繪のやうに、自らに色彩が網膜に溶合されて、柳さくらをこきまぜてといふ都の春のなつかしさが、急にむらむらツと胸に湧き上つてくる。さあ、食パンを食はう、食パンを食つて、胃腸をなほして、さてその後に花見にでも出かけたら、春もたしかに面白く嬉しいものに違ひない。もつとも、その時分にはもう春もすぎてしまつてゐるだらう。だが、それもかまはない、胃腸さへなほれば、それが私の春だ。

私は暫く窓の敷居に腰かけて、破目板を叩いて拍子をとりながら、いつか無意識に「柳は緑、花は紅」と、何處かで見たおなじ文句を飽かず繰返してゐた。

毛蟲

連日の風雨がやつと止んで、ほかほかと暖かい日の光に、門前の枝垂櫻の紅くふくよかな蕾が、今にも開きさうなある朝であつた。

私は庭を歩きながら、とりとめのない空想に耽つてゐたが、ふと何氣なく二重になつてゐるその內側の生垣の傍にうづくまつた。生垣は枳である。行儀よくきちんと植ゑ並べられたのが、前後左右を取卷く結び竹を、別に窮屈にも感ぜぬらしく、勢ひよく軟かな芽を萠やしてゐる。私はそれを見ると、ああ春が來たと、今更らしく思つた。

私は花よりもこの青い芽によつて、春のおとづれをしみじみと感ずる。魔女のやうにいやにどす黑い常盤樹の恐ろしい刺戟に疲れた眼は、淡綠の若い芽にひそむ生氣に蘇つたやうな氣持になる。ぢつと見てゐると、目の前には糸のやうな輝かしい線を帶びた、海ともまがふ淡綠がすつと無限に開展してゐるやうに思はれて、そのなかへ魂がふらふらと迷つて行きさうである。

まばたき一つしたら、五分ばかしの毛蟲が一匹眼についた。氣をつけて見ると、そこにもここにも、殆んど無數の毛蟲がうようよとしてゐる。私は靜かに物思ひに沈んでゐる時、そそつかしい女が烈しく障子を開閉する音を聞いたやうな、腹立たしさが心の隅に起つて來た。

毛蟲は頻りに軟かな葉を貪り食つてゐる。硬くなつた葉のところどころに、斑點のやうに白くなつてゐるのは、蟲の食つたあとに相違ない。試みに指をあてて見たら、ポコンと穴があいた。私はこの畜生めと云つたやうな、烈しい心持が抑へられなくなつてしまつた。

毛蟲、何て厭やな動物だらう。私は昆布と珠數と共に、昔から毛蟲が一番嫌ひであつた。この三つは何だかその印象が似通つてゐるやうな氣もしてゐた。その後、昆布と珠數とは嫌ひでなくなつて、珠數に至つては手首にかけて、佛の前でもんで見たいとさへ思ふやうになつた。が、毛蟲だけはどうしても好きになれない。誰れしも毛蟲を好む人もあるまいが、私は敢て恐れるのではない、刺される心配さへなければ手につまんで見る位の氣まぐれはあるのだけれど、この硬らしい毛の叢立つてゐるのが、卑しげな心でも見るやうに、フイジカルと云ふよりも寧ろモラルに厭や

なのである。こんな不愉快な生物が、あの美しい蝶になると云ふことは、宇宙の一つの奇蹟としか思はれない。その中に測るべからざる神の攝理、もつと散文的に云へば、自然の法則に籠る深い啓示を考へることもあるが、それよりもただ徒らに毛蟲の醜を忌み嫌ひ、蝶の美しさを嘆美するばかりのことの方が多い。人間といふものは近視眼的なものなのだから。

私は何か復讐してやらうと考へた。私の庭園を荒すこの無遠慮な侵入者に、最も慘酷な極刑を課してやらうと思つた。そして無意識にあたりを見廻した。刑罰の器具を求めたのである。けれども一度び眼を轉じて、暖かい日光を見、その日光に照らされてゐるほのかに白く水蒸氣を立ててゐる黒い土を見たとき、私は忽ちまだ幼くして故郷の父の家に住んでゐた時分に、いろいろな昆蟲に加へた自分の殘忍な虐殺を一目のやうに想ひ出した。ある時は蛙の皮を剝いで、板塀に張りつけた、ある時は蛇を半殺しにして木の枝にぶらさげて置いた、ある時は蝸牛を殼から引き出してその儘ほつたらかしてしまつた、そして勿論その中には大きな毛蟲を踏みつぶしてはその靑い汁を出すのを見て樂しんだこともあるのだ。すると私は烈しい羞恥と自責の念が胸にこみ上げるのを覺えた。天使のやうだなどと云はれる子供の心ほど慘酷なものはない。子供は最も強健な原始人の心を有つてゐる、憐憫の念だとか、惻隱の情だとか云ふものは微塵もないのだ。子供は大膽不敵なエゴイストである、ニイチエの超人の說なども、要するに子供の心に還れと云ふことになりはすまいか、自然に還れと叫んだルッソオと結局同主義になりさうにさへ思はれる。だがその子供もだんだん大きくなるにつれて、人生といふものからさまざまに虐げられ、苦しめられる。そしていつのまにか同情といふものを覺えるやうになるのである、私とてもさうである。今日、かうして毛蟲を虐殺してやらうなどと思ひ付いたのが抑も稀れなる例外だつたのだ。

考へて見れば、人間が飯を食ふやうに、毛蟲が木の芽を食ふのに何の不思議もない。我々は牛や豚や鷄や魚や、い

ろいろな生物を殺して食つてゐるではないか。それでゐて一寸毛蟲が木の芽を食つたといふだけで、そんなにも慘酷な氣持になるほど憤るとは、何といふ暴虐な、我儘勝手な生物であらう。勿論、そこには本能的な嫌惡といふものもあるにはあるが。丁度人間同士の間にも毛嫌ひといふものがあつて、何の因縁も怨恨もない人でも、罵倒したり迫害したりすることがあるやうに、毛蟲は先天的に人間に嫌はれるやうに運命づけられてゐるのに違ひない……。こんなことを考へながら、私はその刷毛のやうに毛がかたまつて生えた、無氣味な動物をぢつと見てゐた。

毛蟲の細い毛は日にきらきら光つてゐる。それが一本々々の刺のやうに見える。それが繪具皿を引つくり返したやうに、不調和な斑點をもつてゐるので、なほ更ら氣味惡く感ぜられる。さう思ひながらも、やつぱりぢつと見つめてゐると、その姿がいつかぽつと夢のやうに網膜に映じたとき、それは美しい二つの翼を有つてゐた。

幼き毛蟲の歎。私は机に歸つて、筆を執つてから書いた。冒頭の一句はすらすら出て來た。

なな色の翼ぞ、日の下、葉の匂ひ、

それつきりでもうあとが續かない。私の感情は典雅なよく整つた詩の體をなすべく餘りに混亂してゐたのである。この一枚の原稿紙は二時間の後、すでに紙屑籠の中に入つてゐた。これが毛蟲に對する、損害を與へないでの復讐であつたかも知れない。それよりはむしろ毛蟲が私に復讐したのであつたかも知れない。

晩　春

佗しい今年の春が徂かうとしてゐる……眼を擧げて見ると黄昏はただ寂しい。家の板壁に身をもたせて、ぢつと櫻

の梢を仰いで見た。

ああ花は散る、靜心なく散る。うすら寒い風が吹いて、やはらかい葉がざはつけば、枝の上にしがみ付いてゐる哀れな花が、ひらひらと舞つて、黑い土の上にぴつたりと落ちてしまふ。

思へば私の幸福だつたその幼い時も、かうした春の夕ぐれのやうに、うすら寒い風に吹かれて過ぎ去つてしまつたのだ。つくづくと昔を顧るに、花の一瓣が冷かな土の上に我れと身を沈めるのも、自然の爭はれない理法であるやうに、華々しい夢想が一朝空しく泥土に委し去るのも、また人間の奈何ともしがたい運命なのであらう。

私は波にしたたか打たれたやうな心で、たつた一本、春に取殘されたやうな、悄然と立つてゐる櫻の樹を、見上げ見下ししてゐたが、いつか曾て自分に辛かつた、また今現に辛い人々の上を考へてゐた。私は悲しい、何故、ああ何故かうも私の心はひねくれてゐるのだらう。自分を愛してくれた人を懷しまうとはしないで、自分を惱ました人を先づ怨む。このやうな難破船みたやうな心に何時なつたのであらうか。

今年の花は何だか汚れてゐるやうな氣がした。天氣の具合か、又は空氣の加減か知らないが、その見すぼらしく黑ずんだ花に、わざわざ浮かれだす人の心が知れない。私は一體人ごみが嫌ひなので、花見などと云ふものは未だ曾つて一度も見たことはないが、かうして何處の花も散つて久しくなるのに、色香はよしうつらうたにしろ、ひとり梢に奥床しい香を留めてゐるこの花に對すると、また更にいろいろな感慨が胸を衝いて湧き上つてくる。

まだ薄暗いと云ふ程でもない、すべてのものが不思議にはつきりと見えてゐる。そして樹の群れだけは蔭をつくつて、その中に花の色が一際白い。風の度毎にひらひらと散るのが、丁度流矢が地上に落ち行くそれのやうでもあり、また大きな美しい塵が舞ひ下るかのやうにも思はれる。

人生の春の慌しさ——私はその昔ながらの深い感慨に溺れてしまつた。ああどうして青春はかくも短いのか、人間

の生命はかくも脆いのか。寂しい、遣りどころなく寂しい。

花の奥、青葉の彼方には、ひらひらと紅いものが動いてゐる。そしてそれに黒いものがくッ付いてゐるやうだ。私は何だらうと思つた。何かの鳥のやうでもあるし、初めは一向に正體がわからなかつたが、暫くして、それは鯉の吹流しだと知れた。

五月五日——明後日だ。「時の流れの慌しさ、ゆめみつつすぐすこの頃……」といふ詩の句が私の頭に閃いた。もう五月だ、一寸眠つてゐる間にでも、時計の針は一めぐりしてしまふのである。我々がまだ一二と數へてゐるうちに、運命といふ神はもう十の指を皆折つてゐるのである。とても追つけたものではない。

あの鯉を見るにつけ、しみじみと戀しいのは兩親である。私のやうな知らぬ他國で物思ひする外に、何の取得もないやうな人間にもお父さまもある、お母さまもある。私はせめてそれだけでも誇りと慰めにしよう。世にはそれさへないあはれな孤兒もあるのだから。

鯉の吹流しは勇ましく青葉かげにひるがへつてゐる。あのやうに、あゝして祝つて貰つてゐる子供たちは幸福だ、その前途には光榮の道が横はつてゐるであらう……けれど、私は立派な一人前の男の兒であつたのに、五月の武者人形一つ飾つて貰つた事もなければ、美しい繪を書いた幟を立てて貰つたこともない。そんなら私は不幸であらうか。悲しい身——曾てはさう思つたこともある、自分ほど世に薄運なものはあるまいと。最も不幸な者と私は最大級を用ゐて自己の苦痛を誇張した。然し私は眞に不幸であるか。否——と私は答へたい。私は幸福であつた。今私は無理にもさう思ひたい。

散る花も今こそ人に悲しまれるが、人に仰ぎ見られ嘆美せられた春があつたではないか。私も一個の人間として、他の人に多少の印象を與へてゐるだけで、むしろ本望とすべきではなからうか。神は公平だ。かうして嬉しいにつけ

喜び、悲しいにつけ悲しみ、やがて死んで行くことが出來るのが、まことに人並の幸福としなければならぬではあるまいか。

でも、春の徂くのにつけ私は悲しい。なぜ悲しい……なぜ、なぜ、なぜ……それはわからない、でも何となく悲しい。秋の悲しみは深く切だと人は云ふ、然し私は春の悲しみに一層やるせないもののあるのを感ずる。秋の悲しみには心を鞭つやうな心強さがある。春の悲しみにはそれがない。また何だか人の異常な悲しみを聞くのと自分の平凡な悲しみを語るのとのやうな氣もする。

かうして、私はただ自分を悲しむ。

花と常盤樹

春だ。樹といふ樹は悉く芽をふき出した。ただの一分時も停滯してゐないと云つたやうな、勇ましい綠色を見ると、私は一種の恐怖に似た感情を覺える。古い種が腐らなければ新しい芽は萠え出さないとは、メレジユコフスキイの言葉だが、この新しい芽こそは我等のさかんなるロマンテイシズムの象徵でなければならない。私は靑葉に對した時、最も痛切に自己の怠慢を思ふ。若い芽生えに對した時、最も靑春の誇りと恐れとを覺える。花は私を空想界に連れて行くけれど、木の芽は現實へ引戻さうとするやうに思はれる。

醜いのは常盤樹である。松の如きは長壽、幸福の象徵のやうになつてゐるらしいが、私にはむしろ卑しい執着の象徵としか思はれない。然し、松に限らず、すべての常盤樹は、元老とかいふ一種特別な、人臣中最高位のデグニテイを

有する、珍妙さはまる長老を上に頂いてゐる未開の戰爭國を代表するものとしては甚だ結構である。ただこの一介の貧書生たる私が、若し他日小さくとも一つの庭園を所有するやうになつたならば（恐らくそれは私が甚だ得意としてゐる日夜の夢想の外には、永遠無限に不可能な假定であるが）常綠樹は一切他へ移植してしまはうと思ふ。多くれば潔く一齊に裸體になり、春くればまた一時に勇ましく萠えいづる。そのいかにも日本人らしい、日本の侍らしい木立の中に、未練らしく、冬、雪のもとに蒼黑い葉を棄てず、こころよい淡綠のやはらかさの中にひとり見苦しい枯葉を下枝に殘す、しつこい淫婦のやうな常綠樹よ。それでもおまへたちは我々の性情を代表してゐると主張しようとするのか。

　紫のひともとゆゑにといふ歌もある。花はただ一本あるのが面白い。上野や向島の花の雲をよそにして、隣のお寺の庭にただひと本の花を愛でた蜀山人の昔をおもへば、何やらその人格もしのばれて限りなく奧床しい氣持がする。眞に花の美を愛するならば、種類の異つたものを集めるのがいいと思ふ。椿もあれば櫻もある、梅もあれば海棠もある、桃もあれば藤もあるといふ風にしたならば、どんな俗な花でも、どんな卑しい花、しつこい花でも、みなそれ相應の面白味を發見することが出來よう。それ等は互ひにその美を競ふといふより、相寄つてその美を助け合ふのである。

　梅は雪につづく、勇ましくもまづ花とほころぶ。このけなげな、百花の魁をなす花の運命は私を深い冥想に誘ふ。點々と白く泥濘に散らばつてゐる梅の花瓣を踏んで、滿開の櫻を仰ぎ見るのは、何となく痛ましいものだ。それは丁度惡戰苦鬪して空しく中途に仆れた先驅者の悲壯な生涯を想はせる。かく云ふ時、私は北村透谷の悲壯な運命を念頭に置いてゐるのだ。

　櫻は薄紅い花が澤山ついてゐるのよりも、色の濃いのが、丁度桃の花のやうに少し咲き出たところがよい。殊にそ

のふつくりした蕾はなつかしくも心を誘ふ。

私はかういふやうなことを手帳のはしに書きつけて、それに植物小感といふ題をつけておいた。

十年ののちに

それから十年たつた。私はやつぱり昔の私だつた。自作の詩の評釋を書くといふ極めて愚かな業を試みなければならなかつた時、私はやはりこんなことのやうなことを書いた。

ちりくる四月の花を見るとき、
コンヴエンシヨナルな悲みに襲はる、
すたれたる悲みをまたも悲む。
ちりくる四月の花を見るとき、
春のなかばにして秋の悲みを知る、
美しきものの短命をさらにさとりて。

美しく雲のやうに、今を盛りと咲き誇つてゐる櫻の花を見てゐると、しみじみと人生の無常を感ぜずにはゐられない。さかりの花は將に散り初めようとする花だからである。

さき頃その多年眷戀の故郷に歸つて行かれた獨逸の美しい浪漫主義の哲學者ケエベル博士は、次ぎのやうな美しい思想を述べられた。

「櫻の花の頃こそ日本人を觀察すべき時である、これその牧歌的哀歌的なる天性の最も明かに現れる季節だからである。日本の國民的花は、堅い、硬ばつた、魂なき、萎むを知らざる菊ではない、絹の如く柔かなる、華奢なる、芳香

馥郁たる短命なる櫻花こそ實にその象徵である。日本人はこの美しき花の束の間に萎みさうして散りゆく其中に、わが生の無常迅速の譬喩と、我が美と靑春との果敢なきを見るのである。櫻の花を眺めてゐる時、春の唯中に秋の氣分が彼の胸に忍び入る。」

私は始めてこの言葉を讀んだ時、どのやうにか驚嘆し、かつ嘆美し、かつ狂喜したであらう。それは宛かも私の云はうとしてゐることを、一層美しく、一層深遠に云ひ盡してあつたからである。私はこの言葉をただちに右の私の詩の解說に拜借したいとさへ思つた。ただその場合には、解說そのものが一層すぐれた、一層深遠な詩であるといふ、この日本の小詩人にとつてはまことに恥かしい奇異なる現象を呈するのではあるけれども。兎まれ、日本人に對するかうした觀察は、餘人は知らず、私にはただただ知己の感なきを得ない。

花の命は本當に脆い、春の夜の夢のやうに短かい。無邪氣なこの國の人たちが、花見に唄ひさざめく日は幾日とない、それは直ぐ消えてしまふ。そして、三春の行樂、今誰れが邊りにかあるの感に堪へざらしめる。實に櫻の花は潔い。忽ち開き忽ち散る。我々は支那人や、西洋人のやうな執着を求めてはゐるが、然し櫻の花のかうした未練氣のないところはやつぱり好ましい。櫻の花は何といつても日本の國民性をよく代表してゐる花であろ。思ふに日本人の美德は實にこの櫻の花のやうな潔いところに存するかも知れない。私は落花を見る每に、美しい少女の死を聞いたときと同じやうに、

滅びゆくものは美しく、
美しきものは滅びゆく。

といふ二行の美しい詩句を思出す。げに Only the transient is beautiful と云つたシルレルの言葉は限りなき眞理を含んでゐる。そして私もまたかう云ひたいのである、生滅するもののみが美しく、瞬間的なものほど貴いと。

また

もう一度、違つた機會に、同じく愚かな業を試みて、私はまたかうも書いた。

風なきに花はちりくる、
ひらひらと花はちりしく、
庭もせを白くうづめて
うつくしく、きよく、かなしく、
ここにわがをはりこそあれ、
げにわれもかくぞ散らまし、
花のごとくに、四月の花のごとくに。

私は櫻の花が好きである。日本の國花とされてゐるのも徒爾ではなく、櫻の花は我々の國民性をよく代表してゐる。日本詩壇のフランス詩人諸氏に取つては、かかる愛好は許しがたい罪惡かも知れないが、「敷島の大和ごころを人問はば朝日に匂ふ山櫻花」といふ本居宣長の歌を、私は今日に於てはその頭巾臭、その陳套にもかかはらず、なほ意味のある歌だと信ずるに至つた、が、更に我が西行が、「ねがはくは花のもとにてわれ死なんそのきさらぎのもちづきのころ」と歌つた心に至つては、限りなき同感を寄せずにはゐられない。滿開の花のもとに永遠のこの世の見をさめをしたいと願つたところに、私は西上人の悟りの心境を見るのみならず、その中に含まれた、その日本人らしい感情の動き方を尊ばずにはゐられない。花とともに、花の如く散らうとは、日本の古武士の心がけである。私は花のさかり既にすぎて、ひらひらと地に散りしく中を落花の雨を浴びながらさまよふのが好きである。そして束の間の斯の生を思

ひ、死生を超越した古（いにしへ）のすぐれた人々を偲び、人生の無常をはかなむと共に、人間の心靈の偉大な力を仰ぎ見るのである。

私は曾つて、

かくも我れは古き日本人なり、
我れは歐洲人と支那人との執着なし、
ハラキリを美しき芝居と思ひ、
あきらめを又となき哲學となす。

と歌つた。私は自分を一人の日本人として見る時に、曾つてはより多く羞恥を感じたが、今日はより多くの誇りと自負とを感じたいと思ふのだ。

私は繰返し繰返しこんなことを書いた。それ程私はこの花を愛してゐるのだ。

序に私はいま一つ、私のかうした心持を美しく巧みに表現したものとして、一つの古歌を掲げて見ようと思ふ。

花を雲かとながむる空に
散ればぞ花を雪とみむ、
命も花と散りかかる。

また

今ひとつ、常盤樹の名譽のために、私はなほ十年の昔の私の言を修正する必要を感ずる。

常盤樹は若い浪漫家（ロマンテイシスト）によつて、ラディカルに排斥されてしまつた。けれども、より老いたる、且つまたより熟し

たる心は、もつと複雑な見方をせずにはゐられない。今日、私の裏の理想家が極力花の潔さを嘆美してゐる間に、私の裡の現實家は、常盤樹に於て根強く地に食ひ込む人間の生活力の象徴を見たいと思ふのである。

生きてゐる！　それは何といふすばらしいことであらう。この一語こそまさに人間の誇るべき言葉だ。ゴビノオの『ルネツサンス』の中で、ケエザル・ボルジアは――ニイチエが嘆美したこの謂はば或る意味での超人は、マキアヱリがその『君主論』の理想的君主として見出したこの犯罪者は――何と云つてゐるか、この Aut Caesar, aut nihil!（帝王となるか然らずんば何者ともならじ）といふ俗世の兒の發し得る最大の一語を標語としたこのルクレティア・ボルジアの兄にして愛人たりし怪物は何と云つてゐるか。

「おれが生きてゐる限り、この世はおれのものだ！　おれはそれを踏んでゐるんだ！」

おれはそれを踏んでゐるんだ！　大地を踏んでゐる限り大地はおれのものだ！　我々もまたかう云ひたいと思ふことがありはしないか。我々はみなアンテウスのやうなものではなからうか、母なる大地から足を離れる時、無力この上もなきものとなる。（序ながら凡ての徒らに優雅なる詩人や文學者に對しても、特にこの事を云はずにはゐられない。）生きよ、人間よ、その生を極度まで生きよ、哀樂の限度まで、苦痛と快樂の澤までも、飲み乾せよ。然るのちにこそ、死も恐るべきものではない。我々は生命の微端まで生きたのだ、もうその上はない、一毫もない。そして常盤樹はその事を私に感じさせることが稀れではない。今、かやうに私は常盤樹に於て、生の肯定の象徴を見出さうとしてゐる。古來より屢々、かはることなき操持、堅忍不拔、または女性の貞操の譬喩に用ゐられ、松の操の熟語を旣に遙か以前に於て陳套に歸せしめた、その日本人的の情緒は、今また私の裏にも働いて、とりわけ松の樹の中に、意志の弱い自分自身に對する自然の大教訓を感得するのである。

松の樹について云へば、私はこの樹を花の如く愛してゐる。その憂鬱の美に、また純日本的の、傳統的な情趣を掬

み取るものである。私は自分が幾度びの風雪に鞭れるに從つてだんだんに松の樹の風姿をたたへ、松の樹を愛するやうになつたのである。そして、

松の樹はくろくまたくろく
あやしき影もて我が胸にせまる……
ああ我が日毎の嘆きはさながらに
うかみて消ゆる松の樹の影にあらじか。

と云ひ、

月の夜を、岡に短い松のかげ。

と嘆じ、

松の樹は黒々と我が愁に向ひ、
我が胸の憂鬱を反映せしむ、

と歌ふなど、私は飽くこともなく松の樹に執着してゐた。これもまたいかにも古めかしく、時代おくれのやうに見えるかも知れないが、私は佛蘭西風な詩を模してプラタアヌを歌ひ、獨逸の詩に學んで菩提樹(リンデン)を詠ずる機緣にはむしろ乏しい。それは全く我々の眼に觸れる事のないものではないけれど、まだ日本的の傳統を缺いでゐるのである。そして勿論私は異國情調(エキゾティシズム)を追ふのも惡くはないとは思ふが、私の純日本的な心情はむしろ雪舟などの墨繪に、濃密重厚な油繪よりも多くの親しみを感ずるのは止むを得ない。のみならず、私は今後も尙ほ更に進んで、かうした愛好を恥づる事なく、一人の日本人として生きたいと思ふ。

然るに大地に根を張ることを賤しむウエストレルたちの多いせゐか、私は我が詩壇に於て未だ松の樹を歌つた一篇

の詩にも接してゐない。これは實に驚くべきことである。私はここに我が詩人たちが、いかに日本的なる凡てを無視し輕蔑して、紙によつて傳へられる世界に心醉してゐるかを痛ましい程はつきりと感得する。これに反して、我々の民謠は眞實である。松の樹がいかばかり俗謠の中に重大な役目を勤めてゐるかを思ふとき、私は民謠の意義を今更に尊重せずにはゐられない。『松の葉』『松の落葉』『若みどり』など、まづその集の名に於て既にそれは知られるのであるが、「松の葉越しの磯邊の月は千歳經るともかはるまい」とか、「松になりたや有馬の松に……」とか、「…… 濱の松風音ばかり」とか、かうした松に因んだ俚謠の傑作は枚擧に遑がない。また『寺小屋』の「……なにとて松のつれなかるらん」とて、梅さくらと相並んで松の樹を擬人してゐるその技巧、松王丸のあの蒼顔は、我々の情緒に直接肉に訴へる淨瑠璃の効果をただそれだけでも實によく證明してゐるではないか。それから同じやうな事はまた稻についても云はれ得る。萬葉に於ては「稻つけばかがる我が手を今宵もか殿の若子がとりて嘆かん」の傑作あり、民謠には勿論稻に因んだ傑作に富んでゐるのであるが、しかも我が新しい詩人たちはまた例によつて我々の命の親なるこの植物についても我關せず焉である。彼等は思ふに「米のなる木はまだ知らぬ」岡山育ちででもあるのだらう。そしてここに於てもまた常に新しい模擬詩人と一致し得ない私に、

　胸ふかく沁み入る日かげ、
　稻の穗は野に垂れさがり、
　罪なき童とやさしき少女と
　たはむれし古里おもふ

と云つた風の句あることは、必ずしも徒爾ではなからう。

勿論、私は詩人はぜひ松や稻を歌はねばならぬといふ珍らしい註文を持出すわけではない。そして空虛な皮肉屋に

「まづいね」などといふ、それこそまづい洒落を樂しませようとするのでもない。私のかういふ意味は、我々は徒らなる外國文學盲拜を廢して、一人の佛蘭西人として感じたり、一人の英吉利人として考へたりするが如き無意味な「文學」に墮する事なく、一個の日本人として感じ、考へ、且つ生きなければならぬと主張するのに外ならない。私は曾つて正義人道の體裁のいい假面たるに過ぎない國際聯盟と呼ぶものを謳歌した或る詩人の作品を讀んで、徒らなる讀書の弊を痛感したことがある。一體、我々の社會に於ては凡てが餘りに直輸入的、直譯的に過ぎてゐる。文學者がまづその迷夢より醒めなければならないと私は思ふのである。

小景小情

顏

夜、燈火をかかげて机に對つてゐると、前の障子の硝子に人の顏が一つ浮んでゐる。ほんのり紅く、目鼻立がいかにも夢のやうに美しい。誰れであらう。私のうしろには誰れもゐない。勿論それは私の顏である。

私の顏は美しくはない。私はこんなみつともない、間の拔けた顏はないと思つて、床屋などでいやでも自分の顏を見なければならぬ時は、つくづく悲觀することもあるのに、これは何といふ相違であらう。なぜ、あんなに美しく見えるのだらう。

私は女のやうにその美貌を暫く醉つたやうに眺め入つてゐた。やがて、私は無意識に自分の顏を撫で廻した、そして俯向いてやや暫く沈吟してゐたが、不意に殆んど口のさきまで出して叫んだ。

「さうだ、藝術だ、僕は藝術にのみ生きよう。一切の現實の享樂などを離れて、美しい藝術の世界にすつかり沒頭して行かう。僕の心に滿足を與へるものは、實在ではない映像だ、現實ではない、夢想だ。何と云つて笑はれてもいい、僕は夢想と幻想とに生きる……」

それから長い事、寂しい秋の夜の部屋につくねんとすわりながら、私はこれまで覺束ない讀みかたで讀んだ美學の本の中のいろいろな學說を頭の中に浮かばせてゐた。

或る夜

或る晩方であつた。燈火(とうしび)の光が何となく懷(なつか)しいので、何思ふともなく、ぼんやり机の前にすわり込んで、ぢつと灯影(ほかげ)を見つめてゐた。

戸外には月の光が靑くひろごつてゐるらしい。蟲が啼く、何處かで、床下(ゆかした)か、庭の隅かで靜かに啼いてゐる。その聲を聞いてゐると、ふッと死んだ妹のことを思出した。ああ妹は死んでしまつたのだ、もう此の世にはゐないのだと思ふと、急に悲しい、心の中が空虛になつたやうな氣がして來た。そしてその顏の輪廓を胸にゑがいて見た。どうもはつきりしない。思出せさうで思出せない。頻りに心が焦立つて來て、幼い面影を追求してゐた。すると其處へ、

「君ゐるかい？」と云つて、のつそり入つて來たものがある。Ｅ——君である。顧ると、色の黑い顏に歪んだやうな笑ひを一杯にたたへて、川端の杭のやうに立つてゐた。

「やア」と云ふと、

「どうだね」と無意味に云つて、何といふ事なしにからからと笑つた。そしてどつかり私の橫の方に膝を組んで、袂から卷煙草を取出した。私はその聲がこれ迄一度も聞いたことのない聲のやうに物珍らしくもまた異樣に感じて、ぢつとＥ——君の軟土を團子にまるめたやうな、頗る他奇のない、茫としたやうな顏を見てゐると、

「此處は東京だ」といふ考へがふッと浮んで來た。それと殆んど同時に

「あア久し振りに故鄕(くに)の聲を聞いたのだ」と、何がなしにさう思つた。

雀の子

五月の或る夕方であつた。弟が私の書齋にやつて來て、
「雀が軒に巣をつくつてるから、早く捕つてくんなさい、よ、兄さん」と頻りにせがむので、どんなにしてゐるのだらうとつい好奇心が起つて、罪なこととは思ひながら、箱を踏臺にして軒端を探つて見た。藁の中へ穴をあけてゐる、その中に手を差入れて見ると、小さな溫かく柔かなものが手に觸れる。ついギユツと握りしめて見たいほどその感覺が氣持がよい。

子雀であつた。三羽ゐた。親鳥は丁度ゐなかつたが、弟はその引出された小さな不幸な者どもを見ると大層喜んで、一時間もかかつて、朝日の空箱に厚紙で格子を張りつけて、横手に口を開いた鳥籠をこしらへて、その中に綿を敷いて、それに子雀を入れて、明るいランプの下に持ち出して、その一擧一動を指摘しては、何とか云つて喜んでゐる。私も覗き込んで見た。三羽とも隅の方にすくんでゐる。生れていくらにもならないらしい。羽はもう生えてゐるが、嘴が黄色く、比較的太くつて、眼はぢつとつぶつてゐる。私はその悲しさうな、たよりなささうな姿を見ると、つくづく可哀相な氣がして、今更に自分の殘酷さが悔まれて、烈しい良心の苛責を覺えた。親鳥は歸つて來てどんなに驚いたことだらう、ああ何といふ罪なことをおれはしたんだらう……

「おい、もうもとの巣に返してやらうぢやないか、こんなにしてゐたんぢや今に死んぢまふぞ、さア、およこし、いいだらう」と云ふと、弟はあはてて兩手で箱を庇つて、
「いやだ、いやだ、返しちやいやだア」と云つて、向うの部屋の隅の方へ持つて行つて、どうしても私の云ふことを

聽かない。無理に取らうとすると、大きな聲で泣き出すので、私も仕方なく斷念して、
「仕方がない、人間だつて皆これなんだ、弱者は强者の玩具に過ぎないんだ！」といふ感じが烈しく胸を衝いた。私はすつかり憂鬱な氣分になつて、默つて書齋に引つ込んで、長いことぢつと燈火を見つめてゐた。

乞食の兒

ある日、乞食の少年が二人、ふと路で出逢つた。
郊外に近い場末ながら、その邊の勤人の細君などのどうでも買物に出て來る目貫の場所で、派手な流行物を飾り立てた目醒めるばかりの吳服店、さまざまな果物が色を交へて山野の趣き匂ひにしたたるばかりの水菓子屋、子供の物欲し心をそそり立てる玩具店など、さまで廣くもない乾燥した路一筋隔てて、ずらりと並んでゐる、賑かな街の眞中である。
一人は蓬々とのび放題になつた髮が額に亂れて、顏の色がどす黑く、土まみれの石ころか何かのやうにいやに硬くシヤチコバツてゐる。一人は何處かで拾つて來たらしい破れた麥藁帽をかぶつて、兎唇で、厚い下唇はだらりと垂れてゐる。いづれもむさくるしく、はき溜めから掘り出されたやうな臭氣を放つのは同樣である。きらびやかに着飾つた婦人方などはハンケチに口を蔽うて、美しい眉をひそめられさうな樣子である。
空手で、ノソノソと歩いて來た二人は、ばつたりその街角で行き逢つた。人通りの多い黃昏どきである。
「ヤイ源公、ケチな帽子を拾やがつたナ」と一人はいきなり罵り立てた。
「羨ましいか、馬鹿野郎め」相手は憎々しげに答へた。口のほとりには意地の惡い冷笑が浮んでゐる。

「馬鹿、そんなものが食へるか。おら、たらふく旨えもの食べて來たんだ」
「嘘吐きやがれ。てめえのやうな馬鹿野郎に見つかるもんけえ」
路行く人はみな輕蔑の笑ひを浮べて、物珍らしげに見返つて行く。
けれども二人の乞食の子はそんなことには頓着もせずに、暫く罵り合つてゐた。
「青瓢箪め、くたばツちまへ」
「兎唇め、てめえこそくたばりやがれ」
かうして二人は別れて行つた。そして再びあとを振向きもしなかつた。

鼠

ある晩、僕は眠らうとしてゐた。けれどもいろいろな雜念が起つて來て、眼はますますうちに冴えて來て、ただ僅かに幾度かまどろんだばかりであつた。

僕はまだ子供の時、鼠の夢を見たことがある。金色をして、瞳の赤い鼠であつた。その舞ふさまあだかも電のやうで、僕の眼にはあだかも小判がくるくる廻つてゐるやうに見えた。鼠はたつた一匹、夢の始めから終ひまで、變らぬ速度をもつて、ただ舞ひ狂うてゐた。夢だから鼠と見えるのだと僕は夢の中から考へた。僕は醒めて見るときつと枕もとに一片の小判があるに違ひないと確く信じてゐた。けれども、もとより夢は夢とて、朝の日ざしの下には何の變りもなかつた。そして僕は輕い失望を覺えた。

こんなことをそれからそれへと思ひ起してゐるうち、僕のふさいだ眼には溫かい涙が一杯になつた。涙はうちに向

つて流れる。何の涙だらう、何だか世界が僕だけをあとに殘して轉つて行つてしまふやうな心細い氣がする。
時はすぎて行く。何の物音もない。僕の眼はますます冴えるばかりだ。その時、ふと微かな物音がした。カタコト、カタコトと何處かの部屋の隅でする。
「鼠だナ」さう思つて、いきなり枕もとのマッチをすつた。途端、僕の机の下から眞黑な一小塊が壁の隅の穴へ颯ッと飛び込んだ、神のやうな早業だ。怪物は筆の穗先よりも小さく見えた。僕は自分で魂でも飛去つたやうに驚いた。それは貧しい書生の部屋にまで漁りに出てくるあはれな餓ゑた鼠だつた。僕はそのうち、うとうと眠つてしまつた。翌朝起きて見ると、机の下に役げ込んであつた僕の古びた蟇口は嚙み破られて、たつた一枚殘つてゐた十錢銀貨がそこに寂しさうにころげてゐた。

雪

昨夕は妙に寒かつた。歸り路、濡れた幌にでも觸つたやうに、ひやりとした風がさつと吹いた。車夫が雪ですぜと云つた。いかさま何かが降つて來さうである。門の戸の開くまで、外にたたずんで待つてゐると、何かしら冷たいものが顏に落ちて來た。こんな夜は大嫌ひゆゑ直ぐに寢てしまつた。
ふと眼が醒めると、ちやぷちやぷちやぷと音がする。雨滴だ。雨が今降つてゐるやうにも思はれるし、もうやんでしまつてゐるやうにも思はれる。いづれにしても曇天は免れない。ああまた今日も、と思ふとがつかりした。いつも頭の中が曇つてゐるのに、かうした曇天の連續はたまらない。大きな欠伸を一つしてから、ふつと目を開くと、雨戸の隙間から矢のやうに日光が射し込んでゐる。雨戸の板の薄いところは指を日にかざして見るやうに紅い。天氣だ、と

思ふと拾ひ物でもしたやうに嬉しい。然し、雨滴の音は烈しい。雨滴でなくつて、雨が降つてゐるやうにも聞える。

外へ出て見ると、雪が二三寸積つてゐた。屋根の上のは饂飩粉をばら撒いたやうに溶けかかつてゐる。日の光はまだ弱い。空はぬぐつたやうに晴れた。

庭の方をのぞいて見ると、向うが妙に薄ぼんやりしてゐる。世界が急に狭くなつたやうな氣がする。きれいに咲いた梅の花は、白いものの中にいたましく煤けて見えた。枝は無慘にも垂れて、折らうと思へば手が屆きさうだ。木々の梢からは絶間なく雪が落ちる。まだ日ざしが弱いのと、何さま雪の降るやうな寒さであつた爲めか、みな霰のやうに固つて落ちてくる。そして氷砂糖をぶちまけたやうに庭に散つた。

南天の葉にたまつてゐる雪をかき集めて雪玉をつくつた。二三度手玉に取つてゐたら、つい受け損じて地上に粉微塵に砕けた。砕けた雪をぢつと見てゐると、ふと梅の花瓣が雪にまじつてゐるのを見つけた。枝を見上げると、花はいづれも萎れたやうになつて、妙に薄ぎたなく見える。

さすがに手がちぎれさうで、利かなくなつてきた。私は懷手をして暖めながら、洞穴の奥でも覗くやうに、青い常盤樹の間にちらちら白いものの見える生垣の向うの方をぼんやり眺めてゐた。

朝鮮凧

七つになる賢ちやんがちよこちよこ走つて來た。

「凧をこさへておくんなさいな、ねえ兄さん」と僕の肩へ手をかけて、ぢつと覗き込む。仕方がないので讀みさしの詩集へ栞を入れて、につこり横向く、と、今まで外に遊んでゐたらしい冷たい柔かな頰が、ほてつた頰に觸れた。

「凧?」と訊くと、

「あ、あの大きい凧を、ねえ兄さん」と長い睫毛を搖がして言ふ。美しい兒だ。愛らしいお父さんゆづりの色白な、然し肺あたりに故障でもありさうな、何處となく弱々しい感じのする兒だ。

「あ、こさへてあげますとも。字凧、繪凧、何でも」

「人の持つてるのはいやだ」

「さう、ぢや朝鮮凧にしませうね」

「朝鮮凧つてどんなの?」

「朝鮮人のあげる凧」

「朝鮮人も凧をあげるの?」

「え、あげますとも。朝鮮は風が強い國ですもの」

「朝鮮ツて何處?」

「お父さまの行つてらつしやる處です」

「ああさうか、お父さまか、お父さまは來年歸つて來るの」と云つて、賢ちやんはペン尖を弄んでゐる。僕はその小さい頭を見てゐると、三月前に暴徒に虐殺せられなすつた主人を思ひ出して、何も知らず、來年になるとお歸りになるのよと、かたくそれを信じてゐるこの兒の行末を思ひやつて、また新なる哀愁をおぼえた。

その午後、門前で近所の子供たちと、僕のこさへてやつた四角いまん中に丸い穴のあいた朝鮮凧を上げて、何やら嬉しさうに話してゐる賢ちやんの聲を聞いて、

「子供ツて罪のないものだ」と呟いて、それだけ一層いぢらしい氣がして、僕は何となく涙ぐましい氣持になつた。

秋の黄昏

もう暮れるのに間もあるまい。秋の日かげは微かに庭の枯枝にまつはつてゐる赤い烏瓜を照らして、丁度老婆のしよぼしぼした眼でぬ見るやうな感じのする光が、疲れた眼に妙に不快な、重つ苦しいやうな氣分を與へる。

いつ見ても見飽きない大空は、掃き清められた青疊のやうに澄んで、圓味を帶びた白雲がふわふわと動いてゐる。

庭の紅葉がぱらりと散つた。

風は絕えず木々をゆすぶつて、地上を忙しげに吹いて行つたり、吹いて來たりする。その都度、戸がガタガタと鳴る。

寒さを物ともしない子供の群れは、門外できやツきやツと騷いでゐる。幼い時分は本當に幸福だ。人生のすべてはその時みな美しい夢にすぎないのである。

悲しい心が胸にこみ上げて來た。

〱あの寂しい風の音を聞けば……あの空枝にぢつとしてゐる小鳥を見れば……あの遠くの微かな汽笛の聲に耳を傾ければ……限りなく懷しい昔の夢の思出が滿潮のやうに押寄せて來て、てんでに何事をか私の心に囁いてはまた消えて行つてしまふ。

ああ私も昔は幸福であつた。

眼を上げて見ると、軒燈はもう寂しさうに瞬いてゐる。あのしよんぼりした光を見ると、私はふと國に殘して來た幼馴染の戀人を思出した。

靜子……あの優しい顏立をした、あどけない娘は今どうしてゐるだらうか。まだ私を忘れずにゐてくれるだらうか。それともたよりない少女心の、もう私の事などは、山遊びをした十日前の記憶よりも遠く、遙かに遙かに、胸のうちから消え去つてはゐはしまいか……

火鉢に火が絶えたので、急に寒くなつた。

山の手の夕暮を、豆腐屋の鈴音が一しきり消魂しく響いて、それが絶えてしまふと、何處やらで車のとまつた音。「お歸りッ！」と威勢のよい車夫の叫聲が地心に響いたと思ふと、大きな女の笑ひ聲が無遠慮にどよみをつくる。

あア……と私は生欠伸をした。無量のたよりない思ひが湧いて來て、ぢつと冷たさうな夕暗のだんだん忍んで來る戸外の景色を見てゐると……急に頬がひんやりとした、ぽたぽたと涙がこぼれ落ちたのである。

風は烈しく戸を打つた。

散歩日記

——十九歳のとき——

一

自分の書齋を掃除してから帽子をかむつて散歩に出た。

さう大して寒いことはないが、足が馬鹿に冷たい、爪先がちぎれるやうだ。氣分はすがすがしい。T——子爵邸の前の路から大きい通りへ出る。日がうつすら照つてゐる。それでもちらほら人が通る。

動坂に出ると、石碑に不動尊云々と刻した金字が鋭く僕の眼を刺戟した。何だか異樣な神祕的な氣がした。その橫から田圃の方へ出た。霜柱がポカポカと下駄を落込ませるので直ぐ足が汚くなつてしまふ。

朝の空氣は何とも云へずこころよい。戀も惱みも、詩も煩悶も、デカダンも、何もかもすつかり忘れて、かうして步いてゐると、頑固な神經衰弱も少しづつ退却して行くやうで心强くなつてくる。

廣場で凧を上げてゐる元氣な子供たちもある。遠足にでも行くのであらう、威勢よく話しながら行く中學生の二人連れにも會つた。二階の戶をあけて、眩しさうに朝日を眺めてゐる勤人らしい三十男もあつた。

飛鳥山に續くらしい一帶の森や、人家に圍まれた、袋の中みたやうな畑などを眺めながら、蛇の背中のやうなクネクネした畔道を、深呼吸しながら步いた。凬は絕えず裾をはたき、醱してゆく。六角水晶を無數に並べたやうに、黑い土には霜柱が立つて、その間に何かの靑い芽が遠慮らしく覗いてゐる。畑と畔道との間に溝があつて、その兩側に相對してゐる土は、いづれも厚い氷に身を裝うてゐる。

路が行きつまつたので、其處に彳んで四方を見渡した。森はすつきりと氣持がよい。藁屋根、籬、見るからに田舍に行つたやうな氣がして、久し振りに頭が輕くなつた。多分畫家のアトリエであらう、日を受けた家の、一面に張つた窓硝子が、きらきらと輝いて、丁度何かの鱗のやうだ。

歸りに車に材木や丸い石を載せて、うんうん押して行く四五人を見た。その傍を通つてゐた四角な大きい辨當箱を背中にぶらさげた脊の高い、木挽らしい老人が「その石はいくら位するかね」と問ひかけると、一人の男が「尺が十三四錢だ」などと答へてゐたが「田舍ではただでくれる、いや、何處にでも轉つてゐるのになア」と云ひ捨てて老人は足早になつた。

雜巾で足の裏をふいた。それから二時間あまり庭をぶらぶらしたり、手をあぶつたりしてゐると、やつと飯が來

た。(二月二十一日)

二

追々春らしくなつて來た。今日は庭の樹に鶯が來た。その外まだいろいろな鳥がやつて來だした。朝のうち、習作の詩を直したり、新たに書きつけたりしてゐたが、それにも飽いてぶらりと散歩に出た。

畑には大根の葉が萎びたやうに、ちよいちよい目に付く。泥田をこねかへして、鰌か何かを捕るらしい、せつせと兩手で土を起してゐる二人の男があつた。道灌山に登る。柵に沿つて歩きながら、遙か郊外の方を眺める。絲雨ではないが、凌雲閣の見えるのが目ざはりだ。千住邊であらうか、盛んに煤煙を吐いてゐる。都會の方も煤煙に薄曇りがしてゐる。

停車場の上の崖に生えてゐる草木は皆いたましく枯れ果ててゐる。木といふ木、皆立枯れして、容枝は折れば直ぐ折れさうだ。煤煙で幹は悉く眞黑になつてゐる。

かまはず進んで行くと、だらだら坂があつて、飲食店の澤山あるところへ出てしまつた。此處が田端だ。道灌山へ登る道を探ねながら、うかうか歩いてゐると、見たことのある路に出た。よく考へて見ると日暮里だつた。もう家へ歸りたくなつた。

前を女工らしい女が三人歩いてゐたが、振返つては僕をじろじろ見て、それから何かひそひそ云つて足早に横に外れた。僕をデバカメとかいふものか何かのやうに思つてゐるのぢやないだらうか。忌々しい。「おれはデバカメぢやないぞ」と大聲が叫んでやりたかつた。(二月二十五日)

三

五時半頃、散歩かたがたS君のところへ行かうと家を出た。多量の塵埃を含んだ風が、おのづと烈しく目蓋を開閉せしめる。あの魚屋の店に、赤い肉に黒い皮のついた鯨肉を皿に盛つて、値段を書いた附木をつけて店へ並べてゐた。それを見ると朝鮮時代を思出して一種形容の出來ない感慨が約一秒ばかり續く。

ぽツとしたやうな春の夜はややうそ寒い。懐手して團子坂を下り、あの廣い路を八重垣町へ出た。人氣の少い新道を、とりとめのない空想や、空漠とした瞑想に耽りながら歩いた。曲り角あたりに來ると、遠方の火が妙になつかしく、戀しい氣が湧いて來る。

八重垣町通りには、露店が並んでゐる。新築の貸家の前に白い幕を張つて、心細い行燈に、詩文章添削、易斷、楓江堂主人など、いろいろ書きつけてゐる。その楓江堂主人だらう、外套を着た痩男が、幕の外をじろじろ見ては皺のよつた處などを直してゐた。この男にも波瀾に富んだ過去があるだらうか。

S君の家がなかなかわからない。三十三番地と軒燈に記した薬や小間物を賣つてゐる家があつたから、此家ではあるまいか、兎に角訊いて見ようと硝子戸をあけた。丁度清快丸を買ふつもりだつたのを思出して、それを買つてから訊く方がいいと思つて、さう云つたところが、長いこと默つて歩いてゐた所爲か言葉が妙に口にへばり付いて、なかなか意味が通じない。五十あまりの品のいい女主人がやつと五錢の包みを出してくれたところへ、S君が出て來て「やア……」と云ふ。どうも老主婦が君によく似てゐたので、きつと此家に違ひないと思つたが、果してさうだつた。

二階へ上つた。小ざつぱりとした部屋だ。床の間には銃が二挺立てかけてある。壁に張つた紙に赤インキで「なくるべし……」云々と記してあるのを見ると、禪の本をいつも懐に入れてゐる君の平常を考へて、成程と感心する。S

君は飯食つてくるからと下へをりる。僕は立つて本箱を覗いて見る。獨歩の『渚』や『武藏野』もある、『樗牛全集』が二册包紙をつけたままで置いてある。

碁盤を持ち出して、五目ならべをしたが、五六度も續けて、一分間ならずして僕が負けた。それからお茶を啜りながら話した。S君は僕を批評して、

「君もよく廻る男だ、よく變る男だ、ある一つの根柢に橫る大信念——大信念はをかしいが他に文句がないから云ふ——を含んで、うはべを色々に變化させてゐるやうな氣がする……」などと云つた。成程そんなところもあるやうだ。僕は矛盾と撞着とに充ちてゐる、しかもそれが根本に於ては必ずしも矛盾撞着でないやうな氣がする。

九時半頃『東西武勇談』其他二册借りて歸る。歸りみち雨がポツリポツリ降りだしたので、駈足で歸つた。(二月二十七日)

四

今日は一日仕事をした。

夕方、あまり疲れたので庭に蹲つて、小半時のあひだ蟻を見てゐた。僕は蟻の働いてゐるのを見るのが好きだ。樹の枝に穴があつて、頻りに出入りしてゐる。小さな蟻が、蟻の背にとまつて穴に入り、また蟻と一緒に出てくる。死骸かと思ふと生きてゐるので不思議な氣がした。

夜、S社に行く。牛込見附で芝居の書割の月のやうな、銅色の月が紫の雲に上の方が少し隱れて、大きく浮んでゐるのを見た。何だか斬られた女の血の雫がしたたるやうな氣持がする。かうした爛れたやうな月を見ると、僕は世界の最後といつたやうな悲壯な感に打たれる。

S氏が逢つて下さつた。仕事を渡して、いろいろ注意を承る。次の分は明後日頃送るとのことであつた。丁度机の上に『××書簡』があつたので、話がなくて手持無沙汰だつたので「それは××の書簡ですか」と無意味な間の抜けた訊きかたをしたら、

「一冊差上げませう」と云つて棚から出してくれた。

　なぜ僕はこんなに臆病なんだらう、自分でも滑稽でならない、小僧さんまで笑つてゐるやうな氣がする。S社を出てやつと一日の重荷を下した氣がした。一つ仕事を終へると、丁度長い旅から歸つたやうな、疲勞と安心と空虚の感とを覺える。

　見附の橋の上で澤山の人が佇んで彗星だ彗星だと云つて空を眺めてゐた。僕も見上げたけれど彗星らしいものは見えず、ただそれらしいものが長く棚曳いてゐるやうな氣がしただけだ。雲であつたかも知れない。それとも僕の眼が大分近くなつたんぢやないかしら。

　神樂坂を上つて、詩人のM氏を訪ふ。氏は丁度在宅であつた。

「どうです、詩は出來ますかネ」と僕の顏を見るとゆつくり重々しく云つて、いろいろ有益な話をしてくれる。ホソマンスタアルの新しく書いた劇詩の梗概などを話してくれた。僕はすつかり感心して、氏のかはいい角度を持つた色の黑い、然しいかにも大家らしい風格を嚴然と備へた顏を仰ぎ見た。

　氏の下宿を辭して暫く神樂坂を矢來の方まで散歩して、それから見附で電車に乘つた。神樂坂といふ町はいつでも歲の暮のやうな氣のする街だ。（五月二十四日）

五

昨夜寢ぬるとき、我は月光の下に靜かに眠れる夜の響を聽きて、心云ひしれず嬉しかりき。今朝戸をあくると共に、日影のあざやかに又樂しげなるを見て、また更に心をどりぬ。

S君と芝公園に行く。彼は絶えず且つ談じ且つ哄笑す。我は絶えず頷き、絶えず微笑す。彼れ時の文壇に時めける人々のをかしき奇癖を模して、失笑に堪へざらしむ。暫く山内を逍遙せしのち、S君は××社の歌の會に行くとて山門前の近くにて電車に飛び乘りしぬ。我も共に行く筈なりしも、飛び乘りの放れ業出來ねば、一電車おくれたるに、もともと氣が進まねば、そのまま又山に登りて懷なる審美綱領讀まむとせしかど、心亂れて手にもつかず、暫く默想してのち、ひとり小石川行に乘りて歸りぬ。心いひしれず寂しかりき。

S君等は常に我を『イリュウジョンの男』なりとて揶揄す。わが性格は痴にして常に夢みるが如し。我は常に夢想に浸りて、曾つて現實を正視せしことなし。さればそはまことに當れるの評言なり。ただ、その言の中には一種の意味を含みて、わが戀愛の上に於て臆病なるを憫れむの意最も強し、その怯懦特に滑稽の感あるや疑ひなし。されど我はただ寂しく微笑むのみ。今敢て憤るの念なし。されど今日は「滑稽なるはひとり我のみに非ず、凡ての人みな然るに非ずや」と、言葉に飾りなき友にやや涙ぐみて云ひぬ。

太田の原にて『ルネエ』を讀み且つ默想す。四邊に日光暖かに漲り渡り、その光の如く小兒のたれも樂しげに戯れ合へり。微風靜かにわが蒼白き頬にくちづけして去る。かかるときわが夢最も樂し。されどこの樂しき夢も、かしましき青年等の卑しき饒舌に破られたり。されど我は彼等を呪ふものにあらず、そは彼等蟲けらに等しきが故なり。歸つて思ふに、徒らに他を罵るは卑しむべきことなり。愼まざるべからず。我つくづく思ふに、凡ての人は皆我よりすぐれ、我より幸福なるに似たり。されど我は今日のこの我にて永久に甘んぜむ。わが不幸もまたわが幸福なるべし。兎もあれ美しく生きむことを願ふ。ただ美しく――これぞ眞の幸福なる。今日財布からになれり。むしろ心安き思

ひす。我は常に金を欲す、そは酒を飲まむが爲なり、酒のむにも足らぬ少額の金、何をかせむ、無きに如かじ。ゆゑに心安きなり。されど時に嘆息なきをえず。

夕方、S君と共に下宿を出づ。途上、彫刻家にして詩人なるT氏と逢ふ。我は知らざりしかどS君の知れりしなり。行き過ぎてのち「いい人だね、君」と我はS君に云ひぬ。彼も頷きて「藝術家らしい人だ」と云へり。啄木が天才と呼ばるる人に逢ひしに手が大きかりしとの意を歌へるその人なり。上野を散歩して歸途、彗星を見る。尾あるかなきかに長くあとに曳けり。電光天際に閃くこと頻りなり。柏木の櫻多かりし家の閑居時代など憶ひ起されて、なつかしきはかの閃きなり。かの家にては夏の夜毎、都の方にそを見たりき。

この頃心の中に倦怠を覺ゆること多し。しかも克己をおもふ。生活のやや高尙に、尠くとも淸淨になれるは嬉し。我は神を思ふこと切なり。詩人として死するはわが光榮なり、敬虔なる一詩人として――わがかかる思ひは「顎の尖れることとダンテの如き君の例の夢想」とて、友の鋭き譏笑の下に葬られたり。さなり、見よ、彼の顎は後に勇ましく退きたるを。

我は凡ての人より離れむことを欲す。尠くとも、凡ての人に多く接近せざらむと欲す。相互の缺點を知り合ひ嘲り合ふに堪へざればなり。我は滑稽なり、然り我は滑稽なり、されど我は美しく生きむことを願ひつつあるものを。百の論議をなさむより、如かじ、一杯の酒を傾けむには。ああ酒なるかな、酒なるかな、かの苦き味ひのみはつひに忘るる時なし。我はげにヹルレエヌの向ひの空椅子に坐すべき身なり。(五月二十五日)

ある少女の手紙

御手紙は昨夜八時ごろ拜見いたしました。

風邪ひいてゐるのでもありませんけれど、近頃は何だか胸が痛むやうな、ふらふらした氣持で、殊に昨夜は烈しうございましたゆゑ、着てゐた着物のまま床に入りました。けれど寢ることはとても出來ませんでしたわ。今朝がた少しばかりうとうとと致しましたばかり。私は今日は學校もおやすみに致して、ただ今たかとたつた二人きりでお留守居をしてますの。家の中がばかに靜かで、たまらなく寂しうございます。

敏子樣のことは、私何もかも存じてます、ただいまどんなにしてゐらつしやるか、それも存じてゐます、敏子樣についての私の感想とまうして、別段申上げることもございませんわ。けれど、それについては、敏子樣を恨むやうな私とお思ひ遊ばしてはいやですよ。私そんなはしたない女ではございませんわ。みんな過ぎ去つたことですもの、いくら何と云つたつて仕方のないことではございませんか。それより私本當に敏子樣がお氣の毒でなりませんの。いくらお家の方でいろいろ御事情はおありでしたにしても、あんなに思つてゐらしつたのですもの、ほんたうに思ひやりが無さすぎますわ。博士でないといけないですつて、をかしいわね、實業家なんて、だから厭やですわね。私ほんたうに敏子樣の同情者よ。

おあねえ樣からそのお話をうかがつた時には、よつぽど私、此の心持をお話いたしたくつて、馬鹿な話ですが、私は申上げようか止めようかといふ心配で、一夜明かしましたの。ですけど、やつぱり知らぬ風してるよりか、是れからさき若し敏子樣の話が出たときに、淳樣がそのためにおこまり遊ばすやうなことがあつてはと思つて、思ひ切つて申上げてしまひましたの。どうぞ惡くお取り下すつてはいやよ。でもどうして今まで私にお話し下さらなかつたのでせうか。

けれど止めませうね、こんな話は。

昨日もおあねえ樣が午後からいらしつて下さいましてよ。私はほんたうにおあねえ樣がなつかしくつて堪へられませんの。おあねえ樣も私のために、どんなに心配して下さるのやら、京都の方にゐる肉身の姉よりも、私は綾子樣の方が慕はしい。

淳樣、いつまでも綾子樣と三人で仲よく一緒にまゐりませうね。

今淳樣は何をしてお出で遊ばして。またむづかしい原書でもおひもときになつてゐらつしやいますのでせう。いろんな恐ろしい病氣の名なんかの載つてゐるあのふちを赤く塗つた本ではございませんの。私はね、をかしいわ、でも思ひ切つて申上げませうか。

誰もゐないので、わざわざ白粉つけたり、髮を結び直したりして、クリスマスの時の着物を着て、此の手紙を書いてますの。母がゐませんので、着せてくれる人がありませんゆゑ、變な着方ですが、でも姿見の前に立つて見ると、あのクリスマスの時の有樣がありありと目に浮びますわ、心配のやうでも樂しかつたわ。

本當に人が見たら狂人と思ふでせう、全く正氣で出來ることではございませんもの。この手紙を書き終へると、また直ぐぬいでしまひますわ。

金曜日ね、私上れませんわ。どうしても學校へ出なくてはなりませんの。學校の用ではございません。外のことでです、從姉がゐるので私困つちまひますわ。それから土曜、日曜日は親戚の方のことで朝からお客樣が來るので出かけることが出來ません。どうしても來週ですわ。

だつて淳樣、どこでお目にかかつていいやら場所がないぢやありませんか。ねえ、何處かいいところをお知らせ下さいましな。

早く暖かくなりましたら、玉川へまゐりませうね、本當にあすこは私大好きよ。

いつぞや拜借いたしました其面影、もうすつかり拜見いたしましたわ。小夜子が可哀相でなりませんわ。なぜあんなに別れてしまはなければならなかつたんでせうか。哲也は意志が弱いのね。でも哲也も可哀相ね、あんなことになつてしまふんですもの。本當に面白うございました、漱石の虞美人草なんかより私好きよ。だつて藤尾なんて厭やなんですもの。

もう三月も直きですわね、昨日なんぞ卒業式の唱歌を教はりました、淳様も今年は御卒業ね、私何だか嬉しくてなりませんわ。私この間もね、淳様が金時計をお貰ひ遊ばした夢を見てよ、大變立派だつたわ。でもこんなこと、お笑ひ遊ばしてはいやよ。

ではね、來週はいつがよいでせうか、ところはやつぱりあなたの方で定めて下さいましね。

帶を胸高に結んで、手紙を書いたものですから、何だか胸が餘計に痛うございますわ。此の手紙は今宵お手もとにまゐりますのね。どんなお顏をしてお讀みになるでせうか……

そのあとは千切れてない。手紙の主も誰れだかわからない。これは私が某圖書館で借り出したある獨逸の原書の中から發見したもので、私は一種妙な興味からしてそのまま取りのけて置いたのであつた。

こひぶみ

雨の音、いぶせくして堪へがたき日に候。また君への文記しまゐらせむ。十日見ずして老いたまふ人とも思ひまゐら

せねば、嘆き悲しみはいたすまじく候へども、さすがに物足らぬ空虚の心のいかんともいたし難く候。身のひまなるままに、徒らに心はやる折りもあれど、強ひて鎮むるを常といたしをり候。君には僞りを申上ぐること能はぬ小生に候。世の人々のやうに、君を思ひて夜すがら寢ね能はず候ひきとか、甚しきは三日三晩泣き暮し候ひきなどといふ見えすいたる空々しさは、小生の能くなし得ざるところに候へば、かくはあたりまへの眞實を申上ぐるのに候。このあはれなる胸の底はただ君がみ手づからおくみとり遊ばさるるに相まかせ申すべく候。

前の流れは水嵩まして候。泥のやうに濁つて、すさまじく流れ行く。芥、紙屑、藁、木片など、しばしば流れ來つて、氣持惡しく相成候。雨は白絲のやう。少し風ある爲めか、斜めに降り來る。板橋からはしとしとと滴垂れ落ち、今朝より渡る人とては一人もこれなく候。配達夫もやと待ちをり候へども、脚の外には何ものも有たぬうつけ男に候へば、人の心も察せずして、草鞋の爪先だに見せず候。おん手紙、またいつの日か手に取るべきなどと、心細い氣もいたし候。なさけある君なれば、夢さらさら、罪つくりなし給ふなかれ。

日暮里の雨の日はただ靜かに候。靜かなるばかりに候。この雨の音を聞いて、この雫の光るのを見て、この窓によつて、二人かたらひしならばなどと、徒らにひとりの胸の疲るることいと切に候。逢ふは逢はぬにいやまさる、はたや、逢はぬは逢ふにいやまさるなどのお言葉は、いつぞやの戯れには候ひしかども、今日にしてはなさけなくも思ひ出でられ候。ただ逢ひたし、見たし、「誰が身にもてる寶ぞや、君くれなゐのかほばせは」そのあでなるおん面影にあこがるるこの思ひ、あながちに賤しとは蔑みたまひそ。おのおの一人の身に候。ただ一つしか持たぬ胸に候。君をよく知るものは小生ただ一人のみ、小生をよく解したまふは君一人には候はずや。「戀とはかかるものなりし」この言葉の永久に二人の口に上ることなきは、いかに悅ばしき限りに候ふべき。

雨の音より外、物音とてはこれ無く候。近頃引越し來られし、某省の役人とやらの、奧様の徒然のあまりの手すさ

びと見受けたる、ピアノの音もひつそり絶え果てて、それでも折々やつて來る豆腐屋の賣聲と鈴音のみ、わづかにこの靜寂を破りをり候。身も心も腐つてでも行くやうな日に候かな。三月初めの氣味わるき生暖かさ。されど一年の中のよき時節と知らるれば、雨だに降らねば、今日も浮き立ちて、君は飛鳥山あたりに寫生に出かけたまひ、われも手帳をふところに同じ道を歩みて、つまりはこれ、ともに手を携へて、さまよふの謂ひにて、つひに相ともにその業些かも成らぬをかつは笑ひ、かつは憤りて、樂しき爭ひに日を暮らすことも得んにと、爲すこともなき儘に、果てしなきまでに殘念に候。

いつぞやの水彩畫、幾度となく破りすてて、やつと出來上り候。骨の折れし御指南の、その甲斐ありしことは、またの日お目にかくべく、それまでの樂しみにて候。梅の樹のもとに立てる少女の面影の、そはボティチェリのマドンナか、はたロセッテイのビアドリスか、いな、作者の自惚れをもてすれば、さながら血の通へるが如きその姿は、おもふに、ただただ君のゆゑのみにや候はん。梅と云へば、庭の五株みな花をひらき申し候。蕾が紅きため紅梅かと思ひをり候ひしを、みな白きには驚かされ申候。戀もまたかくの如きか。暗香疎影、夜分などひとり歸りくるわが身に、何をか囁くに似たり。一枝折り來て花瓶にさして候。ここに封じたるはその一瓣と御承知下さるべく候。

このあたり、植木屋多く、梅樹また多く候。

つくづく思ふに、げに美しきは藝術家の戀なるかな。君も繪筆とりたまふ身、われも恥かしけれどポエトの末につらなりて、君、マリア・バシキルツェフのむかしを偲びたまへば、われハイネ、シェレイの雲間の姿にあこがれて、無聲の詩か、有聲の畫かその古きホレエスの解說のすでに陳びて、ただ二つの魂の二つの世界を一つに溶き流すとき、ああわれらの生活の日はいかなる高き勝利の祝祭とたたへらるべき。そを思ふだに、わが胸いたく顫へ戰くを覺え候。おもふに我等不幸なる藝術の徒の、險難の道いかに危くとも、この愛はげに一切を贖ふべき無上の幸福、無上の激勵にはあ

らざるべきか。我等の愛は美しく候、天上の結合よりも美しく候。美しとは、その夢のごとき陶醉の日のうつつなき心のそれにはあらで、熱烈にして自らその火に燒かれたるトリスタン、イソルデの墓の上に生ひ出でし薔薇と葡萄の二つの樹の、互ひに枝をからみて切り離しても離しても、離し得ざるそれの如く、二つの神と神とが二人の人と人との形のもとに相寄り相助くる、その榮えある天上の意志の顯現のそれに最もふさはしき形容とは、君はおぼしめさずや。藝術家の愛はただ肉體の上にのみ結ぶはかなき果實にはあらで、更に更に深き根より生ひ出でて、天上の雲の中にも上るべき聖なる炎にはあらざるべきか。されば老いても傷きても、藝術家の愛は長くして淸かるべし。不滅の愛人は、ただ藝術家のみ、ただ藝術家と藝術家との間にのみ存する、神の世界の深き象徵にあらざるべきか。われ、かくて君が面影に永遠の象を求め、君が制作にその象を宛かも鏡面の映像に測り難き神祕の色彩もて認むるが如く、言語知覺に絕せる、いと深き魂のあらはなる現れをかつ驚きかつ驚かんと希求するもの、ねがはくば君もまた然らむことを。幸ひなるかな、我等藝術家の身や、樂しきも苦しきも、常人にまして深くしみじみと味ひ行けば、「泣くために戀をなす」てふ嘆きもまた高き誇りと自負の裏返しての叫びに候はずや。この世の渦卷の中を拔手を切つて泳ぐだけが何の興かあらむ、頭の髮の一本の尖端までも、また足の爪さきのその果てまでも、限りなく身の傷手を味ひ、傷める胸の痛きのその音の一々の異りをも知り悉すほどの、この飽くなき樂欲と痛苦との味覺ありてこそ、まことに生の杯を涯までも飮み盡したりと誇り得るにはあらざるべきか、よしや身は情熱の激流に溺れ果つとも。

この頃ともすれば口にのぼる一つの歌のこれあり候。何とか思し召したまふ。上田博士の譯。ダンヌチオが『死の勝利』中の一小詩、何とは知らず、いたく心にかなひて、今日もいく度か誦して候ひけん。

　われはきく、よもすがら、わが胸の上に君眠る時、
　吾は聽く、夜の靜寂に、滴の落つるを將落つるを。

常にかつ近み、かつ遠み、絶間なく落つるを聞く、
夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われ一人して。

君、藝術家なれば、敢て憚りなき解說を申上ぐれば、この「滴の落つるのを」の箇處、英譯には blood の文字これあり候。こは多分譯者の趣味性にて削除せられ候ものたるべく、まことに適宜の處置ならむも、われらここに南歐の蕩兒の熱き溜息を聞くおもひいたさずや。繪に成すには薄紅の帷帳ありて果さず。つたなき筆もて記せば、紅燈の光かすかに候べし。死したる如き靜寂の中にあつて、漂ひ浮ぶ奇しくなまめきし香りと趣きとは、ただかのフロレンスの地獄に行かざりし方の、されど面白き地獄の話を傳へし詩人の筆を借るの外なかるべきも、夜もすがらわが胸の上に君眠る時、われはきくただ一人して、君が heart より靜かにしたたる愛の音を、かつ近みかつ遠み、絶間なくわれは聞く。さながら、二人の外には、この世界に人みな死に果てし如く、盡きせぬ甘きささやきは、二つの胸を熱き炎の波のなかに溺らせしなるべし。溺れよ、溺れよ、鳥よ、小舟よ、波濤はいかに汝等の爲めに、いくたびか嘆きけむ、いつその涙をか注ぎけむ。ああ、しめやかなる早春の夜を夜もすがら、相擁して泣きけむ。その死よりも強き記憶の名殘は、永久の呪となりて胸を燒き去るべく、ショパンの即興樂はさながらかくの如くに聞かれぬべきか。ああ身も魂も燃え去るの日、そはああ我等にはいかに悲しかるべき。

此頃、小生ショパンの傳記を讀み申候。大天才の傳記は、みな野心と愛欲と、軒昂と銷沈との波瀾に富み、美しき花、若き木の葉を織りなせし香りの高き織物を見るがやうに候へども、とりわけショパンのそれこそ、いみじくも床しき節の澤なるに驚かれ申候。われに此の才能惜しからじ、ただ願はくばかの若き寶子の美貌を與へたまへと叫べるてふジョルジユ・サンドと爭ひ別れてより、病重くなりたるショパンは、とある日沒前、忽ち起き上りて、啼泣しつつありしポトツカ伯爵夫人に向ひて、君うたひ給へと叫びぬ。夫人即ちピアノをはこび來り、共に和してうたへば、美なるかな神よ、

美なるかな美なるかな、更に更にと促して、その繰返さるる間に、つひに此世ならぬ人となりし由に候。いかに詩的の最期には候はずや。ポトツカ伯爵夫人、俊れたる才、麗しき容貌、美なる聲音、これ天上の人かと疑はるるもの、その肖像を見て、ただうるはしといふの外何をか言ひ得べき。しかもそは何人にか似たる、そは口にするだけ自れが愚かしく見え申し候。ただ憾むらくは、わが身のショパンたらざることに候。ショョパンの友ハインリッヒ・ハイネの絡りにもまたこれに似たる逸話あり、カミイユ・セルデンの名はまたなつかしき響あるものなれど、そはまたの日にゆづるべく候。

逢はぬは逢ふにいやまさるか、逢ふは逢はぬにいやまさるか、ただ最も近き日に、われはよき幸ひを見出すべき機會を得むを望みとして。書きつけたきことなほ澤なれど、餘りに長く筆執りては、日暮れ、軒燈一つもなき泥濘の夜路を三町、ポストまで行くことは容易ならぬことに候へば、まづこれにて。傘さして、横に倒れぬよう心掛けて歩くべし。我身を愛しいたはるのは、やがて御身を愛しいたはることなるべければ。

さらば、風邪めさぬよう、また逢はむ日までは靜かに業につとめたまへ。ただすこやかに。お手紙をばくれぐれにも。ああ思へば君は遙かなるかな。さらば、さらば君よ。

生田春月全集

第六卷

昭和六年九月廿五日印刷
昭和六年九月三十日發行

編輯者　生田花世
同　生田博孝
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込　長八〇〇五番　八〇〇六番　八〇〇七番　八〇〇八番　八〇〇九番
振替東京　一七四二

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者　植木融藏

全十卷目次